

茨城県教育財団文化財調査報告第50集

一般国道6号改築工事地内  
埋蔵文化財調査報告書

奥谷遺跡  
小鶴遺跡  
(下)

平成元年3月

財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第50集

一般国道6号改築工事地内  
埋蔵文化財調査報告書

おく      のや      遺      跡  
奥      谷      遺      跡  
こ      づる      遺      跡  
小      鶴  
(下)

平成元年3月

財団法人茨城県教育財団

目 次

— 上 卷 —

序

例 言

第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査経過	2
第2章 位置と環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	7
第3章 調査方法	12
第1節 地区設定	12
第2節 遺構確認	12
第3節 遺構調査	12
第4章 遺構・遺物の記載方法	14
第1節 遺構の記載方法	14
第2節 遺物の記載方法	18
第5章 奥谷遺跡	21
第1節 遺跡の概要	21
第2節 遺構と遺物	22
1. 住居跡	22

— 下 卷 —

2. 掘立柱建物跡	409
3. 集石遺構	433
4. 土坑・地下式坑	436
5. 溝	521
6. 堀	541

7. 井戸	545
8. 柵列跡	554
9. 道路跡	556
10. 性格不明遺構	558
11. ピット群について	563
12. 古銭一覧表	575
第3節 まとめ	578
1. 縄文時代について	578
2. 古墳時代について	580
3. 奈良時代について	591
4. 平安時代について	595
5. 中世について	614
6. その他	620
第6章 小鶴遺跡	623
第1節 遺跡の概要	623
第2節 遺構と遺物	623
第3節 まとめ	627
終章 むすび	629
写真 図版	



## 2 掘立柱建物跡

### 第1号掘立柱建物跡（第272図）

本跡は、C4g<sub>8</sub>区を中心に確認され、3間（5.1m）、2間（3.9m）の南北棟の建物である。本跡の梁行は、南妻が第1号溝と重複しているが、土層断面から第1号溝（古墳時代）の方が古い。

柱間寸法は、桁行は不規則で1.6～1.8m、梁行が1.95mである。柱掘り方は、P<sub>8</sub>・P<sub>10</sub>が径0.8mのほぼ円形で、他は長径0.8～1.0m・短径0.6～0.8mの不整楕円形である。深さは0.6～0.9mである。壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦なものとはU字状を呈するものがある。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>10</sub>は、底面に浅いくぼみがあり、柱を据えた部分とみられる。柱痕跡は、各柱掘り方で確認され、径25～30cm・深さ50～90cmである。柱掘り方内覆土は、ロームブロックを多量に含む黄褐色土・褐色土・暗褐色土が互層を成し、締まっていることから版築がなされていると思われる。

### 第2号掘立柱建物跡（第273図）

本跡は、C4h<sub>8</sub>区を中心に確認され、2間（3.9m）、2間（3.3m）の東西棟の建物である。本跡は、第24号住居跡と第1号溝が重複しており、第24号住居跡（平安時代）と第1号溝の覆土を切って本跡の柱掘り方が掘り込まれていることから、いずれよりも本跡の方が新しい。

柱間寸法は、桁行北側は1.95m、同南側は3.90mで、梁行が1.65mである。柱掘り方は、P<sub>3</sub>が径0.7mの円形で、P<sub>5</sub>は最も大きく、長径1.70m・短径0.6mの不整長方形を示すが、他は長径1.10m・短径0.7～0.8mの不整楕円形である。深さは50～55cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦なものとはU字状を呈するものがある。柱痕跡は、P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>の柱掘り方で確認され、径20cm・深さ25～65cmである。各柱痕跡は、柱掘り方のほぼ中央に位置し、かつ一直線上に並んでいる。柱掘り方内覆土は、黒褐色土とローム粒子の混入した層が互層を成し、締まりは弱い。

### 第3号掘立柱建物跡（第274図）

本跡は、B5a<sub>1</sub>区を中心に確認され、5間（9.2m）、3間（5.4m）の南北棟の建物である。本跡は、第3・13・83・84号住居跡、第2号溝と重複しており、第3（古墳時代）・13・83・84（平安時代）号住居跡、第2号溝の覆土を切って本跡の柱掘り方が掘り込まれていることから、本跡の方が新しい。

柱間寸法は、桁行は不規則で1.2～2.7m、梁行は、北妻が1.8mで、南妻が1.5～2.3mである。柱掘り方は長径40～70cm・短径30～60cmの楕円形で、深さ45～60cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面は、平坦なものとはU字状を呈するものがある。柱痕跡は全て確認できなかった。覆土の状況は、第1号掘立柱建物跡と類似している。

#### 第4号掘立柱建物跡（第275図）

本跡は、C4g<sub>4</sub>区を中心に確認され、2間（4.0m）、2間（3.68m）の東西棟の建物である。本跡は、第30号住居跡と第1号溝が重複しており、第30号住居跡（平安時代）と第1号溝の覆土を切って本跡の柱掘り方が掘り込まれていることから、本跡の方が新しい。

柱間寸法は、桁行が2.0m、梁行が1.84mで、ほぼ等間隔で位置している。柱掘り方は径80cm前後の円形で、深さ35～65cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦なものと同様にU字状を呈するものがある。P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>7</sub>は、底面に浅いくぼみがあり、柱を据えた部分とみられる。柱痕跡は、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>の柱掘り方で確認され、径15～25cm・深さ35～65cmである。柱掘り方内覆土は、ローム粒子やハードロームブロックを含む黒褐色土・暗褐色土・褐色土が互層を成し、締まっていることから版築がなされていると思われる。

#### 第5号掘立柱建物跡（第276図）

本跡は、B4e<sub>4</sub>区を中心に確認され、2間（6.7m）、1間（2.7m）の東西棟の建物である。本跡は、第10号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

柱間寸法は、桁行は不規則で2.3～4.4m、梁行が2.7mである。柱掘り方は長径40～60cm・短径35～50cmで、深さ30～40cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦なものと同様にU字状を呈するものがある。柱痕跡は全く確認できなかった。覆土の状況は、第1号掘立柱建物跡と類似している。

#### 第6号掘立柱建物跡（第277図）

本跡は、C4b<sub>3</sub>区を中心に確認され、3間（5.4m）、3間（4.8m）の東西棟の建物である。本跡は、第57・58号住居跡と重複しており、第57・58号住居跡（平安時代）の覆土を切って本跡の柱掘り方が掘り込まれていることから、本跡の方が新しい。

柱間寸法は、桁行は不規則で1.7～2.0m、梁行が1.6mである。柱掘り方は43cmの円形で、深さ20～40cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面はU字状を呈する。P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>は底面に浅いくぼみがあり、柱を据える部分とみられる。柱痕跡は全く確認できなかった。覆土の状況は、第2号掘立柱建物跡と類似している。

#### 第7号掘立柱建物跡（第278図）

本跡は、D3h<sub>2</sub>区を中心に確認され、3間（5.7m）、1間（1.6m）の東西棟の建物である。本跡は、第681・694・720号の各土坑と重複しているが、新旧関係は明確にできなかった。

柱間寸法は、桁行が1.9m、梁行が1.6mで、ほぼ等間隔に位置している。柱掘り方は長径70～100

cm・短径60～80cmの不整楕円形で、深さ35～55cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面はU字状を呈する。柱痕跡は全く確認できなかった。覆土の状況は、第4号掘立柱建物跡と類似している。

#### 第8号掘立柱建物跡（第278図）

本跡は、B4f<sub>9</sub>区を中心に確認され、3間（6.0m）、1間（1.9m）の南北棟の建物である。本跡は、第9号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

柱間寸法は、桁行は不規則で1.6～2.4m、梁行が1.9mである。柱掘り方は長径50～60cm・短径40～50cmの楕円形で、深さ55～65cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面はU字状を呈する。P<sub>4</sub>・P<sub>7</sub>は、底面に浅いくぼみがあり、柱を据えた部分とみられる。柱痕跡は全く確認できなかった。覆土の状況は、第2号掘立柱建物跡と類似している。

#### 第9号掘立柱建物跡（第279図）

本跡は、B4f<sub>8</sub>区を中心に確認され、3間（6.3m）、1間（2.5m）の東西棟の建物である。本跡は、第8号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

柱間寸法は、桁行が2.1m、梁行が2.5mで、ほぼ等間隔である。柱掘り方は長径40～60cm・短径30～50cmの楕円形で、深さ30～35cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面はU字状を呈する。P<sub>7</sub>は、底面に浅いくぼみがあり、柱を据えた部分とみられる。柱痕跡は全く確認できなかった。覆土の状況は、第4号掘立柱建物跡と類似している。

#### 第10号掘立柱建物跡（第280図）

本跡は、B4e<sub>4</sub>区を中心に確認され、2間（4.8m）、1間（2.4m）の東西棟の建物である。本跡は、他の遺溝との重複はみられず、単独で確認された。

柱間寸法は、桁行は不規則で2.3～2.6m、梁行が2.4mである。柱掘り方は56cmの円形で、深さ30～45cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面はU字状を呈する。P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>は、底面に浅いくぼみがあり、柱を据えた部分とみられる。柱痕跡は全く確認できなかった。覆土の状況は、第1号掘立柱建物跡と類似している。

#### 第11号掘立柱建物跡（第281図）

本跡は、B4h<sub>3</sub>区を中心に確認され、3間（北側6.6m、南側6.4m）、1間（3.7m）の東西棟の建物で、南側に（3間×1間）の廂がついている。本跡は、第12号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

柱間寸法は、桁行は不規則で2.0～2.3m、梁行が3.7mである。廂の柱間寸法は2.1mで、ほぼ等間隔である。柱掘り方は長径30～40cm・短径20～30cmの楕円形で、深さ22～61cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面はU字状を呈する。柱痕跡は全く確認できなかった。覆土の状況は、第2号掘立柱建物跡と類似している。

#### 第12号掘立柱建物跡（第282図）

本跡は、A4i<sub>3</sub>区を中心に確認され、2間（4.9m）、1間（4.4m）の東西棟の建物である。本跡は、第11・13号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

柱間寸法は、桁行は不規則で2.1～2.8m、梁行が4.4mである。柱掘り方は長径50～100cm・短径40～80cmの楕円形で、深さ49～83cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面はU字状を呈する。柱痕跡は全く確認できなかった。覆土の状況は、第4号掘立柱建物跡と類似している。

#### 第13号掘立柱建物跡（第283図）

本跡は、A4i<sub>4</sub>区を中心に確認され、3間（4.2m）、1間（東側4.0m、西側3.6m）の東西棟の建物である。本跡は、第12号掘立柱建物跡、第427号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

柱間寸法は、桁行は不規則で1.2～1.5m、梁行は東妻4.0m・西妻3.6mで、東が広がっている。柱掘り方は長径35～50cm・短径30～40cmの楕円形で、深さ27～69cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦なものと同様にU字状を呈するものがある。柱痕跡は全く確認できなかった。覆土の状況は、第2号掘立柱建物跡と類似している。

#### 第14号掘立柱建物跡（第283図）

本跡は、H3f<sub>2</sub>区を中心に確認され、1間（4.0m）、2間（3.7m）の南北棟の建物である。本跡は、第21号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

柱間寸法は、桁行が4.0m、梁行は不規則で1.8～1.9mである。柱掘り方は長径30～50cm・短径25～45cmの楕円形で、深さ35～50cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面はU字状を呈する。柱痕跡は全く確認できなかった。覆土の状況は、第4号掘立柱建物跡と類似している。

#### 第15号掘立柱建物跡（第284図）

本跡は、D2k<sub>0</sub>区を中心に確認され、3間（6.0m）、2間（4.0m）で、北西側は道路下のため不明である。本跡は、第644・645・649号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

柱間寸法は、桁行は不規則で1.8～2.2m、梁行は南妻1.9～2.1mである。柱掘り方は長径40～50cm・短径25～40cmの楕円形で、深さ30～76cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面はU

字状を呈する。柱痕跡は全く確認できなかった。覆土の状況は、第1号掘立柱建物跡と類似している。

#### 第16号掘立柱建物跡（第285図）

本跡は、E4f<sub>3</sub>区を中心に確認され、3間(6.3m)、2間(南側5.1m、北側4.4m)の南北棟の建物である。本跡は、第105号住居跡(古墳時代)と隣接している。

柱間寸法は、桁行が1.9～2.4m、梁行は北妻2.20m・南妻2.55mで、南側ほど広がっている。柱掘り方は長径80～100cm・短径70～80cmの楕円形で、深さ60～70cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面はU字状を呈する。P<sub>1</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>8</sub>は底面に浅いくぼみがあり、柱を据えた部分とみられる。柱痕跡は各柱掘り方で確認され、径20～30cm、深さ30～50cmである。柱痕跡は柱掘り方のほぼ中央に確認されたが、P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は西壁寄り、P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>は南東の壁に寄って確認されている。柱掘り方内覆土は、ロームブロックを多量に含む黒褐色土・褐色土・暗褐色土が互層を成し、締まっていることから版築がなされていると思われる。

#### 第17号掘立柱建物跡（第286図）

本跡は、D2i<sub>7</sub>区を中心に確認され、2間(3.9m)、1間(3.1m)で、北西側は道路下のため不明である。本跡は、第737・738・741号土坑と重複しているが、新旧関係は不明である。

柱間寸法は、桁行が1.95m、梁行は南妻3.1mで、ほぼ等間隔に位置している。柱掘り方は長径50～70cm・短径45～60cmの楕円形で、深さ64～87cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面はU字状を呈する。柱痕跡は全く確認できなかった。覆土の状況は、第2号掘立柱建物跡と類似している。

#### 第18号掘立柱建物跡（第286図）

本跡は、J2g<sub>5</sub>区を中心に確認され、3間(5.2m)で東側がエリア外にのびているため詳細は不明である。

柱間寸法は、桁行が1.80mで、ほぼ等間隔に位置している。柱掘り方は長径60～90cm・短径55～70cmの楕円形で、深さ60～85cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面はU字状を呈する。柱痕跡は柱掘り方のほぼ中央に確認されたが、P<sub>4</sub>は南東の壁に寄って確認されている。柱掘り方内覆土は、ローム粒子を含む黒褐色土・暗褐色土が互層を成し、締まっていることから版築がなされていると思われる。



#### 第19号掘立柱建物跡（第287図）

本跡は、G3i<sub>3</sub>区を中心に確認され、3間（6.0m）、2間（3.7m）の東西棟の建物である。本跡は、他の遺溝との重複はみられず、単独で確認された。

柱間寸法は、桁行は不規則で1.8～2.2m、梁行が1.85mである。柱掘り方は長径30～50cm・短径20～40cmの楕円形で、深さ26～67cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面はU字状を呈する。柱痕跡は全く確認できなかった。覆土の状況は、第4号掘立柱建物跡と類似している。

#### 第20号掘立柱建物跡（第288図）

本跡は、H2d<sub>9</sub>区を中心に確認され、5間（14.5m）、3間（6.0m）の南北棟の建物である。本跡は、第836・850・813号土坑と重複しているが、新旧関係は明確にできなかった。

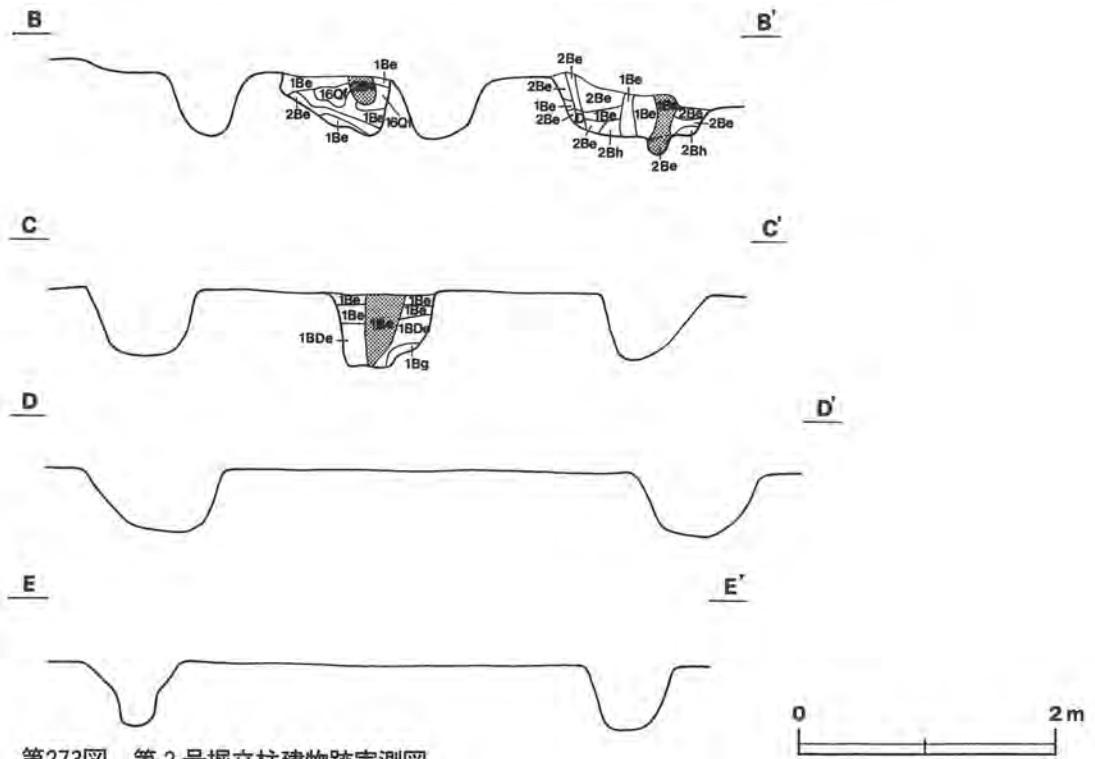
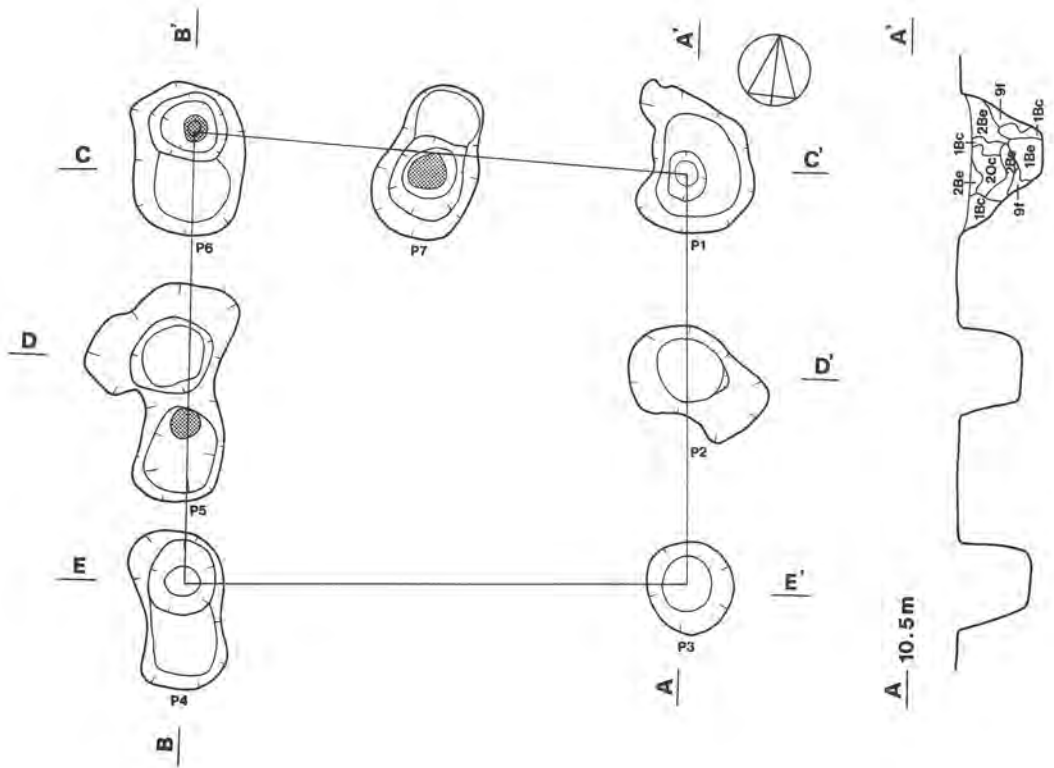
柱間寸法は、桁行は不規則で2.6～3.2m、梁行も1.6～2.4mである。柱掘り方は長径1.3～1.4m・短径1.1～1.2mの楕円形で、深さ72～152cmである。壁は外傾して立ち上がっている。底面は平坦なものやU字状を呈するものがある。柱痕跡は全く確認できなかった。覆土の状況は、第16号掘立柱建物跡と類似している。

#### 第21号掘立柱建物跡（第289図）

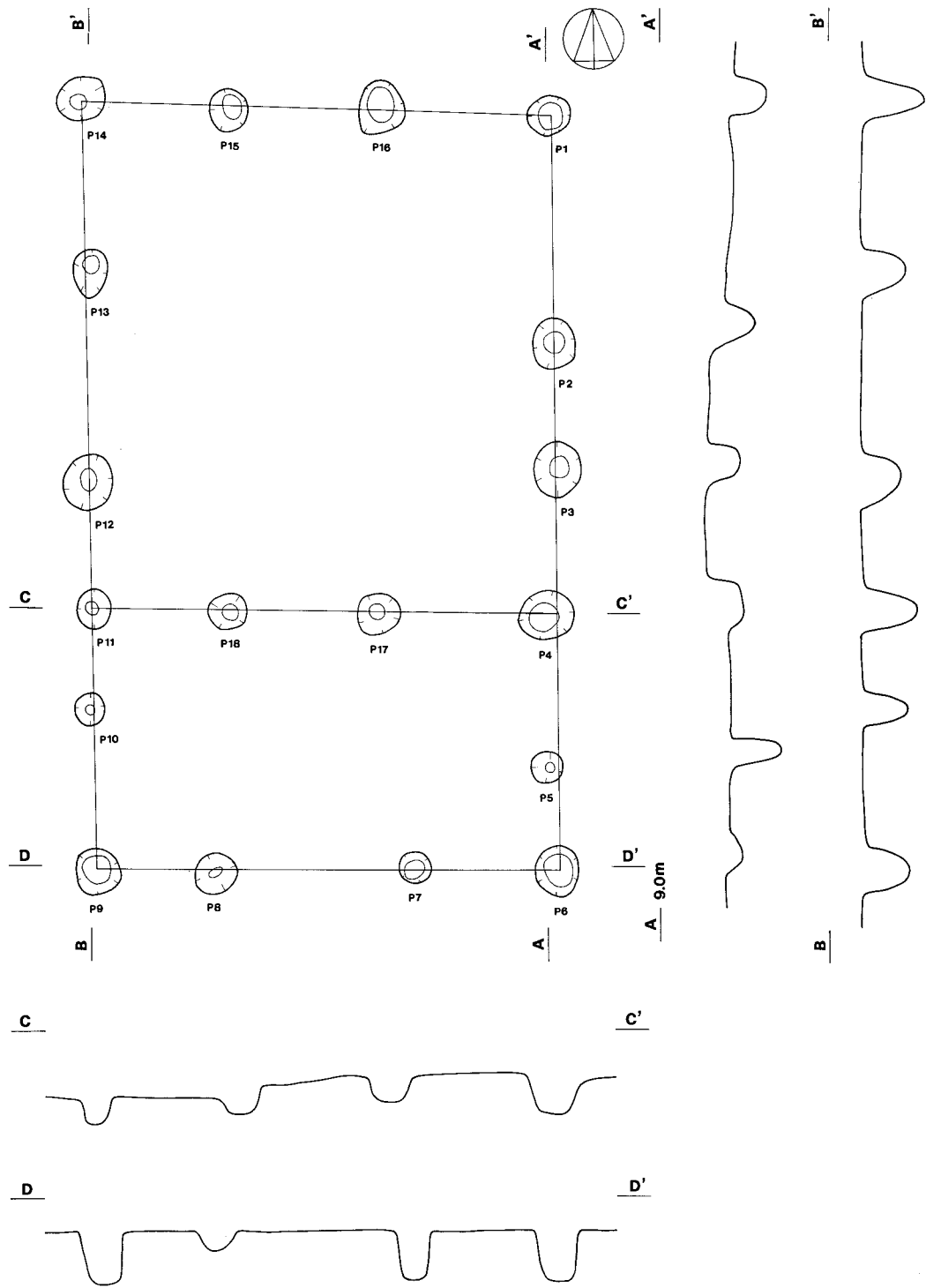
本跡は、H3f<sub>2</sub>区を中心に確認され、2間（南側4.3m、北側4.2m）、2間（4.1m）の東西棟の建物である。本跡は、第14号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

柱間寸法は、桁行北側は2.4m、同南側は1.9～2.3m、梁行が2m前後である。柱掘り方は長径50～55cm・短径35～50cmの楕円形で、深さ36～66cmである。底面はU字状を呈する。P<sub>1</sub>は第14号掘立柱建物跡のP<sub>1</sub>と同位置であることから建て替えたものと思われる。柱痕跡は全く確認できなかった。覆土の状況は、第18号掘立柱建物跡と類似している。

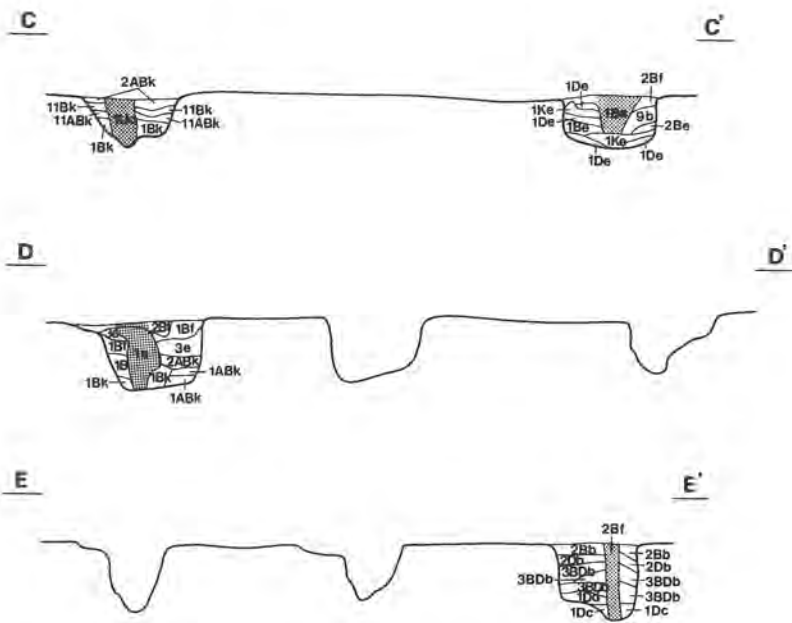
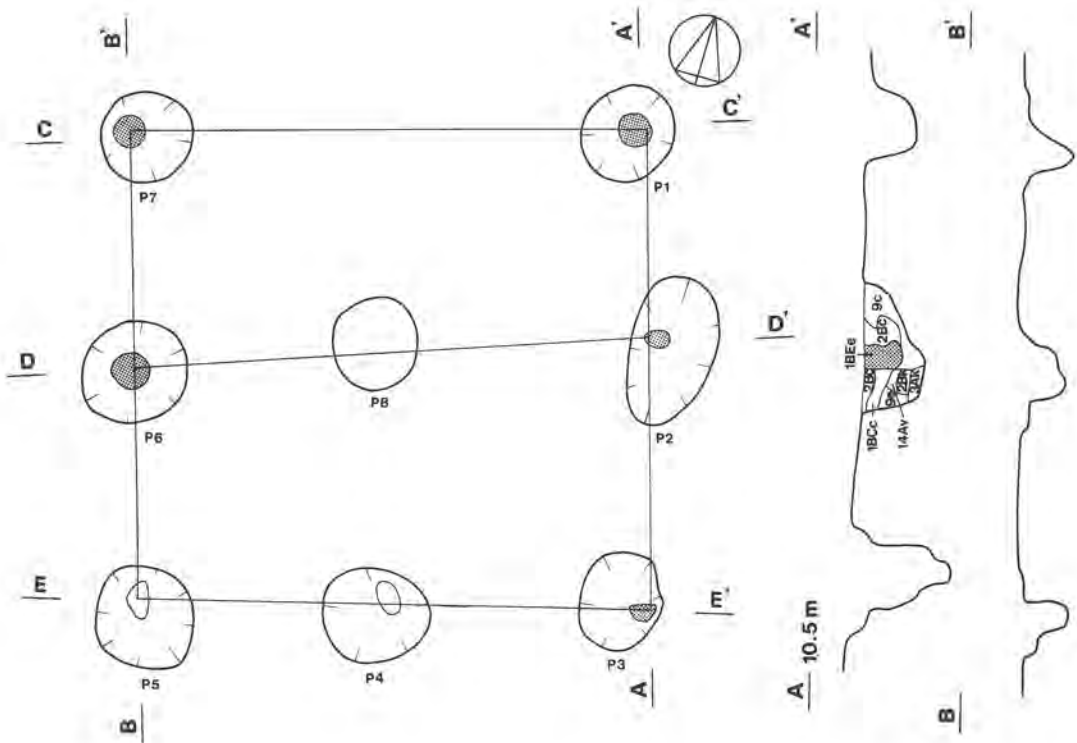




第273图 第2号掘立柱建物跡実測図



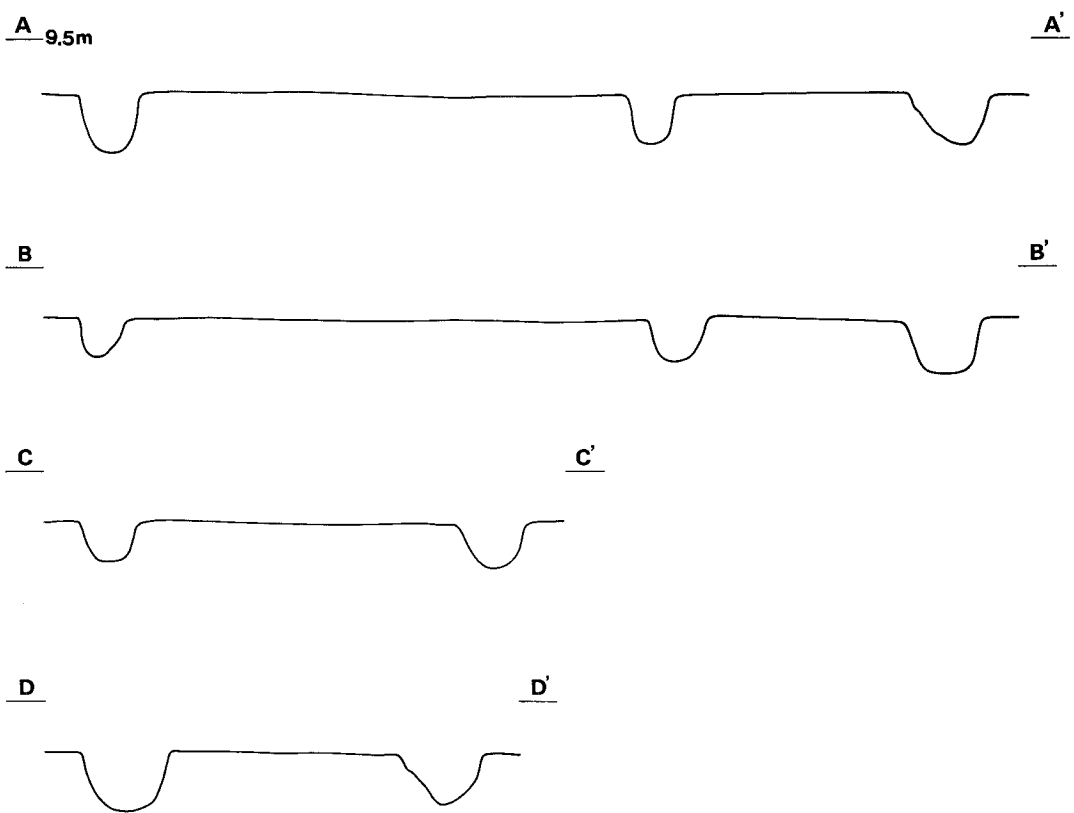
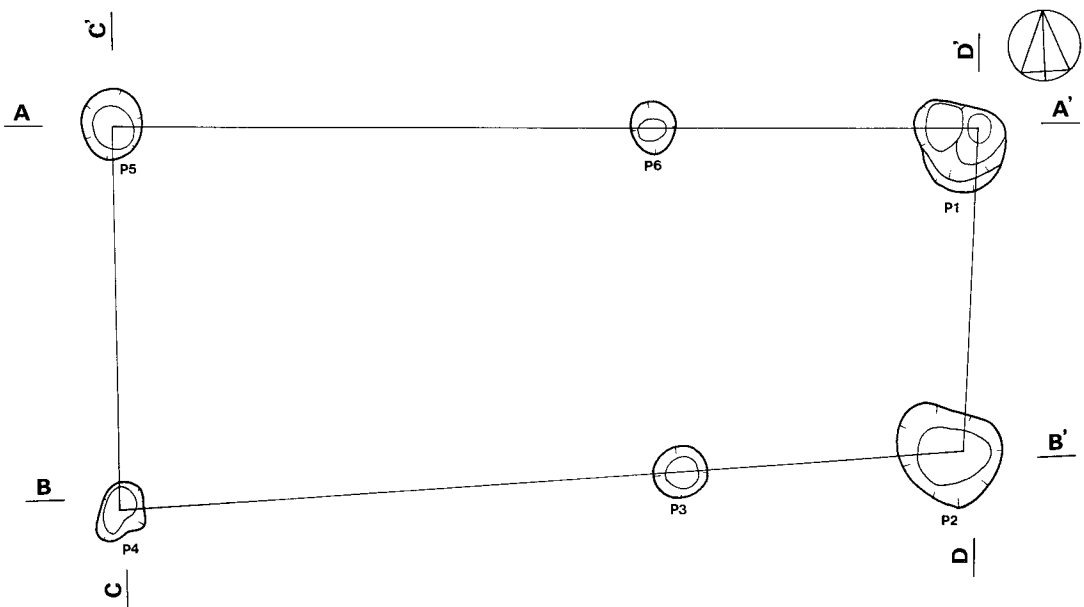
第274图 第3号掘立柱建物跡実測図



第275图 第5号掘立柱建物迹实测图

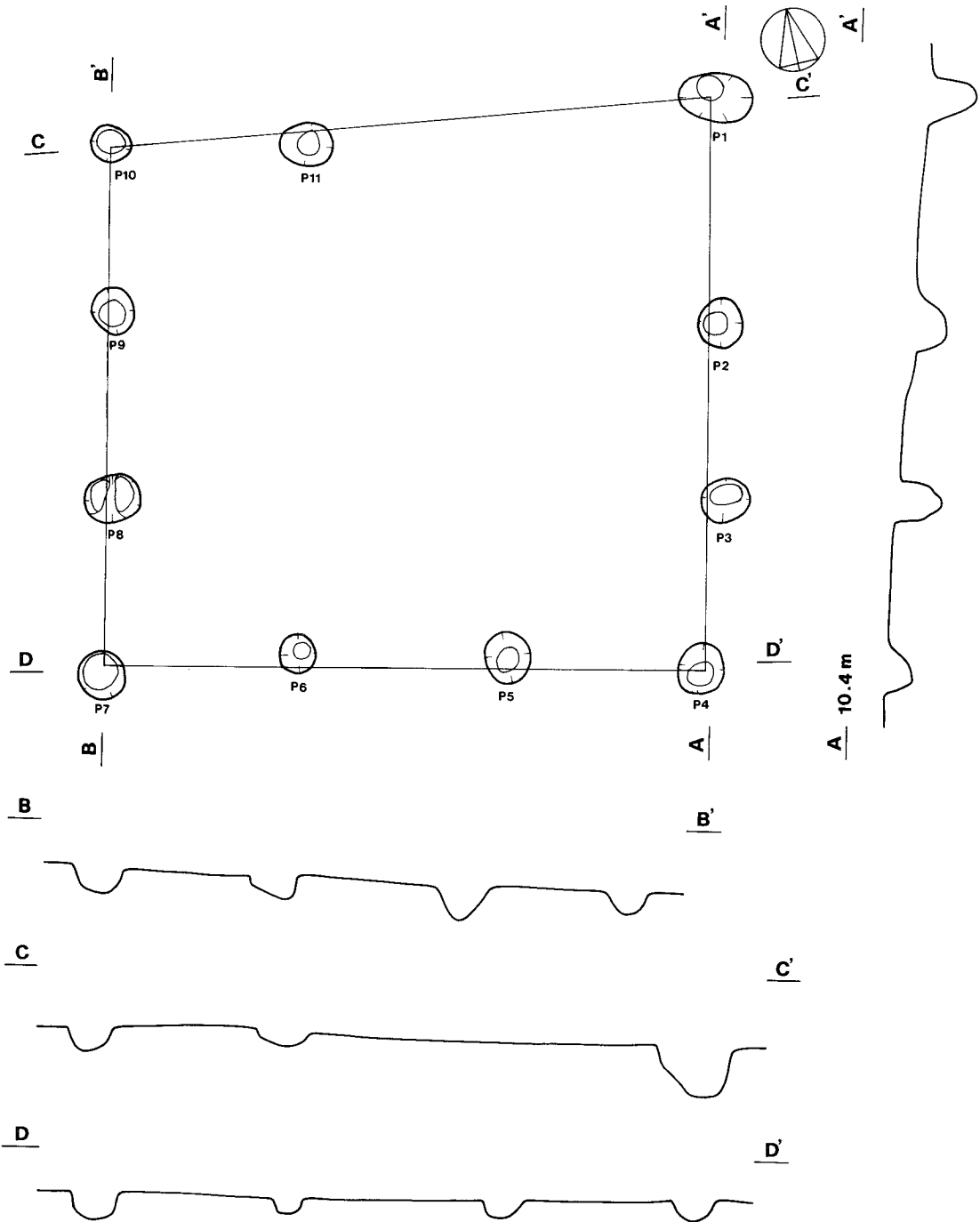




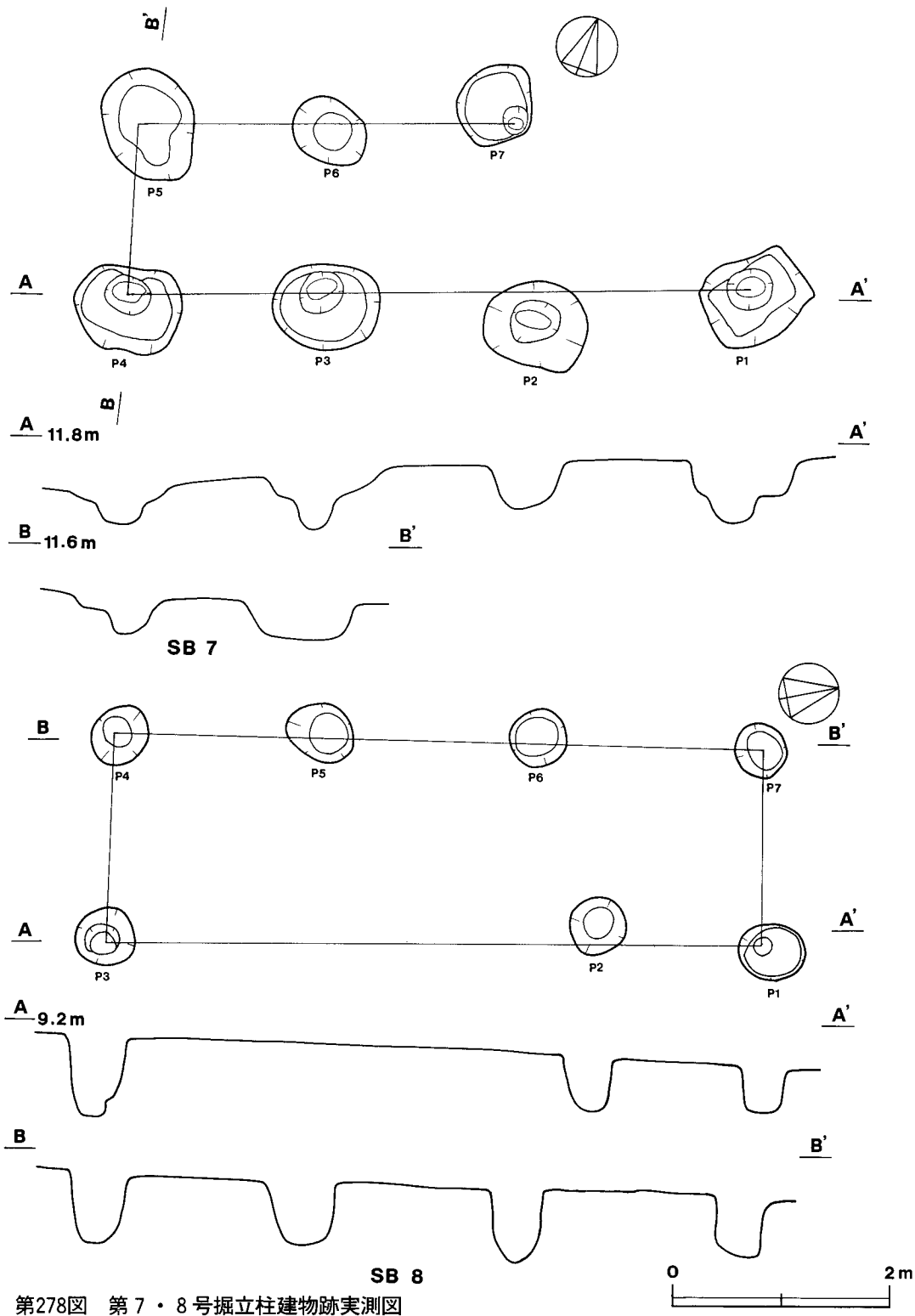


第276图 第4号掘立柱建物跡実測図

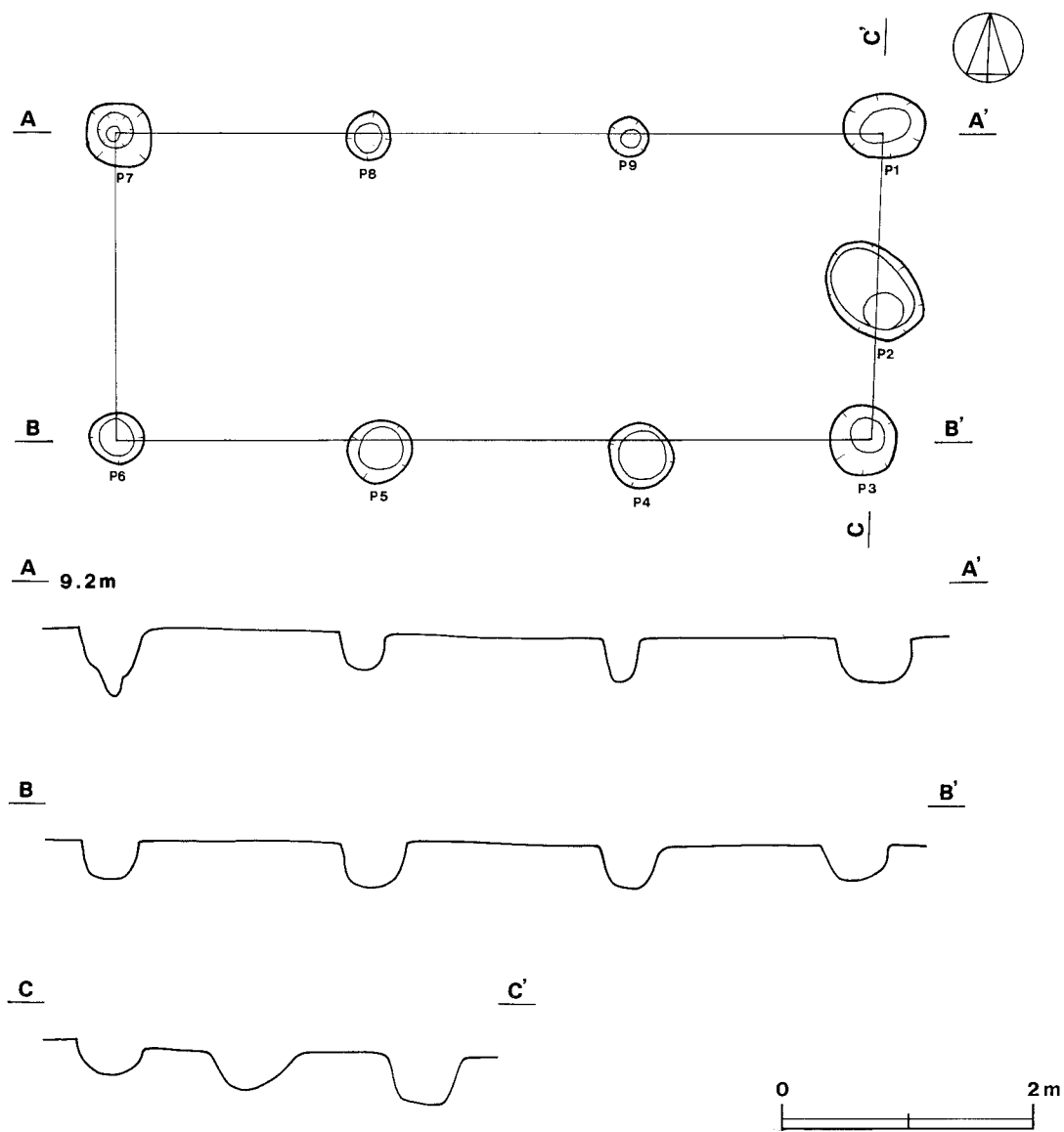




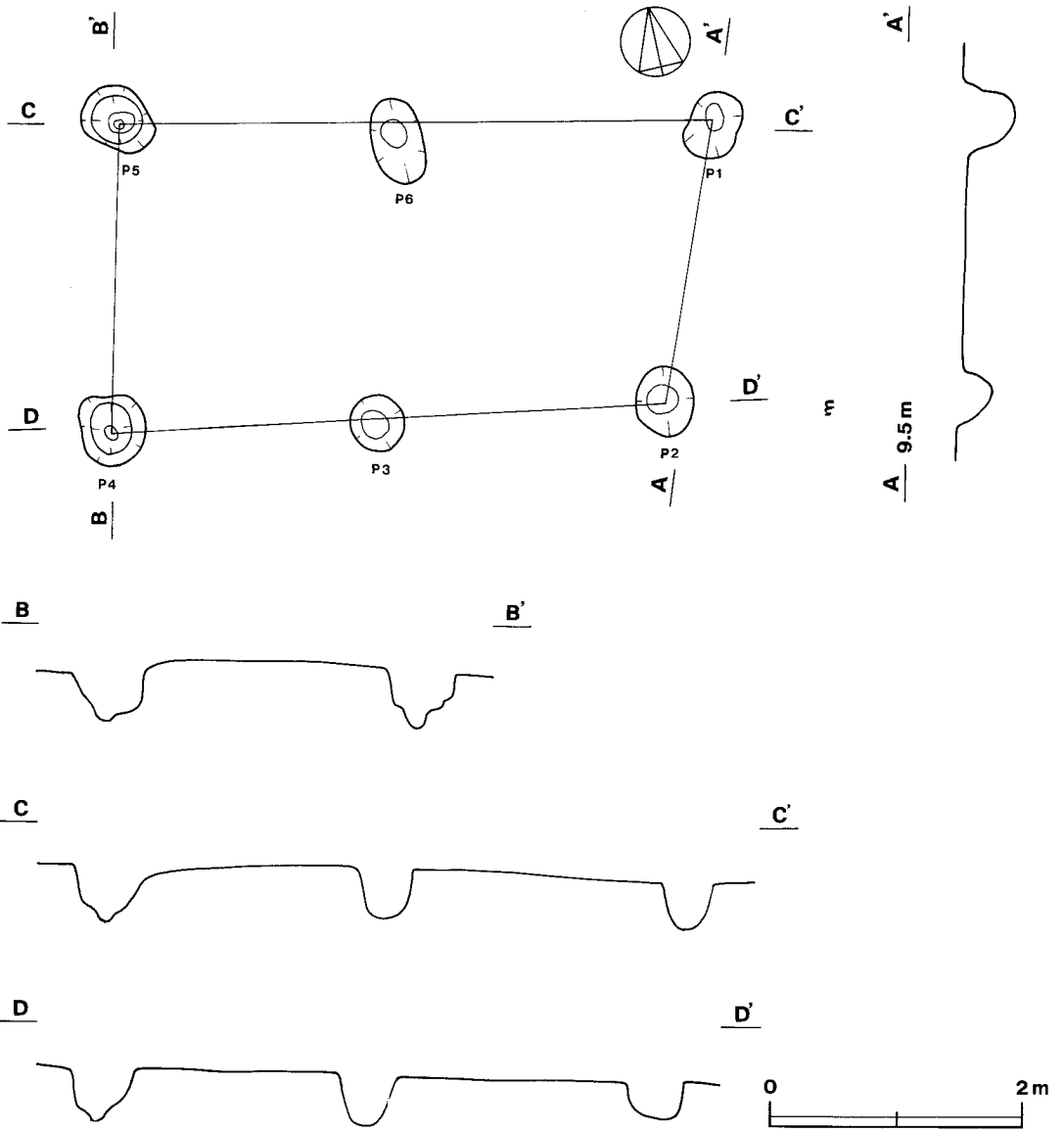
第277图 第6号掘立柱建物跡実測図



第278图 第7·8号掘立柱建筑物迹实测图

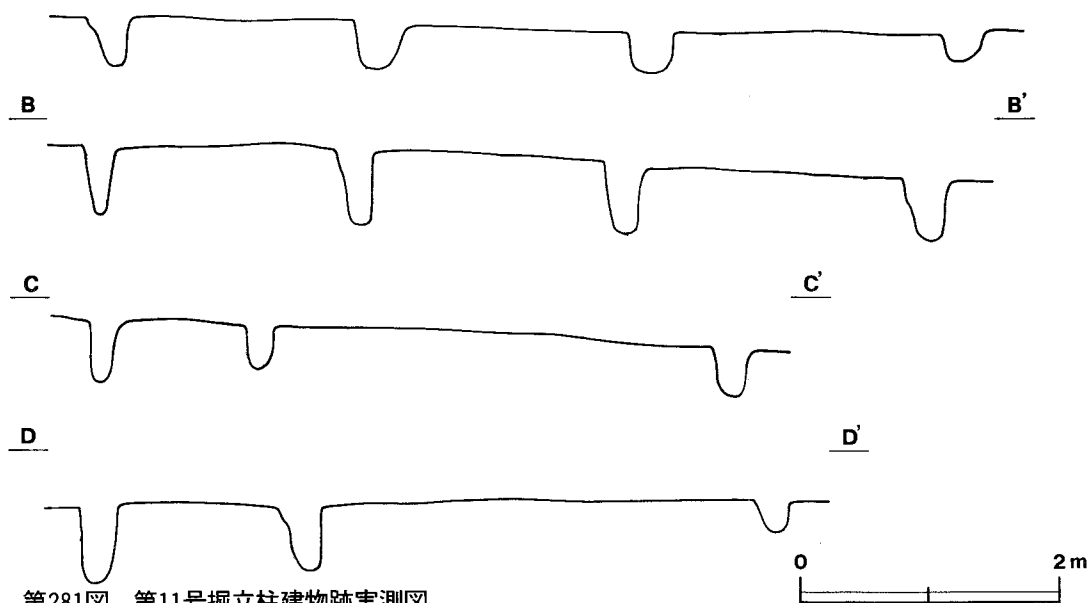
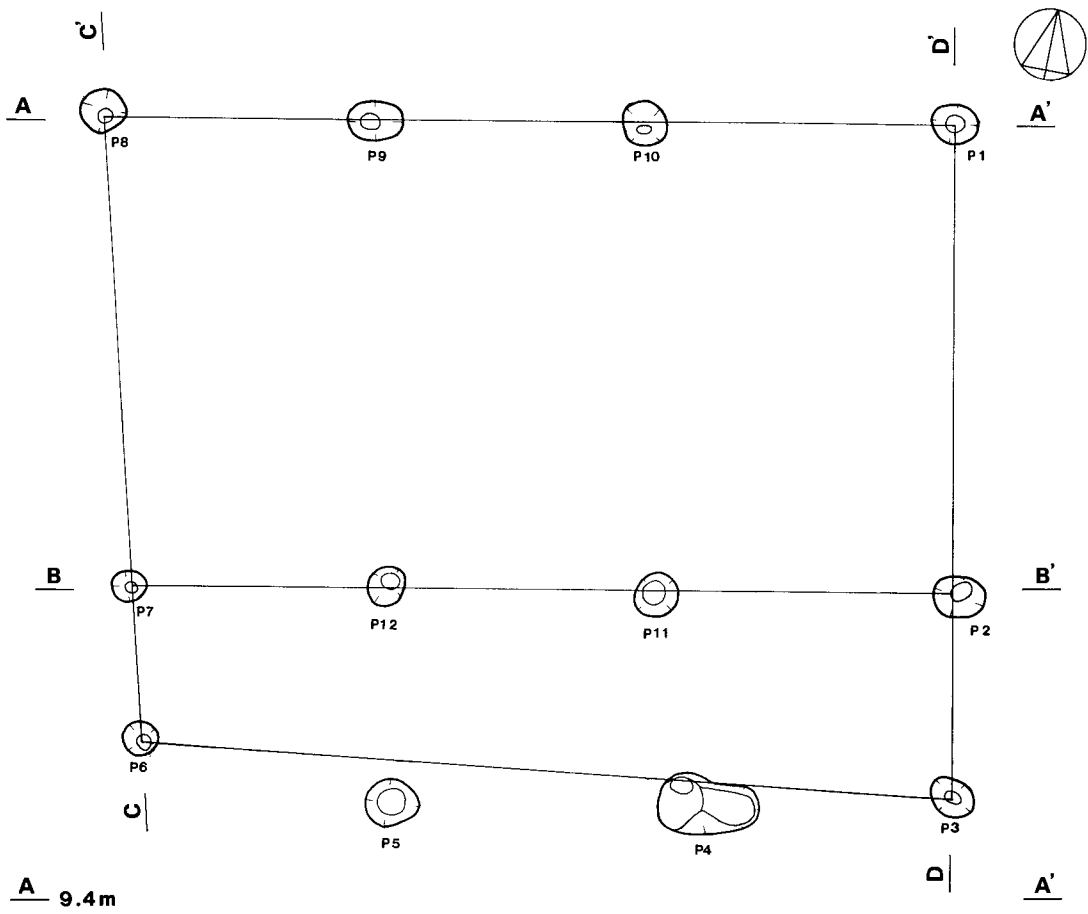


第279图 第9号掘立柱建筑物迹实测图

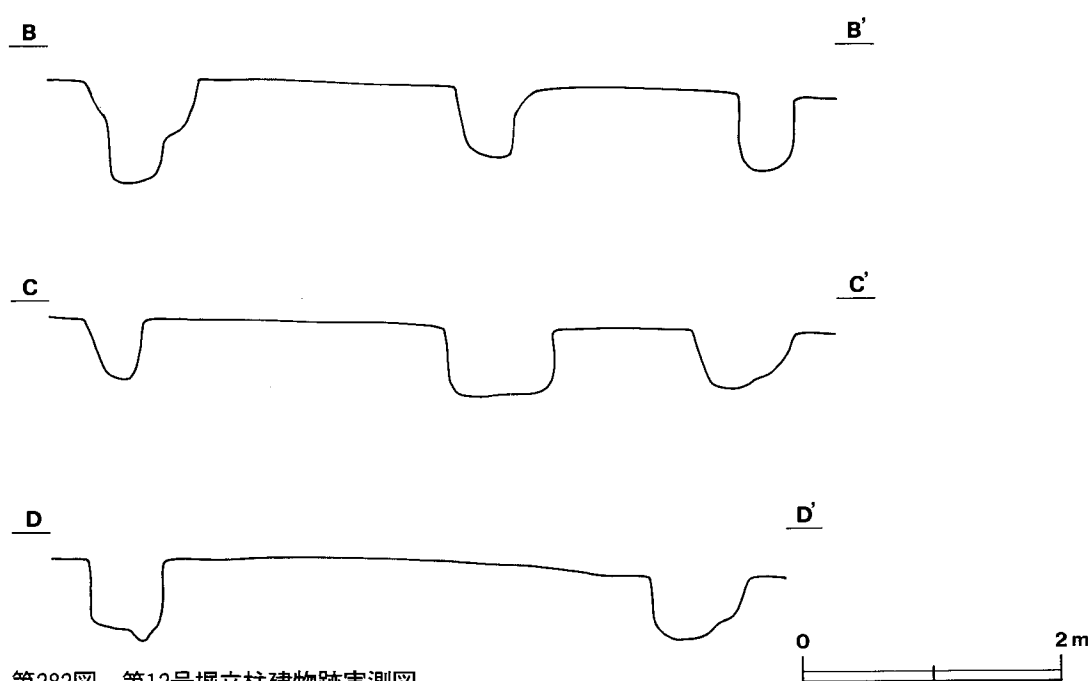
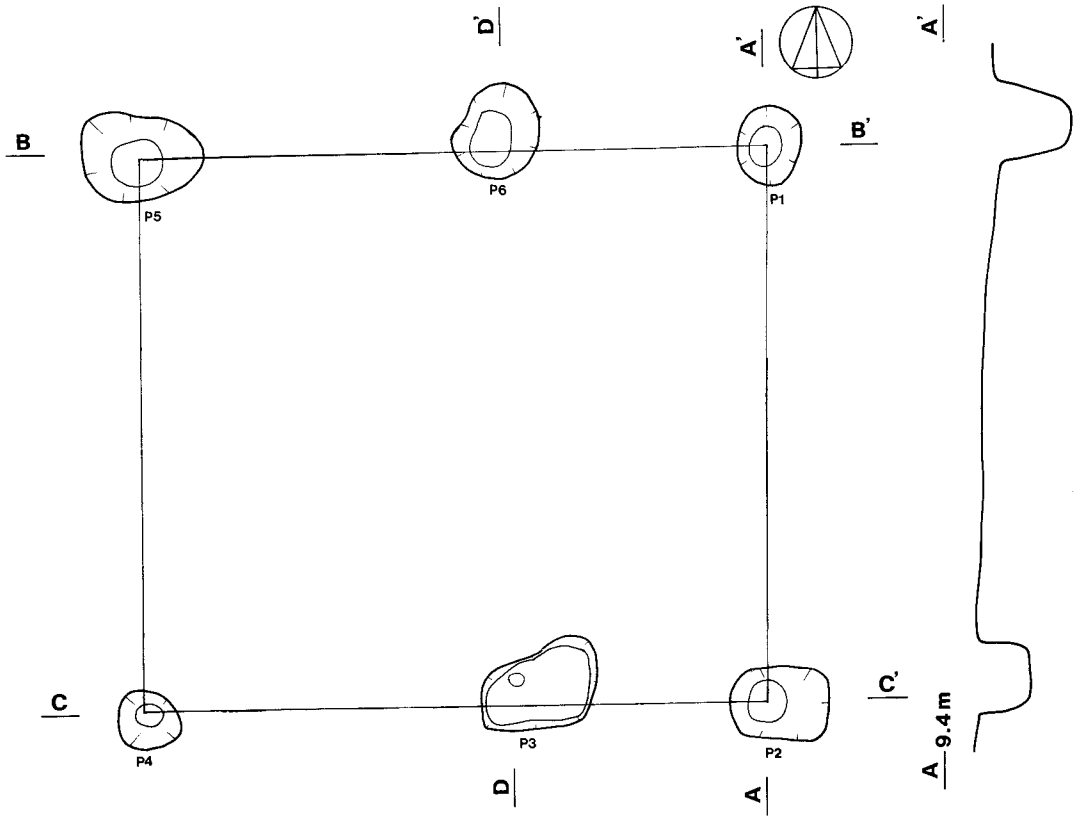


第280图 第10号掘立柱建物跡実測図

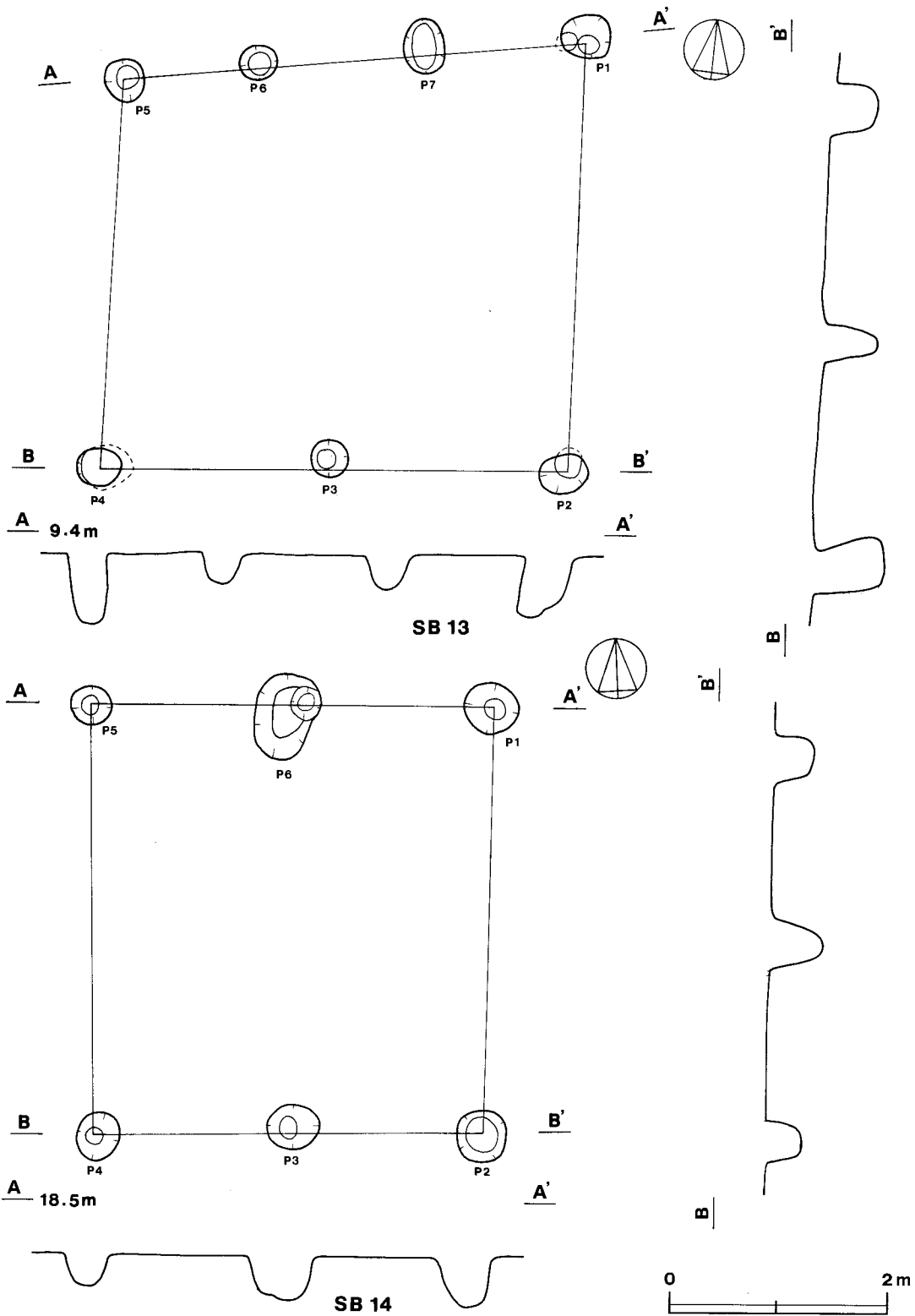




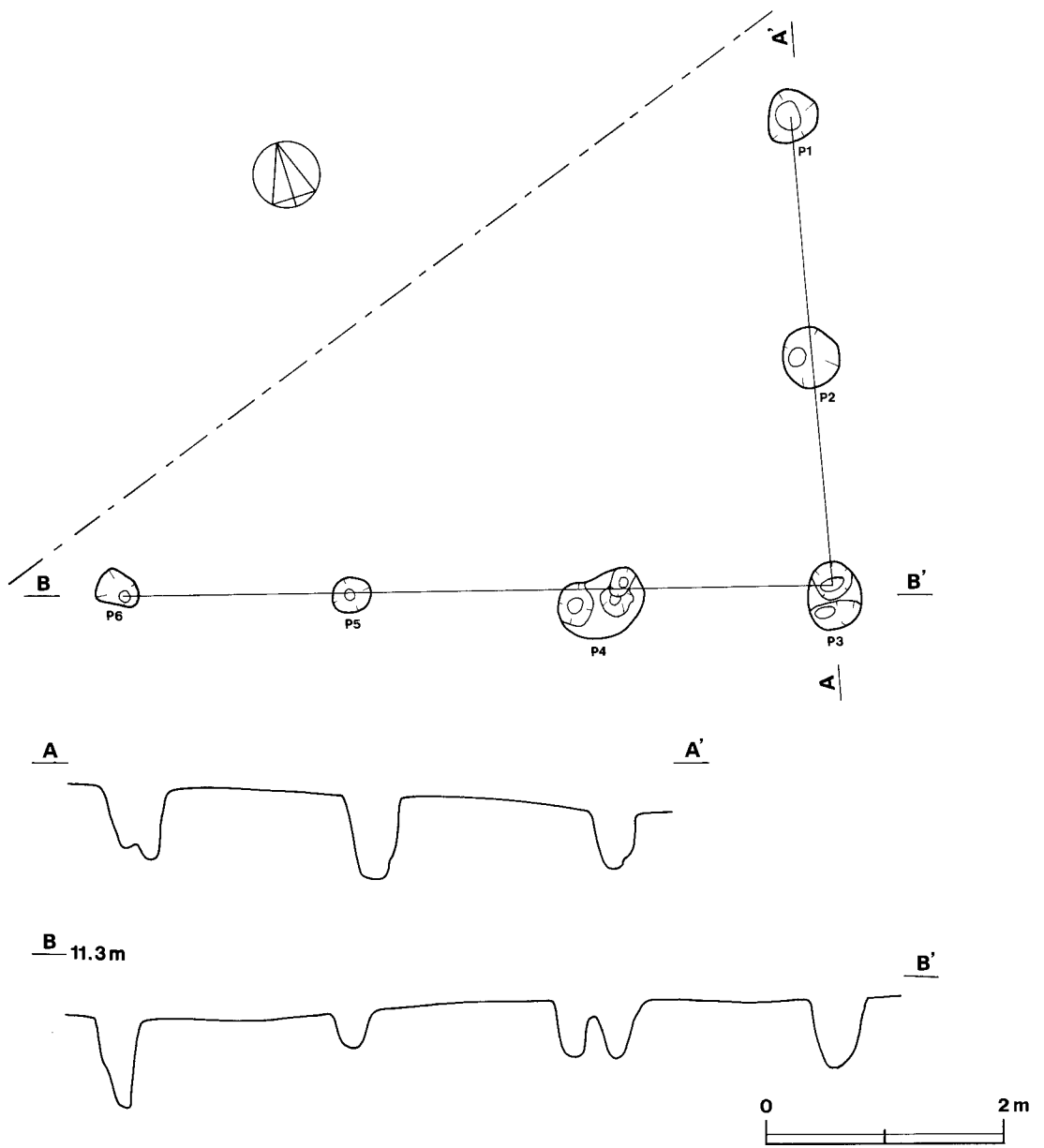
第281图 第11号掘立柱建物跡実測図



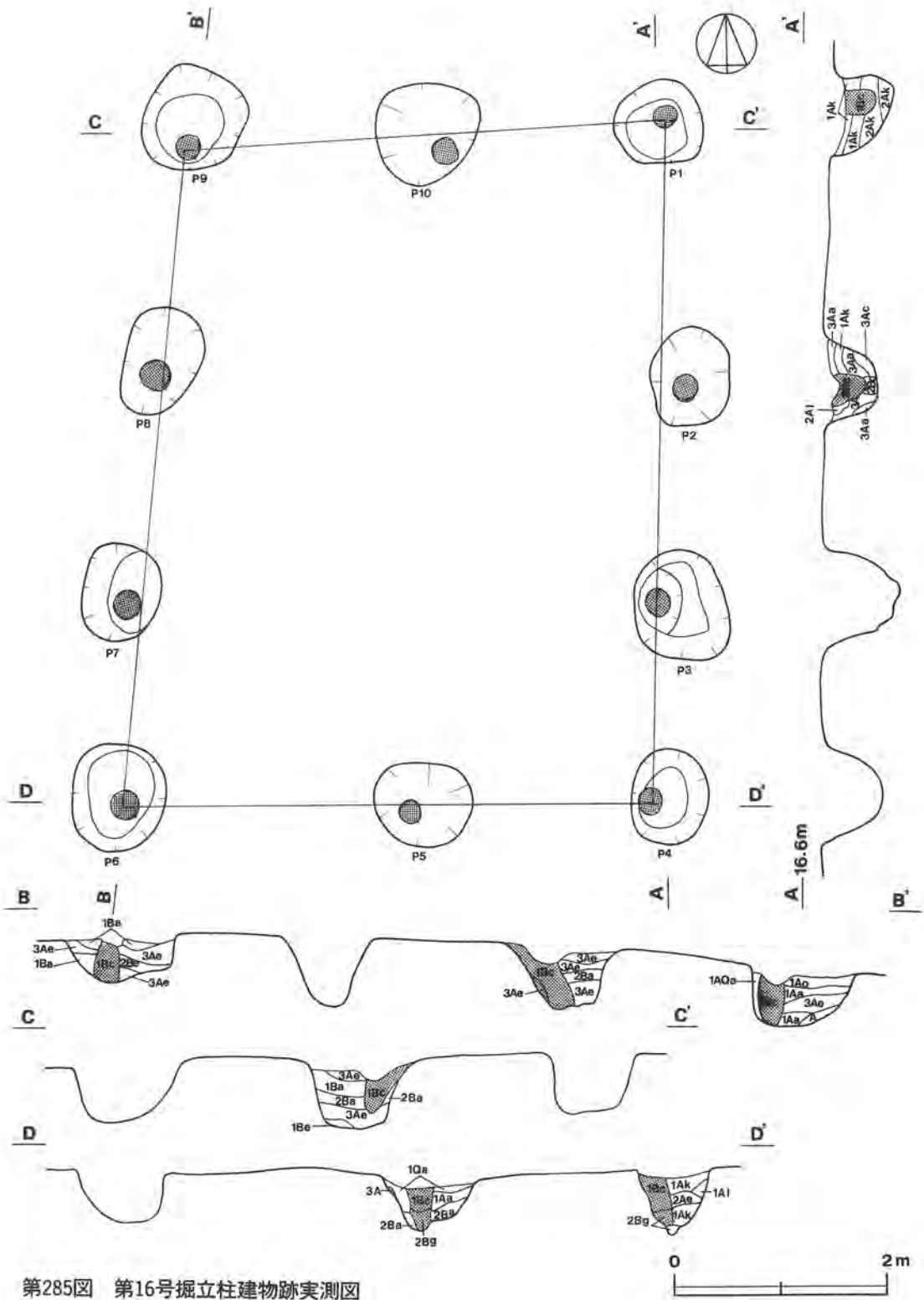
第282图 第12号掘立柱建物跡実測図



第283图 第13・14号掘立柱建物跡実測図

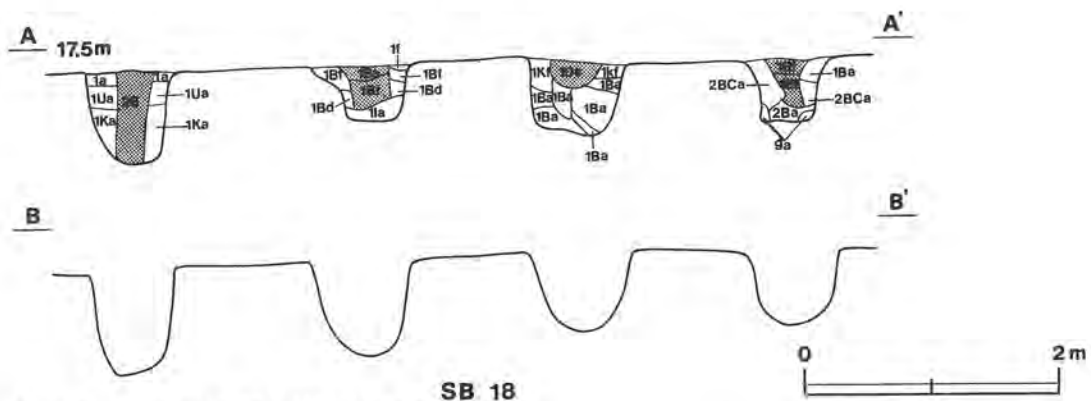
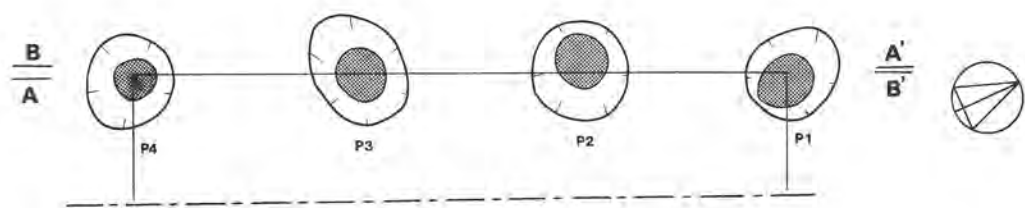
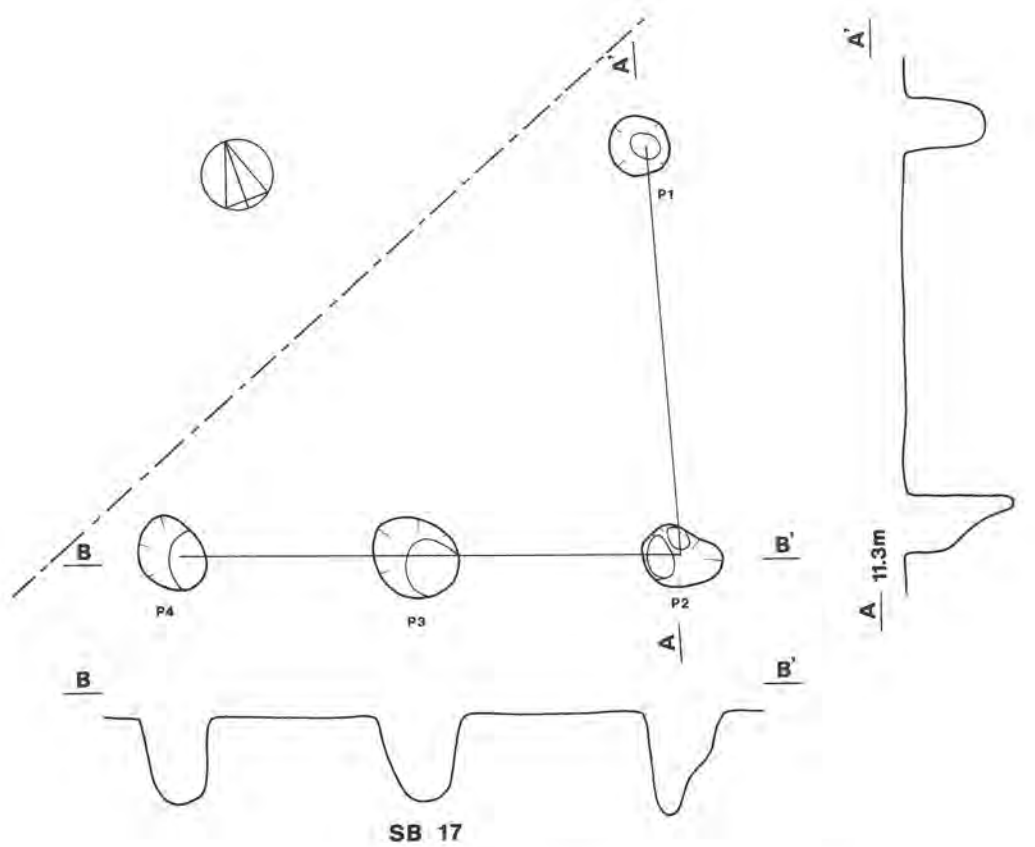


第284图 第15号掘立柱建物跡実測図

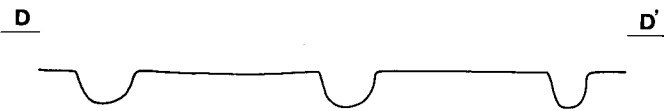
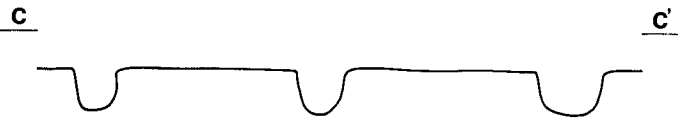
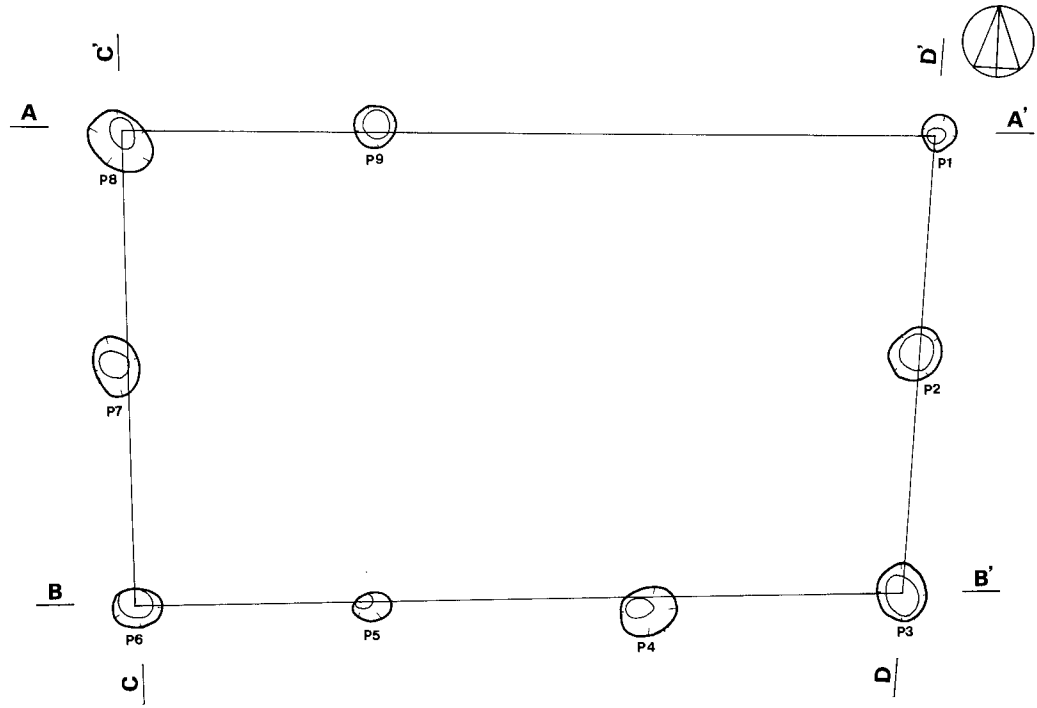


第285图 第16号掘立柱建物跡実測図

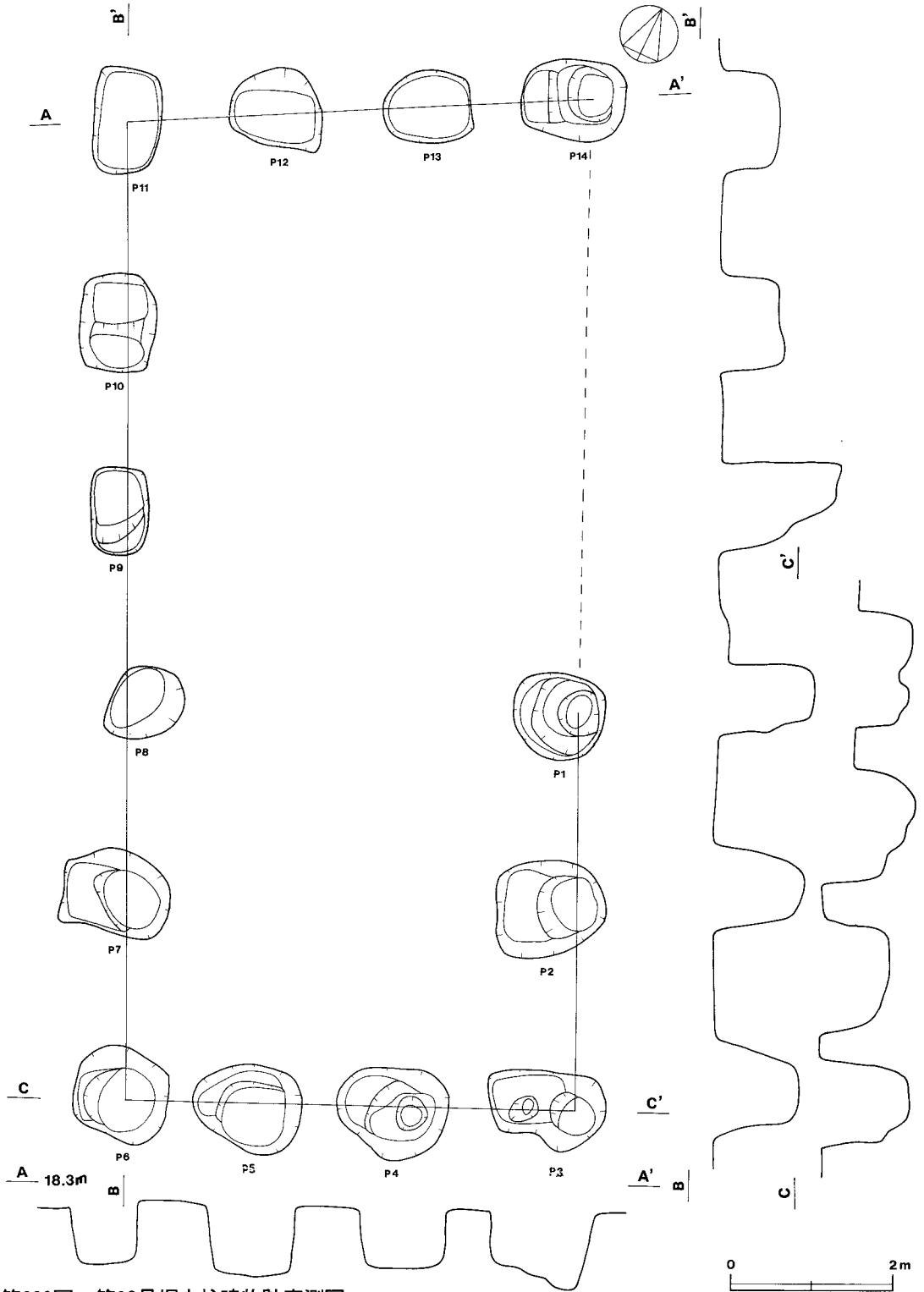




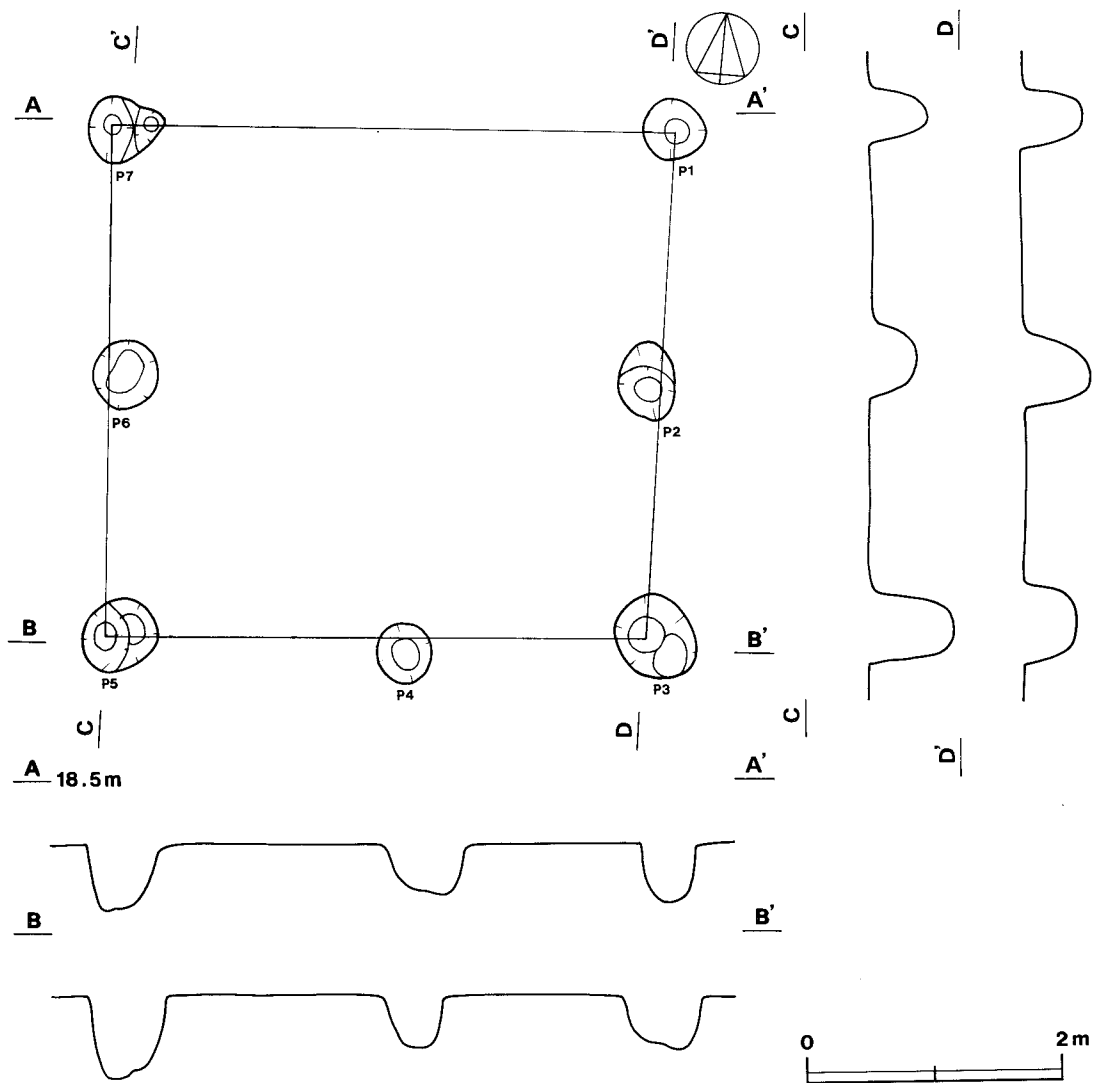
第286图 第17・18号掘立柱建物跡実測図



第287图 第19号掘立柱建物跡実测图



第288图 第20号掘立柱建物迹实测图



第289图 第21号掘立柱建物跡実測図

### 3 集石遺構

#### 第1号集石（第290図）

本跡は、A4e<sub>5</sub>区を中心に確認され、西側に第2号集石、南側に鬼高期の第9号住居跡がそれぞれ隣接して位置している。

本跡は、平面形が楕円形で、長径94cm・短径79cm・深さ22cmの規模を有する掘り込みに、礫55個が集石されたものである。

礫は、断面が鍋底状の掘り込みに、焼土粒子を含む暗褐色土が20cmほど堆積した上にほぼ一段に敷きつめられている。礫は河原石で、小さいもので長径1.8cmから大きいもので長径17.4cmのものまであり、重量は3.1gから1063gの間である。石質は、砂岩が最も多く、次いで安山岩、石英斑岩、泥岩の順である。これらの礫は、熱を受けた痕跡が認められ、ひび割れたものもある。

土器は出土しなかった。

#### 第2号集石（第290図）

本跡は、A4e<sub>4</sub>区を中心に確認され、東側に第1号集石、西側に第3集石がそれぞれ隣接して位置している。

本跡は、平面形が楕円形で、長径121cm・短径92cm・深さ35cmの規模を有する掘り込みに、礫183個が集石されたものである。

礫は、断面が鍋底状の掘り込みに、ローム粒子を含む暗褐色土が10cmほど堆積した上にほぼ三段に敷きつめられている。礫は河原石で、小さいもので長径1.7cmから大きいもので長径14.2cmのものまであり、重量は1.3gから1087gの間である。石質は、砂岩と安山岩がほとんどを占め、他に石英斑岩、泥岩の順である。礫と礫の間や周囲に焼土や炭化物は検出されなかったが、第1号集石の礫と同様に焼けた痕跡が認められ、ひび割れたものもある。

土器は出土しなかった。

#### 第3号集石（第290図）

本跡は、A4e<sub>4</sub>区を中心に確認され、東側に第2号集石、西側に第4集石がそれぞれ隣接して位置している。本跡は、平面形がほぼ円形を呈し、径110cm前後・深さ24cmの規模を有する掘り込みに、礫36個が集石されたものである。

礫は、断面が皿状の掘り込みに、ローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土が10cmほど堆積した上に散在的に集石されている。礫は河原石で、小さいもので長径1.2cmから大きいもので長径11.6cmのものまであり、重量は2.1gから959gの間である。石質は、砂岩と安山岩である。礫は第1号集石の礫と同様に焼けた痕跡が認められ、ひび割れたものもある。

礫にまじって縄文式土器片が10点出土している。縄文式土器片は、熱を受けてもろくなっているため明確ではないが、縄文時代前期の黒浜式に比定されると思われる。

#### 第4号集石（第290図）

本跡は、A4f<sub>4</sub>区を中心に確認され、東側に隣接して第3号集石、南西側2.4mに鬼高期の第9号住居跡がそれぞれ位置している。

本跡は、平面形が不整楕円形を呈し、長径129cm・短径95cm・深さ28cmの規模を有する掘り込みに、礫82個が集石されていたものである。

礫は、ローム粒子を含む黒褐色土が8cmほど堆積した上に一部積み重なった状態で散在的に集石されている。礫は河原石で、小さいもので長径1cmから大きいもので長径15.8cmのものまであり、重量は2.8gから1366gの間である。石質は、砂岩と安山岩である。礫と礫の間や周囲に焼土や炭化物は検出されなかったが、第1号集石の礫と同様に焼けた痕跡が認められ、ひび割れしたものもある。

出土土器は、土師器片2点である。本跡に伴う土器とは考えられない。

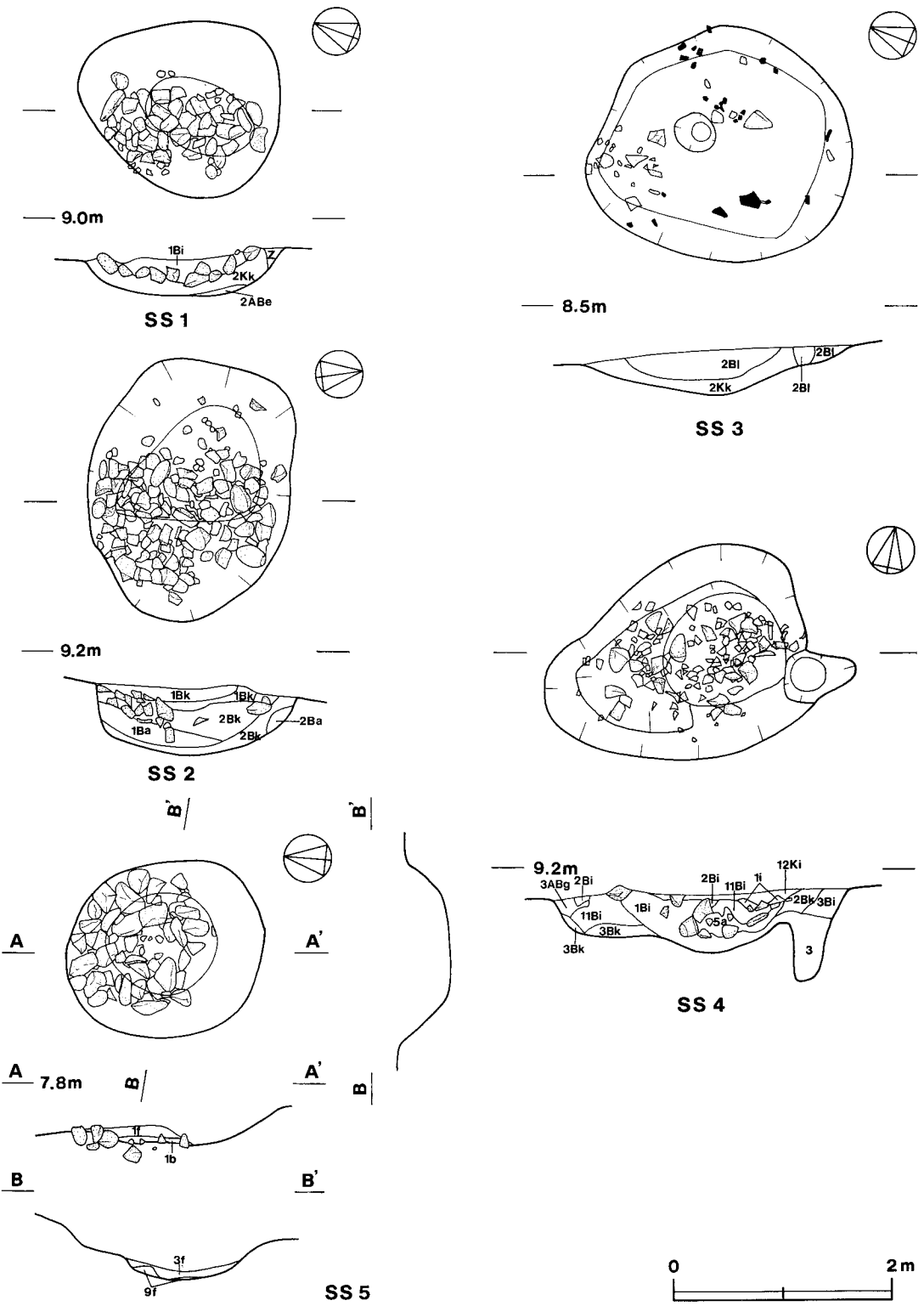
#### 第5号集石（第290図）

本跡は、A4e<sub>9</sub>区を中心に確認され、北西側1.3mに国分期の第6号住居跡、西側に隣接して第541号土坑がそれぞれ位置している。

本跡は、平面形はほぼ円形を呈し、径90cm前後・深さ24cmの規模を有する掘り込みに、礫69個が集石されたものである。

礫は、断面が鍋底状の掘り込みに、ローム粒子を含む黒褐色土が5cmほど堆積した上に一部積み重なった状態で不定形に集石されている。礫は河原石で、小さいもので長径1.1cmから大きいもので長径16.3cmのものまであり、重量は4.6gから2102gの間である。石質は、砂岩と安山岩である。礫と礫の間に焼土や炭化物は検出されなかったが、第1号集石の礫と同様に焼けた痕跡は認められ、ひび割れしたものもある。

土器は出土しなかった。



第290図 第1・2・3・4・5号集石遺構実測図

#### 4 土坑・地下式坑

当遺跡から検出した土坑は、約900基であったが、その後、整理の段階でこれらの土坑について、規模・形状・覆土状況等を詳しく検討した結果、あまりにも小さく、土坑とは考えられないものは省き、土坑として447基を報告した。また、報告した土坑のうち、地下式坑は文章で解説し、他は一覧表で掲載した。尚、土坑として掲載できなかつたものは、ピットとしてまとめ、一覧表で掲載した。

地下式坑については、調査区の中央部から北西側にかけて主に集中し、出土遺物や掘り込みの形状から中世以降の「墓壇の可能性のある土坑」と判断した。

表3 土坑一覧表

土坑番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考	図版番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
1	B4c <sub>7</sub>	N-75°-W	楕円形	1.98×1.60	46	緩斜	平坦	人為	土師質土器片3 <sup>(Ⅲ2)</sup> (高台付杯1)	SI11内	291
2	B4d <sub>6</sub>	N-83°-E	不整楕円形	(3.80)×3.28	40	緩斜	平坦	人為	内耳形土器片1 土師質土器片1(Ⅲ)		291
3	B4d <sub>8</sub>	N-31°-W	楕円形	1.14×1.00	92	緩斜	平坦	自然	土師質土器片1(Ⅲ)	SI12内	291
4	B4c <sub>8</sub>	N-43°-W	隅丸長方形	1.56×1.26	50	垂直	平坦	人為	土師質土器片5 <sup>(Ⅲ1)</sup> (礎4)	SI12内	291
5	B4d <sub>9</sub>	N-79°-W	隅丸長方形	2.32×1.36	80	垂直	皿状	人為			291
7	A5i <sub>2</sub>	——	不定形	1.50×1.26	60	垂直	平坦	人為			291
8	B4c <sub>9</sub>	N-31°-W	楕円形	1.14×1.00	41	外傾	平坦	自然		SI12内	291
10	B4f <sub>0</sub>	——	円形	0.90×0.86	22	外傾	平坦	自然			291
17	B4g <sub>0</sub>	N-55°-W	不整楕円形	0.92×0.54	54	外傾	凹凸	人為			291
25	B4h <sub>0</sub>	N-19°-E	不整楕円形	0.96×0.82	70	外傾	皿状	人為		SI17内	291
31	D2j <sub>9</sub>	——	不定形	2.12×1.48	70	外傾	平坦	人為攪乱			292
32	C3i <sub>7</sub>	——	不定形	2.24×1.42	34	緩斜	平坦	人為攪乱			292
33	C3i <sub>8</sub>	——	不定形	1.50×1.12	42	外傾	平坦	自然	土師質土器2(Ⅲ)		292
34	C3i <sub>9</sub>	——	不定形	0.96×0.90	36	外傾	傾斜	人為			292
35	C3j <sub>8</sub>	N-59°-W	隅丸長方形	1.24×(1.02)	44	緩斜	平坦	攪乱			292
36A	C3j <sub>8</sub>	N-59°-W	(隅丸長方形)	(1.64)×(0.92)	48	外傾	平坦	自然攪乱		SK36(B) と重複	292
36B	C3j <sub>8</sub>	N-39°-E	(隅丸長方形)	(1.46)×(0.86)	48	外傾	平坦	自然攪乱		SK36(A) と重複	292
36C	C3j <sub>8</sub>	N-53°-W	(隅丸長方形)	1.00×(0.82)	48	外傾	平坦	自然攪乱			292
36D	C3j <sub>8</sub>	N-40°-E	(楕円形)	(0.82)×(0.74)	—	—	—	不明			292
37	D3a <sub>8</sub>	N-61°-E	不整楕円形	1.52×1.12	20	外傾	凹凸	自然			292
38	D3a <sub>7</sub>	N-24°-W	楕円形	1.40×1.06	24	緩斜	平坦	人為			292
39	C3j <sub>4</sub>	N-83°-E	楕円形	1.64×1.28	45	外傾	平坦	人為			292



土坑 番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考	図版 番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
40	C3j <sub>4</sub>	—	不 定 形	1.62×1.06	34	緩斜	平坦	人為 攪乱			293
41	C3i <sub>4</sub>	N-15°-W	隅丸方形	1.20×1.12	42	外傾	平坦	人為 攪乱			293
42	C3i <sub>7</sub>	N-84°-E	隅丸長方形	1.26×1.00	32	外傾	平坦	人為		SX2内	293
43	C3j <sub>5</sub>	N-86°-E	楕 円 形	1.76×0.96	40	外傾	凹凸	人為 攪乱			293
44	D3c <sub>5</sub>	N-73°-W	(隅丸長方形)	2.98×(1.82)	54	緩斜	平坦	人為			293
45	D3c <sub>5</sub>	N-52°-W	(隅丸方形)	(0.86)×(0.80)	35	外傾	平坦	人為			293
46	D3a <sub>4</sub>	—	(不整円形)	1.12×(1.10)	35	緩斜	平坦	人為			294
48	D3c <sub>3</sub>	N-65°-W	隅丸長方形	2.50×1.36	36	外傾	平坦	人為 攪乱			293
49	D3b <sub>4</sub>	—	不 定 形	2.62×1.72	38	垂直	平坦	人為			295
50	D3b <sub>4</sub>	N-65°-W	隅丸長方形	1.30×0.78	28	外傾	平坦	人為 攪乱			294
51	D3c <sub>5</sub>	N-27°-E	(隅丸長方形)	2.66×(2.30)	50	外傾	凹凸	人為 攪乱			293
52	D3c <sub>3</sub>	N-17°-E	隅丸長方形	1.74×0.70	42	緩斜	皿状	人為			293
53	D3b <sub>4</sub>	N-73°-W	(隅丸長方形)	1.82×(0.72)	46	外傾	平坦	人為			294
54	D3a <sub>4</sub>	N-71°-W	(隅丸長方形)	(1.22)×(0.64)	50	外傾	平坦	人為			294
55	D3a <sub>3</sub>	N-15°-E	隅丸長方形	2.02×0.74	50	外傾	平坦	人為			294
56	D3a <sub>4</sub>	N-72°-W	隅丸長方形	1.58×0.78	66	外傾	平坦	人為		SK78 と重複	294
57	D3b <sub>4</sub>	—	(不 定 形)	(1.24)×1.20	50	緩斜	平坦	人為			294
58	D3a <sub>4</sub>	N-76°-W	楕 円 形	1.04×0.74	58	外傾	平坦	人為			294
59	D3a <sub>4</sub>	N-77°-W	(隅丸長方形)	1.92×(0.88)	54	緩斜	平坦	人為			294
60	D3a <sub>4</sub>	N-76°-W	隅丸長方形	1.70×1.04	60	垂直	平坦	人為 攪乱			294
62	D3a <sub>7</sub>	N-88°-W	不整楕円形	1.36×1.00	32	外傾	凹凸	人為			294
64	D3a <sub>5</sub>	—	隅丸長方形	1.84×0.92	70	外傾	平坦	人為			296
65	D3a <sub>5</sub>	—	(不 定 形)	(2.54)×1.28	30	外傾	平坦	人為			296
68	D2c <sub>8</sub>	N-14°-E	(不 定 形)	2.60×1.56	72	外傾	平坦	人為			295
69	D2e <sub>5</sub>	N-22°-W	楕 円 形	0.92×(0.90)	28	緩斜	平坦	人為			295
70	D2e <sub>5</sub>	—	(不 定 形)	1.10×(0.56)	70	外傾	皿状	人為			295
71	D2e <sub>4</sub>	N-22°-W	(楕 円 形)	0.70×(0.42)	24	緩斜	皿状	人為			295
72	A4e <sub>5</sub>	N-39°-E	(隅丸長方形)	(2.36)×1.66	28	緩斜	平坦	人為		SK8内	295
73	C3i <sub>6</sub>	—	円 形	1.16×1.12	59	垂直	平坦	人為			295
74	C3i <sub>5</sub>	N-52°-E	楕 円 形	1.56×1.24	66	垂直	平坦	人為 攪乱			295

土坑 番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考	図版 番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
75	C3h <sub>5</sub>	——	不 定 形	1.14×0.84	36	外傾	傾斜	人為	土師質土器片1(皿)		295
76	C3i <sub>5</sub>	N-49°-E	楕 円 形	0.60×0.50	60	垂直	傾斜	人為 攪乱			295
77	C3j <sub>4</sub>	N-75°-W	隅丸長方形	(0.84)×(0.70)	60	緩斜	平坦	人為			296
78	D3a <sub>4</sub>	N-14°-E	隅丸長方形	2.34×0.94	52	外傾	平坦	人為		SK56 と重複	294
79	C3j <sub>3</sub> ・j <sub>4</sub>	N-15°-E	(楕 円 形)	1.14×0.74	54	垂直	平坦	人為			296
80	C3j <sub>4</sub>	N-66°-W	(隅丸長方形)	(1.08)×0.90	50	外傾	平坦	人為			296
81	C3j <sub>4</sub>	N-33°-E	(隅丸長方形)	(1.62)×1.08	35	垂直	平坦	人為			296
82	C3j <sub>4</sub>	N-74°-W	(隅丸長方形)	(1.30)×0.90	50	——	——	不明			296
83	C3j <sub>4</sub>	N-8°-W	(隅丸長方形)	2.42×(1.78)	56	垂直	平坦	人為			296
84	C3j <sub>4</sub>	N-8°-W	隅丸長方形	1.34×0.74	82	緩斜	平坦	人為			296
85	C3j <sub>4</sub>	N-68°-W	(隅丸長方形)	(1.62)×(0.54)	90	外傾	平坦	人為			296
86	D3b <sub>4</sub>	N-89°-W	(隅丸長方形)	(1.38)×1.02	——	——	——	人為 攪乱			294
87	D2j <sub>5</sub>	N-30°-E	楕 円 形	(1.02)×0.84	50	緩斜	皿状	人為 攪乱			296
88	D3b <sub>5</sub>	——	円 形	1.06×1.04	22	緩斜	平坦	人為 攪乱			296
89	D3b <sub>5</sub>	N-48°-W	不整楕円形	1.36×0.98	18	緩斜	平坦	人為 攪乱			296
90	D3a <sub>6</sub>	N-34°-W	不整楕円形	1.16×1.02	48	外傾	皿状	人為			296
94	C3j <sub>7</sub>	N-84°-W	不整楕円形	0.82×0.74	20	垂直	平坦	自然		SX 2 内	297
95	C3j <sub>7</sub>	N-36°-E	隅丸長方形	1.48×1.02	45	外傾	平坦	人為 攪乱			297
96	C3i <sub>7</sub>	N-36°-E	隅丸長方形	2.12×1.18	35	緩斜	平坦	人為 攪乱	スラグ	SX 2 内	297
97	C3j <sub>5</sub>	N-73°-E	(隅丸長方形)	(1.00)×(0.80)	76	外傾	平坦	人為 攪乱			296
98	C3i <sub>8</sub>	N-66°-W	楕 円 形	1.32×0.82	25	外傾	平坦	人為 攪乱	土師質土器片1(皿)		297
99	C3i <sub>8</sub>	N-71°-W	隅丸長方形	1.08×0.84	14	緩斜	平坦	人為 攪乱			297
100	C3i <sub>8</sub>	N-59°-W	隅丸長方形	1.00×0.84	34	外傾	傾斜	人為 攪乱			297
101	C3i <sub>9</sub>	N-73°-W	不整楕円形	1.08×0.84	21	外傾	平坦	人為			297
102	C3i <sub>9</sub>	N-19°-E	(不整楕円形)	1.70×(1.66)	20	緩斜	平坦	人為	スラブ		297
103	D2e <sub>7</sub>	N-17°-W	不整楕円形	0.80×0.40	66	外傾	凹凸	人為			297
104	C3h <sub>6</sub>	N-13°-E	隅 丸 方 形	0.98×0.98	20	外傾	平坦	自然		SX 2 内	297
105	C3i <sub>6</sub>	N-29°-E	(隅丸長方形)	1.08×(0.42)	40	外傾	平坦	人為 攪乱			298
106	C3i <sub>5</sub>	N-73°-E	楕 円 形	1.04×0.78	34	外傾	平坦	人為 攪乱			298
107	C3i <sub>5</sub>	N-76°-W	不整楕円形	0.98×0.80	28	外傾	平坦	人為 攪乱			298

土坑 番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考	図版 番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
108	D3a <sub>8</sub>	N-4°-E	不整楕円形	2.02×0.98	48	外傾	平坦	人為			297
109	D3a <sub>8</sub>	N-56°-W	(隅丸長方形)	(1.44)×0.88	38	外傾	平坦	人為			298
110	D3a <sub>8</sub>	N-35°-E	(隅丸長方形)	(1.32)×0.78	28	緩斜	平坦	人為			298
111	C3j <sub>9</sub>	N-32°-E	隅丸長方形	2.02×0.90	32	緩斜	皿状	人為			297
112	C3i <sub>0</sub>	N-40°-E	(楕 円 形)	(0.50)×0.44	16	緩斜	平坦	人為			298
113	C3i <sub>0</sub>	—	円 形	0.84×0.84	22	緩斜	平坦	人為			298
114	D3a <sub>9</sub>	N-32°-W	楕 円 形	0.62×0.50	46	外傾	平坦	人為			298
115	C3i <sub>0</sub>	—	不 定 形	—	27	緩斜	平坦	人為			298
116	C3i <sub>1</sub>	—	円 形	1.32×1.20	22	緩斜	平坦	人為			298
118	D3b <sub>3</sub>	N-44°-W	不整楕円形	0.90×0.76	50	外傾	平坦	人為			298
119	C3j <sub>5</sub>	N-73°-W	(隅丸長方形)	1.28×(1.10)	—	—	—	不明		SK97 と重複	296
120	D3b <sub>3</sub>	—	不 定 形	2.58×2.16	25	外傾	平坦	人為 攪乱			294
122	D3b <sub>1</sub>	N-35°-E	不整楕円形	1.76×1.44	50	外傾	平坦	人為			298
123	D3b <sub>2</sub>	N-16°-E	隅丸長方形	1.52×0.48	29	外傾	平坦	人為 攪乱			299
124	D3b <sub>2</sub>	N-18°-E	隅丸長方形	2.46×0.64	36	緩斜	平坦	人為 攪乱			299
125	D3b <sub>2</sub>	N-19°-E	隅丸長方形	2.58×0.90	39	緩斜	平坦	人為 攪乱			299
126	D3b <sub>3</sub>	N-29°-E	隅丸長方形	2.10×1.08	39	外傾	平坦	人為 攪乱		SK127 と重複	299
127	D3b <sub>3</sub>	N-18°-E	(隅丸長方形)	(1.40)×(0.90)	48	外傾	平坦	人為 攪乱		SK126 と重複	299
128	C3j <sub>2</sub>	N-27°-W	不整楕円形	1.56×1.20	50	外傾	凹凸	人為 攪乱	石製の紡錘車1		298
129	C3j <sub>3</sub>	N-75°-W	不整楕円形	1.94×1.16	50	外傾	平坦	人為 攪乱			298
130	C3j <sub>4</sub>	N-20°-E	不整楕円形	1.36×1.00	38	—	平坦	人為			299
131	D3b <sub>1</sub>	—	(不 定 形)	1.84×(0.88)	30	緩斜	平坦	人為 攪乱			299
132	C3i <sub>6</sub>	—	(不 定 形)	1.36×1.14	50	外傾	平坦	人為 攪乱			299
133	D3b <sub>1</sub>	N-18°-E	(隅丸長方形)	(1.42)×0.80	48	外傾	平坦	人為			299
134	D3b <sub>1</sub>	—	(不 定 形)	1.38×(1.32)	30	外傾	平坦	人為			299
135	C3j <sub>3</sub>	N-19°-E	楕 円 形	0.96×0.72	54	垂直	平坦	人為 攪乱			299
136	D3a <sub>1</sub>	N-69°-W	楕 円 形	1.56×0.92	40	外傾	平坦	人為			299
137	D2a <sub>0</sub>	—	不 定 形	(0.94)×0.78	34	外傾	平坦	自然			299
138	C3h <sub>5</sub>	N-65°-W	不整楕円形	1.34×0.98	28	緩斜	平坦	人為 攪乱			299
139	C3i <sub>3</sub>	N-37°-E	楕 円 形	0.64×0.58	40	外傾	平坦	人為			300

土坑 番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考	図版 番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
140	C3i <sub>3</sub>	N-7°-E	楕 円 形	1.44×1.28	28	緩斜	平坦	人為			300
141	C3i <sub>4</sub>	N-26°-E	円 形	1.02×1.00	46	外傾	平坦	人為			300
142	C3h <sub>4</sub>	N-30°-E	楕 円 形	0.72×0.58	48	垂直 緩斜	傾斜	人為			300
143	C3h <sub>4</sub>	N-46°-E	楕 円 形	0.68×0.56	46	垂直	平坦	人為 攪乱			300
144	C3h <sub>3</sub>	N-71°-E	楕 円 形	0.74×0.50	50	外傾	平坦	人為			300
145	C3h <sub>3</sub>	N-32°-E	楕 円 形	1.20×0.68	50	外傾	平坦	人為			300
146	C3i <sub>4</sub>	N-26°-W	不整楕円形	1.20×1.04	44	外傾	平坦	人為			300
147	D3a <sub>8</sub>	N-38°-E	隅丸長方形	(1.58)×0.84	30	外傾	平坦	人為		SK109 と重複	298
148	C3j <sub>8</sub>	N-36°-E	隅丸長方形	1.62×0.82	30	外傾	平坦	人為			297
149	D2b <sub>0</sub>	——	(不 定 形)	(1.32)×1.06	30	外傾	平坦	人為	土師質土器片1(皿)		299
150	D3a <sub>9</sub>	——	円 形	0.56×0.48	34	外傾	傾斜	人為			300
151	D2a <sub>0</sub>	——	不 定 形	1.18×1.08	28	外傾	凹凸	人為 攪乱			300
153	D2e <sub>7</sub>	N-66°-E	不整楕円形	0.94×0.72	52	垂直 外傾	傾斜	人為			300
154	D3b <sub>9</sub>	——	(不 整 円 形)	0.82×0.80	16	緩斜	平坦	自然			300
155	D3b <sub>9</sub>	——	円 形	0.74×0.70	32	外傾	平坦	人為			300
156	D2j <sub>0</sub>	N-64°-E	楕 円 形	0.88×0.76	18	緩斜	平坦	人為			300
157	D2e <sub>7</sub>	N-68°-E	不整楕円形	0.62×0.50	38	外傾	平坦	人為			300
158	D2e <sub>7</sub>	N-69°-W	楕 円 形	0.70×0.48	80	垂直	皿状	人為	土師質土器2(皿)		297
159	C3j <sub>0</sub>	N-46°-W	楕 円 形	0.76×0.52	25	外傾	皿状	人為	スラグ		300
161	D2d <sub>7</sub>	N-26°-W	楕 円 形	0.84×0.72	28	外傾	平坦	人為			300
162	D2e <sub>7</sub>	N-60°-E	楕 円 形	0.36×0.30	30	外傾	皿状	人為			297
169	D3b <sub>7</sub>	——	不 定 形	0.84×0.48	22	外傾	皿状	人為		SI44内	300
179	D3b <sub>7</sub>	——	不 定 形	0.82×0.50	40	外傾	凹凸	人為		SI44内	300
192	D2f <sub>4</sub>	N-16°-E	(不整楕円形)	1.24×(0.92)	62	外傾	凹凸	人為			301
193	D2e <sub>4</sub>	N-24°-E	不整楕円形	0.92×0.60	44	垂直	凹凸	人為			300
209	C3i <sub>5</sub>	N-25°-E	隅丸長方形	1.62×0.90	20	緩斜	平坦	人為			298
210	C3h <sub>7</sub>	N-17°-E	(楕 円 形)	1.06×(0.62)	44	外傾	平坦	人為			301
212	C4g <sub>1</sub>	N-18°-E	楕 円 形	0.90×0.80	14	外傾	凹凸	人為 攪乱			301
215	C4g <sub>2</sub>	N-8°-E	楕 円 形	1.52×1.22	26	外傾	傾斜	人為			301
218	C4f <sub>1</sub>	N-48°-W	楕 円 形	1.06×0.90	16	外傾	平坦	人為 攪乱			301

土坑 番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考	図版 番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
219	C3f <sub>0</sub>	—	不 定 形	2.00×1.60	34	外傾	平坦	人為			301
220	C4e <sub>1</sub>	N-75°-W	楕 円 形	1.50×1.06	18	外傾	平坦	人為 攪乱			301
221	C4e <sub>1</sub>	N-52°-W	楕 円 形	1.36×0.96	30	外傾	平坦	人為 攪乱			301
224	C4e <sub>2</sub>	—	円 形	0.90×(0.78)	12	外傾	凹凸	人為	スラグ		301
225	C4e <sub>2</sub>	—	不 定 形	1.24×1.10	28	外傾	平坦	人為 攪乱			301
226	C4d <sub>3</sub>	N-12°-E	楕 円 形	1.38×0.86	24	外傾	平坦	自然	スラグ		301
228	C4d <sub>3</sub>	—	円 形	0.98×0.86	23	外傾	平坦	人為 攪乱			301
230	C4d <sub>3</sub>	—	円 形	0.88×0.80	30	外傾	平坦	人為			301
231	C4c <sub>3</sub>	—	円 形	1.18×1.04	38	緩斜	皿状	人為			301
232	C4c <sub>3</sub>	—	円 形	0.74×0.72	16	緩斜	皿状	人為			301
233	C4c <sub>2</sub>	N-58°-W	楕 円 形	1.04×0.82	26	緩斜 外傾	平坦	人為			301
234	C4c <sub>2</sub>	N-84°-E	楕 円 形	1.34×1.08	44	外傾	凹凸	人為			301
235	C4e <sub>6</sub>	N-42°-W	(楕 円 形)	(1.40)×1.22	10	—	—	人為			302
236	G4e <sub>6</sub>	N-44°-W	(楕 円 形)	(1.80)×1.24	10	緩斜	平坦	人為			302
237	C4e <sub>5</sub>	N-25°-E	楕 円 形	1.92×1.68	32	緩斜	平坦	人為 攪乱			302
238	C4d <sub>6</sub>	N-31°-E	楕 円 形	1.14×0.80	20	外傾	平坦	人為			302
239	C4d <sub>6</sub>	N-81°-E	不整楕円形	0.98×0.70	22	外傾	平坦	人為			302
240	C4d <sub>3</sub>	N-59°-E	楕 円 形	1.16×0.74	20	垂直	平坦	人為			302
244	C4h <sub>5</sub>	N-86°-W	(楕 円 形)	0.72×(0.46)	80	外傾	傾斜	人為			342
245	C3g <sub>8</sub>	N-80°-W	(楕 円 形)	0.92×(0.40)	68	緩斜	平坦	人為			302
246	C3g <sub>8</sub>	N-50°-E	楕 円 形	2.34×(0.76)	44	垂直	平坦	不明			302
250	D3b <sub>0</sub>	N-10°-W	(楕 円 形)	0.76×(0.52)	18	外傾	平坦	人為		SI45内	302
253	C3e <sub>6</sub>	—	不 定 形	4.12×1.20	40	外傾	平坦	人為 攪乱	土師質土器 1(皿)	SD 5・7内	302
254	C3e <sub>4</sub>	—	不 定 形	1.30×1.20	35	外傾	皿状	人為	土師質土器 1(皿) 土師器片 2(杯)	SD 8 内	302
255	C3d <sub>3</sub>	—	不 定 形	1.92×1.64	46	外傾	平坦	人為		SD 8 内	302
256	C4d <sub>4</sub>	N-17°-E	楕 円 形	1.94×1.10	54	外傾	凹凸	人為	須恵器片 1(蓋)		302
267	C3d <sub>4</sub>	N-74°-W	楕 円 形	1.40×1.12	42	緩斜	皿状	人為			303
268	C3e <sub>4</sub>	N-69°-E	楕 円 形	1.22×0.94	52	外傾	皿状	人為		SD 8 内	302
269	C3e <sub>4</sub>	N-28°-E	楕 円 形	1.30×1.02	30	緩斜	平坦	人為		SD 8 内	302
270	C3a <sub>4</sub>	N-72°-W	不 整 方 形	1.44×1.20	75	緩斜	傾斜	人為 攪乱			305

土坑 番号	位 置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考	図版 番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
271	C3a <sub>4</sub>	N-19°-E	隅丸長方形	1.96×1.64	56	—	平坦	人為 攪乱			305
273	B3i <sub>3</sub>	N-76°-W	隅丸長方形	3.54×1.10	65	外傾	平坦	人為			303
274	B3i <sub>4</sub>	N-51°-W	不整楕円形	1.08×0.94	38	外傾	平坦	人為			303
275	B3h <sub>4</sub>	N-41°-W	楕 円 形	0.98×0.88	44	外傾	平坦	人為 攪乱	スラグ		303
279	B3i <sub>6</sub>	N-24°-E	楕 円 形	1.10×(0.86)	28	外傾	平坦	人為			303
280	B3j <sub>7</sub>	N-66°-W	不整長方形	3.32×1.20	28	外傾	平坦	人為			303
282	C3b <sub>9</sub>	N-49°-E	不整楕円形	1.64×1.28	36	外傾	平坦	人為			303
283	B3j <sub>8</sub>	N-54°-W	隅丸長方形	1.04×0.88	34	外傾	皿状	人為			303
284	B3j <sub>8</sub>	N-9°-E	楕 円 形	1.10×0.90	18	外傾	平坦	人為			303
285	C3a <sub>7</sub>	—	不 定 形	1.58×1.24	54	外傾	凹凸	人為	スラグ		304
286	C3a <sub>8</sub>	N-27°-E	楕 円 形	1.38×1.08	28	外傾	平坦	人為			303
291	B3j <sub>8</sub>	N-35°-E	楕 円 形	0.88×0.80	12	緩斜	傾斜	自然			303
292	C3b <sub>8</sub>	N-62°-W	隅丸長方形	1.64×0.98	44	段状	凹凸	自然			304
293	B3i <sub>7</sub>	N-22°-E	隅丸長方形	0.98×0.70	24	緩斜	傾斜	自然			303
294	B3i <sub>8</sub>	—	円 形	0.96×0.94	28	外傾	皿状	自然			303
295	B3i <sub>7</sub>	N-30°-E	隅丸長方形	2.28×2.02	64	垂直	平坦	人為			304
296	B3i <sub>7</sub>	N-61°-W	隅丸長方形	1.34×0.90	28	外傾	凹凸	人為			304
297	B3h <sub>7</sub>	N-15°-E	隅丸長方形	2.18×1.48	20	外傾	平坦	人為	須惠器片1(坏)		304
298	B3g <sub>7</sub>	—	不 整 円 形	1.56×1.46	14	緩斜	平坦	人為			304
299	C3b <sub>8</sub>	—	不 定 形	0.80×0.44	16	段状	平坦	人為			304
300	C3a <sub>8</sub>	N-78°-W	隅丸長方形	1.08×0.84	22	外傾	凹凸	人為			304
301	C3a <sub>8</sub>	N-61°-W	楕 円 形	0.92×0.58	16	外傾	平坦	人為			304
302	B3j <sub>5</sub>	N-51°-W	隅丸長方形	1.48×1.26	54	外傾	皿状	人為 攪乱			305
304	C3c <sub>8</sub>	N-20°-E	隅丸長方形	3.56×1.14	48	外傾	平坦	人為 攪乱			304
305	C3c <sub>8</sub>	N-76°-W	(隅丸長方形)	1.46×(0.82)	22	緩斜	平坦	人為 攪乱			304
306	C3a <sub>7</sub>	—	不 定 形	2.24×1.10	38	緩斜	平坦	人為 攪乱			304
308	B3e <sub>6</sub>	N-49°-E	隅丸長方形	4.26×2.30	40	外傾	平坦	人為	スラグ		305
309	B3c <sub>4</sub>	N-46°-W	隅丸長方形	1.76×1.24	74	垂直	平坦	人為			305
310	B3j <sub>5</sub>	N-57°-E	(隅丸長方形)	1.30×(0.86)	40	段状	凹凸	人為			305
311	C4g <sub>7</sub>	—	円 形	1.32×1.32	136	外傾	平坦	自然	スラグ		305

土坑 番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考	図版 番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
312	C4g <sub>6</sub>	N-44°-E	不整楕円形	1.16×0.60	36	外傾	皿状	人為			305
315	C3a <sub>4</sub>	N-63°-W	(隅丸長方形)	1.90×(1.50)	60	—	傾斜	人為 覆乱			305
316	C3a <sub>5</sub>	N-24°-E	隅丸長方形	2.52×1.06	54	外傾	傾斜	人為 覆乱			306
317	C3b <sub>4</sub>	N-78°-W	隅丸長方形	2.04×1.28	76	緩斜	平坦	人為			305
318	C3b <sub>4</sub>	N-65°-W	(隅丸長方形)	1.98×(1.12)	56	垂直	平坦	人為 覆乱			305
319	C3b <sub>4</sub>	N-81°-W	(隅丸長方形)	(1.94)×0.98	50	外傾	皿状	人為 覆乱			305
321	C3a <sub>4</sub>	N-69°-W	(隅丸長方形)	(2.14)×1.06	—	—	—	不明			305
323	C3f <sub>7</sub>	N-68°-W	楕 円 形	1.24×0.88	80	垂直	皿状	人為 覆乱		SD 5 内	306
324	B3i <sub>3</sub>	N-29°-W	隅丸長方形	3.40×0.96	84	段状	傾斜	人為 覆乱			303
326	C3d <sub>9</sub>	N-23°-W	不整楕円形	2.50×2.44	114	段状	皿状	人為		SD 5 内	306
332	B4d <sub>3</sub>	N-76°-W	楕 円 形	1.48×0.76	16	緩斜	平坦	自然			306
334	A3i <sub>5</sub>	—	不 定 形	2.60×2.10	98	外傾	平坦	自然		SI89内	307
335	A3j <sub>8</sub>	N-68°-E	隅丸長方形	4.40×1.86	76	垂直	平坦	人為		SF-1内	306
336	A3h <sub>8</sub>	N-76°-E	隅丸長方形	4.40×1.94	32	外傾	平坦	人為	スラグ	SF-1内	306
337	B4e <sub>0</sub>	—	円 形	1.18×1.06	35	外傾	平坦	人為			306
356	B3b <sub>8</sub>	N-23°-W	隅丸長方形	1.88×0.88	32	外傾	平坦	自然			307
357	B3b <sub>8</sub>	—	不 整 円 形	1.52×1.38	58	外傾	平坦	人為			306
358	B4c <sub>1</sub>	N-37°-W	(楕 円 形)	(2.36)×1.56	60	緩斜	傾斜	自然	土師質土器 1 (皿) 土師質土器片 1 (皿)		307
359	B4c <sub>1</sub>	N-18°-E	不整楕円形	1.02×0.80	64	外傾	皿状	人為		東側SK363 と重複	307
360	B3b <sub>0</sub>	N-23°-W	(不整楕円形)	1.08×0.74	42	緩斜	皿状	人為			307
361	B3b <sub>0</sub>	—	不 定 形	(1.94)×1.92	48	緩斜	平坦	人為			307
363	B4b <sub>1</sub>	—	(隅丸方形)	(1.28)×1.28	50	緩斜	平坦	人為		西側SK359 と重複	307
364	B3d <sub>9</sub>	N-22°-E	(楕 円 形)	1.34×(1.10)	28	緩斜	平坦	自然			306
365	B3e <sub>9</sub>	N-81°-E	楕 円 形	1.06×0.70	56	外傾	平坦	自然			307
367	A3i <sub>0</sub>	—	不 定 形	1.74×1.22	65	外傾	平坦	自然	須恵器片 1 (長頸壺) スラグ		307
368	A4i <sub>1</sub>	N-73°-E	隅丸長方形	2.90×0.90	48	外傾	凹凸	人為			307
369	A4j <sub>1</sub>	N-30°-W	楕 円 形	1.48×0.98	74	外傾	平坦	人為			307
371	A4j <sub>1</sub>	N-74°-W	楕 円 形	1.10×0.56	74	段状	平坦	人為			308
374	B3b <sub>9</sub>	N-28°-W	不整楕円形	1.22×0.86	48	外傾	凹凸	人為			308
375	B4a <sub>1</sub>	N-22°-E	方 形	1.28×1.26	74	外傾	平坦	人為			308

土坑 番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考	図版 番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
376	B3a <sub>0</sub>	N-65°-E	楕 円 形	1.50×0.90	35	緩斜	凹凸	人為			308
377	A4j <sub>2</sub>	N-54°-E	不整楕円形	2.44×2.08	24	緩斜	凹凸	自然			308
378	A4j <sub>3</sub>	N-63°-E	楕 円 形	0.96×0.74	36	段状	平坦	人為	土師質土器1(皿)		308
379	B4a <sub>3</sub>	——	不 定 形	0.78×0.72	30	外傾	傾斜	人為			308
380	A4j <sub>4</sub>	N-8°-E	楕 円 形	0.92×0.74	34	外傾	平坦	自然			308
382	B3c <sub>8</sub>	N-33°-W	(隅丸長方形)	(1.18)×0.98	36	外傾	平坦	自然		北西側SK 385と重複	309
384	B3c <sub>7</sub>	N-48°-W	(楕 円 形)	0.84×(0.44)	10	外傾	平坦	自然			309
385	B3c <sub>7</sub>	N-31°-W	隅丸長方形	2.24×1.04	28	緩斜	凹凸	人為		南側SK382 と重複	309
386	B3c <sub>8</sub>	——	不 定 形	0.98×0.98	44	外傾	皿状	人為			308
387	B3d <sub>8</sub>	——	不 定 形	(2.74)×0.80	50	外傾	凹凸	自然		SK390 と重複	309
389	B3c <sub>7</sub>	N-46°-W	隅丸長方形	2.42×1.12	28	緩斜	平坦	自然			308
390	B3d <sub>8</sub>	N-26°-W	隅丸長方形	1.54×0.88	40	外傾	平坦	人為		SK387 と重複	309
391	B4a <sub>1</sub>	N-17°-E	楕 円 形	0.86×0.68	16	緩斜	平坦	人為			308
392	A4j <sub>7</sub>	N-8°-W	楕 円 形	2.48×1.20	64	段状	皿状	人為			308
393	B3d <sub>0</sub>	N-76°-E	不整楕円形	1.32×0.88	34	緩斜	凹凸	人為			309
394	B4d <sub>1</sub>	——	不 定 形	1.42×1.36	64	外傾	平坦	人為			309
395	B4c <sub>1</sub>	N-16°-E	楕 円 形	0.88×0.70	28	緩斜	凹凸	人為			309
396	B3d <sub>0</sub>	N-31°-W	隅 丸 方 形	0.76×0.68	10	緩斜	平坦	自然			309
397	B4e <sub>1</sub>	N-22°-E	隅丸長方形	1.26×0.60	15	緩斜	皿状	人為			309
398	B4f <sub>1</sub>	N-25°-E	隅丸長方形	1.26×0.80	16	緩斜	平坦	人為			309
399	B4e <sub>3</sub>	N-59°-W	不整楕円形	1.32×0.86	24	外傾	平坦	自然			309
400	B4e <sub>3</sub>	N-25°-E	楕 円 形	1.66×1.10	16	緩斜	平坦	自然			309
401	B3c <sub>0</sub>	N-86°-W	楕 円 形	1.16×0.88	20	緩斜	皿状	人為			309
402	B4c <sub>4</sub>	N-30°-E	楕 円 形	1.26×1.00	24	緩斜	皿状	人為			310
403	A4j <sub>4</sub>	N-83°-W	楕 円 形	0.92×0.72	16	緩斜	凹凸	人為			310
405	B4a <sub>8</sub>	N-72°-W	不整楕円形	1.34×0.94	30	緩斜	平坦	人為 攪乱			310
406	B3d <sub>0</sub>	N-23°-E	隅丸長方形	1.98×1.30	6	緩斜	平坦	自然	土師質土器片1(皿)		310
407	A4j <sub>8</sub>	N-6°-E	楕 円 形	2.00×0.88	28	緩斜	傾斜	自然			310
408	B3d <sub>8</sub>	N-35°-W	隅丸長方形	1.40×0.96	20	外傾	平坦	人為			310
409	B3a <sub>0</sub>	——	不 定 形	0.98×0.94	28	緩斜	皿状	人為			310



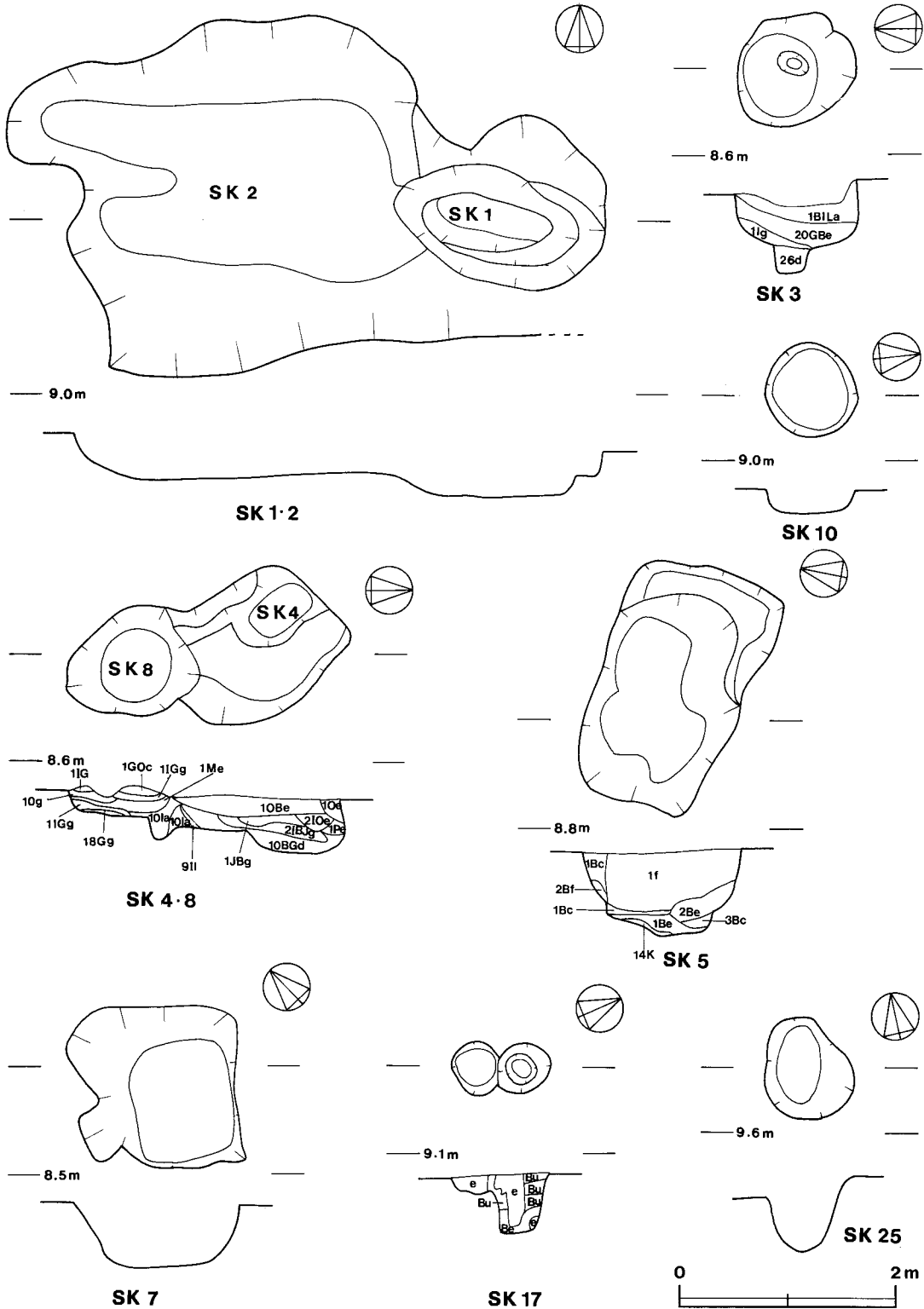
土坑 番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考	図版 番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
411	B3d <sub>0</sub>	N-29°-E	隅丸長方形	1.78×1.06	16	緩斜	平坦	自然			310
412	A4j <sub>1</sub>	——	不 定 形	1.10×1.00	16	外傾	平坦	人為		SI96内	308
417	A4h <sub>3</sub>	N-81°-E	隅丸長方形	1.82×0.84	39	外傾	平坦	自然			310
418	A4h <sub>5</sub>	N-0°	(長 方 形)	1.04×0.76	35	外傾	平坦	自然			310
419	A4h <sub>5</sub>	N-80°-W	隅丸方形	1.48×1.38	46	外傾	平坦	自然			310
420	A4g <sub>6</sub>	N-74°-E	隅丸方形	1.44×1.36	29	外傾	平坦	自然 模乱	土師質土器1(皿) 古銭「元祐通寶」「元豊通寶」		310
421	A4h <sub>6</sub>	N-0°	隅丸長方形	1.12×0.64	18	緩斜	平坦	自然			310
422	A4h <sub>5</sub>	N-70°-E	(隅丸長方形)	(0.88)×0.50	20	垂直	平坦	人為			311
423	A4h <sub>5</sub>	N-24°-W	(隅丸長方形)	1.14×(0.60)	16	緩斜	平坦	人為			311
424	A4h <sub>5</sub>	N-77°-E	隅丸長方形	1.20×0.52	28	外傾	平坦	人為			311
425	A4i <sub>3</sub>	N-23°-E	楕 円 形	1.20×0.88	42	外傾	平坦	自然	土師質土器5(皿)		311
427	A4i <sub>4</sub>	——	不 定 形	(2.48)×1.02	16	段状	凹凸	人為			311
428	A4i <sub>4</sub>	——	(円 形)	0.68×(0.58)	48	外傾	皿状	人為			311
438	A4i <sub>1</sub>	N-5°-W	隅丸長方形	1.46×1.06	44	外傾	平坦	自然		SI96内	311
441	A4f <sub>3</sub>	——	円 形	1.00×0.96	24	緩斜	皿状	自然			311
442	A4h <sub>6</sub>	N-88°-W	隅丸長方形	1.44×0.88	40	外傾	凹凸	自然		SI10内	311
443	A4h <sub>6</sub>	N-87°-W	(長 方 形)	(2.06)×0.42	16	外傾	平坦	人為		SI10内	311
444	A4h <sub>6</sub>	N-57°-E	楕 円 形	1.44×(0.64)	30	緩斜	皿状	人為			311
453	A4i <sub>6</sub>	N-67°-E	楕 円 形	1.14×1.00	48	緩斜	皿状	人為		SI100内	311
454	A4i <sub>7</sub>	N-8°-W	隅丸長方形	2.24×1.08	25	緩斜	皿状	人為			311
455	A4i <sub>6</sub>	N-9°-W	長 方 形	1.26×0.96	32	緩斜	皿状	人為			311
457	D4a <sub>6</sub>	——	不 定 形	1.28×1.26	28	緩斜	凹凸	人為		SI39の 掘り方内	312
479	A3i <sub>0</sub>	N-20°-W	隅丸長方形	1.40×0.84	42	外傾	皿状	人為			312
480	A3i <sub>9</sub>	——	円 形	0.54×0.52	48	緩斜	皿状	人為			312
509	A5c <sub>3</sub>	N-13°-E	楕 円 形	1.44×0.62	18	緩斜	平坦	人為			312
529	A4g <sub>9</sub>	N-0°	隅丸長方形	1.16×0.78	15	緩斜	平坦	人為			312
532	A3g <sub>9</sub>	——	円 形	0.76×0.76	20	緩斜	平坦	人為			312
533	A4j <sub>5</sub>	N-86°-W	隅丸長方形	2.34×1.38	20	緩斜	平坦	自然			312
535	A4j <sub>5</sub>	N-87°-W	楕 円 形	1.00×0.86	25	緩斜	皿状	人為			312
536	A4j <sub>6</sub>	N-6°-E	隅丸長方形	1.20×0.48	30	外傾	皿状	自然			312

土坑 番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考	図版 番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
545	A4j <sub>6</sub>	N-6°-E	(隅丸長方形)	1.36×1.00	42	外傾	平坦	自然			313
546	A4j <sub>6</sub>	N-17°-E	(隅丸長方形)	(2.12)×1.08	—	—	—	不明			313
547	A4j <sub>6</sub>	N-1°-W	(隅丸長方形)	(2.40)×0.76	35	緩斜	平坦	自然			313
548	A4i <sub>6</sub>	N-16°-E	(隅丸長方形)	(1.30)×0.66	30	外傾	平坦	自然			313
549	A4i <sub>6</sub>	N-85°-E	(隅丸長方形)	(1.38)×0.92	25	緩斜	平坦	人為			313
551	A4i <sub>5</sub>	N-5°-W	隅丸長方形	(2.52)×0.92	16	緩斜	平坦	人為			312
552	A4i <sub>5</sub>	N-7°-W	(隅丸長方形)	(1.74)×0.86	16	外傾	平坦	人為			312
553	A4i <sub>5</sub>	N-58°-W	楕 円 形	0.90×0.44	14	外傾	平坦	人為			312
554	A4i <sub>5</sub>	N-7°-W	楕 円 形	0.92×0.84	14	緩斜	平坦	人為			312
558	A4h <sub>0</sub>	—	不 定 形	1.50×(1.20)	39	緩斜	凹凸	人為			312
559	A4h <sub>0</sub>	—	円 形	0.72×0.66	32	緩斜	皿状	人為			313
563	A4i <sub>5</sub>	—	(不整円形)	(1.08)×1.06	38	垂直	平坦	人為			312
565	A4j <sub>6</sub>	N-0°	(隅丸長方形)	(1.10)×0.78	14	緩斜	平坦	人為			313
567	A4j <sub>6</sub>	N-20°-E	不整楕円形	0.82×(0.50)	34	外傾	平坦	人為			313
568	A4i <sub>6</sub>	N-1°-E	隅丸長方形	(2.70)×2.18	20	緩斜	平坦	人為			313
573	A4i <sub>6</sub>	N-38°-E	隅丸長方形	1.68×0.80	32	外傾	平坦	人為			313
575	A5d <sub>2</sub>	N-87°-W	隅丸長方形	(2.00)×1.54	20	外傾	平坦	人為			313
576	A5d <sub>2</sub>	—	不 定 形	1.58×1.30	54	外傾	平坦	人為			313
578	A4d <sub>0</sub>	N-87°-W	(隅丸長方形)	2.20×(1.44)	20	外傾	平坦	人為			313
579	A5e <sub>3</sub>	N-51°-E	隅丸長方形	0.96×0.72	24	緩斜	皿状	人為			314
580	A5e <sub>2</sub>	N-11°-W	楕 円 形	0.90×0.66	20	緩斜	平坦	人為			314
581	A5e <sub>2</sub>	N-2°-E	隅丸長方形	1.48×1.08	18	緩斜	凹凸	人為			314
582	A5i <sub>1</sub>	N-83°-E	隅丸長方形	1.24×0.86	14	緩斜	平坦	自然			314
583	A5i <sub>2</sub>	N-82°-W	隅丸長方形	1.48×0.74	34	緩斜	平坦	自然			314
584	A5i <sub>1</sub>	N-0°	隅丸長方形	1.40×0.78	20	緩斜	平坦	自然			314
585	A5i <sub>1</sub>	N-87°-W	隅丸長方形	3.58×1.44	35	緩斜	凹凸	自然 覆乱			314
586	A5h <sub>1</sub>	—	不 定 形	2.10×0.98	25	緩斜	傾斜	人為		SI1内	314
587	A5h <sub>2</sub>	N-42°-E	不整楕円形	1.48×1.18	10	緩斜	平坦	人為		SI1内	314
588	A5h <sub>2</sub>	N-48°-W	不整楕円形	0.92×0.70	28	緩斜	平坦	人為		SI1内	314
589	A5h <sub>2</sub>	—	不 定 形	1.58×(0.78)	25	緩斜	平坦	人為		SI1内	314

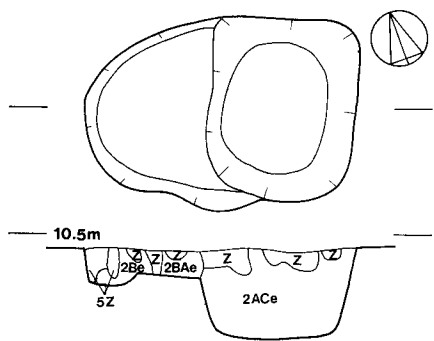
土坑 番号	位 置	長径方向	平面形	規 模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備 考	図版 番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
590	A5h <sub>2</sub>	N-35°-W	隅丸長方形	(1.58)×0.82	24	外傾	平坦	人為		SI1内	314
591	A5c <sub>3</sub>	N-1°-E	楕円形	2.26×1.32	24	緩斜	皿状	自然			314
592	A5e <sub>3</sub>	——	不定形	0.70×0.64	—	——	——	不明			314
593	A5e <sub>3</sub>	——	不定形	1.24×0.82	20	緩斜	皿状	人為			314
594	A5h <sub>2</sub>	N-86°-W	楕円形	1.30×1.14	16	外傾	凹凸	人為		SI1内	315
598	A5d <sub>3</sub>	N-85°-W	隅丸長方形	0.82×0.46	16	緩斜	平坦	人為			315
599	A5d <sub>3</sub>	N-81°-W	隅丸長方形	1.04×0.46	14	緩斜	凹凸	人為			315
642	D2h <sub>9</sub>	——	不定形	(2.30)×1.52	22	緩斜	平坦	自然			315
643	D2h <sub>9</sub>	——	不定形	1.00×0.82	34	緩斜	凹凸	自然			315
645	D2h <sub>9</sub>	——	不定形	1.48×1.10	36	緩斜	凹凸	自然			315
646	D2i <sub>9</sub>	N-9°-E	長方形	1.30×0.96	25	緩斜	平坦	自然			315
647	D2j <sub>9</sub>	N-20°-E	不整隅丸 長方形	2.72×1.38	60	外傾	平坦	自然			315
648	D2i <sub>0</sub>	N-13°-E	隅丸長方形	1.88×1.24	60	外傾	平坦	人為			315
649	D2h <sub>0</sub>	N-20°-W	(隅丸長方形)	(1.90)×1.28	35	緩斜	平坦	自然			315
653	D3h <sub>1</sub>	N-65°-W	(隅丸長方形)	2.68×1.32	48	外傾	平坦	自然			315
654	D3h <sub>1</sub>	N-24°-E	(隅丸長方形)	1.50×0.96	38	緩斜	平坦	人為			316
656	D2i <sub>0</sub>	——	不定形	1.28×1.24	24	緩斜	傾斜	人為			316
661	D3i <sub>4</sub>	N-28°-E	隅丸長方形	1.30×0.90	38	外傾	平坦	人為	古銭 解読不明	古銭 かたまり	316
662	D3h <sub>4</sub>	N-23°-E	隅丸長方形	1.44×1.06	54	外傾	平坦	人為			316
663	D3h <sub>4</sub>	——	不定形	1.20×1.02	35	外傾	平坦	人為 視乱			316
664	D3h <sub>3</sub>	——	不定形	1.20×0.72	29	緩斜	凹凸	人為			316
667	E3a <sub>2</sub>	——	不定形	3.62×2.22	48	緩斜	平坦	人為			316
669	D3i <sub>1</sub>	N-17°-E	方 形	1.54×1.52	28	緩斜	平坦	人為			316
670	D3i <sub>1</sub>	N-84°-W	隅丸長方形	1.82×1.10	6	外傾	平坦	人為			316
671	D2j <sub>9</sub>	N-56°-W	楕円形	0.96×0.82	30	外傾	平坦	人為			317
672	D2i <sub>0</sub>	N-30°-E	隅丸長方形	0.86×0.70	18	外傾	平坦	人為			316
677	D3h <sub>1</sub>	N-76°-W	隅丸長方形	1.46×1.10	40	外傾	平坦	自然			317
678	D3h <sub>1</sub>	N-69°-W	隅丸長方形	2.70×1.22	30	外傾	平坦	自然			317
679	D3h <sub>1</sub>	N-23°-E	隅丸長方形	1.30×0.80	37	外傾	平坦	自然			317
681	D3g <sub>2</sub>	N-31°-E	隅丸長方形	1.42×(1.10)	26	外傾	平坦	人為			317

土坑 番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考	図版 番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
684	D3g <sub>5</sub>	——	不 定 形	(1.90)×——	100	外傾	平坦	人為			317
686	D3g <sub>2</sub>	——	不 定 形	1.54×(0.19)	100	外傾	平坦	人為			317
694	D3g <sub>2</sub>	N-24°-E	隅丸長方形	(1.44)×1.04	25	外傾	平坦	人為		SK719・68	317
698	D2i <sub>6</sub>	——	不 定 形	(1.20)×0.90	46	緩斜	凹凸	人為			317
699	D2i <sub>6</sub>	N-58°-E	(楕 円 形)	1.20×(0.84)	46	緩斜	皿状	人為			317
702	D2i <sub>5</sub>	N-31°-E	不整楕円形	1.38×1.24	36	緩斜	皿状	人為			317
715	D2j <sub>6</sub>	N-79°-W	不整長方形	0.90×0.76	25	外傾	凹凸	人為			317
719	D3g <sub>2</sub>	——	円 形	0.76×0.66	58	緩斜	凹凸	人為			317
744	D4d <sub>5</sub>	N-26°-E	(隅 丸 方 形)	(2.30)×2.30	50	外傾	平坦	人為			318
746	D4e <sub>5</sub>	——	不 定 形	2.30×1.20	45	段状	平坦	自然			318
747	E4c <sub>2</sub>	——	不 定 形	1.30×1.00	40	垂直	平坦	人為			317
748	E4c <sub>2</sub>	——	不 定 形	1.28×1.08	70	垂直	平坦	人為			318
749	E4c <sub>2</sub>	N-88°-W	隅 丸 方 形	0.88×0.86	48	外傾	平坦	自然			318
750	D3h <sub>8</sub>	N-62°-W	方 形	0.84×0.84	43	外傾	平坦	自然		SF2内	318
753	D3j <sub>8</sub>	N-87°-E	(方 形)	(0.94)×0.88	60	外傾	皿状	人為			318
754	D3j <sub>8</sub>	N-83°-W	(方 形)	0.90×0.90	30	外傾	皿状	人為			318
755	D3j <sub>8</sub>	N-78°-W	不整楕円形	1.40×0.86	48	外傾	平坦	自然			318
756	E4b <sub>6</sub>	N-38°-E	不整楕円形	1.40×1.24	28	緩斜	平坦	自然			318
757	D4j <sub>3</sub>	N-8°-W	隅丸長方形	1.16×0.90	38	外傾	平坦	人為	古銭「永楽通寶」他1点 人骨		318
758	D3h <sub>8</sub>	N-77°-W	方 形	0.92×0.84	47	外傾	平坦	人為		SF2内	318
759	D2j <sub>0</sub>	——	不 定 形	0.98×0.94	30	段状	凹凸	自然			318
765	D3j <sub>1</sub>	N-18°-E	楕 円 形	1.04×0.74	28	緩斜	平坦	自然			318
770	D3j <sub>1</sub>	N-26°-E	隅丸長方形	1.08×0.88	26	外傾	平坦	人為			319
771	D3j <sub>2</sub>	N-37°-E	隅丸長方形	1.64×1.02	34	垂直	平坦	人為			319
782	D3h <sub>4</sub>	N-12°-W	長 方 形	1.38×1.20	30	外傾	平坦	人為			319
788	D3j <sub>2</sub>	N-64°-W	隅丸長方形	1.66×1.08	38	外傾	平坦	人為			319
789	D3j <sub>2</sub>	N-27°-E	隅丸長方形	(1.00)×0.80	34	緩斜	平坦	人為			319
790	E3a <sub>2</sub>	N-47°-W	隅丸長方形	1.98×1.38	50	外傾	平坦	人為			319
791	D3j <sub>2</sub>	N-13°-E	楕 円 形	0.74×0.58	14	垂直	平坦	人為			319
808	J2c <sub>4</sub>	N-67°-W	隅丸長方形	2.72×0.88	46	外傾	平坦	自然			319

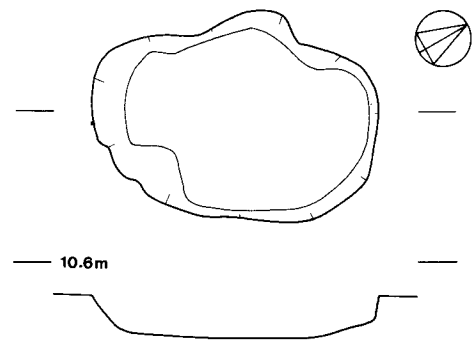
土坑 番号	位 置	長径方向	平 面 形	規 模		壁面	底面	覆土	出 土 遺 物	備 考	図版 番号
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
809	J2d <sub>4</sub>	——	不 定 形	2.84×1.24	46	段状	平坦	人為			319
810	J2d <sub>5</sub>	——	円 形	1.10×1.04	28	緩斜	皿状	人為		SI12内	320
811	J2d <sub>5</sub>	N-34°-W	楕 円 形	1.24×1.02	70	垂直	傾斜	人為		SI12内	320
812	J2e <sub>5</sub>	——	不 定 形	2.54×1.42	68	段状	凹凸	人為		SI12内	320
814	H2c <sub>9</sub>	N-40°-E	楕 円 形	1.60×(0.90)	100	外傾	平坦	人為		第39号地下 式坑内	336
816	H3f <sub>1</sub>	N-57°-W	楕 円 形	0.80×0.66	44	外傾	平坦	人為		SI139内	319
819	G2j <sub>5</sub>	N-46°-W	隅 丸 方 形	1.10×1.02	44	外傾	平坦	自然		SI130内	319
820	G3a <sub>4</sub>	N-33°-W	長 方 形	1.00×0.62	20	外傾	傾斜	自然		SI130内	319
825	H3d <sub>4</sub>	N-20°-E	隅丸長方形	1.58×1.06	28	外傾	平坦	自然			320
828	F3i <sub>8</sub>	——	不 定 形	1.22×0.94	24	緩斜	平坦	人為		SI116内	320
829	F3i <sub>8</sub>	——	不 定 形	(2.18)×1.02	18	緩斜	傾斜	人為		SI116内	320
830	G2h <sub>9</sub>	N-24°-E	方 形	0.92×0.82	28	外傾	平坦	人為		SI143内	320
834	H3c <sub>2</sub>	——	不 定 形	2.24×1.72	50	段状	傾斜	人為			320
835	H2d <sub>0</sub>	——	円 形	1.14×1.10	81	段状	皿状	人為			320
836	H2d <sub>0</sub>	N-13°-E	楕 円 形	1.04×0.74	28	外傾	平坦	人為			320
847	H2e <sub>8</sub>	——	不 定 形	4.52×1.20	52	外傾	皿状	自然			321
857	H3i <sub>1</sub>	——	円 形	1.14×1.04	164	垂直	平坦	自然			321
858	G3b <sub>1</sub>	N-66°-E	隅丸長方形	1.68×0.68	44	緩斜	平坦	自然		SI123内	320
859	I1b <sub>0</sub>	——	不 定 形	1.10×0.94	60	外傾	平坦	人為		SI145内	321
860	I1b <sub>0</sub>	——	不 定 形	1.52×0.90	50	垂直	平坦	人為		SI145内	321
861	I1b <sub>9</sub>	——	円 形	0.96×0.82	36	外傾	平坦	人為		SI145内	320



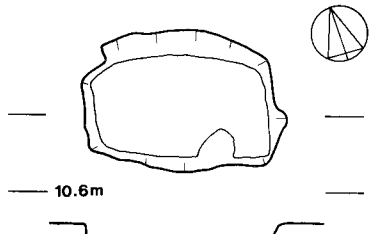
SK 7  
第291图 土坑实测图 (1)



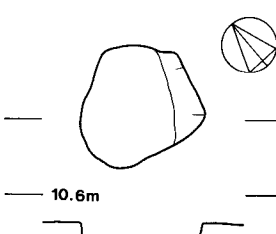
SK 31



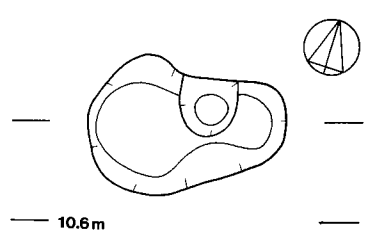
SK 32



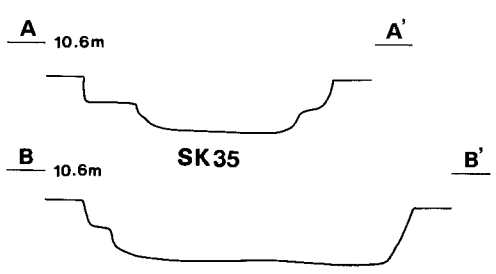
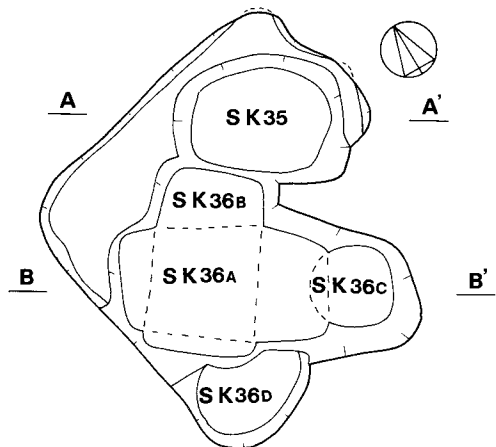
SK 33



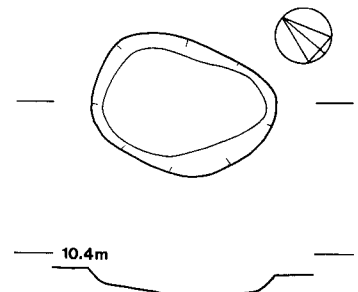
SK 34



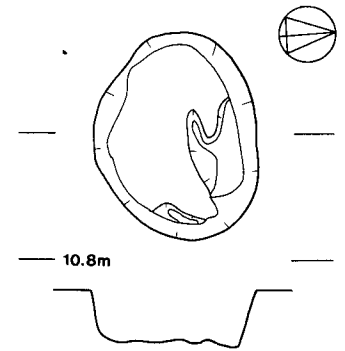
SK 37



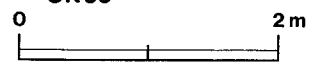
SK 36A·36B·36C·36D



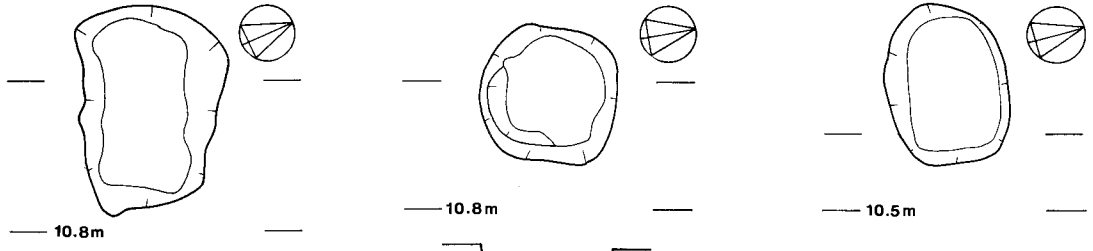
SK 38



SK 39



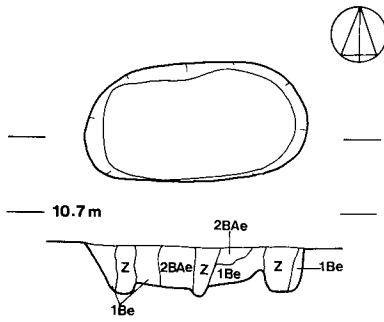
第292图 土坑实测图(2)



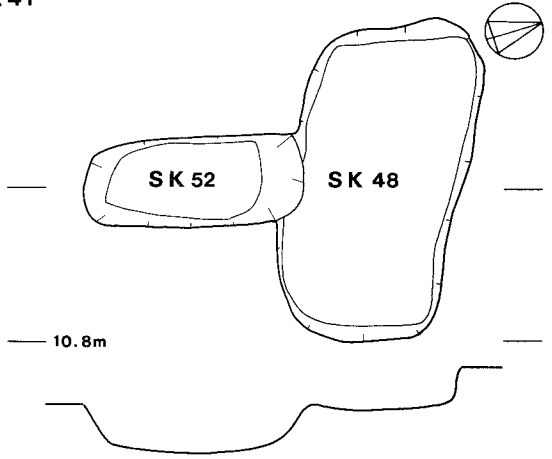
SK 40

SK 41

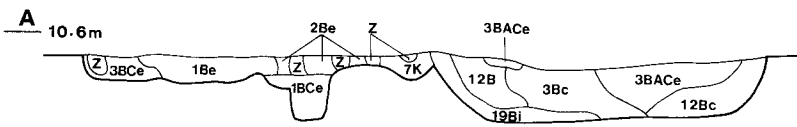
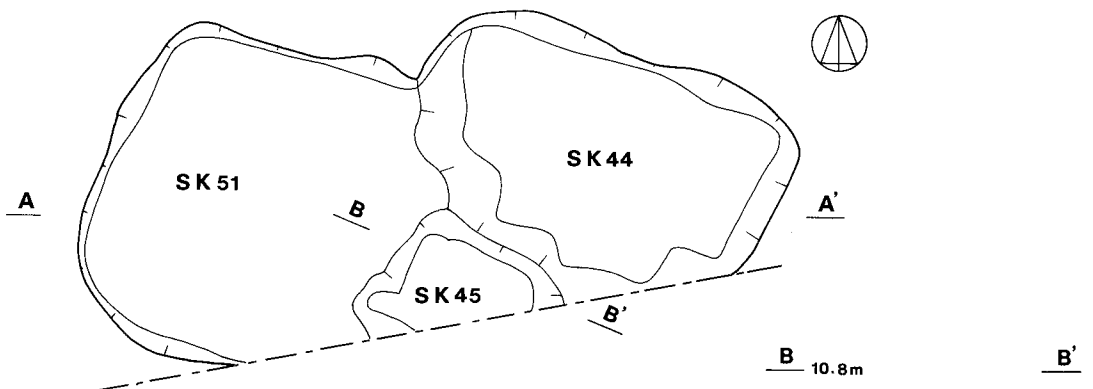
SK 42



SK 43



SK48 · 52



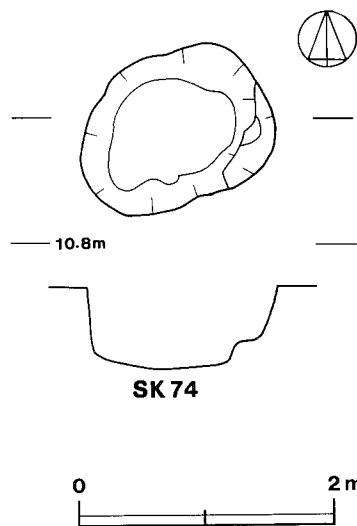
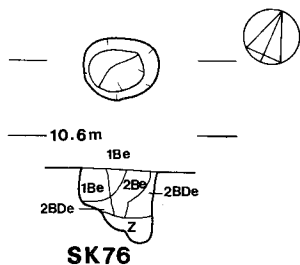
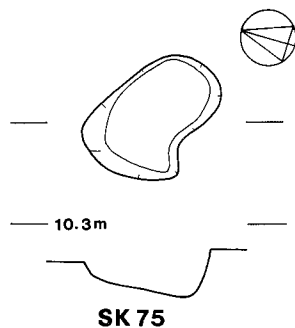
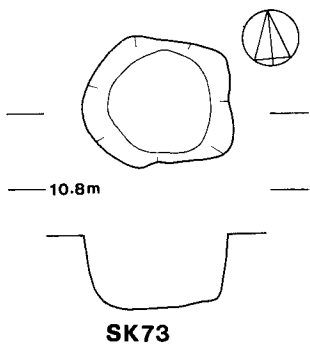
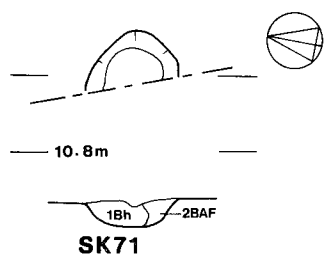
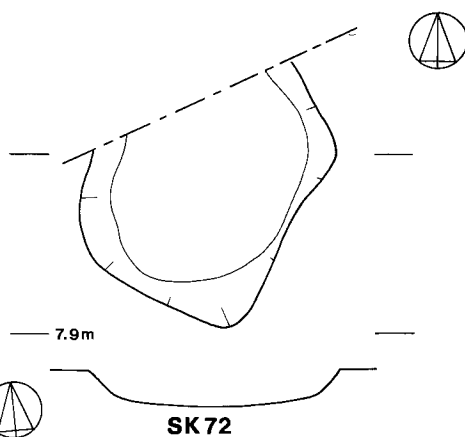
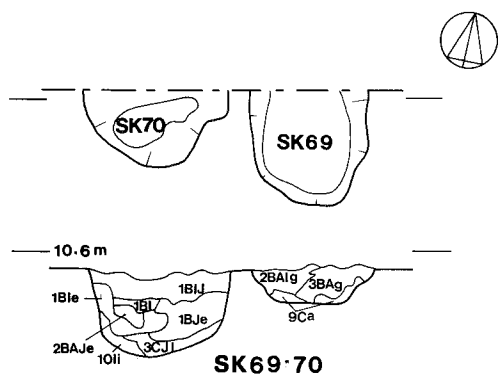
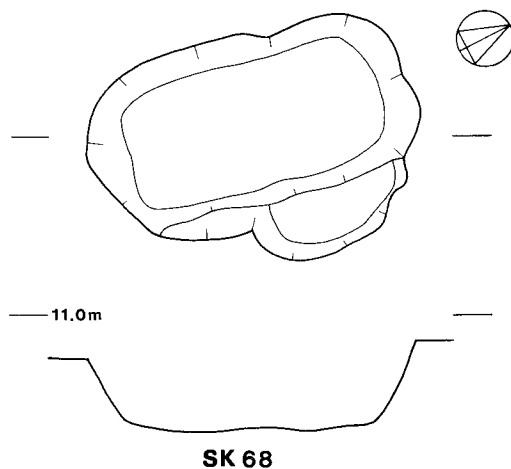
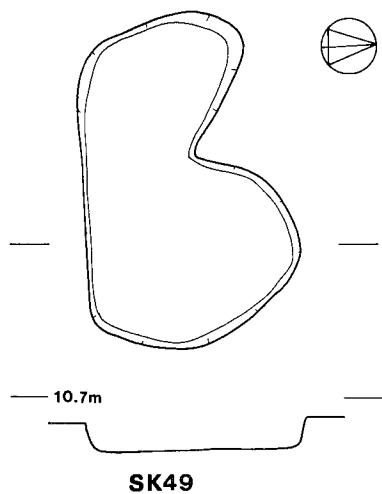
SK44 · 45 · 51



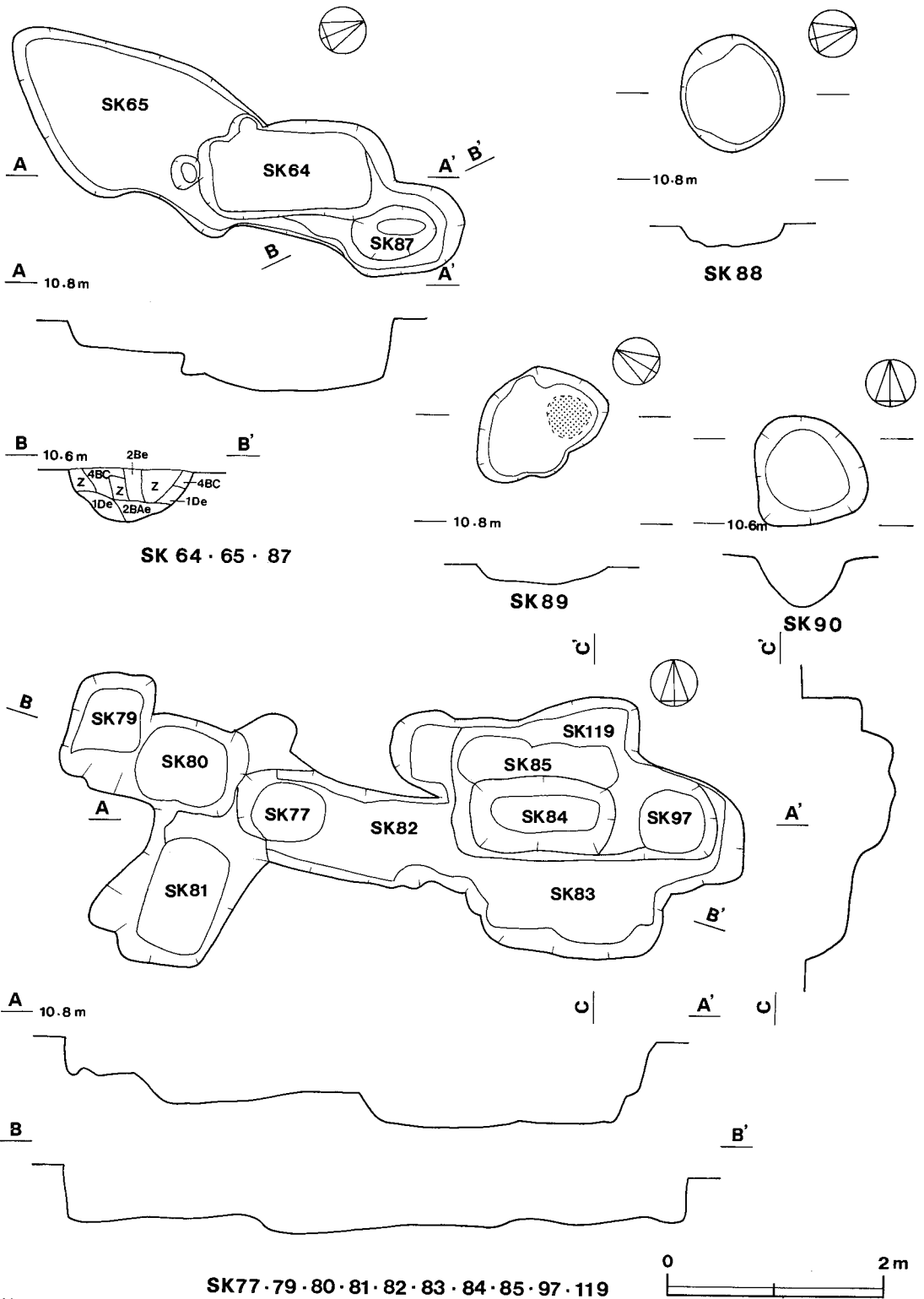
第293図 土坑実測図 (3)



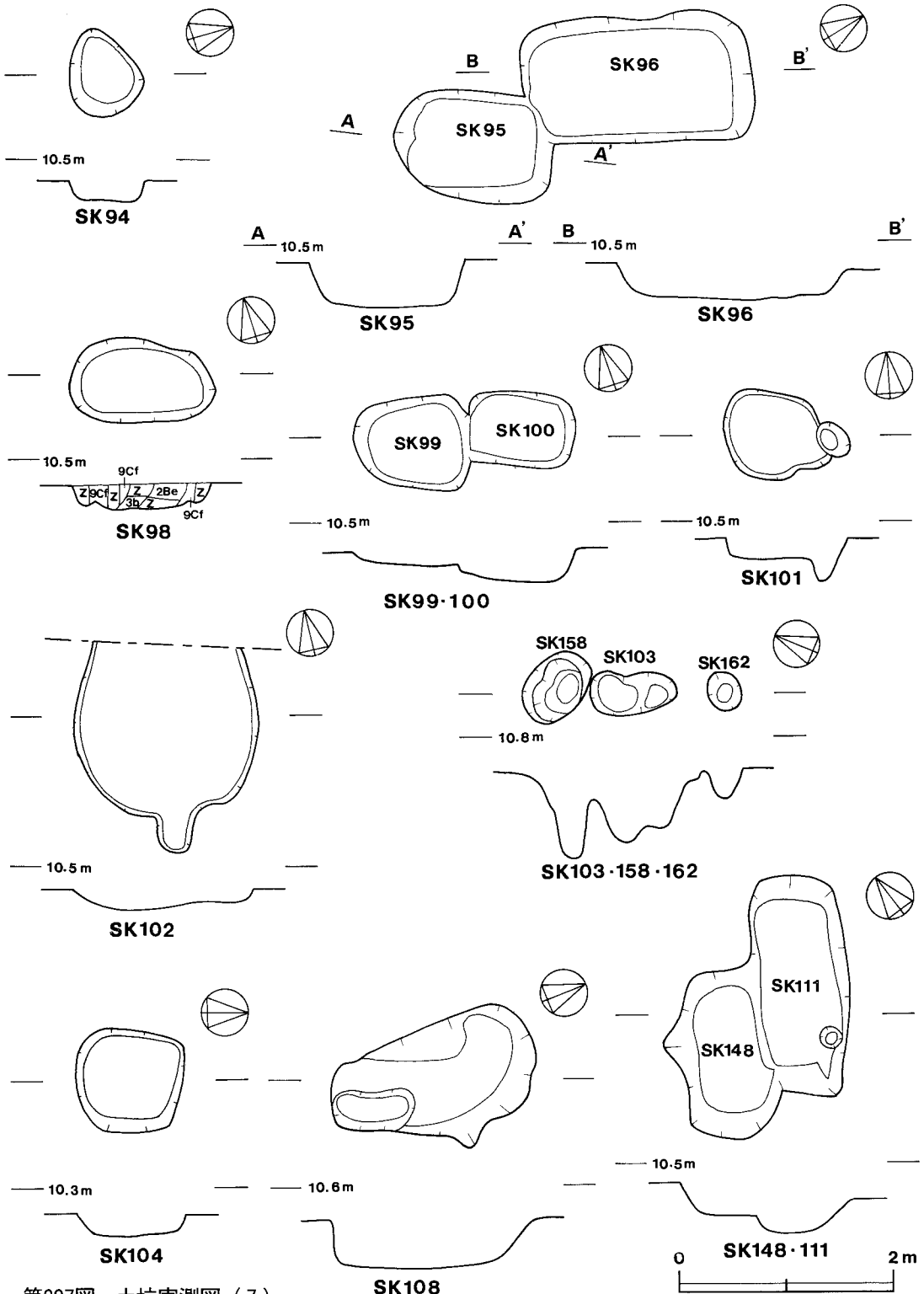




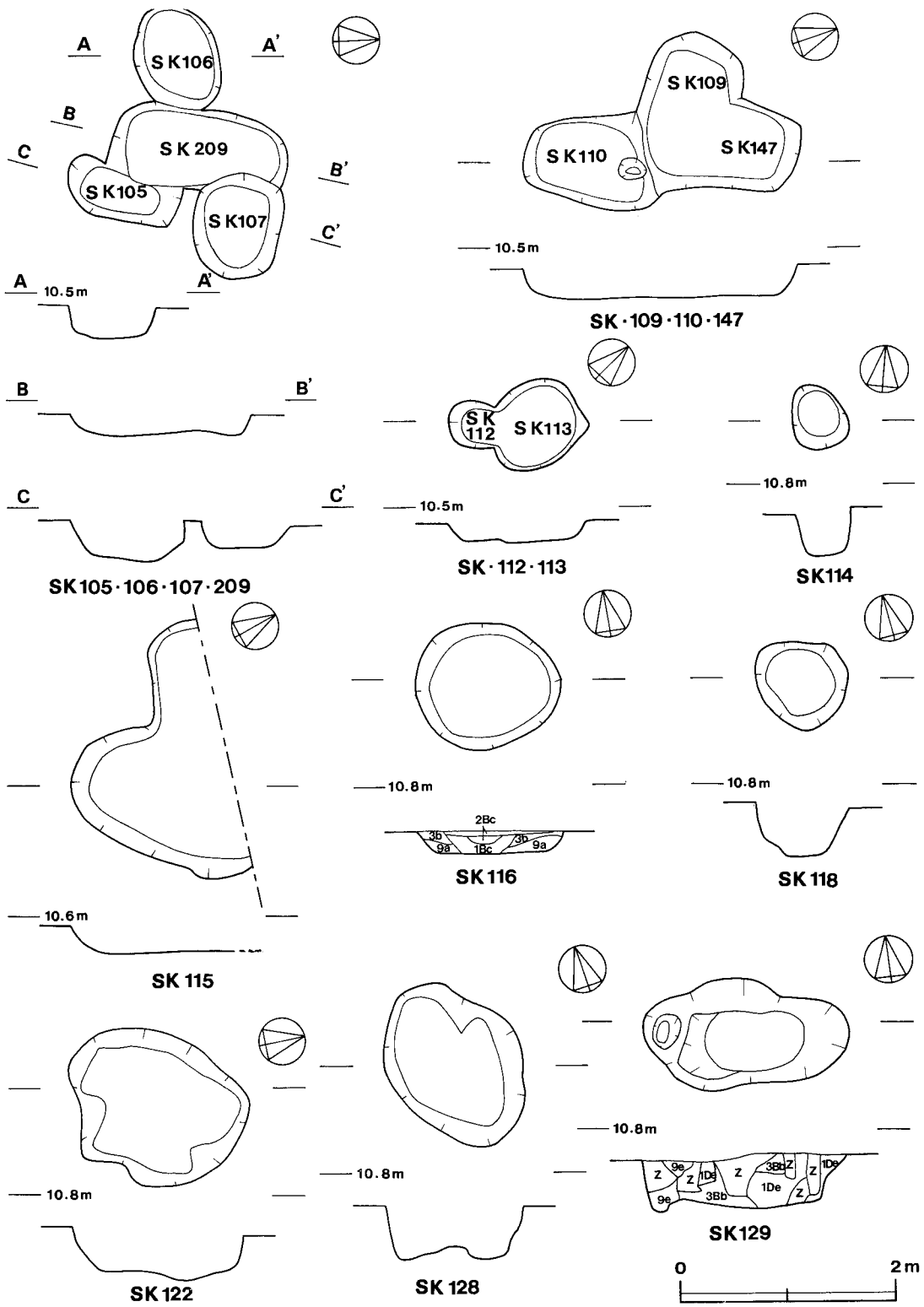
第295図 土坑実測図 (5)



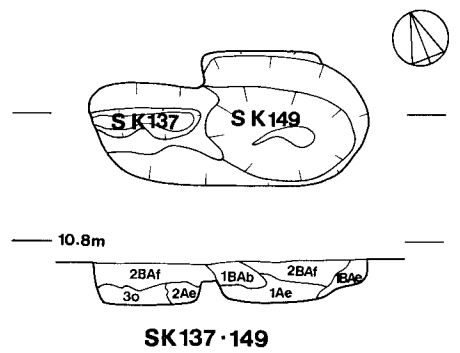
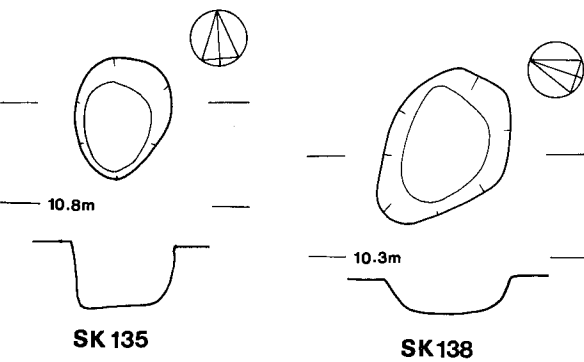
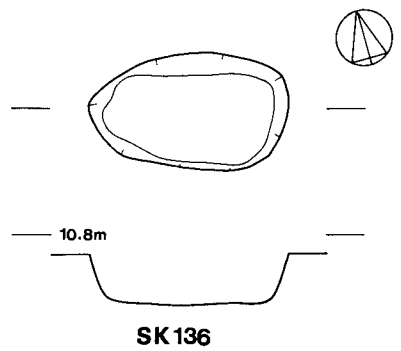
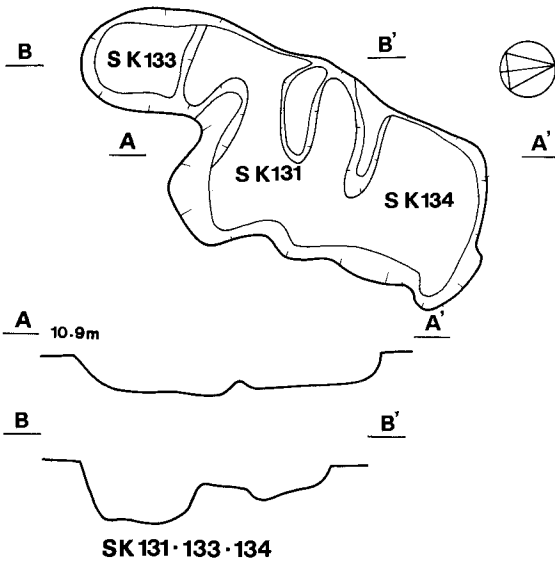
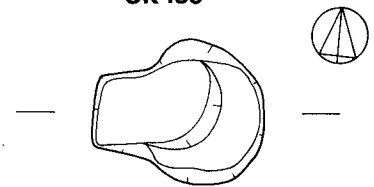
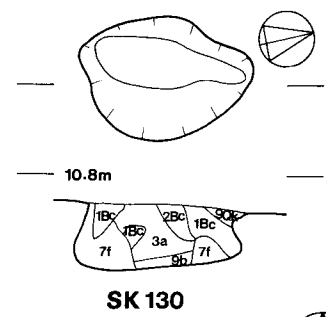
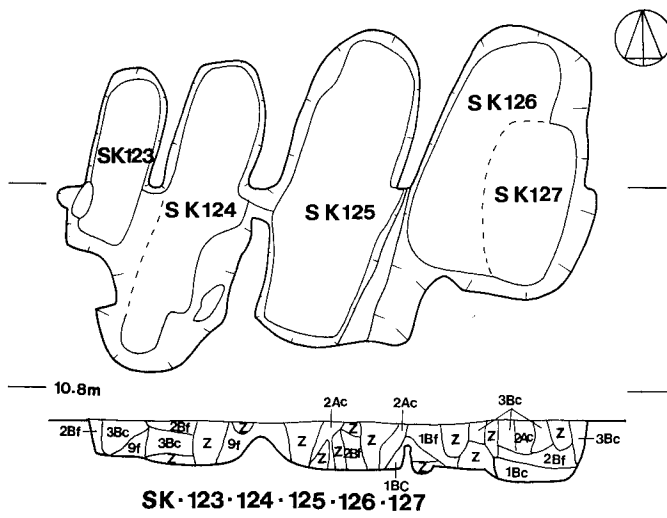
第296图 土坑实测图 (6)



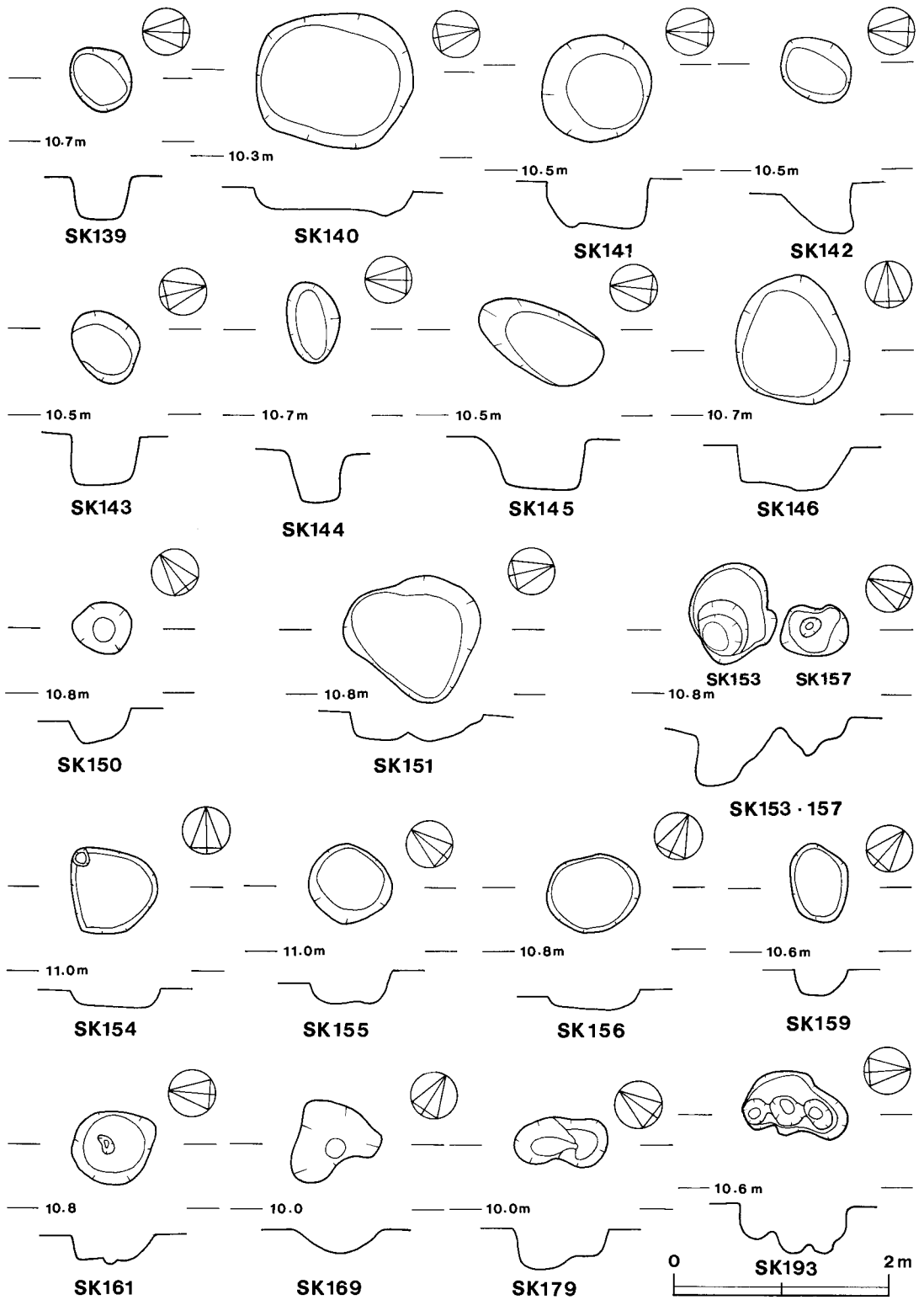
第297图 土坑实测图(7)



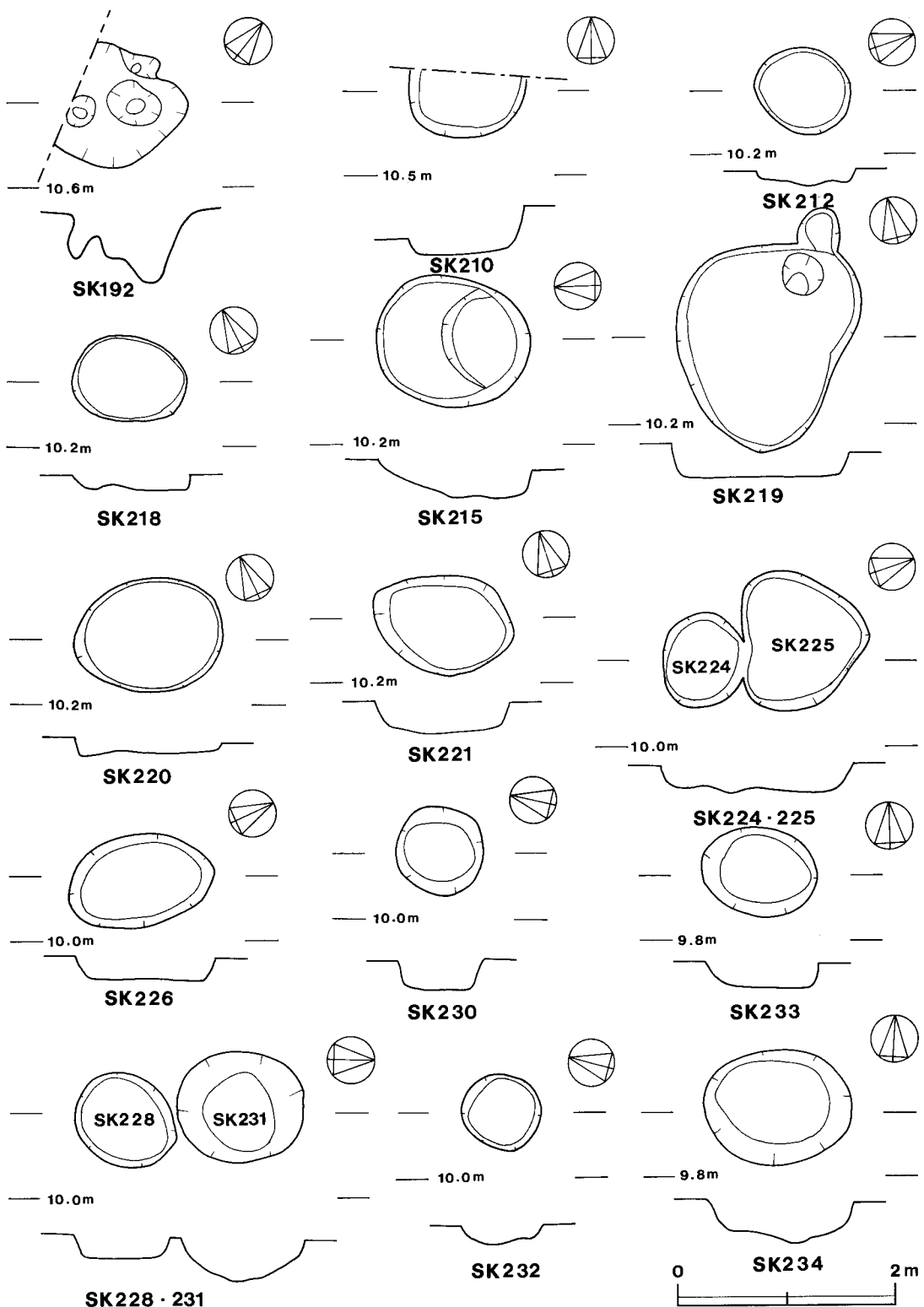
第298图 土坑实测图 (8)



第299图 土坑实测图(9)

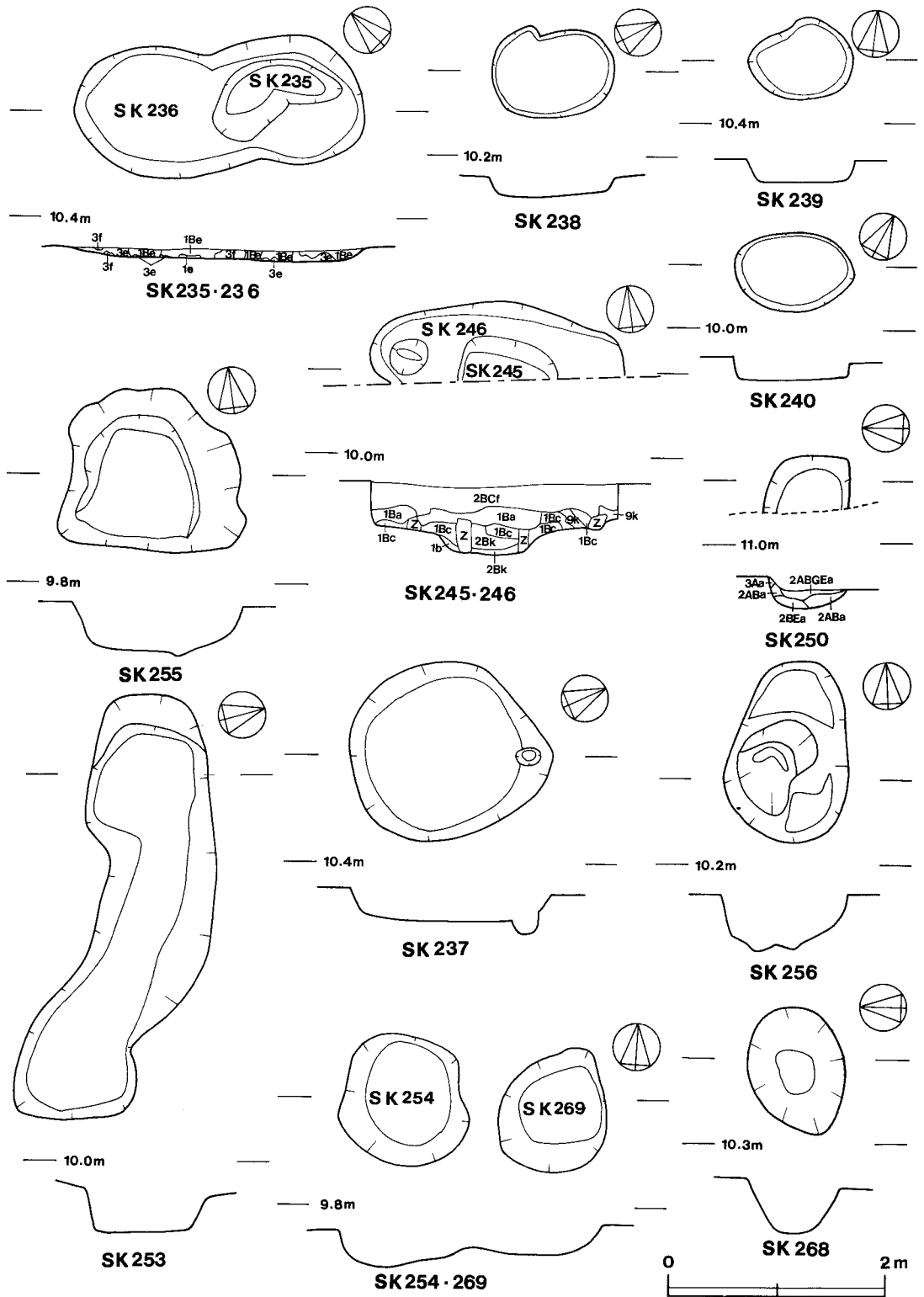


第300图 土坑实测图 (10)

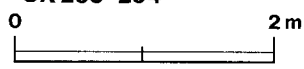
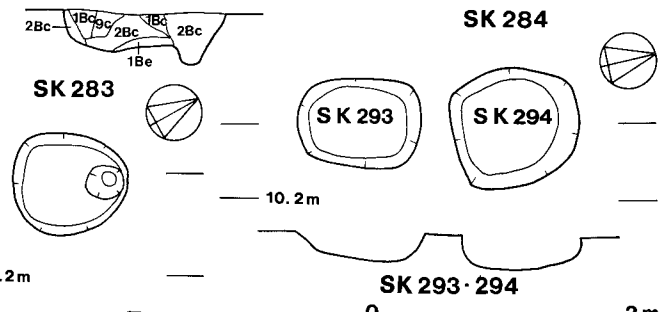
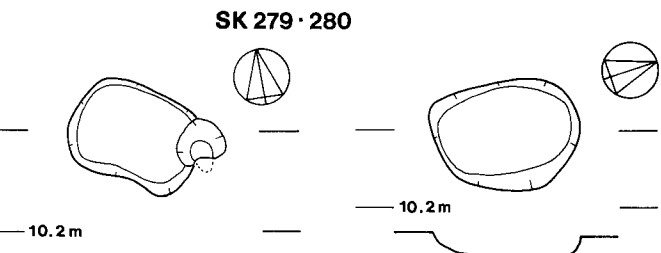
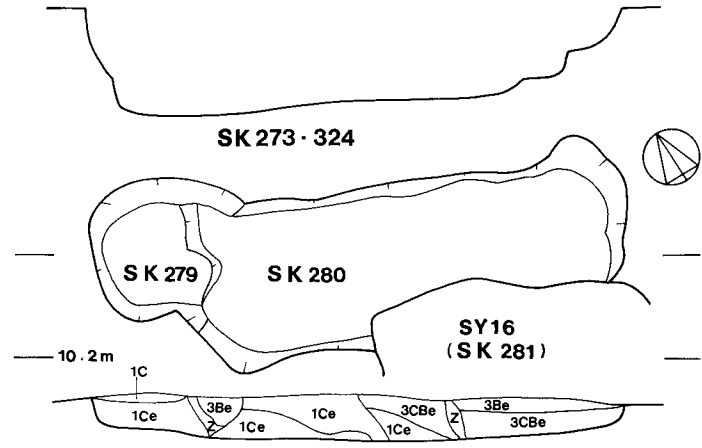
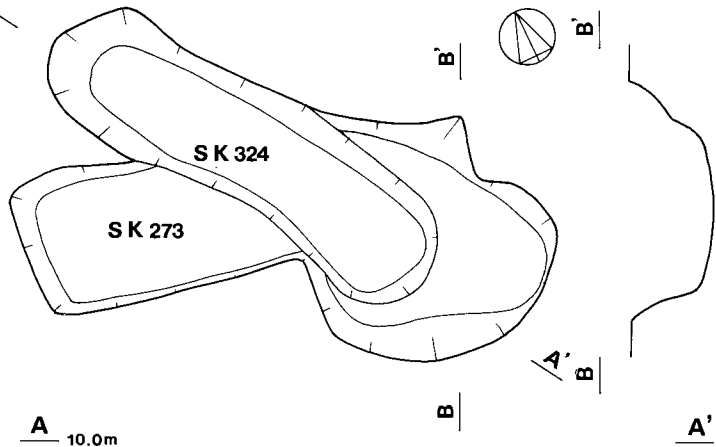
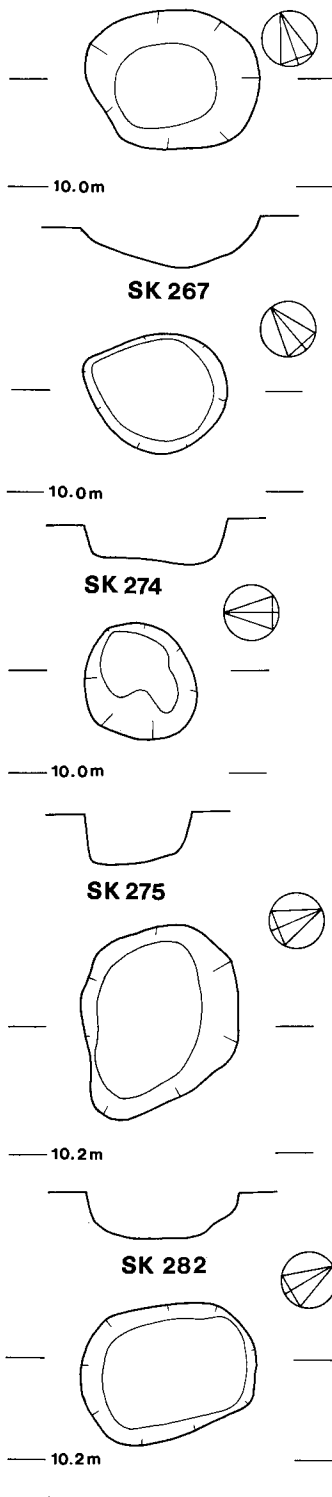


第301图 土坑实测图 (11)

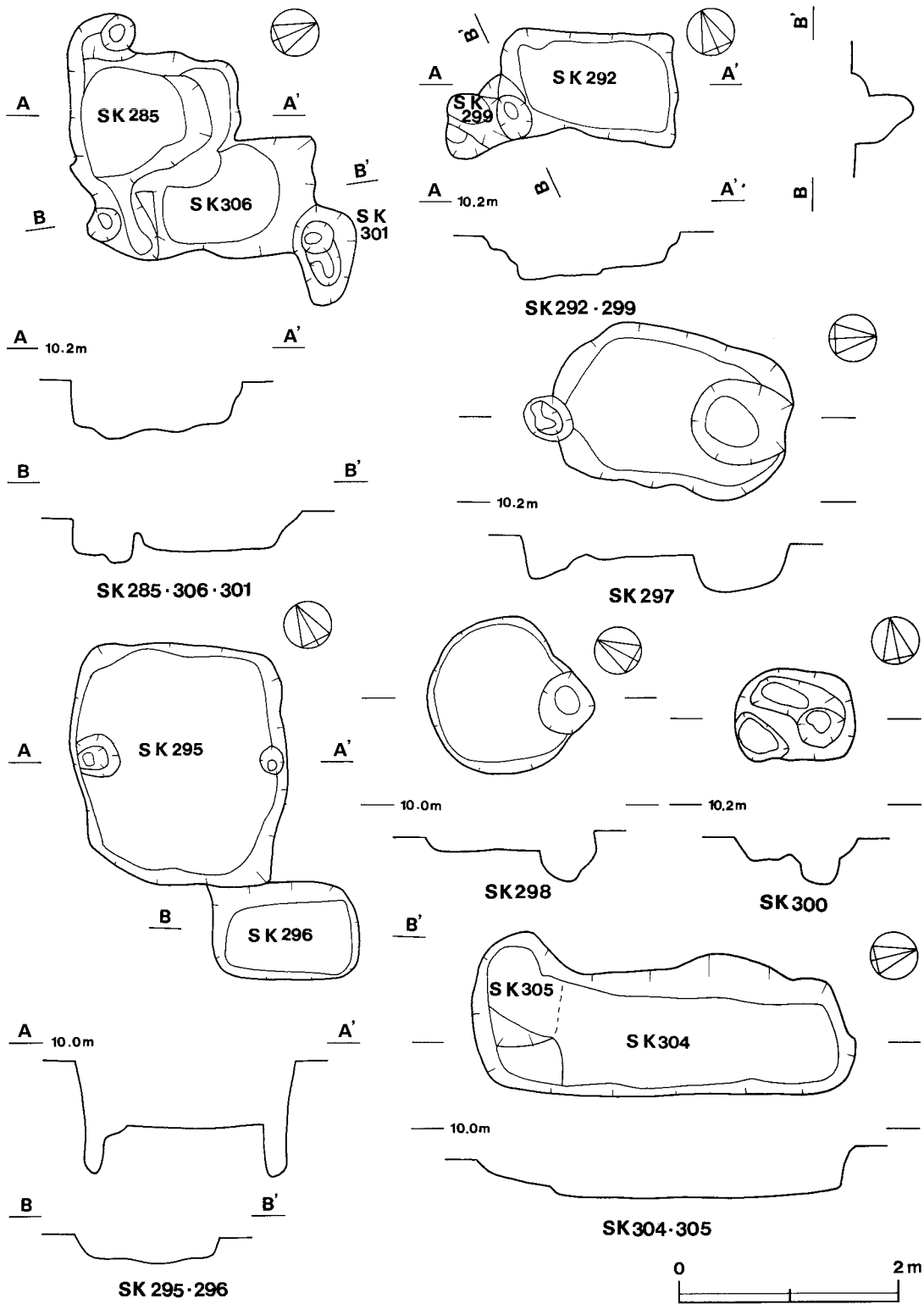




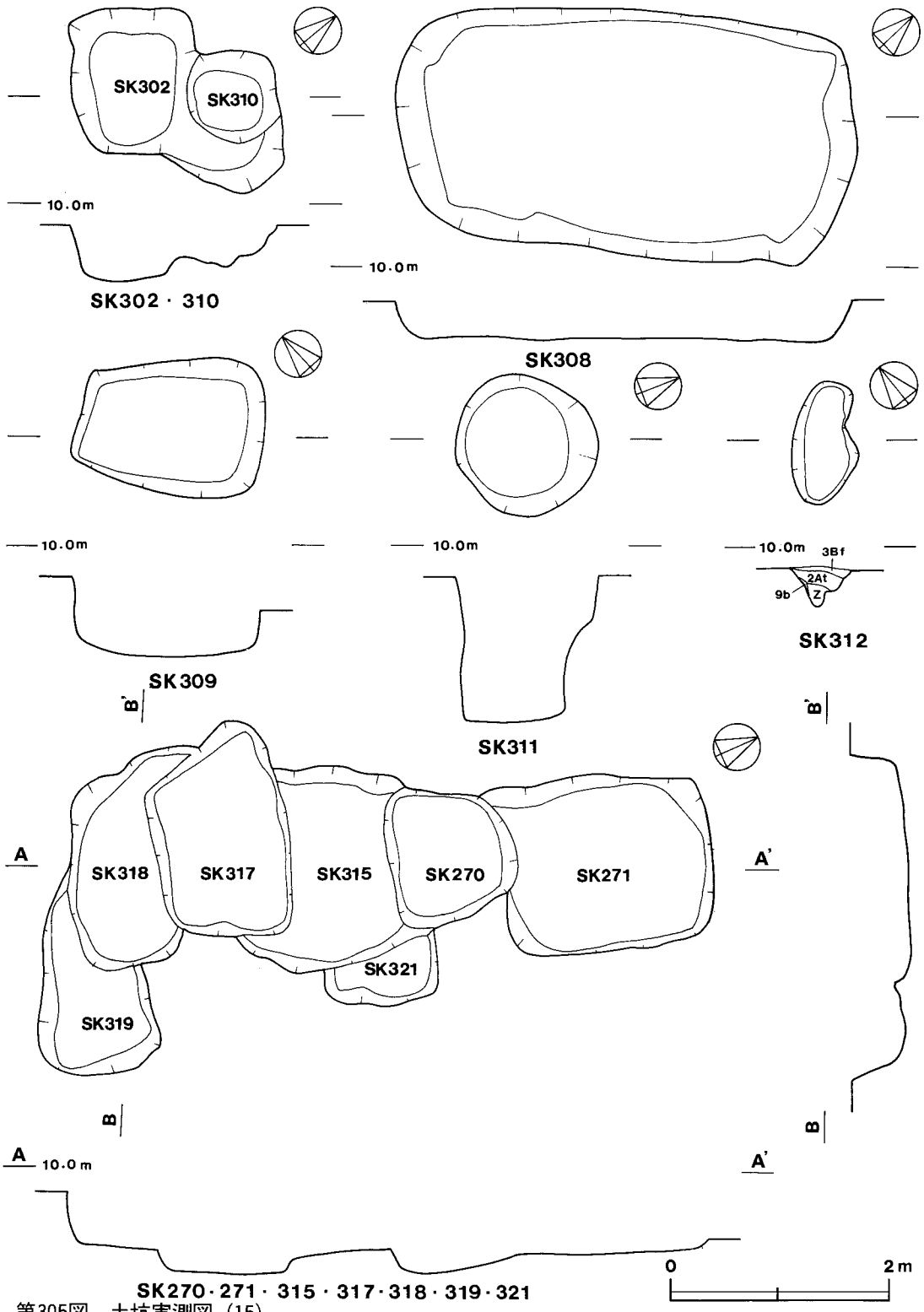
第302图 土坑实测图 (12)



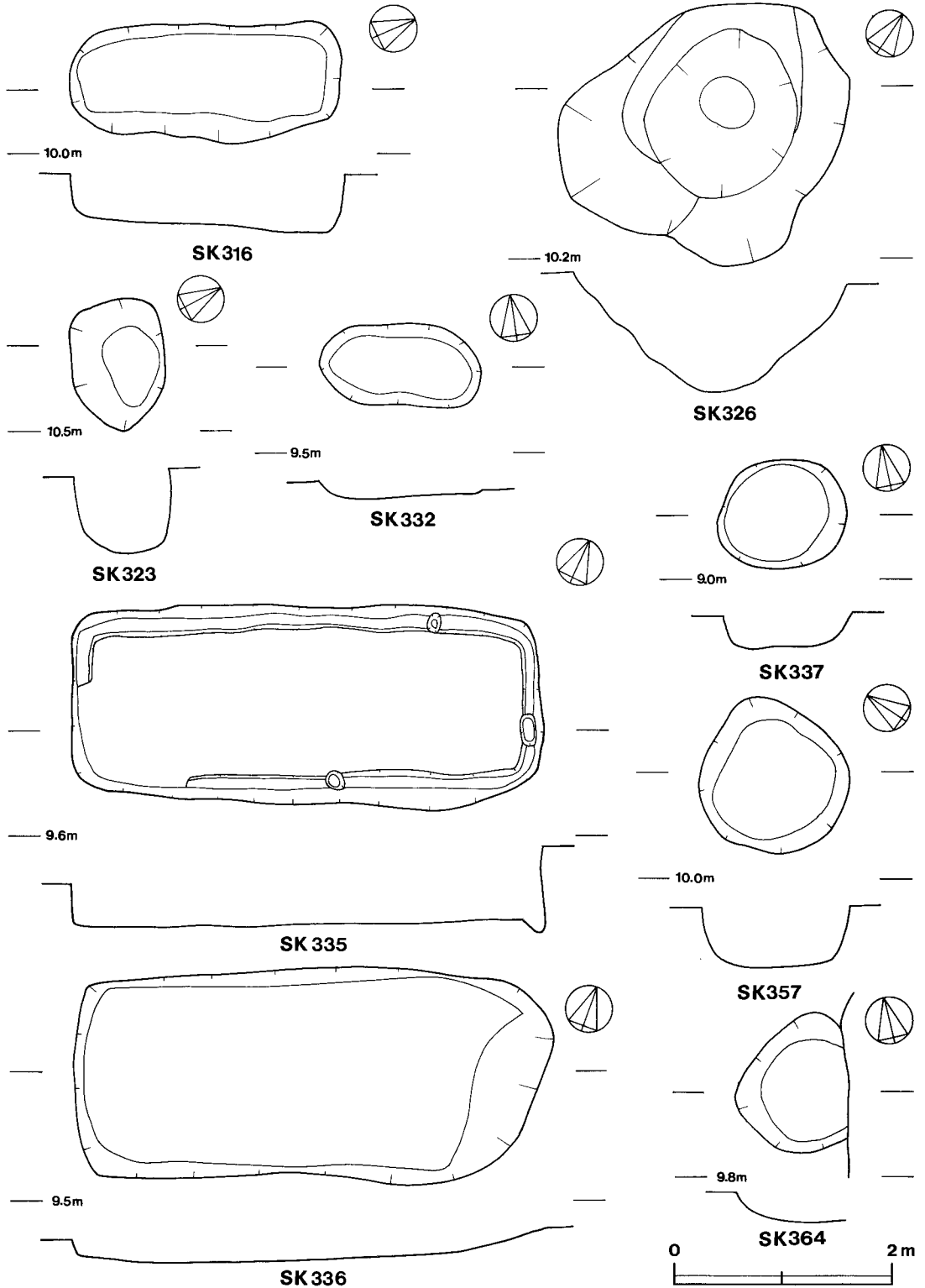
SK 286  
第303图 土坑实测图 (13)



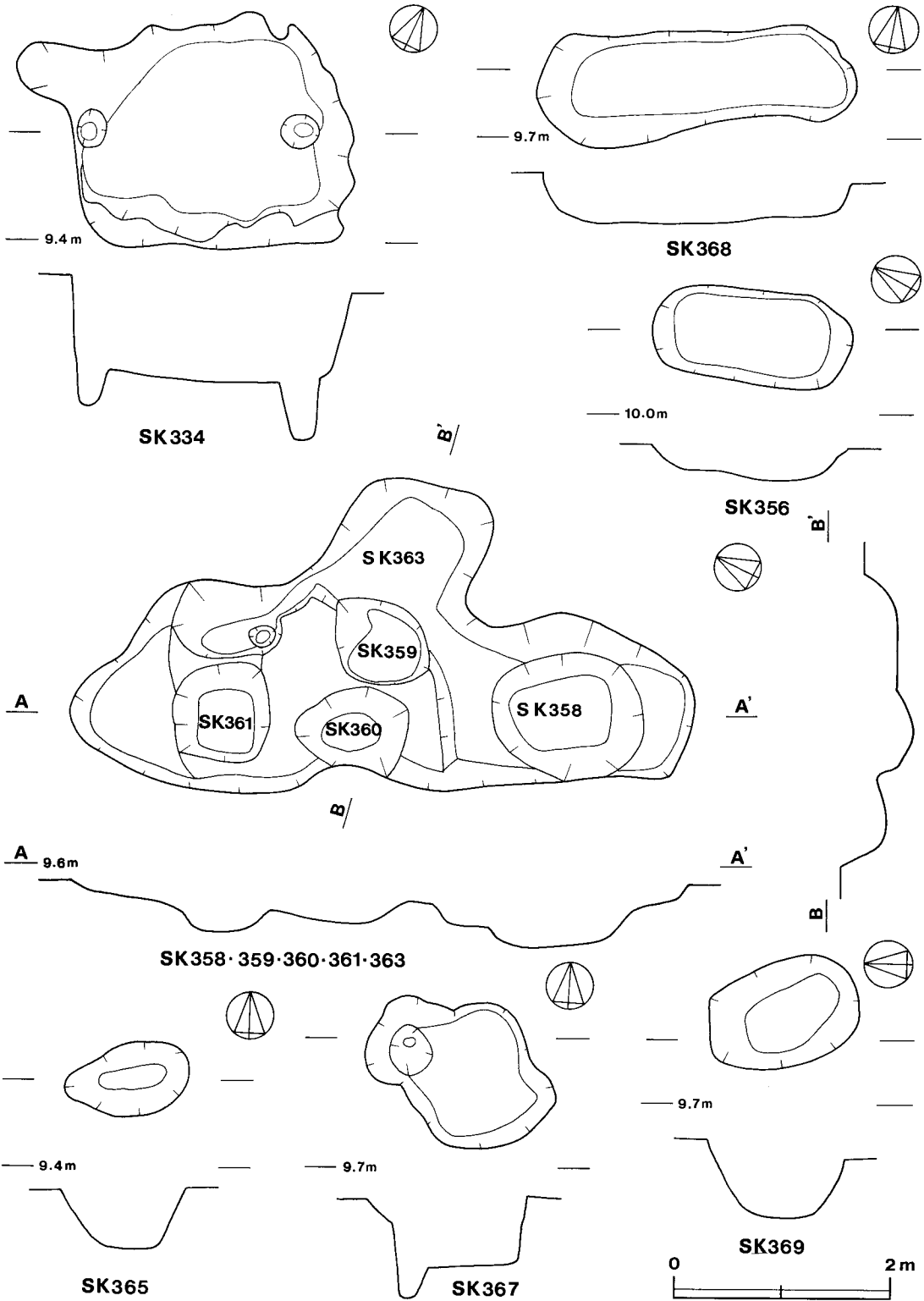
第304图 土坑实测图 (14)



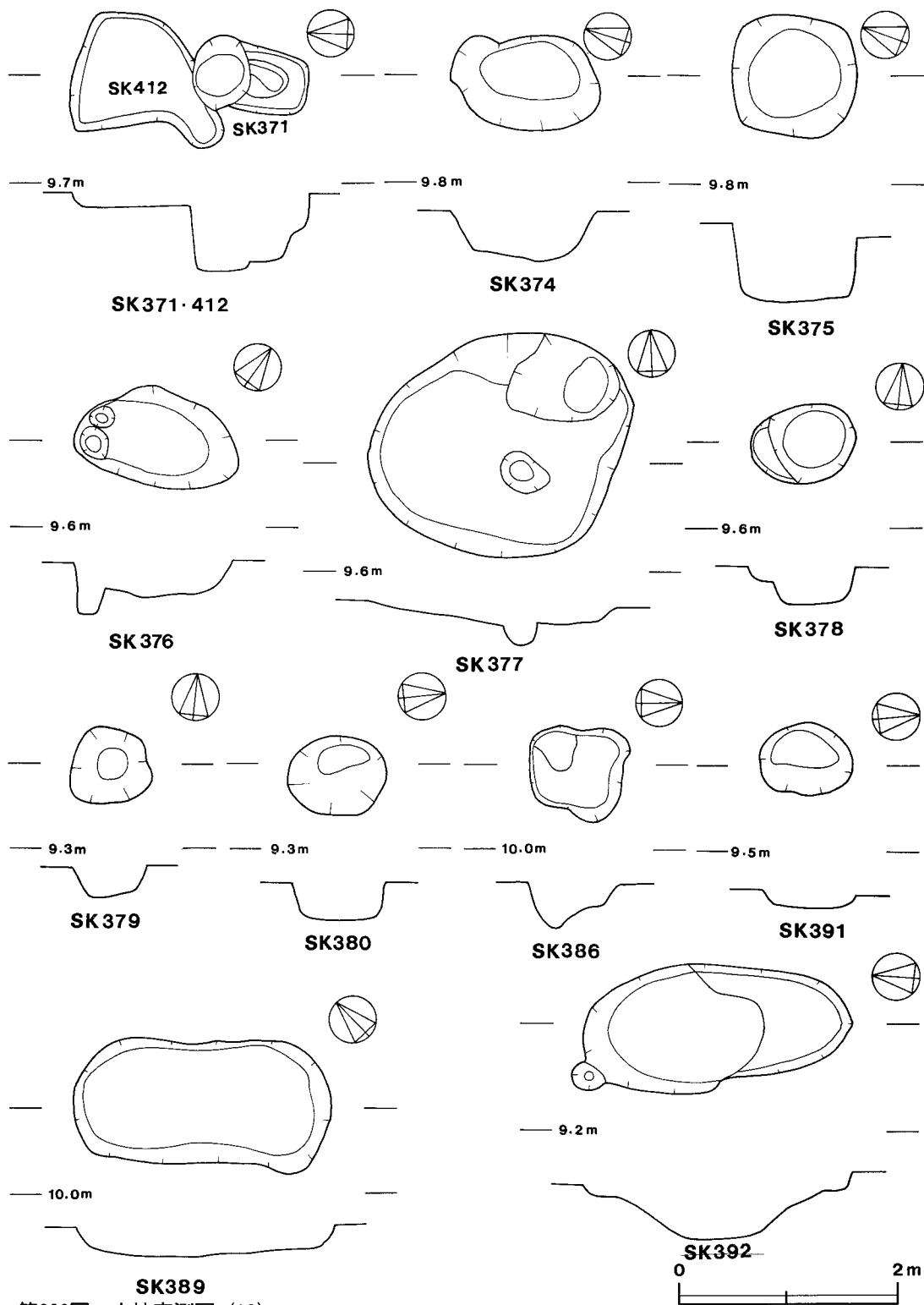
SK270 · 271 · 315 · 317 · 318 · 319 · 321  
 第305图 土坑实测图 (15)



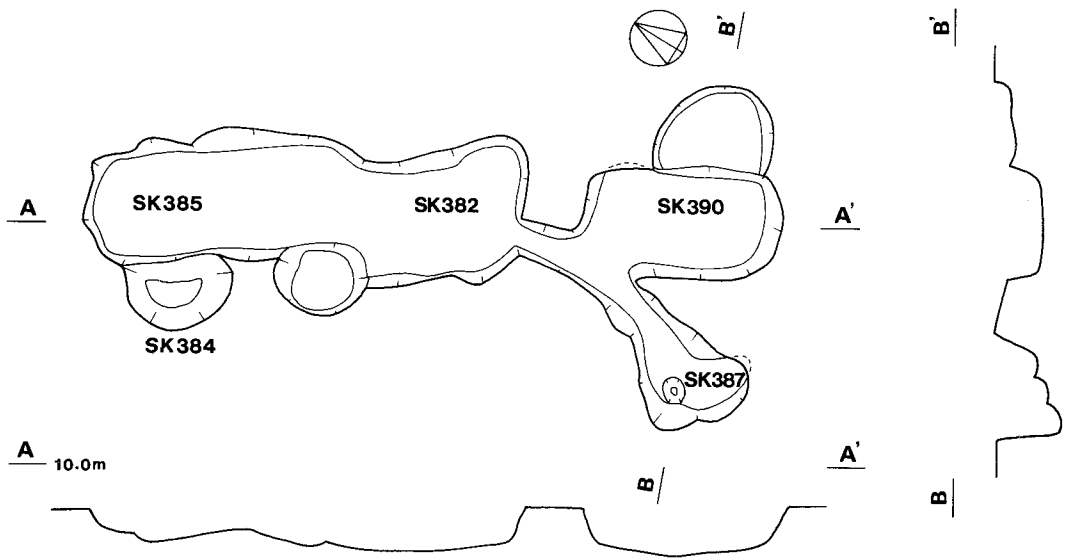
第306図 土坑実測図 (16)



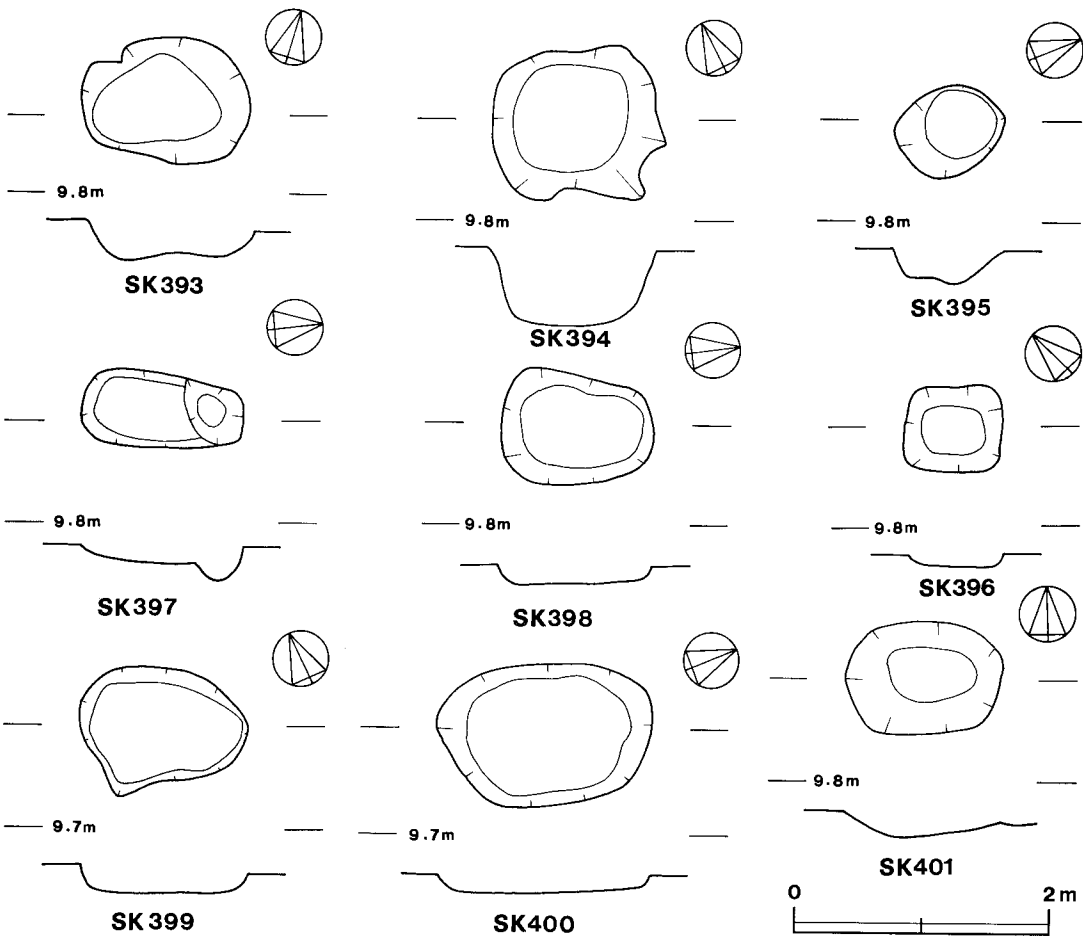
第307图 土坑实测图 (17)



第308图 土坑实测图 (18)

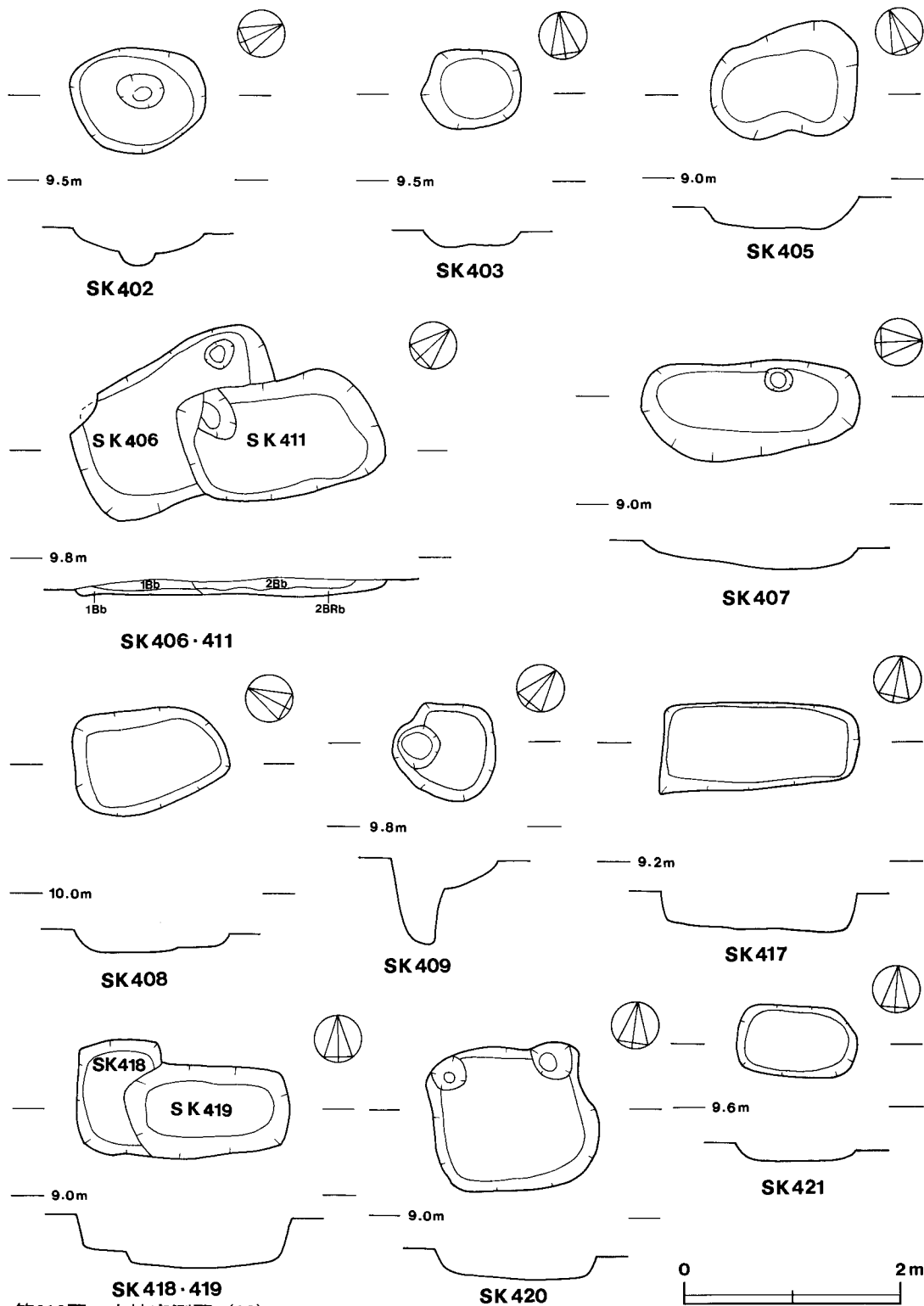


SK382 · 384 · 385 · 387 · 390

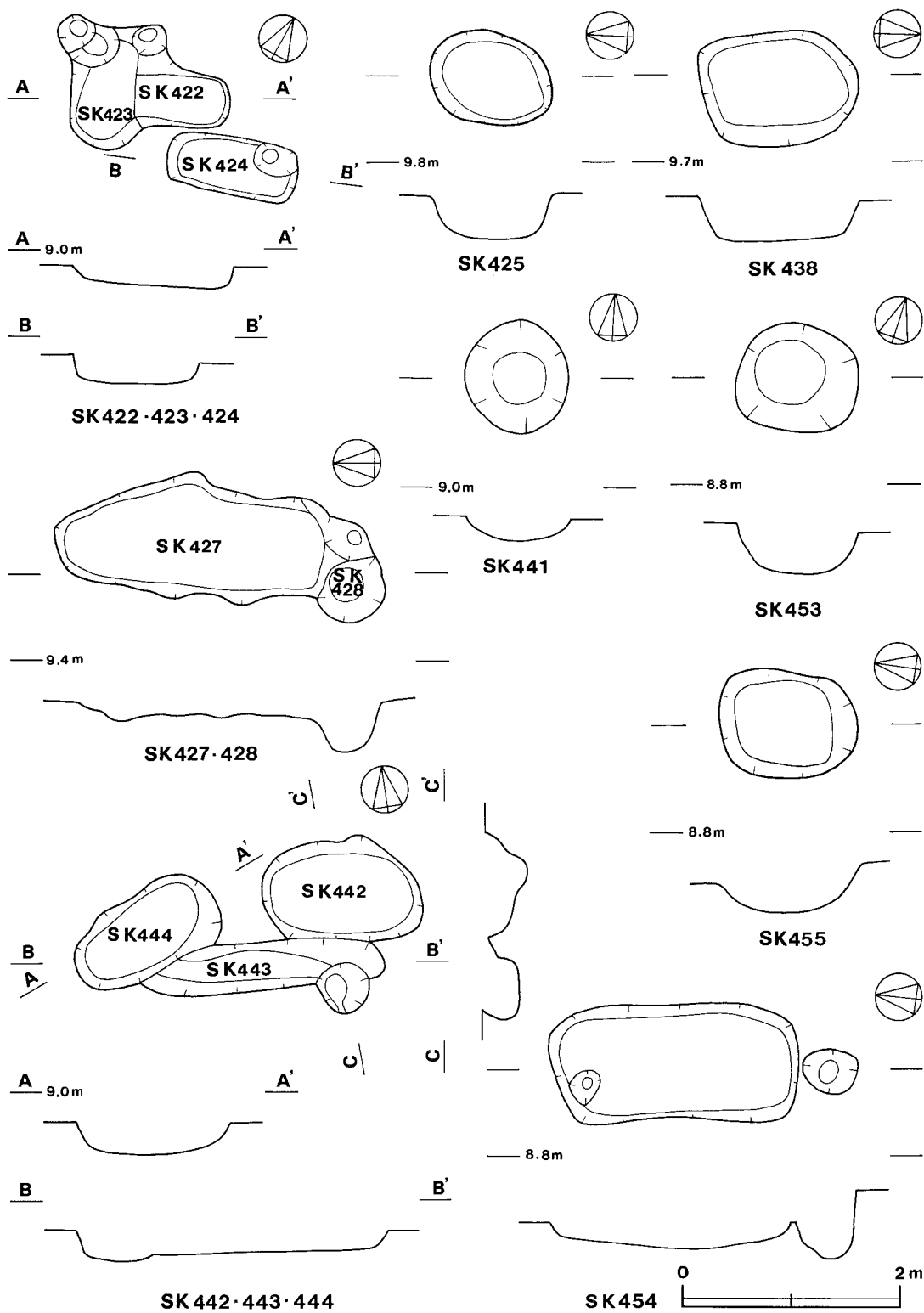


第309图 土坑实测图 (19)

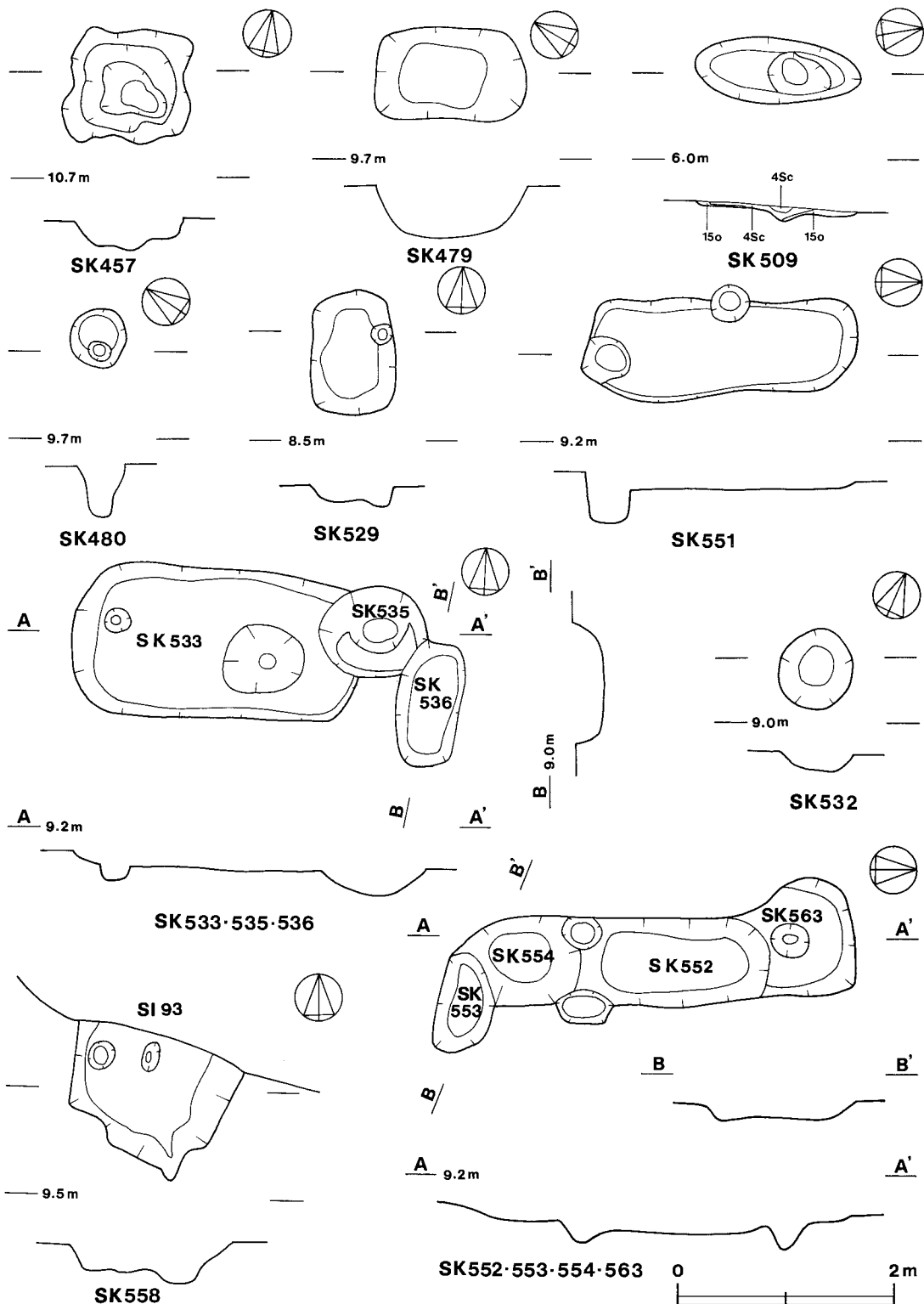




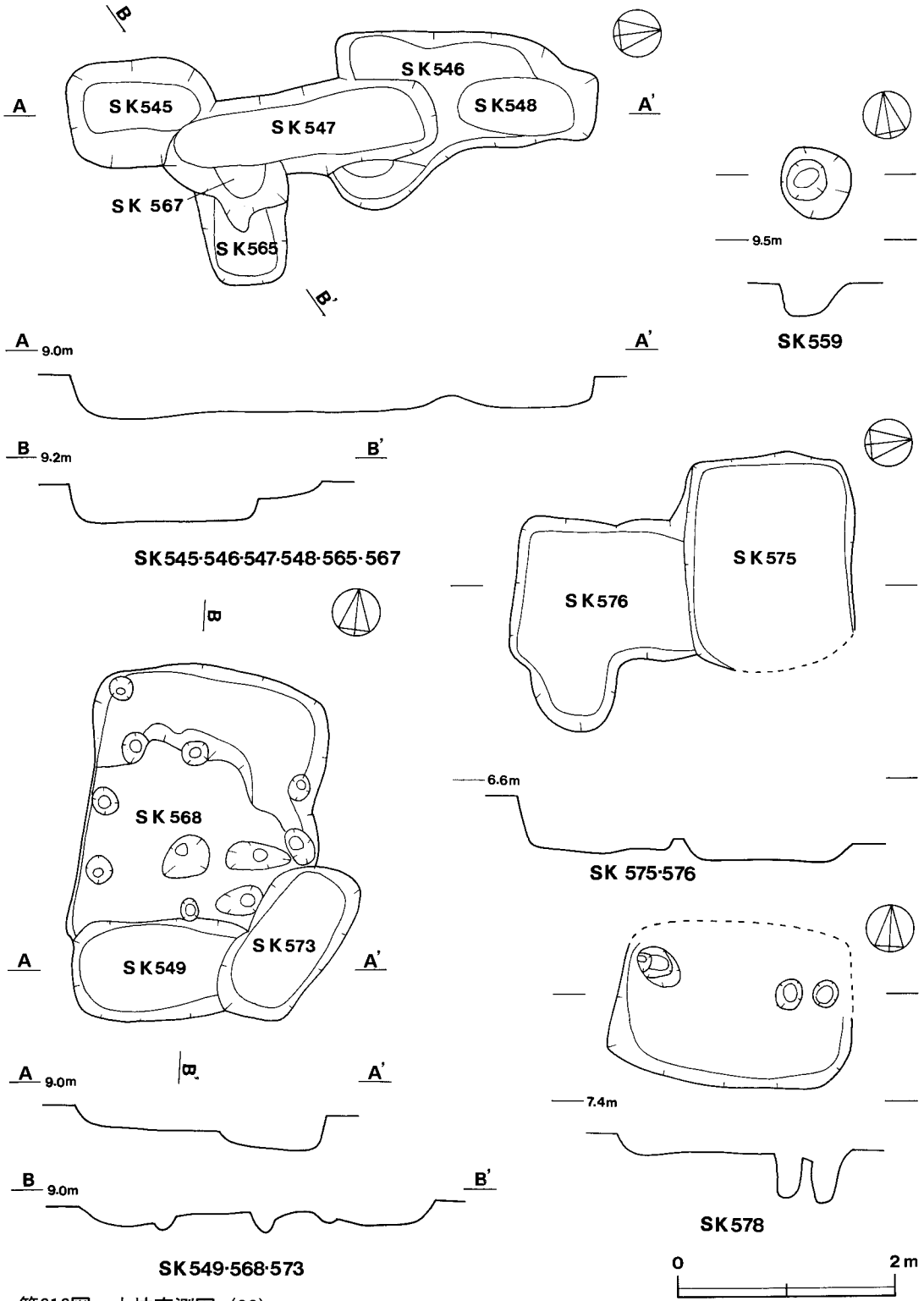
第310図 土坑実測図 (20)



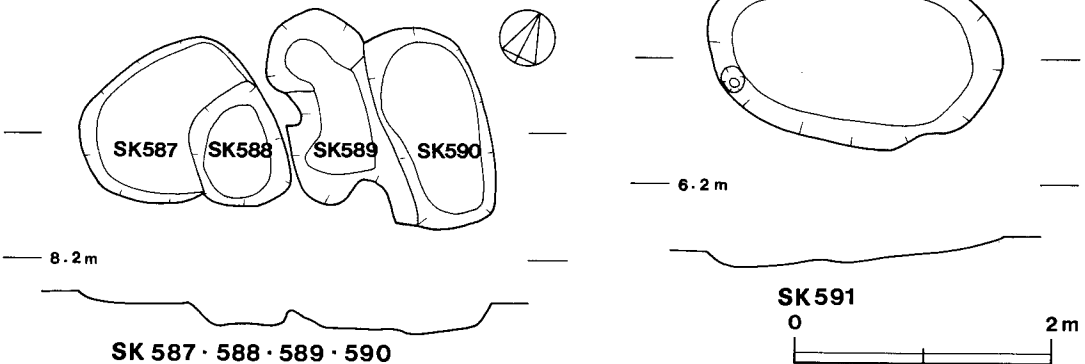
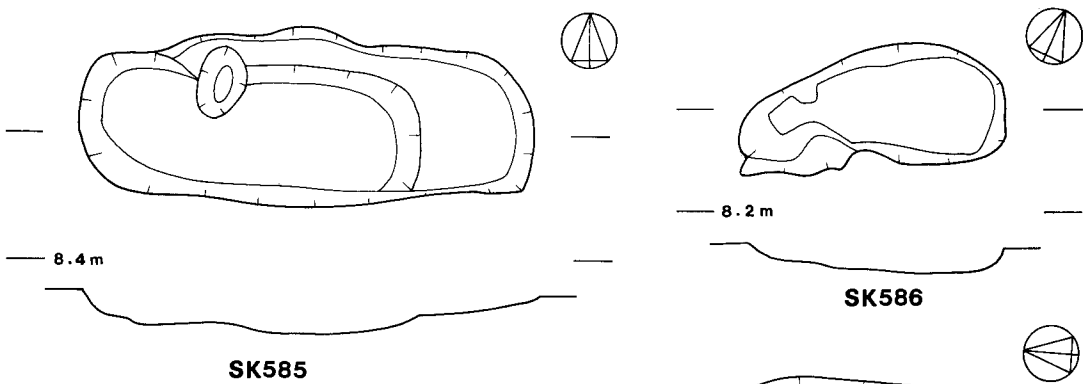
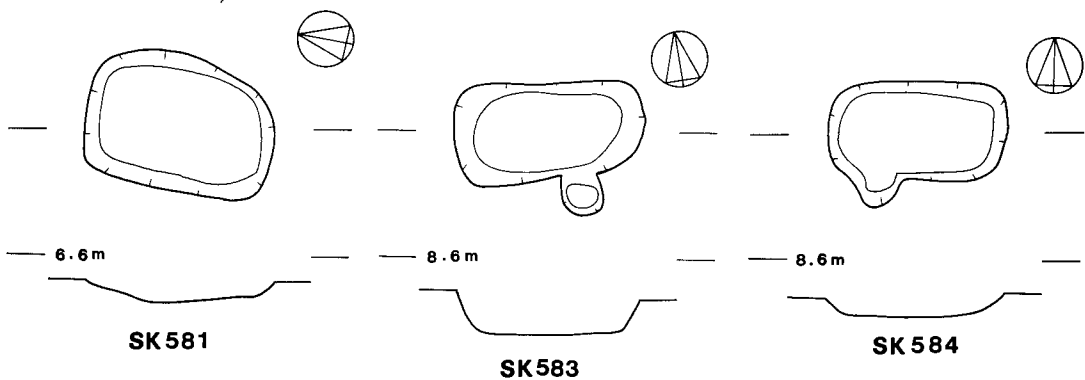
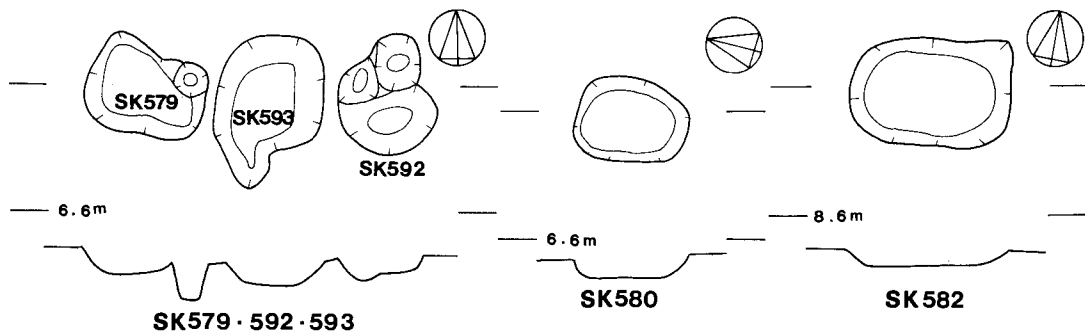
第311图 土坑实测图 (21)



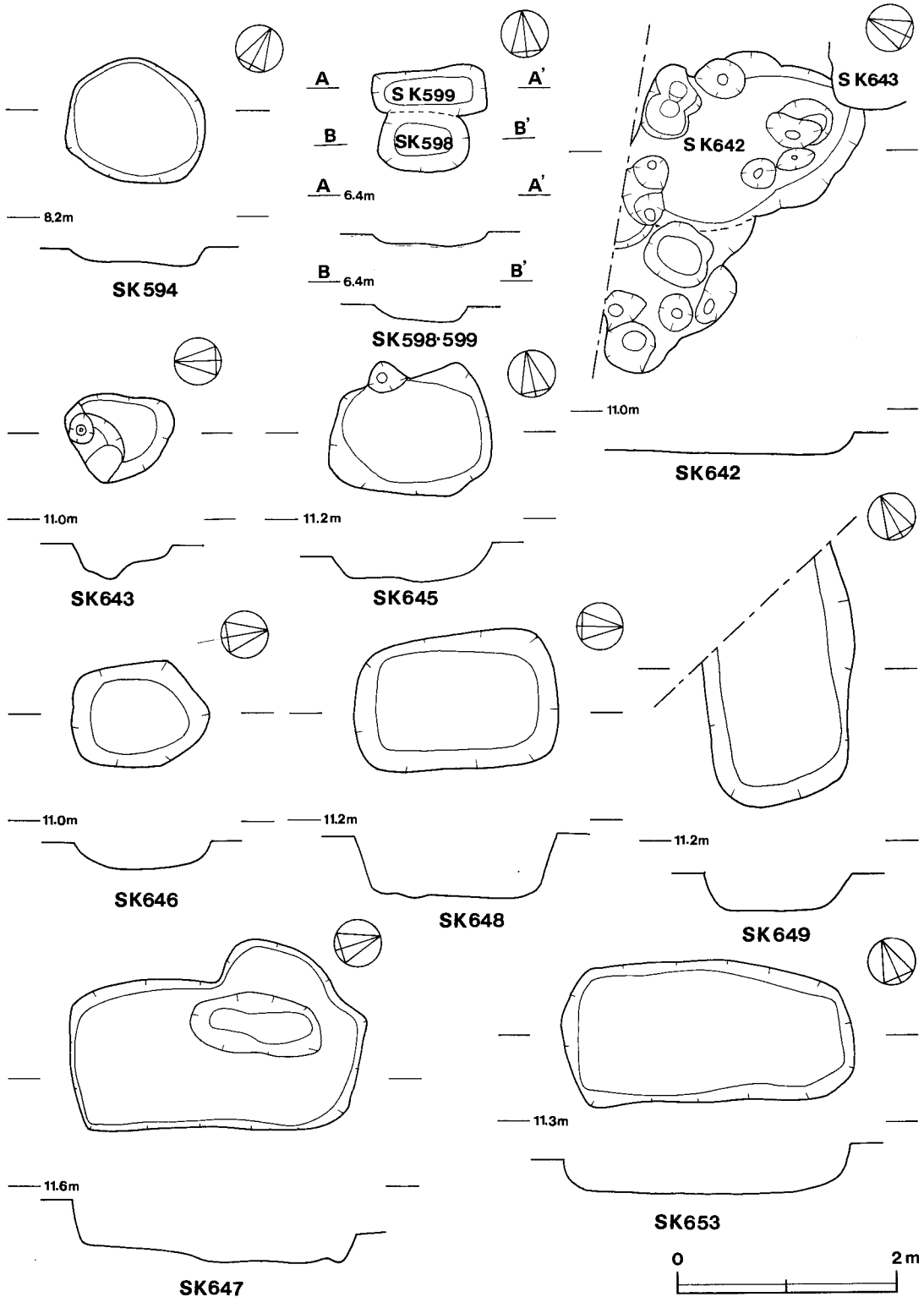
第312図 土坑実測図 (22)



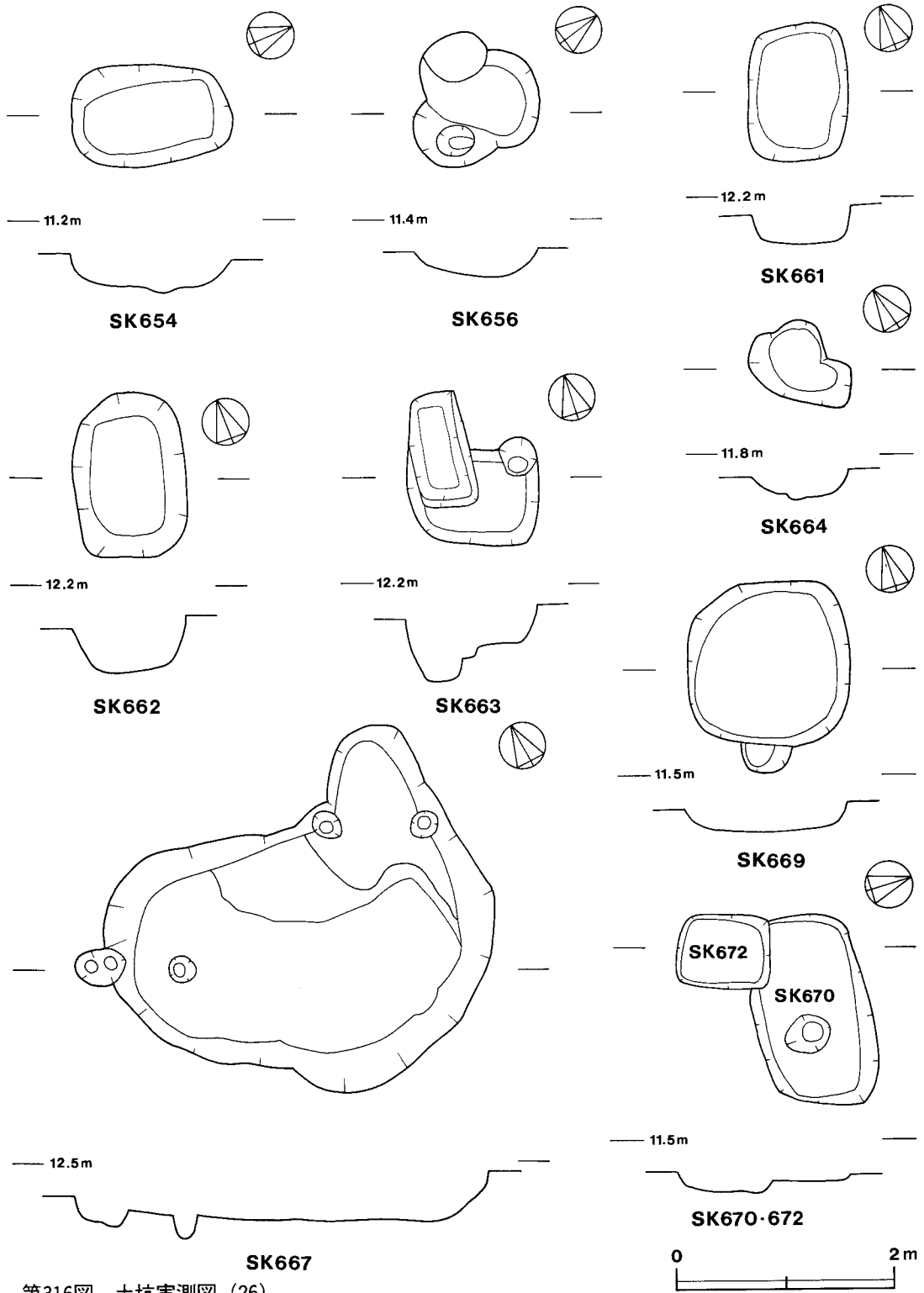
第313图 土坑实测图 (23)



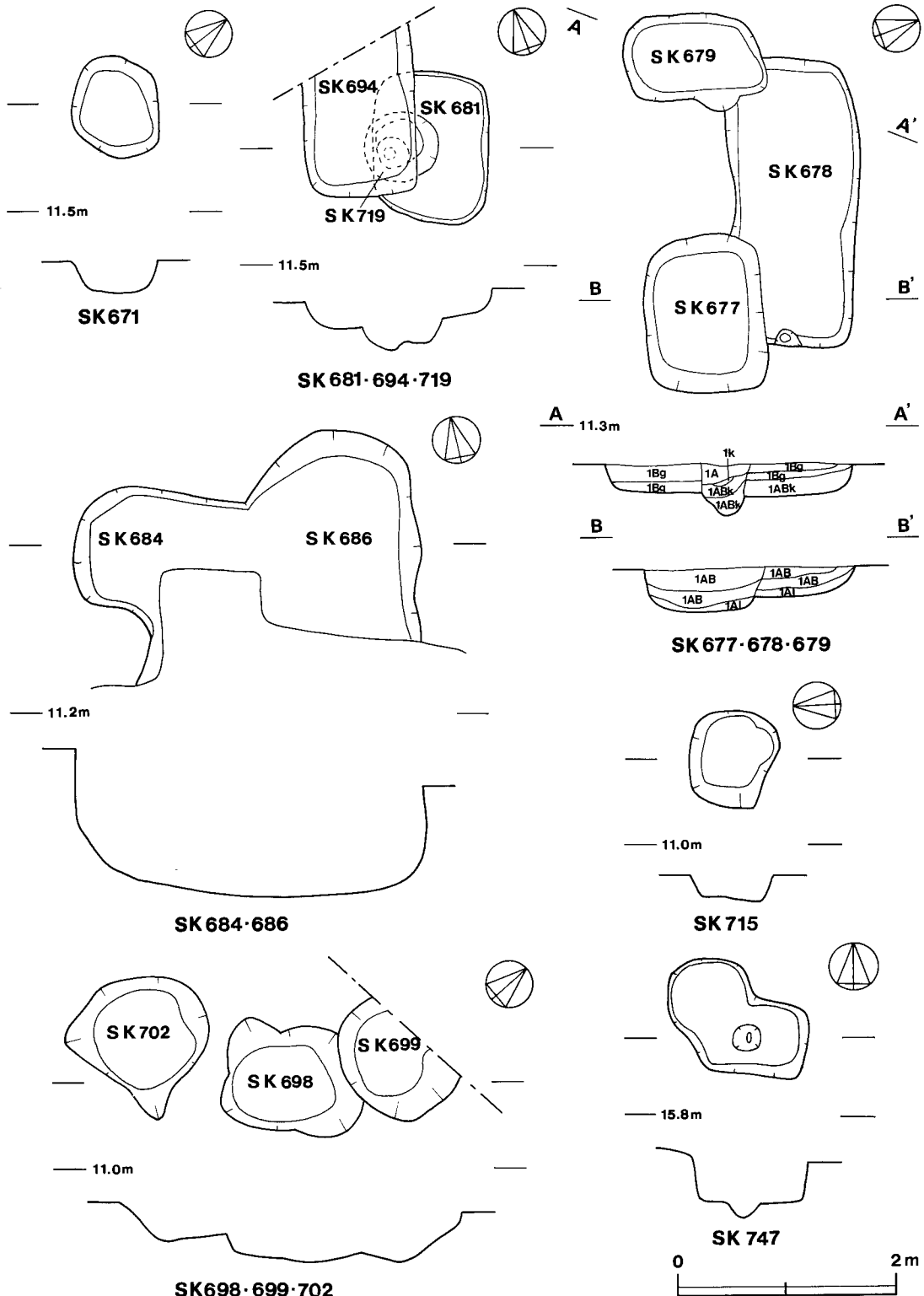
SK 587 · 588 · 589 · 590  
 第314图 土坑实测图 (24)



第315図 土坑実測図 (25)

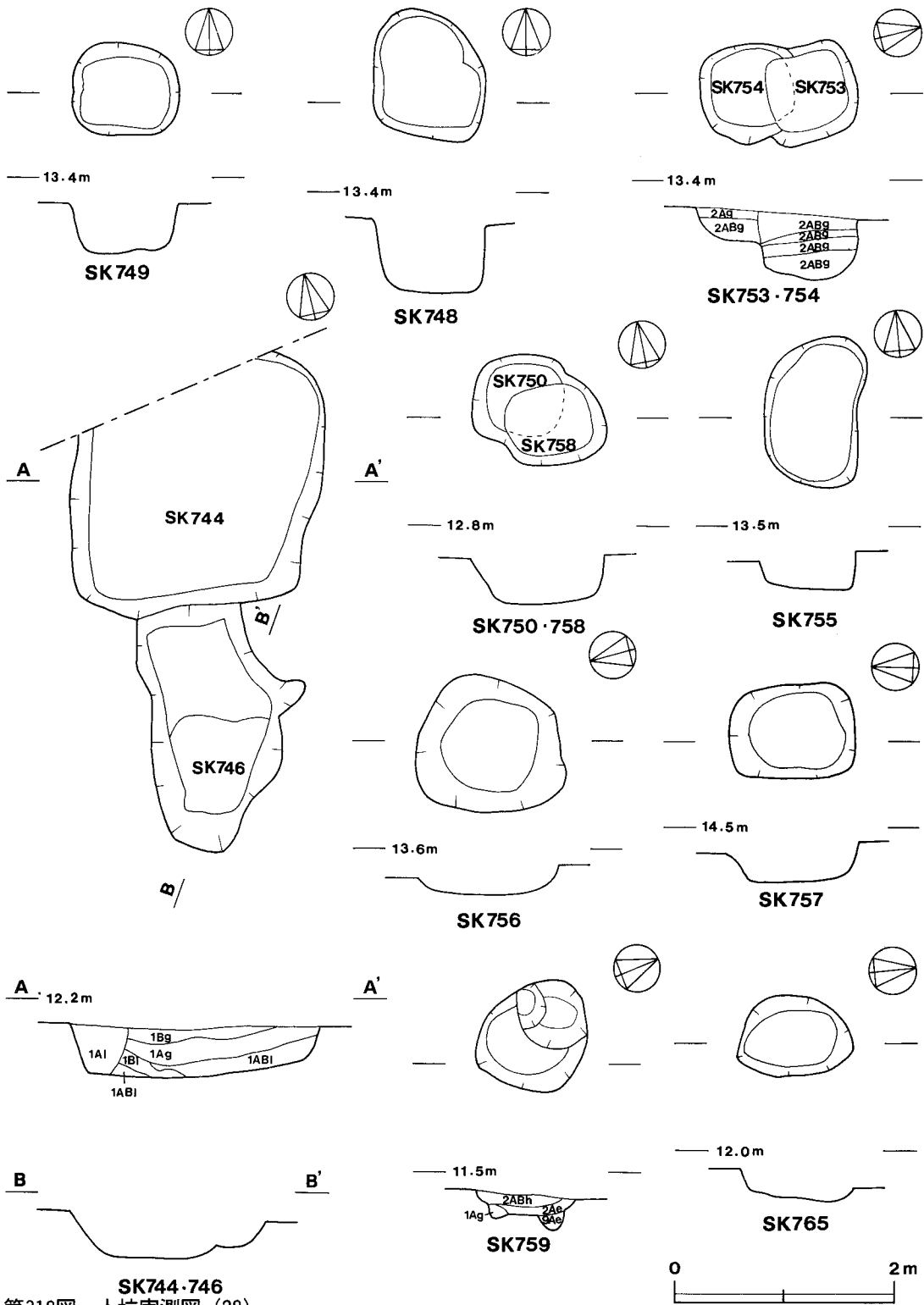


第316图 土坑实测图 (26)

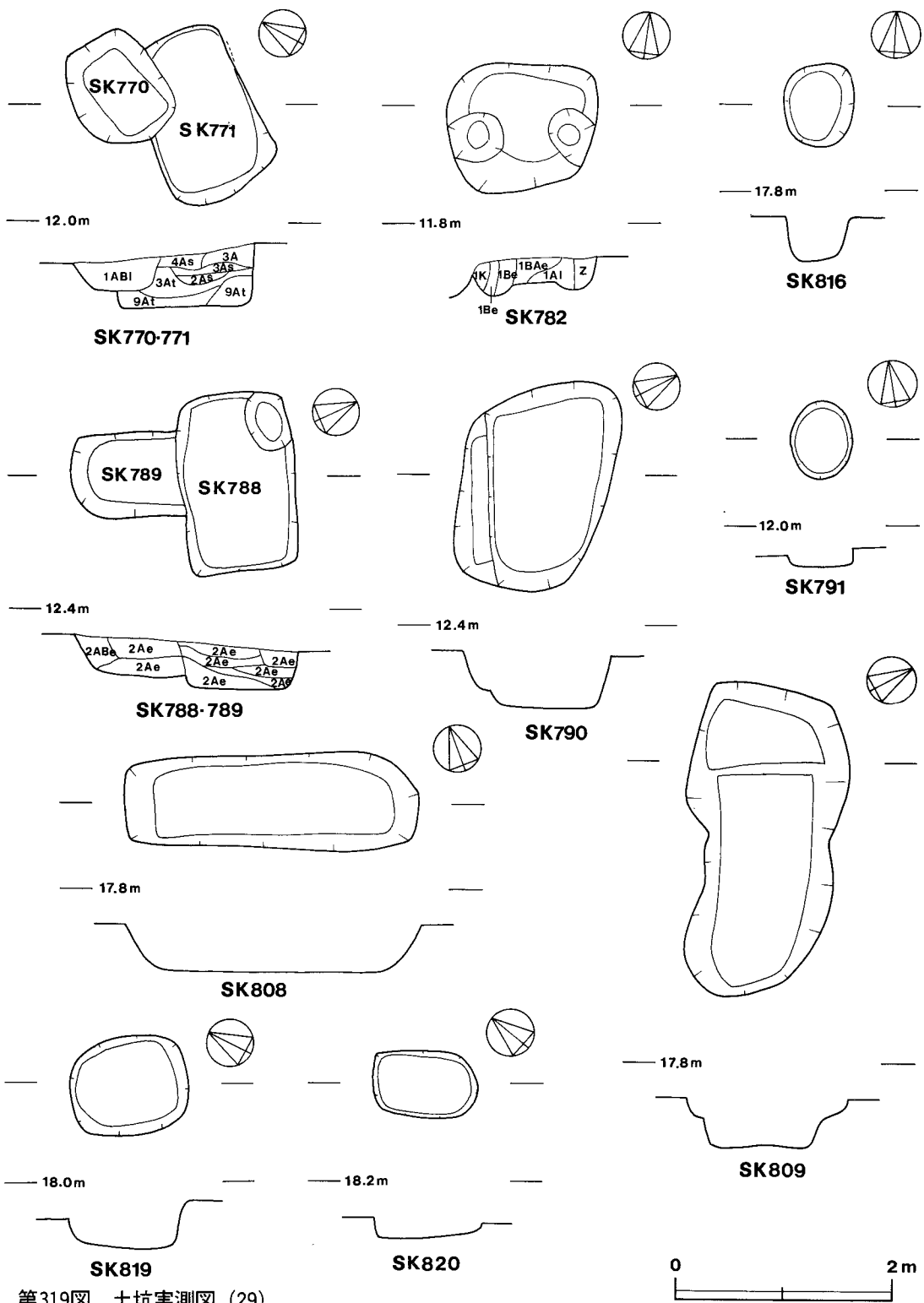


第317図 土坑実測図 (27)

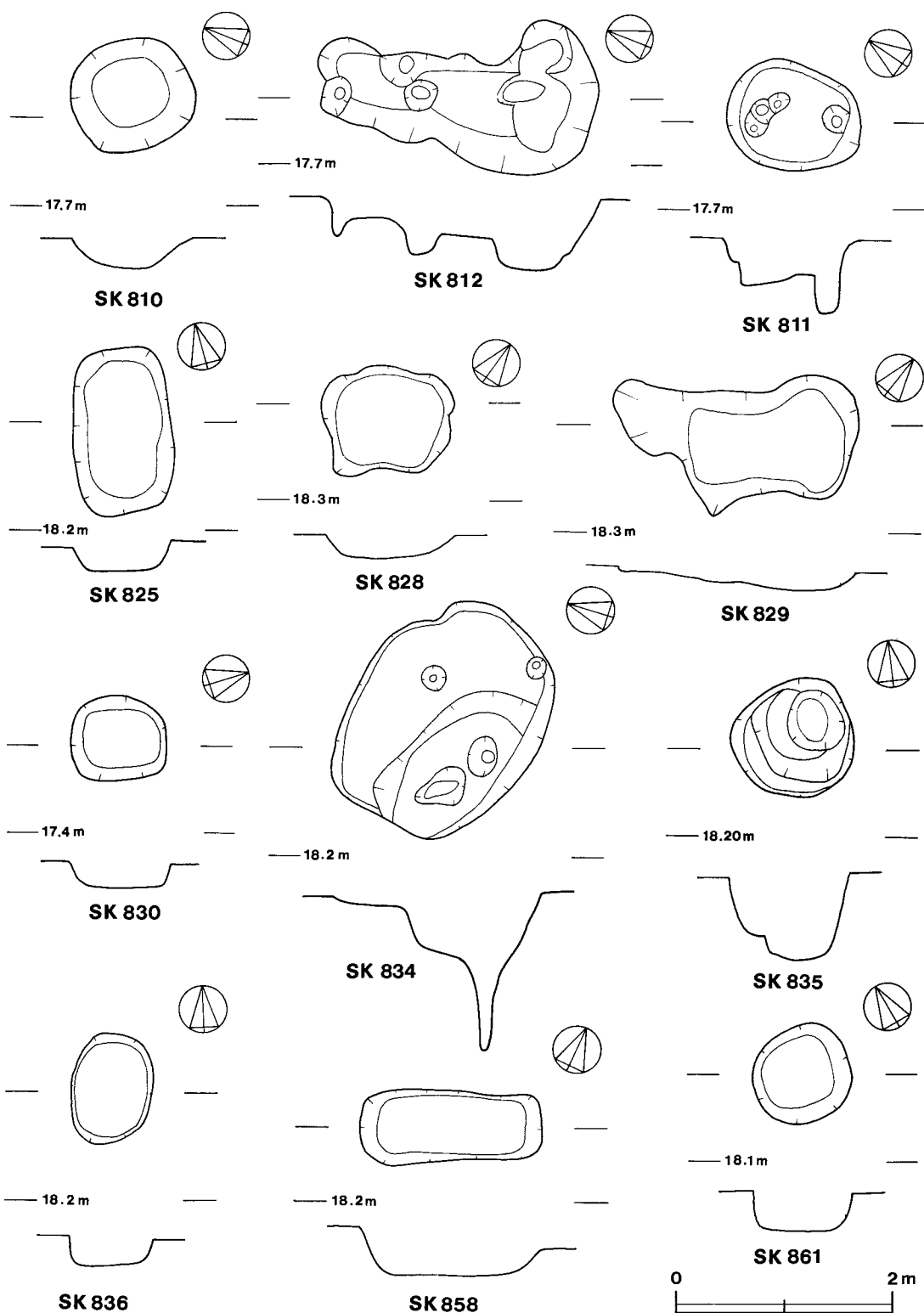




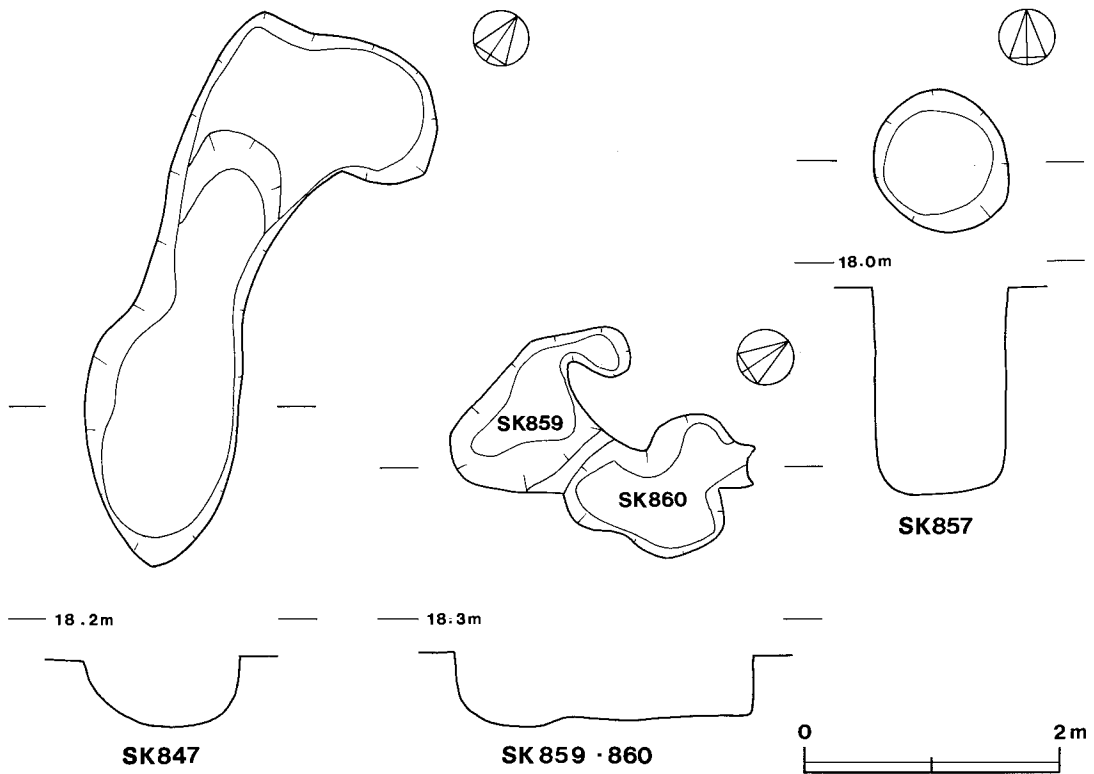
SK744-746  
第318图 土坑実測図 (28)



第319图 土坑实测图 (29)



第320図 土坑実測図 (30)

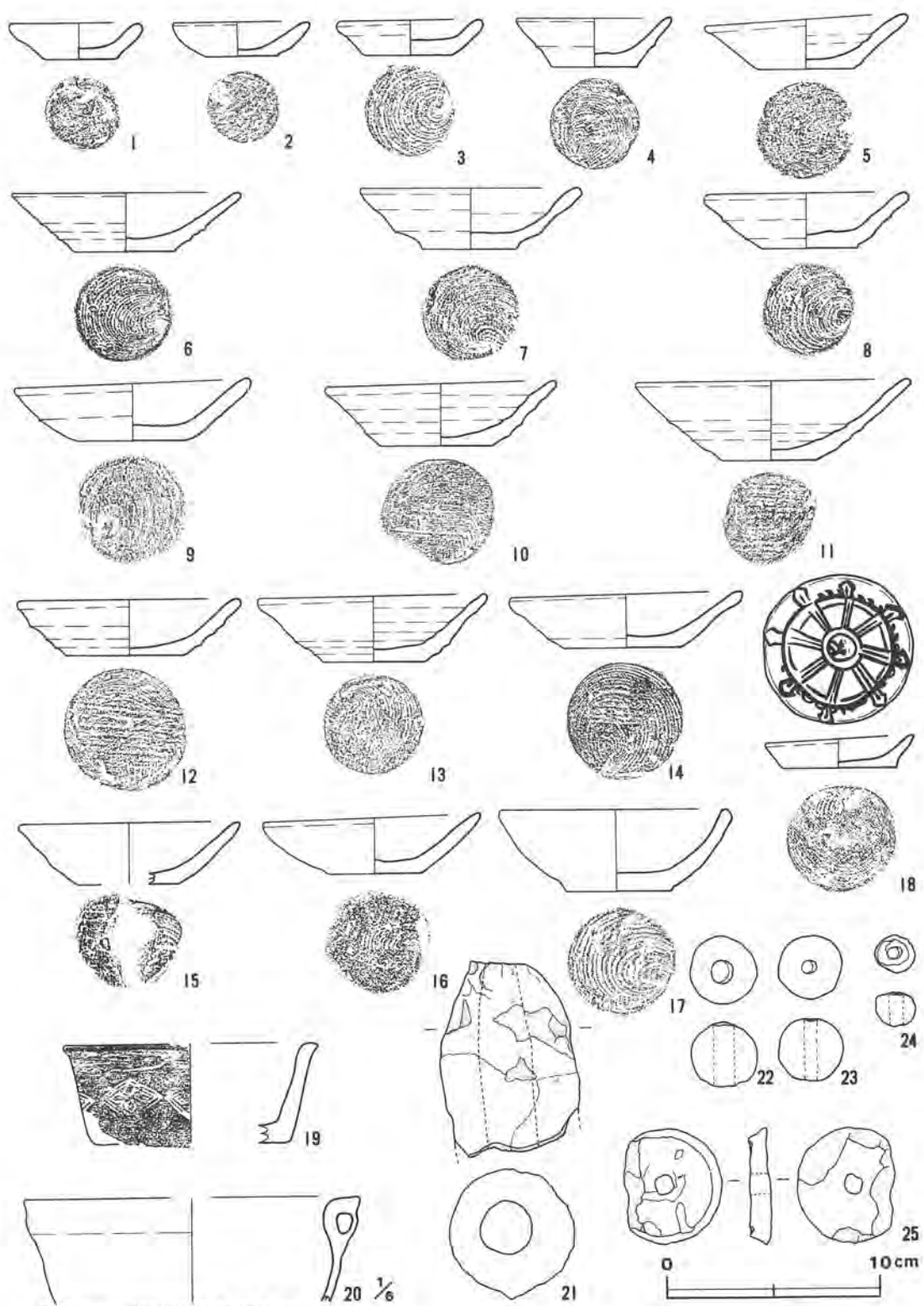


第321図 土坑実測図 (31)

土坑出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第322図 1	皿 土師質土器	A 6.3 B 1.7 C 3.4	平底で、体部は内彎気味に開く。 全体的に磨滅している。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P920 95% SK253覆土
2	皿 土師質土器	A 6.5 B 1.6 C 3.4	平底で、底部薄手。体部器肉厚く、 直線的に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	P949 100% SK420覆土
3	皿 土師質土器	A 6.8 B 1.7 C 4.0	平底で、体部は直線的に開き、口 唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P934 90% SK366覆土
4	皿 土師質土器	A 7.3 B 2.3 C 4.0	平底で、体部は器厚を減じながら 直線的に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい褐色 普通	P914 70% SK158覆土
5	皿 土師質土器	A 9.5 B 2.6 C 4.4	平底で、底部薄手。体部は器肉厚 く、直線的に開き、口唇部は丸味 を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P933 85% SK358覆土

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
6	皿 土師質土器	A 10.8 B 2.8 C 4.6	平底で、体部は器厚を減じながらやや内彎気味に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア・ 石英 明赤褐色 普通	P905 80% SK33覆土
7	皿 土師質土器	A 10.4 B 2.9 C 4.5	平底で、体部は器厚を減じながら内彎気味に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・石英 におい橙色 普通	P913 100% SK158覆土
8	皿 土師質土器	A 9.6 B 2.6 C 4.5	平底で、体部は直線的に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 暗褐色 普通	P935 100% SK366覆土
9	皿 土師質土器	A 11.2 B 2.9 C 5.1	平底で、体部は直線的に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り後、ナデ。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P947 100% SK378覆土
10	皿 土師質土器	A 10.9 B 3.1 C 5.2	平底で、体部は内彎気味に開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外傾する。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 におい橙色 普通	P952 100% SK425覆土
11	皿 土師質土器	A 13.0 B 3.8 C 4.3	平底で、底部小径。体部は内彎気味に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り後、ナデ。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P954 95% SK425覆土
12	皿 土師質土器	A 10.5 B 2.7 C 5.6	平底で、底部薄手。体部は器内厚く、内彎気味に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 におい橙色 普通	P953 100% SK425覆土
13	皿 土師質土器	A 10.9 B 3.2 C 4.9	平底で、体部はほぼ直線的に開いて立ち上がり、口縁部は僅かに外傾する。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 におい橙色 普通	P951 90% SK425覆土
14	皿 土師質土器	A 11.0 B 2.6 C 5.5	平底で、体部は直線的に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P961 90% SK686覆土
15	皿 土師質土器	A 10.5 B 2.9 C 4.8	平底で、体部は器厚を減じながら直線的に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り後、ナデ。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 におい橙色 普通	P960 90% SK686覆土
16	皿 土師質土器	A 10.2 B 2.9 C 4.4	平底で、体部は器厚を減じながら直線的に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P904 80% SK33覆土
17	皿 土師質土器	A 10.9 B 3.9 C 5.0	平底で、体部は内彎気味に開いて立ち上がり、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り後、ナデ。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア におい橙色 普通	P955 60% SK447覆土
18	皿 土師質土器	A 7.0 B 1.5 C 5.3	平底で、体部は器厚を減じながら直線的に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア におい橙色 普通	P950 底部・ 体部内面黒書 100% SK425覆土
19	鉢 須恵器	A (12.0) B 4.7 C (9.2)	平底で、体部は直線的に立ち上がり、口唇部がやや外傾している。	底部ナデ。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 におい褐色 普通	P923 10% SK254覆土
20	内耳形土器 土師質土器	A (31.6) B (9.9)	体部はやや内彎気味に開いて立ち上がる。耳接合部の外面はふくらむ。口唇部は平坦。耳は1か所残存。外面に鍋墨付着。	口唇部・口縁部内面横ナデ。 体部内・外面ナデ。 耳接合。	砂粒・雲母 外面黒褐色 内面におい橙色 普通	P1026 20% SK425覆土



第322图 土坑出土遺物実測図

土坑出土土製品・石製品解説表

図版番号	名 称	出土地点	台帳番号	大きさ (cm)			重量 (g)	備 考
				長さ	幅	厚さ		
第322図 21	羽 口	SK278	DP110	(9.2)	5.9	—	161.8	孔径2.4cm, 橙 色, 30%
22	球状土錘	SK695	DP108	3.0	3.1	—	24.0	孔径1.0cm, 浅黄橙色, 100%
23	球状土錘	SK841	DP111	2.9	3.0	—	22.7	孔径0.6cm, 灰黄褐色, 100%
24	球状土錘	SK362	DP107	1.6	1.9	—	4.4	孔径0.7cm, 黒褐色, 100%
25	紡 錘 車	SK128	Q 44	—	5.5	1.0	33.5	孔径0.9cm, 粘板岩, 95%

第1号地下式坑 (SK6 第323図)

本跡は、B5d 区に確認され、第34号住居跡の南側を切って掘り込んでいる。主軸方向はN-17°-Wを指し、主軸長は2.4mである。竪坑の位置は南側である。

竪坑は確認面から2.3mの深さまで掘り込まれており、平面形は長辺2.0m・短辺0.9mの長方形を呈している。底面は極めて平坦で、同一レベルで主室の底面につながっている。主室は、竪坑の北側に長方形に掘られており、底面の長辺は2.9m、短辺は1.45mである。竪坑・主室とも、底面はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑が85度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から1.2mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積で、下層には、天井部が崩落したと思われる暗褐色土や明褐色土が堆積し、その上に0.25mの厚さで多量のローム粒子や焼土粒子を含む極暗褐色土、中量のローム粒子や炭化粒子を含む黒褐色土、ローム小ブロックやローム粒子を含む褐色土が交互にのっている。これらは、天井部の崩落した後、周囲から流入したもので、あわせて第34号住居跡の南側の床面も落下して堆積したものである。さらに、中層から上層にかけても、ローム粒子・砂礫・焼土粒子・炭化粒子を含んでいる極暗褐色土・黒褐色土・明黄褐色土・橙色土が交互に堆積している。これらも、除々に壁の崩落や周囲からの流入によって堆積したものである。

遺物は、主室の覆土中層から土師器の坏形土器片や陶器の摺鉢片が出土している。出土状況から判断して、いずれも本跡に伴う遺物ではないと思われる。

本跡に伴うと思われるものが出土していないため、本跡の時期を明確にすることはできなかった。

### 第2号地下式坑 (SK30 第323図)

本跡は、C3j<sub>9</sub>区を中心に確認され、北西4.0mには第54号住居跡が存在している。主軸方向はN-34°-Eを指し、主軸長は2.1mである。竪坑の位置は南西側にある。

竪坑は確認面から1.0mの深さまで掘り込まれており、底面は北に傾斜している。平面形は一辺0.9mの正方形を呈している。主室は、竪坑の北東側を0.5m掘り下げている。平面形は長辺3.2m・短辺1.4mの長形状を呈し、長辺は主軸と直交している。底面は、竪坑・主室とも砂質の黄褐色土で硬く締まっている。

壁は、竪坑が75度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、垂直あるいはオーバーハングして立ち上がっている。特に主室奥壁（北東壁）は、75度の角度で外傾して立ち上がっているが、底面から0.9mの部分まで本来の壁が残り天井へ移行している。

覆土は自然堆積で、下層には、天井部が崩落した時に落下したと思われるにぶい黄褐色土・にぶい黄橙色土・黄橙色土が堆積し、それぞれ砂質でローム粒子を中量含んでいる。さらに上層には、天井崩壊後も残った壁等が除々に落下し、堆積していったと思われるにぶい黄橙色土・黒褐色土が堆積し、それぞれ砂質で多量のローム粒子・粘土粒子、中量のローム小ブロック・粘土小ブロックを含んでいる。

遺物はまったく出土しないため、本跡の時期を明確にすることはできなかった。

### 第3号地下式坑 (SK47 第323図)

本跡は、D3b<sub>4</sub>区からD3b<sub>5</sub>区にかけて確認され、北東2.2mには第46号住居跡が存在している。主軸方向はN-54°-Wを指し、主軸長は2.2mである。竪坑の位置は南東側である。

竪坑は確認面から1.9mの深さまで掘り込まれており、平面形は長辺1.2m・短辺0.7mの長方形を呈している。底面は極めて平坦で、同一レベルで主室の底面につながっている。主室は、竪坑の北西に長形状に掘られており、底面の長辺は2.1m、短辺は0.9mである。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、壁はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑が83度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から1.2mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。残存していた天井部の厚さは約0.6mである。

覆土は自然堆積である。竪坑の下層には、流れ込んだと思われる黒褐色土が、その上には周囲の壁が崩れて堆積したと思われるローム小ブロックや粘土小ブロックを含む砂質のにぶい黄褐色土が層を成している。その後も周囲からローム粒子や粘土粒子を含む黒褐色土・暗褐色土が流れ込んでいる。主室では、下層に周囲の壁が崩れて堆積したと思われるローム小ブロックを多量に含む暗褐色土が堆積している。さらに、天井部から落下したと思われるローム極小ブロックを含



む極暗褐色土・暗褐色土が竪坑から流れ込んだと思われる土砂とともに天井部まで達している。

遺物はまったく出土しないため、本跡の時期を明確にすることはできなかった。

#### 第4号地下式坑 (SK66 第324図)

本跡は、D2e<sub>6</sub> 区を中心に確認され、西側で第5号地下式坑と接している。主軸方向はN-87°-Eを指し、主軸長は3.7mである。竪坑の位置は西側にある。

竪坑は確認面から1.6mの深さまで掘り込まれており、平面形は長辺1.2m・短辺0.7mの長方形を呈している。底面はややくぼんでいるが、ほぼ同一レベルで主室の底面につながっている。主室は、竪坑の東に不整楕円形状に掘られており、底面の長径は3.0m、短径は2.5mである。竪坑・主室とも、壁はロームでもろい。また、竪坑・主室の底面は砂質で軟らかい。

壁は、竪坑では80度の角度で外傾して立ち上がり、主室はほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土は自然堆積である。下層には、竪坑から流れ込んだと思われる黒褐色土が、その上には周囲の壁が崩れて堆積したと思われるハードロームブロックを多量に含む黄褐色土が見られる。さらに中層から上層に、天井部が崩落したものであると思われる多量の砂質粘土・砂利が堆積している。その後、周囲から黒褐色土が流れ込んでいる。

遺物は、主室の覆土中層から土師器の坏形土器片が出土している。出土状況から、周囲から流入したもので、本跡に伴う遺物ではないものと思われる。

本跡に伴うと思われる遺物が出土しなかったため、本跡の時期を明確にすることはできなかった。

#### 第5号地下式坑 (SK67 第324図)

本跡は、D2e<sub>5</sub> 区に確認され、東側で第4号地下坑と接している。主軸方向はN-71°-Wを指し、主軸長は1.7mである。竪坑の位置は西側である。

竪坑は確認面から1.0mの深さまで掘り込まれており、底面は西に傾斜している。平面形は長辺0.85m・短辺0.63mの長方形を呈し、長辺は主軸と平行している。主室は、竪坑の底面からさらに0.25mほど掘り込まれており、底面は平坦である。平面形は北側がエリア外にかかっているため全体の規模はつかめなかったが、調査できた南壁の長さは0.9mで長方形を呈すると見られる。竪坑・主室とも、壁と底面はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑が80度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から0.9mの高さまでオーバーハングして立ち上がり、天井へ移行している。残存している天井部の厚さは30cmで、主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積であるが、竪坑から主室までの連続した面での観察はできず竪坑だけで行った。

それによると、下層には、周囲から流れ込んだと思われるローム粒子・粘土粒子を多量に含んだ黒褐色土が、その上に周囲の壁が崩落したと思われるローム粒子を多量に含む砂質の灰黄褐色土が見られる。その後も周囲から多量のローム粒子・粘土粒子・ハードローム小ブロックを含む暗褐色土・黒褐色土・にぶい黄橙色土が流入している。

遺物はまったく出土しないため、本跡の時期を明確にすることはできなかった。

#### 第6号地下式坑（SK160 第324図）

本跡は、D3b<sub>9</sub>区からD3b<sub>0</sub>区にかけて確認され、第45号住居跡の西側の一部を切って掘り込んでいる。主軸方向はN-75°-Eを指している。本跡の南側半分が道路の下に延びているため、竪坑は調査できなかった。

調査した主室は確認面から2.0mの深さまで掘り込まれており、底面は平坦で、底面の北壁の長さは1.4mである。壁はロームで硬く締まっている。主室の壁は80度の角度で外傾して立ち上がっている。

覆土は自然堆積で、下層には、天井部が崩落したと思われる黄褐色土と褐色土が堆積しており、その上に砂質で、ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土・黒褐色土・褐色土・にぶい黄褐色土が互層を成している。これらは、いずれもロームブロックを含んでいることから、天井部崩落後も残存していた天井部の一部や周囲の壁が除々に落下して堆積したものと思われる。

遺物は、主室の覆土下層から土師質土器の皿2点（第338図5・6）が出土し、また、同覆土中層から土師器の坏形土器片が出土している。中層から出土した坏形土器片は、出土状況から判断して周囲から流入したものと思われる。

出土した土師質土器の皿から時期を判断すると、中世以降と思われる。

#### 第7号地下式坑（SK217 第324図）

本跡は、C4f<sub>1</sub>区に確認され、東5.5mには第31号住居跡が存在している。主軸方向はN-22°-Eを指し、主軸長は2.2mである。竪坑の位置は南側にある。

竪坑は確認面から1.25mの深さまで掘り込まれており、平面形は一辺70cmの正方形を呈している。底面は極めて平坦で、同一レベルで主室の底面につながる。主室は、竪坑の北側に長方形に掘られており、底面の長辺は2.45m、短辺は1.45mである。竪坑・主室とも、底面はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑が78度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から1.0mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積である。下層には、砂質で多量の粘土小ブロックや黒褐色土小ブロック、少量

の小石を含む褐色土、多量のローム粒子や粘土粒子を含む暗褐色土が堆積し、その上におよそ20cmの厚さでロームがのっている。このロームは天井部が崩壊し、落下して堆積したものと考えられる。さらに、そのロームの上には、ローム粒子を含んだ褐色土・黒褐色土・暗褐色土が堆積している。これらは、天井部崩壊後、残った天井部の一部や壁等が除々に落下して堆積したものと思われる。

遺物は、主室の覆土下層から少量の鉄滓が出土している。

鉄滓しか出土していないため、本跡の時期を明確にすることはできなかった。

#### 第8号地下式坑 (SK227 第325図)

本跡は、C4d<sub>1</sub>区を中心に確認され、東側で第9号地下式坑と隣接している。主軸方向はN-30°-Eを指し、主軸長は1.3mである。竪坑の位置は南西側である。

竪坑は確認面から1.2mの深さまで掘り込まれており、平面形は一辺0.55mの正方形を呈している。底面は平坦で、同一レベルで主室の底面につながっている。主室は、竪坑の北東に不整形長方形に掘られており、底面の長辺は1.3m、短辺は0.9mである。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、壁はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑では78度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から0.7mの部分までオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。

覆土は自然堆積であるが、竪坑から連続した面での観察はできず、主室だけで行った。それによると、下層には、多量のハードローム小ブロックや粘土小ブロックを含む黒褐色土が堆積している。その上には多量のローム粒子や少量のハードローム小ブロックを含む暗褐色土が天井部付近まで堆積している。下層に含まれるハードロームブロックは、主室の天井が崩落したものと思われる。

遺物は、主室の覆土下層から少量の鉄滓が出土している。

鉄滓しか出土していないため、本跡の時期を明確にすることはできなかった。

#### 第9号地下式坑 (SK241 第325図)

本跡は、C4d<sub>1</sub>区で確認され、南東側で第10号地下式坑と隣接している。主軸方向はN-30°-Eを指し、主軸長は1.9mである。竪坑の位置は南西側である。

竪坑は確認面から1.6mの深さまで掘り込まれており、平面形は一辺0.6mの正方形を呈している。底面は平坦で、同一レベルで主室の底面につながっている。主室は、竪坑の北東に長方形に掘られており、底面の長辺は2.0m、短辺は1.35mである。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、壁はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑では80度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から0.9mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積であるが、竪坑から連続した面での観察はできず、主室だけで行った。それによると、下層には、ローム粒子・粘土粒子を含む黒褐色土が堆積し、その上に多量の粘土小ブロック少量のローム小ブロック・ローム粒子を含む暗褐色土が層を成している。さらに、上位2層にわたって同じような層を呈している。このことから天井部は3回にわたって崩落していると思われる。

遺物は、主室の覆土下層から少量の鉄滓が出土している。

鉄滓だけしか出土していないため、本跡の時期を明確にすることはできなかった。

#### 第10号地下式坑 (SK242 第325図)

本跡は、C4e<sub>2</sub>区を中心に確認され、北西側で第9号地下式坑と隣接している。主軸方向はN-14°-Eを指し、主軸長は2.55mである。竪坑の位置は南側である。

竪坑は確認面から1.2mの深さまで掘り込まれており、平面形は長辺0.8m・短辺0.55mの長方形を呈している。底面は平坦で、同一レベルで主室の底面につながっている。主室は、竪坑の北に長方形に掘られており、底面の長辺は2.3m、短辺は1.6mである。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、壁はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑では80度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から1.05mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積で、下層には、周囲の壁及び天井部の崩落によって堆積したと思われる明黄褐色土・黄褐色土・にぶい黄褐色土が見られる。その後も周囲から流入したと思われるローム粒子や粘土粒子を含む暗褐色土や黒褐色土が層を成している。

遺物は、主室の覆土下層から少量の鉄滓が出土している。

鉄滓だけしか出土していないため、本跡の時期を明確にすることはできなかった。

#### 第11号地下式坑 (SK249 第326図)

本跡は、D4a<sub>5</sub>区を中心に確認され、第39号住居跡を切って掘り込んでいる。主軸方向は、N-87°-Eを指している。竪坑の位置は中央部から南寄りである。

竪坑は確認面から円筒状に2.8mの深さに掘り込まれている。平面形は径0.9mの円形状を呈している。主室は、不整楕円形状に掘られており、底面の長径は3.4m、短径は2.8mである。長径は主軸と直交している。竪坑・主室とも、壁はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑では90度の角度で直角に立ち上がり、主室は、底面から2.1mの高さまでオーバーハ

ングして立ち上がっている。天井部の厚さは0.6mで、主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積である。下層には、周囲の壁が崩れて堆積したと思われる砂質の明黄褐色土が見られる。その上には多量の粘土小ブロック・ローム小ブロックを含む褐色土・暗褐色土・極暗褐色土が堆積している。中層から上層にかけて、堅坑から流れ込んだと思われる黒褐色土が、その上には天井部の一部分が崩落したものとと思われる褐色土・橙色土が粘土小ブロックを含んで堆積している。

遺物は、堅坑の覆土中層から土師器の環形土器片1点が出土しているだけである。出土状況から判断して、周囲から流入したもので、本跡に伴うものではないと思われる。

本跡に伴う遺物が出土していないため、時期を明確にすることはできなかった。

#### 第12号地下式坑 (SK276 第326図)

本跡は、B3h<sub>4</sub>区で確認され、北東側で第21号地下式坑に接している。主軸方向はN-30°-Eを指し、主軸長は2.8mである。堅坑の位置は北東側である。

堅坑は確認面から2.9mの深さまで掘り込まれており、底面は南に傾斜している。平面形は、長辺0.9m・短辺0.7mの長方形を呈し、長辺は主軸と平行している。主室は、堅坑の底面からさらに0.2mほど掘り込まれており、底面は平坦である。平面形は長辺2.9m・短辺1.7mの長形状を呈している。長辺は主軸と直交している。堅坑・主室とも、底面は砂質粘土で締まっている。

壁は、堅坑では82度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から1.8mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。

覆土は自然堆積で、下層には、砂質のにぶい橙色土・褐色土が堆積している。その上に堅坑から流れ込んだと思われるローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子を含む黒褐色土や周囲の壁が崩れて堆積した砂質で粘土粒子を含む暗褐色土が見られる。その後も中層から上層に、天井部が崩落したと思われるローム小ブロックを多量に含む暗褐色土が堆積している。

遺物は、主室の覆土下層から少量の鉄滓、古銭(第367図22)、羽口(第338図9)や土師質土器の皿(第338図1)が出土している。古銭は銅で鑄造されているが、腐蝕がひどく、解読は不明である。

土師質土器の皿から時期を判断すると、中世以降と思われる。

#### 第13号地下式坑 (SK277 第326図)

本跡は、B3h<sub>6</sub>区を中心に確認され、南西側で第19号地下式坑に接している。主軸方向はN-40°-Eを指し、主軸長は2.8mである。堅坑の位置は南西側である。

堅坑は確認面から2.3mの深さまで掘り込まれており、平面形は一辺0.8mの正方形を呈してい

る。底面はなだらかに傾斜して、主室の底面につながっている。主室は、竪坑の北東に不整形長方形に掘られており、底面の長辺は3.3m、短辺は1.4mである。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、底面は砂質粘土で締まっている。

壁は、竪坑では76度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から2.0mの高さまではオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。

覆土は自然堆積で、下層には、ローム小ブロック・粘土小ブロック・山砂小ブロックを多量に含む明黄褐色土・にぶい黄褐色土・褐色土が堆積している。このことから天井部が崩落してできたものと考えられる。その後も天井部や壁が崩落してローム小ブロック・ローム粒子・粘土粒子を含む褐色土・暗褐色土が堆積している。

遺物は、主室の覆土下層から少量の鉄滓が出土している。

鉄滓だけしか出土していないため、本跡の時期を明確にすることはできなかった。

#### 第14号地下式坑 (SK272 第327図)

本跡は、B3j<sub>4</sub>区を中心に確認され、北東側で第15号地下式坑に接している。主軸方向は、N-23°-Eを指している。竪坑は確認できなかった。

主室は確認面から2.1mの深さに掘り込まれており、底面は平坦である。平面形は底面の長辺が2.7m、短辺は2.0mのほぼ長方形を呈する。底面は砂質粘土で、締まりはやや弱い。

主室の壁は、底面から1.5mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積で、下層には、天井部が崩落したものと思われる砂質の黄褐色土が堆積している。中層から上層にかけては、周囲から流れ込んだと思われる多量の砂利やローム粒子及びローム小ブロック・粘土粒子を含む暗褐色土・褐色土・黒褐色土が交互に堆積している。

遺物は、主室の覆土下層から土師質土器の皿(第338図3)や破片が出土している。

出土した土師質土器の皿から時期を判断すると、中世以降と思われる。

#### 第15号地下式坑 (SK313 第327図)

本跡は、B3i<sub>5</sub>区を中心に確認され、南西側で第14号地下式坑に接している。主軸方向はN-18°-Eを指している。竪坑の位置は北側である。

竪坑は確認面から1.3mの深さに掘り込まれている。平面形は長辺3.5m、短辺は1.0mの不整形長方形を呈している。底面は平坦である。主室は、竪坑の底面からさらに0.35mほど掘り込まれており、底面は平坦である。平面形は底面の長辺が2.0m、短辺は1.3mの長方形を呈している。

主室・竪坑の底面はロームで締まっている。

壁は、竪坑が85度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から1.2mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積であるが、主室から連続した面での観察はできず、竪坑だけで行った。それによると、周囲の壁が崩落したと思われる多量のローム小ブロックを含む褐色土が下層に堆積し、その上に周囲から流れ込んだと思われる多量のローム小ブロック・ローム粒子や粘土小ブロックを含む暗褐色土・褐色土が見られる。

本跡に伴う遺物は出土していないため、時期を明確にすることはできなかった。

#### 第16号地下式坑 (SK281 第328図)

本跡は、B3j<sub>7</sub>区を中心に確認され、北側は第280号土坑を切って掘り込んでいる。主軸方向はN-20°-Eを指し、主軸長は2.45mである。竪坑の位置は南西側である。

竪坑は確認面から0.8mの深さまで掘り込まれており、底面は主室方向に傾斜している。平面形は一辺0.7mの正方形を呈している。主室は、竪坑の底面からさらに0.3mほど掘り込まれており、底面は平坦である。平面形は底面の長辺が2.6m、短辺は1.7mの長方形状を呈する。竪坑・主室とも、壁はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑では82度の角度で立ち上がり、主室は、底面から0.9mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積で、下層には、天井部が崩落したと思われる黄褐色土・明黄褐色土が堆積している。その上に竪坑から流れ込んだと思われるローム小ブロック・ローム粒子を含む黒褐色土が見られる。その後も周囲の壁や天井部が崩落して堆積したと思われるハードローム小ブロックやローム粒子・粘土小ブロック・パミス小ブロック・砂利を含む褐色土・にぶい黄褐色土・暗褐色土が交互に堆積している。

遺物はまったく出土しなかったため、時期を明確にすることはできなかった。

#### 第17号地下式坑 (SK303 第328図)

本跡は、C3b<sub>8</sub>区からC3c<sub>8</sub>区にかけて確認され、東側で第304・305号土坑と隣接している。主軸方向はN-17°-Eを指し、主軸長は2.35mである。竪坑の位置は北側である。

竪坑は確認面から1.1mの深さまで掘り込まれており、底面は南に傾斜している。平面形は長辺1.0m・短辺0.9mのほぼ正方形を呈し、長辺は主軸と平行している。主室は、竪坑の底面からさらに0.2mほどなだらかに掘り込まれており、底面は平坦である。平面形は長辺2.1m・短辺1.35mの長方形状を呈している。竪坑・主室とも、底面は砂質粘土で締まっている。

壁は、竪坑が87度の角度で外傾して立ち上がっている。主室は、底面から0.7mの高さまでオー

バーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積であるが、竪坑から連続した面での観察はできず、主室だけで行った。それによると、下層には、天井部が崩落して堆積した砂質粘土を多量に含む褐色土が見られ、その上には周囲の壁がさらに崩壊して堆積したと思われるにぶい黄褐色土がある。その後も周囲から流入したと思われる多量のパミスや少量のローム小ブロック・ローム粒子を含む暗褐色土や褐色土が堆積している。

遺物は、主室の覆土下層から少量の鉄滓が出土している。

鉄滓しか出土していないため、本跡の時期を明確にすることはできなかった。

#### 第18号地下式坑 (SK574 第328図)

本跡は、A4c<sub>0</sub> 区に確認され、南2.0m には第578号土坑が存在している。主軸方向はN-20°-Wを指し、主軸長は2.1m である。竪坑の位置は南東側である。

竪坑は確認面から0.9m の深さまで掘り込まれており、平面形は長辺1.0m・短辺0.6m の長方形を呈している。底面は平坦で、同一レベルで主室の底面につながる。主室は、竪坑の北西側に不整形長方形に掘られており、底面の長辺は2.5m、短辺は1.3m である。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、壁はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑では80度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から0.3m の高さまでしか確認できず、それより上位は表土除去のとき削平されてしまったので調査できなかった。

覆土は自然堆積で、下層には、竪坑から流れ込んだと思われる黒褐色土が層を成し、その上に周囲の壁が崩落したと思われる灰黄褐色土が堆積している。さらに、その後も周囲から流入したと思われる黒褐色土や暗褐色土が層を成している。なお、上層は表土除去のとき削平されてしまったので確認できなかった。

遺物はまったく出土していなかったため、時期を明確にすることはできなかった。

#### 第19号地下式坑 (SK314 第329図)

本跡は、B3i<sub>6</sub> 区を中心に確認され、北東側で第13号地下式坑に接している。主軸方向はN-32°-Eを指し、主軸長は2.4m である。竪坑の位置は南西側である。

竪坑は確認面から2.1m の深さまで掘り込まれており、平面形は一辺0.7m の正方形を呈している。底面は平坦で、同一レベルで主室の底面につながっている。主室は、竪坑の北東に長方形に掘られており、底面の長辺は2.8m、短辺は1.8m である。長辺は主軸と直交している。底面は、竪坑・主室とも砂質粘土である。



壁は、竪坑が85度の角度で外傾して立ち上がっている。主室は、底面から1.35mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積であるが、竪坑から連続した面での観察はできず、主室だけで行った。それによると、下層には、天井部が崩落したと思われる浅黄色土・明黄褐色土が堆積している。その後も周囲の壁や天井部が崩れて堆積したと思われるローム粒子・ハードローム小ブロックを含む明黄褐色土・にぶい黄橙色土・暗褐色土が見られる。

遺物は、主室の北壁中央部底面から頭骨が出土し、また、覆土下層から少量の鉄滓や土師質土器の皿（第338図4）も出土している。

出土した土師質土器の皿から時期を判断すると、中世以降と思われる。

#### 第20号地下式坑（SK320 第329図）

本跡は、C3d<sub>0</sub>区を中心に確認され、東側で第8号地下式坑に隣接している。主軸方向はN-22°-Eを指し、主軸長は2.4mである。竪坑の位置は南西側である。

竪坑は確認面から1.4mの深さまで掘り込まれており、平面形は一辺0.5mの正方形を呈している。底面は平坦で、同一レベルで主室の底面につながっている。主室は、竪坑の北東に長方形に掘られており、底面の長辺は2.6m、短辺は1.5mである。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、底面は砂質粘土で締まっている。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

壁は、竪坑が80度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から1.05mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。

覆土は自然堆積で、下層には、竪坑から流れ込んだと思われる砂質でローム小ブロックや少量の粘土粒子・ローム粒子を含む黒褐色土が、その上には周囲の壁や天井部が崩落したと思われる砂質で多量のローム粒子や少量のローム小ブロック・粘土小ブロックを含むにぶい黄褐色土が堆積している。その後も周囲から砂質で多量のローム粒子・粘土粒子、少量の粘土小ブロック・ローム小ブロックを含む暗褐色土や黒褐色土が流入して層を成している。

遺物は本跡に伴うと思われるものが出土せず、時期を明確にできなかった。

#### 第21号地下式坑（SK328 第330図）

本跡は、B3g<sub>5</sub>区を中心に確認され、南西側で第12号地下式坑に接している。主軸方向はN-37°-Eを指し、主軸長は2.45mである。竪坑の位置は北東側である。

竪坑は確認面から1.7mの深さまで掘り込まれており、平面形は一辺0.8mの正方形を呈している。底面は平坦で、同一レベルで主室の底面につながっている。主室は、竪坑の南西に長方形状

に掘られており、底面の長辺は3.0m、短辺は1.6mである。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、底面と壁は砂質粘土で締まっている。

壁は、竪坑が85度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から1.3mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積で、下層には、竪坑から流れ込んだと思われる黒褐色土が、その上には天井部及び周囲の壁が崩れて堆積したと思われる砂質粘土小ブロックを含むにぶい黄褐色土・にぶい黄橙色土が見られる。その後も天井部が崩れて堆積したと思われる砂質粘土小ブロックを含む黄褐色土・明黄褐色土が見られる。

遺物は本跡に伴うと思われるものが出土せず、時期を明確にできなかった。

#### 第22号地下式坑（SK641 第330図）

本跡は、D2i<sub>9</sub>区に確認され、南西で第41号地下式坑に隣接している。主軸方向はN-80°-Wを指し、主軸長は2.5mである。竪坑の位置は西側である。

竪坑は確認面から1.3mの深さまで掘り込まれており、平面形は一辺1.0mの正方形を呈している。底面は主室方向に傾斜して、そのまま主室の底面につながっている。主室は竪坑の東に長方形に掘られており、底面の長辺は2.75m、短辺は1.7mである。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、壁はロームで締まっている。

壁は、竪坑が85度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から1.1mの高さまでオーバーハングして立ち上がり、天井へ移行している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積で、下層には、ワラ灰のような炭化物と焼土が床面を覆っており、その上に竪坑から流れ込んだと思われるローム小ブロック・ローム粒子を含む褐色土が見られる。さらに、中層から上層には、天井部の一部や周囲の壁が崩落したと思われるローム小ブロック・ローム粒子を含む暗褐色土が堆積し、その周囲から流れ込んだと思われる黒褐色土が見られる。

遺物は本跡に伴うと思われるものが出土せず、時期を明確にできなかった。

#### 第23号地下式坑（SK657 第331図）

本跡は、D3i<sub>2</sub>区を中心に確認され、北1.2mに第24号地下式坑が存在している。主軸方向はN-60°-Wを指し、主軸長は2.45mである。竪坑の位置は北西側である。

竪坑は確認面から1.6mの深さまで掘り込まれており、平面形は長辺1.0m・短辺0.8mの長方形を呈している。底面は主室方向に傾斜して、そのまま主室の底面につながっている。主室は、竪坑の南東に長方形に掘られており、底面の長辺は2.75m、短辺は1.2mである。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、壁はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑が80度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から1.0mの高さまでオーバーハングして立ち上がり、天井に移行している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積であるが、竪坑から連続した面での観察はできず、竪坑だけで行った。それによると、下層には、周囲から流れ込んだと思われるローム小ブロック・粘土小ブロックを含む黒褐色土が、その上にはローム小ブロックを多量に含む暗褐色土が見られる。その後も、周囲からローム小ブロック・粘土粒子を含む黒褐色土や暗褐色土が流れ込んで堆積している。

遺物は、主室の覆土下層から少量の鉄滓が出土している。

鉄滓だけでは本跡の時期を明確にすることはできなかった。

#### 第24号地下式坑（SK658 第331図）

本跡は、D3h<sub>2</sub>区を中心に確認され、南1.1mには第23号地下式坑が存在している。主軸方向はN-47°-Wを指し、主軸長は2.5mである。竪坑の位置は北西側である。

竪坑は確認面から1.0mの深さまで掘り込まれており、平面形は一辺0.9mの正方形を呈している。底面は主室方向に傾斜して、そのまま主室に続き、主室の底面は平坦である。平面形は底面の長辺2.65m・短辺1.6mの長形状を呈している。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、底面はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑が80度の角度で外傾して立ち上がっており、主室は、底面から1.2mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積で、下層には、竪坑から流れ込んだと思われるローム小ブロックを含む黒褐色土が、その上には天井部や周囲の壁が崩れて堆積したと思われるロームが見られる。その後、周囲から流れ込んだと思われるローム小ブロックを含む黒褐色土が堆積したり、さらに、上層には天井部の一部分や周囲の壁が崩落したものとされるロームが層を成している。

遺物は本跡に伴うと思われるものが出土せず、時期を明確にできなかった。

#### 第25号地下式坑（SK660 第331図）

本跡は、D2j<sub>7</sub>区に確認され、北3.0mに第17号掘立柱建物跡が存在している。主軸方向はN-15°-Eを指し、主軸長は2.3mである。竪坑の位置は北側である。

竪坑は確認面から0.85mの深さまで掘り込まれており、平面形は長辺0.9m・短辺0.7mの長形状を呈している。底面は平坦で、同一レベルで主室の底面につながっている。主室は、竪坑の南側に長形状に掘られており、底面の長辺は3.05m、短辺は1.4mである。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、壁はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑では85度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から1.0mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積で、下層には、竪坑から流れ込んだと思われる黒褐色土が、その上には周囲の壁が崩れて堆積したと思われるローム小ブロックを含む褐色土が見られる。主室では、中層から上層にかけては、天井部が崩落したものである多量の粘土小ブロック・ローム小ブロックが堆積し、あわせて周囲から流入したと思われる黒褐色土が層を成している。

遺物はまったく出土しないため、時期を明確にすることはできなかった。

#### 第26号地下式坑（SK410 第332図）

本跡は、A3g<sub>8</sub>区を中心に確認され、第97号住居跡の中央部を切って掘り込まれている。また、本跡の西側上層は、第1道路跡によって切られている。従って、本跡は、第97号住居跡より新しく、第1号道路跡より古い。主軸方向はN-35°-Wを指している。竪坑の位置は東側である。本跡の北側半分が、調査エリア外に伸びているため全体を調査することはできなかった。

調査できた竪坑は、確認面から1.1mの深さまで掘り込まれているが、平面形は半分以上エリア外に伸びているため確認できなかった。底面は主室方向に傾斜している。主室は、竪坑の底面からさらに0.5mほど掘り込まれており、底面は平坦である。奥行は2.2mである。竪坑と主室の底面は砂質粘土で締まっている。

壁は、竪坑は75度の角度で外傾して立ち上がり、主室はほぼ垂直に立ち上がっている。

覆土は自然堆積で、下層から中層にかけては、竪坑から主室に流れ込んだと思われる黒褐色土が堆積し、主室では、その上に天井部の崩落によって堆積したローム粒子や粘土小ブロックを含む暗褐色土が堆積している。その後、周囲から暗褐色土や黒褐色土が流れ込んでいる。

遺物は本跡に伴うと思われるものは出土せず、時期を明確にできなかった。

#### 第27号地下式坑（SK760 第332図）

本跡は、E3a<sub>4</sub>区に確認され、南東1.2mには第38号地下式坑が存在している。主軸方向はN-60°-Wを指し、主軸長は2.0mである。竪坑の位置は北西側である。

竪坑は確認面から1.5mの深さまで掘り込まれており、平面形は長辺0.65m・短辺0.5mの長方形を呈している。底面は平坦で、同一レベルで主室の底面につながっている。主室は、竪坑の南東に長方形に掘られており、底面の長辺は1.8m、短辺は1.3mである。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、底面はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑は80度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から1.3mの高さまでオーバーハングして立ち上がり、天井部へ移行している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積で、下層には、小石が敷き詰められており、その上に周囲の壁や天井部の一部が崩落したと思われるローム大ブロックを含む褐色土が見られる。その後、ローム小ブロック・ローム粒子を含む暗褐色土が流れ込んでいる。

遺物は、主室奥壁（南東）下からわずかに人骨が出土している。人骨は、腐蝕がひどく、もろく崩れてしまっている。この他には本跡に伴うと思われるものが出土せず、時期を明確にできなかった。

#### 第28号地下式坑（SK659 第333図）

本跡は、E3a<sub>1</sub> 区を中心に確認され、東3.0m に第667号土坑が存在している。主軸方向はN-52°-Eを指し、主軸長は4.8m である。竪坑は南西側である。

竪坑は確認面から2.7m の深さまで掘り込まれており、底面の長径は2.1m、短径は1.6m で、楕円形を呈している。底面は平坦で、同一レベルで主室の底面につながっている。主室は、竪坑の北東に不整長方形に掘られており、底面の長辺は3.6m、短辺は3.0m である。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、壁はロームで硬く締まっている。主室の中央から北東寄りの底面には、長径1.3m・短径1.2m の楕円形を呈し、0.4m ほどの深さを有する土坑が検出されている。覆土の状況から同時期に構築されたものと思われる。

壁は、竪坑では底面から1.5m の高さまでオーバーハングして立ち上がり、その上は85度の角度で立ち上がっている。主室も、底面から1.3m の高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積で、下層には、天井部や周囲の壁が崩落したと思われるローム小ブロックや粘土小ブロックを含んだ褐色土・にぶい黄褐色土が堆積している。その後、中層から上層にかけても、天井部の一部や周囲の壁がさらに崩落したと思われるローム小ブロック・ローム粒子・粘土小ブロックを含む明黄褐色土・暗褐色土・黄褐色土が堆積している。また、周囲から流入したと思われる黒褐色土が層を成している。

遺物は、主室の覆土下層から少量の鉄滓が出土している。

鉄滓だけでは本跡の時期を明確にできなかった。

#### 第29号地下式坑（SK680 第333図）

本跡は、D3g<sub>3</sub> 区を中心に確認され、西側で第720号土坑と重複しており、土層断面で見ると本跡が切られている。本跡の北側は、道路下に延びているため確認できなかった。主軸方向はN-13°-Eを指している。竪坑は検出できなかったが、おそらくエリア北側の道路の下に存在すると思われる。

主室は、長方形に掘られており、底面の長辺は4.6m、短辺は1.7mである。底面は平坦である。長辺は主軸と直交している。壁はロームで硬く締まっている。

壁は、主室で底面から1.3mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積であるが、竪坑から連続した面での観察はできず、主室だけで行った。それによると、下層には、天井部が崩落したものと思われる褐色土が堆積している。中層から上層にかけては、周囲から流れ込んだと思われるローム小ブロックやローム粒子を含む暗褐色土・黒褐色土・褐色土が堆積している。

遺物は、主室の覆土下層から土師質土器の皿（第338図7）や破片が出土している。

出土した土師質土器の皿から時期を判断すると、中世以降と思われる。

### 第30号地下式坑（SK685 第334図）

本跡は、D3g<sub>5</sub>区を中心に確認され、北側で第684・686号土坑と重複しており、土層断面で見ると本跡が切られている。主軸方向はN-28°-Eを指し、主軸長は2.8mである。竪坑の位置は北東側である。

竪坑は確認面から1.2mの深さに掘り込まれている。平面形は長辺1.1m・短辺0.9mの長方形を呈している。底面は平坦である。主室は、竪坑の底面からさらに0.95mほど掘り込まれており、底面は平坦である。平面形は底面の長辺5.1m・短辺1.7mの長方形を呈する。長辺は主軸と直交している。主室・竪坑の壁はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑が85度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から1.45mの高さまでオーバーハングして立ち上がり、天井へ移行している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。また、主室の北西コーナー部と第31号地下式坑の南東コーナー部とがトンネルでつながっている。トンネルの長さは0.3m、幅は0.3m、底面からの高さは1.2mである。トンネルの壁や底面はロームで硬く締まっている。

覆土は自然堆積であるが、下層には、天井部の一部が崩落したものと思われる褐色土が堆積している。中層から上層にかけては、周囲から流れ込んだと思われるローム小ブロックやローム粒子を含む暗褐色土・黒褐色土・褐色土が交互に堆積している。

遺物は、主室の覆土下層から少量の鉄滓が出土している。

鉄滓だけでは本跡の時期を明確にすることはできなかった。

### 第31号地下式坑（SK807 第334図）

本跡は、D3g<sub>4</sub>区に確認され、南東側で第30号地下式坑と隣接している。主軸方向はN-44°-E

を指し、竪坑はなく、本跡の主室の南コーナー部と第30号地下式坑の主室の北西コーナー部がトンネルでつながっている。

主室は、底面の長辺が2.0m、短辺は1.1mの長方形を呈している。底面は平坦で、ロームが硬く踏み固められている。壁は底面から1.15mの高さまでオーバーハングして立ち上がり天井部へ移行している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は調査上、周辺が崩落しやすく、危険を伴うので記録しなかった。覆土中から天井部の一部と思われるローム小ブロックを含む暗褐色土が見られる。

遺物は本跡に伴うと思われるものが出土せず、時期を明確にできなかった。

### 第32号地下式坑 (SK640 第334図)

本跡は、D4h<sub>5</sub> 区に確認され、第103号住居跡の北側を切って掘り込まれている。土層断面から見ると本跡の方が新しい。主軸方向はN-15°-Eを指し、主軸長は2.75mである。竪坑の位置は東側である。

竪坑は確認面から2.0mの深さまで掘り込まれており、平面形は一辺0.9m前後の方形を呈している。底面は平坦で、同一レベルで主室につながっている。主室は、竪坑の西側に長方形に掘られており、底面の長辺は2.95m、短辺は1.8mである。長辺は主軸と平行している。竪坑・主室とも、底面はロームで締まっている。

壁は、竪坑が80度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から1.4mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積で、下層から中層にかけて、天井部が崩落したと思われるローム小ブロックやローム粒子を含む褐色土が堆積し、その上に周囲から流れ込んだと思われるローム粒子を含む暗褐色土や黒褐色土が交互に堆積している。

遺物は、主室の覆土上層から土師器の壺形土器片や内耳形土器片が出土している。これらは、出土状況から判断して、周囲から流入したもので、本跡に伴うものではないと思われる。

本跡に伴う遺物が出土していないため、時期を明確にすることはできなかった。

### 第33号地下式坑 (SK688 第334図)

本跡は、D3g<sub>7</sub> 区を中心に確認され、西側で第34号地下式坑と重複し、土層断面から見て本跡の方が新しい。主軸方向はN-34°-Wを指し、主軸長は2.8mである。竪坑の位置は南東側である。

竪坑は確認面から1.1mの深さまで掘り込まれており、平面形は長辺1.6m・短辺1.1mの不整形長方形を呈し、主室の手前0.8m付近の底面は0.25mほど鍋底状に掘り込まれている。主室は、竪坑の北西に長方形に掘られており、底面の長辺は2.0m、短辺は1.2mで、底面は鍋底状に0.45mほ

ど掘り込まれている。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、壁はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑が65度の角度で外傾して立ち上がり、主室も40度の角度で内傾して立ち上がっている。

覆土は自然堆積であるが、竪坑から連続した面での観察はできず、主室だけで行った。それによると、下層には、天井部が崩落したと思われるローム小ブロックを含む黄褐色土が堆積し、その上に周囲から流れ込んだと思われるローム小ブロック・ローム粒子や粘土小ブロックを含む黒褐色土と暗褐色土が見られる。中層から上層にかけても、周囲から流れ込んだローム小ブロックや砂礫を含むにぶい黄褐色土・暗褐色土・褐色土が交互に堆積している。

遺物は、主室の覆土下層から少量の鉄滓が出土している。

鉄滓だけでは、本跡の時期を明確にすることはできなかった。

#### 第34号地下式坑 (SK687 第335図)

本跡は、D3g<sub>6</sub> 区を中心に確認され、南側で第35号地下式坑、東側で第33号地下式坑と重複しており、土層断面で見ると本跡が新しい。主軸方向はN-2°-Wを指し、主軸長は2.15mである。竪坑の位置はほぼ北側である。

竪坑は確認面から3.0mの深さまで掘り込まれており、平面形は長辺1.0m、短辺は0.8mの長方形を呈している。底面は平坦で、同一レベルで主室の底面につながっている。主室は、竪坑の南に長方形に掘られており、底面の長辺は3.9m、短辺は1.0mである。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、壁は砂質粘土で締まっている。

壁は、竪坑が87度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から1.2mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積であるが、竪坑から連続した面での観察はできず、主室だけで行った。それによると、下層には、天井部が崩落したと思われるロームが堆積し、その上に周囲から流れ込んだと思われる多量のローム小ブロックや砂質粘土を含む黒褐色土・暗褐色土・褐色土が交互に堆積している。

遺物は、主室の覆土下層から少量の鉄滓やまとまって古銭4点(第367図12~15)が出土している。古銭は銅で铸造されている。

出土した古銭から時期を判断すると、中世以降と思われる。

#### 第35号地下式坑 (SK689 第335図)

本跡は、D3h<sub>6</sub> 区を中心に確認され、北側で第34号地下式坑と、南側で第36号地下式坑と重複し



ている。土層断面で見ると本跡は両土坑に切られていることから、3基の地下式坑の中で最も古い。主軸方向はN-9°-Eを指し、確認できた主軸長は2.0mである。竪坑の位置は北側である。

竪坑の深さは重複のため確認できなかったが、底面は平坦で、同一レベルで主室につながる。主室は、竪坑の南に長方形に掘られており、底面の長辺は5.1m、短辺は1.5mである。長辺は主軸と直交している。主室・竪坑の壁は砂質粘土で硬く締まっている。

壁は、主室では、底面から1.2mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積であるが、竪坑から連続した面での観察はできず、主室だけで行った。それによると、下層には、天井部が崩落したと思われるロームが堆積し、中層から上層にかけては、周囲の壁から流れ込んだと思われる多量のローム粒子や粘土粒子を含む黄褐色土・褐色土・黒褐色土が堆積している。

遺物は本跡に伴うと思われるものが出土せず、時期を明確にできなかった。

#### 第36号地下式坑 (SK690 第335図)

本跡は、D3h6区を中心に確認され、北側で第35号地下式坑と重複しており、土層断面で見ると本跡が切っていることから、第35号地下式坑より新しい。主軸方向はN-24°-Eを指し、主軸長は2.1mである。竪坑の位置は北東側である。

竪坑は確認面から2.8mの深さまで掘り込まれており、平面形は長辺1.1m・短辺0.9mの長方形を呈している。底面は平坦で、同一レベルで主室の底面につながっている。主室は、竪坑の南東に長方形に掘られており、底面の長辺は5.6m、短辺は1.3mである。長辺は主軸と直交している。竪坑と主室の底面は砂質粘土で締まっている。

壁は、竪坑は80度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から1.8mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積であるが、竪坑から連続した面での観察はできず、主室だけで行った。それによると、下層には、天井部が崩落したと思われるロームが砂質粘土の上に堆積し、中層から上層にかけて、多量のローム粒子やパミスを含む黒褐色土や暗褐色土が、周囲から流れ込んで堆積している。

遺物は、主室の覆土下層から土師器の皿1点(第338図8)が出土し、また、同中層から周囲から流れ込んだと思われる土師質土器の坏形土器片が出土した。

出土した土師質土器の皿から時期を判断すると、中世以降と思われる。

### 第37号地下式坑 (SK691 第336図)

本跡は、D3i<sub>8</sub> 区を中心に確認され、南で第753号土坑に隣接している。主軸方向はN-44°-Wを指し、主軸長は2.5mである。竪坑の位置は北西側である。

竪坑は確認面から1.4mの深さまで掘り込まれており、平面形は一辺0.8mの正方形を呈している。底面は平坦で、同一レベルで主室の底面につながっている。主室は、竪坑の南東に長方形に掘られており、底面の長辺は3.7m、短辺は1.6mである。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、底面はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑が75度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から1.0mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積で、下層には、竪坑から流れ込んだと思われる少量のローム粒子を含む黒褐色土が、その上には天井部が崩落したと思われるロームが見られる。その後、中層から上層には、周囲から流れ込んだと思われるローム小ブロックやローム粒子を含む黒褐色土・暗褐色土が堆積し、その上に天井部の一部分や周囲の壁が崩落したと思われるロームが見られる。

遺物は、主室の覆土下層から内耳形土器片1点が出土している。

出土した内耳形土器片から時期を判断すると、中世以降と思われる。

### 第38号地下式坑 (SK692 第336図)

本跡は、E3b<sub>4</sub> 区を中心に確認され、北西1.2mに第27号地下式坑が存在している。主軸方向はN-40°-Wを指し、主軸長は2.7mである。竪坑の位置は北西側である。

竪坑は確認面から1.6mの深さまで掘り込まれており、平面形は長径0.7m・短径0.6mの長方形を呈している。底面は主室方向に傾斜して、そのまま主室に続き、主室の底面は平坦である。平面形は底面の長辺3.5m・短辺2.0mの長方形を呈している。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、底面はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑が75度の角度で外傾して立ち上がっており、主室は、底面から2.2mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状をしている。

覆土は自然堆積で、下層には、竪坑から流れ込んだと思われる小石を含む暗褐色土が、その上には周囲の壁が崩落したと思われる小石・ローム小ブロックを含む褐色土が見られる。主室では、中層から上層にかけて、天井部が崩落したと思われる多量の砂礫・ハードローム小ブロックを含む褐色土が堆積している。さらに、その後も周囲からローム小ブロックやローム粒子を含む黒褐色土が流入してきたと思われる痕跡が窺える。

遺物は本跡に伴うと思われるものが出土せず、時期を明確にできなかった。

#### 第39号地下式坑 (SK813 第336図)

本跡は、H2d<sub>9</sub> 区を中心に確認され、第20号掘立柱建物跡の北側と第814号土坑の南側を切って掘り込んでいる。主軸方向はN-86°-Eを指し、主軸長は3.4mである。竪坑の位置は東側にある。

竪坑は確認面から0.78mの深さまで掘り込まれており、平面形は長辺1.4m・短辺1.0mの長方形を呈している。底面は主室方向に傾斜している。主室は、竪坑の底面からさらに0.1mほど掘り込まれており、底面は平坦である。平面形は底面の長辺2.7m・短辺2.25mの隅丸長方形を呈している。長辺は主軸と直交している。竪坑・主室とも、底面はロームで硬く締まっている。

壁は、竪坑では70度の角度で外傾して立ち上がっている。主室では、底面から0.55mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。

覆土は自然堆積で、下層には、竪坑から流れ込んだと思われるローム粒子やパミスを含む黒褐色土が、その上には天井部や周囲の壁が崩れて堆積したと思われるロームが見られる。主室では、その後も周囲から流れ込んだと思われるローム粒子を多量に含む黒褐色土が堆積している。

遺物は本跡に伴うと思われるものが出土せず、時期を明確にすることはできなかった。

#### 第40号地下式坑 (SK693 第337図)

本跡は、D3f<sub>7</sub> 区に確認され、南西1.3mに第34号地下式坑、南1.0mに第33号地下式坑が存在している。主軸方向はN-5°-Wを指し、北側が道路の下に延びているため調査できず、竪坑も確認できなかった。

調査できた主室は、底面の東西の長さが4.25mで、底面から2.0mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。底面は平坦で、壁や底面は砂質粘土で締まっている。

覆土は自然堆積で、下層には、天井部が崩落したと思われる砂質で多量の砂利を含んだ褐色土が堆積し、中層から上層にかけては、周囲の壁が崩落して流れ込んだと思われる多量のローム粒子・ハードローム小ブロックやパミス中ブロックを含む黒褐色土と暗褐色土が堆積している。

遺物は、主室の覆土下層から土師質土器の皿1点(第338図2)が出土している。

出土した土師質土器の皿から時期を判断すると、中世以降と思われる。

#### 第41号地下式坑 (SK745 第337図)

本跡は、D2j<sub>8</sub> 区を中心に確認され、北東で第22号地下式坑に接している。主軸方向はN-14°-Eを指し、竪坑の位置は検出できなかった。

主室は、底面の径4.8m前後で、ほぼ円形状に掘られている。主室の壁と底面は砂質粘土でやや

崩れやすい。

主室の壁は、底面から2.4mの高さまでオーバーハングして立ち上がり、天井へ移行している。主室の横断面はフラスコ状を呈し、底面の中心から半径1.5mの範囲は、底面から0.55mほど皿状に掘り込まれている。

主室の覆土は自然堆積で、下層には、小石を含む砂質粘土で、その上に周囲の壁が崩落したと思われるローム小ブロックを含む褐色土と暗褐色土が相互に堆積し、その周囲から流れ込んだと思われる黒褐色土が見られる。中層から上層にかけては、天井部や周囲の壁の一部が崩落したと思われるローム小ブロックや砂礫を含む褐色土もしくは黄褐色土や暗褐色土が互層を成して堆積し、その上に周辺から流れ込んだと思われる黒褐色土が見られる。

遺物は、主室の覆土下層から内耳形土器片や少量の鉄滓が出土している。

出土した内耳形土器片から時期を判断すると、中世以降と思われる。

#### 第42号地下式坑 (SK362 第337図)

本跡は、C3a<sub>0</sub>区を中心に確認され、第5号溝を切って掘り込まれている。主軸方向はN-73°-Wを指し、主軸長は1.6mである。竪坑の位置は西側である。

竪坑は確認面から0.7mの深さまで掘り込まれており、平面形は長辺0.6m・短辺0.55mのほぼ正方形を呈している。主室はさらに、竪坑の東側に0.3mほど掘り込まれている。平面形は長辺3.0m・短辺1.0mの長方形を呈し、長辺は主軸と直交している。底面は、竪坑・主室とも砂質の黄褐色土で硬く締まっている。

壁は、竪坑が75度の角度で外傾して立ち上がり、主室は、底面から1.0mの高さまでオーバーハングして立ち上がっている。天井部は崩落している。主室の横断面はフラスコ状を呈している。

覆土は自然堆積である。下層には、竪坑から流れ込んだと思われる黒褐色土が、その上には天井部が崩れて堆積したと思われるにぶい黄褐色土が見られる。さらに、周囲から流れ込んだと思われる多量のローム粒子や極少量の木炭小ブロックを含む黒褐色土や暗褐色土が堆積している。

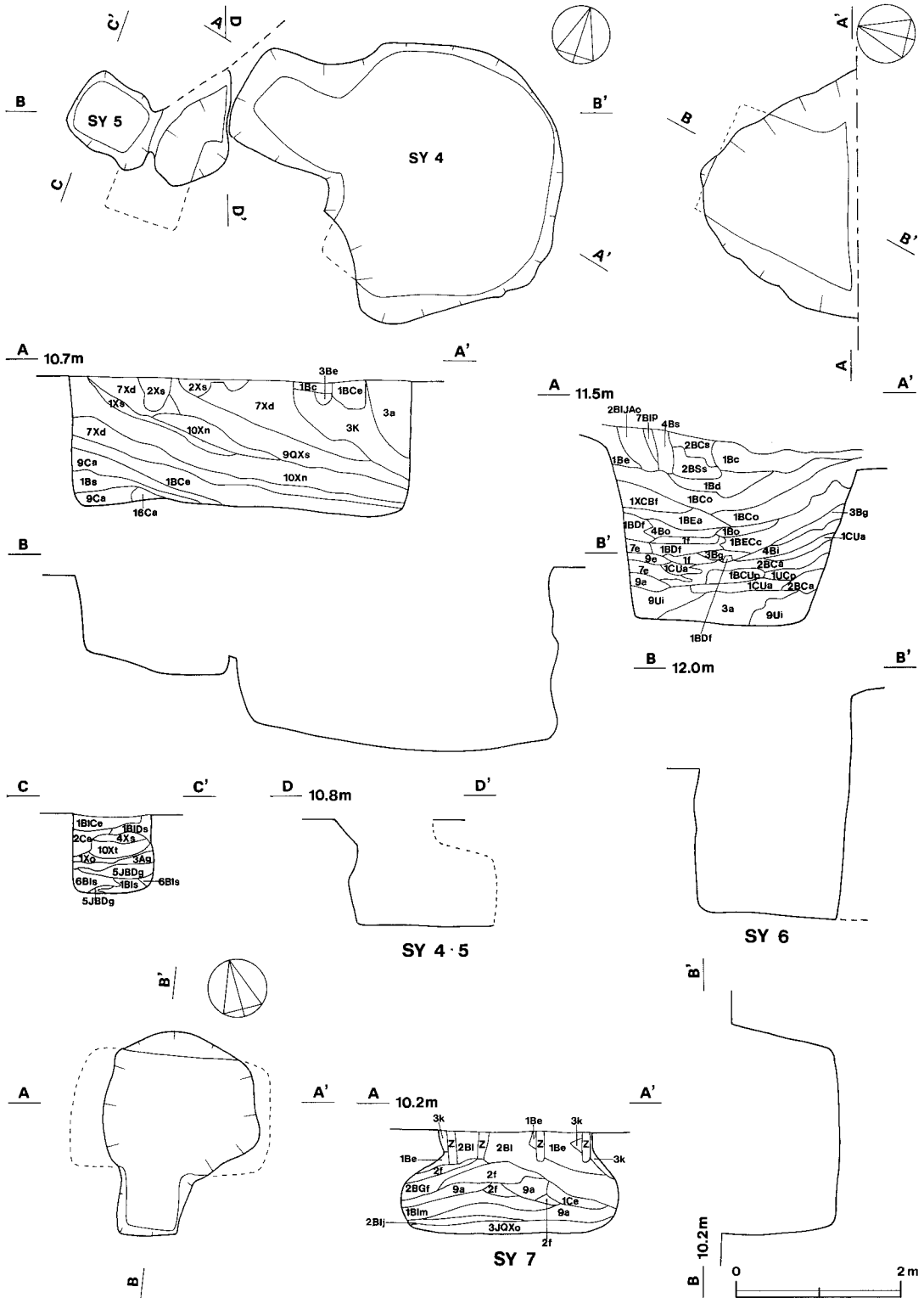
遺物は、主室の覆土下層から人骨が出土し、中層からは周囲から流入したと思われる土師器片が出土している。

人骨だけでは、本跡の時期を明確にすることはできなかった。

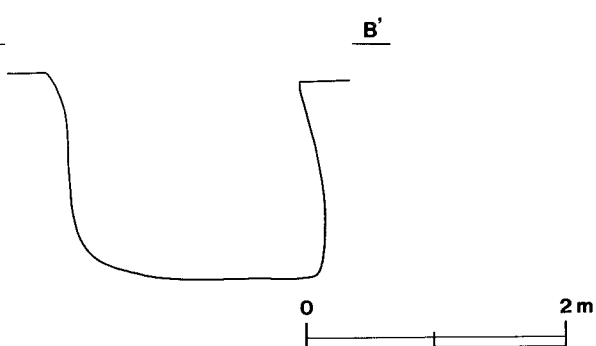
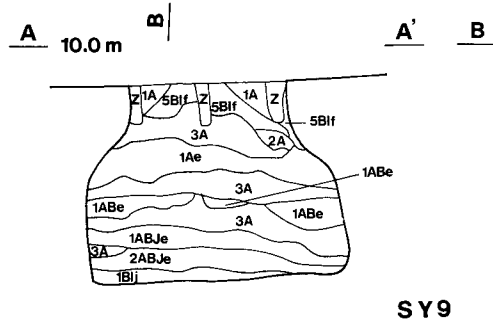
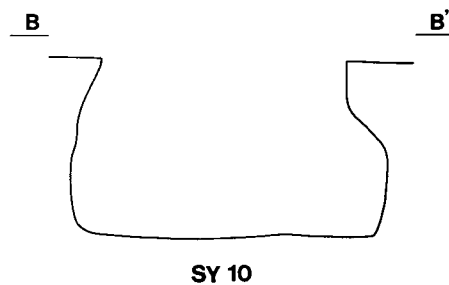
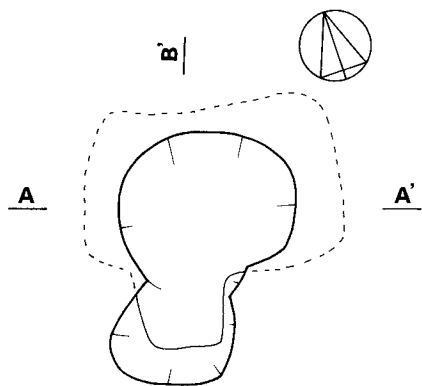
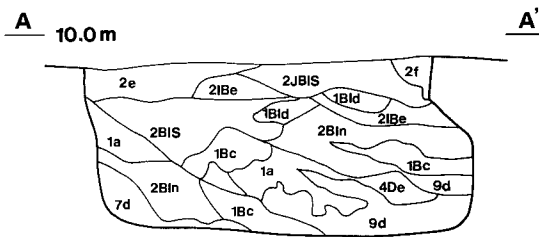
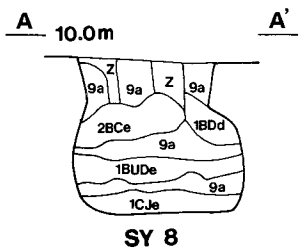
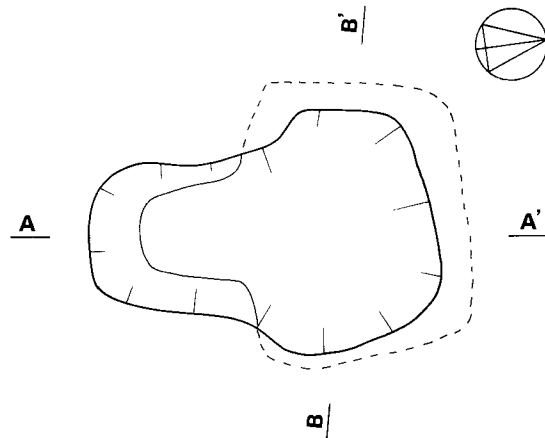
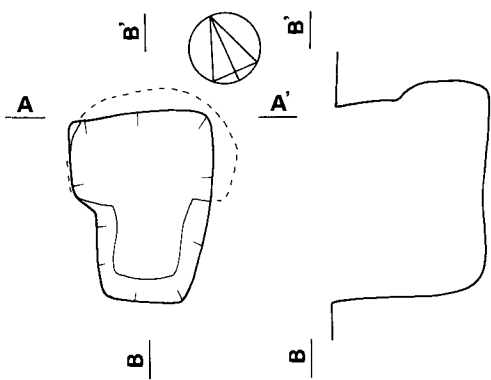
地下式坑出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第338図 1	皿 土師質土器	A ( 6.0)	平底で、底径が小さい。体部は内 彎気味に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	P928 60% SY12覆土
		B 1.5				
		C 2.4				
2	皿 土師質土器	A 6.1	平底で、体部は直線的に開き、口 唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P965 90% SY40覆土
		B 1.7				
		C 3.6				
3	皿 土師質土器	A 7.0	平底で、底部薄手。体部は器肉厚 く、直線的に開き、口唇部は丸味 を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	P926 70% SY14覆土
		B 1.8				
		C 4.2				
4	皿 土師質土器	A 11.5	平底で、体部は器厚を減じながら 直線的に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 外面にぶい褐色 内面褐色 普通	P930 95% SY19覆土
		B 3.5				
		C 5.2				
5	皿 土師質土器	A 10.4	平底で、体部は内彎気味に開き、 口唇部は分厚く丸味を帯びている。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア・ 長石 橙色 普通	P915 60% SY 6 覆土
		B 2.5				
		C 4.6				
6	皿 土師質土器	A 10.2	平底で、体部は器厚を減じながら 直線的に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	P916 90% SY 6 覆土
		B 4.3				
		C 4.8				
7	皿 土師質土器	A 11.0	平底で、体部は直線的に開き、口 縁部は僅かに外傾する。	水挽き成形。 底部回転糸切り後、ナデ。 体部外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P959 80% SY29覆土
		B 3.0				
		C 5.4				
8	皿 土師質土器	A 10.6	平底で、体部は直線的に開き、口 唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P963 80% SY36覆土
		B 2.7				
		C 5.3				



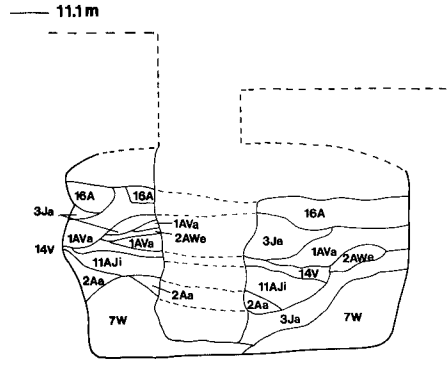
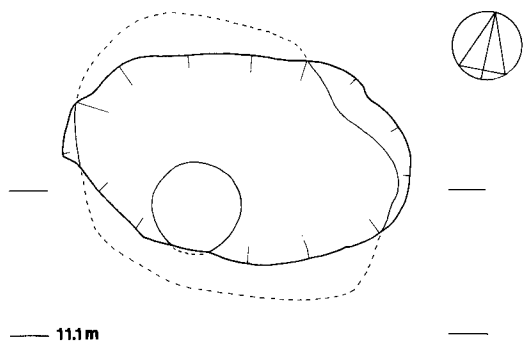


第324图 地下式坑实测图(2)

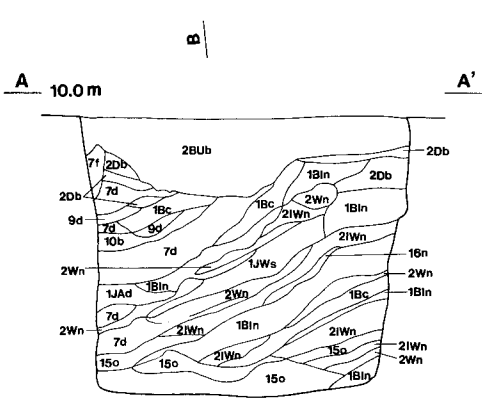
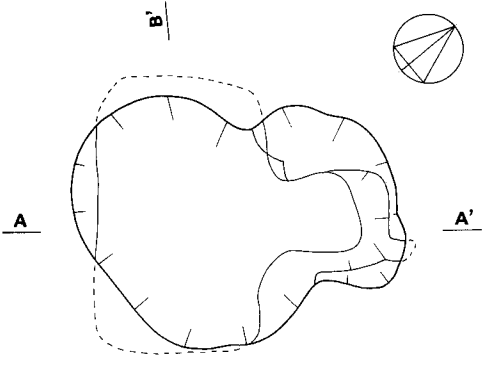


第325图 地下式坑实测图 (3)

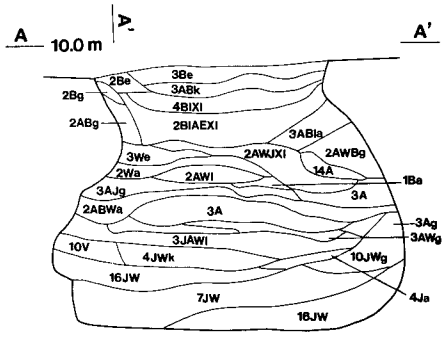
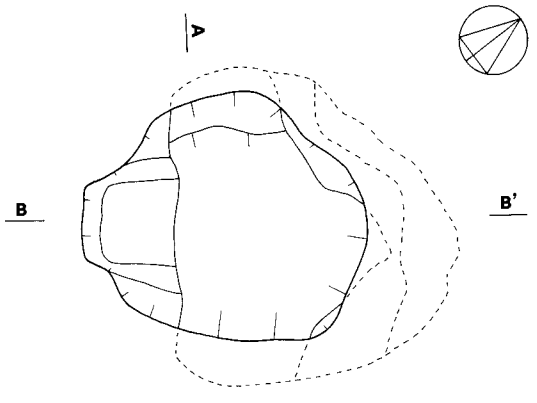




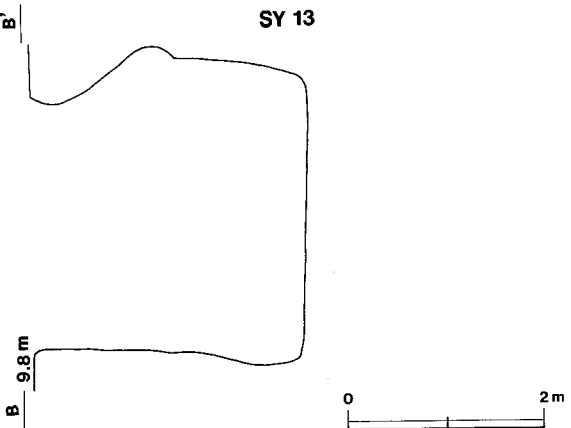
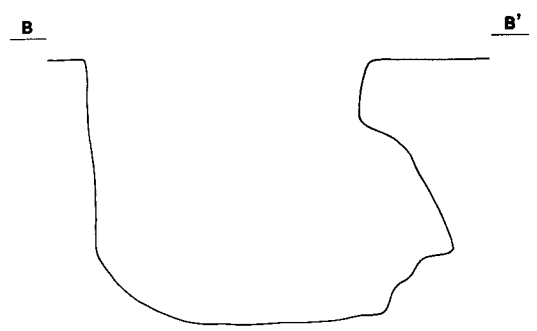
SY 11



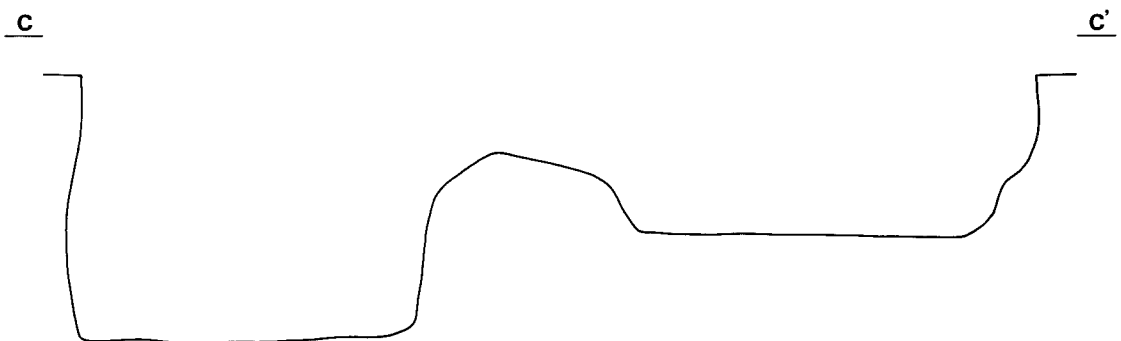
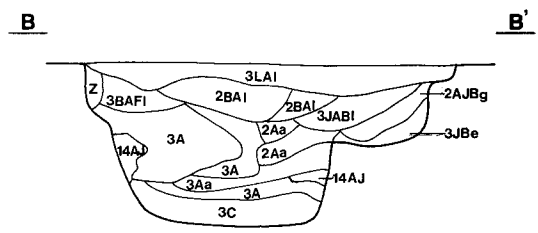
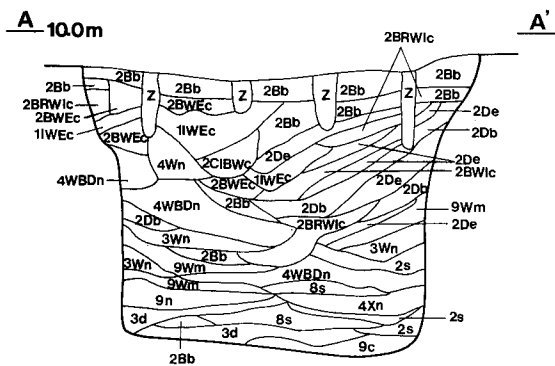
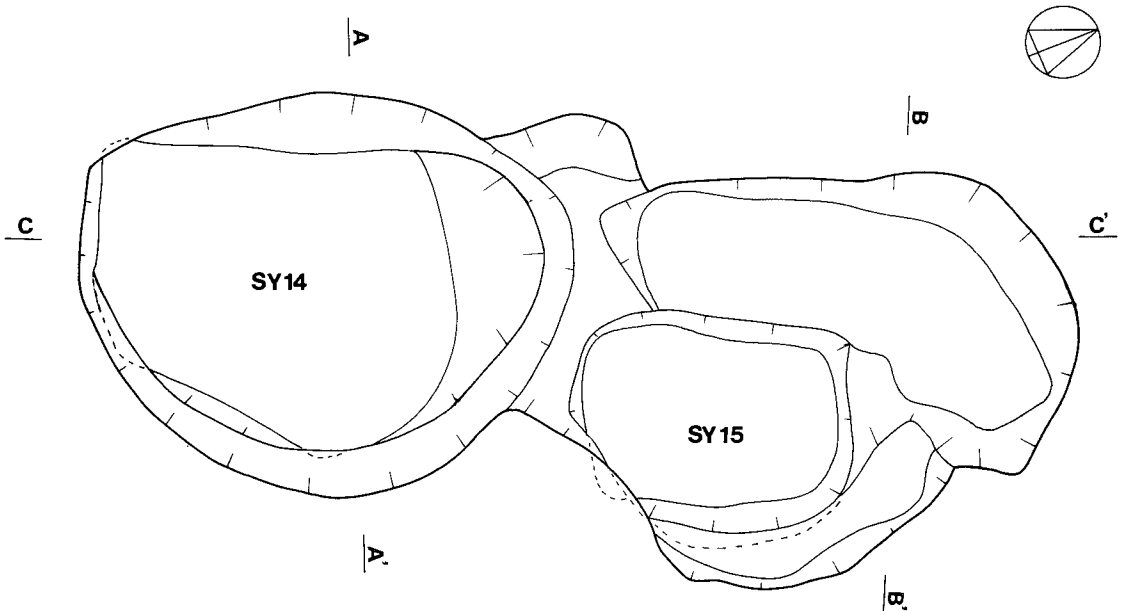
SY 12



SY 13



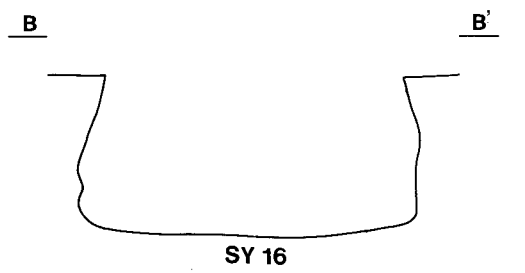
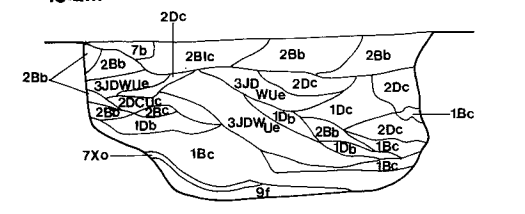
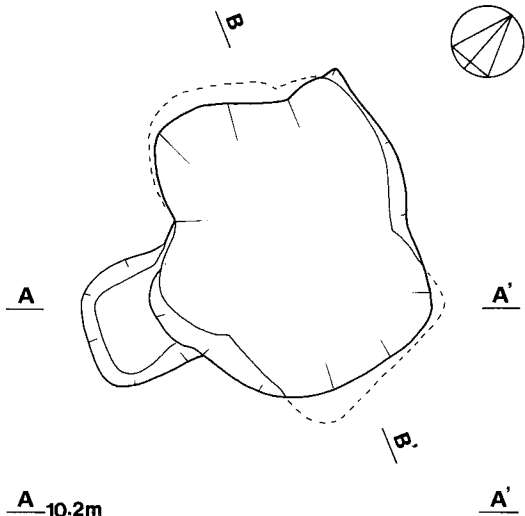
第326图 地下式坑实测图(4)



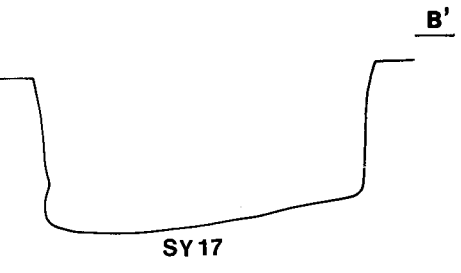
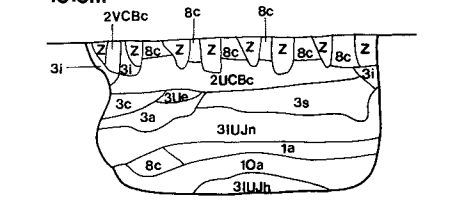
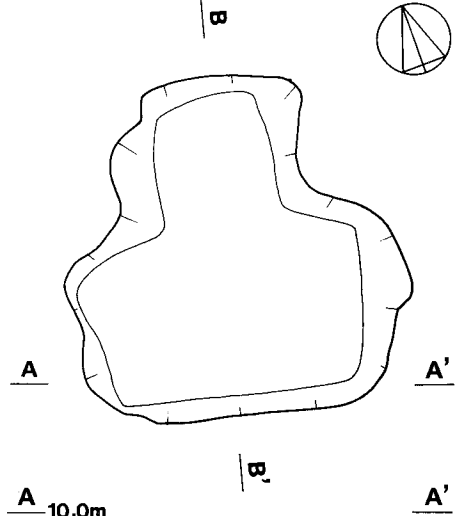
SY 14-15



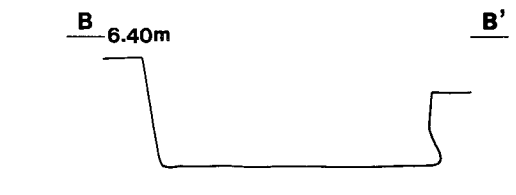
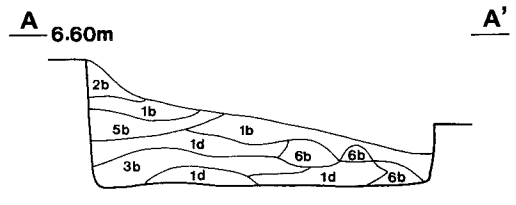
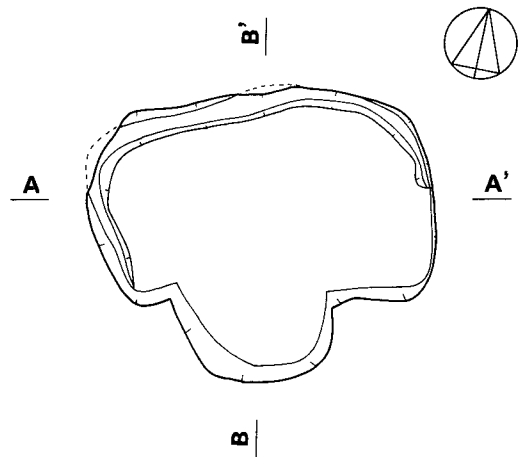
第327图 地下式坑実測図 (5)



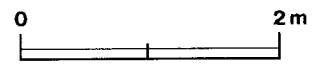
SY 16



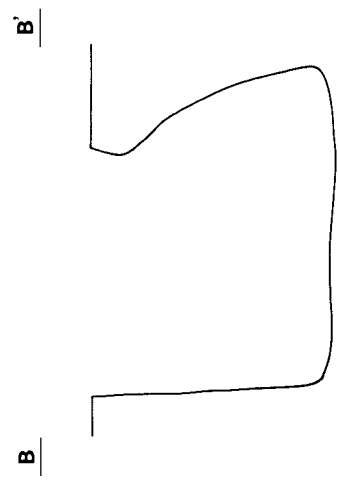
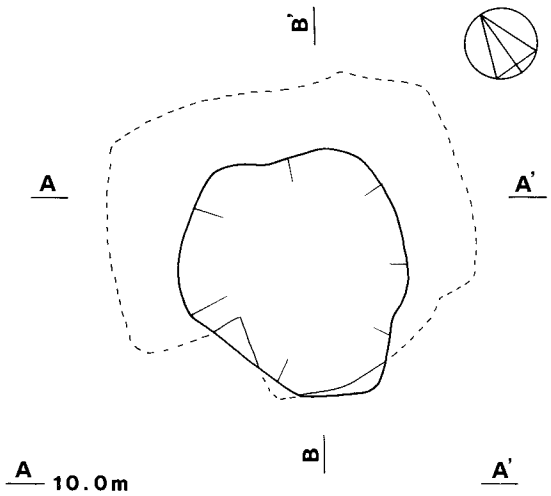
SY 17



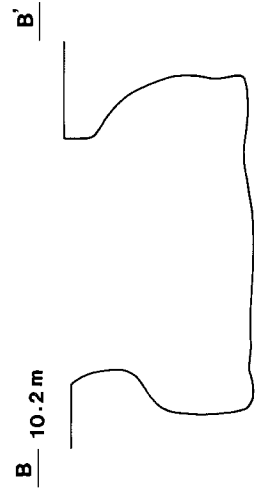
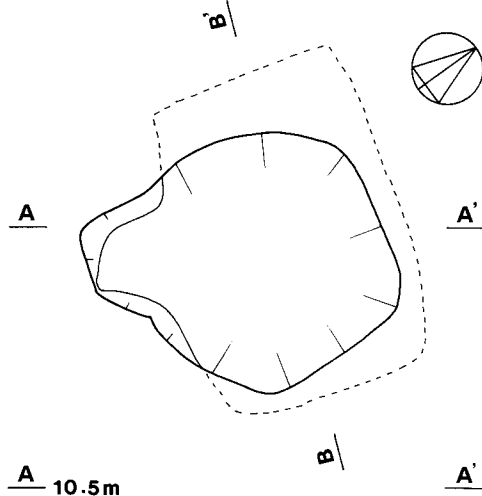
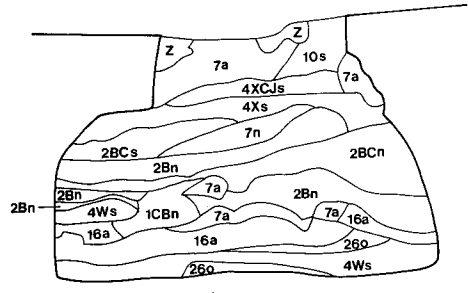
SY 18



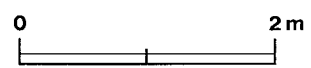
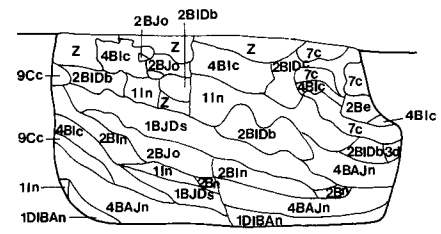
第328图 地下式坑実測図(6)



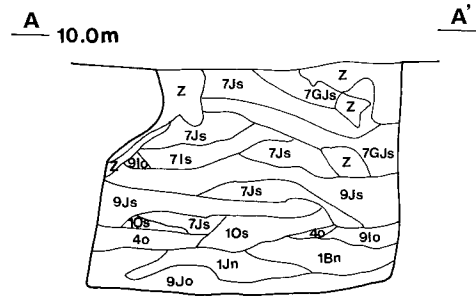
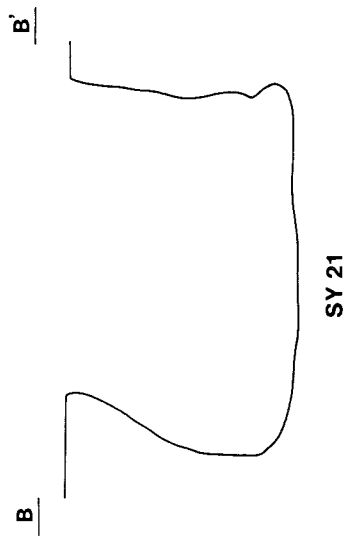
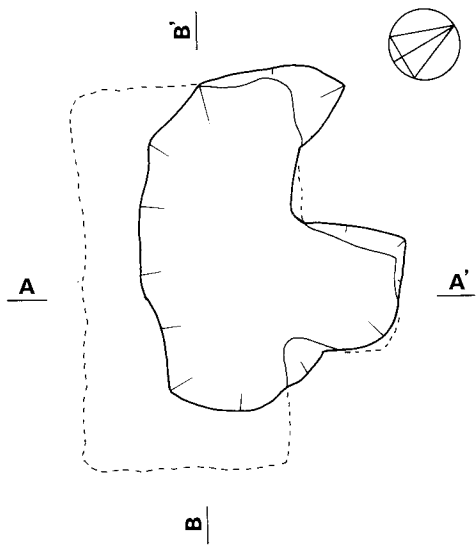
SY 19



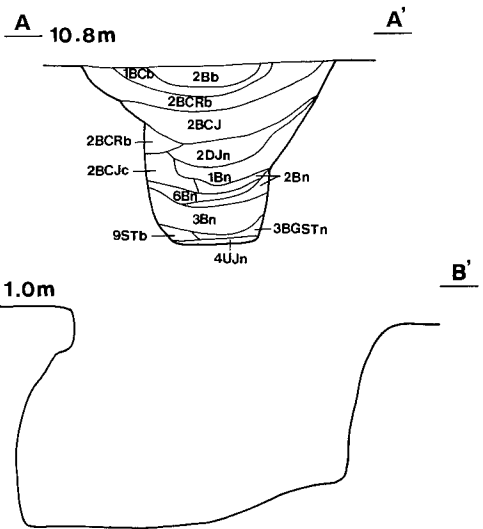
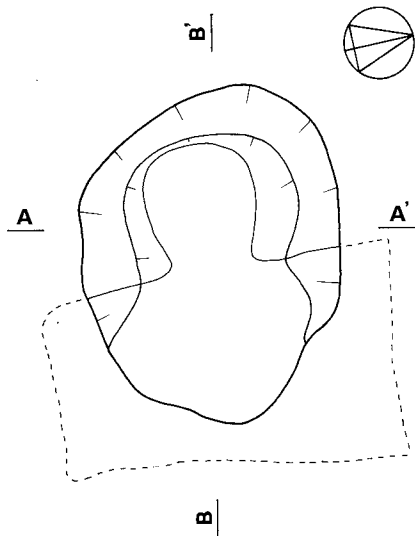
SY 20



第329图 地下式坑実測図 (7)

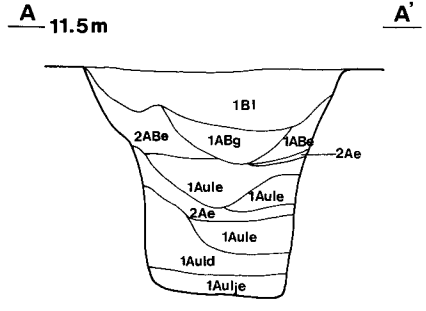
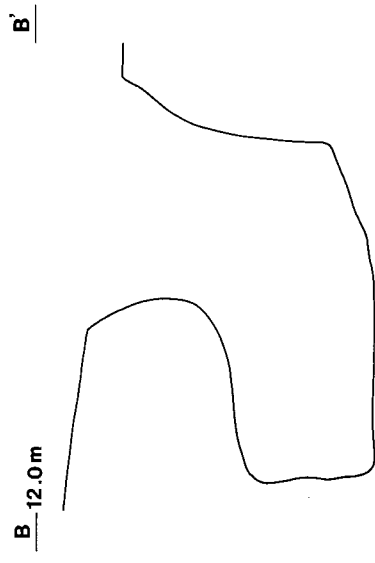
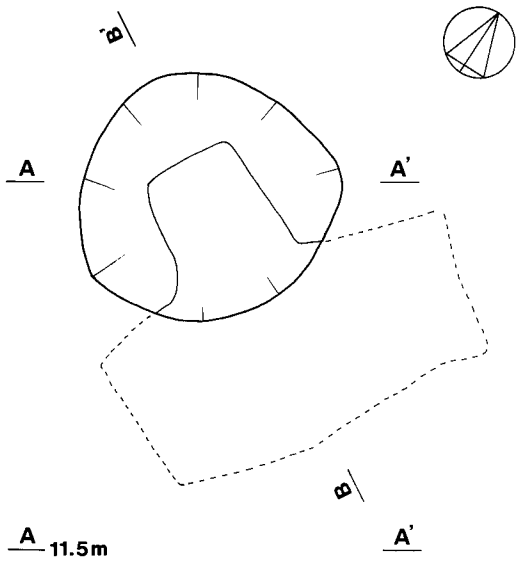


SY 21

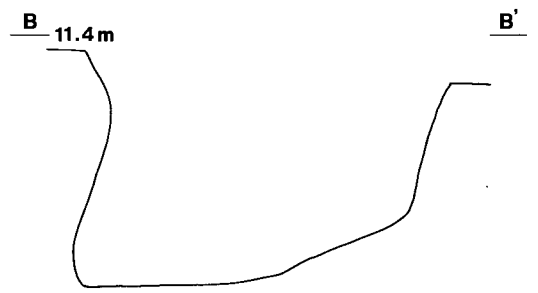
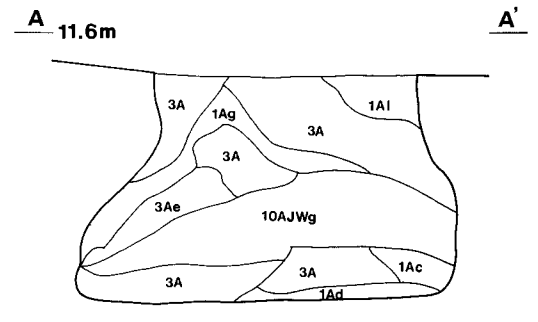
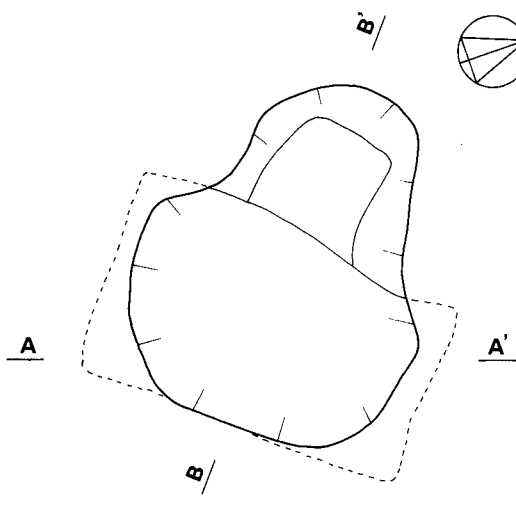


SY 22

第330图 地下式坑实测图 (8)



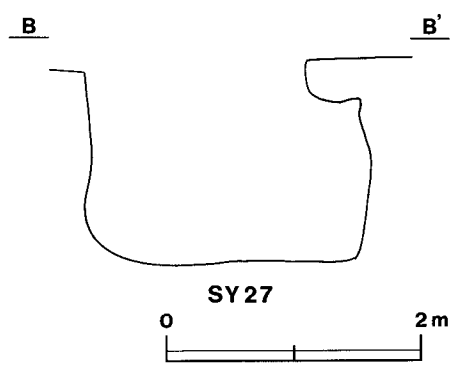
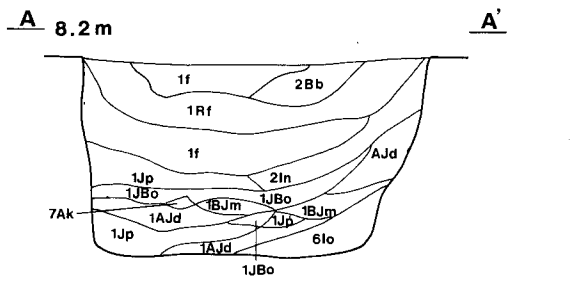
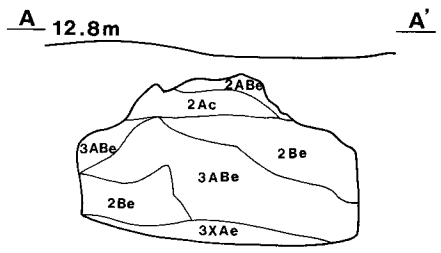
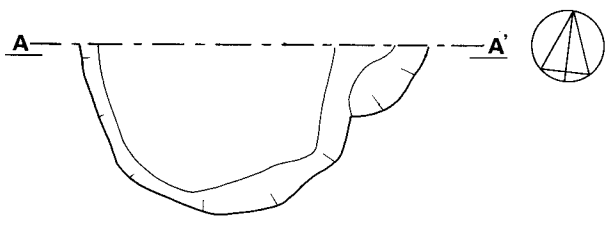
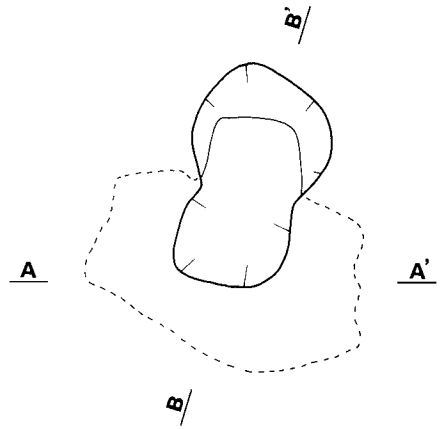
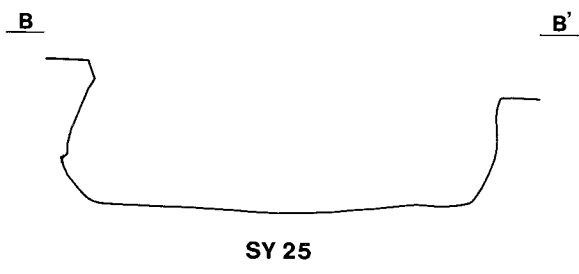
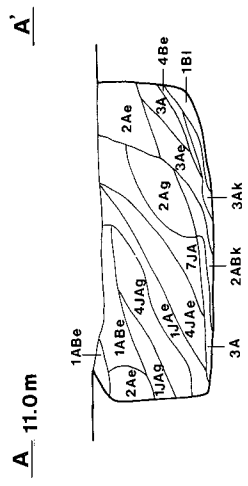
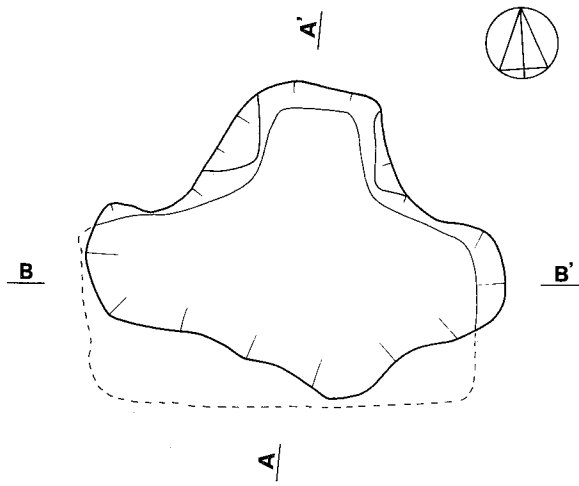
SY 23



SY 24



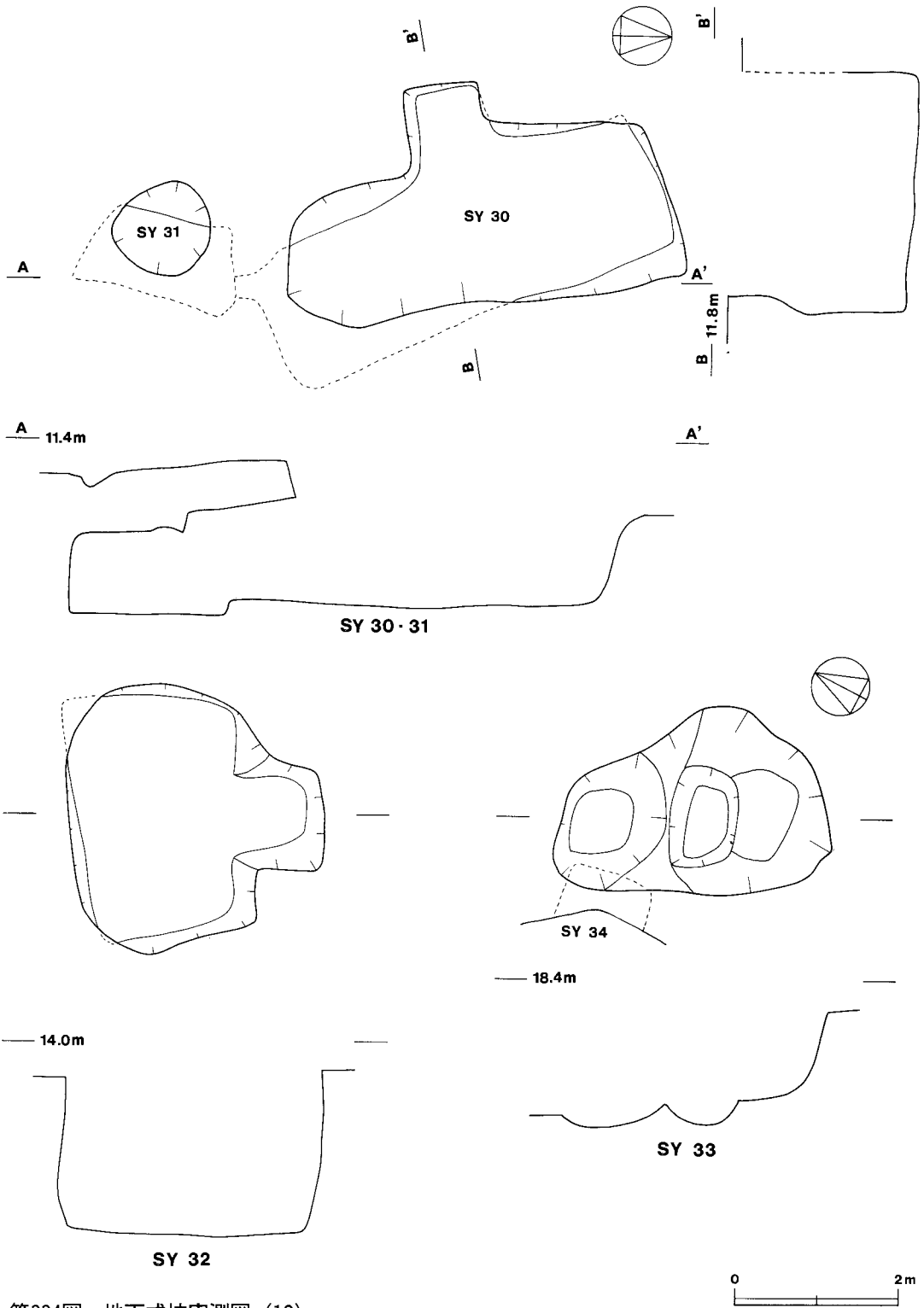
第331图 地下式坑实测图(9)



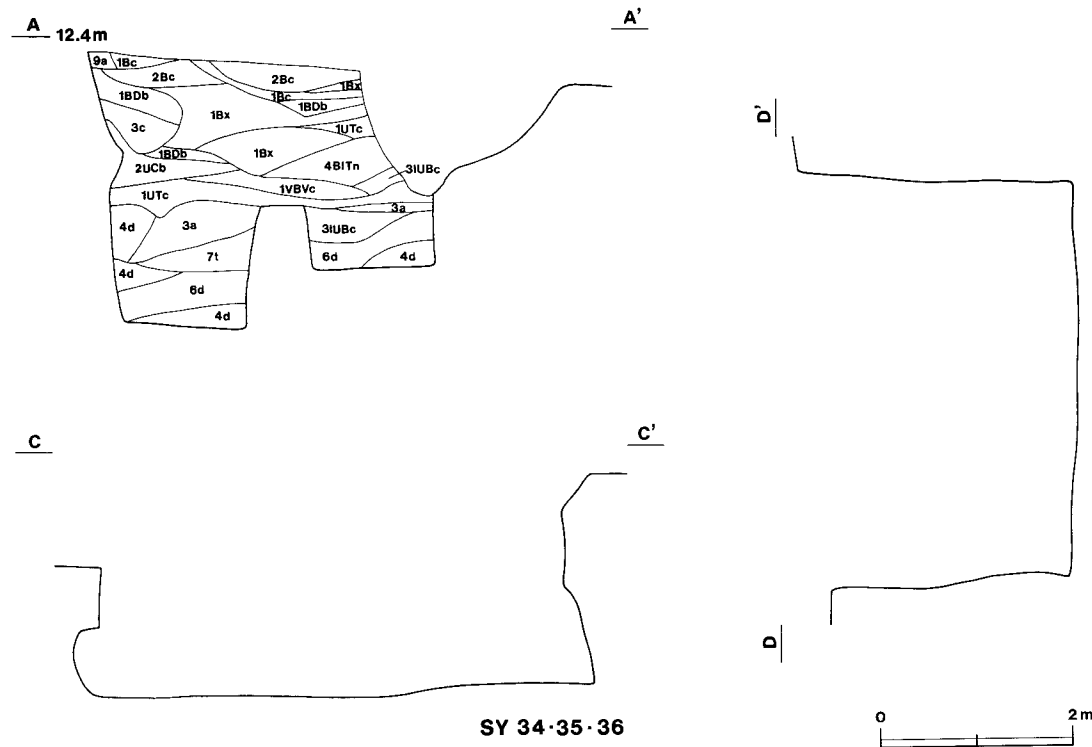
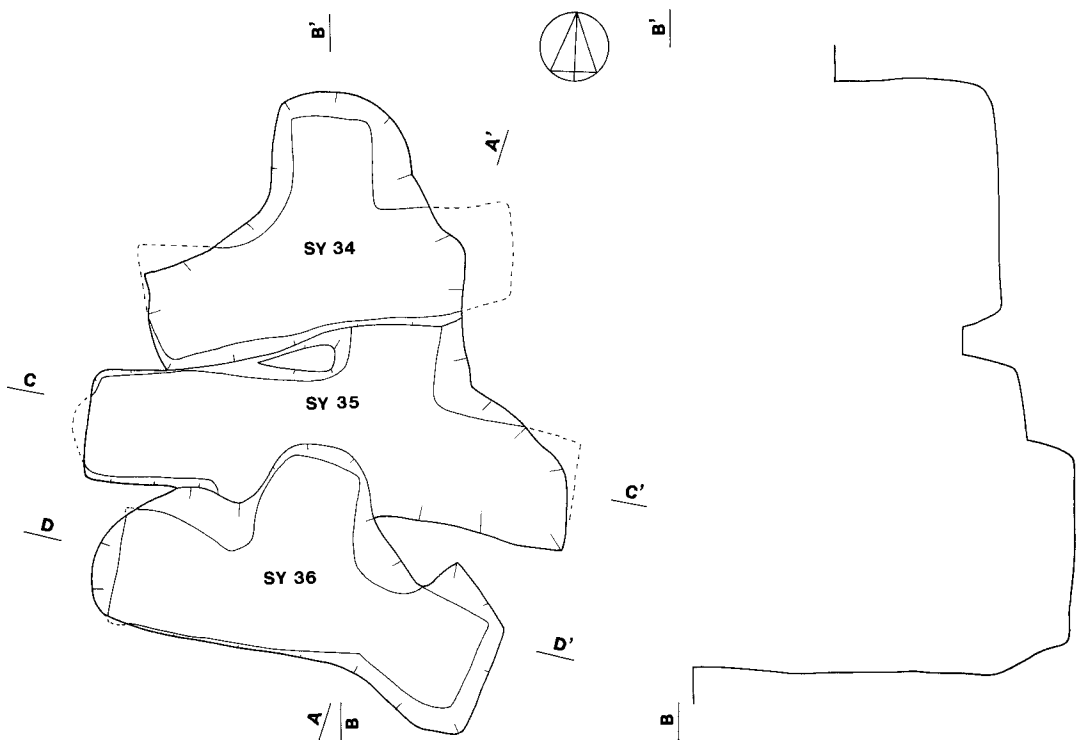
SY 26  
第332图 地下式坑実測图 (10)





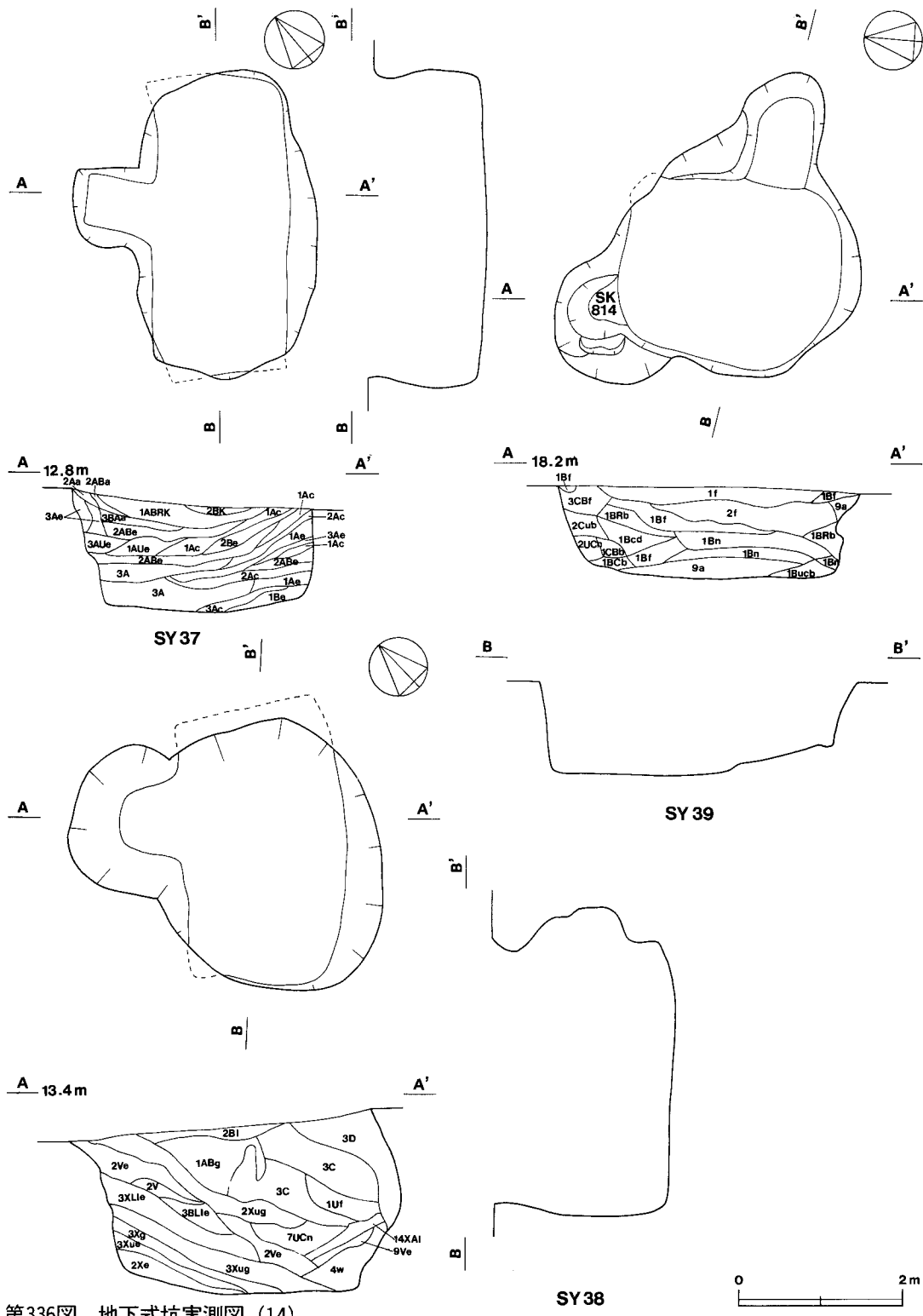


第334图 地下式坑実測図 (12)

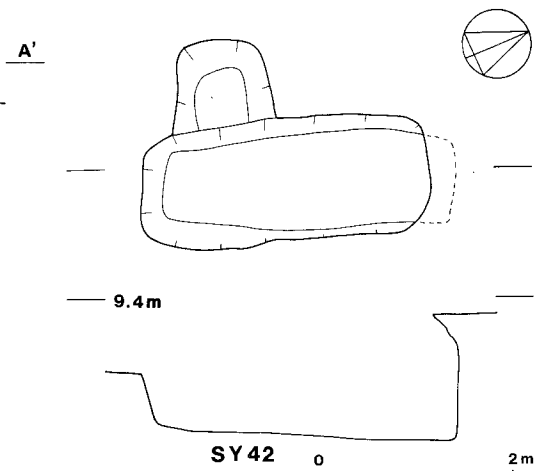
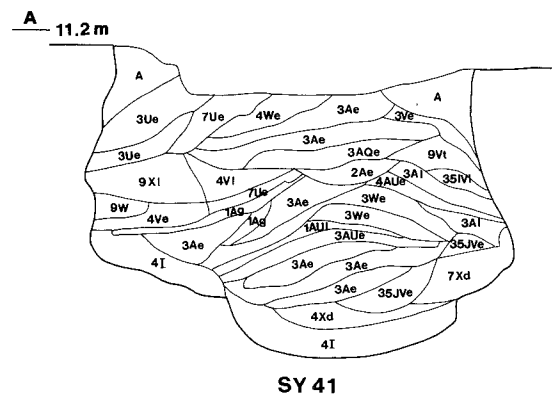
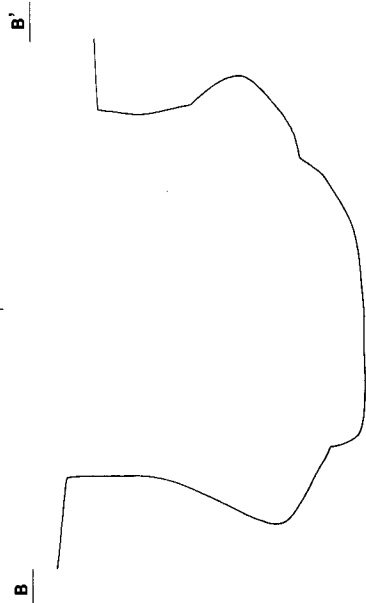
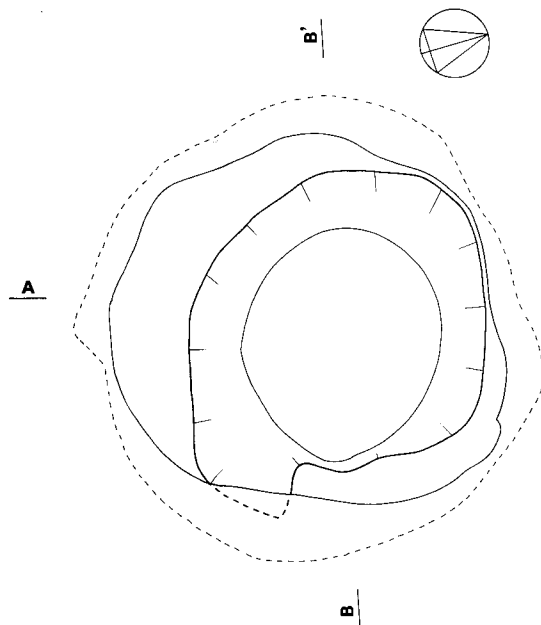
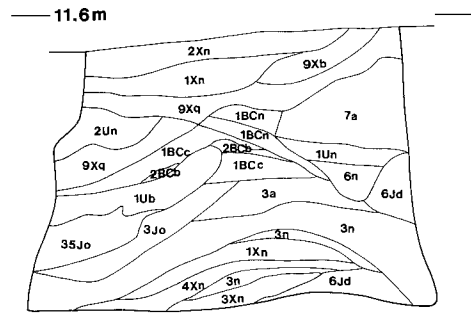
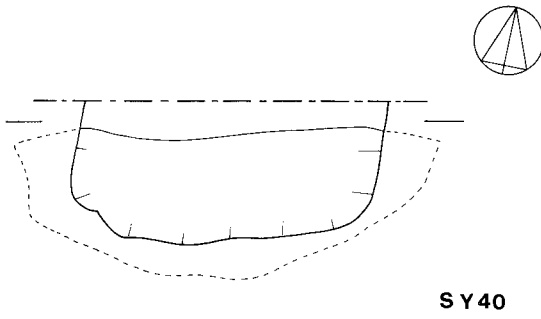


第335图 地下式坑突测图 (13)

SY 34·35·36



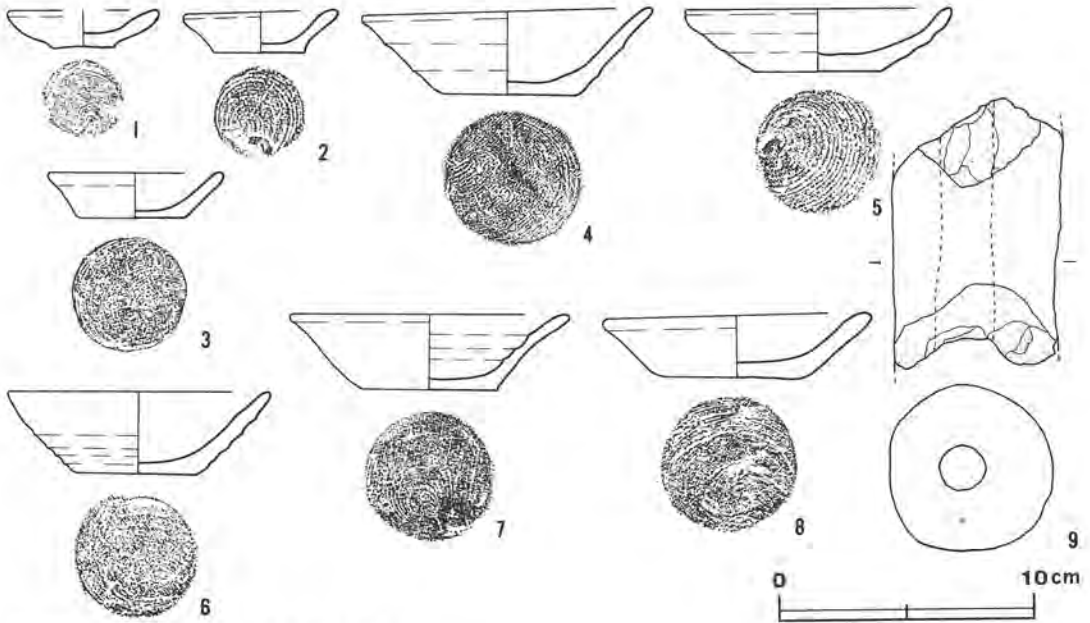
第336图 地下式坑实测图 (14)



第337图 地下式坑突测图 (15)

地下式坑出土土製品解説表

図版番号	名称	出土地点	台帳番号	大きさ (cm)			重量(g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
第338図 9	羽 口	S Y 12	D P 109	(10.8)	6.4	—	344.2	孔径1.8cm, におい 橙色, 20%



第338図 地下式坑出土遺物実測図

5 溝

第1号溝 (第341図)

本跡は、C4g7区からC4h3区にかけて確認され、第4号掘立柱建物跡の梁行南妻、第2号掘立柱建物跡の梁行北妻、第311・312号土坑と重複している。土層断面から第1・2・4号掘立柱建物跡や第311・312号土坑に切られていることから、本跡の方が古い。

本跡の長さは16.4mで、東西方向へ直線的に延び、両端はそれぞれ調査区域外へ続いている。上幅は0.5~1.1mで、断面は「V」形を呈している。確認面から底面までの深さは0.26m前後である。覆土は2層に分けられ、上層はローム粒子を含む黒褐色土、下層は多量のローム粒子を含む暗褐色土で、軟らかく、自然堆積している。

遺物は、覆土下層から土師質土器の皿9点 (第340図12・14~16・19・20・24・27・29) が散在的に出土している。

本跡の時期は、覆土下層から出土した土師質土器の皿から判断すると、中世以降と思われる。用途は不明である。

#### 第2号溝（第341図）

本跡は、A5e2区からB4b0区にかけて確認され、第3号掘立柱建物跡、第83・84号住居跡と重複している。土層断面から本跡が第83・84号住居跡を切っていることから、本跡の方が新しい。また、第3号掘立柱建物跡が本跡を切っていることから、本跡の方が古い。

本跡の長さは15.5mで、南北方向へ直線的に延び、両端は消滅している。上幅は0.6～1.8mで、断面形は皿状を呈している。確認面から底面までの深さは0.2m前後である。覆土はローム小ブロック・ローム粒子・焼土粒子を含む暗褐色土で、締まりがあり、自然堆積している。

遺物は本跡に伴うものが出土していないため、時期及び用途は不明である。

#### 第3号溝（第342図）

本跡は、C4j6区からC4j7区にかけて確認され、第28・38・39号住居跡と重複している。新旧関係は不明である。

本跡の長さは5.86mで、東西方向へ直線的に延びて、両端は第28・38・39号住居跡と重複しているため不明である。上幅は0.6mで、断面形は皿状を呈している。確認面から底面までの深さは0.16m前後である。覆土は2層に分けられ、上層は暗褐色土、下層は黒褐色土で、軟らかく、自然堆積している。遺物は本跡に伴うものが出土していないため、時期及び用途は不明である。

#### 第4号溝（第342図）

本跡は、D2c8区からD2b9区にかけて確認され、第68号土坑と重複している。土層断面から第68号土坑に切られていることから、本跡の方が古い。

本跡の長さは9.3mで、南北方向へ直線的に延びて、両端はそれぞれ調査区域外へ続いている。上幅0.7～1.0mで、断面形は鍋底状を呈している。確認面から底面までの深さは0.24～0.46mで、北から南に向かって深くなっている。覆土は2層に分けられ、上層には多量のローム粒子を含む暗褐色土、下層にはローム粒子を含む黒褐色土で、軟らかく、自然堆積している。

遺物は覆土中から少量の土師器片が出土しているが、流れ込みと思われる。出土状況から判断して、本跡に伴うものではないと思われ、時期を明確にできなかった。また、底面が北から南に向かって深くなっていることから推定すると、本跡は排水溝として使用されたものかと思われる。

### 第5号溝（居館跡）（第343図）

本跡は、B3b4区からC3h1区にかけて確認され、第70・75・76・80号住居跡、第253・326号土坑・第42号地下式坑、第6号井戸、第8号溝と重複しているが、本跡の覆土を各遺構が掘り込んでいることから、本跡が最も古い。

本跡で調査できた溝は、北東溝と南東溝の2か所である。北東溝の長さは48mで、上幅3.2～4.3m、下幅1.2～1.8m、確認面から底面までの深さは0.8～1.0mである。南東溝の長さは28mで、上幅2.2～3.6m、下幅1.0～1.8m、確認面から底面までの深さは0.6～0.9mである。それぞれの断面形は逆台形状を呈し、掘り込みは粘土層や砂層にまで達している。また、それぞれの溝には、台形状の張り出し部が付設されている。北東溝の張り出し部Aは、調査できた範囲では、北寄りに位置し、南東コーナー部から23.2mの位置に6.5m幅で構築されている。南東溝の張り出し部Bは南東コーナー部から14.4m西に位置し、溝の西側はエリア外に延びている。


溝の外壁は30～50度の角度で外傾して立ち上がり、内壁は35～45度の角度で外傾して立ち上がっている。張り出し部A・Bの角度は、いずれも外壁が45度で、内壁が25度の角度で外傾して立ち上がっている。南東コーナー部は隅丸形を呈している。覆土は3層に分けられ、上層は多量のローム粒子や少量の炭化粒子を含む黒褐色土、中層は多量のローム粒子を含む暗褐色土、下層は多量のローム粒子・粘土粒子、少量の炭化粒子を含む褐色土が自然堆積している。

遺物は、2か所の張り出し部の覆土下層から土師器のほか、土製品が出土している。張り出し部Aの北寄りから甕形土器（第339図1）・器台形土器（第339図6）・伏せた状態で甕形土器（第339図2）が出土し、張り出し部Aの突端から手捏土器4点（第339図8～10・11）が出土している。さらに、張り出し部Aの南側から3連坏形土器（第339図7）も出土している。また、張り出し部Bの覆土中層から下層にかけてからも甕形土器片が出土しているが、まとまった器形にはならなかった。その他、東コーナー部の覆土上層から土師質土器の皿2点（第340図21・28）も出土しているが、この皿は、出土状況から判断して、本跡に伴うものではないと思われる。

本跡は、張り出し部A・B付近の覆土下層から出土している土器形式から判断すると、古墳時代前期の五領期に比定される居館跡と思われる。

### 第6号溝（第342図）

本跡は、C4c4区からC4h6区にかけて確認され、第55号住居跡と重複している。土層断面は本跡が第55号住居跡を切っていることから、本跡の方が新しい。

本跡の長さは5.2mで、東西方向へ直線的に延び、第1号溝と平行している。西端は道路にかかっているため確認できなかった。また、東端は土取りによって消滅している。上幅は0.48～0.62mで、断面は「」形を呈している。確認面から底面までの深さは0.4m前後である。覆土は2層

に分けられ、上層はローム粒子を含む暗褐色土、下層は少量の焼土粒子を含む黒褐色土で、軟らかく、自然堆積している。

遺物は、覆土下層から土師質土器の皿3点（第340図25・26・30）が出土している。その他、覆土中層から上層にかけて、多量の土師器片、須恵器片、内耳形土器片、羽口（第340図31）が出土している。

本跡の時期を覆土下層から出土している土師質土器の皿から判断すると、中世以降と思われる。なお、用途については不明である。

#### 第7号溝（第344図）

本跡は、C3e3区からC3f6区にかけて確認され、東端で第5号溝と重複している。土層断面から本跡が第5号溝を切っていることから、本跡の方が新しい。

本跡の長さは15.2mで、第8号溝と北側で隣接しながら、直線的に、東西方向に平行して延び、本跡の西端は調査区域外へ続いている。上幅1.4～1.7mで、断面は「∟」形を呈している。確認面から底面までの深さは0.38m前後である。覆土は多量のローム粒子やパミス、少量の粘土粒子を含む暗褐色土で、軟らかく、自然堆積を呈している。

遺物は、覆土中層から少量の土師器片や須恵器片が出土しているが、出土状況から判断して、本跡に伴うものでないと思われ、時期及び用途は不明である。

#### 第8号溝（第344図）

本跡は、C3e3区からC3e6区にかけて確認され、第253・254・255・269号土坑と重複しており、東端で第5号溝と接している。土層断面から第253・254・255・269号土坑が本跡を切っていることから、本跡の方が古い。また、第5号溝を本跡が切っていることから、本跡の方が新しく、直接関係しないと思われる。

本跡の長さは14.3mで、第7号溝と南側で隣接しながら、直線的に、東西方向に平行して延びる。本跡の西端は調査区域外へ続いている。上幅1.7～2.4mで、断面は「∟」形を呈している。確認面から底面までの深さは0.4m前後である。覆土は多量のローム粒子、中量のパミスや粘土粒子を含む暗褐色土で、軟らかく、自然堆積している。

遺物は本跡に伴う遺物が出土していないため、時期及び用途は不明である。

#### 第9号溝（第345図）

本跡は、A3h7区・A3i6・i7区にまたがって確認され、第88号住居跡と重複している。土層断面で見ると、本跡が第88号住居跡を切っていることから、本跡の方が新しい。




調査した本跡の長さは11.4mで、A3h7区からA3i7区を斜めに横切りA3i6区に至る。この間の長さは8.0mである。さらに、A3i6区を斜めに横切りA3j7区に至る。この間の長さは3.4mである。上幅は0.6～1.2mで、断面形は皿状を呈している。確認面から底面までの深さは0.12m前後である。覆土は暗褐色土で、自然堆積している。

遺物は覆土中層から土師質土器の皿5点（第340図13・17・18・22・23）が出土し、他に、内耳形土器片、土師質土器の皿片、播鉢片、土師器の坏形土器片、縄文式土器片が出土しているが、いずれも散乱しており、覆土中層から上層にかけて出土していることから、周囲からの流れ込みと考えられ本跡に伴うものではないと思われる。

本跡の時期及び用途は不明である。

#### 第10号溝（第346図）

本跡は、D3f9区からD4e5区にかけて確認され、第110号住居跡と重複している。土層断面で見ると、本跡が第110号住居跡を切っていることから、本跡の方が新しい。


本跡の長さは24.8mで、第2号柵列跡と平行して東西方向へ延びている。上幅は0.46～1.0mで、断面は「」形を呈している。確認面から底面までの深さは0.3～0.55mである。北壁面には径0.2～0.3mの円形を呈するピットが7か所、1.7～2.1mの間隔で検出され、深さは0.25mである。本跡と7か所のピットの関係について、明確にすることはできなかった。覆土はローム粒子やローム小ブロックを含む黒褐色土で、やや締まっており、自然堆積している。

遺物は、少量の須恵器片と土師器片が出土しているが、覆土中層から散乱して出土しており、周囲からの流れ込みと思われるので、本跡に伴うものではないと考えられる。

本跡と第2号柵列跡との関係について、決め手となる遺物は出土していないが、配置的に、本跡と第2号柵列跡は隣接し、東西方向へ共にほぼ直線的に走っていることから推定すると、何らかの関連があると思われる。本跡の時期及び用途については不明である。

#### 第11号溝（第346図）

本跡は、D3j8区に確認され、第2号道路跡と直交している。

本跡の長さは2.6mで、東西方向へ延びて、第10号溝の西端の延長上に位置している。上幅は1m前後で、断面は「」形を呈している。確認面から底面までの深さは0.35～0.5mである。覆土はローム粒子やローム小ブロックを含む黒褐色土と暗褐色土が互層を成し、やや締まっており、自然堆積している。


遺物は覆土中から少量の須恵器片や土師器片が出土し、器形の窺えるものは土師器の高台付皿形土器（第339図4）だけである。これらはすべて、周囲からの流れ込みと思われ、本跡に伴うも

のではないと思われ、時期及び用途は不明である。

本跡と第2号道路跡は第2号道路跡の北端と本跡が直交して行き止まりとなっていることから推定すると、何らかの関連があると思われる。

#### 第12号溝（第347図）


本跡は、E4b5区からE4c2区にかけて確認され、第104号住居跡の北側4.6m、第15号溝の南側4.8mに位置している。

本跡の長さは16mで、東西方向へ延びて、東端は調査区域外まで続き、西端は土取りのため消滅している。上幅は0.5～1.2mで、断面は「」形を呈している。北側の壁はなだらかな傾斜で、南側の壁は急に落ち込んでいる。確認面から底面までの深さは0.15～0.7mで、東から西に向かって浅くなり、東端と西端の底面のレベル差は約0.55mで、東端が深い。壁面は凹凸が多く、不規則な大小のピットが壁の両面にみられる。覆土は多量のローム粒子・パミス・ローム小ブロックを含む黒褐色土で、軟らかく、自然堆積している。

遺物は、覆土中から少量の土師器片が出土しているが、出土状況から判断して、本跡に伴うものではないと思われ、時期を明確にできなかった。また、底面が東から西に向かって浅くなっていることから推定して、本跡は排水溝として使用されたと思われる。

#### 第13号溝（第346図）

本跡は、D3b2区からD3h3区にかけて確認され、南端で第667・790号土坑と重複している。土層断面で見ると、第667・790号土坑に切られていることから、本跡の方が古い。


本跡の長さは11.54mで、南北方向へ延びて、北端は自然消滅している。上幅は0.6～1.2mで、断面は「」形を呈している。確認面から底面までの深さは0.2mで、底面のレベルは北へ向かうにつれて僅かに浅くなる。西壁面に径0.2～0.3mの円形を呈するピットが4か所、1.5～1.6mのほぼ等間隔で検出され、深さは0.2m前後である。本跡と4か所のピットの関係について、明確にすることはできなかった。覆土は多量のローム粒子を含む暗褐色土と褐色土で、やや締まっており、自然堆積している。

遺物は、覆土中から土師器片、内耳形土器片が極少量出土しているが、出土状況から判断して、いずれも本跡に伴うものではないと思われ、時期及び用途は不明である。

#### 第14号溝（第347図）

本跡は、D4h4区からD4j3区にかけて確認され、第103号住居跡の西側2.1mに位置している。


本跡の長さは13.82mで、南北方向へ10.1m直線的に延びて、南端と北端はほぼ直角に西方向に

曲がり延びている。上幅は0.48～1.16mで、断面は「」形を呈している。確認面から底面までの深さは0.12mで、溝の中央部両壁面に径0.15～0.2mの円形を呈するピットが4か所、0.9～1.1mのほぼ等間隔で検出され、深さは0.13～0.22mである。本跡と4か所のピットの関係について、明確にすることはできなかった。覆土はローム粒子やローム小ブロックを含む暗褐色土で、軟らかく、自然堆積している。

遺物は覆土中から極少量の土師器片が出土しているが、出土状況から判断して、本跡に伴うものではないと思われ、時期及び用途は不明である。

#### 第15号溝（第348図）


本跡は、E4a5区からE4a6区にかけて確認され、第12号溝の北側3.9m、第103号住居跡の南側6.8mに位置している。

本跡の長さは4.94mで、東西方向へほぼ直線的に延びて、西端は南へ1.0mほど曲がり、両端は消滅している。上幅は0.94～1.2mで、断面は「」形を呈している。確認面から底面までの深さは0.2mで、壁面・底面とも凹凸は少ない。覆土は2層に分けられ、上層はローム粒子を含む黒褐色土、下層はローム小ブロック・ローム粒子を含む暗褐色土で、軟らかく、自然堆積している。

遺物は、覆土中から土師器片、須恵器片が極少量出土しているが、出土状況から判断して、これらすべての遺物は本跡に伴うものではないと思われ、時期及び用途は不明である。

#### 第16号溝（第348図）

本跡は、J2e4区からJ2f6区にかけて確認され、第18号掘立柱建物跡の北側に隣接し、第1号堀の南側4.8mに位置している。

本跡の長さは6.6mで、東西方向へほぼ直線的に延びて、両端は調査区域外まで続いている。上幅は1.2～1.8mで、断面は「」形を呈している。確認面から底面までの深さは0.56～0.66mで、東から西に向かって浅くなり、東端と西端の底面のレベル差は約0.1mで東端が低い。壁面は凹凸が多く、両壁面は不規則な大小のピット6本が見られる。覆土は、ローム粒子やローム小ブロックを含む暗褐色土で、締まっており、自然堆積している。

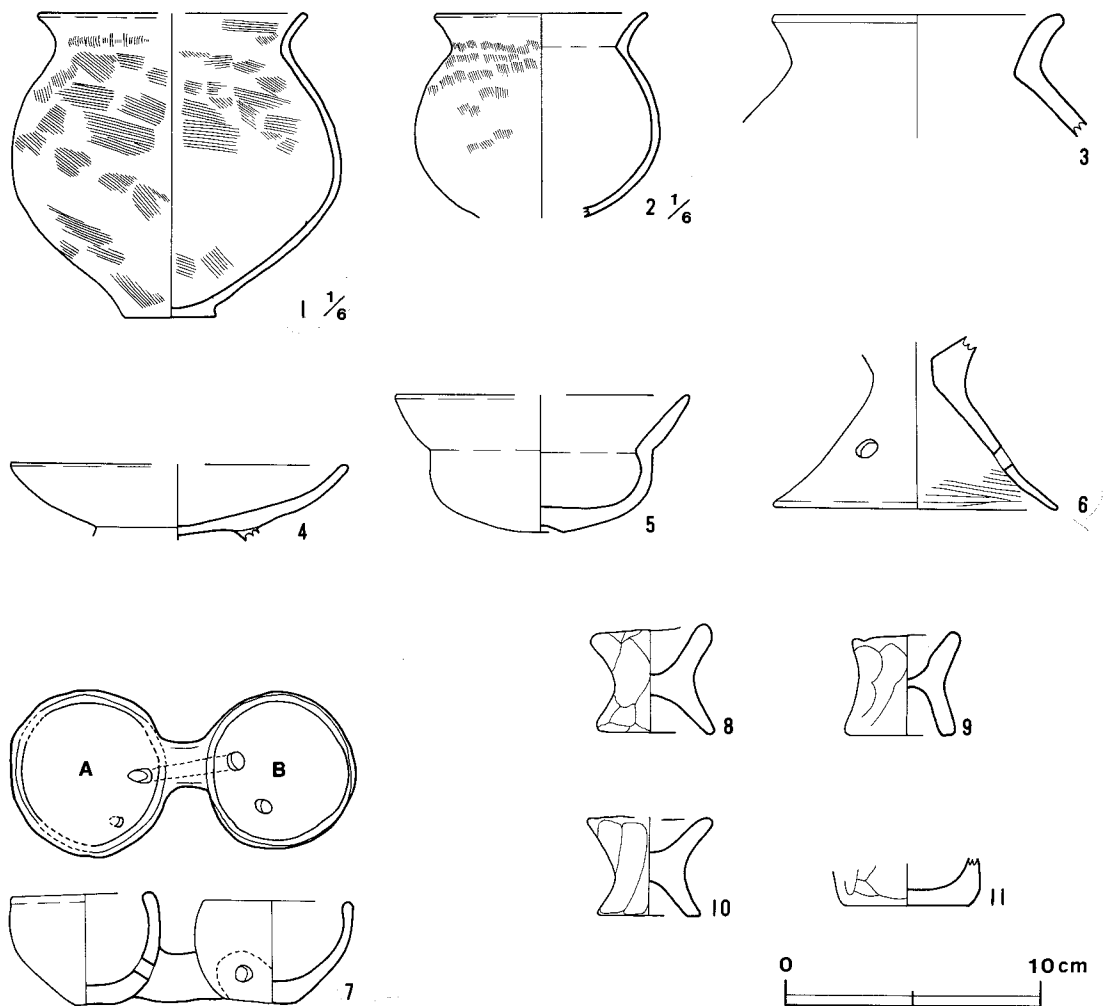
遺物はまったく出土しないため本跡の時期を明確にできなかったが、底面が東から西に向かって浅くなっていることから推定すると、本跡は排水溝として使用されたと思われる。

#### 第17号溝（第348図）

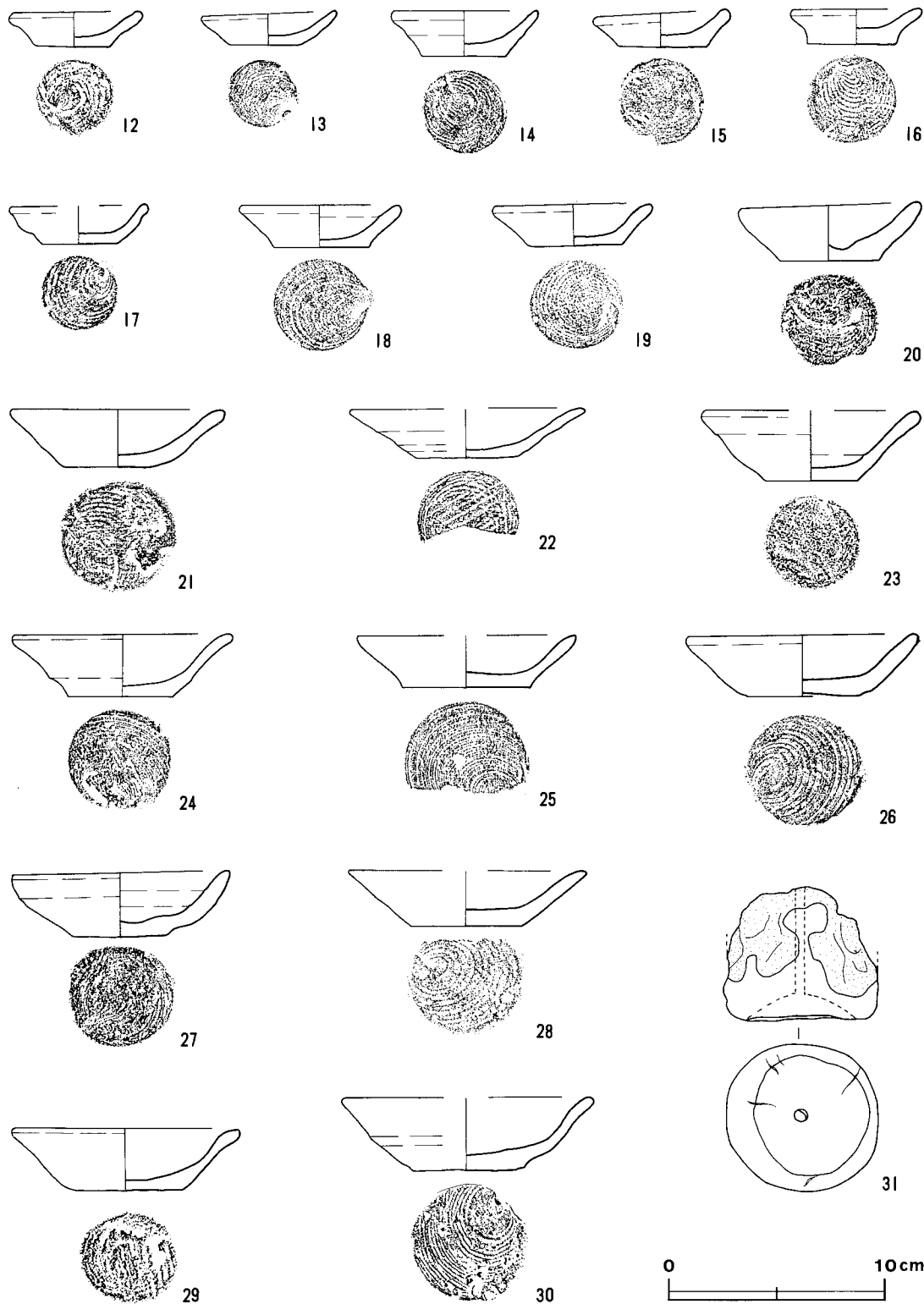
本跡は、H3b3区からH3b4区にかけて確認され、第136号住居跡の南側1.5m、第140号住居跡の北側2.3mに位置している。

本跡の長さは6.78mで、東西方向へ延びて、東端は調査区域外まで続き、西端は消滅している。上幅は0.34~0.58mで、断面は「V」形を呈している。確認面から底面までの深さは0.14mで、底面のレベル差はほとんどない。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土で、やや締まっており、自然堆積している。

本跡に伴うと思われる遺物は全く出土しなかったため、時期及び用途は不明である。



第339図 溝出土遺物実測図 (1)



第340图 沟出土遗物实测图 (2)

溝出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第339図 1	甕形土器 土師器	A (21.2) B 24.0 C 7.0	底部は突出した平底で、胴部は中位が大きく張り、やや扁平な球形を呈している。口縁部は「く」の字状に外傾している。	口縁部内面横位のハケ目、外面ハケ目後、横ナデ。胴部内・外面ハケ目。	砂粒・長石・スコリア 浅黄橙色 普通	P1012 60% SD5覆土
2	甕形土器 土師器	A 16.7 B (16.1)	底部欠損。胴部は中位が大きく張り、やや扁平な球形を呈している。口縁部は「く」の字状に外傾している。	口縁部内面横位のハケ目、外面ハケ目後、横ナデ。胴部内面へら削り、外面縦位のハケ目後、中位から下位にかけて横位のへら削り。	砂粒・礫・石英 黒褐色・にぶい褐色 普通	P1013 60% SD5覆土
3	甕形土器 土師器	A 22.8 B (9.7)	胴部欠損。口縁部は「く」の字状に外傾している。	口縁部内面横位のへら磨き、外面縦位のへら磨き。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P1021 20% SD5覆土
4	高台付皿形土器 土師器	A (13.2) B (3.0)	高台欠損。体部は内彎気味に開いて立ち上がり、口縁端部は丸味を持つ。	水挽き成形。体部外面下端回転へら削り。体部内面へら磨き、外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P1016 40% SD11覆土
5	坏形土器 土師器	A (11.6) B 5.4	底部は丸底で、中央部凹む。胴部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外反して大きく開く。胴部は口縁部に対して小形で中位が張る。	胴部から口縁部内・外面へら磨き。	砂粒・雲母・スコリア 赤色 普通	P973 40% SD5覆土
6	器台形土器 土師器	B (6.8) D 11.2 E 6.1	脚部はラッパ状に開き、中位に3孔を有する。器受部の中心に脚部へ貫通する孔が穿たれている。	脚部内面ハケ目、外面縦位のへら磨き。器受部内面ナデ、外面へら磨き。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P1007 40% SD5覆土
7	三連坏形土器 土師器	A A 5.6 B 4.3 C 1.5 B A 5.4 B 4.1 C 2.6	平底で、体部は内彎気味に直立する。口縁部はやや内傾する。  平底で、体部は内彎しながら外上方に立ち上がり、口縁部は直立する。	体部・口縁部内面横ナデ、外面ナデ。  体部・口縁部内面横ナデ、外面ナデ。	砂粒・長石 浅黄橙色 普通	P1014 60% SD5覆土 AとBの坏は連なる。もう一つの坏は欠損する。
8	手捏土器 (白形土器) 土師器	A 4.7 B 4.2 D 4.6 E 1.4	台部は外反気味に立ち上がり、白口部は直線的に立ち上がり、端部は丸味を有する。	台部、白口部外面は指頭による調整。内面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P1023 95% SD5覆土
9	手捏土器 (白形土器) 土師器	A 4.2 B 4.1 D 1.9 E 4.3	台部は外反気味に立ち上がり、白口部は直線的に立ち上がり、端部は丸味を有する。	台部、白口部外面は指頭による調整。内面ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	P1024 90% SD5覆土
10	手捏土器 (白形土器) 土師器	A (4.8) B 3.8 D 4.0 E 1.3	台部は外反気味に立ち上がり、白口部は直線的に立ち上がり、端部は丸味を有する。	台部、白口部外面は指頭による調整。内面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P1025 80% SD5覆土
11	手捏土器 土師器	A (5.8) B (1.9) C 5.3	口縁部欠損。底部は平底で、体部は内彎気味に直立する。	底部・体部内・外面ナデ。	砂粒 灰褐色 普通	P1022 70% SD5覆土
第340図 12	皿 土師質土器	A 6.2 B 1.6 C 3.6	平底で、体部は直線的に開く。	水挽き成形。底部回転糸切り。体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 雲母 にぶい橙色 普通	P970 100% SD1覆土

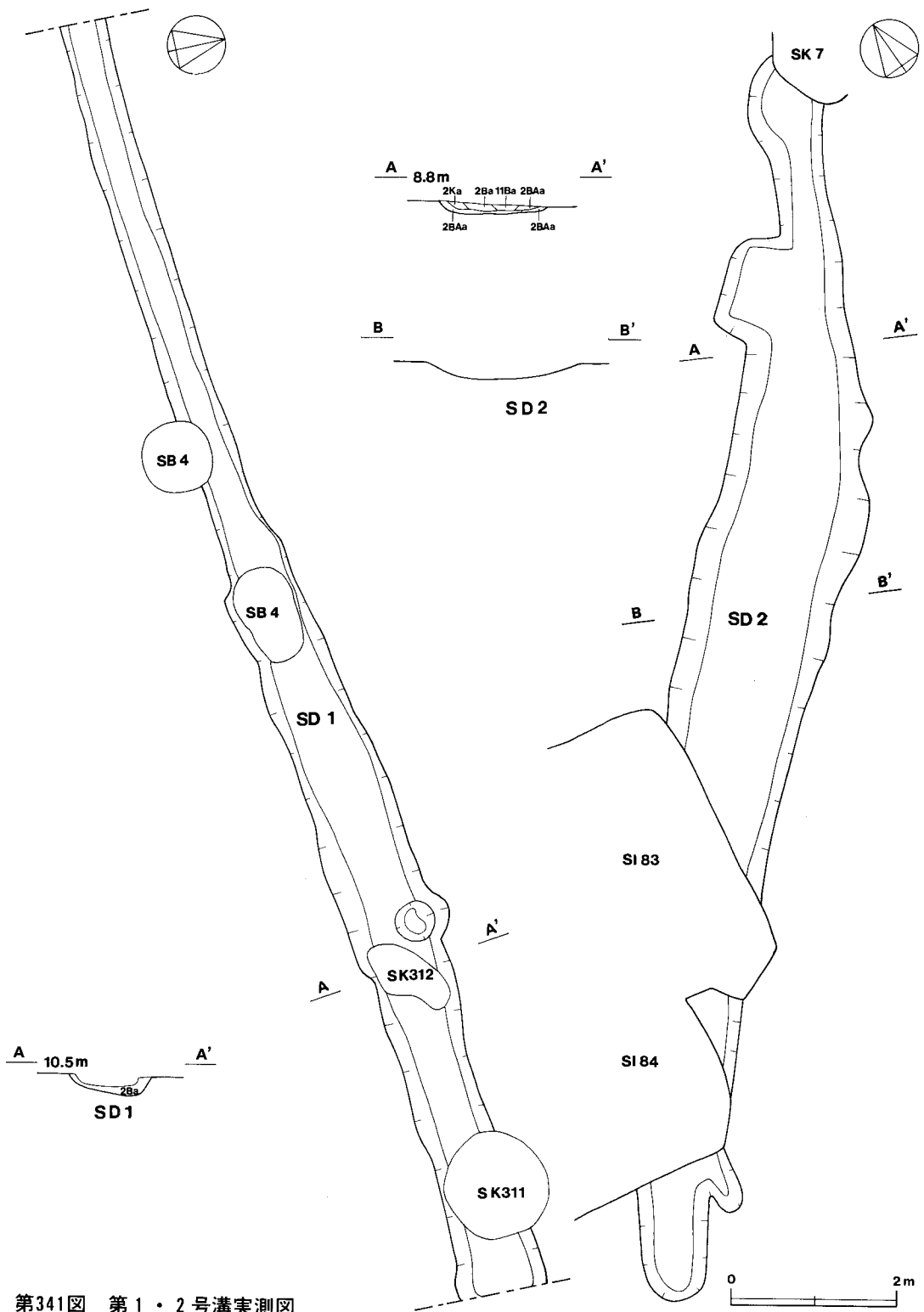
図版 番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
13	皿 土師質土器	A 6.3 B 1.6 C 3.2	平底で、体部はやや内彎気味に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア・ 雲母 橙色 普通	P981 95% SD 9 覆土
14	皿 土師質土器	A 6.8 B 2.0 C 3.9	平底で、体部は器厚を減じながら直線的に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P1003 70% SD 1 覆土
15	皿 土師質土器	A 6.4 B 1.8 C 4.0	平底で、体部は直線的に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	P971 80% SD 1 覆土
16	皿 土師質土器	A 6.1 B 1.7 C 4.1	平底で、体部は器厚を減じながら直線的に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア・ 雲母 橙色 普通	P969 100% SD 1 覆土
17	皿 土師質土器	A (6.5) B 1.8 C 3.4	平底で、体部はやや内彎気味に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P977 50% SD 9 覆土
18	皿 土師質土器	A 7.5 B 2.0 C 4.4	平底で、体部は直線的に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	P979 100% SD 9 覆土
19	皿 土師質土器	A 7.3 B 1.9 C 4.3	平底で、体部は直線的に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい赤褐色 普通	P1005 100% SD 1 覆土
20	皿 土師質土器	A 8.5 B 2.7 C 4.5	平底で、底部内面は凸レンズ状を呈する。体部は器肉厚く、直線的に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P1002 100% SD 1 覆土
21	皿 土師質土器	A 9.8 B 2.7 C 5.0	平底で、体部は直線的に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコ リア にぶい橙色 普通	P972 90% SD 5 覆土
22	皿 土師質土器	A (11.0) B 2.3 C 4.6	平底で、体部は直線的に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り後、ナデ。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコ リア にぶい橙色 普通	P980 50% SD 9 覆土
23	皿 土師質土器	A (10.2) B 3.3 C 4.2	平底で、体部は直線的に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部ナデ。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P978 50% SD 9 覆土
24	皿 土師質土器	A 10.2 B 3.0 C 4.8	平底で、体部は直線的に開き、口縁部は僅かに外傾する。口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1015 80% SD 1 覆土
25	皿 土師質土器	A (10.2) B 2.4 C 6.0	平底で、底部厚手。体部は直線的に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 明彩褐色 普通	P976 40% SD 6 覆土
26	皿 土師質土器	A 10.8 B 2.9 C 5.2	平底で、体部は直線的に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P982 100% SD 6 覆土
27	皿 土師質土器	A 10.1 B 3.1 C 4.5	平底で、体部は内彎気味に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部静止糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P968 100% SD 1 覆土

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
28	皿 土師質土器	A (11.1) B 2.6 C 5.2	平底で、体部は直線的に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り後、ナデ。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・砂礫・スコリア にふい橙色 普通	P974 50% SD5 覆土
29	皿 土師質土器	A 10.6 B 2.9 C 4.9	平底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外傾する。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にふい赤褐色 普通	P1004 100% SD1 覆土
30	皿 土師質土器	A (11.8) B 3.4 C 5.2	平底で、体部は内彎気味に立ち上がり、口縁部は僅かに外傾する。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にふい橙色 普通	P975 50% SD6 覆土

### 溝出土土製品解説表

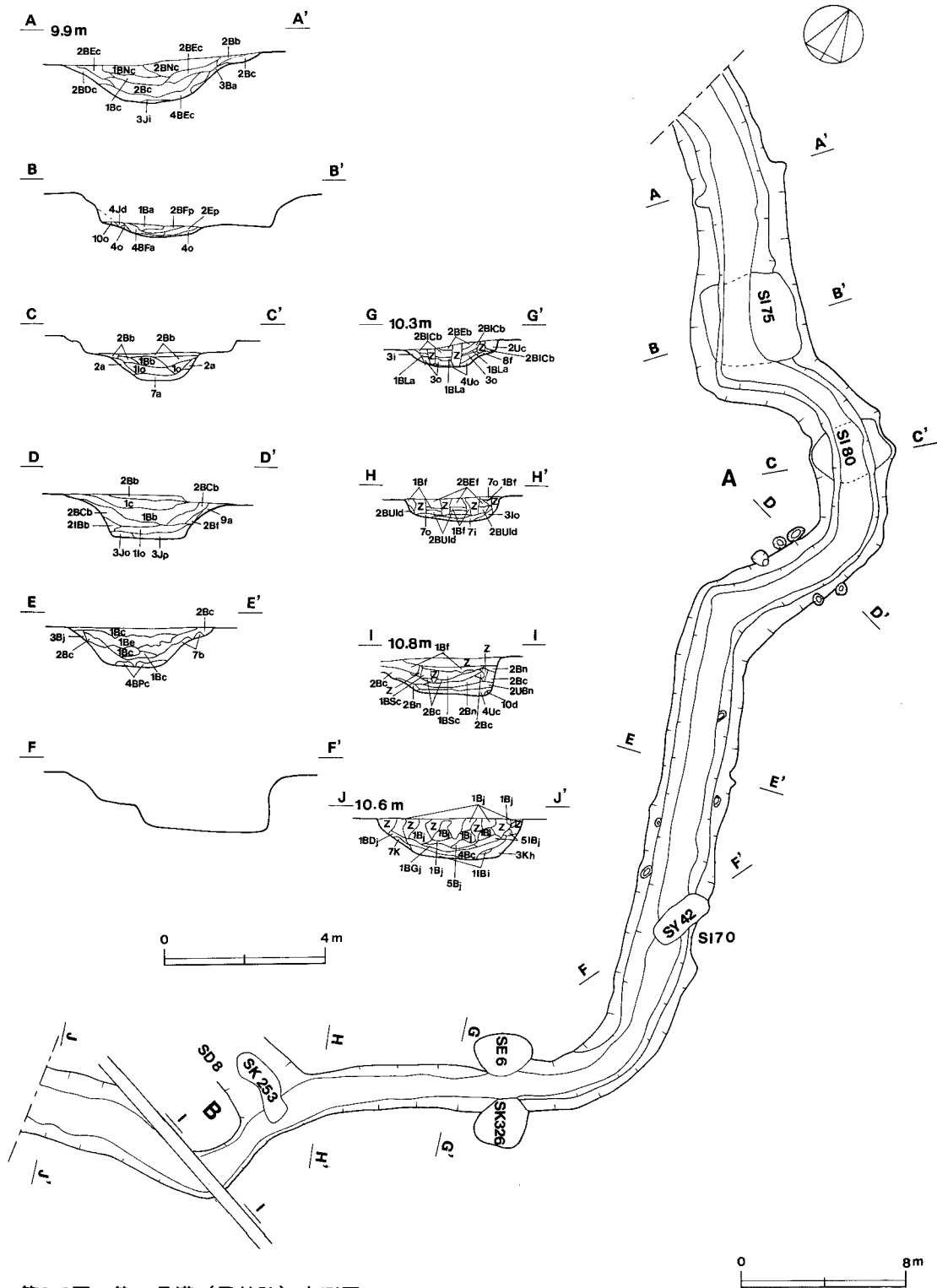
図版番号	名称	出土地点	台帳番号	大きさ (cm)			重量(g)	備考
				長さ	幅	厚さ		
第340図 31	羽 口	SD6	DP105	(6.3)	7.0	—	261.2	孔径0.4cm, 40%



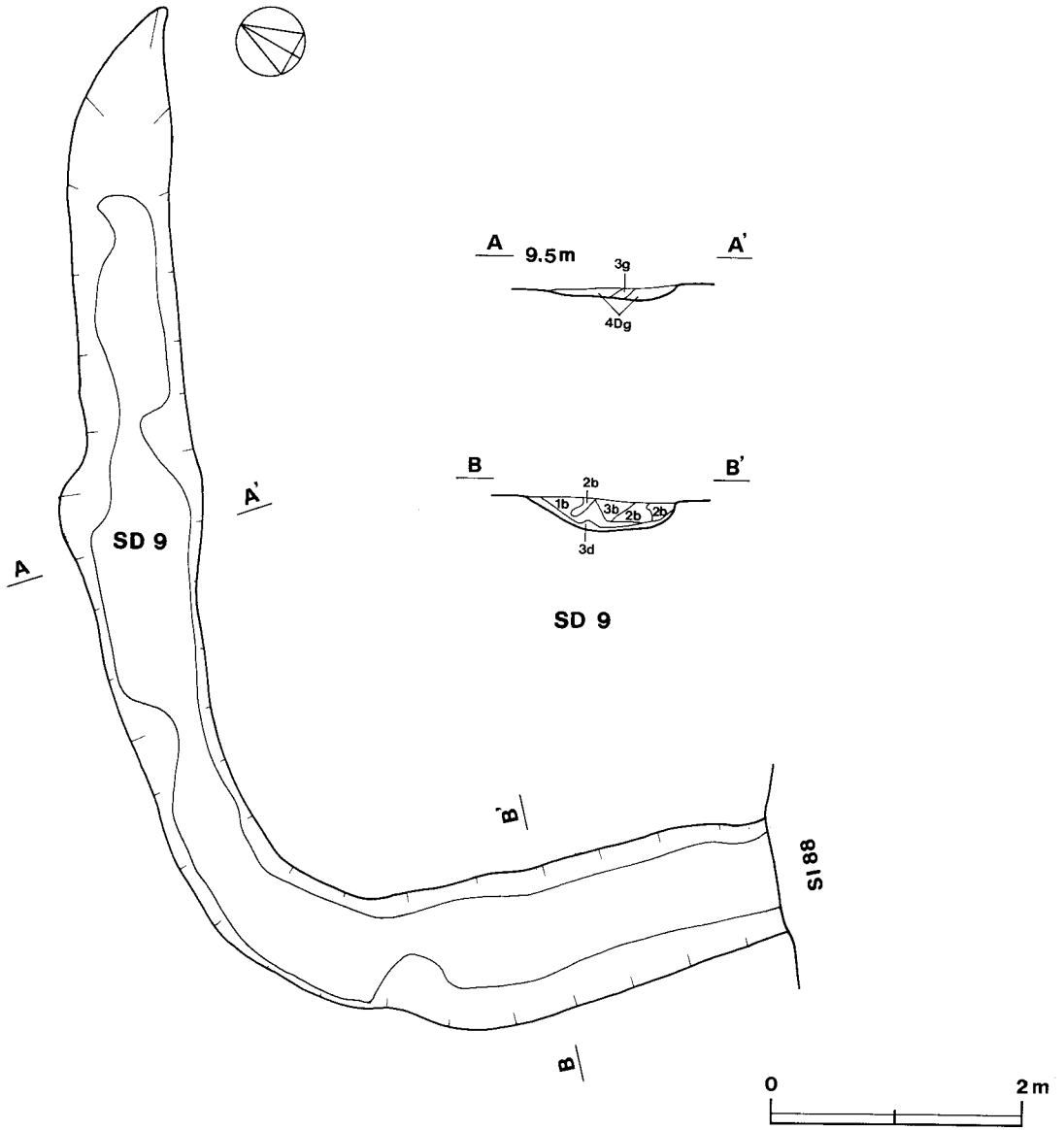


第341图 第1·2号沟实测图

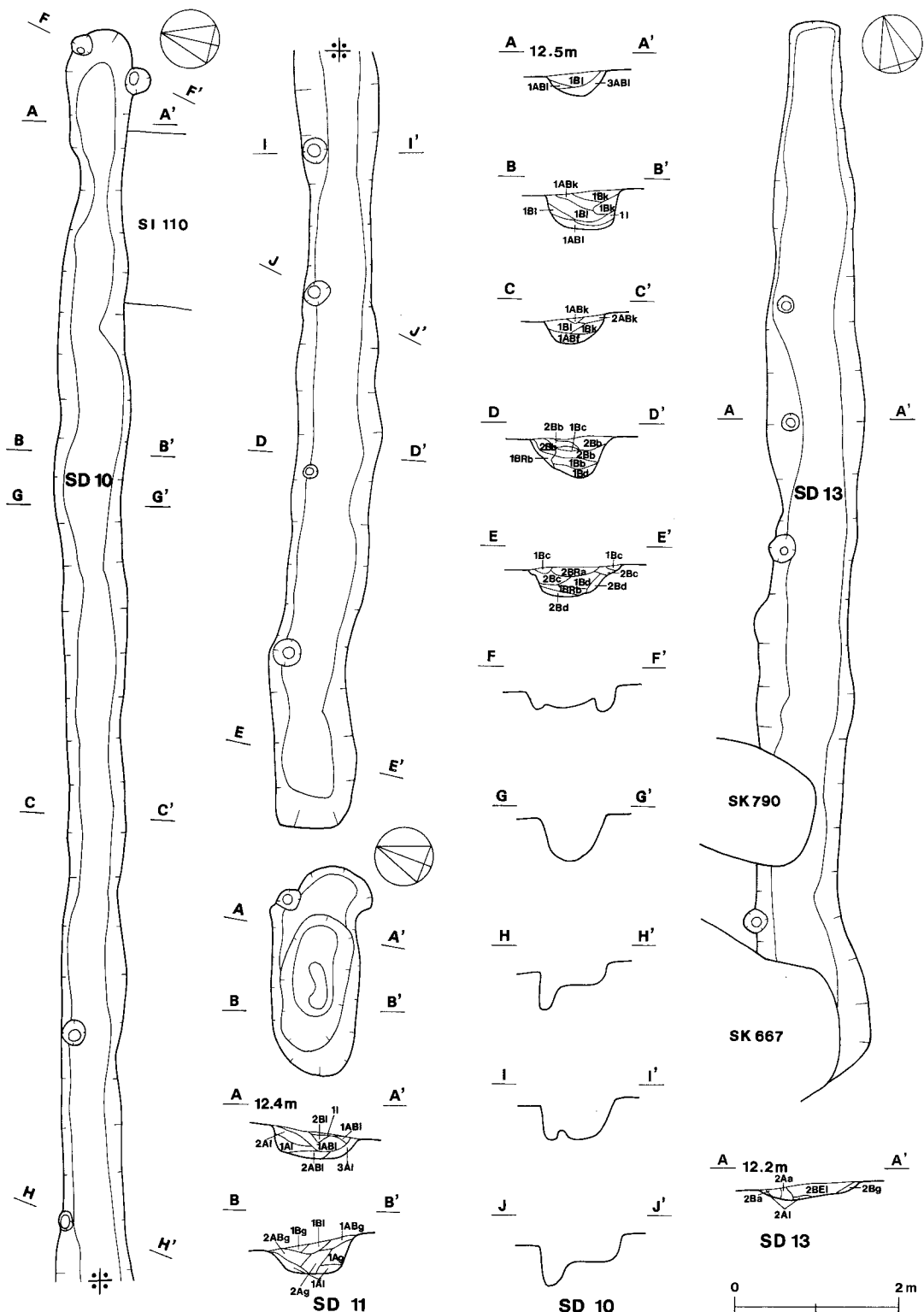




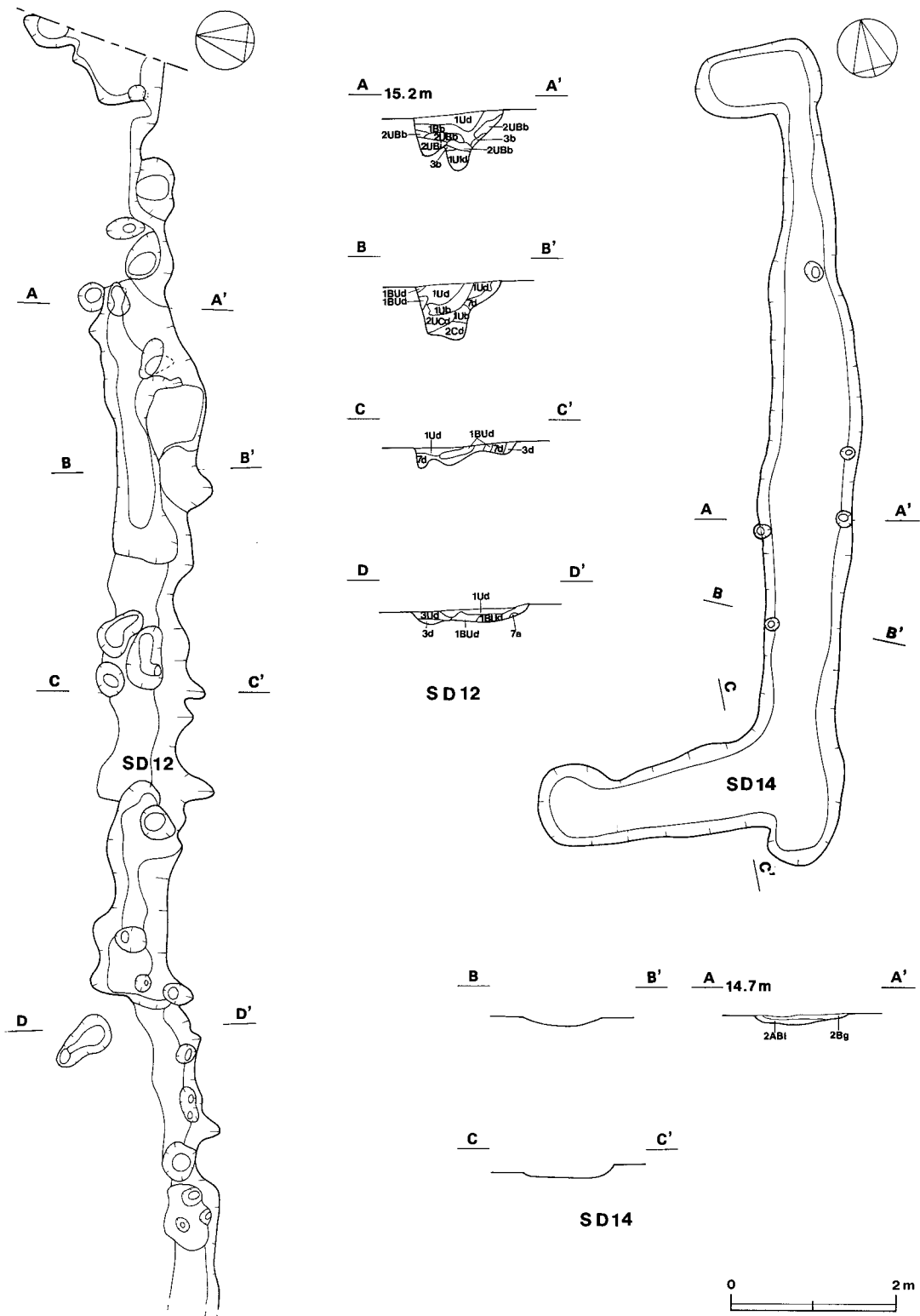




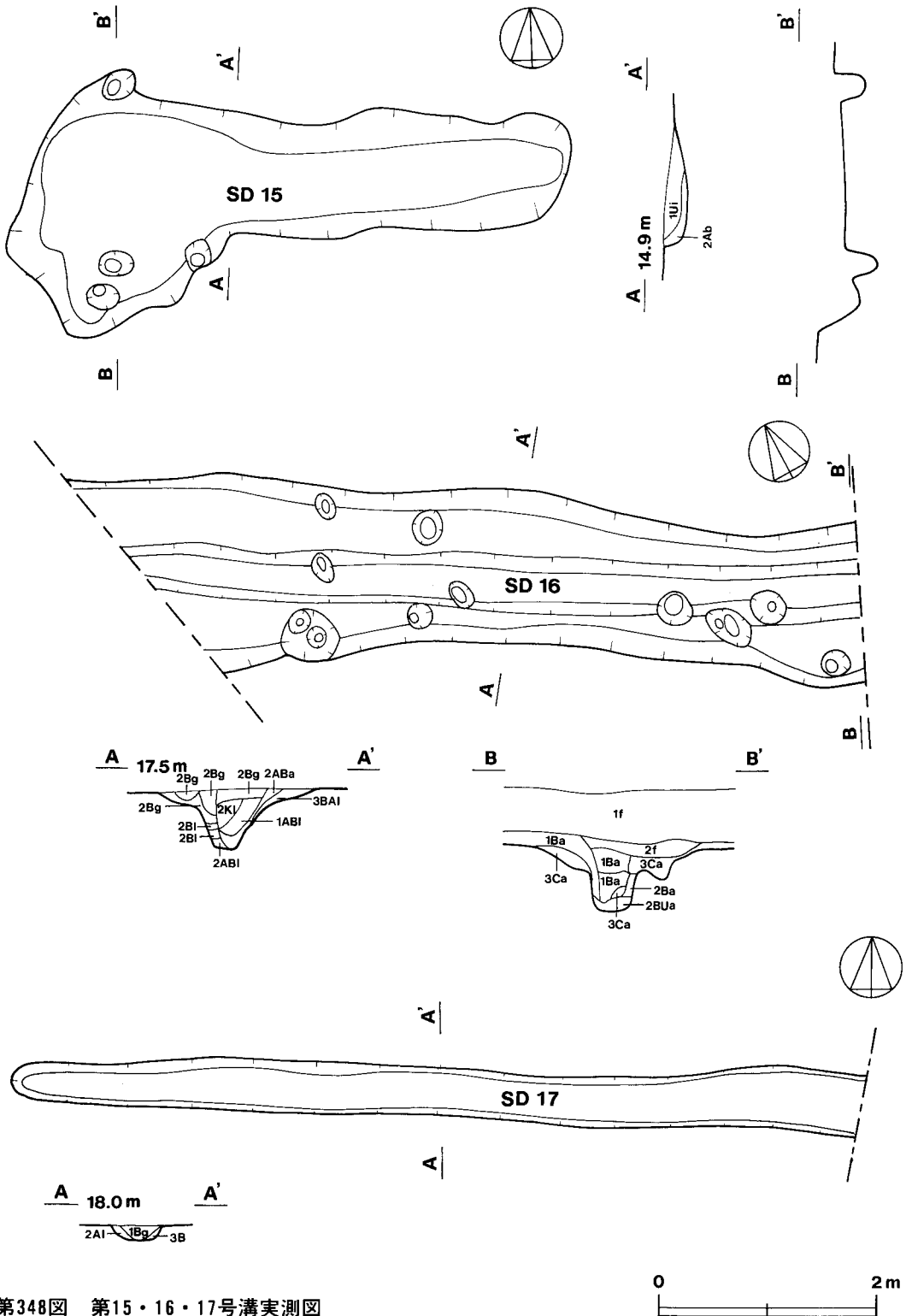
第345图 第9号沟实测图



第346图 第10·11·13号沟渠测图



第347图 第12·14号沟突测图



第348图 第15·16·17号沟壑测图



## 6 堀

### 第1号堀（第350図）

本跡は、調査区の南側G2・G3・H2・I2・J2区に位置し、土層断面から、第138・143号住居跡を切って掘り込んでおり、本跡の方が各住居跡よりも新しいことが明らかである。

検出された堀の長さは約141.5mで、G3h6区から西へ27.5mほど延びてG2g9区へ至る。同区からほぼ直角に屈曲し、南へ113mほど延びてJ2d6区へ至る。さらに、同区からほぼ直角に屈曲し、東へ1mほど延びて調査区域外へ続いている。H2c8区を境にして堀の幅と深さに違いが見られる。H2c8区の北側では、上幅2.0～5.5m、下幅1.0～2.2m、確認面から底面までの深さは1.4～1.5mである。H2c8区の南側では、上幅3.5～4.0m、下幅1.0m、確認面から底面までの深さは1.0mである。南へ進むほど幅は狭くなる。また、壁は、全体的に、外側が50°～60°、内側が40°～45°の角度で立ち上がり、断面形は「∟」状の箱葉研を呈している。

覆土は、下層に多量のローム粒子・パミスを含む暗褐色土、中層に中量のローム粒子・ハードロームブロック・パミスを含む暗褐色土、上層に多量のローム粒子を含む黒褐色土・暗褐色土が自然堆積している。

本跡に伴う遺物とは考えられないが、調査区のG2区とG3区の覆土中層から下層にかけて、人骨と古銭（第366図1～8）が出土しているのでここで記載することにする。拾数体と思われる人骨と馬骨が、覆土中層に集中して出土している。表土除去や耕作によるトレンチャーのため、攪乱を受けて保存状態は全体的に劣悪で、原形をとどめないほどバラバラになって出土しているものが大半である。そのうち、人骨で遺存状態の良いものは頭を北に向けて、足を折り曲げられた状態で出土し、なかには、馬骨と共に出土しているものもある。また、胸部付近にはまとまった古銭（第366図1～8）を伴って埋葬されているものも見られる。古銭は、北宋銭6枚と明銭2枚で、すべて渡来銭である。北宋銭は、「元豊通寶」・「天聖元寶」・「咸平元寶」・「皇宋通寶」・「政和通寶」・「熙寧元寶」である。明銭は、「永樂通寶」・「洪武通寶」である。さらに、人骨17体分を鑑定した国立科学博物館の馬場悠男氏の指導によると、骨のつくりや歯の状態から、良質の食物を食べ、肉体労働をしなくてもすむ身分におかれていた人々で、年齢は18～19才の若者から老人までであり、時期は近世のころである。

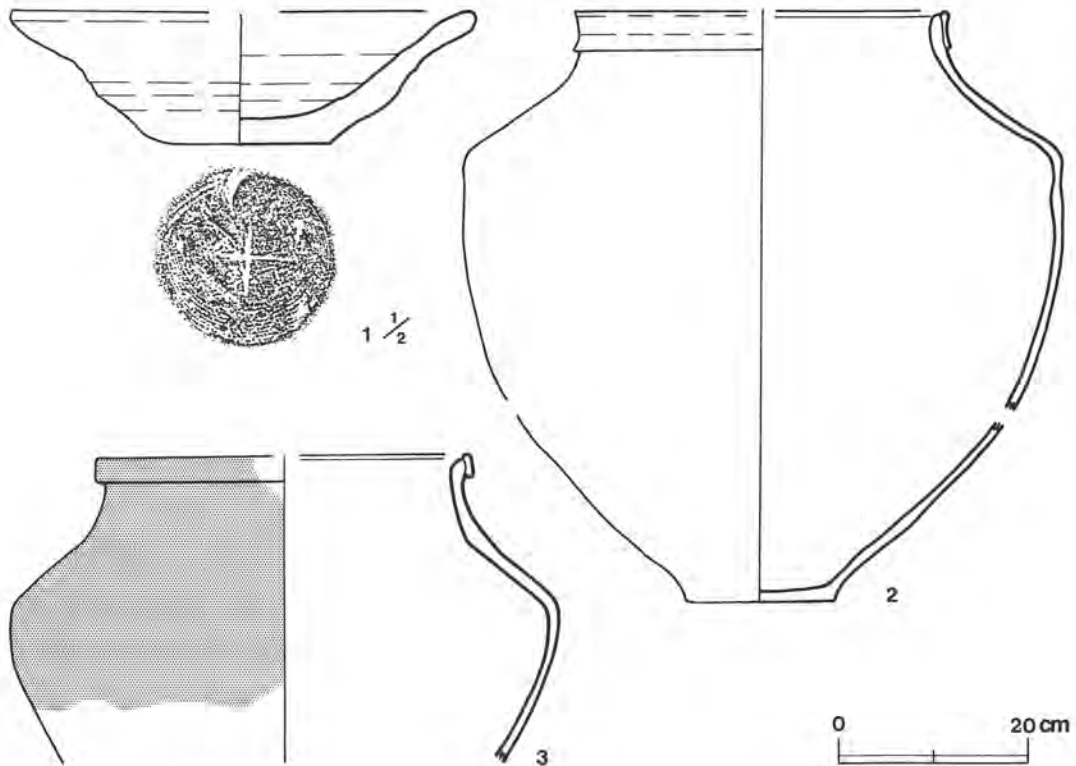
これらの人骨と馬骨は、土層断面から本跡が埋没したあと、人為的に掘られて、埋葬されたと思われる痕跡は確認できたが、人骨の近くから馬骨が出土しているが、一緒に埋葬されたかどうかは定かではない。また、調査区のI2e6区の覆土下層から正位の状態で陶器の壺2点（第349図2・3）が出土している。出土状況から推測すると、堀が埋没したあと、壺が埋められたものと思われる。鑑定の結果、室町時代の常滑で製作されたものであることが判明した。なお、これらの壺が何に使用されたかは不明である。

本跡に伴うと思われる遺物は、調査区J2a5区の覆土中層から土師質土器の皿（第349図1）が出土している。皿の時期は、中世のころと思われる。

以上のことから、本跡は人骨・馬骨・壺とは同時期でなく、本跡の方が古いと思われる。

### 堀出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第349図 1	皿 土師質土器	A (12.4) B 3.5 C 4.5	平底で、底部小径。体部は直線的に開き、口縁部は僅かに外傾する。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にふい褐色 普通	P1009 60% 1号堀覆土
2	壺 陶器	A (39.6) B (41.7) C 16.0	平底で、底部から胴部にかけて内反しながら立ち上がり、胴部上位は強く張り、強く内傾して頸部に移行する。口縁部は丸味をもって外反する。	巻き上げ。 外面横ナデ。	砂粒・長石 にふい赤褐色 普通	P1010 50% 1号堀覆土 常滑
3	壺 陶器	A (39.9) B (32.0)	胴部は丸味を有して立ち上がり、肩は強く張り、強く内傾して頸部に移行する。口縁部は丸味をもって外反する。	巻き上げ。 外面横ナデ。	砂粒・長石 赤色 普通	P1011 口縁部から肩部にかけて灰釉が見られる。 20% 1号堀覆土 常滑



第349図 堀出土遺物実測図



## 7 井戸

### 第1号井戸（第353図）

本跡は、B5e1区を中心に確認され、第34号住居跡の南側約3.2m、第73号住居跡の東側9.6mに位置している。

平面形は長径1.34m・短径1.20mの不整形円形を呈し、調査できた深さは2.3mである。それ以上掘削すると周囲の壁が崩れて危険を伴うため、底面までは確認できなかった。確認面から約1.7m下までの壁はやや内傾しているが、それ以下は、ほぼ垂直に落ち込んで円筒状を呈している。覆土は自然堆積の状態を示し、上・中層はローム粒子を含む黒褐色土で、下層では砂・小石・ロームを含む極暗褐色土で、ざらざらしている。

遺物は、覆土上層から極少量の土師器片や須恵器片が出土している。出土状況から判断して、周囲から流入したものと思われるため、本跡の時期を明確にすることはできなかった。

### 第2号井戸（第354図）

本跡は、D3a2区を中心に確認され、第46号住居跡の北側5.0mに位置している。

掘り方は二段に掘り込まれている。上段は長径4.0m・短径3.6mの不整形円形で、深さ0.35m掘り込み、長径3.5m・短径3.1mの不整形円形の足場と思われる平坦な面を設けている。下段は、この面の中央を径約3.1mで円筒状に約2.5mまで掘り込んでいる。底面はほぼ平坦で、上段の壁は外傾しており、下段の壁はほぼ垂直となっている。覆土はほぼ自然堆積の状態を示し、上層はローム粒子や炭化物を含む暗褐色土、中層はローム粒子やロームブロックを含む黒褐色土、下層はローム粒子・粘土粒子・砂利を含む浅黄色土で、ざらざらしている。

遺物は、覆土上層から土師器や須恵器の破片が出土し、覆土下層の底面に近い位置から土師質土器の皿（第351図6）が出土している。下層の底面近くから出土している土師質土器の皿から本跡の時期を判断すると、中世以降と思われる。

### 第3号井戸（第353図）

本跡は、D3c3区を中心に確認され、第46号住居跡の南東側で重複している。土層断面で見ると、本跡が第46号住居跡を切っており、本跡の方が新しい。

平面形は長径1.5m・短径1.4mの不整形円形を呈し、調査できた深さは2.25mである。確認面から約0.4mまでの壁はやや内傾しているが、それ以下は、ほぼ垂直に落ち込んで円筒状を呈している。覆土は、確認用の層を残しながら底面まで掘削すると、崩壊の危険があるので、第1号井戸の土層と類似しているということで記録しなかった。

遺物はまったく出土しなかったため、本跡の時期は不明である。

#### 第4号井戸（第353図）

本跡は、C3c9区に確認され、第6号井戸の北側に隣接している。

平面形は長径1.6m・短径1.5mの円形を呈し、調査できた深さは4.0mである。確認面から0.5m下までの壁は内傾しているが、それ以下はほぼ垂直に落ち込んで円筒状を呈している。覆土は、確認用の層を残しながら底面まで掘削すると、崩壊の危険があるので、第1号井戸と類似しているということで記録しなかった。

遺物は覆土中から少量の鉄滓が出土しているだけで、これらが本跡に伴うかどうか不明であるため、本跡の時期を明確にすることはできなかった。

#### 第5号井戸（第353図）

本跡は、B4f7区に確認され、第71号住居跡の南壁中央部と重複している。土層断面から本跡が第71号住居跡を切っており、本跡の方が新しい。

平面形は径1.0mのほぼ円形を呈し、調査できた深さは1.0mで、それ以上掘削すると周囲の壁が崩れて危険を伴うため、底面までは確認できなかった。確認面から約0.6m下までの壁はやや内傾しているが、それ以下は、ほぼ垂直に落ち込んで円筒状を呈している。覆土は自然堆積の状態を示し、上層はローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを含む黒褐色土で、中層はローム小ブロック・白色粘土ブロック・小石・山砂を含む明黄褐色土で、ややじめじめしている。下層は褐色土である。

遺物はまったく出土しなかったため、本跡の時期は不明である。

#### 第6号井戸（第355図）

本跡は、C3d8・d9区に確認され、第5号溝の西側と重複している。土層断面から本跡が第5号溝を切っており、本跡の方が新しい。

平面形は長径2.8m・短径2.1mの不整楕円形を呈し、深さは3.5mである。確認面から約1.0m下までの壁は内傾しているが、それ以下はほぼ垂直に落ち込んで円筒状を呈しており、底面は平坦である。覆土は自然堆積の状態を示し、黒褐色土を主体とし、上層にローム粒子を含み、中層に多量のパミスを含み、下層に多量の粘土粒子を含み、じめじめしている。

遺物は、覆土中層から下層にかけて、土師質土器の皿11点（第351図1・2・5・7・9～12・16・18・19）・土師器の高台付皿形土器（第351図21）が出土している。その他、内耳形土器（第352図23）や極少量の土師質土器の播鉢の破片が出土している。

出土した土器から時期を判断すると、中世以降と思われる。

## 第7号井戸（第355図）

本跡は、B4c4・c5区に確認され、第11号住居跡の西側3.6m、第81号住居跡の東側6.0mに位置している。

平面形は長径2.20m・短径1.80mの楕円形を呈し、深さは3.6m以上で、それ以上掘削すると周囲の壁が崩れて危険を伴うため、底面までは確認できなかった。確認面から約1.6mまでの壁は内傾しているが、それ以下はほぼ垂直に落ち込んで円筒状を呈している。覆土は自然堆積の状態を示し、上層は多量のローム粒子と少量の炭化粒子を含む黒褐色土、中層は砂質粘土粒子と砂利を含む褐色土、下層は多量の砂質粘土粒子を含むにぶい黄褐色土・暗褐色土・黒褐色土が互層を成している。

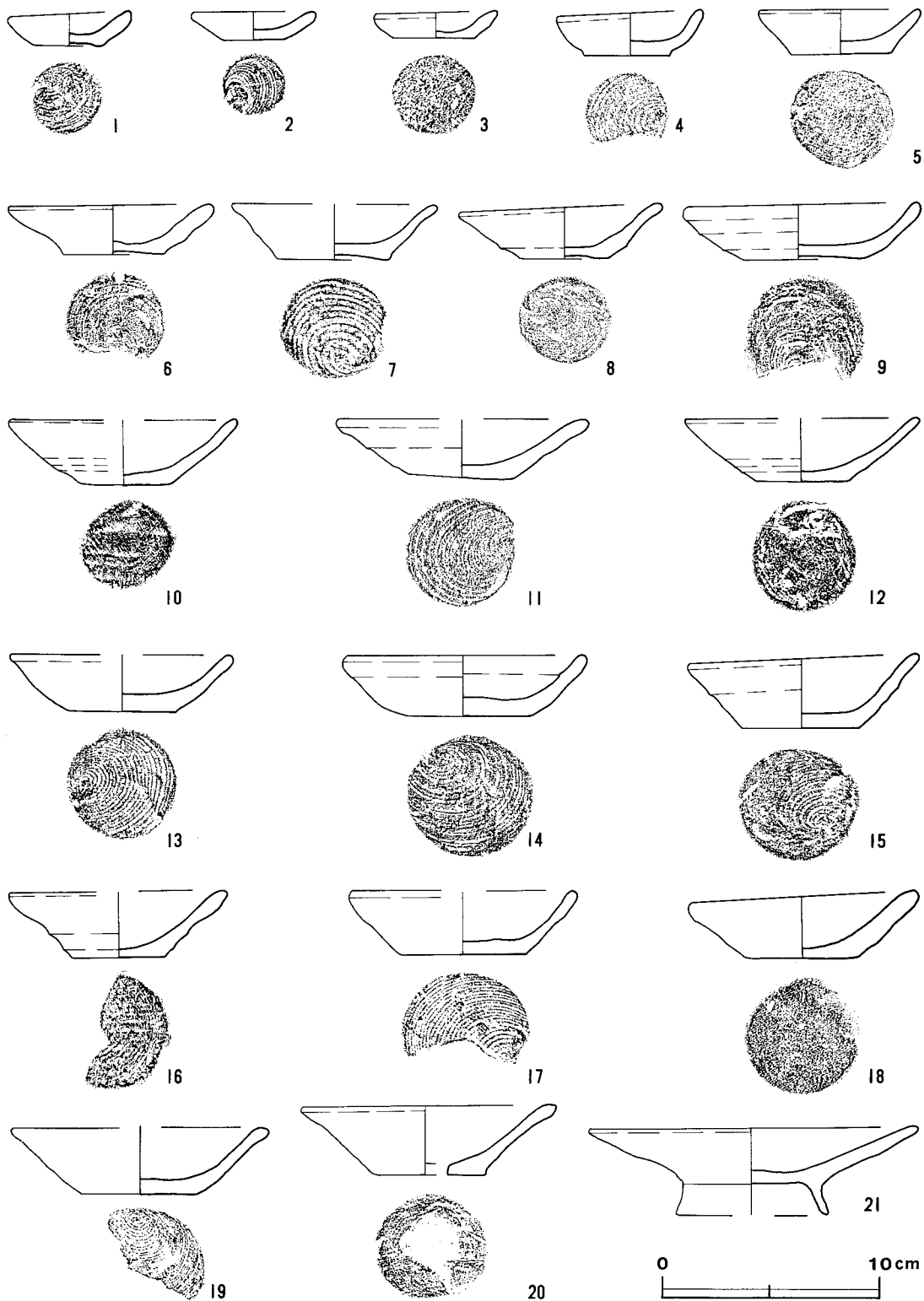
遺物は、調査できた深さの覆土中層にかけて、土師質土器の皿8点（第351図3・4・8・13～15・17・20）・須恵器の高台付坏（第352図24）・陶器の皿（第352図22）・土師質土器の播鉢（第352図25）が出土している。その他、内耳形土器の破片や少量の鉄滓が出土している。なお、陶器の皿は、鑑定した結果、安土・桃山時代に美濃で製作されたものである。

出土遺物から時期を判断すると、中世と思われる。

### 井戸出土土器観察表

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第351図 1	皿 土師質土器	A 5.8 B 1.7 C 3.2	平底で、体部は直線的に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア・ 雲母 にぶい赤褐色 普通	P987 100% SE6覆土
2	皿 土師質土器	A 5.8 B 1.3 C 2.8	平底で、体部は直線的に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P992 100% SE6覆土
3	皿 土師質土器	A 5.7 B 1.3 C 3.8	平底で、底部薄手。体部は直線的に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P1000 90% SE7覆土
4	皿 土師質土器	A 6.7 B 2.2 C 3.9	平底で、体部は内彎しながら立ち上がり、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り後、ナデ。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 浅黄橙色 普通	P995 70% SE7覆土
5	皿 土師質土器	A 7.4 B 2.1 C 4.5	平底で、体部は器厚を減じながら直線的に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り後、ナデ。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい黄橙色 普通	P993 100% SE6覆土
6	皿 土師質土器	A 9.6 B 2.3 C 4.7	平底で、底部薄手。体部は直線的に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P1017 60% SE2覆土
7	皿 土師質土器	A (9.5) B 2.6 C 5.2	平底で、底部外面がやや窪み、体部は直線的に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P985 50% SE6覆土

図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
8	皿 土師質土器	A 9.4 B 2.6 C 4.1	平底で、底部外面やや窪み、体部は直線的に開き、口縁部は僅かに外傾する。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい橙色 普通	P998 100% SE 7 覆土
9	皿 土師質土器	A 10.9 B 2.6 C 5.4	平底で、体部は内彎気味に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	P1018 55% SE 6 覆土
10	皿 土師質土器	A (10.7) B 3.1 C 4.2	平底で、底部小径。体部はやや内彎気味に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P991 40% SE 6 覆土
11	皿 土師質土器	A (11.6) B 2.3 C 4.7	平底で、体部は直線的に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい橙色 普通	P990 50% SE 6 覆土
12	皿 土師質土器	A (10.8) B 3.0 C 4.4	平底で、体部はやや内彎気味に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り後、ナデ。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P984 50% SE 6 覆土
13	皿 土師質土器	A (10.4) B 2.7 C 5.0	平底で、体部は内彎気味に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	P994 50% SE 7 覆土
14	皿 土師質土器	A 11.3 B 2.9 C 5.6	平底で、体部はやや内彎気味に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P999 100% SE 7 覆土
15	皿 土師質土器	A 10.7 B 3.5 C 5.3	平底で、体部は直線的に開き、口縁部は僅かに外傾する。	水挽き成形。 底部回転糸切り後、ナデ。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 橙色 普通	P997 95% SE 7 覆土
16	皿 土師質土器	A (10.2) B 3.1 C ( 4.3)	平底で、体部は直線的に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・砂礫 明赤褐色 普通	P986 50% SE 6 覆土
17	皿 土師質土器	A (10.6) B 3.0 C ( 5.8)	平底で、体部は器厚を減じながら直線的に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・長石 灰褐色 普通	P1020 30% SE 7 覆土
18	皿 土師質土器	A 10.6 B 2.1 C 5.1	平底で、底部薄手。体部は直線的に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り後、手持ちヘラ削り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい黄褐色 普通	P988 100% SE 6 覆土
19	皿 土師質土器	A (12.0) B 3.1 C ( 5.4)	平底で、体部は直線的に開き、口縁部は僅かに外傾する。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・スコリア にぶい褐色 普通	P989 40% SE 6 覆土
20	皿 土師質土器	A 11.9 B 3.3 C 5.2	平底で、底部の中心に孔が穿たれている。体部は直線的に開き、口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り後、穿孔。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	P1008 80% SE 7 覆土
21	高台付皿形土器 土師器	A 15.3 B 4.1 D ( 7.1) E 1.4	体部は直線的に開き、高台は「ハ」の字状に外下方へのびる。	底部は回転ヘラ削り後、高台貼り付け。高台内・外面横ナデ。 体部内面ヘラ磨き、外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P983 内面黒色処理 60% SE 6 覆土



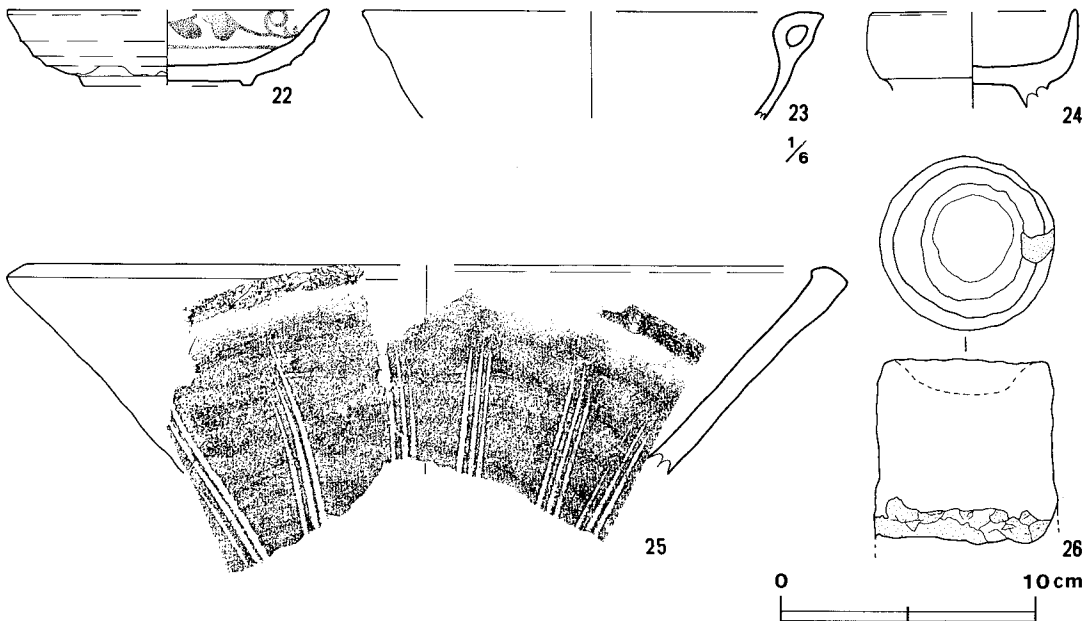
第351図 井戸出土遺物実測図 (1)



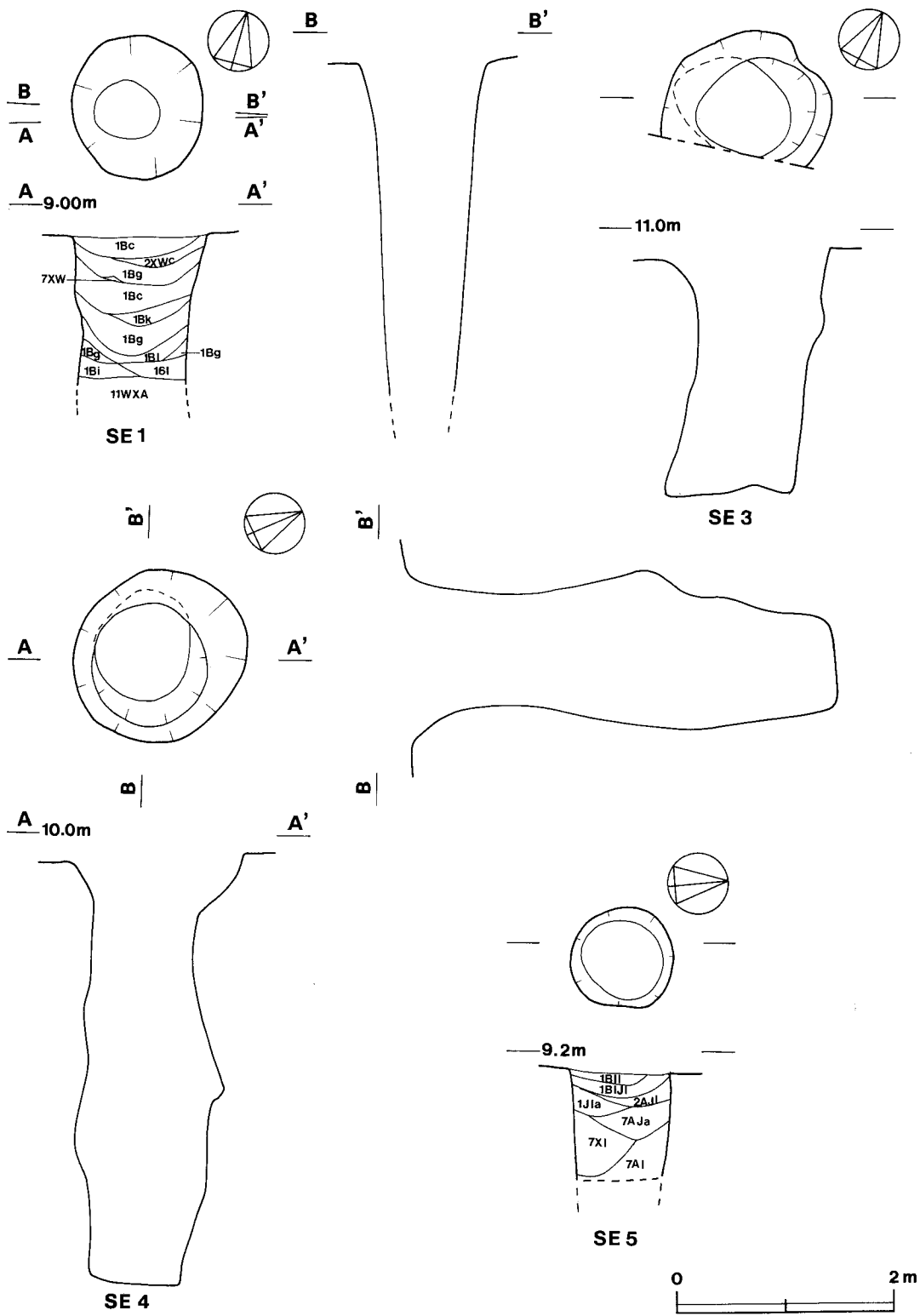
図版番号	器種	法量(cm)	器形の特徴	手法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第352図 22	皿 陶器	A (12.6) B 3.0 C (4.6)	染付の延形皿。高台は低く直立し、 体部は緩く内彎しながら外上方に 開く。内面には一重の圈線と、そ の上方には花文が描かれている。	水挽き成形。 削り出し高台。	褐灰色 (胎) 紫灰色 (釉) 砂礫 普通	P1019 40% SE7覆土 美濃
23	内耳形土器 土師質土器	A (36.0) B (8.5)	体部はやや内彎気味に開いて立ち 上がる。耳接合部の外面はふくら む。口唇部は平坦。耳は2か所残 存。外面に鍋墨附着。	口唇部・口縁部内面横ナデ。 体部内・外面ナデ。 耳接合。	砂粒・雲母 外面黒褐色 内面にぶい橙色 普通	P1027 20% SE6覆土 普通
24	高台付坏 須恵器	A (8.2) B (3.8) D (5.7) E (0.8)	高台欠損。 体部は内彎気味に上方へ立ち上が り、口縁部へ至る。	水挽き成形。 底部回転ヘラ削り後、ナデ。 高台貼り付け後、内・外面横 ナデ。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 灰褐色 不良	P996 70% SE7覆土
25	播鉢 土師質土器	A (33.1) B (8.2)	体部は直線的に斜上方に開き、口 縁部に至る。口唇部は平坦で、内 傾する。内面には5本1単位の楕 目が縦位に施されている。	体部・口縁部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母・長石 にぶい赤褐色 普通	P1028 20% SE7覆土

井戸出土土製品解説表

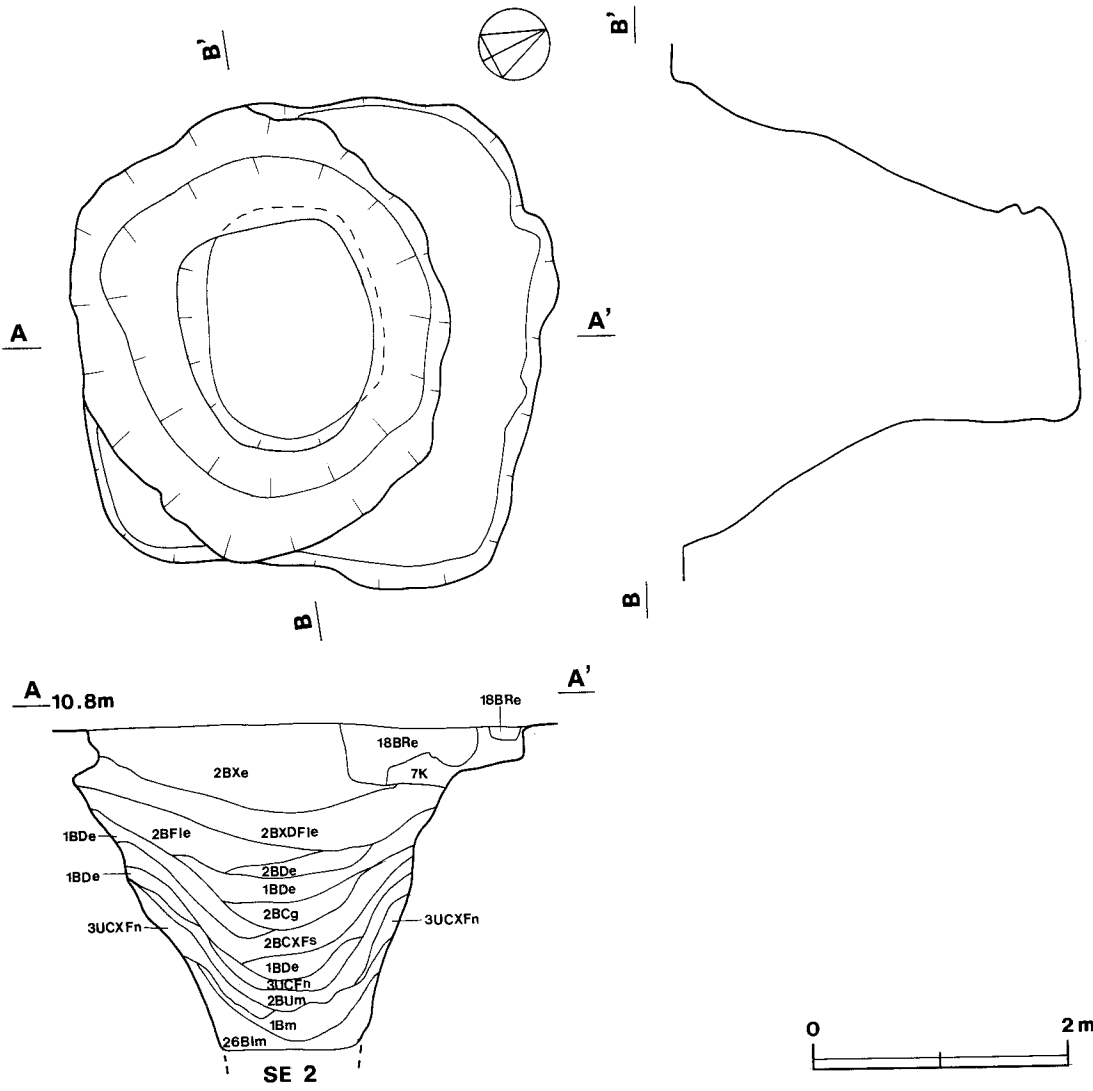
図版番号	名 称	出土地点	台帳番号	大きさ (cm)			重量(g)	備 考
				長さ	幅	厚さ		
第352図 26	支 脚	SE7	DP106	(7.3)	7.0	—	361.7	黒褐色，40%



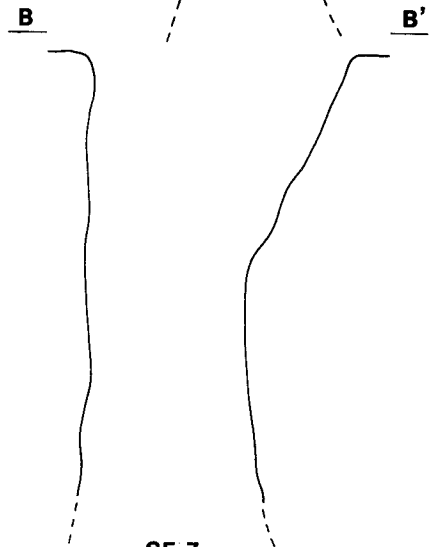
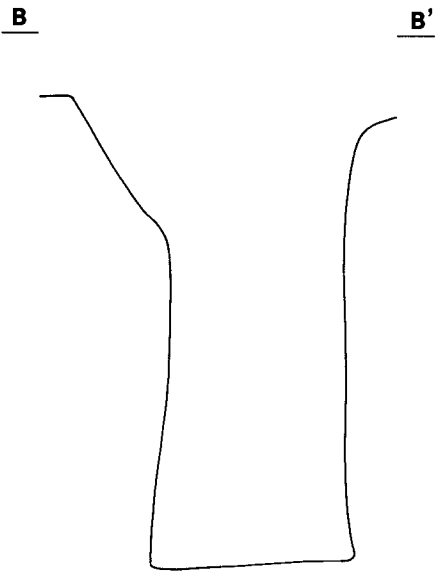
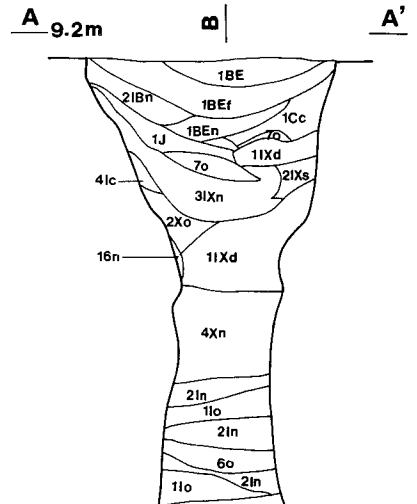
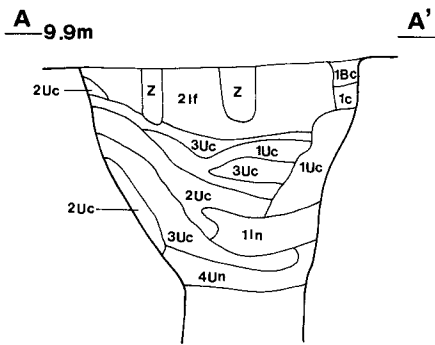
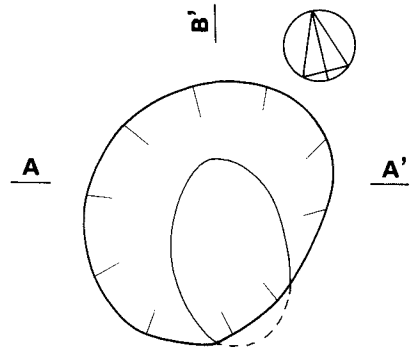
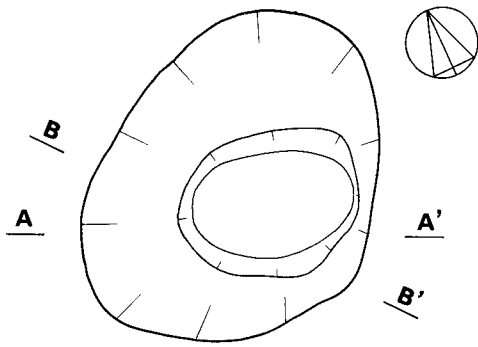
第352図 井戸出土遺物実測図 (2)



第353图 第1・3・4・5号井戸実測図

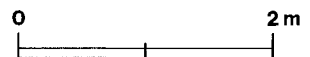


第354图 第2号井戸实测图



SE 6

SE 7



第355图 第6・7号井戸実測図

## 8 柵列跡

### 第1号柵列跡（第356図）

本跡は、A4h2区からA4h5区にかけて確認され、本跡の北側で、第11号掘立柱建物跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

柱穴は8か所検出され、ほぼ直線的にのび、全長15.3mである。方向はN-73°-Eを指し、第13号掘立柱建物跡の北側と隣接し、桁行方向とほぼ平行である。連続して検出された柱穴間の距離は2.0～2.5mで、ほぼ等間隔である。柱穴は長径60～80cm・短径40～70cmの楕円形である。なお、本跡は、第13号掘立柱建物跡の桁行方向とほぼ平行しているが、両遺構の関係は不明である。

遺物はまったく出土していないため、本跡の時期を明確にすることはできなかった。

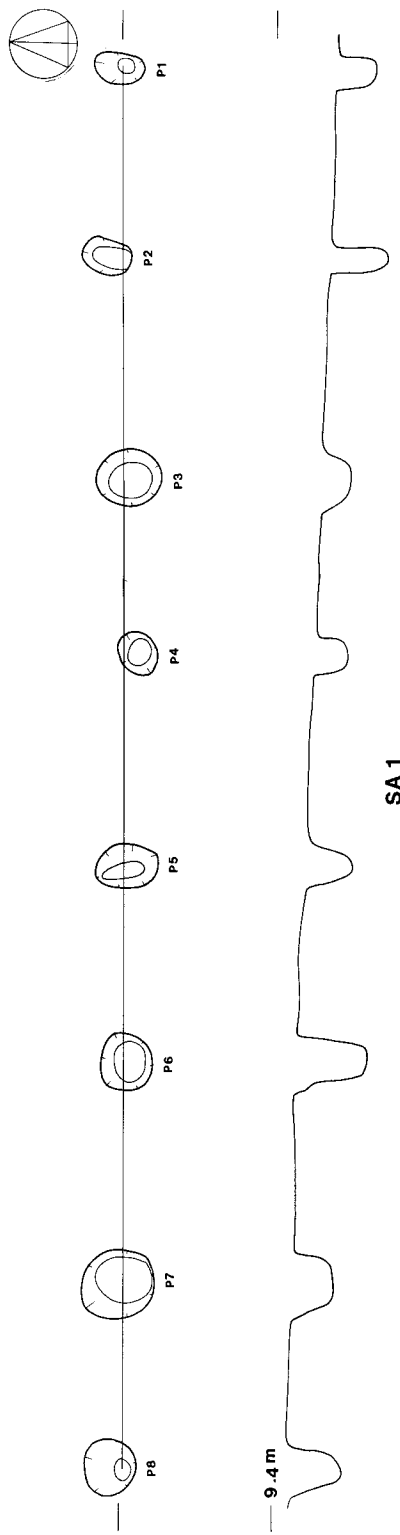
### 第2号柵列跡（第356図）

本跡は、D3f9区からD4e4区にかけて直線的に確認された柵列跡である。本跡のすぐ南側に第10号溝が平行しており、また、すぐ西側で第11号溝と隣接している。

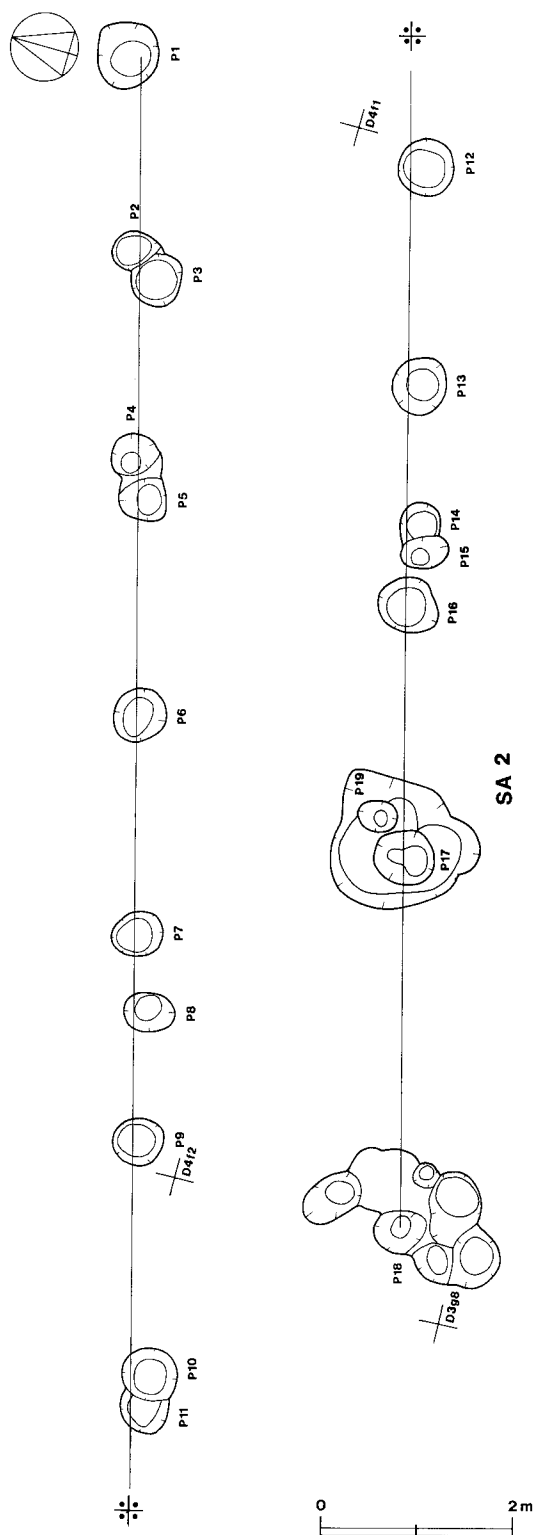
柱穴は19か所検出され、そのうち、東側から第17・18番目を除いた柱穴が柵列で、全長約23mである。方向はN-80°-Eである。連続して検出された柱穴間の距離は2.0～2.3mで、ほぼ等間隔である。柱穴は長径50～70cm・短径40～50cmの楕円形で、深さは30～60cmである。東側から第17と18番目の柱穴は長径1.0～1.4m・短径0.6～1.2mの不整長方形で、深さは0.6～1.0mを呈する掘り方である。柱穴間隔は約3.5mで、他の柵列の柱穴の規模・間隔と比較して、大きく、広く、南側で第2号道路状遺構が直交していることから門柱と思われる。

遺物はまったく出土していないため、本跡の時期を明確にすることはできなかった。

本跡と第10・11号溝及び第2号道路跡との関係について、決め手となる遺物は出土していないが、配置的に、本跡と第10号溝は隣接し、東西方向へほぼ直線的に走っており、あわせて、第10号溝と第11号溝は一連的なつながりがあると思われ、第2号道路跡とも、本跡の西側で直交していることから推定すると、本跡は出入口施設に伴う遺構と思われる。



第356图 第1·2号栅列迹实测图



## 9 道路跡

### 第1号道路跡（第357図）

本跡は、A3g8区からA3i8区にかけて確認され、南北方向に走る道路である。本跡は第86・94号住居跡の西側で隣接しており、第97号住居跡、第336号土坑、第26号地下式坑と重複している。土層断面から見て第97号住居跡と第336号土坑と第26号地下式坑を切っていることから、本跡の方が新しい。

道路幅は1.0～1.4mで、地山を20～40cmほど掘り込んでいる。掘り込みは北側に向かうに従ってやや深くなるが、道路最下面（地山の道路面）はほぼ一定している。断面は皿形を呈し、壁は外傾している。道路面（地山面）は非常に硬く踏み固められ、表面は暗赤褐色化している。以上のことから、本跡はかなり使用された道路と思われる。

本跡に伴う遺物はまったく出土していないため、本跡の時期は明確にできなかった。

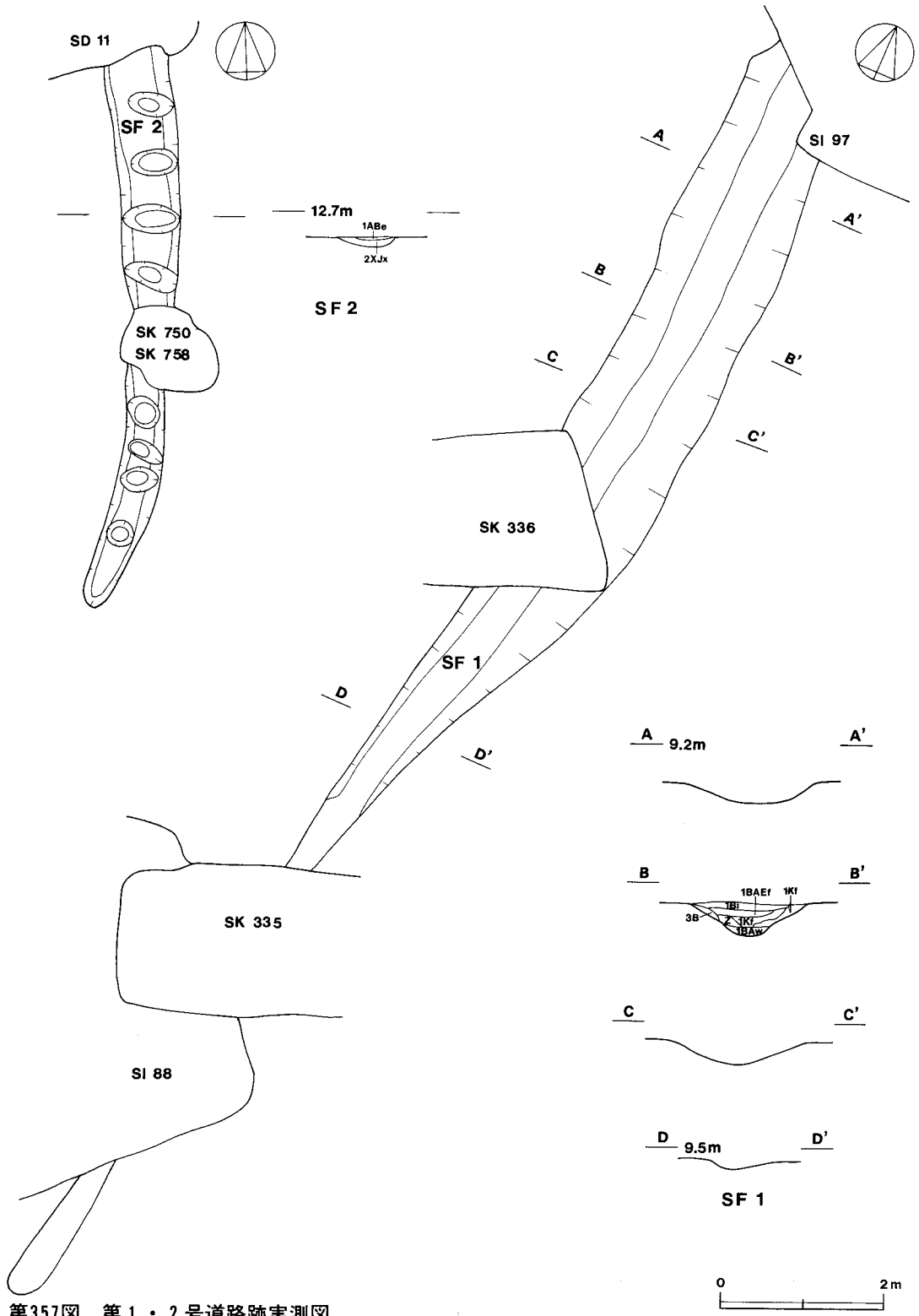
### 第2号道路跡（第357図）

本跡は、D3g8区からD3h8区にかけて確認され、南北方向に走る道路である。本跡は第750・758号土坑と重複しており、土層断面から第750・758号土坑を切って構築していることから、本跡の方が新しいと思われる。また、本跡の北端で第11号溝と直交している。第2号柵列跡とも隣接している。

道路幅は40～80cmで、地山を2～5cmほど掘り込んでいる。掘り込みは北側に向かうに従ってやや深くなるが、道路最下面（地山の道路面）はほぼ一定している。断面は皿状を呈し、くぼんでいる。道路面（地山面）は非常に硬く踏み固められており、傾斜面に沿って地山（ローム）を削って段を構築している。

遺物はまったく出土していないため、本跡の時期は明確にすることはできなかった。

本跡と第11号溝及び第2号柵列跡との関係について、決め手となる遺物は出土していないが、配置的に本跡の北端が第11号溝の東端と直交して行き止まりとなっており、さらに、第2号柵列跡の第17番目と第18番目の門柱がすぐ近くに位置することから推定すると、本跡は出入口施設に伴う遺構と思われる。



第357图 第1·2号道路迹实测图



## 10 性格不明遺構

### 第1号性格不明遺構（第359図）

本跡は、B4b6区を中心に確認され、第11号住居跡の北側で重複している。土層断面で見ると第11号住居跡を掘り込んでいることから、本跡の方が新しい。

平面形は長径6.8m・短径5.3mの不整楕円形を呈し、長径方向はN-43°-Wを指している。壁はゆるやかに外傾して立ち上がっている。確認面から底面までの深さは20～30cmで、底面はやや凹凸が見られるが、掘鉢底で軟らかい。覆土は多量のローム粒子、少量の粘土粒子やローム小ブロックを含む暗褐色土がほぼ自然堆積の様相を呈している。

遺物は壁際を除く本跡全域の覆土下層から、多量の土師器の破片が投棄されたような状態で散乱している。すべて、まとまった器形にはならなかった。これらの土器片が本跡に伴うかどうかは不明だが、出土した土師器片から時期を推定すると、奈良・平安時代に比定されるものと思われる。

### 第2号性格不明遺構（第360図）

本跡は、C3h7区からC3j7区にかけて確認され、第54号住居跡の西側と接しており、第42・94・96・104・210号土坑と重複している。新旧関係は不明である。

平面形は長径7.0m・短径3.5mの不整楕円形を呈しながら北へ延びているが、北側は農道にかかっているため調査できなかった。壁はゆるやかに外傾して立ち上がっている。確認面から底面までの深さは25cm前後で、底面はトレンチャーによって攪乱されているため凹凸が見られるが、掘鉢底で軟らかい。覆土は攪乱されているため堆積状態は不明であるが、多量のローム粒子を含む黒褐色土である。

遺物は少なく、覆土中から土師質土器の皿（第358図3）をはじめ、土師器片、須恵器片、鉄片が出土しているが、すべて、攪乱のため移動しているので本跡に伴うかどうか不明である。

### 第3号性格不明遺構（第361図）

本跡は、B4b3区を中心に確認され、第81号住居跡の北側で接している。

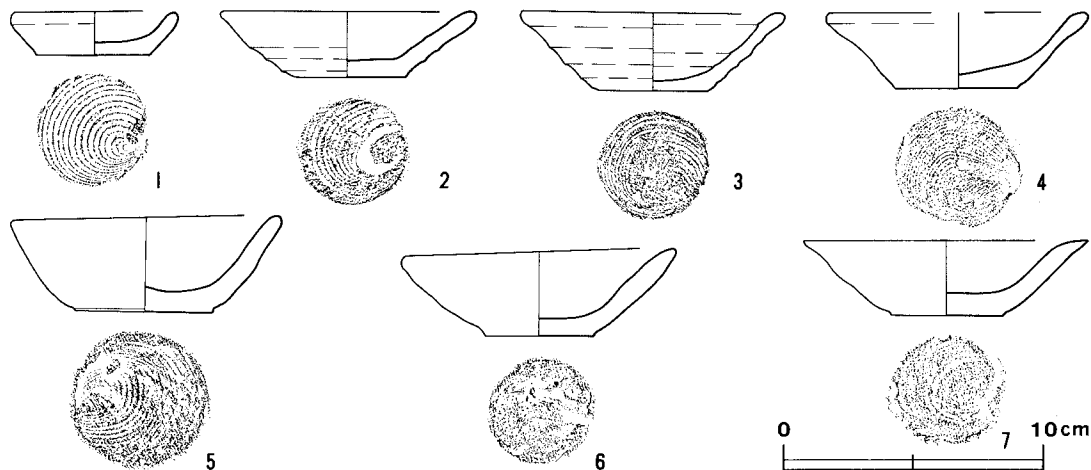
平面形は長径4.05m・短径1.25mの不定形を呈し、長径方向はN-50°-Eを指している。壁はゆるやかに外傾して立ち上がっている。確認面から底面までの深さは25～45cmで、底面はやや凹凸が見られるが、掘鉢底で軟らかい。覆土は2層に分けられ、上層は多量のローム粒子や少量の木炭粒子を含む黒褐色土、下層は黄褐色の砂質粘土で、多量のローム粒子や砂利が含まれている。

遺物は、壁際を除く底面全体に、土師質土器の皿6点（第358図1・2・4～7）をはじめ、多量の土師器や須恵器が投棄されたような状態で出土している。これらの遺物が本跡に伴うもので

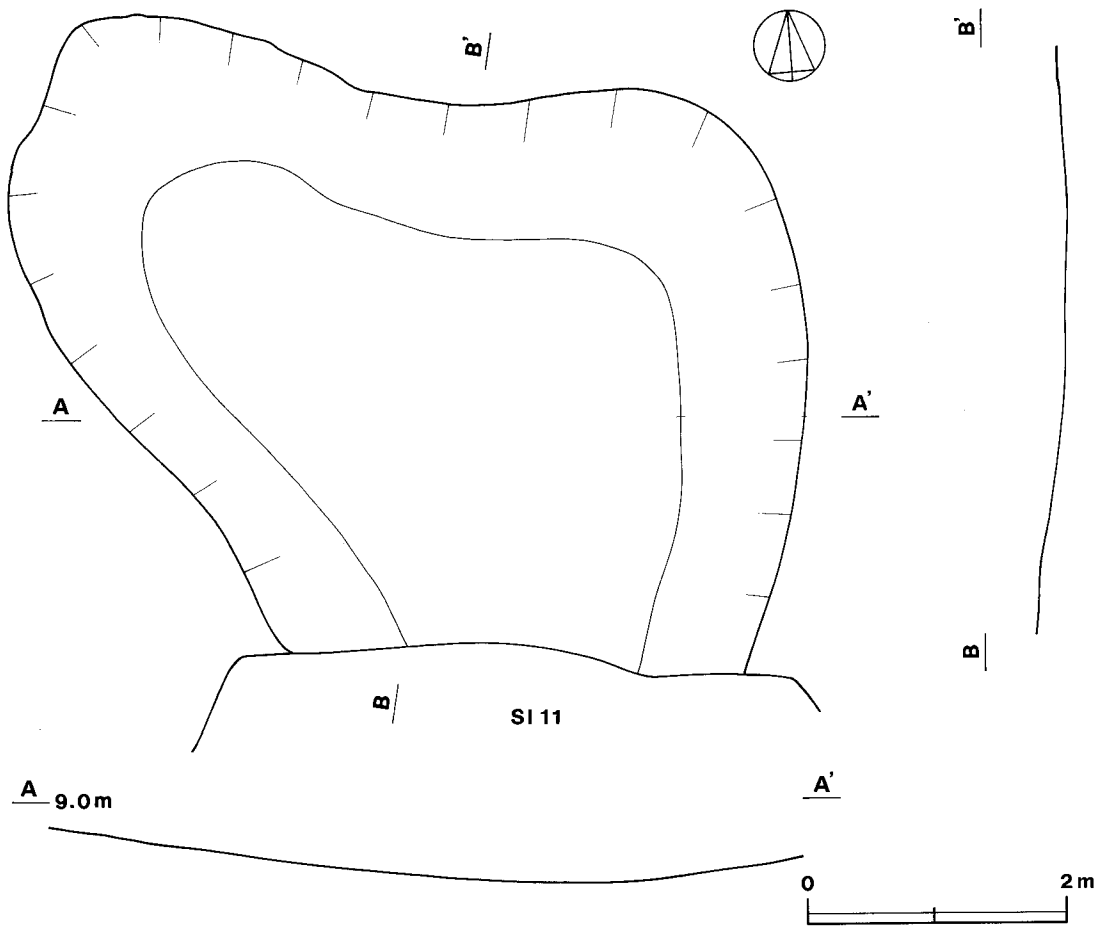
あるかどうかは不明である。

性格不明遺構出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第358図 1	皿 土師質土器	A 6.6 B 1.7 C 4.4	平底で、体部は内彎気味に開き、 口唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P940 100% S X 3 覆土
2	皿 土師質土器	A 10.0 B 2.6 C 4.2	平底で、体部は直線的に開き、口 唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P944 60% S X 3 覆土
3	皿 土師質土器	A 10.4 B 3.1 C 4.5	平底で、体部はやや内彎気味に開 き、口縁部は僅かに外傾する。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	P1001 60% S X 2 覆土
4	皿 土師質土器	A (10.2) B 3.0 C 4.6	平底で、体部は器厚を減じながら やや内彎気味に開き、口唇部は丸 味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	P941 60% S X 3 覆土
5	皿 土師質土器	A 10.7 B 3.9 C 5.4	平底で、体部は直線的に開き、口 唇部は丸味を持つ。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	P946 95% S X 3 覆土
6	皿 土師質土器	A 10.7 B 3.5 C 4.2	平底で、底部小径。体部は直線的 に開く。	水挽き成形。 底部ナデ 体部内・外面横ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P943 100% S X 3 覆土
7	皿 土師質土器	A 11.0 B 3.0 C 4.2	平底で、底部小径。体部はやや内 彎気味に開く。	水挽き成形。 底部回転糸切り。 体部内・外面横ナデ。	砂粒・スコリア 灰褐色 普通	P945 100% S X 3 覆土

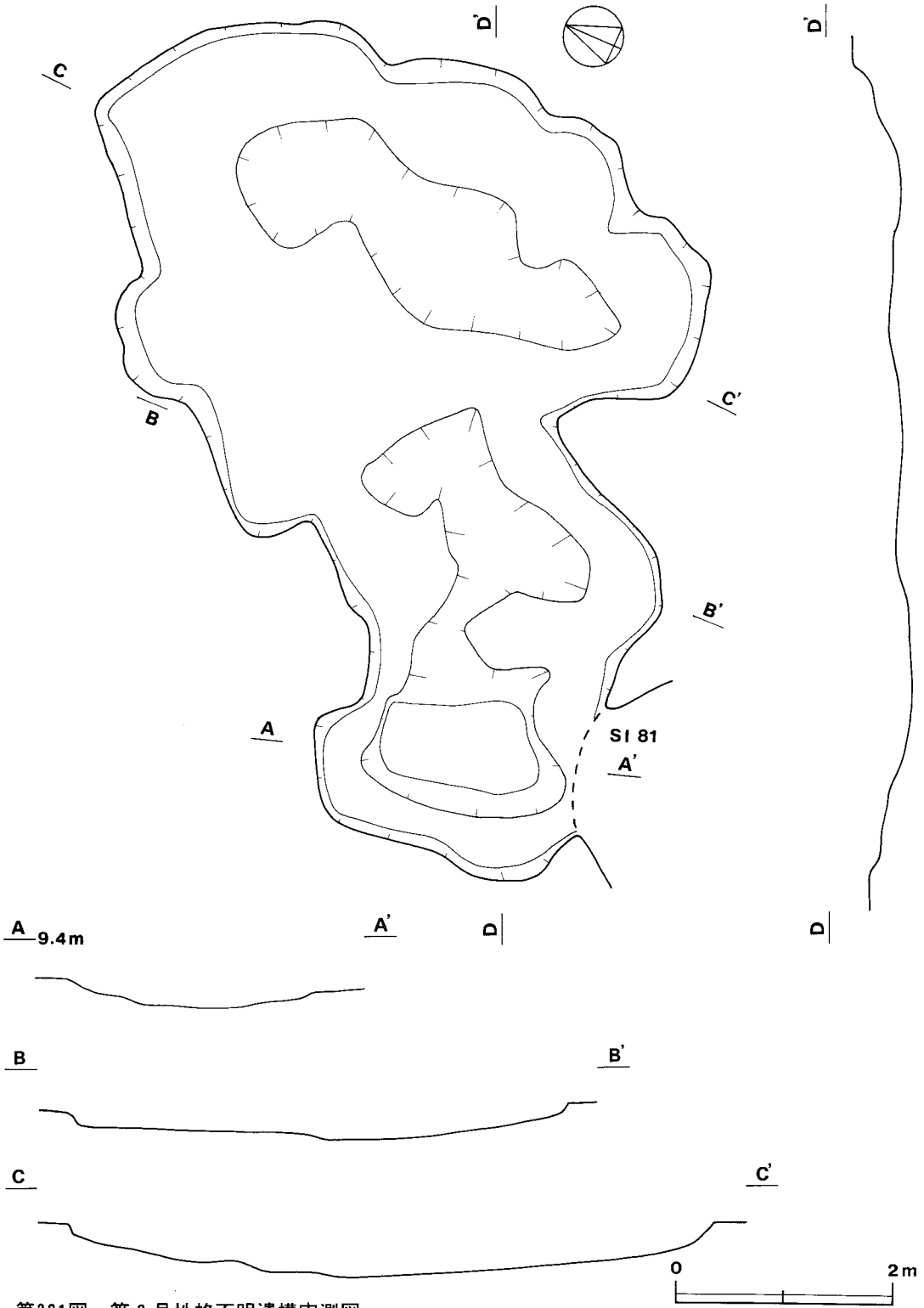


第358図 性格不明遺構出土遺物実測図



第359图 第1号性格不明遺構実測図





第361図 第3号性格不明遺構実測図

## 11 ピット群について

当遺跡では、総数156基にのぼるピットが検出された。ピットの規模・形状・深さなどは様々で、配置関係の上でも竪穴住居跡や掘立柱建物跡のように明確な構造体として抽出しきれない要素が多く、ピット群として取り扱うことにする。

これらのピット群は、調査区の中央部および北側部に集中して分布している。分布する主なピット群を大きく分けると、5ブロックにわかれる。以下、簡単に概要を述べる。

### 第Iピット群（第362図）

調査区北側部東端のA5e2区を中心にして、南北方向に帯状の分布を示す。本群のピットの平面形は円形もしくは楕円形を呈するものがほとんどである。確認面からの深さは8～40cmの範囲内で一定しないが、平均的な深さは約24cmである。また、北西側数メートルには、第575・576号土坑が存在する。

各々のピットの配置状態は図中に示したとおりで、規則性や法則性を見出すことにはかなり無理がある。ピットからの出土遺物は皆無であった。

### 第IIピット群（第363図）

調査区北側北端のA4g8区を中心にして、およそ東西方向に帯状の分布を示す。本群のピットの平面形は円形もしくは楕円形を呈するものが大半である。確認面からの深さは15～88cmの範囲内で一定しないが、平均的な深さは約40.7cmである。また、東側で第4号住居跡と隣接し、北側で第5・6号住居跡とも隣接している。

各々のピットの配置状態は図中に示したとおりで、規則性や法則性を見出すことには困難がある。ただ、ここでは比較的直線状に並ぶピットの番号のみを抜きだしてみると、西側から第468・469・471・472・487・489～492・494・484・511～513・517号であるが、ピット間の間隔の規則性はみられない。ピットからの出土遺物は皆無であった。

### 第IIIピット群（第364図）

調査区北側部北端に第IIピット群と隣接して展開する。A4h7区からA4h5区にかけて、南北方向で斜めに帯状の分布を示す。本群のピットの平面形は円形もしくは楕円形を呈するものである。確認面からの深さは10～60cmの範囲内で一定しないが、平均的な深さは約28cmである。また、北西側は第1号柵列跡と隣接しており、東側でも一部のピットが第10号住居跡と重複しているが、新旧関係は不明である。

各々のピットの配置状態は図中に示したとおりで、規則性や法則性を見出すことはできなかつ

た。ピットからの出土遺物は皆無であった。

#### 第Ⅳピット群（第365図）

調査区中央部の西側のD2i8区からD3i3区を中心にして、およそ東西方向に散在的な分布を示す。本群の一部は北西側で第15号掘立柱建物跡と重なり合うが、新旧関係は不明である。また、本群内に第22号地下式坑が存在する。

本群のピットの平面形は円形もしくは楕円形・不整楕円形を呈するものが多い。また、不定形を呈するものもめだつて見られる。確認面からの深さは17～68cmの範囲内で一定しないが、平均的な深さは約44cmである。

各々のピットの配置状態は図中に示したとおりで、規則性や法則性は見出すことはできなかったが、第22号地下式坑の北側に集中しているピットも見られる。しかし、第22号地下式坑との関係については不明である。ピットからの出土遺物は皆無であった。

#### 第Ⅴピット群（第362図）

調査区中央部の西端のD2i5区を中心にして、およそ南北方向に集中して分布している。本群の南東に第25号地下式坑が存在する。

本群のピットの平面形は楕円形を呈するものが最も多く、次いで円形もしくは不整楕円形である。確認面からの深さは23～70cmの範囲内で一定しないが、平均的な深さは約46cmである。

各々のピットの配置状態は図中に示したとおりで、規則性や法則性は見出すことはできなかった。また、本群の南東に存在する第25号地下式坑との関係については不明である。ピットからの出土遺物は皆無であった。

### 第4表 ピット一覧表

#### 第Ⅰ群

ピット番号	位置	長径方向	平面形	長径・短径 (m)	深さ (m)	図版番号
596	A5f3	N-8°-W	不定形	(0.80)×0.56	0.40	第362図
597	A5f3	N-87°-E	楕円形	0.82×(0.58)	0.40	〃
602	A5e3	N-85°-E	楕円形	0.38×0.28	0.38	〃
603	A5e3	N-28°-E	楕円形	0.34×0.26	0.20	〃
604	A5e3	N-36°-E	不整楕円形	0.52×0.31	0.36	〃

ピット 番号	位 置	長径方向	平 面 形	長径・短径 (m)	深さ (m)	図版番号
605	A5e3	—	円 形	0.32×0.30	0.20	第362図
606	A5e3	—	円 形	0.34×0.30	0.22	〃
607	A5e3	—	円 形	0.28×0.28	0.32	〃
608	A5e3	N-80°-W	楕 円 形	0.44×0.34	0.36	〃
609	A5e3	—	円 形	0.30×0.30	0.30	〃
610	A5e3	N-83°-W	楕 円 形	0.40×0.32	0.36	〃
611	A5e3	—	円 形	0.30×0.28	0.24	〃
612	A5e3	—	円 形	0.28×0.28	0.32	〃
613	A5e3	N-86°-E	楕 円 形	0.40×0.30	0.12	〃
616	A5e3	—	円 形	0.26×0.22	0.10	〃
617	A5e3	—	円 形	0.26×0.24	0.10	〃
618	A5e3	—	円 形	0.26×0.26	0.12	〃
619	A5f3	N-3°-E	楕 円 形	0.34×0.22	0.20	〃
620	A5e3	N-30°-E	楕 円 形	0.54×0.40	0.36	〃
621	A5d3	N-75°-W	楕 円 形	0.80×0.42	0.38	〃
622	A5e3	N-88°-E	楕 円 形	0.38×0.22	0.20	〃
623	A5d3	—	円 形	0.26×0.26	0.10	〃
624	A5d3	—	円 形	0.28×0.27	0.16	〃
625	A5d3	—	円 形	0.32×0.30	0.22	〃
626	A5d3	—	円 形	0.32×0.32	0.36	〃
627	A5d3	N-76°-W	楕 円 形	0.78×0.50	0.08	〃
628	A5d4	—	円 形	0.30×0.28	0.12	〃
629	A5d3	—	円 形	0.22×0.20	0.10	〃
630	A5d3	N-63°-W	楕 円 形	0.52×0.44	0.36	〃
631	A5d3	—	円 形	0.40×0.38	0.12	〃



第II群

ピット番号	位置	長径方向	平面形	長径・短径 (m)	深さ (m)	図版番号
445	A4g8	N-41°-E	不整楕円形	1.02×0.88	0.32	第363図
446	A4g8	—	円形	0.36×0.34	0.50	〃
467	A4g7	N-16°-E	楕円形	0.56×0.42	0.65	〃
468	A4g7	N-74°-W	楕円形	0.44×0.26	0.50	〃
469	A4g7	N-3°-W	楕円形	0.46×0.36	0.40	〃
470	A4g7	N-4°-W	楕円形	0.50×0.34	0.71	〃
471	A4f7	N-5°-W	楕円形	0.36×0.32	0.55	〃
472	A4f7	N-40°-W	不整楕円形	0.46×0.36	0.56	〃
473	A4g7	—	円形	0.32×0.30	0.19	〃
474	A4g7	N-10°-E	楕円形	0.42×0.32	0.44	〃
475	A4g8	N-1°-W	楕円形	0.48×0.28	0.28	〃
476	A4g8	N-7°-W	楕円形	0.48×0.42	0.56	〃
477	A4g8	N-15°-E	隅丸方形	0.84×(0.46)	0.88	〃
478	A4g8	—	円形	0.40×0.40	0.17	〃
483	A4f9	N-67°-E	不整楕円形	(0.56)×0.38	0.46	〃
484	A4f9	N-52°-E	不定形	(0.70)×0.34	0.38	〃
485	A4g8	N-30°-E	楕円形	0.46×0.38	0.40	〃
487	A4f8	—	円形	0.42×0.40	0.54	〃
488	A4f8	N-40°-W	不定形	0.68×0.38	0.74	〃
489	A4f8	N-4°-W	楕円形	0.60×(0.28)	0.40	〃
490	A4f8	N-4°-W	不定形	0.34×0.32	0.45	〃
491	A4f8	N-2°-W	不整楕円形	(0.32)×0.26	0.40	〃
492	A4f8	N-24°-E	楕円形	0.54×0.42	0.60	〃
493	A4f8	N-36°-W	不定形	(0.56)×(0.24)	0.75	〃
494	A4f8	N-36°-W	不定形	(0.50)×0.42	0.60	〃
511	A4f9	—	円形	0.50×0.50	0.56	〃

ピット 番号	位 置	長径方向	平 面 形	長径・短径 (m)	深さ (m)	図版番号
512	A4f9	—	円 形	0.32×0.30	0.30	第363図
513	A4f9	—	円 形	0.32×0.32	0.30	〃
514	A4g9	N-10°-E	楕 円 形	0.60×0.46	0.59	〃
515	A4f9	N-9°-E	楕 円 形	0.42×0.32	0.27	〃
516	A4f9	N-36°-E	不 定 形	0.74×0.54	0.36	〃
517	A4f0	N-34°-E	不 定 形	0.76×0.62	0.31	〃
518	A4f9	—	円 形	0.46×0.42	0.47	〃
519	A4f0	—	円 形	0.46×0.44	0.10	〃
520	A4f9	—	円 形	0.22×0.22	0.24	〃
521	A4e9	N-10°-E	不 定 形	0.54×0.32	0.34	〃
522	A4e9	N-15°-E	不 定 形	0.60×0.20	0.32	〃
523	A4g9	N-45°-W	不整楕円形	0.40×0.22	0.40	〃
524	A4g9	—	円 形	0.32×0.32	0.56	〃
525	A4g8	N-61°-E	不整楕円形	0.42×0.28	0.55	〃
526	A4g9	N-3°-E	楕 円 形	0.24×0.20	0.50	〃
527	A4g9	—	円 形	0.22×0.22	0.15	〃
528	A4g9	—	円 形	0.36×0.36	0.24	〃
530	A4g9	—	円 形	0.40×0.36	0.17	〃
531	A4g8	N-40°-W	楕 円 形	0.40×0.20	0.26	〃
537	A4g8	N-56°-E	楕 円 形	0.42×0.30	0.17	〃
538	A4g8	N-6°-E	楕 円 形	0.42×0.32	0.13	〃
539	A4g8	N-81°-W	不 定 形	0.58×0.30	0.14	〃
540	A4g6	N-73°-E	楕 円 形	0.28×0.24	0.60	〃
541	A4e9	—	円 形	0.38×0.36	0.15	〃
542	A4e9	—	円 形	0.40×0.38	0.18	〃

第Ⅲ群

ピット番号	位置	長径方向	平面形	長径・短径(m)	深さ(m)	図版番号
447	A4h7	N-50°-W	不整楕円形	0.61×0.54	0.60	第364図
450	A4h7	N-22°-E	楕円形	0.48×0.36	0.55	〃
451	A4h <sub>6</sub>	N-47°-E	楕円形	0.54×0.40	0.65	〃
452	A4h <sub>6</sub>	—	円形	0.28×0.26	0.20	〃
456	A4h7	N-30°-E	楕円形	0.58×0.40	0.50	〃
458	A4h7	N-18°-W	(不整楕円形)	0.54×(0.24)	0.25	〃
550	A4i <sub>6</sub>	—	円形	0.30×0.30	0.50	〃
571	A4i <sub>6</sub>	—	円形	0.42×0.38	0.18	〃
572	A4i <sub>6</sub>	—	円形	0.38×0.37	0.20	〃
430	A4i <sub>3</sub>	—	円形	0.34×0.32	0.10	〃
431	A4i <sub>2</sub>	—	円形	0.52×0.48	0.20	〃
460	A4h <sub>5</sub>	N-37°-E	楕円形	0.38×0.30	0.13	〃
461	A4h <sub>5</sub>	—	円形	0.32×0.30	0.15	〃
462	A4h <sub>5</sub>	N-37°-E	楕円形	0.42×0.34	0.18	〃
463	A4h <sub>5</sub>	—	円形	0.50×0.48	0.22	〃

第Ⅳ群

ピット番号	位置	長径方向	平面形	長径・短径(m)	深さ(m)	図版番号
644	D2h <sub>9</sub>	N-51°-W	不定形	1.22×0.60	0.58	第365図
674	D3i <sub>2</sub>	N-45°-E	楕円形	0.56×0.38	0.30	〃
675	D3i <sub>2</sub>	N-69°-E	不定形	(0.86)×(0.74)	0.35	〃
676	D3i <sub>2</sub>	N-32°-E	隅丸長方形	0.76×0.38	0.52	〃
682	D3i <sub>1</sub>	N-48°-E	不整楕円形	0.70×0.40	0.50	〃
683	D3i <sub>2</sub>	N-48°-E	不定形	0.74×0.56	0.41	〃
717	D2h <sub>9</sub>	N-33°-W	不定形	0.56×(0.38)	0.30	〃
718	D2h <sub>9</sub>	N-20°-E	不整楕円形	1.20×0.66	0.58	〃

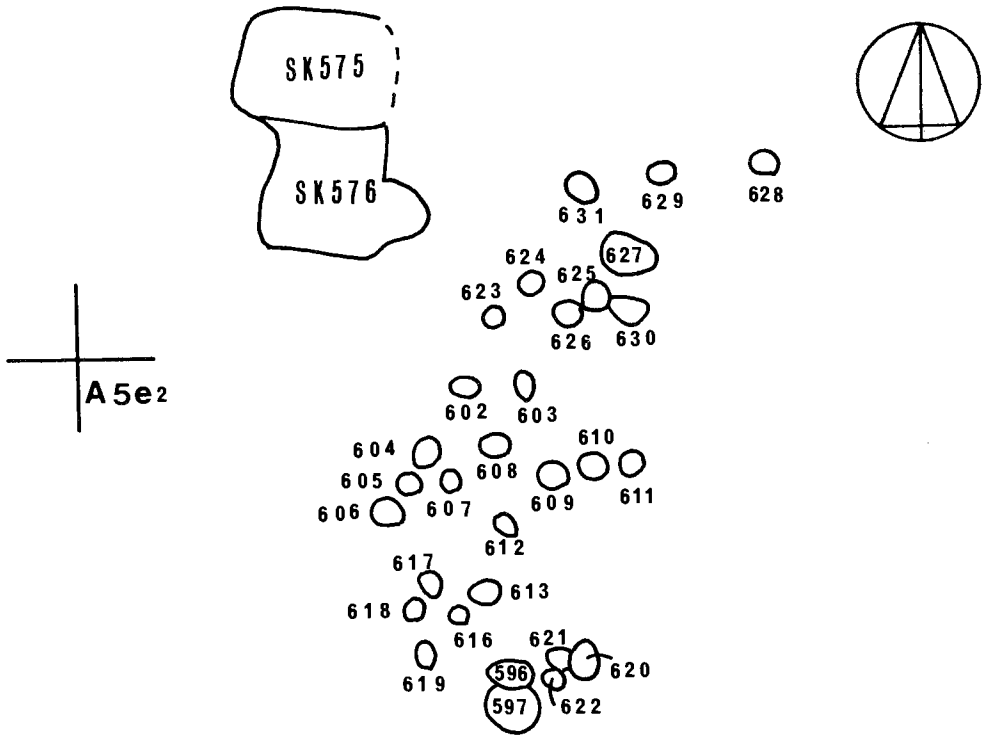
ピット番号	位置	長径方向	平面形	長径・短径 (m)	深さ (m)	図版番号
721	D2h0	N-34°-E	楕円形	0.60×0.40	0.32	第365図
723	D2h0	—	円形	0.36×0.34	0.51	〃
724	D2h9	—	円形	0.52×0.48	0.37	〃
725	D2h9	N-39°-E	楕円形	0.28×0.22	0.58	〃
727	D2h9	N-20°-E	不定形	0.34×(0.24)	0.34	〃
728	D2i9	N-20°-E	隅丸方形	0.36×0.36	0.46	〃
729	D2h9	N-44°-W	楕円形	0.64×0.32	0.44	〃
730	D2h8	—	円形	0.30×0.28	0.44	〃
731	D2h9	N-38°-E	不定形	0.70×0.40	0.50	〃
732	D2h8	N-42°-W	不定形	0.64×0.40	0.44	〃
733	D2h8	—	円形	0.30×0.28	0.17	〃
734	D2h8	—	円形	0.34×0.30	0.58	〃
735	D2h8	N-67°-W	不整楕円形	0.60×0.30	0.46	〃
736	D2h8	N-40°-W	不整楕円形	0.42×0.32	0.33	〃
737	D2h8	N-50°-W	楕円形	0.60×0.50	0.40	〃
738	D2h8	N-0°	不整楕円形	0.60×0.40	0.42	〃
739	D2i8	N-38°-E	不整楕円形	0.62×0.34	0.47	〃
740	D2i8	—	円形	0.32×0.30	0.54	〃
741	D2i7	N-0°	楕円形	0.70×0.60	0.41	〃
764	D3j1	N-10°-E	楕円形	0.72×0.64	0.17	〃
767	D2j0	N-62°-W	楕円形	0.40×0.26	0.76	〃
778	D2j8	—	円形	0.30×0.28	0.26	〃
780	D2i8	N-57°-W	隅丸方形	0.60×0.58	0.28	〃
784	D2i9	N-22°-E	不定形	0.38×(0.30)	0.30	〃
785	D2j9	—	円形	0.40×0.40	0.55	〃
786	D2i9	N-13°-E	不整楕円形	0.48×0.40	0.50	〃
787	D2i9	N-8°-E	不整楕円形	0.66×0.42	0.42	〃
800	D3j1	—	円形	0.36×0.34	0.68	〃

ピット番号	位置	長径方向	平面形	長径・短径 (m)	深さ (m)	図版番号
801	D2j0	—	円形	0.40×0.38	0.56	第365図
802	D2j0	—	円形	0.24×0.24	0.58	〃
803	D2j0	—	円形	0.40×0.40	0.56	〃
804	D2j0	—	円形	0.36×0.36	0.48	〃
805	D2j0	N-50°-E	楕円形	0.44×0.36	0.36	〃
806	D3j1	—	円形	0.32×0.32	0.42	〃

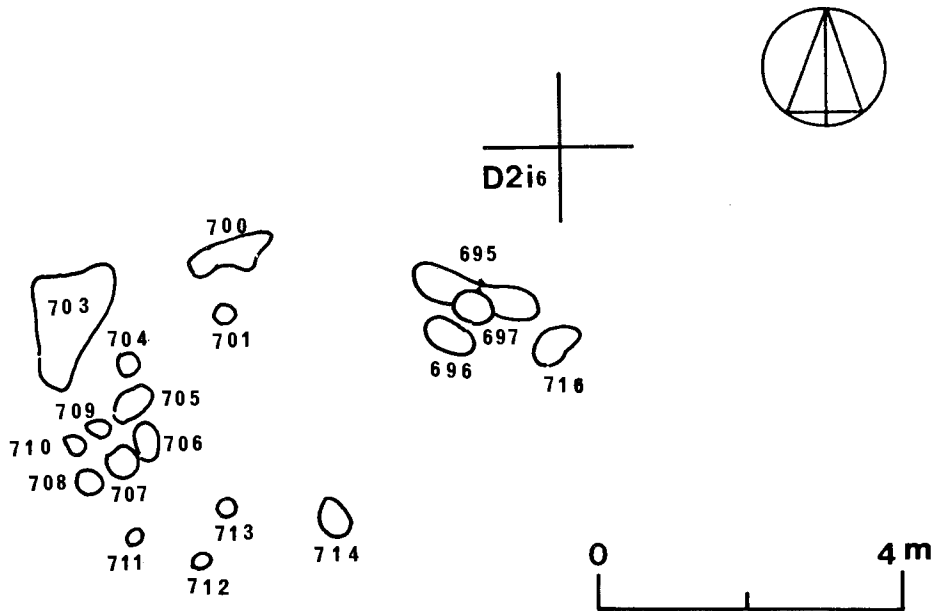
### 第V群

ピット番号	位置	長径方向	平面形	長径・短径 (m)	深さ (m)	図版番号
695	D2i6	N-75°-W	隅丸長方形	1.84×0.44	0.60	第362図
696	D2i6	N-64°-W	楕円形	0.78×0.48	0.48	〃
697	D2i6	N-70°-W	楕円形	0.52×0.40	0.35	〃
700	D2i5	N-66°-E	不定形	1.30×(0.48)	0.60	〃
701	D2i5	N-84°-W	楕円形	0.32×0.28	0.56	〃
703	D2i5	N-87°-E	(不整楕円形)	(1.12)×(0.70)	0.50	〃
704	D2i5	N-32°-E	楕円形	0.36×0.30	0.26	〃
705	D2i5	N-31°-E	楕円形	0.64×0.40	0.60	〃
706	D2i5	N-0°	不整楕円形	0.58×0.30	0.45	〃
707	D2j5	—	円形	0.50×0.48	0.45	〃
708	D2j5	N-57°-W	不整楕円形	0.40×0.34	0.50	〃
709	D2i5	N-81°-W	楕円形	0.34×0.24	0.36	〃
710	D2i5	N-2°-W	楕円形	0.40×(0.30)	0.26	〃
711	D2j5	N-22°-E	楕円形	0.28×0.20	0.32	〃
712	D2j5	—	円形	0.24×0.22	0.23	〃
713	D2j5	N-22°-E	楕円形	0.30×0.20	0.35	〃
714	D2j6	N-44°-W	楕円形	0.60×0.46	0.70	〃
716	D2i6	N-70°-E	不定形	0.68×0.50	0.48	〃

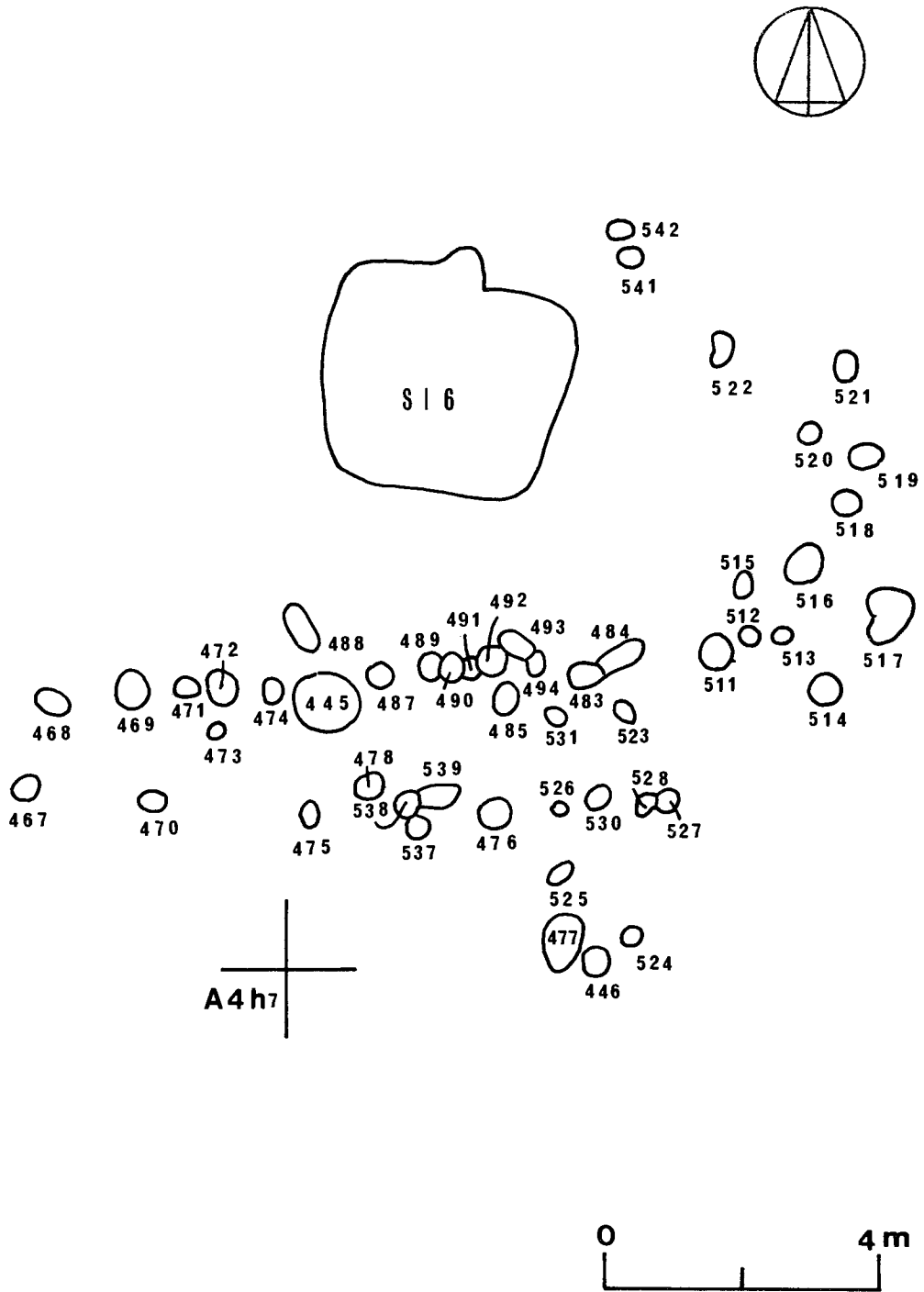
第 I 群



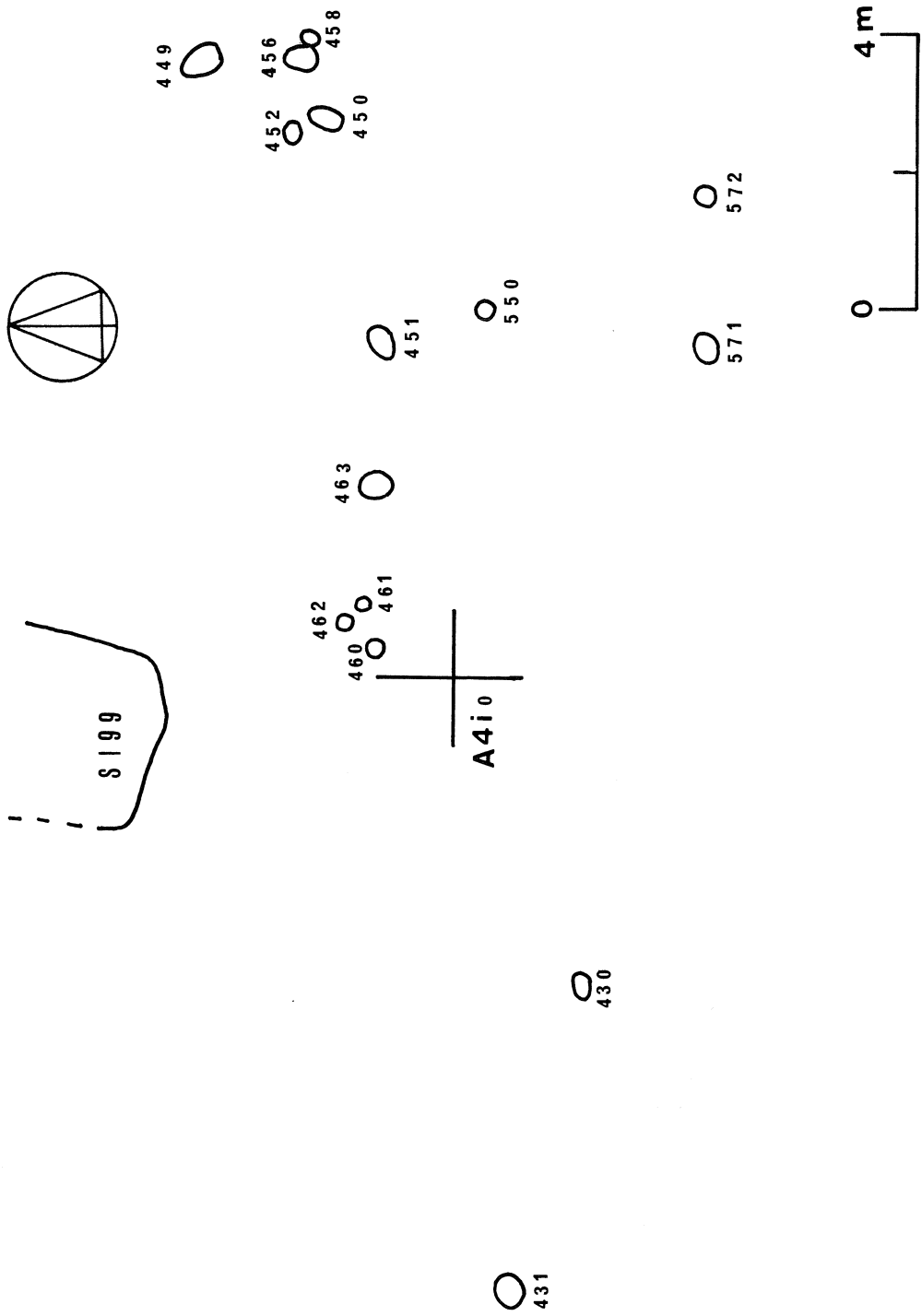
第 V 群



第362図 ピット第 I・V 群実測図

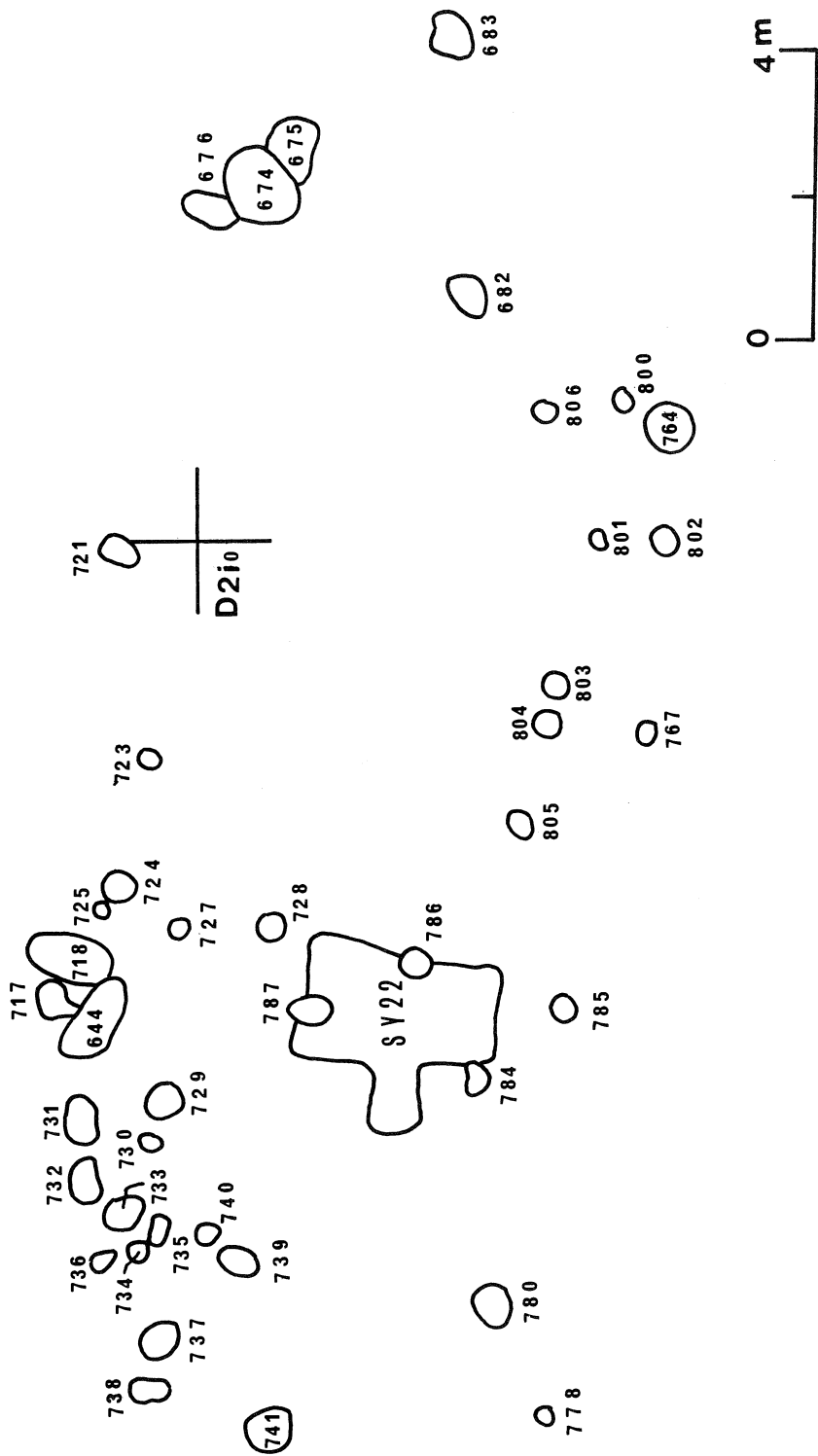
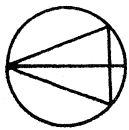


第363図 ピット第II群実測図



第364図 ピット第Ⅲ群実測図

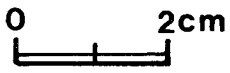
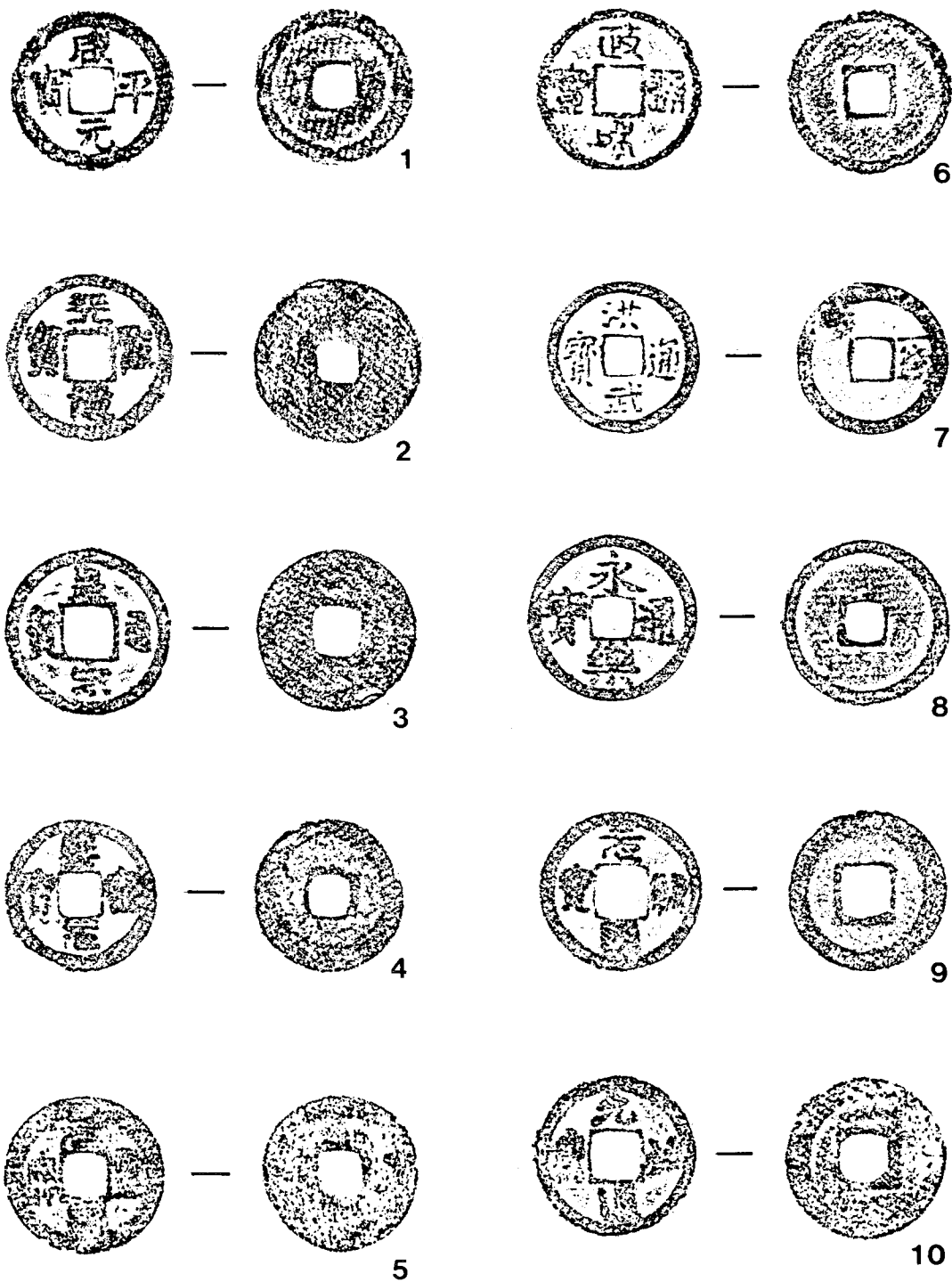




第365図 ピット第IV群実測図

第5表 12. 古銭一覽表

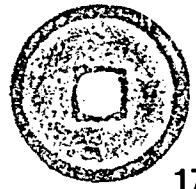
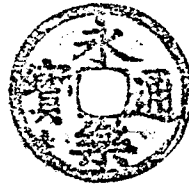
図 番	版 号	鑄 名	初 鑄 年	鑄 造 地 名	出 土 地 点	大 小 (cm)	重 量 (g)	台 帳 番 号
第366図	1	咸年元寶	咸平元 (998)	北 宋	1 号 堀	2.4	2.3	M49
	2	天聖元寶	天聖元(1023)	北 宋	1 号 堀	2.0	3.0	M50
	3	皇宋通寶	宝元2 (1039)	北 宋	1 号 堀	2.5	2.8	M51
	4	熙寧元寶	熙寧元(1068)	北 宋	1 号 堀	2.3	2.8	M52
	5	元豐通寶	元豐元(1078)	北 宋	1 号 堀	2.4	3.0	M53
	6	政和通寶	政和元(1111)	北 宋	1 号 堀	2.5	3.7	M54
	7	洪武通寶	洪武元(1368)	明	1 号 堀	2.3	4.1	M55
	8	永樂通寶	永樂6 (1408)	明	1 号 堀	2.5	3.6	M56
	9	元豐通寶	元豐元(1078)	北 宋	第420号土坑	2.4	3.0	M57
	10	元祐通寶	元祐元(1086)	北 宋	第420号土坑	2.4	3.2	M58
第367図	11	解説不明	—	—	第420号土坑	2.4	2.3	M59
	12	至和元寶	至和元(1054)	北 宋	第34号地下式坑	2.4	3.4	M60
	13	元豐通寶	元豐元(1078)	北 宋	第34号地下式坑	2.5	2.5	M61
	14	元祐通寶	元祐元(1086)	北 宋	第34号地下式坑	2.4	2.3	M62
	15	元祐通寶	元祐元(1086)	北 宋	第34号地下式坑	2.5	3.1	M63
	16	永樂通寶	永樂6 (1408)	明	第757号土坑	2.0	5.3	M64
	17	永樂通寶	永樂6 (1408)	明	第757号土坑	2.4	3.2	M65
	18	永樂通寶	永樂6 (1408)	明	第757号土坑	2.5	3.2	M66
	19	永樂通寶	永樂6 (1408)	明	第757号土坑	2.5	3.7	M67
	20	永樂通寶	永樂6 (1408)	明	第757号土坑	2.5	4.2	M68
	21	永樂通寶	永樂6 (1408)	明	第757号土坑	2.5	2.9	M69
	22	解説不明	—	—	第12号地下式坑	2.5	3.4	M70



第366图 古钱拓影图 (1)



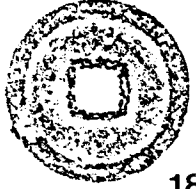
11



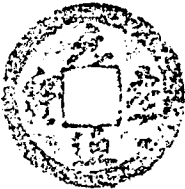
17



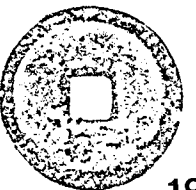
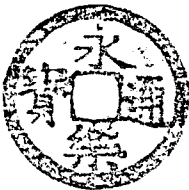
12



18



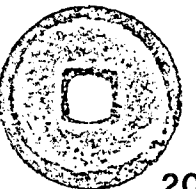
13



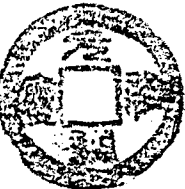
19



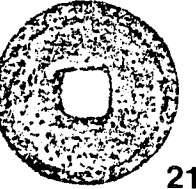
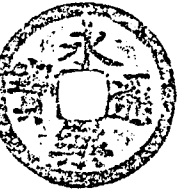
14



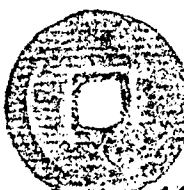
20



15



21



16



22



第367圖 古錢拓影圖 (2)

## 第3節 まとめ

はじめに

当遺跡は、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代にかけて、長期間にわたり、連続的あるいは断続的に集落が営まれた複合遺跡として発掘調査を実施した。調査した結果、遺構は、竪穴住居跡147軒、土坑447基(地下式坑42基を含む)、掘立柱建物跡21棟、井戸7基、集石5基、溝17条、堀1条、道路跡2条、柵列跡2条、ピット156基、性格不明遺構3基が検出された。これらの遺構から出土した遺物は、土器類、土製品、石器、石製品、金属製品、人骨等があり、遺物収納コンテナ(60×40×20cm)に381箱出土している。

出土遺物は、土師器・須恵器が主で、ほかに縄文式土器、弥生式土器、灰釉陶器、土師質土器、陶器なども少量出土している。器種は、日常使用される甕、壺、坏などが主である。土師器や須恵器の坏類は、『西』、『東』などの墨書が見られるものもある。

土製品は、おもりとみられる球状土錘・管状土錘、カマド内から土器を支えるために用いられた支脚などが出土している。

石製品は、糸を紡ぐ時に用いられたと考えられる紡錘車、砥石などが出土している。

金属製品は、横刀、刀子、鋏、鎌などの鉄製品と胃金(刀装具)の銅製品が出土している。

以上が当遺跡の概要であるが、当遺跡は調査幅50mという限られた範囲であるため、集落全体について述べることはできないが、調査によって明らかになった遺構や遺物を各時期ごとに分けて、出土した土器の器形・技法及び遺構の特徴の概略を述べて、まとめとする。

### 1 縄文時代について

この時期の遺構は、竪穴住居跡3軒、集石5基である。これらの遺構から出土した遺物は、一部を除いて縄文時代前期に属する土器である。

第50号住居跡は、縄文時代前期前半に比定される住居跡で、調査区の北端に位置し、古墳時代後期の2軒の住居跡に切られているため、床面の一部と炉跡だけしか検出できなかった。炉跡内からつぶれた状態で深鉢形土器が出土している。この深鉢形土器は波状口縁を呈し、口縁部に刺突文を施し、胴部には羽状縄文が施文されている。この種の土器は縄文時代前期前半にあたる花積下層式に比定される土器と思われる。

第50号住居跡の南西1.5mに5基の集石遺構が検出されている。集石の規模は長径0.9~1.29m・短径0.79~1.1mで、楕円形もしくは円形を呈している。確認面から0.22~0.35mの深さで、鍋底状に掘り込まれている。土坑内から熱を受けてひび割れた礫が出土した。石質は安山岩と砂岩が主で、その他、石英斑岩と泥岩である。これらは近くの涸沼川から採取できるものばかり

である。土器の出土は第3号集石を除いて皆無であった。第3号集石の礫の間から熱を受けてもろくなった縄文時代前期の土器片10点が出土している。これらの土器片には羽状縄文が施文されていることから、第50号住居跡と同時期に比定されると思われる。他の4基の集石も、集石されている石質や規模が類似していることからみて、第3号集石と同時期のものと同断される。また、第50号住居跡とも近距離にあり、第50号住居跡と5基の集石遺構は一体をなすものと思われる。

集石の性格として、一般的に「バーベキューストーン調理施設（加熱した石の上で食物を焼く）」・「蒸し焼き調理施設」・「食物加工施設」などが考えられている。当遺跡の集石は、集石された礫の数が比較的少ないことや礫に炭化物などが付着していないことなどの疑問点もあるが、礫の焼けている状況から考え合わせると、食物の調理に関係があるものと思われる。

第145号住居跡が当遺跡の南西端部から検出されている。本跡は縄文時代前期後半に比定される住居跡である。本跡は住居跡全体がトレンチャーによって攪乱されているが、規模は長軸6.4m・短軸5.0mで、隅丸長方形を呈している。長軸方向はN-42°-Wを指している。柱穴は23か所検出されたが、支柱穴は配置からみて5本で、そのほかの柱穴は補助柱穴として利用されたものと思われる。遺物は住居跡全体から多量に出土したが、ほとんどが破片で器形を窺うことができなかった。その中で、本跡の時期決定となるものとして、中央部付近の床面直上から深鉢形土器が出土している。深鉢形土器は胴部中位から口縁部にかけて、半截竹管具による沈線を横位・斜位に施し、さらに斜方向から刺突を施して無造作な文様帯を構成している。この種の土器は縄文時代前期後半にあたる浮島式に比定されると思われる。

そのほか、当遺跡の北西端部から規模と形状から縄文時代に比定されると思われる第102号住居跡が検出されている。住居跡全体がトレンチャーによって攪乱されているが、規模は長径4.6m・短径3.5mで、楕円形を呈している。長径方向はN-54°-Eを指している。南西壁に出入口施設と思われる張り出し部が付設されている。規模は長さ1.1m・幅0.5mである。また、中央から南東側に炉跡2基を検出した。柱穴は8か所検出され、規模・配置から支柱穴と思われる。本跡の時期決定となる土器は出土していないため時期を明確にすることはできなかった。

以上、縄文時代に伴う遺構について述べた。この他にも、少量の縄文式土器片が表土から出土しているが、上記以外の縄文時代の遺構は検出できなかった。

## 2 古墳時代について

### (1) 竪穴住居跡と出土遺物

古墳時代の竪穴住居跡は26軒検出された。そのうち、第20・35・61・105・134・143号住居跡の6軒が五領期で、第108号住居跡の1軒が和泉期で、第2・3・7・8・9・25・44・62・63・66・74・88・90・93・114・120・129・140・144号住居跡の19軒が鬼高期に比定される。これらの住居跡は、出土土器からⅠ～Ⅴ期に細分することが可能である。ここでは、Ⅰ・Ⅱ期（五領期）・Ⅲ期（和泉期）・Ⅳ・Ⅴ期（鬼高期）とし、細分した各期の住居跡の形態及び出土土器の器形・技法の特徴の概略を述べることにする。

Ⅰ期に属する住居跡は、第20・105・134号住居跡の3軒である。

住居跡の分布図（第368図）をみると、当遺跡の中央部から東端寄りに第105号住居跡、更に、同住居跡から約80m離れた北側部に第20号住居跡、約80m離れた南側部に第134号住居跡が位置している。

平面形状及び規模についてみると、平面形は、第20・105号住居跡の2軒が隅丸方形を呈し、第134号住居跡は隅丸長方形を呈している。規模は、2軒の長軸が、4.5m以上5.5m未満、第134号住居跡が長軸5.8m・短軸5.15mである。

主軸方向は、3軒ともN-27°～36°-Wの範囲におさまる。

炉は、3軒の住居跡の床面中央から北東寄りに付設されている。

主柱穴はいずれの住居跡からも4本検出されている。なお、本期に属する住居跡は、出土土器から第5号溝（居館跡）と同時期に比定されるものと思われる。

当該期の土器群は、第134号住居跡出土土器を中心に第20・105号住居跡出土土器を補って構成した。主な器種は、土師器の甕形土器・小型甕形土器・壺形土器・広口壺形土器・坏形土器・埴形土器・高坏形土器・器台形土器・坩形土器など豊富にあるが、甕形土器が最も多く出土している。

甕形土器（第374図1・3）は、五領期の特徴である底部が突出した小さな平底で、胴部中位が張り最大径を有する。口縁部は「く」の字状を呈する頸部から外傾して立ち上がっている。整形技法は、口縁部・胴部の内面がヘラナデ、胴部の外面は斜位のハケ目が施されている。また、小型甕形土器（第374図2）も、胴部上位が張り、口縁部は外反しながら開いている。整形技法は、胴部の内面がヘラナデ、外面は斜位のヘラ削りが施されており、口縁部の内面は横位のハケ目、外面はハケ目整形後横ナデが施されている。

壺形土器は口縁部が「く」の字状に開くもの（第374図11）と、古い段階とされている複合口縁

の名残りを残しているもの（第374図5）がある。整形技法は、口縁部の内・外面、胴部の外面にはヘラ磨きが施されている。また、当遺跡では注目される広口壺形土器（第374図4）の口縁部が出土している。口縁部は外反しながら開き、口縁端部は段をなしている。整形技法は、口縁部の内・外面にナデが施されている。

坏形土器（第374図12）は、底部が丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がっている。整形技法は、体部の内面がヘラナデ、外面にはナデが施されている。

埴形土器（第374図13）は、体部が内彎しながら大きく開き、口縁部は短く外傾している。整形技法は、体部の内面がヘラナデ、外面は横位のヘラ削りが施されている。

高坏形土器は、坏部が埴形を呈するもの（第374図7）と、直線的に大きく開くもの（第374図8）があり、脚部は大きく開いている。整形技法は、坏部の内面がナデもしくはヘラナデで、外面はハケ目またはナデが施されている。

器台形土器（第374図6・9）は、小皿のような小型器台で、脚部が「ハ」字状に開き、3孔が一段に穿たれており、器受部の中心に脚部へ貫通する孔が穿たれている。整形技法は、器受部の内面にヘラナデ、外面にハケ目が施されている。

埴形土器（第374図10）は、胴部が扁平な球形を呈し、口縁部が「く」の字状を呈する頸部から外傾して立ち上がっている。整形技法は、胴部・口縁部の内面がヘラナデ、同外面はハケ目が施されている。

II期に属する住居跡は、第35・61・143号住居跡の3軒である。

住居跡の分布図（第368図）をみると、当遺跡の中央部から約80～160m離れた北東部に第35・61号住居跡、同じく中央部から約80m離れた南部に第143号住居跡が位置している。

平面形状及び規模についてみると、第61号住居跡は隅丸方形を呈し、規模は長軸4.4m・短軸4.3mである。また、主軸方向はN-12°-Wを指している。

炉は、床面中央から東寄りに付設されている。主柱穴は4本を有している。なお、第35・143号住居跡については、重複しているため、平面形状及び規模について明確にすることができないので住居跡一覧表（表2）に現存値を記載したとおりである。

当該期の土器群は、第143号住居跡出土土器を中心に、第35・61号住居跡からの出土土器を補って構成した。器種としては、土師器の甕形土器・坏形土器・器台形土器・埴形土器で、坏形土器が最も多く出土している。

甕形土器はI期の第374図1と同じく、口縁部が「く」の字状を呈する頸部から外傾して立ち上がっている。その他、新しい変化として、口縁部が直立してから外反して開き、胴部は扁平な球状を呈するもの（第375図14）があらわれる。いずれも胴部中位に最大径を有している。整形技法



は、胴部の内・外面にナデやヘラ削りが施されている。

坏形土器（第375図17）はⅠ期の第374図12の様相を引き継いでいる。ただし、第143号住居跡から底部が平底のもの（第375図16）が1点出土している。整形技法は、体部の内面がヘラナデ、外面にヘラ削りが施されている。

器台形土器（第375図18）や埴形土器（第375図15）もⅠ期の第374図6・10の様相を引き継いでいる。ただ、埴形土器はⅠ期よりも小型化している。

以上のことから、当遺跡のⅠ・Ⅱ期の五領期の住居跡は、平面的にはやや離れて構築されているが、形状・規模等については、差異がほとんどなく主軸方向もほぼ一定しており、南向きの集落が形成されていたものと思われる。

遺物については、土器の器形や整形技法等から見ると、大きな時期的差はなく、Ⅱ期はⅠ期の様相を引き継いでいる器種が大半である。ただ、Ⅱ期の甕形土器は、胴部がⅠ期に比べると扁平な球状を呈するようになったり、Ⅱ期の坏形土器もⅠ期が丸底のものに対して平底を呈するものが若干出現してくるといったような新しい変化が認められる。

Ⅲ期に属する住居跡は、第108号住居跡の1軒である。

当住居跡は、遺跡の中央部、鬼高期の第129号住居跡や国分期の第128号住居跡の北西側に位置している。

平面形状及び規模についてみると、平面形は方形を呈している。規模は長軸8.5m・短軸8.4mである。

主軸方向は、N-11°-Wを指している。

炉は、床面中央から西寄りに2基検出されている。

支柱穴は、4本有している。

当該期の土器群は、第108号住居跡の出土土器によって構成した。器種としては、土師器の甕形土器・坏形土器・埴形土器である。

甕形土器（第375図24）は、Ⅱ期（五領期）の様相を引き継いでおり、Ⅱ期の第375図14と器形・整形とも変化が見られない。

坏形土器もⅡ期の様相を引き継いでいるが、第375図19・20に見られるように、口縁部が外反気味に立ち上がり、外面の口縁部と体部の境に稜を有している。整形技法は、Ⅱ期の第375図17と同じように施されている。その他、第375図21はⅡ期の第375図16のような土器で、口縁部が短く直立する土器である。整形技法においても、体部の内・外面にヘラ磨きが施されているのが特徴的である。

埴形土器においても2種類の変化が見られる。一つのタイプは、底部が丸底で、体部がやや扁

平な球形を呈し、口縁部は「く」の字状を呈する。頸部から外傾して立ち上がっているもの（第375図23）と、もう一つのタイプは、底部が平底で、体部はやや内彎し、扁平な半球状を呈しながら立ち上がり、口唇部を丸くおさめているもの（第375図22）がある。整形技法は、両者とも体部の内面はヘラ磨きで、外面はヘラ削りが施されている。ただ、前者の口縁部の内面にもヘラ磨きが施されている。

1軒の住居跡なので和泉期の住居形態について検討することはできないが、II期よりも当期の住居跡の方が大型化していることが窺える。また、出土土器から見ると、坏形土器は第375図19・20に見られるように、口縁部が外反気味に立ち上がり、外面の口縁部と体部の境に稜を有し、埴形土器においても、底部が丸底で、体部がやや扁平な球形を呈し、口縁部は「く」の字状を呈する。頸部から外傾して立ち上がっているものと、底部が平底で、体部はやや内彎し、扁平な半球状を呈しながら立ち上がり、口唇部を丸くおさめているものがみられ、II期の土器群の様相を残しながら新しい変化を窺わせるような土器が認められる。

IV期に属する住居跡は、第2・8・9・44・74・90・114・120・140・144号住居跡の10軒である。

住居跡の分布図（第368図）から見ると、IV期になると、住居跡数は増えて10軒となり、当遺跡の北側端部からほぼ全域にわたって検出されている。

平面形状及び規模についてみると、平面形は、長方形の第140号住居跡を含めた第114・120号住居跡の合わせて3軒が隅丸長方形を呈しており、他の7軒は方形または隅丸方形を呈している。規模は、長軸が3m以上4m未満3軒、4m以上5m未満1軒、5m以上6m未満4軒、6m以上7m未満2軒である。

主軸（長軸）方向は、N-33°~35°-Wを指している2軒以外、8軒の住居跡がN-1°~13°~W~N-2°~8°-Eの範囲におさまる。

カマドは、10軒の住居跡中、エリア外に延びているため確認できなかった第8号住居跡や第120号住居跡のように西壁で南寄りに付設されているものを除いた8軒は、北壁または北西壁中央に付設されている。

支柱穴は、重複やエリア外に延びているため正確な数を把握できなかった6軒を除いて、4軒の住居跡が4本である。6軒の住居跡は重複やエリア外に延びているため、1~3本しか検出できなかったが、本来は4本有していたのではないかと思われる。

当該期の土器群は、第2・9・44・74号住居跡出土土器を中心とし、第8・90・114・120・140・144号住居跡出土土器を補って構成した。器種としては、土師器の甕形土器・小型甕形土器・壺形土器・甑形土器・坏形土器・埴形土器・手捏土器、須恵器の甕・坏などがある。

甕形土器(第375図25)は、胴部が丸く張り、口縁部は外反して大きく開いている。整形技法は、口縁部の内・外面は横ナデ、胴部の内面がナデ、外面はヘラ削りが施されている。

小型甕形土器(第375図29)は、口縁部が外反気味に直立し、頸部のくびれが弱く、胴部上位が張っている。整形技法は、口縁部の内・外面は横ナデ、胴部の内面がヘラナデ、外面はヘラ削りが施されている。

壺形土器(第375図26)は、口縁部が僅かに外反し、胴部はほぼ球形を呈している。底部は小さな平底である。整形技法は、口縁部の内・外面は横ナデ、胴部の内面がヘラナデ、外面は縦位のヘラ削りが施されている。

甑形土器(第375図28)は、底部が円形状に抜け、胴部は僅かに内彎しながら外上方に立ち上がり、口縁部は外反して開いている。整形技法は、口縁部の内・外面は横ナデ、胴部の内面がナデもしくはヘラナデ、外面は縦位のヘラ削りが施されている。

坏形土器(第376図31・32・33)は、外面の口縁部と体部の境に明瞭な稜を有し、Ⅳ期の特色となるものである。底部は丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がっている。口縁部には、直立するもの、外反するもの、内傾するものの3種類が見られる。整形技法は、口縁部の内・外面は横ナデ後横位のヘラ磨きが施され、体部の内面がヘラ磨き、外面はヘラ削りが施されている。

碗形土器(第375図30)は、底部が平底で、体部は内彎しながら外上方に立ち上がり、口縁部は内傾している。整形技法は、口縁部の内・外面は横ナデ、体部の内面はヘラ磨き、外面はヘラ削りが施され、なかには、内・外面に黒色処理が施されているものも見られる。

手捏土器(第376図34)は、底部が平底で、体部は緩やかに内彎しながら立ち上がり、胴部上位から僅かに内傾し、口縁部は僅かに外反している。整形技法は、口縁部の内・外面が横ナデ、体部の内面がヘラナデ、外面はヘラ削りが施されている。

須恵器の甕(第375図27)は、底部が平底で、胴部は長胴を呈し、胴部中位に最大径を有している。整形技法は、胴部の内面がヘラナデ、外面は縦位のヘラ削りが施されている。

須恵器の坏(第376図35)は、底部が平底で、体部は直線的に外上方へ立ち上がり、水挽き成形で、底部は不定方向への手持ちヘラ削りが施されている。

Ⅴ期に属する住居跡は、第3・7・25・62・63・66・88・93・129号住居跡の9軒である。

住居跡の分布図(第368図)から見ると、当遺跡を横切っている県道より南東部に寄って検出された第129号住居跡を除いた8軒は、県道よりも北側部に散在している。

平面形状及び規模についてみると、平面形は、隅丸長方形を呈する第63号住居跡以外、他の8軒の住居跡は隅丸方形または方形を呈している。規模は、長軸3.0m未満が1軒、4.0m以上5.0m

未満が5軒で、6.0m以上7.0m未満が3軒検出されている。

主軸(長軸)方向は、N-20°~42°-Eを指している3軒を除いた6軒が、N-7°~40°-Wの範囲におさまる。

カマドは、遺構の北側または北西側がエリア外に延びているため検出できなかった第25・63号住居跡の2軒を除いた7軒は、北壁または北西壁中央に付設されている。

支柱穴は、第3・7・66・93号住居跡にみられるように基本的には4本有すると思われるが、重複と耕作による攪乱や遺構の一部がエリア外に延びているため、2本しか検出できなかったものが5軒ある。

当該期の土器群は、第3・7・62・93号住居跡の出土土器を中心として、第25・63・66・88・120号住居跡出土土器を補って構成した。器種としては、土師器の甕形土器・甌形土器・坏形土器・鉢形土器・埴形土器・手捏土器などである。

甕形土器(第376図36)は、Ⅳ期の様相を引き継いでいるものがほとんどである。

甌形土器(第376図37)もⅣ期の様相を引き継いでおり、Ⅳ期より器高が高くなる傾向が見られる。

坏形土器(第376図38・39)もⅣ期の様相を引き継いでいるものがほとんどであるが、全体的に器高が低くなり、小型化してくる傾向が見られる。

埴形土器(第376図40)は、底部から体部にかけてはⅣ期の様相を引き継いでいるが、口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、口唇部近くでやや外傾している。整形技法もⅣ期の様相を引き継いでいるが、体部の内面にヘラナデが施されている。

鉢形土器(第376図42)の出現は、本期の特徴である。器形は、底部が平底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は短く直立している。整形技法は、胴部の内・外面にヘラナデが施されている。

手捏土器(第376図41)も底部から体部にかけてⅣ期の様相を引き継いでいるが、口縁部が短く直立し、外面の体部と口縁部の境に稜を有している。整形技法は、体部の内・外面にナデが施されている。

以上のことから、古墳時代の和泉期と鬼高期の住居形態を比較すると、平面形は、鬼高期の住居跡の79%が隅丸方形または方形を呈している中に、和泉期の1軒も含まれる。規模は、和泉期のように一辺が8m以上のものは、鬼高期では見られなかった。鬼高期の最も長い長軸は6.85mである。主軸(長軸)は、和泉期の場合、1軒しか検出できなかったので比べようがない。和泉期では炉が付設されているが、鬼高期になると、カマドが北壁または北西壁中央に付設されている。支柱穴は、和泉期では、4本有していたが、鬼高期では、検出された住居跡の42%が4本有している。しかし、鬼高期において、重複や攪乱のため、2本または全く検出できなかったものが58

%あることから推測すると、基本的には4本有していたものと思われる。

和泉期と鬼高期の土器を比較すると、和泉期の甕形土器は、胴部が扁平な球状を呈し、口縁部は直立してから外反して開いているが、鬼高期の甕形土器は、全体的に胴部が長胴を呈し、内彎しながら外上方に立ち上がり、口縁部はゆるやかに外反して開いている。整形技法は、両期とも胴部の内面がナデ、外面はヘラ削りが施されている。坏形土器は、和泉期では、II期（五領期）の様相を引き継ぎながら、口縁部が外反気味に立ち上がり、外面の口縁部の体部の境に稜を有するようなものが見られ、鬼高期の坏形土器でも同じ様相がみられる。また、整形技法でも、両期とも体部の内・外面にヘラ磨きが施されている。和泉期と鬼高期の法量について比べると、和泉期の場合、口径14.8cm・器高5.7cmで、IV期では、口径14.4cm・器高5.5cmで、和泉期とほぼ同様であるが、V期では、口径12.8cm・器高5.0cmで、和泉期よりも小形になる。また、IV期とV期とを比べても、V期の方が小形である。底部は和泉期と鬼高期ともに丸底である。

## (2) 第5号溝（居館跡）について

当遺跡の北西隅から検出された第5号溝は、古墳時代前期（4世紀末～5世紀初め）の首長層の館を囲む溝と思われる。約半分が調査対象区域から外れているため、遺構の全体像をとらえることはできなかった。

古墳時代の豪族が住んでいたとみられるこうした居館遺構の存在が、発掘調査で注目されるようになったのは、昭和55年の群馬県三ツ寺I遺跡の調査以来であり、現在まで、関東北部と近畿地方を中心に約35例の遺跡が発見されている。しかも、その多くは関東北部に集中して発見されている。

これまでの発掘調査で、国内最古の居館跡（古墳時代前期前半、3世紀末～4世紀初め）は、大分県日田市の<sup>おごぼる</sup>小迫原遺跡である。関東地方の最古の居館跡（古墳時代前期後半、4世紀後半）は、栃木県矢板市の<sup>のぼりうち</sup>登内遺跡で、奥谷遺跡の居館跡とも大差ない時期に比定されると思われる。

現在までに発見されている主な居館跡は、季刊考古学・考古学ジャーナル・登内遺跡・古代東国の王者・三ツ寺I遺跡によると、下記の通りである。

### ・古墳時代前期（4世紀ごろ）

<sup>おごぼる</sup>小迫原遺跡（大分県日田市）・登内遺跡（栃木県矢板市）・奥谷遺跡（茨城県茨城町）

### ・古墳時代中期（5世紀ごろ）

荒砥荒子遺跡（群馬県前橋市）・成沢遺跡（栃木県小山市）・大園遺跡（大阪府高石市）・成塚遺跡（群馬県太田市）・梅木遺跡（群馬県前橋市）・丸山遺跡（群馬県前橋市）

### ・古墳時代後期（6世紀ごろ）

三ツ寺I遺跡（群馬県群馬町）・原之城遺跡（群馬県伊勢崎市）・<sup>とぎやま</sup>伽山遺跡（大阪府太子町）・松

野遺跡（兵庫県神戸市）・郷土遺跡（群馬県富岡市）

上記の居館跡については、いずれも遺構の全体像が判明しているわけではないが、奥谷遺跡の豪族居館跡の発掘調査で得られた成果を他の居館跡と比較しながら問題点を列挙してまとめる。

奥谷遺跡の居館跡は、東流して涸沼に注ぐ涸沼川の右岸台地に位置している。川べりの台地上に占地することは、他の地域で見られている居館跡との共通点である。さらに、五領期の集落も前述のとおりの台地上に3軒検出されている。第5号溝からも本節で分類したI期(五領期)の甕形土器・高坏形土器・器台形土器が出土しているので、居館跡と集落は一体のものとして考えられる。したがって、集落を構成する一区画として、居館跡をとらえることができると考えられる。

奥谷遺跡の居館跡は、一辺約50mの隅丸方形の区画の外側を上幅2.0~4.3m、深さ0.6~1.2mの溝がめぐっている。小迫原遺跡(一辺約47mと約37mの長方形の区画の外側を上幅2.5~3.0m、深さ1.5mと上幅2.0m、深さ1.0~1.5mの2条の溝がめぐる)や登内遺跡(東西約48m・南北約50mの正方形の区画の外側を上幅3.0~4.0m、深さ1.2~1.7mの溝がめぐる)などと比較した場合、奥谷遺跡の居館跡は、4世紀末ごろに比定される極めて一般的な規模である。5世紀後半に比定される居館跡と比較すると、荒砥荒子遺跡(東西57m以上、南北40m以上で、溝幅2.5m)・成沢遺跡(東西35m以上、南北56m以上で、溝幅3.0m)・梅木遺跡(東西70m、南北25m以上で、溝幅4.0~6.6m)・丸山遺跡(東西32m、南北25mの長方形の区画の外側を上幅2.7mの溝がめぐる)・大園遺跡(東西47m、南北34mの長方形の区画の外側を上幅1.0mの溝がめぐる)と比較しては、やや大きめである。

奥谷遺跡の溝は、断面が逆台形状で、深さ0.6~1.2m掘り込まれているだけで、三ツ寺I遺跡や郷土遺跡の例に見られた石垣は溝内には積まれていない。また、郷土遺跡のように土橋施設も認められていない。登内遺跡や荒砥荒子遺跡・三ツ寺I遺跡のように溝に平行して走る柵列跡も検出できなかった。しかし、三ツ寺I遺跡や原之城遺跡のように、溝内へ南東側と北東側の2か所に、それぞれ幅6.5mの台形状の張り出しが認められる。溝の下層からは土師器の甕形土器・高坏形土器・器台形土器・三連坏形土器・手捏土器等が出土している。これらの土師器は、前述のとおりの古墳時代前期(五領期)のなかでも4世紀末ごろの範疇に入るものと思われる。

以上のように古墳時代の豪族居館は、まず、柵や溝(堀)、あるいは土塁などの施設によって屋敷内が囲まれていたものと考えられる。その規模や構造については、地域や時期の違い、あるいは豪族の政治的・経済的な勢力関係によってかなり異なることを示しているものと思われる。

ところで、弥生時代には、集落全体を溝や堀で区画する環濠集落がある。これは、一つの村を溝や堀で囲んだもので、村と村との小競り合い、集団同士の争いなど、政治的緊張に対する防御

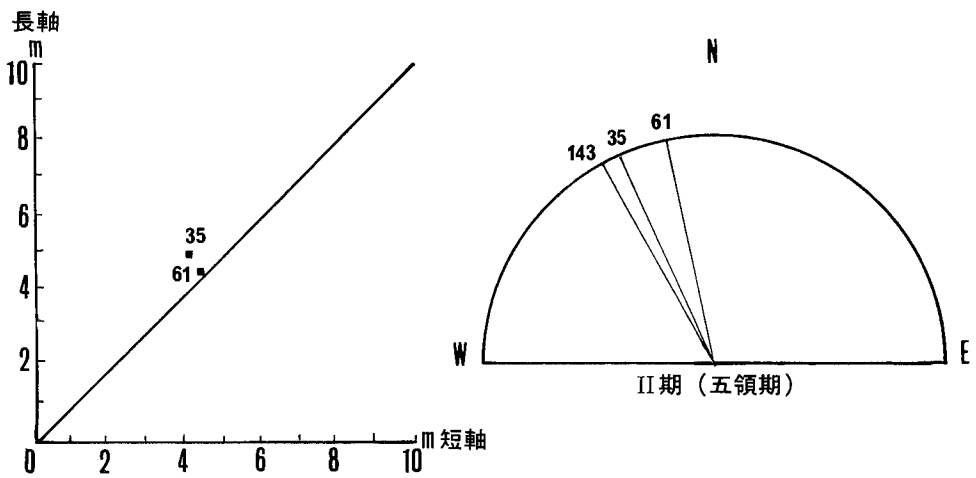
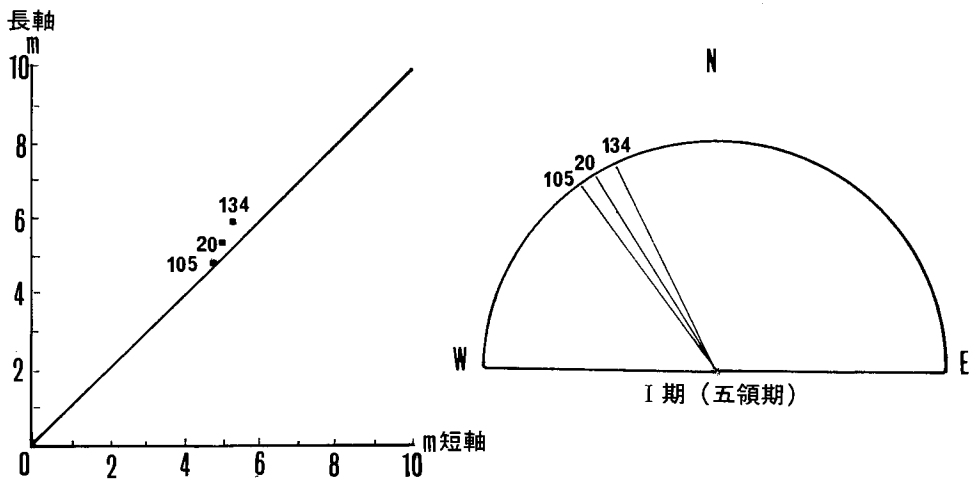
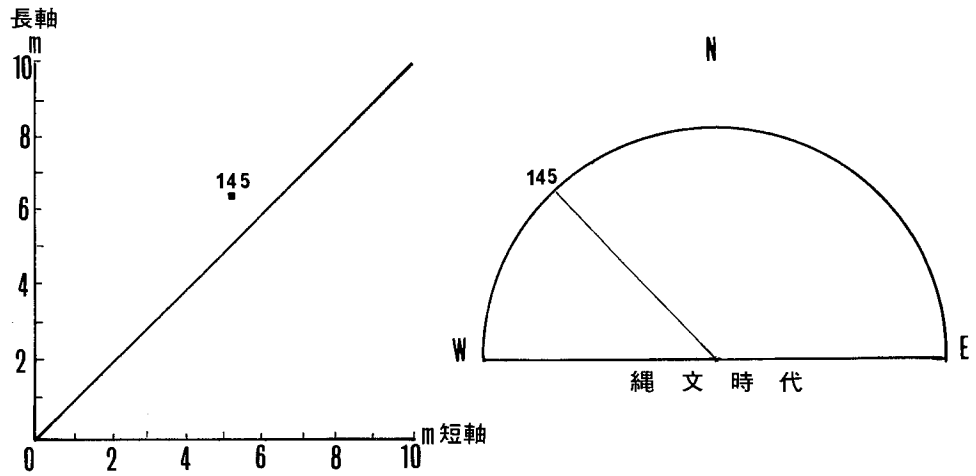
を目的とした施設であった。また、この時代の有力豪族の住居は、一般の人々の住居よりやや規模を大きくしたり、他の住居に見られない屋外排水溝を設けるなど住居の規模や施設に僅かな違いを見せるが、屋敷を溝や堀などで区画することはほとんどなかった。この違いが弥生時代と古墳時代の社会構造の大きな変化を示すものであり、有力な首長による土地私有のはじまりになると思われる。

古墳時代の豪族は、土地を溝や柵などによって区画し、一般の人々との居住地を隔絶した。このことは、首長の政治的・経済的な権限が増大し、支配体制がより強力になったことを物語っているものと思われる。

当遺跡の居館跡は、その一部を調査したにすぎないので、居館内にどのような建物があったかを明かにすることができなかった。しかし、同一台地上には、同時期に比定されると思われる竪穴住居跡が同居館跡の東端部に1軒、南東端寄りに2軒存在している。住居跡の規模は一辺5.0m前後の隅丸方形を呈するもの2軒、長軸5.8m・短軸5.15mの隅丸長方形を呈するもの1軒である。

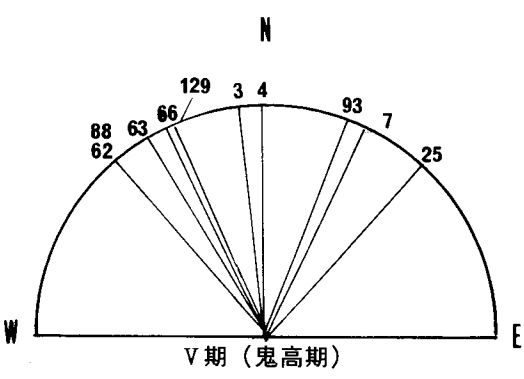
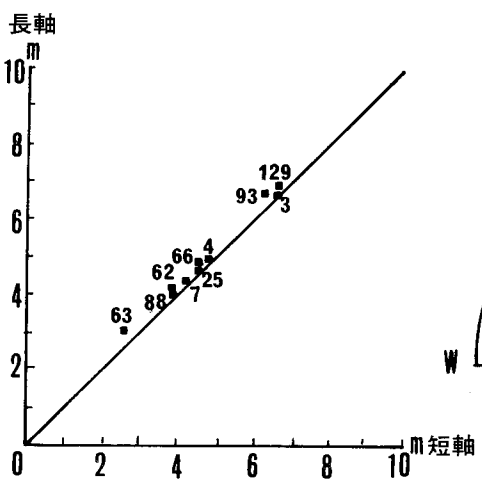
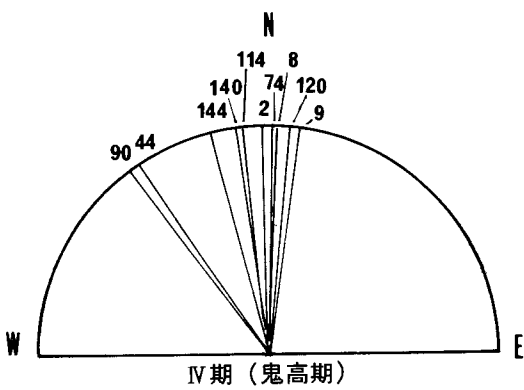
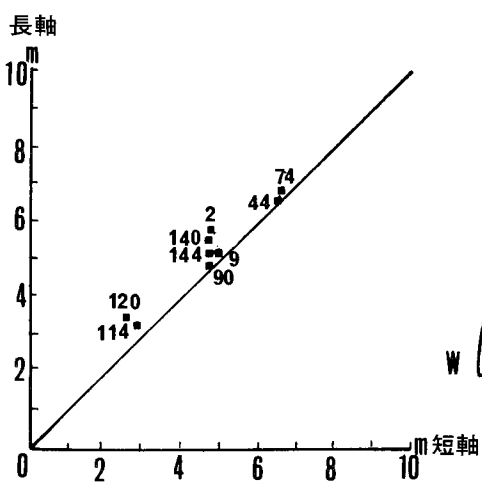
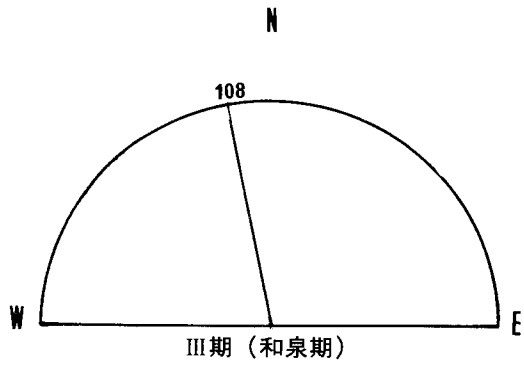
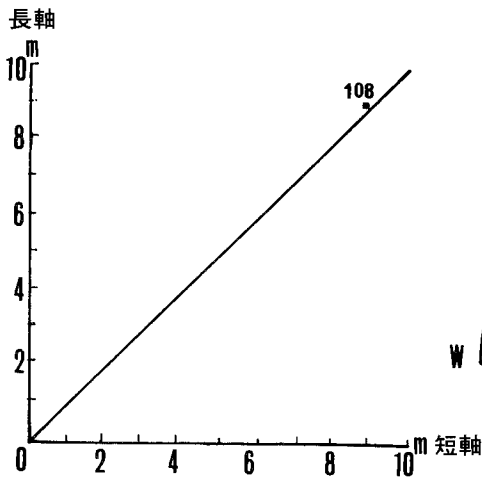
また、豪族が各地域でそれなりの居館を築いていたということは、居館に住んでいた豪族の墓（古墳）が付近にあるという予想がなされる。奥谷遺跡周辺において、同時期の古墳は現在のところ発見されていないが、5世紀初めに比定される前方後方墳の宝塚古墳が涸沼川の対岸の野曾に位置している。その他、未調査のため、詳細は不明であるが木部、飯沼、下土師の古墳群が近くに位置している。これらの古墳（群）と居館跡とを直接結びつける物証はないが、位置的・距離的關係を考えて、今後、何らかの発見がなされる可能性もある。

以上のことから、奥谷遺跡の居館跡は、一般集落の中に位置付けることが可能であると思われる。



第370圖 時期別住居跡規模・主軸方向 (1)





第371図 時期別住居跡規模・主軸方向 (2)

### 3 奈良時代について

#### (1) 竪穴住居跡と出土遺物

奈良時代の竪穴住居跡は8軒検出された。これらの住居跡は、出土土器から2期（Ⅵ・Ⅶ）に分けることが可能である。ここでは、2期の住居跡の形態及び出土土器の器形・技法の特徴の概略を述べることにする。

Ⅵ期（8世紀第1四半期）に属する住居跡は、第34・49・81・109・122・142号住居跡の6軒である。

住居跡の分布図（第368図）をみると、当遺跡の全域にわたって点々と存在している。

平面形状及び規模についてみると、平面形は6軒とも隅丸方形または方形を呈している。規模は、長軸が3.0m以上4.5m未満が2軒、5.0m以上6.0m未満が4軒である。

主軸（長軸）方向は、5軒がN-12°~19°-W~N-3°~14°-Eの範囲におさまる。第81号住居跡は、N-41°-Wを指している。

カマドは、5軒の住居跡が北壁または北西壁に付設されている。第109号住居跡は、カマドが付設されていると思われる北側が農道にかかっているため確認できなかった。

主柱穴は、5軒の住居跡が4本有しており、第109号住居跡は2本しか検出できなかったが、農道にかかっている北側部に残り2本があると思われる。

壁溝は、第49号住居跡からは検出できなかったが、他5軒の住居跡は巡っている。

当該期の土器群は、第34・122号住居跡からの出土土器を中心として、第49・81・109・142号住居跡出土土器を補って構成した。器種としては、土師器の甕形土器・小型甕形土器・壺形土器・小型壺形土器・甑形土器・坏形土器・高台付坏形土器・鉢形土器、須恵器の坏・蓋・台付盤・高盤・小型短頸壺である。

甕形土器（第376図43・44）は、底部が平底で、胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり、口縁部が外反しながら開いている。整形技法は、胴部の内面がヘラナデ、外面はヘラ削りで、口縁部の内・外面に横ナデが施されている。真間期では、胴部の上位に横位または斜位のヘラ削りが施されているものが一般的であるが、当遺跡のⅥ期では、まだ、胴部全体が縦位のヘラ削りで、鬼高期の手法が残っている。また、第376図43は、いわゆる「下野型甕」で、口縁部は「く」の字状に開き、口縁端部が上方につまみ出され、胴部は卵形を呈し、上位が張っている。整形技法は、胴部の内面がヘラナデで、外面はヘラナデ後、中位以下は斜位のヘラ磨きで、口縁部の内・外面に横ナデが施されている。

小型甕形土器（第376図45）は、胴部が内彎しながら外上方に立ち上がり、胴部上位から内傾し

ている。口縁部は短く外反しながら開いている。整形技法は、胴部の内面はヘラナデ、外面はヘラ削りで、口縁部の内・外面は横ナデが施されている。

壺形土器(第376図49)は、底部が丸底で、胴部は丸く張り、胴部中位から内傾している。口縁部は僅かに外反して直立している。整形技法は、胴部の内面がナデ、外面はヘラナデで、口縁部の内・外面は横ナデが施されている。

小型壺形土器(第376図47)は、底部が丸底で、胴部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、胴部中位から内傾し、口縁部が僅かに外反して開いている。整形技法は、胴部の内面はナデ、外面は横位のヘラ削りで、口縁部の内・外面は横ナデが施されている。

甑形土器(第376図46)もⅤ期(鬼高期)の様相を引き継いでおり、口縁端部にやや変化が見られる。整形技法においては、胴部の外面上位がヘラ削りで、中位から下位にかけて、縦位のヘラ磨きが施されているなどの変化があるだけで、Ⅴ期の整形技法とほとんどかわらない。

坏形土器(第377図51・52)は、底部が丸底で、体部は内彎しながら大きく開いて立ち上がり、口縁部は外傾している。Ⅴ期のように外面の口縁部と体部の境に稜を有している。整形技法は、底部が不定方向に手持ちヘラ削りが施され、体部の内面は横ナデ、外面に横位のヘラ削りが施されている。

高台付坏形土器(第377図54)は、体部が内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は外反する。高台は貼り付けで、外下方へのびる。水挽き成形で、底部から体部下端にかけて回転ヘラ削りを施し、体部の内面はヘラ磨きで、外面は横ナデが施されている。

鉢形土器(第377図50)は、Ⅴ期の第376図42の様相を引き継いでおり、ほとんど変化がみられないが、Ⅴ期の整形技法とやや変化している点は、胴部の外面にヘラ磨きが施されていることである。

須恵器の坏は、Ⅳ期(鬼高期)とⅤ期の様相を引き継いでいるものがほとんどであるが、底部が扁平な丸底で、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がり、そのまま口縁部に至っているもの(第377図52)がある。水挽き成形で、底部は不定方向の手持ちヘラ削りで整形されている。ロクロ回転方向は右である。

須恵器の蓋は、本期において出現する。天井部中央に扁平な宝珠形のつまみが付き、天井部は丸く、口縁部は僅かに外反して外下方にのび、口縁部内部にかえりを有するもの(第377図56)と、天井部中央に扁平なつまみを有し、天井部が全体的に低く扁平で、口縁部は下方に屈曲するもの(第377図57)がある。水挽き成形で、天井部付近は回転ヘラ削りが施され、口縁部の内・外面はナデが施されている。ロクロ回転方向は右である。

台付盤(第377図55)も本期において出現する。底部が平底で、体部は内彎気味に開いている。整形技法は、水挽き成形で、底部は回転ヘラ削りである。ロクロ回転方向は右である。

高盤(第377図53)の出現は、VI期の特徴である。残念ながら完存率が悪く、坏部は一部を残して欠損している。脚部は外下方へのび、体部は内彎しながら外上方へ立ち上がっている。水挽き成形で、体部の内・外面および脚部の外面は横ナデで、脚部の内面はナデが施されている。ロクロ回転方向は右である。

小型短頸壺(第376図48)は、底部が平底で、体部は外傾気味に外上方へのび、肩で鋭く内傾している。口縁部は僅かに外傾して立ち上がる。水挽き成形で、底部は手持ちヘラ削りが施されている。

Ⅶ期(8世紀第2四半期～8世紀第3四半期)に属する住居跡は、第5・137号住居跡の2軒である。

住居跡の分布図(第368図)をみると、当遺跡の北側端部に平安時代の第6号住居跡と重複している第5号住居跡、南東側寄りに第137号住居跡が位置している。

平面形状及び規模についてみると、平面形は2軒とも隅丸長方形または方形を呈している。規模は、2軒とも長軸が4.5m以上5.5m未満である。

主軸方向は、2つに分けられ、第5号住居跡がN-5°-Eで、第137号住居跡がN-38°-Wを指している。

カマドは、第5号住居跡が西壁中央に付設され、第137号住居跡は北西壁の北東寄りに付設されている。

主柱穴は、第5号住居跡からは検出できなかったが、第137号住居跡は4本有している。

壁溝も第5号住居跡からは検出できなかったが、第137号住居跡は巡らしている。

当該期の土器群は、第137号住居跡の出土土器を中心として、第5号住居跡の出土土器を補って構成した。器種としては、土師器の甕形土器・小型甕形土器・坏形土器、須恵器の坏・高台付坏・蓋などである。

甕形土器(第377図58)は、VI期の第376図43・44の様相とほぼかわりないが、胴部がVI期より丸く張っている。整形技法もVI期とほぼ同様である。

小型甕形土器(第377図59)はVI期の器形及び整形技法とほぼ同じで、変化が認められない。

坏形土器(第377図62)は、VI期の様相を引き継いでいるが、底部が丸底から平底にかわり、体部は外傾気味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめている。整形技法も水挽き成形で、底部が回転ヘラ削り、体部の内・外面は横ナデが施されている。

須恵器の坏(第377図61)は、VI期の様相を引き継いでいるが、底部が丸底から平底にかわり、体部は外傾気味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめている。本期の土師器の坏形土器の器形と類似している。整形技法は、水挽き成形で、VI期とほぼ同様である。

高台付坏（第377図63）は、本期で出現する。器形は、本期の坏と同様で、高台は貼り付けで、短く外下方へのびている。整形技法は、水挽き成形で、底部は回転ヘラ削り、高台の内・外面は横ナデが施されている。ロクロ回転方向は右である。

須恵器の蓋（第377図60）もVI期の様相を引き継いでいるが、天井部の中央に付くつまみが、やや凹んだつまみである。整形技法もVI期と同様、水挽き成形である。

以上のことから、古墳時代の鬼高期と奈良時代の真間期の住居跡形態を比較すると、平面形は鬼高期の住居跡の79%が隅丸方形または方形で、真間期において、87.5%の住居跡が隅丸方形または方形である。残りの両期の形状は隅丸長方形を呈している。規模は、鬼高期の住居跡の53%が4.0m以上6.0m未満で、真間期においては、75%の住居跡が4.5m以上6.0m未満である。残りの鬼高期の住居跡のうち、6.0m以上7.0m未満のものは26%あり、真間期では見られない。さらに、鬼高期では、4.0m未満のものが4軒あり、全体の21%をしめ、真間期では、4.5m未満のものが2軒あり、全体の25%をしめている。カマドは、鬼高期の79%の住居跡が北壁または北西壁中央に付設され、真間期でも、75%の住居跡が北壁または北西壁に付設されている。鬼高期の1基と真間期の1基は西壁中央に付設されている。支柱穴は、鬼高期の住居跡の42%が4本有し、真間期では75%の住居跡が4本有している。なお、鬼高期において、重複や攪乱のため、2本または全く検出できなかったものが58%あるし、真間期でも25%あることから判断すると、基本的には両期とも、支柱穴は4本有していたと思われる。

鬼高期と真間期の土器を比較すると、甕形土器では、真間期になっても鬼高期に見られた胴部の外面に縦位のヘラ削りが施されている。また、甕形土器の口縁端部を上方につまみ出しているのは鬼高期には見られないが、真間期には見られる。坏形土器では、鬼高期に見られた丸底がVI期では引き継いで残り、VII期になって平底になる。また、外面の口縁部と体部の境に稜を有する鬼高期的なものがVI期でも見られる。さらに、鬼高期の坏形土器の体部の内面はヘラ磨きで、外面はヘラ削りであるが、真間期の坏形土器の体部の内面は横ナデで、VI期の外面は鬼高期のヘラ削りが施されており、VII期になると、内面同様横ナデである。真間期になると、手持ちヘラ削りや回転ヘラ削りが底部に施される。鬼高期の坏形土器の法量は、IV期では、口径14.4cm・器高5.5cmあるが、V期では、口径12.8cm・器高5.0cmで、いくぶん小形化する傾向が見られる。真間期になると、VI期では、坏形土器の法量は口径（15.2）cm・器高（5.9）cmであり、IV期と同じくらいの法量になる。しかし、VII期になると、坏形土器の口径は13.5cm・器高3.8cm・底径8.0cmになり、VI期よりはいくぶん小形化する。また、鬼高期には数少なかった須恵器の坏が見られ、VI期の坏の口径は15.9cm・器高4.0cm・底径8.2cmであるが、VII期になると、土師器の坏形土器同様、口径（13.0）cm・器高4.2cm・底径（8.6）cmとなり、いくぶん小形化する。VII期においては、口径と底径の比率もVI期の51.6%から66.2%にあがる。

#### 4 平安時代について

##### (1) 竪穴住居跡と出土遺物

平安時代の遺構としては、竪穴住居跡82軒を検出している。これらの住居跡は、出土土器から4期(VIII・IX・X・XI)に分けることが可能であり、ここでは、4期の住居跡の形態及び出土土器の器形・技法の特徴の概略を述べることにする。

VIII期(8世紀第4四半期～9世紀第1四半期)に属する住居跡は、第14・18・68・73・75・106・146号住居跡の7軒である。

住居跡の分布図(第368図)をみると、当遺跡の北東部に4軒がややまとまって存在し、かなり離れて、南側部に2軒、やや離れた北西側に1軒が点在している。

平面形状及び規模についてみると、平面形は3軒が隅丸長方形を呈し、4軒が隅丸方形である。規模は、長軸が3.0m以上3.5m未満1軒、3.5m以上4.0m未満2軒、4.5m以上5.0m未満、5.0m以上5.5m未満、5.5m以上6.0m未満の範囲に各1軒ずつである。第68号住居跡は長軸7.0m・短軸6.2mである。

主軸方向は、5軒がN-2°～21°-W～N-13°・14°-Eの範囲におさまる。第75・146号住居跡の2軒は各々、西へ43度と65度振れる。

カマドはすべての住居跡に付設されており、東壁中央に付設されている第18号住居跡以外、北壁または北西壁中央に付設されている。

主柱穴は、第14・68・73号住居跡の3軒が4本有しているが、残り4軒は検出できなかった。

壁溝は4軒の住居跡が巡っている。その他、第18・68号住居跡は貼り床である。

本期の土器群は、第18・68・73・75号住居跡出土土器を中心として、第14・106・146号住居跡出土土器を補って構成した。器種としては、土師器の甕形土器・坏形土器・高台付坏形土器・高台付皿形土器・鉢形土器、須恵器の坏・高台付坏・蓋・台付盤・高盤である。

甕形土器(第377図70)は、器形において、VI期(真間期)とVIII期との大きな違いは、胴部がほとんど張らないことである。口縁部は大きく外反している。口縁端部は上方へつまみ出されている。整形技法は、VI期とVII期と同様である。

坏形土器(第377図71)は、VI期とVII期の様相を引き継いでいるが、体部の内面が黒色処理されるものが出現し、また、体部の外面に墨書されるものも見られる。

高台付坏形土器(第377図73)もVII期と同様で、変化が見られない。

高台付皿形土器(第377図65)は、本期において出現してくる。器形は、体部がやや内彎気味に

外上方に大きく開き、口縁部は水平にのび、端部を丸くおさめている。高台は貼り付けで、外下方へのびる。整形技法は、本期の坏形土器と同様である。

鉢形土器(第377図64)もⅥ期の様相を引き継いでいるが、胴部の上位がほぼ直立し、口縁部が僅かに外反するなどの変化が見られる。整形技法にも、Ⅵ期と違った変化が見られ、胴部の内面にヘラ磨き、外面にヘラ削りが施されている。

須恵器の坏(第377図67)もⅦ期から僅かに変化し、体部が直線的に外上方へ立ち上がり、口縁部が僅かに外反する。整形技法は、Ⅶ期と同様、水挽き成形であるが、体部下端に手持ちヘラ削りが施されているものが多くなる。

高台付坏(第377図72)も本期の坏とほぼ同様の器形・整形技法である。

須恵器の蓋(第377図69)もⅥ期とⅦ期の様相を引き継ぎ、天井部の頂部はやや丸味を帯びるが、口縁内部にかえりがなくなる。整形技法もⅥ期とⅦ期とほぼ同様に、水挽き成形である。

台付盤(第377図68)もⅥ期の器形・整形技法とほぼ同様に、変化が認められない。

高盤(第377図66)もⅦ期では見られなかったが、Ⅵ期の様相を引き継いでおり、口縁部がほぼ垂直に立ち上がり、端部をやや丸くおさめている。整形技法は、Ⅵ期と同様に、水挽き成形である。

Ⅸ期(9世紀第2四半期～9世紀第3四半期)に属する住居跡は、第30・31・33・38・45・47・58・70・71・113・117・118号住居跡の12軒である。

住居跡の分布図(第368図)をみると、9軒が当遺跡の北側部に位置し、3軒が南側部に点在している。

平面形状及び規模についてみると、平面形は、5軒が隅丸長方形を呈し、7軒が隅丸方形である。規模は、長軸が3.0m以上3.5m未満4軒、3.5m以上4.0m未満が4軒、4.0m以上4.5m未満が3軒、5.0m以上5.5m未満が1軒である。

主軸方向は、10軒がN-2°～15°-W～N-2°～12°-Eの範囲におさまる。第31・117号住居跡が各々、西へ21度と27度振れる。

カマドはすべての住居跡に付設されており、東壁中央に付設されている第38号住居跡以外の11軒の住居跡が北壁中央に付設されている。

支柱穴は、第31・33・113号住居跡の3軒が4本有しており、1～3本有するものが5軒、全く検出できなかったものが4軒あり、支柱穴のない住居跡がⅧ期よりやや増加する傾向がある。

壁溝は6軒の住居跡が巡らしている。その他、第31・45号住居跡は床を貼っている。

本期の土器群は、第31・45・117号住居跡出土土器を中心にして、第30・33・38・47・58・70・71・113・118号住居跡出土土器を補って構成した。器種としては、土師器の甕形土器・小型壺形土器・坏形土器・高台付坏形土器・高台付皿形土器・鉢形土器、須恵器の壺・甑・坏・高台付坏・

蓋・台付盤，陶器の台付長頸壺などである。

甕形土器（第378図74）は，Ⅷ期と大差なく，長胴を呈し，口縁端部を上方につまみ出している。

小型壺形土器（第378図81）は，Ⅵ期とほぼ同様であるが，底部が丸底から平底に変化している。

坏形土器もⅧ期の様相を引き継いでいるが，口縁部が2つのタイプに分けられる。一つのタイプは，体部が内彎しながら外上方に立ち上がり，そのまま口縁部に至るもの（第378図85）と，もう一つのタイプは，口縁部が僅かに外反するもの（第378図84）がある。整形技法もⅧ期とほぼ同様であるが，底部から体部下端にかけて回転ヘラ削りが施されているものが見られる。

高台付坏形土器も本期の坏形土器と同じような2つのタイプ（第378図87・88）に分けられる。整形技法もⅧ期と同様である。

高台付皿形土器もⅧ期のタイプ（第378図91）と新しいタイプ（第378図90）が存在する。新しいタイプは，体部が内彎しながら大きく開き，そのまま口縁部に至り，口縁部を丸くおさめている。整形技法は，2つのタイプともⅧ期と同様である。

鉢形土器もⅧ期の様相を引き継ぎながら，3つのタイプに分けられる。1のタイプは，底部が平底で，胴部が内彎気味に外傾して立ち上がり，上位で僅かに内傾しながら口縁部が直立するもの（第378図75）と，2のタイプは，底部が平底で，胴部が直線的に外上方へ立ち上がり，口縁部に至っているもの（第378図80）がある。3のタイプ（第378図77）は，Ⅷ期と違い，胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり，口縁部は外反しながら開き，本期の甕形土器のように，口縁端部を上方へつまみ出している。整形技法は，1のタイプがⅧ期とほぼ同様であるが，2のタイプは，胴部の内・外面の上・中位にナデ，下位に横位の回転ヘラ削りが施されている。3のタイプは，胴部の内面にナデ，外面がヘラ削りである。口縁部の内・外面は横ナデを施している。

須恵器の壺（第378図76）は，底部が平底で，胴部は内彎気味に外上方に立ち上がり，上位から内傾する。頸部は外反しながら，そのまま口縁部に至っている。整形技法は，胴部・口縁部の内・外面はナデである。

須恵器の甑（第378図78）は，底部が五孔式で，胴部はほぼ直線的に外傾して立ち上がっている。整形技法は，胴部の内面がナデで，外面は横位のヘラ削りを施している。

須恵器の坏（第378図86）は，Ⅷ期とほぼ同様で，整形技法において，底部が回転ヘラ切り後，不定方向の手持ちヘラ削りが施されているものが見られる。ロクロ回転方向は右である。

高台付坏（第378図89）もⅧ期の器形・整形技法ともほぼ同様で，変化が認められない。

須恵器の蓋（第378図83）は，天井部がほぼ平坦で，口縁端部が外傾している。整形技法は，Ⅷ期と同様で，水挽き成形である。



台付盤(第378図79)は、底部が平底で、体部が内彎気味に開き、VIII期とは違ってくる。整形技法は、VIII期とほぼ同様である。

台付長頸壺(第378図82)は、胴部が内彎気味に外上方へ立ち上がり、高台は貼り付けで、短く下方にのび、端部は面をなす。胴部の外面に自然釉が見られる。整形技法は、水挽き成形で、底部は回転糸切り、高台の内・外面および胴部の外面下端は横ナデを施している。当遺跡においては、本期で出現する。

X期(9世紀第4四半期～10世紀第1四半期)に属する住居跡は、4・6・11～13・15・16・19・21～24・26・28・29・32・39～41・43・46・48・51・53・56・57・60・64・65・67・72・76～80・83・84・86・95・103・107・115・121・123～126・128・130～133・135・136・138号住居跡の56軒である。当遺跡の中で、最も多く検出された時期である。

住居跡の分布図(第368図)をみると、当遺跡の中央部の斜面部以外の地域に位置している。

平面形状及び規模についてみると、平面形は隅丸方形または方形を呈しているもの37軒、隅丸長方形または長方形を呈しているもの16軒である。残りの3軒(第28・51・138号住居跡)は重複や攪乱のため不明である。規模は、長軸が2.5m以上3.0m未満4軒、3.0m以上3.5m未満12軒、3.5m以上4.0m未満18軒、4.0m以上4.5m未満7軒、4.5m以上5.0m未満3軒、5.0m以上5.5m未満2軒、5.5m以上6.0m未満3軒、6.0m以上6.5m未満3軒である。3.5m以上4.0m未満の住居跡が最も多く、次いで3.0m以上3.5m未満の住居跡である。また、第107号住居跡は、他の3壁の長さはわからないが、南壁の長さが8.0mもあり、当期の中で最も大形である。

主軸(長軸)方向は、48軒がN-1°～22°-W～N-2°～25°-Eの範囲におさまる。第124・133・136号住居跡の3軒は西へ28度振れ、第58・64・123号住居跡の3軒は各々、東へ61度・72度・87度振れている。第28・51号住居跡の2軒は重複や攪乱のため不明である。

カマドは、50軒の住居跡に付設されており、そのうち、北壁または北西壁中央に付設されているもの36軒で、本期の主流をしめており、その他、東壁中央に付設されているものが7軒、西壁中央に付設されているもの4軒である。また、2基のカマドが付設されているものが3軒あり、そのうち、北壁と東壁にあるもの2軒、北壁と西壁にあるもの1軒で、いずれも土層から判断すると、同時期に存在したのではないことが窺える。

主柱穴は、11軒の住居跡が4本を有し、23軒の住居跡では、攪乱や調査エリアの関係で1～3本しか検出できなかった。全く検出できなかった住居跡は21軒ある。第32号住居跡の1軒だけは6本有している。

壁溝は、24軒の住居跡が巡らしている。その他、9軒の住居跡が床を貼っており、軒数的にはめだつて多い。

本期の土器群は、第12・29・39・46・57・67・131号住居跡出土土器を中心として、他の住居跡出土土器を補って構成した。器種としては、土師器の甕形土器・小型甕形土器・坏形土器・高台付坏形土器・高台付皿形土器、須恵器の甕・坏・高台付坏・蓋・台付盤・小型短頸壺・台付長頸壺・円面硯などで、器種も豊富である。

甕形土器（第379図92）は、Ⅸ期と同様、胴部が長胴を呈し、口縁部は「く」の字状を呈している。口縁端部は上方へつまみ出している。整形技法もⅨ期と同様で、変化が認められない。

小型甕形土器（第379図95）は、底部が平底で、胴部は内彎気味に外上方へ立ち上がり、中位に最大径を有し、口縁部は「く」の字状を呈する。整形技法は、胴部の内面が横ナデ、外面が横位のヘラ削りを施している。

坏形土器は、Ⅸ期と同じように、2つのタイプ（第379図97・98）に分けられ、器形・整形技法ともⅨ期と同様である。

高台付坏形土器は、Ⅸ期と同様の2つのタイプ（第379図99・100）が存在している。

高台付皿形土器は、Ⅸ期と同様の2つのタイプ（第379図105・106）が存在し、Ⅷ期やⅨ期とほとんど同じである。

須恵器の甕（第379図93）は、Ⅹ期と違い、胴部が内彎しながら外上方へ立ち上がり、口縁部は短く外反する。口縁端部は本期の土師器の甕形土器のように上方へつまみ出している。整形技法は、胴部の内面がナデ、外面に縦位の平行叩きを施し、下端はヘラ削りである。

須恵器の坏は、3つのタイプに分けられる。そのうち、第379図102と103の2つのタイプは、Ⅷ期とⅨ期にみられたタイプである。残りのタイプ（第379図104）は、希少なタイプで、底部が平底で、体部は外反気味に外上方へのび、口縁端部を丸くおさめている。整形技法は、3つのタイプとも水挽き成形で、Ⅸ期と同様である。

高台付坏（第379図101）もⅨ期の器形や整形技法と同様である。

須恵器の蓋は、つまみが擬宝珠状を呈しているが、天井部に少し違いがあるため2つのタイプに分けられる。1のタイプ（第379図108）は、天井部がなだらかに下降し、口縁部は外下方に屈曲している。2のタイプ（第379図107）は、天井部が平坦となっており、口縁部は外下方に屈曲している。整形技法は、2つのタイプともⅨ期と同様に水挽き成形で、ロクロ回転方向は右である。

台付盤（第379図110）は、Ⅸ期と少し異なり、底部が平底で、体部は直線的に外上方に立ち上がり、短い口縁部は外反気味に立ち、口唇部は丸くおさめている。整形技法は、Ⅸ期と同様に水挽き成形で、ロクロ回転方向は右である。

小型短頸壺（第379図96）は、底部が平底で、胴部は内彎しながら立ち上がり、胴部上位から内傾する。口縁部は僅かに外反する。整形技法は、水挽き成形で、底部から体部下端にかけて手持

ちヘラ削りを施している。

台付長頸壺（第379図94）は、IX期の第378図82と類似しているが、整形技法において、水挽き成形で、底部から胴部の外面下端にかけて回転ヘラ削りが施されているなどの違いが認められる。やはり、IX期同様、胴部の外面に自然釉が見られる。

円面硯（第379図109）は、脚部上位に1条、下位に1条の隆帯が見られる。2.0cm×2.5cmのスカシ窓が4か所で、0.7cm間隔に5本の刻みを入れている。外堤の断面は四角形である。外周は浅い溝が一周する。整形技法は、水挽き成形で、硯部・外堤・隆帯とも接合している。スカシ窓はヘラ切りで、内・外面は横ナデを施している。

XI期（10世紀第2四半期～10世紀第3四半期）に属する住居跡は、第17・52・82・85・111・127・139号住居跡の7軒である。

住居跡の分布図（第386図）をみると、当遺跡の北側部に5軒、やや離れて南側部に2軒点在している。

平面形状及び規模についてみると、平面形は4軒の住居跡が方形または隅丸方形を呈し、残り3軒が隅丸長方形を呈している。規模は、長軸が2.5m以上3.0m未満が1軒、3.0m以上3.5m未満が3軒、3.5m以上4.0m未満が3軒である。

主軸方向は、5軒がN-7°～17°-W～N-7°～15°-Eの範囲におさまる。第111・127号住居跡の2軒は、各々、東へ30度と西へ27度振れる。

カマドはすべての住居跡に付設されており、4軒の住居跡が北壁中央に付設されている。残り3軒の住居跡が東壁中央または南寄りに付設されている。

主柱穴は、1～3本有する住居跡が3軒と、全く検出できなかった住居跡が4軒である。

壁溝は、5軒の住居跡に巡らしている。その他、第111号住居跡が床を貼っている。

本期の土器群は、第52・139号住居跡出土土器を中心として、第17・82・85・111・127号住居跡出土土器を補って構成した。器種としては、土師器の甕形土器・坏形土器・高台付坏形土器・高台付皿形土器・鉢形土器・高台付埴形土器などである。いずれも土師器である。

甕形土器（第379図111）、坏形土器（第379図115）、高台付坏形土器（第379図113）、高台付皿形土器（第379図116）の4器種は、X期の各々の器種と同様である。

鉢形土器（第379図114）は、底部が平底で、胴部は内彎しながら大きく開き、口縁部は外反する。IX期の第378図77のような口縁端部のつまみ出しは見られない。整形技法は、胴部の内・外面がナデで、口縁部の内・外面は横ナデを施している。

高台付埴形土器（第379図112）は、体部が内彎しながら大きく開き、口縁部は僅かに外反する。高台は貼り付けで、外下方へのび、端部は丸くおさめている。整形技法は、水挽き成形で、底部

から体部下端にかけて回転ヘラ削りで、高台の内・外面は横ナデである。体部の内・外面はヘラ磨きを施している。

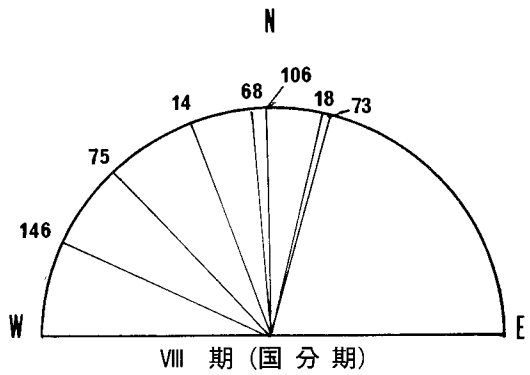
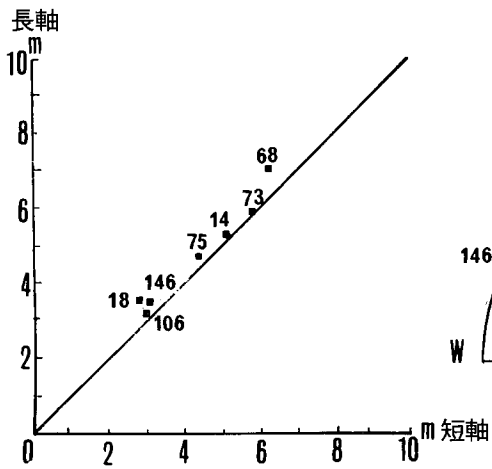
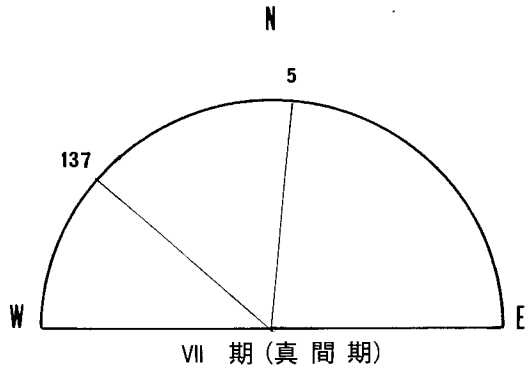
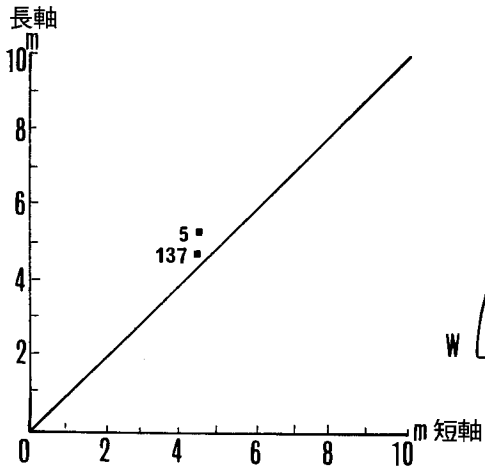
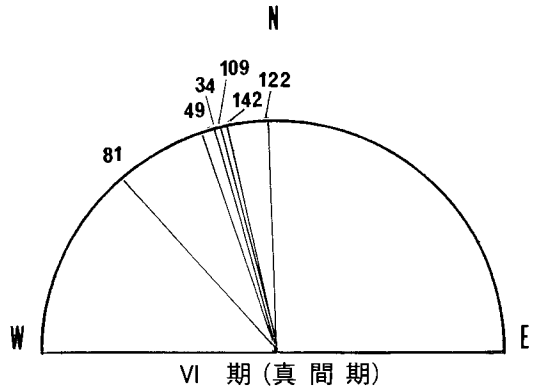
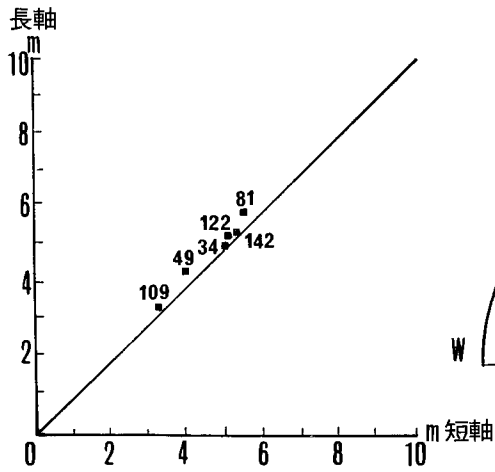
以上のことから、奈良時代の真間期と平安時代の国分期の住居跡形態を比較すると、平面形は、真間期の住居跡は87.5%が隅丸方形または方形を呈し、国分期では、63.4%の住居跡が隅丸方形または方形を呈している。両期の残りの形状は隅丸長方形または長方形である。規模は、真間期の住居跡の75%が4.5m以上6.0m未満であるが、国分期においては、3.0m以上4.5m未満のものが72%をしめる。また、真間期では見られなかった6.0m以上7.0m未満のものが、国分期では、全体の2.4%にあたる2軒みられる。さらに、2.5m以上3.0m未満の住居跡も国分期では、全体の6.7%にあたる5軒みられる。国分期では、真間期に比べて、一般的に小形化しているが、反面、大形の住居も少数ではあるがみられ、やや分化の傾向がみられる。特に、X期からXI期にかけて著しい。カマドは、真間期では、75%の住居跡が北壁または北西壁中央に付設されており、国分期も78%の住居跡が北壁または北西壁中央に付設されている。また、真間期で1軒、西壁中央に付設されたものがみられたが、国分期においては、全体の5.5%にあたる4軒みられる。さらに、真間期では見られなかった東壁中央に付設されたカマドが、国分期では、全体の16.5%にあたる12軒みられる。支柱穴は、真間期の75%の住居跡が4本を有していたのに対して、国分期では、22%の住居跡しか4本を有していない。また、真間期では、2本または全く検出できなかったものが全体の25%にあたる2軒でみられたが、国分期においては、1～3本有しているものが36.6%、全く検出できなかったものが41.4%ある。このことから判断すると、国分期においては、1～3本または全く検出できないものが増加する傾向が窺える。さらに、真間期ではみられなかった貼り床の住居跡が、国分期では、全体の17%にあたる14軒みられる。

真間期と国分期の土器を比較すると、甕形土器では、国分期になっても、真間期に見られた口縁端部の上方へのつまみ出しは残り、真間期よりは胴部が張らず、長胴を呈する。整形技法は、両期ともほぼ変化が見られない。真間期では見られなかった土師器の高台付皿形土器と須恵器の台付長頸壺が国分期で出現する。また、真間期では、須恵器の坏・高台付坏・蓋・台付盤、土師器の坏形土器等に見られた水挽き成形が、国分期では、甕形土器を除いて、主流をなしている。

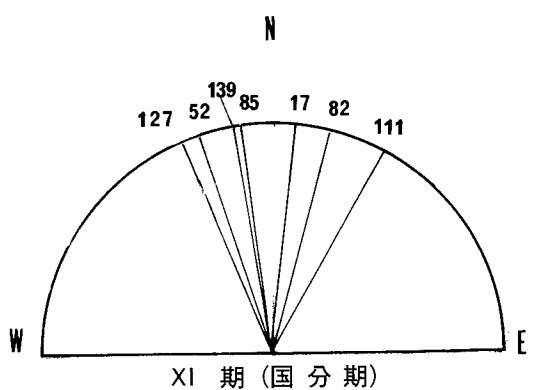
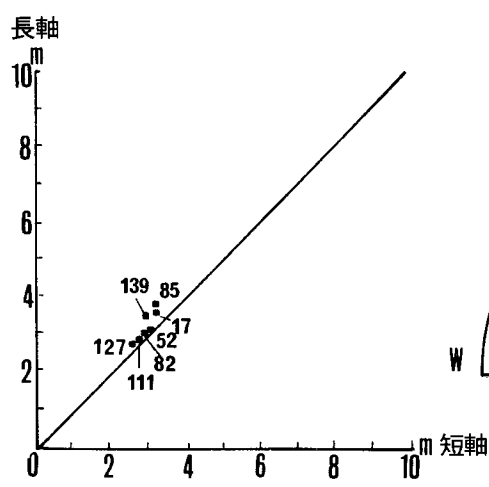
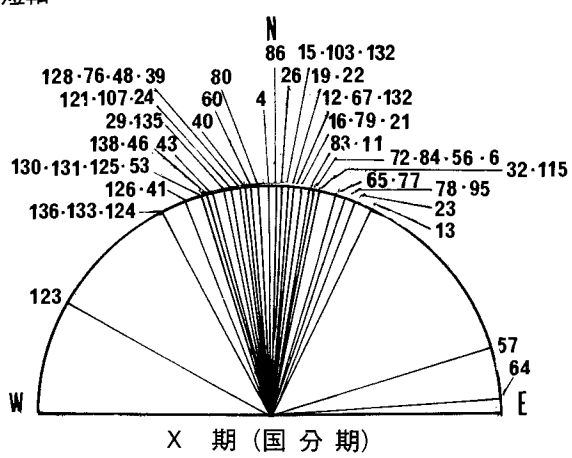
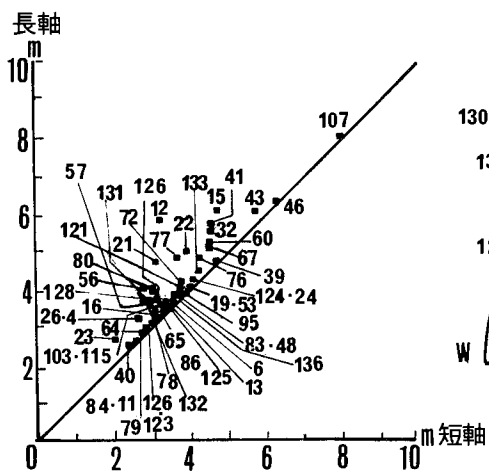
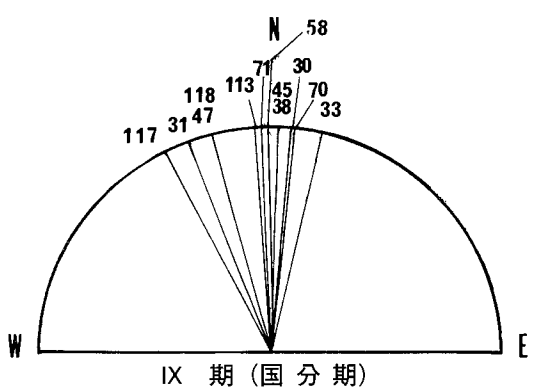
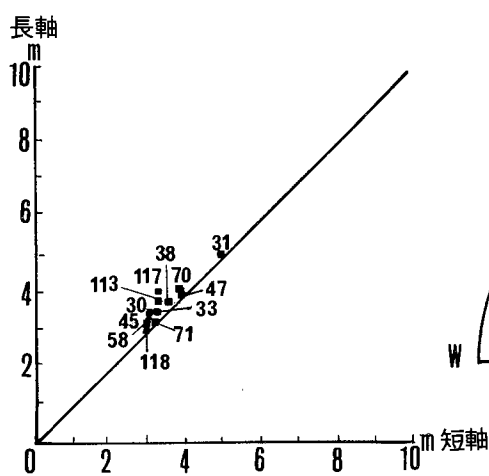
両期の土師器の坏形土器と須恵器の坏における口径と底径との比率を見ると、真間期では、口径13.5cm・器高3.8cm・底径8.0cmの坏形土器の比率は59.3%あり、須恵器の坏の場合も、口径(13.0)cm・器高4.2cm・底径(8.6)cmで、比率は66.2%である。国分期では、VIII期は、坏形土器の場合、口径15.2cm・器高5.2cm・底径8.2cmで、比率は53.9%、須恵器の坏の場合、口径13.6cm・器高4.6cm・底径8.1cmで、比率は59.6%、IX期は、坏形土器の場合、口径13.9cm・器高4.2cm・底径6.8cmで、比率は48.9%、須恵器の坏の場合、口径13.6cm・器高4.9cm・底径7.3cmで、比率は53.7%、X期は、坏形土器の場合、口径13.7cm・器高3.7cm・底径5.6cmで、比率は40.9%、須恵器の坏の

場合、口径14.4cm・器高4.8cm・底径6.0cmで、比率は41.7%である。XI期は、坏形土器の場合、口径13.2cm・器高4.2cm・底径6.1cmで、比率は46.2%である。本期において、須恵器の坏を検出することができなかった。以上のように土師器の坏形土器と須恵器の坏における口径と底径の比率は、真間期には、底径が口径の2分の1を上回るものであったが、国分期のVIII期においても、真間期のように底径が口径の2分の1よりも大きいものが見られる。ところが、IX期ごろから底径が口径の2分の1より小さいものも見られ、X期ごろになると、IX期と比べて、口径・器高ともほとんど変化なく、底径が更に小さくなり、多くは底径が口径の2分の1以下になる。また、土師器の坏形土器と須恵器の坏の底部の整形技法においても、真間期では、回転ヘラ削り調整を施しているが、国分期には、手持ちヘラ削り調整が施されている。さらに、土師器の坏形土器・高台付坏形土器・高台付皿形土器、須恵器の坏の底部・体部外面に墨書されているものが見られるのも国分期になってからで、特に、墨書土器が検出できた29軒の住居跡のうち、23軒までがX期にあたり、最も多く、次いでIX期で4軒、VIII期とXI期では各1軒である。これらの多くは、体部の内面が黒色処理されている。

最後に、これらの土器群の分類は、他の地域の編年資料などを参考にして、住居跡ごと一括出土したものを検討したもので、個々の土器によっては、若干時期が前後する場合も考えられるが、隣接する周辺地域の資料の増加とともに再分析されることを期待している。

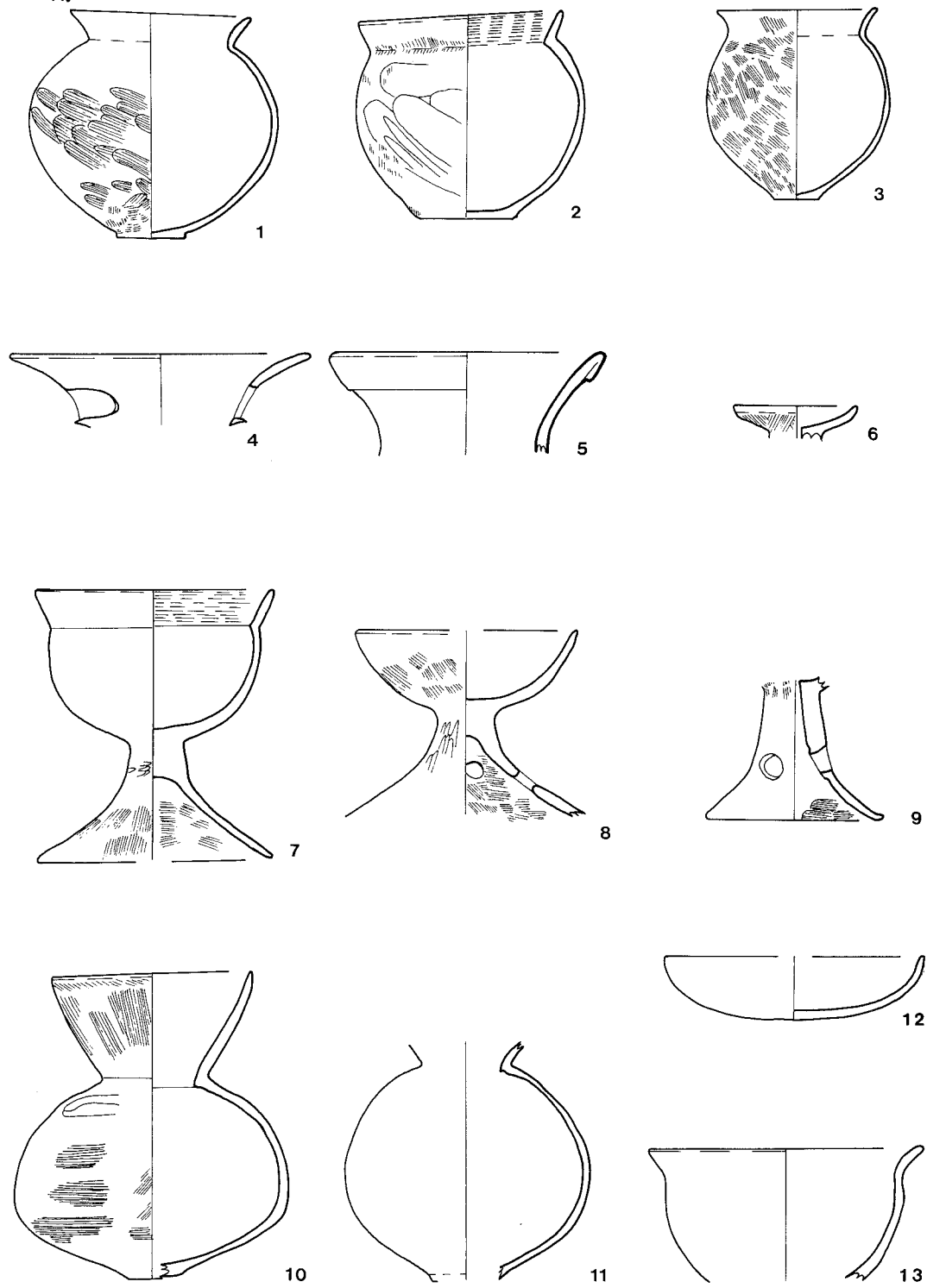


第372図 時期別住居跡規模・主軸方向 (3)



第373図 時期別住居跡規模・主軸方向 (4)

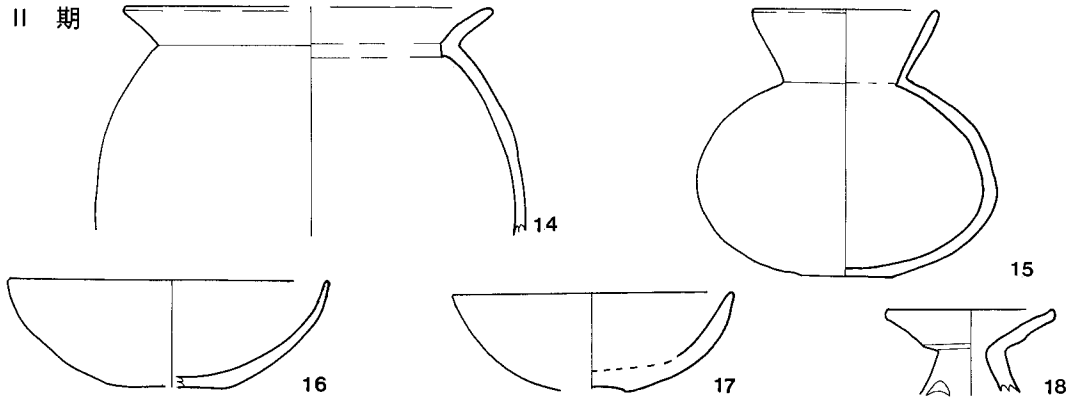
I 期



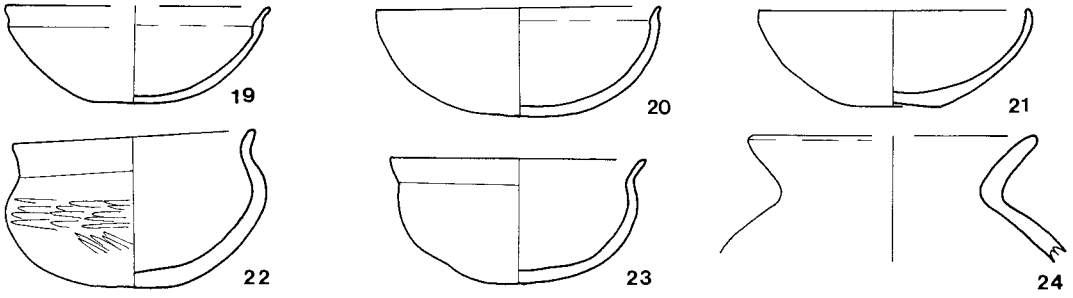
第374图 土器編年图 (1)



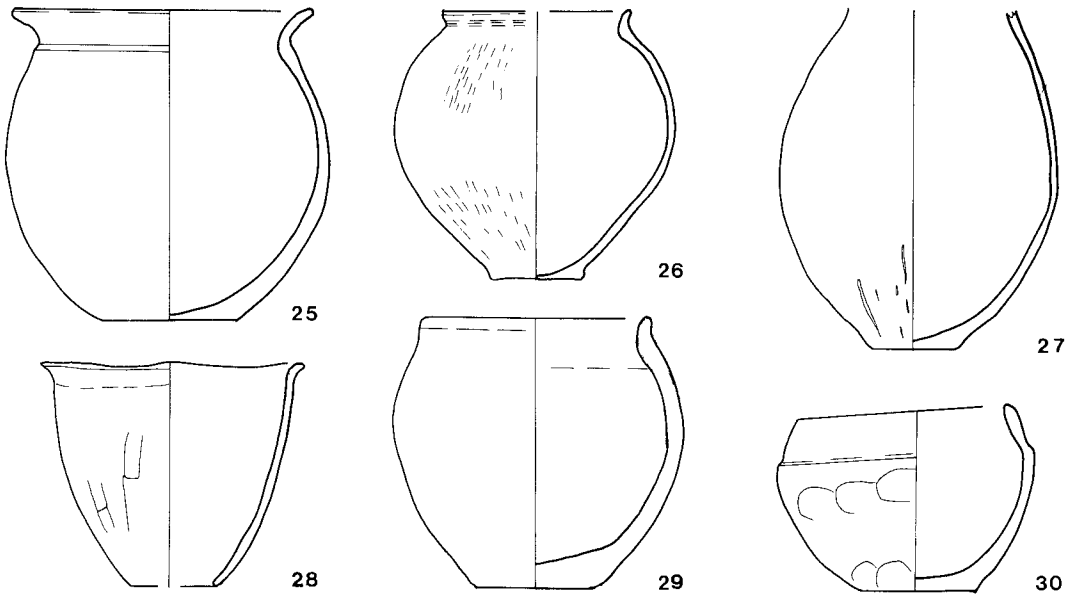
II 期



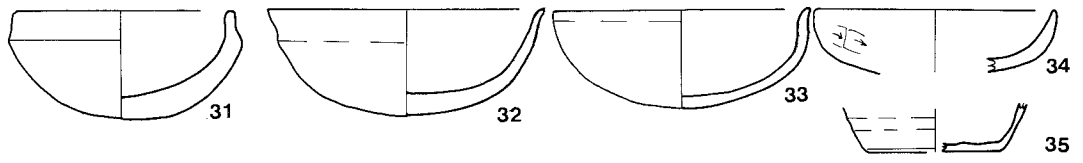
III 期



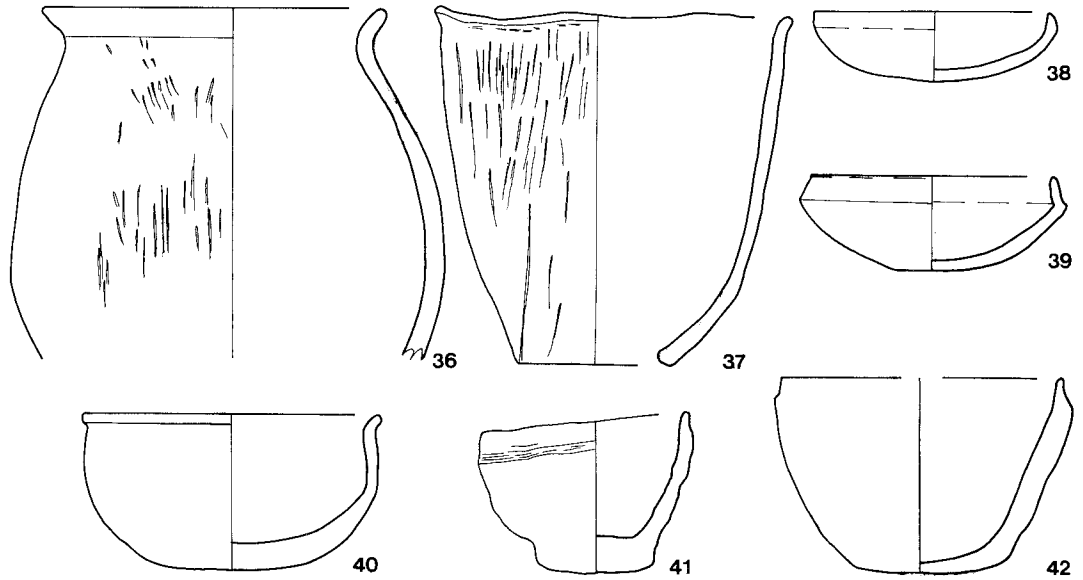
IV 期



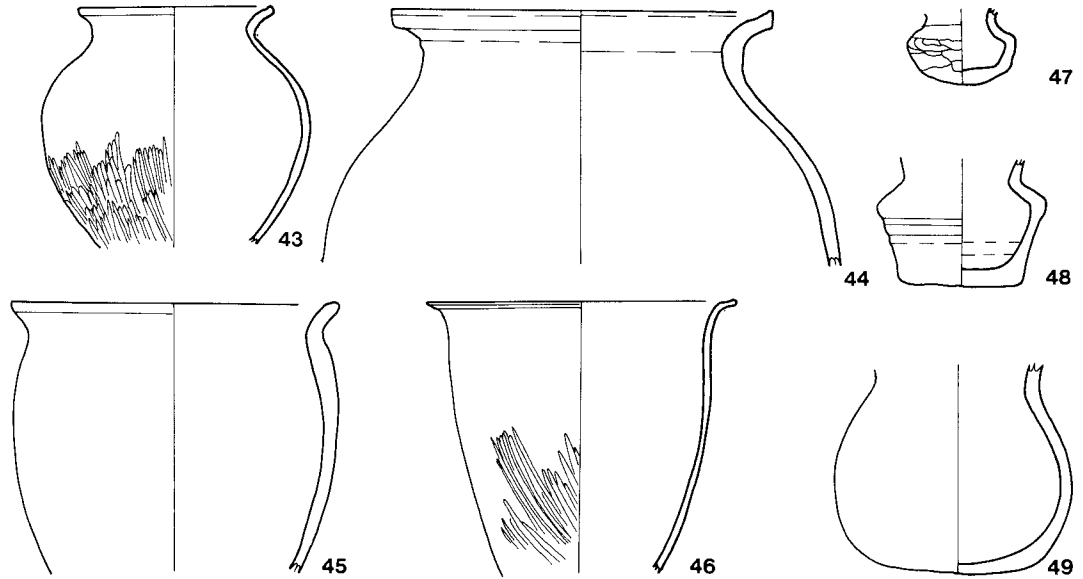
第375图 土器編年图 (2)



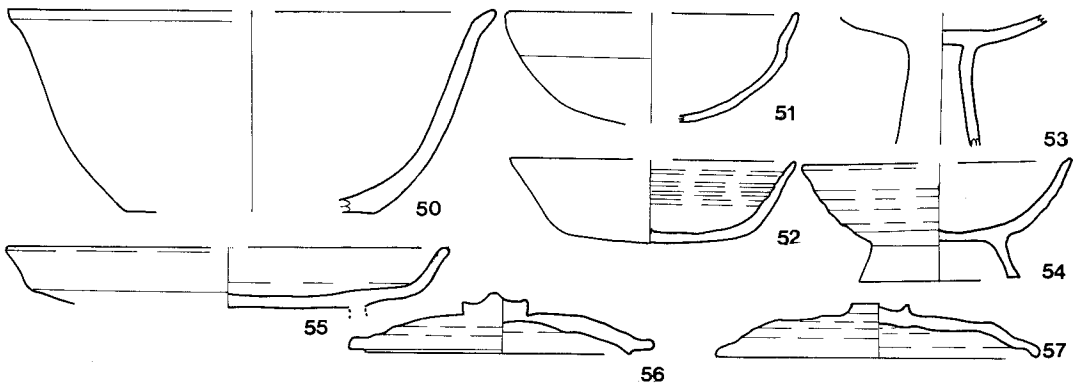
V 期



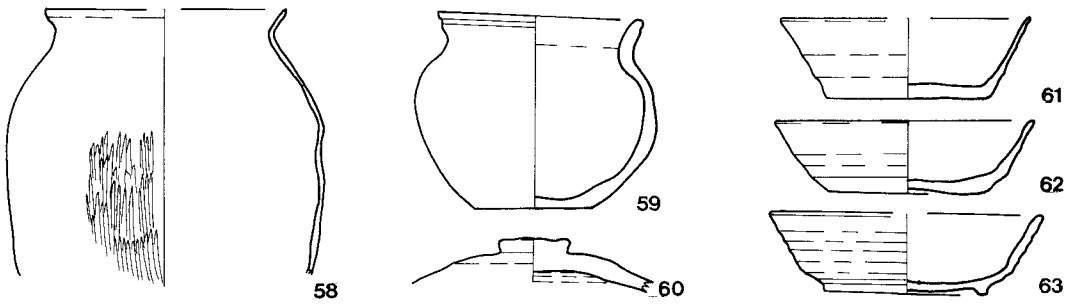
VI 期



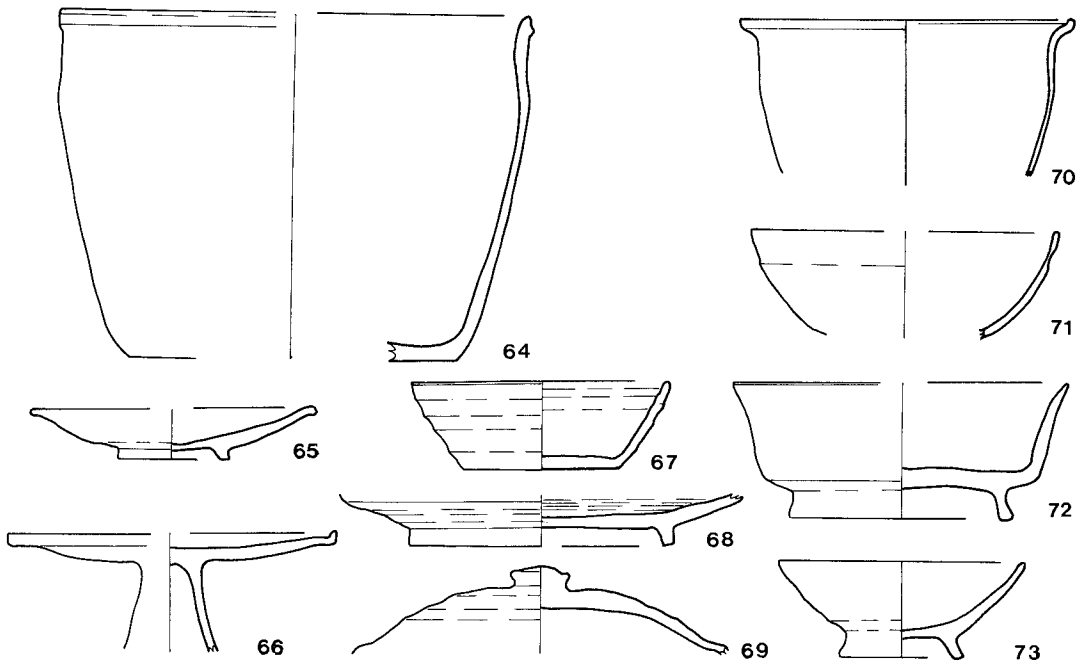
第376图 土器編年图 (3)



VII 期

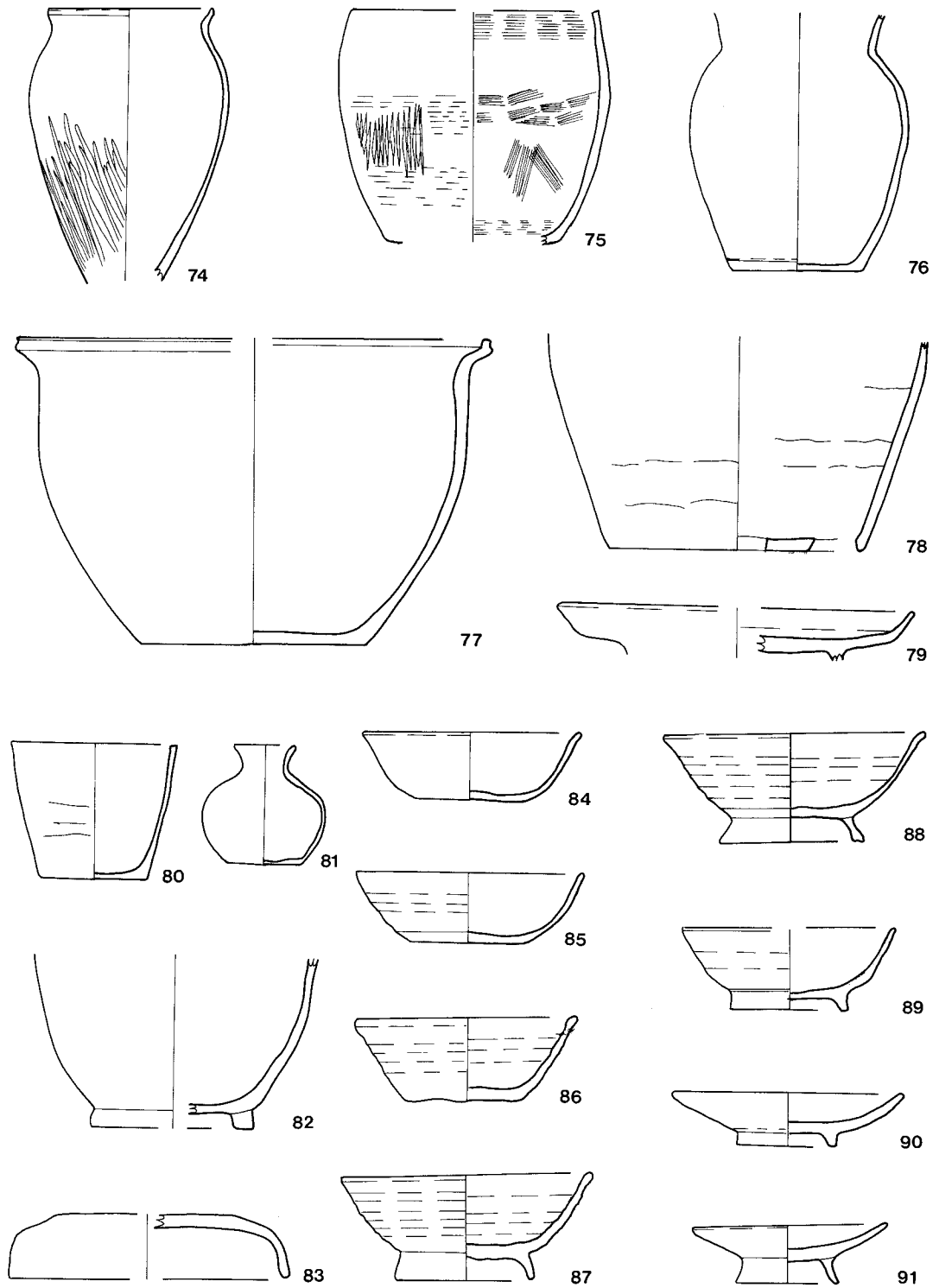


VIII 期



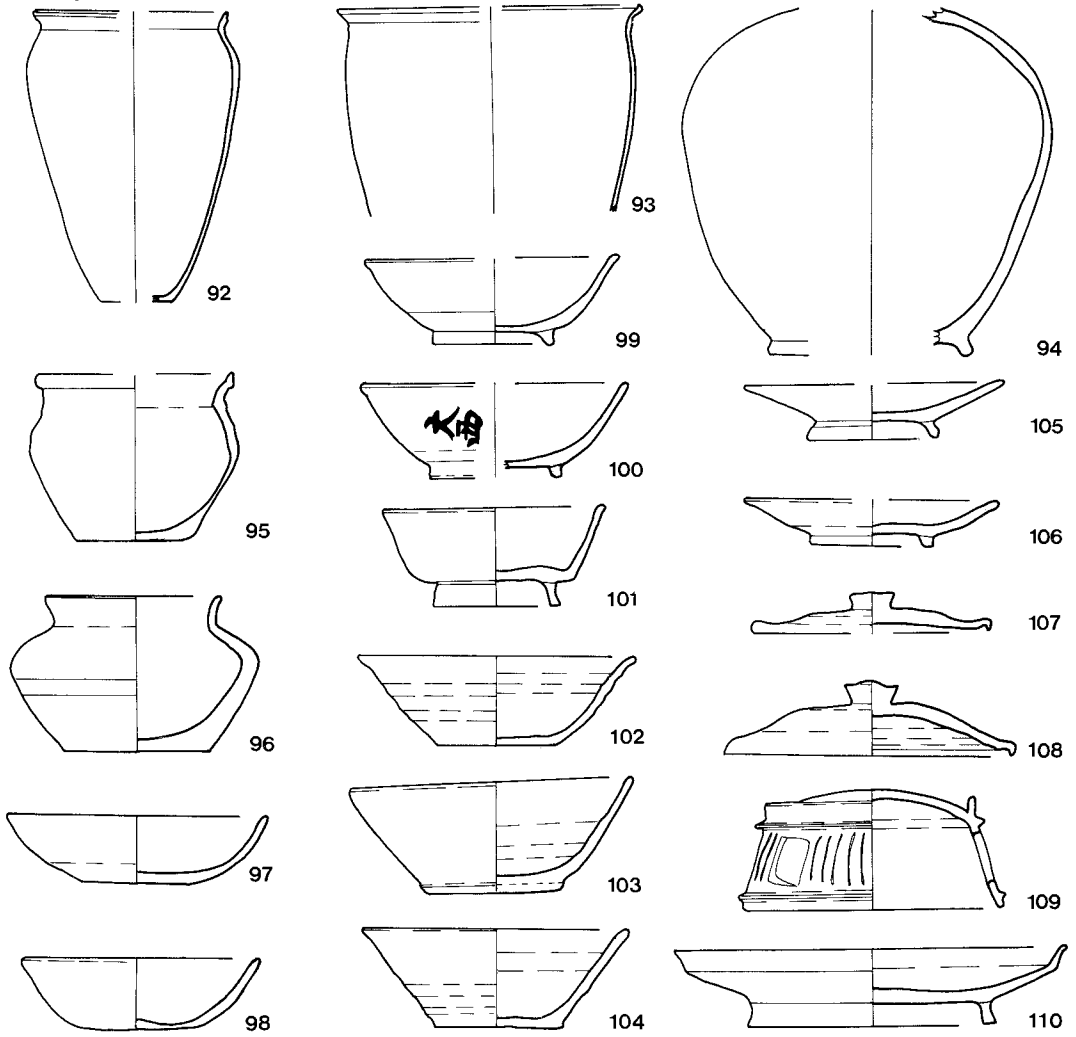
第377图 土器編年图 (4)

IX 期

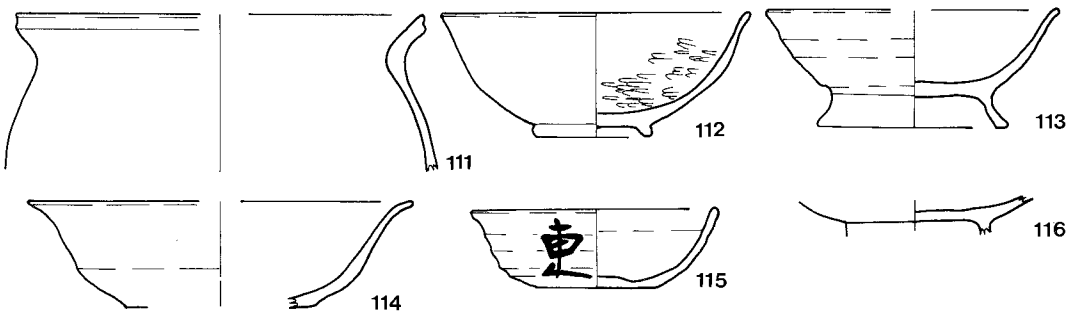


第378図 土器編年図 (5)

X 期



XI 期



第379図 土器編年図 (6)

## (2) 墨書土器について

奥谷遺跡から出土した墨書土器は154点である。このうち文字の明瞭なもの、および判読可能なものは39点で、他は小片で墨書の一部しか残っていなかったり、墨痕がきわめて薄いために判読できないものである。

判読できる墨書土器は、土師器36点、須恵器3点で、土師器がほとんどを占める。

土師器は、坏形土器が23点、高台付皿形土器が10点、高台付坏形土器が3点である。また、土師器のうち、いわゆる内黒土器が各器種にみられる。

須恵器は、坏3点で体部外面に墨書されているものだけである。

墨書される部位は、坏類では体部が一番多く29点、次いで底部5点である。また、体部と底部の両面にも書かれているもの3点がある。その他、高台付皿の体部に書かれているもの10点、体部と底部の両面に書かれているもの1点である。体部の墨書は、縦書きと横書きに書かれたものがある。さらに墨書きされた文字のなかで「西」という文字が最も多く18点、次いで「存」という文字4点、「大西」という文字3点、「東」という文字2点で、その他の文字は各1点である。

墨書土器の出土遺構は、すべて、平安時代の竪穴住居跡で、82軒中29軒から出土している。個々の住居跡おける出土数はX期の第46号住居跡の6点が一番多く、次いで、同じX期の第12・78号住居跡の4点である。平安時代の住居跡を時期別に分けてみると29軒中23軒がX期、次いで4軒がIX期、VIII期とXI期の住居跡が各々1軒である。VIII期の第8号住居跡から出土している土師器の坏形土器に書かれている文字は解読不明である。

墨書土器に伴う出土遺物として、第15号住居跡から須恵器の円面硯が出土しているが、当住居跡からの墨書土器は、解読できない土師器の坏形土器片1点が出土したにすぎない。

墨書土器について、志田諄一氏に御指導をいただいたので、以下、志田氏の指導を参考にしながら記述したい。

### ● 文字から考えられる種類

1. 人名を意味するもの 「隆」・「寛」・「真」
2. 方角を表わすもの 「田東」・「東」・「田」
3. 寺院を表わすもの 「西寺」・「大西」・「西」
4. 地名を表わすと思われるもの 「子中」・「子都」・「子児」
5. 習書文字と思われるもの 「存」

### ● 文字の性格

「隆」・「寛」・「真」は、人名を意味するもので、自分の名前を書き入れることによって、他人に使用されないようにするものと考えられる。

「田東」・「東」・「田」は方角を表わすもので、「田東」は田んぼの東の方向を指しているものと

思われる。

「西寺」・「大寺」・「西」は寺院を表わすもので、もとの文字は「西大寺」であって、その文字を一部略して書いたのではないかと思われる。そのため、「西」という文字のように方角をあらわすかのように略されて書かれているものもでてくる。当遺跡付近には、該当する寺院は、現在のところ確認はされていない。

「子中」・「子都」・「子児」は地名を表わすと思われるが、該当する地名を調べてみても、現在のところ、確認することができなかった。

「存」は手習として書かれた文字であると思われる。文字を上手に書き、多くの書物を読み、文字を覚えることは、律令官人としての大切な心得えであったことが想像される。

その他、意味不明のものが存在しているが、墨書土器は、出土した遺跡の性格を考える上で、欠かすことのできないものであるが、その判読あるいは文字の意味を考えることは、一字あるいは二字であるだけに困難なことである。今後、資料の増加を待って再検討していきたいと考えている。

表6 墨書土器一覧表

No.	住居跡番号	積文	器種	器質	墨書位置	時期
1	12	口	坏形土器	土師器	体部	X
2	12	大	坏形土器	土師器	体部	X
3	12	西	坏形土器	土師器	体部・底部	X
4	12	口	坏形土器	土師器	体部	X
5	15	口	坏形土器	土師器	体部・底部	X
6	18	口口	坏形土器	土師器	体部	VIII
7	19	田東	高台付皿形土器	土師器	体部	X
8	21	西	坏形土器	土師器	体部	X
9	21	西	坏形土器	土師器	体部	X
10	24	西	坏形土器	土師器	体部	X
11	26	西・口	坏形土器	土師器	体部・底部	X
12	28	西寺	高台付坏形土器	土師器	底部	X
13	29	田	坏形土器	土師器	体部	X
14	29	隆	坏	須恵器	体部	X
15	29	寛	坏形土器	土師器	底部	X
16	29	真	高台付皿形土器	土師器	体部	X
17	29	大人	坏	須恵器	体部	X

No.	住居跡番号	积文	器種	器質	墨書位置	時期
18	31	西	高台付皿形土器	土師器	体部	IX
19	40	西	坏形土器	土師器	底部	X
20	41	西	高台付皿形土器	土師器	体部	X
21	43	西	坏形土器	土師器	体部	X
22	46	大西	高台付坏形土器	土師器	体部	X
23	46	大西	坏形土器	土師器	体部	X
24	46	西	高台付皿形土器	土師器	体部	X
25	46	存	高台付皿形土器	土師器	体部	X
26	46	西	坏形土器	土師器	体部	X
27	46	西	坏形土器	土師器	体部	X
28	52	東	坏形土器	土師器	体部	XI
29	52	存	高台付皿形土器	土師器	体部	XI
30	56	口・口	高台付皿形土器	土師器	体部・底部	X
31	72	西	坏	須恵器	底部	X
32	78	西	高台付坏形土器	土師器	体部	X
33	78	東	坏形土器	土師器	体部	X
34	79	子都	坏形土器	土師器	体部	X
35	79	西	坏形土器	土師器	体部	X
36	79	口	坏形土器	土師器	体部	X
37	80	子兒	高台付皿形土器	土師器	体部	X
38	107	西	坏形土器	土師器	底部	X
39	113	西	高台付皿形土器	土師器	体部	IX
40	117	口	坏形土器	土師器	体部	IX
41	118	口	坏形土器	土師器	体部	IX
42	121	口	坏形土器	土師器	体部	X
43	125	西	高台付皿形土器	土師器	体部	X
44	131	存	坏形土器	土師器	体部	X
45	133	西	坏形土器	土師器	体部	X
46	133	大西	坏形土器	土師器	体部	X
47	138	存	坏形土器	土師器	体部	X
48	138	子中	坏形土器	土師器	体部	X



## 5 中世について

### (1) 堀について

第1号堀は、調査区の南側G2・G3・H2・I2・J2区にかけて検出された。

堀は、G2g9区からほぼ直角に屈曲し、東へ27.5mほど延びて、調査区域外へ続いている。また、J2h6区でほぼ直角に屈曲し、東へ1mほど延びて、調査区域外へ続いている。検出された堀の長さは約141.5m、上幅2.0～5.5m、下幅1.0～2.2m、確認面から底面までの深さは1.4～1.5mの箱薬研堀で、掘り込みは粘土層に達している。H2c8区から急に堀幅が狭くなり、深さも浅い。上幅3.5～4.0m、下幅1.0m、確認面から底面までの深さは1.0mとなり、南へ進むほどさらに狭くなる。ところで、H2c8区から規模が狭くなるがどうしてだろうかという問題点が起きてくる。土層は自然堆積しているので、手懸りとなるものはみいだせないが、掘り方から推測すると、堀の改修が行われたのではないかと思われる。つまり、当初は、H2c8区の規模で構築して、その後、H2c8区の北側は、改修を行って堀の規模を拡張したのではないかと思われる。何故一部だけ拡張されなかったのかという事については、拡張途中における政治情勢の変化や機能上の理由等が考えられるが、定かではない。

次に、地割りと堀の関連について述べてみたい。地割りと城郭遺構とが密接な関連をもつことは良く指摘されることであるが、当遺跡の堀についても例外ではない。検出された堀跡を、調査以前の地籍図と当遺跡の遺構配置図を重ね合わせると、第380図のようになる。堀が使用されなくなった後のある時期に、地域は山林や耕地として転用され、堀は埋まりながらもかなり後世に至るまでその名残りを留めていたものと思われる。その結果、堀のあった部分は耕地の境界として名残りを留めている。当地域に存在する農道についても不自然に屈曲している様子が見られ、半ば埋まった堀跡に沿って走っていることから、堀に沿って歩くという行為が繰り返され、長い年月の間に屈曲した農道ができ、それが今日に至ったものと判断される。

I2e6区の堀の覆土下層から陶器の壺2点、J2a5区の中層から土師質土器の皿が出土している。また、調査区のG2区とG3区の覆土中層から下層にかけて、人骨と馬骨が出土している。

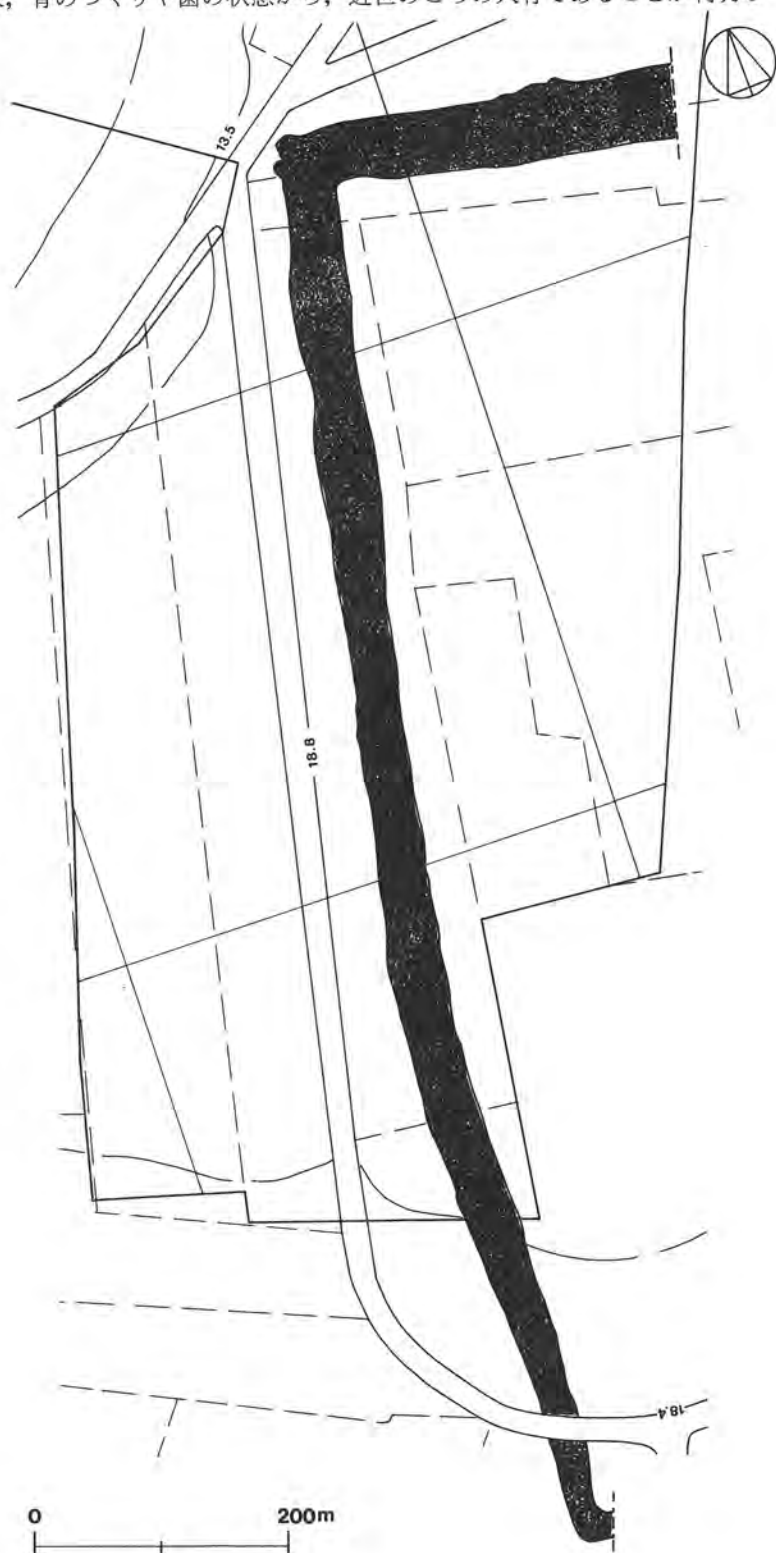
壺は、堀の覆土下層からほぼ正位の状態で出土しており、出土状況から推測すると、堀が埋没したあと、壺が埋められたものと思われる。また、鑑定の結果、室町時代の常滑産のものであることが判明した。さらに、覆土中層から出土している土師質土器の皿は、中世のものである。以上のことから判断すると、壺は、堀が使用されていた時期よりもやや新しい時期のものであると思われる。

人骨は、土層断面から堀が埋没したあと、人為的に掘られて埋葬されたと思われる痕跡を確認

した。また、鑑定した結果、骨のつくりや歯の状態から、近世のころの人骨であることが判明したので、少なくとも堀が埋没した近世のころに、この地域が墓域として利用されたことと思われる。なお、人骨の近くから馬骨も出土しているが、人骨との関連性については不明である。

以上のことから、堀、壺、人骨についての相関関係は直接的には関係ないと考えられる。

遺構全体の半分以上が調査エリア外のため、全体を把握することはできなかったし、この堀跡が城館跡に伴うものであるかどうかについても、出土遺物も少なく、文献資料も確認されず、今回の調査では明確にすることはできなかった。



第380図  
地割と第1号堀遺構

## (2) 地下式坑について

当遺跡から検出された地下式坑は42基である。いずれも調査区の中央部や北西部に集中して位置している。これら42基のうち、8基については、道路下や調査エリア外に竪坑あるいは主室が延びているため調査ができなかったため、規模・形状等の一部が不明である。第5・18・23・31号地下式坑だけに天井部が残っており、他は天井部が崩落している。以下、8基のうち、竪坑のみ調査したものについては、竪坑の統計に加え、主室のみ調査したものについては、主室の統計に加えて述べることにする。

竪坑の深さは、確認面から0.6~1.0mの深さまで掘り込まれているものが7基、次いで1.1~1.5mのものが12基、1.6~2.0mのものが8基、2.1~2.5mのものが3基、2.6~3.0mのものが5基ある。これらのうち、最も一般的なものは、1.1~1.5mのもので12基、最も浅いものは、0.6~1.0mのもので7基、最も深いものは、2.6~3.0mのものが5基である。

竪坑の底面積は、0~0.3m<sup>2</sup>のものが6基、0.4~0.6m<sup>2</sup>のものが12基、0.7~0.9m<sup>2</sup>のものが10基、1.0~2.0m<sup>2</sup>のものが4基、3.0~3.5m<sup>2</sup>のものが2基である。そのうち、最も一般的な面積の0.4~0.9m<sup>2</sup>のものが22基、最も狭い面積は、0.3m<sup>2</sup>以下のものが6基、逆に、最も広い面積は、3.0m<sup>2</sup>以上のものが2基である。

竪坑の平面形は、長方形を呈しているものが16基で、最も多く、次いで、正方形を呈しているものが15基、円形、楕円形、不整長方形を呈しているものが各々1基ずつである。

主軸方向は、N-2°~5°-W~N-9°-Eのものが3基、N-17°~20°-Wのものが2基、N-13°~20°-Eのものが8基、N-22°~30°-Eのものが8基、N-34°~40°-Wのものが3基、N-32°~40°-Eのものが4基、N-44°~47°-Wのものが2基、N-44°-Eのものが1基、N-54°~60°-Wのものが3基、N-52°-Eのものが1基、N-71°~80°-Wのものが3基、N-75°-Eのものが1基、N-86°・87°-Eのものが3基である。各方向に散らばっているが、なかでもN-13°~20°-Eの範囲におさまるものと、N-22°~30°-Eの範囲におさまるものが共に8基あり、最も多い。また、N-86°・87°-Eの範囲におさまっている第4・11・39号地下式坑のように、ほぼ東を向いているものも見られる。

主室の平面形は、長方形を呈しているものが31基、不整長方形を呈しているものが4基、円形を呈しているものが1基で、長方形を呈しているものが大半である。

主室の底面積は、1~2m<sup>2</sup>のものが8基、3~4m<sup>2</sup>のものが16基、5~6m<sup>2</sup>のものが5基、7~8m<sup>2</sup>のものが6基、9~10m<sup>2</sup>のものが2基、18~19m<sup>2</sup>のものが1基である。そのうち、最も一般的な面積は、3~4m<sup>2</sup>のものが16基、最も狭い面積は、1~2m<sup>2</sup>のものが8基、最も広い面積は、18.09m<sup>2</sup>の第41号地下式坑である。

壁坑の壁は、65~70度の角度で立ち上がっているものが3基、75~85度の角度で立ち上がって

いるものが30基で最も多く、86～90度の角度で立ち上がっているものが2基である。

主室の壁は、底面から0.3mの高さまで立ち上がっているものが1基、0.4～0.6mのものが1基、0.7～0.9mのものが6基、1.0～1.2mのものが15基、1.3～1.6mのものが9基、1.7～1.9mのものが2基、2.0～2.4mのものが5基である。これらのうち、最も多くを占めているものは、1.0～1.2mまで立ち上がっている15基である。最も低いものは、第18号地下式坑で、底面から0.3mの高さまでしか立ち上がっていない。また、逆に、最も高いものとしては、第11・13・38・40・41号地下式坑で、底面から2.0～2.4mの高さまで立ち上がっている。これらはいずれもオーバーハングして立ち上がっており、主室の横断面はプラスチック状を呈している。

竪坑底面と主室底面との間に段差のあるものは、第2・5・12・15・16・17・26・30・33・39・42号地下式坑の11基で、そのうち10基は、竪坑の底面からさらに0.1～0.5mほど掘り込まれて主室の底面が構築されており、底面はほぼ平坦である。第30号地下式坑では、竪坑の底面から0.95mほど掘り込んで主室の底面を構築している。この他、竪坑から主室にかけてなだらかに傾斜しているものとして、第13・17・22・23・24・38号地下式坑の6基があげられる。さらに、第30号地下式坑の主室の北西コーナー部と第31号地下式坑の南東コーナー部とがトンネルでつながっている。トンネルは底面から1.2mの高さまで掘り込まれており、壁や底面はロームである。第31号地下式坑では、竪坑を検出できなかったことは、主室の底面積から判断すると、第30号地下式坑の副室になっていたものと思われる。

覆土はいずれも自然堆積で、ローム粒子・ロームブロックを含む褐色土・暗褐色土、あるいは砂質粘土が主に堆積している。第5・18・23・31号地下式坑を除いて、天井部が崩落して下層に堆積しており、その上に周囲から流れ込んだ黒褐色土・暗褐色土・褐色土等が堆積している。

出土遺物は、22基の主室の覆土下層から土師質土器の皿、播鉢片、鉄滓、内耳形土器片、古銭等が出土している。また、第27・42号地下式坑の主室奥壁（北東）下から僅かに人骨が出土している。

以上のことから、地下式坑の時期及び用途について考えると、土師質土器の皿や内耳形土器片を出土している9基については中世以降と思われる。古銭を出土している第34号地下式坑の場合も、中世以降と思われる。また、用途については、当遺跡の地下式坑のうち、第27・42号地下式坑からは人骨が出土し、第34号地下式坑からは古銭が出土している。これら3基については、墓壙として位置づけることが適当と思われる。他の39基の地下式坑については、3基の規模や形態と類似しているものの、墓壙としての確かな資料を得ることはできなかったので、類推の域ではあるが、3基の地下式坑と同様な性格のものではないかと思われる。

表7 地下式坑一覧表

番号	位置	主軸方向	主軸長(m)	竪坑の位置	竪坑の平面形	竪坑の長径(m) ×短径(m)	主室の平面形	主室の長径(m) ×短径(m)	天井部の 状況	主室からの 出土遺物
第1号	B5d1	N-17°-W	2.4	南側	長方形	2.0×0.9	長方形	2.9×1.45	崩落	
2	C3j9	N-34°-E	2.1	南側	正方形	0.9×0.9	長方形	3.2×1.4	崩落	
3	D3b4	N-54°-W	2.2	南東側	長方形	1.2×0.7	長方形	2.1×0.9	崩落	
4	D2e6	N-87°-E	3.7	西側	長方形	1.2×0.7	不整楕円形	3.0×2.5	崩落	
5	D2e5	N-71°-W	1.7	西側	長方形	0.85×0.36	(長方形)	(0.9)	現存	
6	D3b9	N-75°-E	—	—	—	—	—	北壁の長さ 1.4	崩落	土師質土器2(皿)
7	C4f1	N-22°-E	2.2	南側	正方形	0.7×0.7	長方形	2.45×1.45	崩落	鉄滓(少量)
8	C4d1	N-30°-E	1.3	南西側	正方形	0.55×0.55	不整長方形	1.3×0.9	崩落	鉄滓(少量)
9	C4d1	N-30°-E	1.9	南西側	正方形	0.6×0.6	長方形	2.0×1.35	崩落	鉄滓(少量)
10	C4e2	N-14°-E	2.55	南側	長方形	0.8×0.55	長方形	2.3×1.6	崩落	鉄滓(少量)
11	D4a5	N-87°-E	—	中央部から 南寄り	円形	0.9	不整楕円形	3.4×2.8	崩落	
12	B3h4	N-30°-E	2.8	北東側	長方形	0.9×0.7	長方形	2.9×1.7	崩落	土師質土器1 (皿), 羽口1, 鉄 滓(少量)
13	B3h4	N-40°-E	2.8	南西側	正方形	0.8×0.8	不整長方形	3.3×1.4	崩落	鉄滓(少量)
14	B3j4	N-23°-E	—	—	—	—	長方形	2.7×2.0	崩落	土師質土器2 (皿)
15	B3i5	N-18°-E	—	北西側	長方形	3.5×1.0	長方形	2.0×1.3	崩落	
16	B3j7	N-20°-E	2.45	南西側	正方形	0.7×0.7	長方形	2.6×1.7	崩落	
17	C3b7	N-17°-E	2.35	北側	正方形	1.0×0.9	長方形	2.1×1.35	崩落	鉄滓(少量)
18	A4c0	N-20°-W	2.1	南東側	長方形	1.0×0.6	不整長方形	2.5×1.3	現存	
19	B3i6	N-32°-E	2.4	南西側	正方形	0.7×0.7	長方形	2.8×1.8	崩落	土師質土器1 (皿), 人骨, 鉄 滓(少量)
20	C3d0	N-22°-E	2.4	南西側	正方形	0.5×0.5	長方形	2.6×1.5	崩落	
21	B3g5	N-37°-E	2.45	北東側	正方形	0.8×0.8	長方形	3.0×1.6	崩落	
22	D2i9	N-80°-W	2.5	西側	正方形	1.0×1.0	長方形	2.75×1.7	崩落	
23	D3i2	N-60°-W	2.45	北西側	長方形	1.0×0.8	長方形	2.75×1.2	現存	鉄滓(少量)
24	D3h2	N-47°-W	2.5	北西側	正方形	0.9×0.9	長方形	2.65×1.6	崩落	
25	D2j7	N-15°-W	2.3	北側	長方形	0.9×0.7	長方形	3.05×1.4	崩落	
26	A3g8	N-35°-W	—	東側	—	—	—	—	崩落	
27	E3a4	N-60°-W	2.0	北西側	長方形	0.65×0.5	長方形	1.8×1.3	崩落	人骨
28	E3a1	N-52°-E	4.8	南西側	楕円形	2.1×1.6	不整長方形	3.6×3.0	崩落	鉄滓(少量)

番号	位置	主軸方向	主軸長(m)	竪坑の位置	竪坑の平面形	竪坑の長径(m) ×短径(m)	主室の平面形	主室の長径(m) ×短径(m)	天井部の 状況	主室からの 出土遺物
第29号	D3g3	N-13°E	—	—	—	—	長方形	4.6×1.7	崩落	土師質土器2(皿)
30	D3g5	N-28°E	—	北東側	長方形	1.1×0.9	長方形	5.1×1.7	崩落	鉄滓(少量)
31	D3g4	N-44°E	—	—	—	—	長方形	2.0×1.1	現存	
32	D4h5	N-15°E	2.75	東側	正方形	0.9×0.9	長方形	2.95×1.8	崩落	
33	D3g7	N-34°W	2.8	南東側	不整長方形	1.6×1.1	長方形	2.0×1.2	崩落	鉄滓(少量)
34	D3g6	N-2°W	2.15	北側	長方形	1.0×0.8	長方形	3.9×1.0	崩落	鉄滓(少量) 古銭
35	D3h6	N-9°E	2.0	北東側	—	—	長方形	5.1×1.5	崩落	
36	D3h6	N-24°E	2.1	北東側	長方形	1.1×0.9	長方形	5.6×1.3	崩落	土師質土器1(皿)
37	D3i8	N-44°W	2.5	北西側	正方形	0.8×0.8	長方形	3.7×1.6	崩落	内耳形土器片1
38	E3b4	N-40°W	2.7	北西側	長方形	0.7×0.6	長方形	3.5×2.0	崩落	
39	H2d6	N-86°E	3.4	東側	長方形	1.4×1.0	隅丸長方形	2.7×2.25	崩落	
40	D3f7	N-5°W	—	—	—	—	—	—	崩落	土師質土器1(皿)
41	D2j8	N-14°E	4.9	—	—	—	(円形)	(4.8)	崩落	内耳形土器片1 鉄滓(少量)
42	C3a0	N-73°W	1.6	西側	正方形	0.6×0.55	長方形	3.0×1.0	崩落	人骨

## 6 その他

### (1) 掘立柱建物跡について

当遺跡から検出された掘立柱建物跡は、21棟である。21棟の建物跡の規模をみると、5間×3間が2棟、3間×3間が1棟、3間×2間が5棟、3間×1間が5棟、2間×2間が2棟、2間×1間が5棟、不明が1棟である。最も大きい規模を有するのは第20号掘立柱建物跡で、面積は87㎡である。次に、第3号掘立柱建物跡で、48.06㎡である。最小の建物跡は第7号掘立柱建物跡で、9.12㎡であり、第20号掘立柱建物跡と比較すると、約9分の1以下である。他の16棟の建物跡は、10～30㎡代の数値を示し、特に10～20㎡の数値を示すものが11棟ある。全体の平均面積は約23.2㎡である。

次に長軸方向についてみると、東西棟の建物跡と南北棟の建物跡の2種に大別できる。東西棟のものは第2・4～7・9～13・19・21号掘立柱建物跡の12棟で、南北棟のものは第1・3・8・14～16・20号掘立柱建物跡の7棟である。

柱掘り方の規模や配置をみると、第2・4・7・9・17・21号掘立柱建物跡は柱穴が等間隔に並んでおり、掘り方は長径0.4～1.7mである。その他の掘立柱建物跡は、柱掘り方の並びがやや不規則で、掘り方は長径0.3～1.4mである。柱掘り方の規模と面積の比率は、第20号掘立柱建物跡のように長径1.3～1.4m・短径1.1～1.2mの楕円形を呈しているものと、第7号掘立柱建物跡のように長径0.7～1.0m・短径0.6～0.8mを呈しているものとを比較してもわかるように面積が大きければ大きいほど、柱掘り方の規模も大きくなるという傾向がみられる。

柱痕跡は、第1・2・4・16・18号掘立柱建物跡で検出されたが、他は確認できなかった。柱痕跡の直径は建物の規模にもよるが、およそ15～30cm程である。深さは20～90cmと幅が認められる。平均すると、40～50cm程の深さである。第4・16号掘立柱建物跡のように、柱を据えたと思われる浅いくぼみが底面にみられるものもある。その他、各柱痕跡を線で結んでみると、ほとんど一直線上にのってくるが、第18号掘立柱建物跡にみられるように、柱掘り方の隅の方に片寄って検出されたものもある。掘立柱建物跡の分布をみると、当遺跡を横切る県道より北側部に13棟あり、残り8棟が県道より南側部に位置している。

各建物の配置をみると、第8号掘立柱建物跡と第9号掘立柱建物跡が直交する状態で重複している。また、第11・12・13号掘立柱建物跡3棟と、第5・10号掘立柱建物跡2棟や第14・21号掘立柱建物跡2棟が相互に重複している。いずれも、時期が異なるものと思われるが、新旧関係は不明である。さらに、第1・2号掘立柱建物跡は柱掘り方の重複はないが、極めて接近して検出されている。

ところで、掘立柱建物跡の時期や性格についてであるが、時期については、第1・2・3・4・6号掘立柱建物跡が、古墳時代の溝や平安時代の住居跡を切って掘り込まれていることから判断すると、すべてではないが、これらの掘立柱建物跡は中世以降と推定される。また、性格については、裏付ける出土遺物や資料もないため全くつかめなかった。

いずれにしても建物の重複関係から、21棟全てが同時に建てられていなかったことは明らかであり、建物の配置等から2期以上に分類できると思われる。

表8 掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	長軸方位	柱間	規模(m)	面積(m <sup>2</sup> )	隅柱穴平面形	柱間間隔
1	C4g <sub>8</sub>	南北	3×2	5.1×3.9	19.89	不整楕円形	不規則
2	C4h <sub>8</sub>	東西	2×2	3.9×3.3	12.87	不整楕円形	等間隔
3	B5a <sub>1</sub>	南北	5×3	8.9×5.4	48.06	楕円形	不規則
4	C4g <sub>4</sub>	東西	3×2	4.0×3.68	14.72	円形	等間隔
5	B4e <sub>4</sub>	東西	2×1	6.7×2.7	18.09	楕円形	不規則
6	C4b <sub>3</sub>	東西	3×3	5.4×4.8	25.92	円形	不規則
7	D3h <sub>2</sub>	東西	3×1	5.7×1.6	9.12	不整楕円形	等間隔
8	B4f <sub>9</sub>	南北	3×1	6.0×1.9	11.4	楕円形	不規則
9	B4f <sub>8</sub>	東西	3×1	6.3×2.5	15.75	楕円形	等間隔
10	B4e <sub>4</sub>	東西	2×1	6.7×2.4	16.08	円形	不規則
11	B4h <sub>3</sub>	東西	3×1	6.6×3.7	24.42	楕円形	不規則
12	A4i <sub>3</sub>	東西	2×1	4.9×4.4	21.56	楕円形	不規則
13	A4i <sub>4</sub>	東西	3×1	4.2×4.0	16.8	楕円形	不規則
14	H3f <sub>2</sub>	南北	1×2	4.0×3.7	14.8	楕円形	不規則
15	D2k <sub>0</sub>	不明	(3×2)	6.0×4.0	24.0	楕円形	不規則
16	E4f <sub>3</sub>	南北	3×2	6.3×5.1	32.13	楕円形	不規則
17	D2i <sub>7</sub>	不明	(2×1)	3.9×3.1	12.09	楕円形	等間隔
18	J2j <sub>5</sub>	不明	不明	3.0	—	楕円形	等間隔
19	G3i <sub>3</sub>	東西	3×2	6.0×3.7	22.2	楕円形	不規則
20	H2d <sub>9</sub>	南北	5×3	14.5×6.0	87.0	楕円形	不規則
21	H3f <sub>2</sub>	東西	2×2	4.3×4.1	17.63	楕円形	等間隔



## (2) 柵列と道路について

柵列は、調査区の A4h<sub>2</sub>区から A4h<sub>5</sub>区にかけてと、D3f<sub>9</sub>区から D4e<sub>4</sub>区にかけての地区から各々1条検出された。

A4h<sub>2</sub>区から A4h<sub>5</sub>区にかけて検出された第1号柵列跡は、柱穴8か所で、全長15.3mである。方向はN-73°-Eである。本跡の南側で第13号掘立柱建物跡と隣接し、桁行方向とほぼ平行である。連続して検出された柱穴間の距離は2.0~2.5mで、ほぼ等間隔である。第1号柵列跡と第13号掘立柱建物跡との関係については明確にできなかったが、第13号掘立柱建物跡の桁行方向とほぼ平行していることから推定すると、第13号掘立柱建物跡のために構築されたことが考えられる。

D3f<sub>9</sub>区から D4e<sub>4</sub>区にかけて検出された第2号柵列跡は、柱穴が19か所検出され、そのうち、東側から第17・18番目を除いた柱穴が柵列で、全長約23mである。方向はN-80°-Eである。連続して検出された柱穴間の距離は2.0~2.3mで、ほぼ等間隔である。また、東側から第17と18番目の柱穴は長径1.0~1.4m・短径0.6~1.2mの不整長方形で、深さも0.6~1.0mを呈する掘り方で、柱穴間隔も約3.5m、他の柵列の柱穴の規模・間隔と比較して、大きく、広く、南側で第2号道路状遺構と直交していることから門柱と思われる。また、本跡のすぐ南側に第10号溝が平行しており、また、すぐ西側で第11号溝と隣接していることから推定すると、本跡の性格は敵を防ぐ機能というよりも、垣根あるいは土地の境界としての性格が強いのではないかと思われる。

さらに、A3g<sub>8</sub>区から A3i<sub>8</sub>区にかけて検出された第1号道路跡は、時期不明の第97号住居跡や第336号土坑、中世以降の第38号地下式坑と重複し、土層断面からいずれの遺構も切っていることから判断して、比較的新しい遺構と思われる。出土遺物もないため、他の遺構との関連はつかめなかった。

## 第6章 小鶴遺跡

### 第1節 遺跡の概要

当遺跡は、茨城県東茨城郡茨城町小鶴字行人台1,900ほかに所在し、面積は64㎡で、茨城町役場の北方約1.2kmの地点にあり、北側を東流する酒沼前川と南側を東流する酒沼川に挟まれた標高20mの台地の南端部に位置している。調査の結果、堅穴住居跡1軒、溝1条を検出した。その内訳は、次のとおりである。

堅穴住居跡は弥生式時代後期に比定される。

溝は時期不明である。

これらの遺構の覆土中や包含層から出土している遺物は、土器類、石器の剥片等があり、遺物収納コンテナ（60×40×20cm）に1箱ほど出土している。土器類は、弥生式土器の甕形土器片である。石器の剥片は製作時の剥片が少量出土している。

遺構・遺物については、次節以降にゆずるが、当遺跡から弥生時代後期の住居跡が検出されたことで、弥生時代後期に集落が営まれた遺跡であることが推察される。

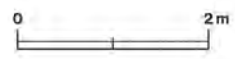
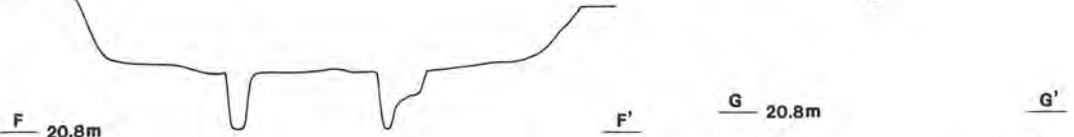
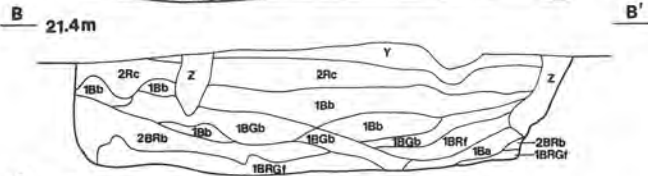
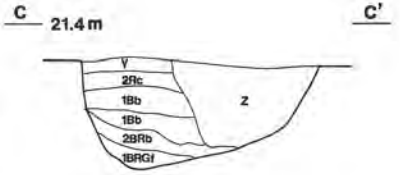
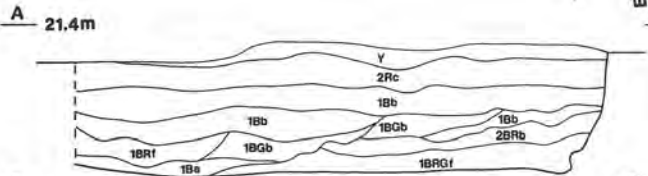
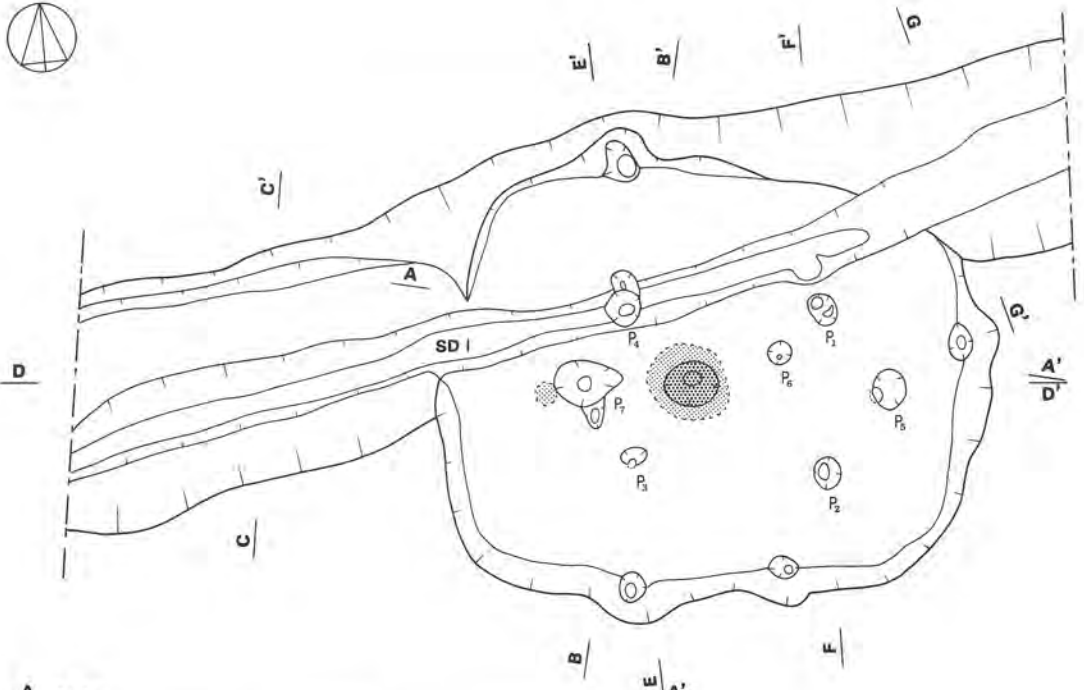
### 第2節 遺構と遺物

#### 第1号住居跡（第381図）

本跡は、調査エリアの中心に位置し、北側で第1号溝と重複している。土層断面から第1号溝に切られていることから、本跡の方が古い。

平面形は長径5.5m・短径4.6mの小判形を呈し、長径方向はN-20°-Eである。壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高は0.5mである。床は全体に平坦で、硬く、よく締まっている。ピットはP<sub>1</sub>～P<sub>7</sub>の7か所検出され、P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>は径20～30cm・深さ60～65cmと同規模であり、ほぼ方形に配置されており、支柱穴と思われる。P<sub>5</sub>は径20cm・深さ60cmで、配置から補助柱穴と思われる。P<sub>7</sub>は長径70cm・短径50cmの楕円形を呈し、深さは30cmである。配置や規模から出入口施設に関連するピットと思われる。P<sub>6</sub>は径25cm・深さ35cmで、炉跡のすぐわきに掘り込まれているが、性格は不明である。P<sub>6</sub>のすぐ西側に炉跡が検出され、平面形は長径58cm・短径48cmの楕円形を呈している。炉床は床を10cmほど皿状に掘り凹めており、内部には焼土が堆積し、焼土小ブロックが多量に含まれている。

覆土は自然堆積の状態を示し、上層はローム粒子を含む暗褐色土、下層は多量のローム粒子、



第381图 第1号住居跡・第1号溝実測図

少量の焼土粒子・木炭粒子を含む黒褐色土で、軟らかい。

遺物は少ないが、P<sub>7</sub>の西側床面直上から弥生式土器の甕（第382図1）や鉢（第382図2）が出土している。

出土遺物や住居跡の形態から時期を判断すると、弥生時代後期前半（長岡式）に比定されると思われる。

第382図5～10は、第1号住居跡から出土した弥生式土器片の拓影図である。5～8は口縁部片と頸部片である。5は折返しによる二重口縁で、付加条の縄文を口縁部に施し、口縁下端部に棒状工具による刺突を加えている。6は口縁部に付加条の縄文を施している。7は口唇部に棒状工具による刺突が見られ、口頸部には付加条の縄文が施されている。8は頸部片で、縦位の櫛描直線文によって区画され、区画内には同じ工具による櫛描波状文が横位に施されている。9・10は胴部片で、斜縄文が施されている。

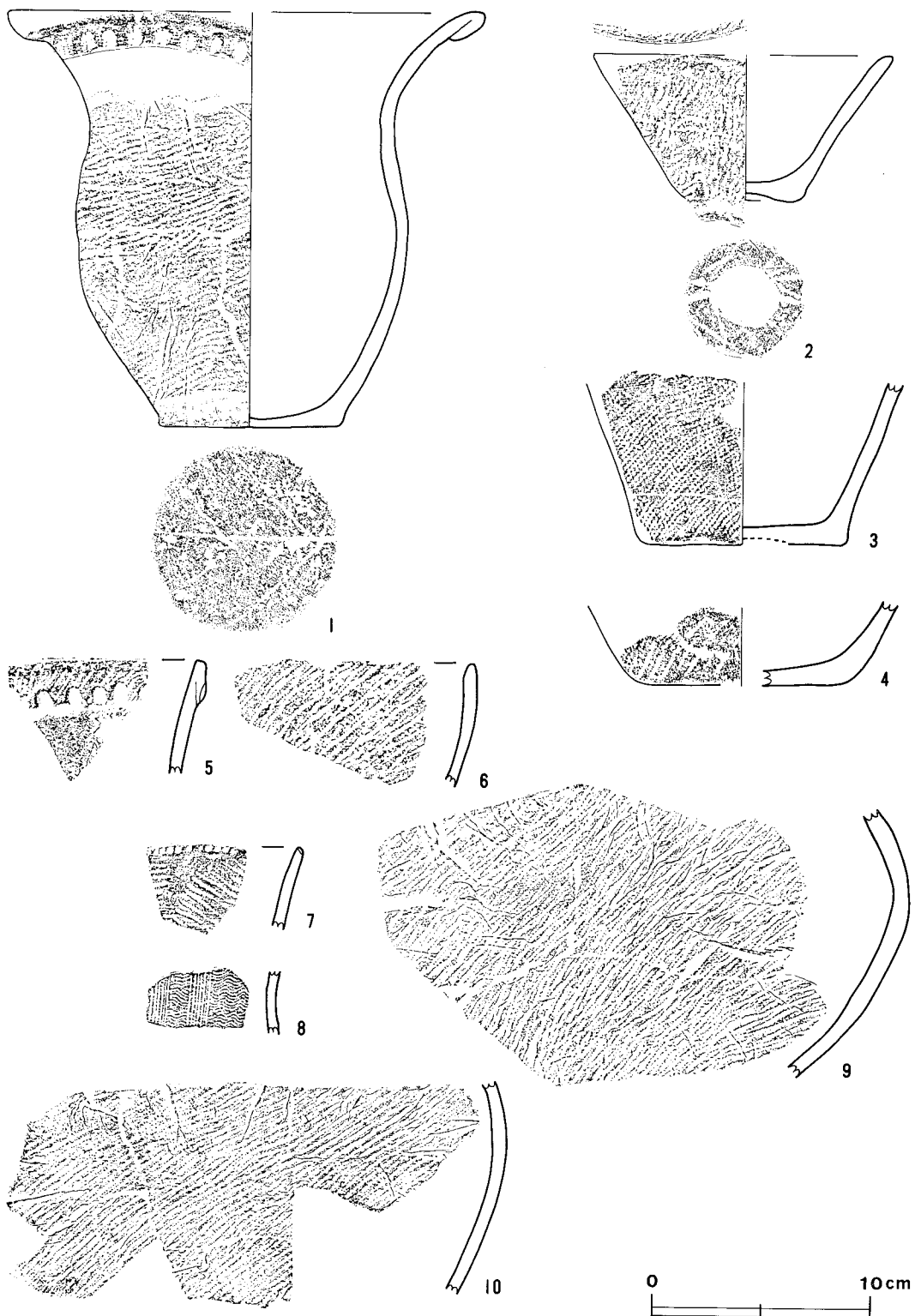
#### 第1号溝（第381図）

本跡は第1号住居跡の北側で重複し、東西方向へ直線的に延びて、両端は調査区域外へ続いている。土層断面から本跡が第1号住居跡を切っているため、本跡の方が新しい。

検出された長さは約11mで、上幅2.3m・下幅0.8mで、確認面から底面までの深さは0.6mである。断面は菓研状を呈している。

覆土は自然堆積の状態を呈し、黒褐色土が主で、上層に多量のローム粒子、下層には多量のローム粒子・ローム小ブロック、少量の炭化粒子を含み、軟らかい。

遺物は流れ込んだと思われる石器の剥片が少量出土しているが、その他、本跡に伴う遺物が出土していないため、時期や性格などについては不明である。



第382图 第1号住居跡出土遺物実測図・拓影図

第1号住居跡出土土器観察表

図版 番号	器 種	法量(cm)	器 形 の 特 徴	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第382図 1	甕 弥生式土器	A (21.8) B 19.0 C 8.3	底部は平底で、木葉痕が見られる。胴部は緩やかに内彎しながら外上方へ立ち上がり、中位よりも上に最大径をもつ。胴部には、付加条の斜縄文が施されている。口縁部は外反しながら朝顔状に大きく開いて立ち上がる。口縁部は折返しによる二重口縁で、口縁下端には棒状工具による押圧が加えられている。頸部は無文である。	口縁部内面・頸部外面横ナデ。その他内面ナデ。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	P 1  90%
2	鉢 弥生式土器	A (13.7) B 6.7 C 5.4	底部は平底で、木葉痕が見られる。胴部は直線的に斜上方に開いて立ち上がり、そのまま口縁部に至る。胴部には反然りの縄文、口唇部には刻み目が施されている。	内面ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P 2  40%
3	壺 弥生式土器	B (7.4) C (9.7)	底部は平底で、胴下半部は外傾して立ち上がり、付加条の回転圧痕文が施されている。	内面ナデ。	砂粒・長石・石英 雲母 浅黄橙色 普通	P 3  10%
4	壺 弥生式土器	B (3.6) C (9.2)	底部は平底で、胴下半部は外傾して立ち上がり、付加条の縄文が施されている。	内面ナデ。	砂粒・石英・長石 雲母 浅黄橙色 普通	P 4  5%

### 第3節 ま と め

当遺跡は、弥生時代の集落跡として発掘調査を実施したが、調査の結果、検出した遺構は、堅穴住居跡1軒、溝1条のみである。遺物も極わずかな弥生式土器片と石器の剥片が出土しているだけである。

検出された住居跡は、弥生時代後期前半に比定されるもので、平面形は楕円形を呈し、長軸方向がN-20°-Eである。主柱穴は4本で、ほぼ方形に配置されている。炉跡は床面中央から西寄りに位置している。

以上のことから、住居跡の形態としては、弥生時代後期の典型的な小判形住居である。

出土土器は、弥生時代の後期（長岡式）に比定される甕で、器面には付加条の縄文が施されている。また、当遺跡の位置する台地の北側の涸沼前川を望む台地端に立地する大戸大宮寺遺跡からも長岡式土器片の散布がみられることなどから、当遺跡付近に集落が存在することを窺わせ、当遺跡はその一部分と思われる。

なお、第1号溝は、第1号住居跡の北側を切って東西方向へ延びているが、溝からの出土遺物もなく、時期や性格などについては不明である。

### 主な参考文献（順不同）

- (1) 茨城県教育財団「木葉下遺跡Ⅰ」『茨城県教育財団文化財調査報告第21集』昭和57年
- (2) 茨城県教育財団「木葉下遺跡Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告第26集』昭和58年
- (3) 茨城県教育財団「鹿の子C遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告第20集』昭和58年
- (4) 茨城県教育財団「総和地区」『茨城県教育財団文化財調査報告第38集』昭和61年
- (5) 茨城県教育財団「南三島遺跡5区」『茨城県教育財団文化財調査報告第32集』昭和61年
- (6) 茨城県教育財団「屋代B遺跡Ⅱ」『茨城県教育財団文化財調査報告第40集』昭和62年
- (7) 茨城県教育財団「五斗落遺跡他5」『茨城県教育財団文化財調査報告第43集』昭和62年
- (8) 茨城県教育財団「屋代B遺跡Ⅲ」『茨城県教育財団文化財調査報告第45集』昭和63年
- (9) 神奈川県立埋蔵文化財センター「田名稻荷山遺跡」『神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告12』1986
- (10) 川又清明「茨城町宝塚古墳・大戸大宮寺遺跡・大戸上の前遺跡採集縄文式・弥生式土器」『婆良岐考古第8号』1986
- (11) 雄山閣「古墳時代の社会と変革」『季刊考古学第16号』1986
- (12) 橋本博文「古墳時代における首長層居宅」『考古学ジャーナルNo.289』1988
- (13) 栃木県文化振興事業団「登内遺跡」（現地説明会資料）1988
- (14) 山武考古学研究所『宗吾西鷺山遺跡』（千葉県成田市）1986
- (15) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「鳥羽遺跡」『関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第21集』
- (16) 坂詰秀一・森郁夫「日本歴史考古学を学ぶ（上・中・下）」有斐閣 1986
- (17) 玉口時雄・小針井靖「土師器・須恵器の知識」東京美術 1984
- (18) 岩崎卓也「古墳時代の知識」東京美術 1984
- (19) 巽淳一郎「陶磁—原始・古代編」『日本の美術』至文堂 1984
- (20) 千葉県文化財センター「古代の東国のカマド」『千葉県文化財センター研究紀要7』1981
- (21) 茨城県立歴史館「茨城県関係古代金石文資料集成—墨書・窠書—」『学術調査報告書7』1985
- (22) ジャパンタイムス社「月刊文化財発掘出土情報」1983・6, 1983・8, 1987・7, 1987・8, 1987・9, 1988・3, 1988・4, 1988・7
- (23) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「古代東国の王者—三ツ寺居館とその時代—」昭和63年
- (24) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「三ツ寺Ⅰ遺跡」『上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第8集』1988

## 終章 むすび

一般国道6号線「茨城町バイパス」建設用地内における奥谷遺跡・小鶴遺跡の発掘調査は、昭和61年度から当教育財団によって実施され、昭和62・63年度の2ケ年で整理業務を行い、全て終了の運びとなった。本書は、その調査結果をまとめたものである。

奥谷遺跡からは、住居跡・土坑・掘立柱建物跡・溝・堀・道路跡・柵列跡・井戸・集石などの遺構と、土師器・須恵器を主に、縄文式土器、弥生式土器、灰釉陶器、土師質土器、陶器、土製品、石製品、金属製品、人骨等の遺物が多数検出され、縄文時代前期から中世にかけて長期間にわたり、連続的あるいは断続的に生活が営まれた集落跡であることが判明した。集落は途中若干の空白期はあるが、4世紀後半から15世紀まで営まれたもので、調査例の少ないこの地域の土器や集落の変遷をたどる上で、良い資料となるものと思われる。しかし、道路敷地内という限定された範囲の調査のため、集落の全容をとらえるまでには至らず、また、土器の分類も大まかであり、今後、時間をかけて検討していくことが必要であると思われる。

小鶴遺跡は、台地南端部に弥生時代後期の堅穴住居跡1軒、溝1条が検出された。遺物は、弥生時代の長岡式土器が住居跡に伴って出土しており、調査できた遺構は僅かなものであるが、周辺に弥生式土器片の散布がみられることから付近に集落の存在が推定される。

周辺遺跡との関連と相まって、本報告書が涸沼川沿岸の考古学上の資料として活用いただければと願っている。

若干の私見を交えながら検討を加えて来たが、その内容は十分とは言えず、また、内容の妥当性についても一抹の不安が残されている。先学諸氏の御指導と御批判をいただき、機会をとらえ、より充実したものにして行きたい。

なお、本調査の結果をまとめるにあたり、関係各位の御指導や御協力があつたことに対して、文末ではあるが、心から感謝の意を表したい。



# 写 真 图 版

奥 谷 遺 跡

小 鶴 遺 跡



奥谷遺跡全景

PL 2



調査前風景



調査前風景



調査前風景



遺構確認状況



遺構確認状況



遺構確認状況



作業風景



見学風景



現地説明会



発掘後の全景



発掘後の全景



発掘後の全景



第1号住居跡

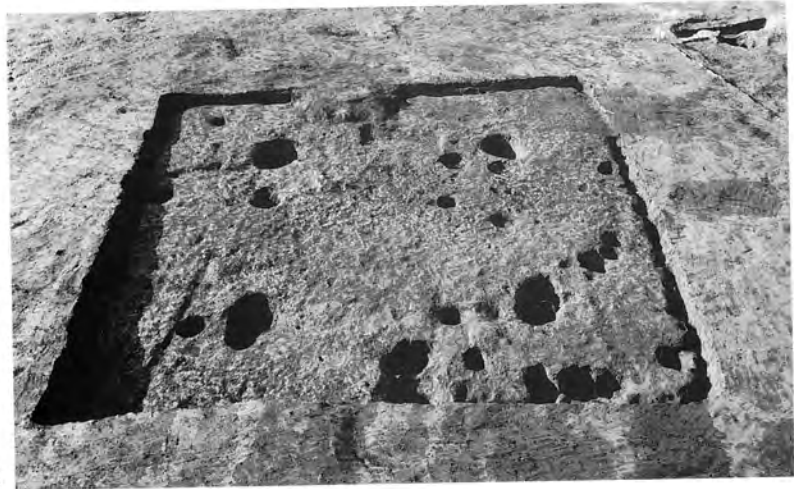


第2号住居跡



第3号住居跡  
遺物出土状況





第3号住居跡



第4号住居跡  
遺物出土状況



第5・6号住居跡





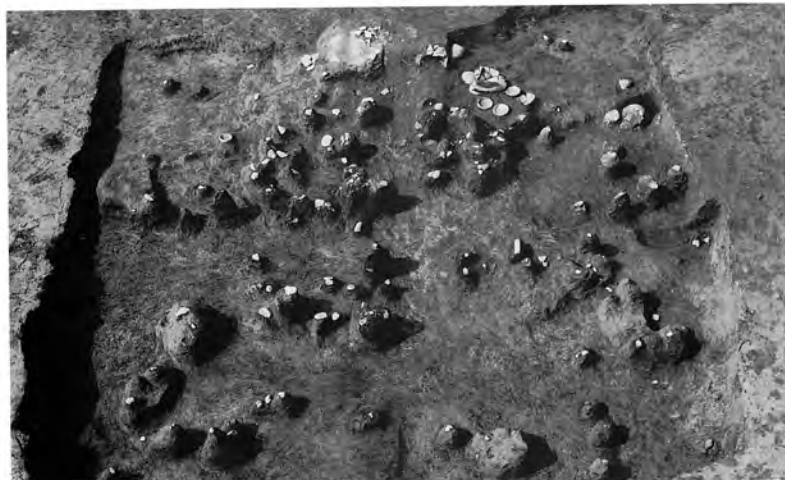
第7・8・50号  
住居跡  
遺物出土状況



第7・8・50号  
住居跡



第8号住居跡



第9号住居跡  
遺物出土状況



第9号住居跡  
カマド内  
遺物出土状況



第9号住居跡

PL 10



第10号住居跡



第11号住居跡  
遺物出土状況



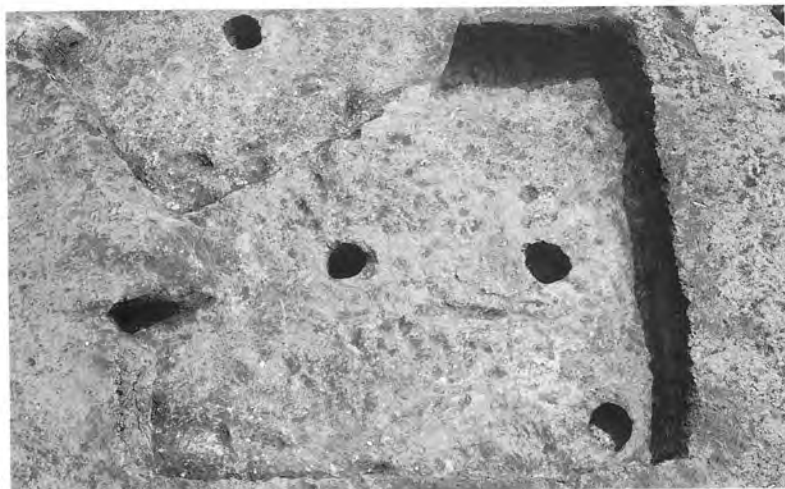
第11号住居跡



第12号住居跡  
遺物出土状況



第12号住居跡



第13号住居跡



第14号住居跡  
遺物出土状況



第14号住居跡



第15号住居跡  
遺物出土状況





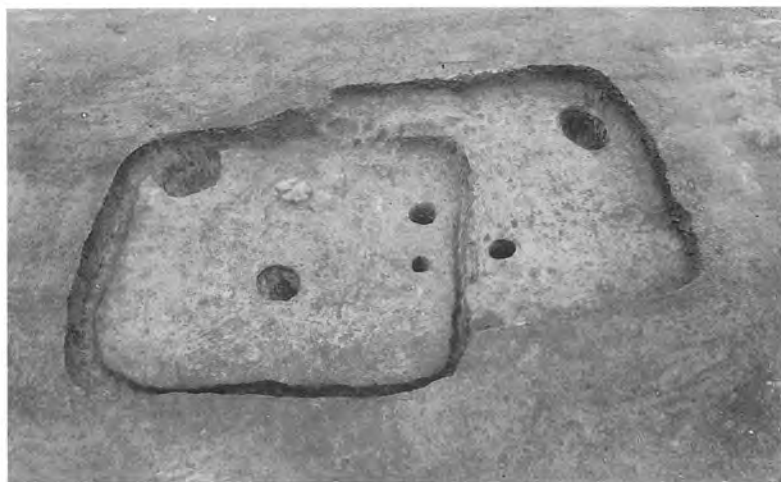
第15号住居跡



第15号住居跡  
掘り方



第16・17号住居跡  
遺物出土状況



第16・17号住居跡



第18号住居跡  
遺物出土状況



第18号住居跡  
カマド内  
遺物出土状況

第18号住居跡  
掘り方



第19号住居跡



第20号住居跡







第21号住居跡



第22・32号住居跡  
遺物出土状況



第22号住居跡



第23号住居跡



第24号住居跡  
遺物出土状況



第24号住居跡



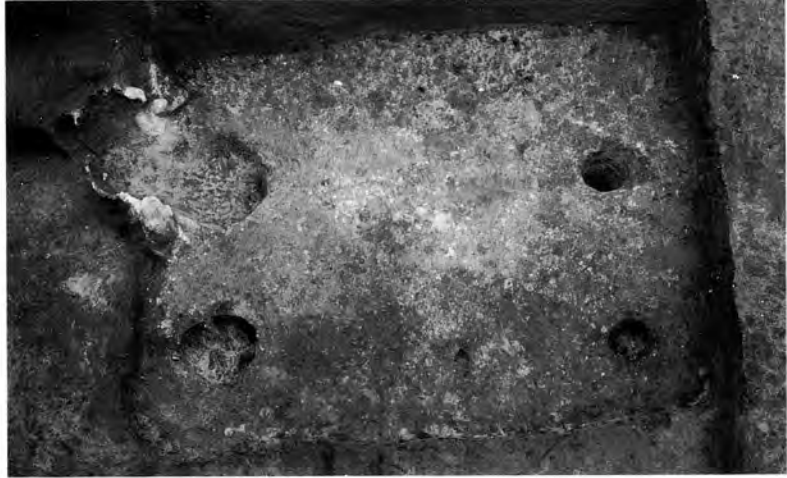
第25号住居跡



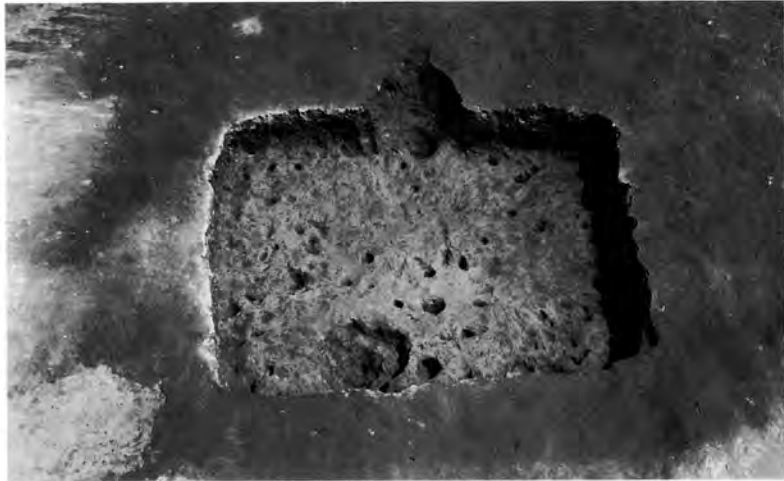
第26・27号住居跡  
遺物出土状況



第28・29号住居跡  
遺物出土状況



第29号住居跡



第30号住居跡  
掘り方



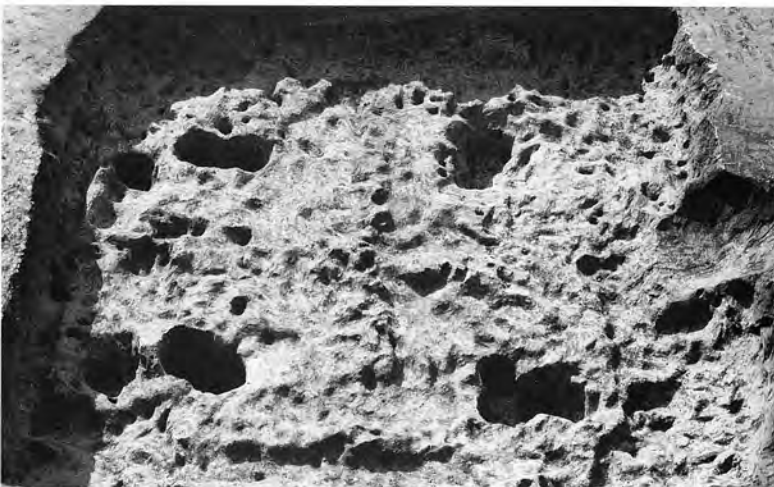
第31号住居跡  
遺物出土状況



第31号住居跡  
カマド内  
遺物出土状況



第31号住居跡



第31号住居跡  
掘り方



第32号住居跡



第33号住居跡



第33・34・35号  
住居跡





第34号住居跡  
遺物出土状況



第34号住居跡



第36号住居跡



第37・38号住居跡



第38号住居跡  
カマド内



第39号住居跡  
遺物出土状況





第39号住居跡



第39号住居跡  
掘り方



第40号住居跡  
遺物出土状況

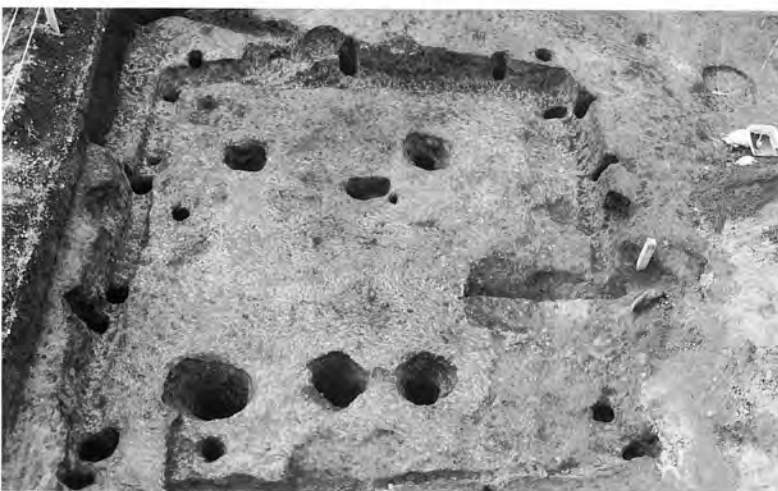
第41号住居跡  
遺物出土状況



第43号住居跡  
遺物出土状況



第43号住居跡





第44号住居跡  
遺物出土状況



第44号住居跡  
遺物出土状況



第44号住居跡



第45号住居跡



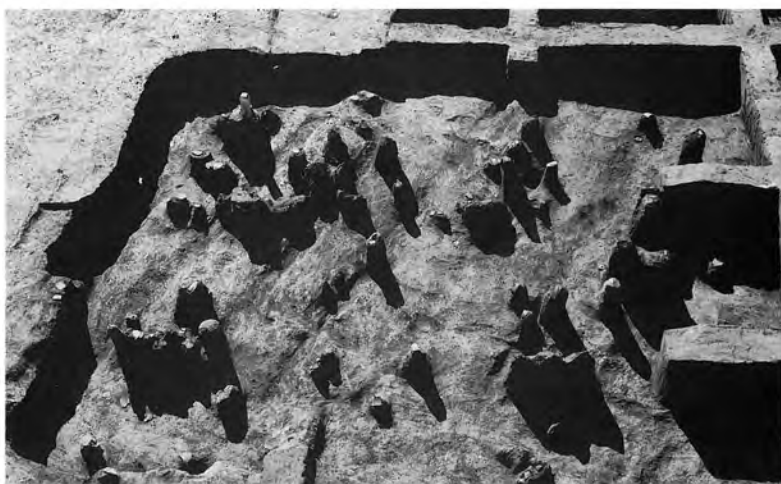
第45号住居跡  
遺物出土状況



第46号住居跡  
遺物出土状況



第46号住居跡



第47号住居跡  
遺物出土状況



第47号住居跡



第48号住居跡



第49号住居跡  
遺物出土状況



第49号住居跡





第50号住居跡  
遺物出土状況



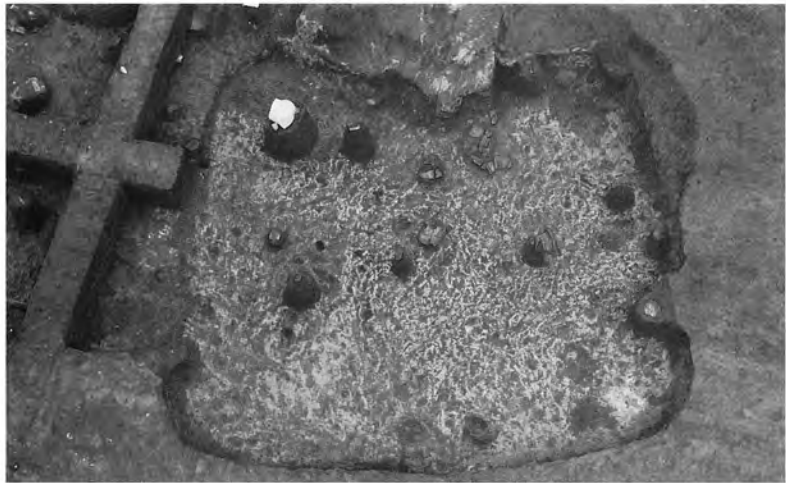
第52・53号住居跡  
遺物出土状況



第54号住居跡



第56号住居跡

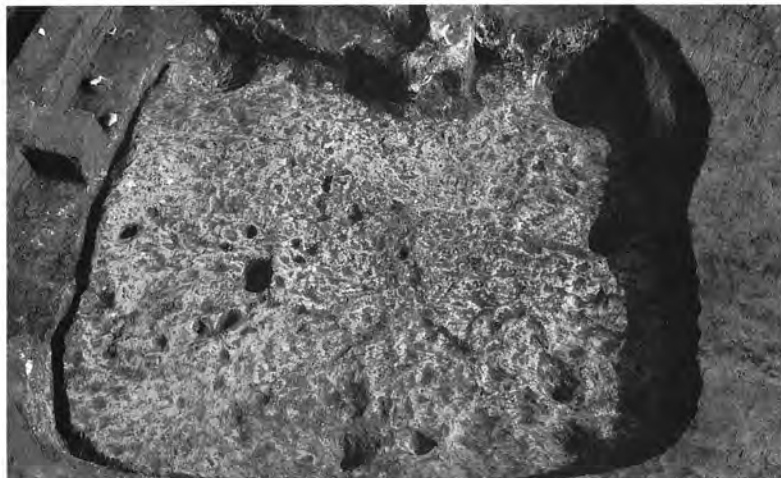


第57号住居跡  
遺物出土状況



第57号住居跡  
カマド内  
遺物出土状況

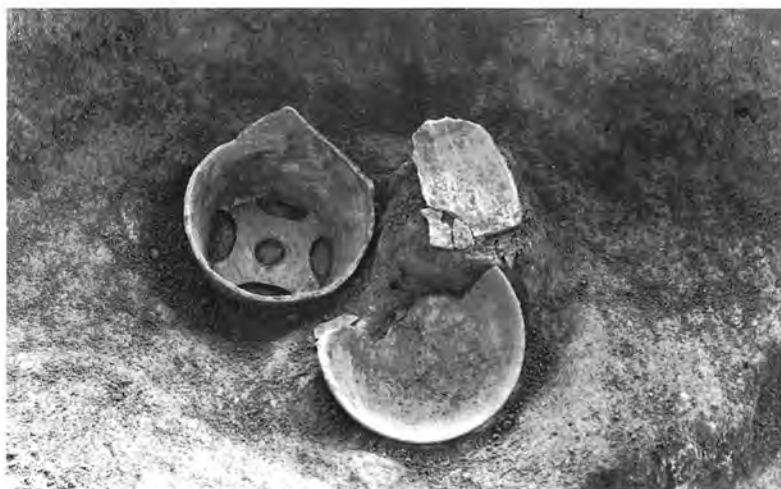




第57号住居跡



第58号住居跡  
遺物出土状況



第58号住居跡  
遺物出土状況

第58号住居跡  
カマド内  
遺物出土状況



第58号住居跡



第61号住居跡  
遺物出土状況

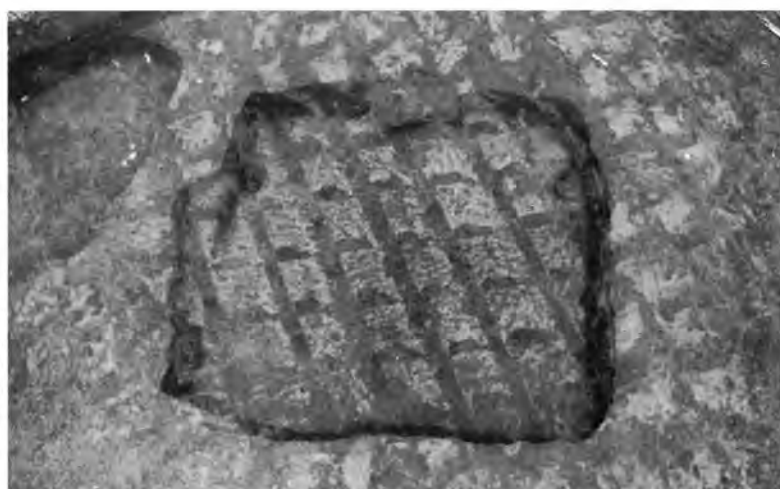




第61号住居跡



第62号住居跡  
遺物出土状況



第62号住居跡



第64号住居跡



第65号住居跡  
遺物出土状況



第65号住居跡



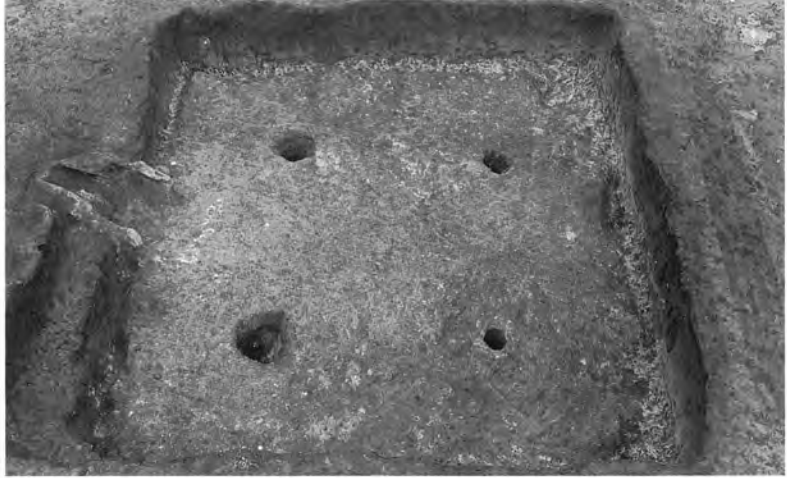
第66号住居跡  
遺物出土状況



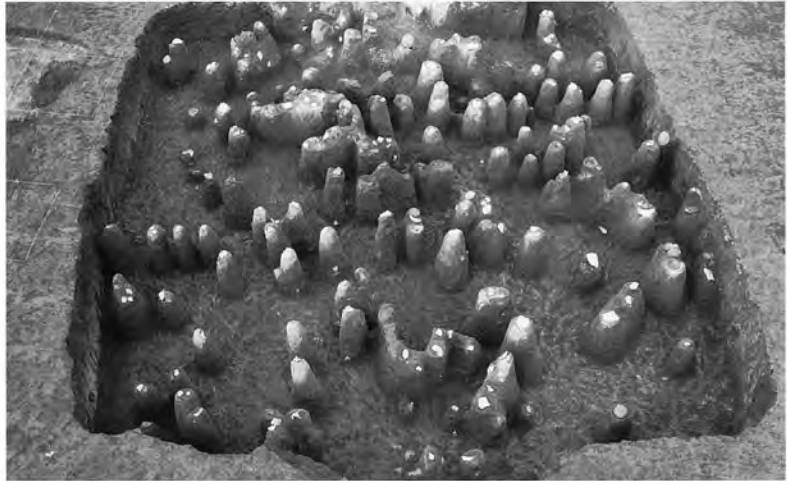
第66号住居跡  
カマド



第66号住居跡



第67号住居跡



第68号住居跡  
遺物出土状況

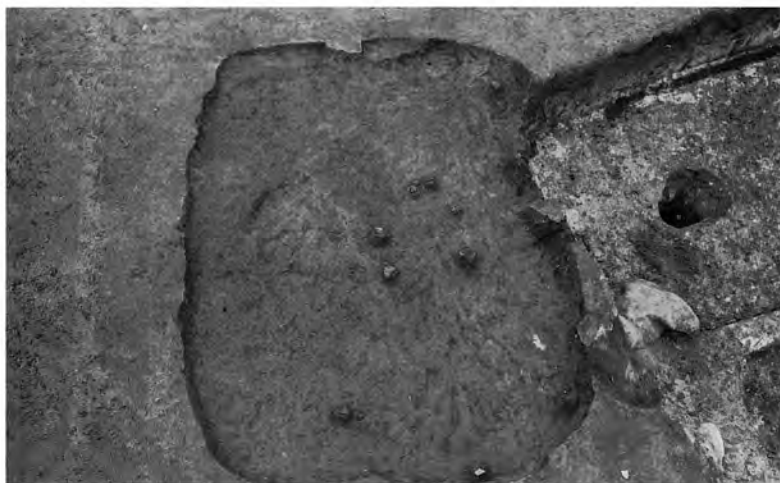


第68号住居跡





第68号住居跡  
掘り方



第69号住居跡  
遺物出土状況



第70号住居跡



第71号住居跡



第72号住居跡  
遺物出土状況



第72号住居跡





第73号住居跡  
遺物出土状況



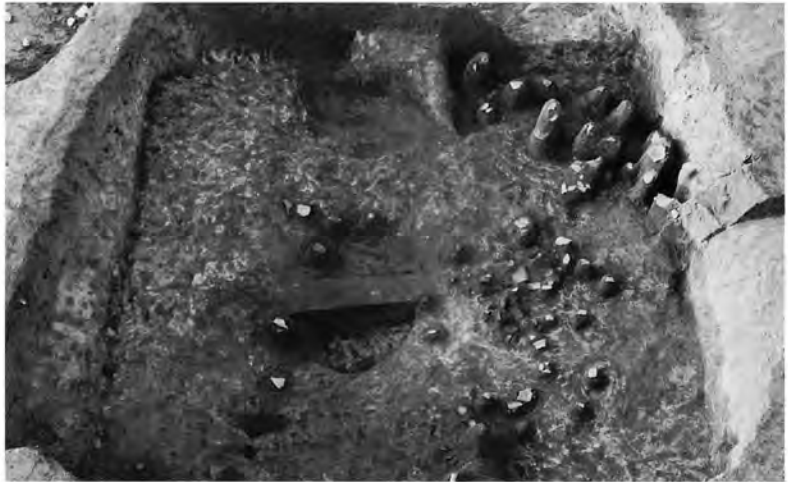
第73号住居跡



第74号住居跡  
遺物出土状況



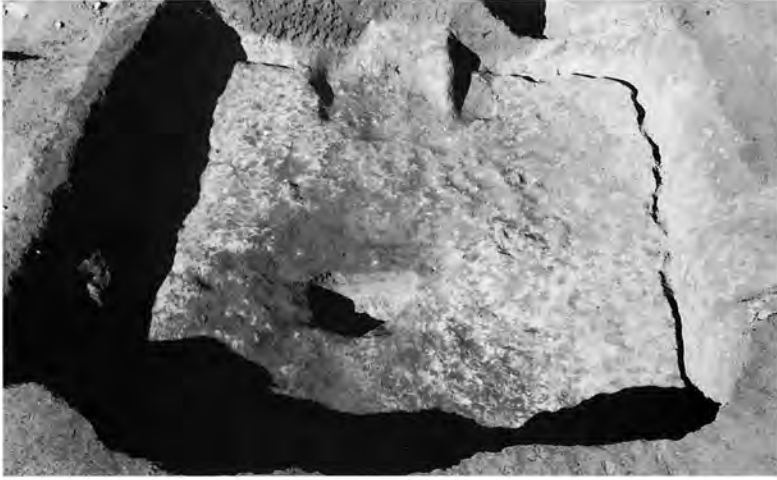
第74号住居跡



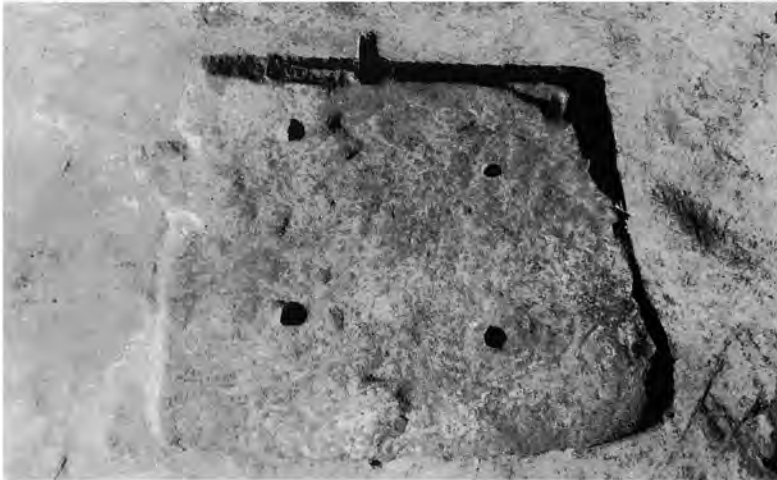
第75号住居跡  
遺物出土状況



第75号住居跡  
カマド



第75号住居跡



第76号住居跡



第77号住居跡

第78・79号住居跡  
遺物出土状況



第78・79号住居跡



第80号住居跡





第81号住居跡

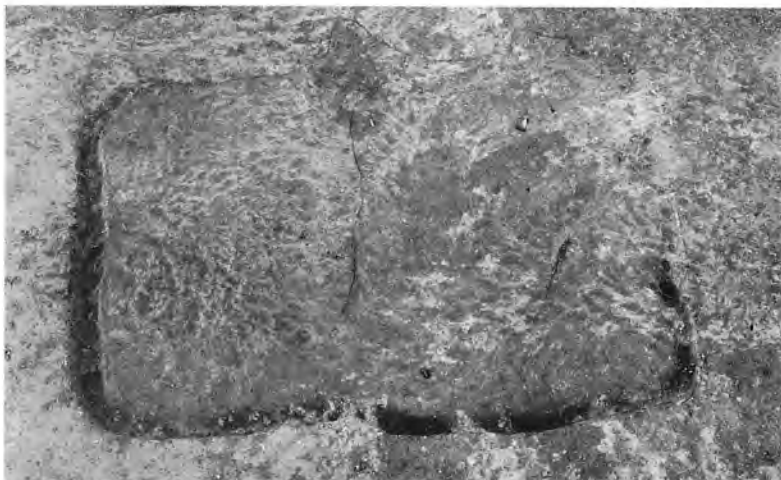


第82号住居跡

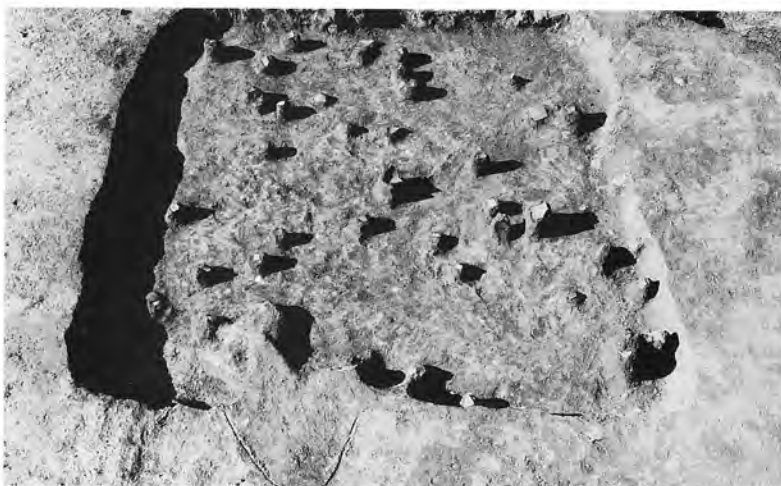


第83・84号住居跡





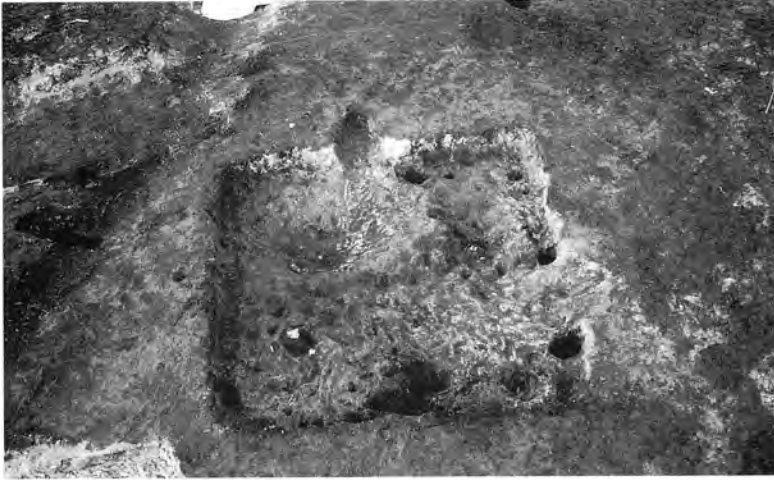
第85号住居跡



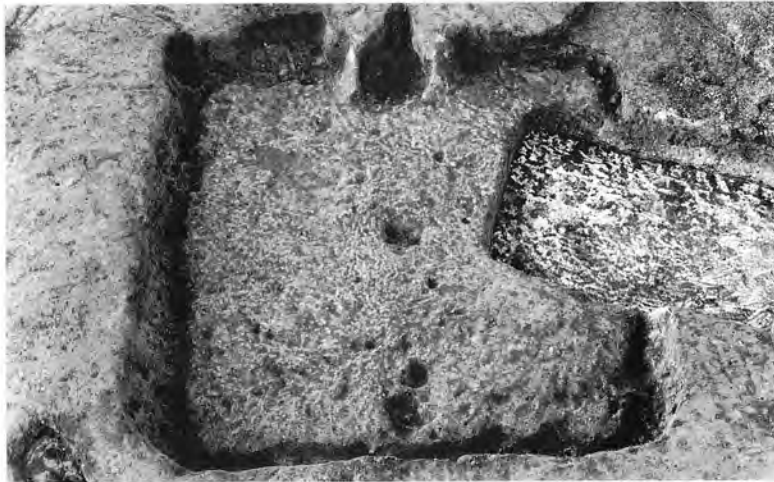
第86号住居跡  
遺物出土状況



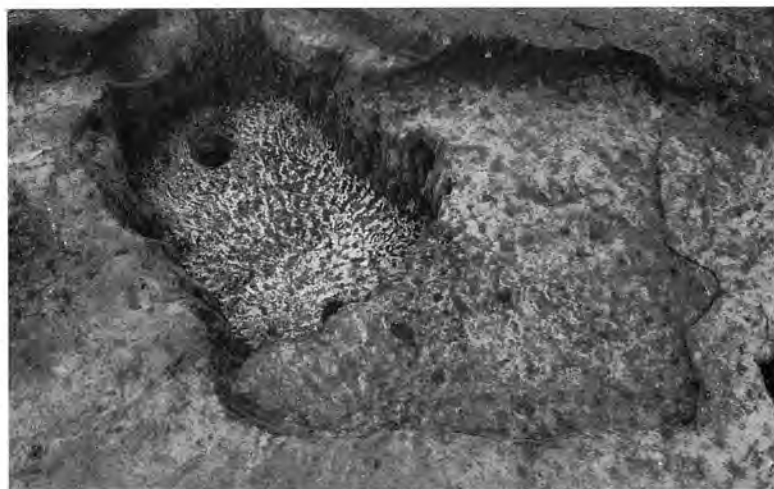
第86号住居跡



第86号住居跡  
掘り方



第88号住居跡

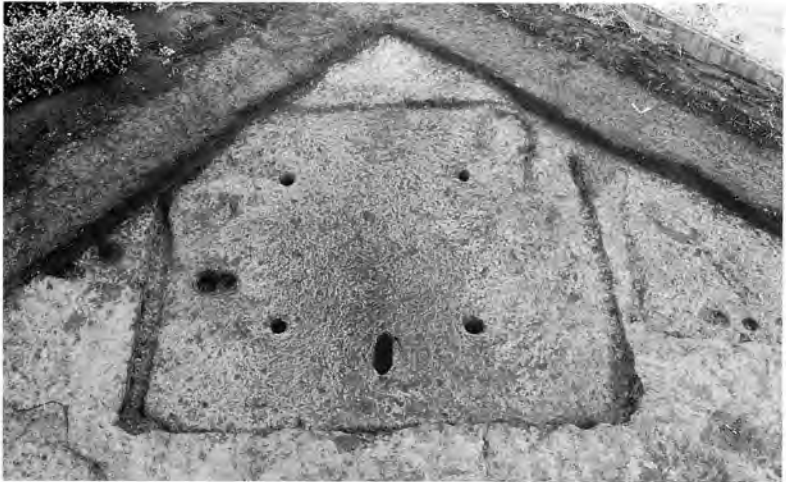


第89号住居跡

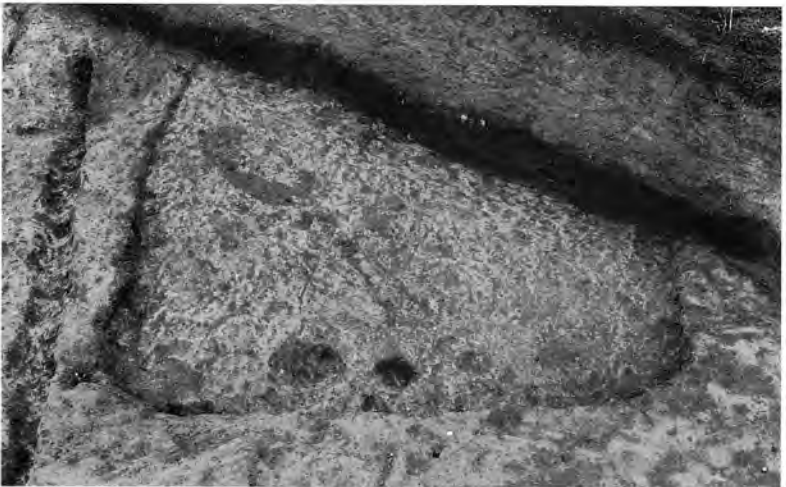
第90・91号住居跡  
遺物出土状況



第90・91号住居跡



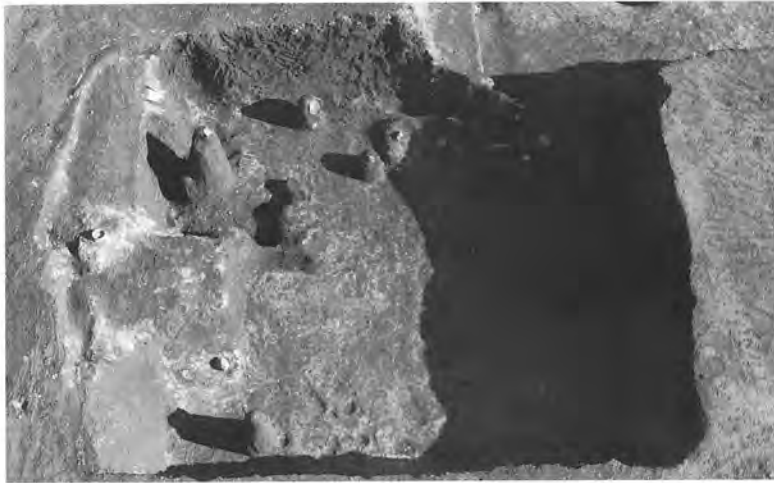
第92号住居跡







第93号住居跡  
遺物出土状況



第95号住居跡  
遺物出土状況



第95号住居跡  
遺物出土状況

第95号住居跡



第96号住居跡



第97号住居跡

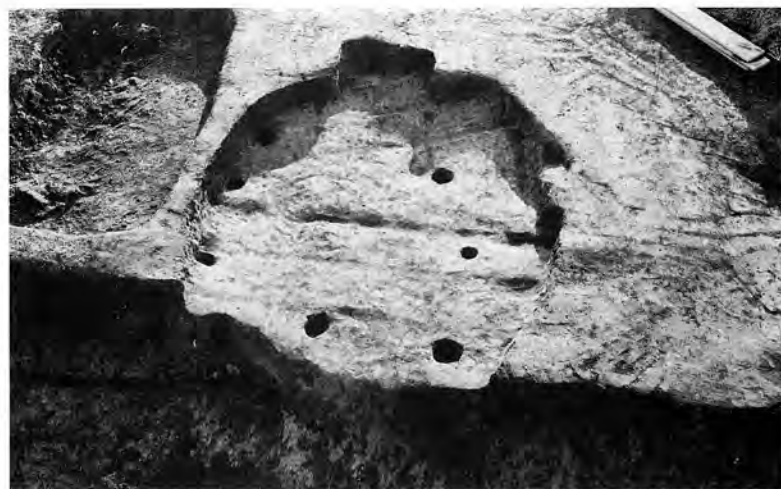




第100号住居跡  
遺物出土状況



第101号住居跡



第102号住居跡



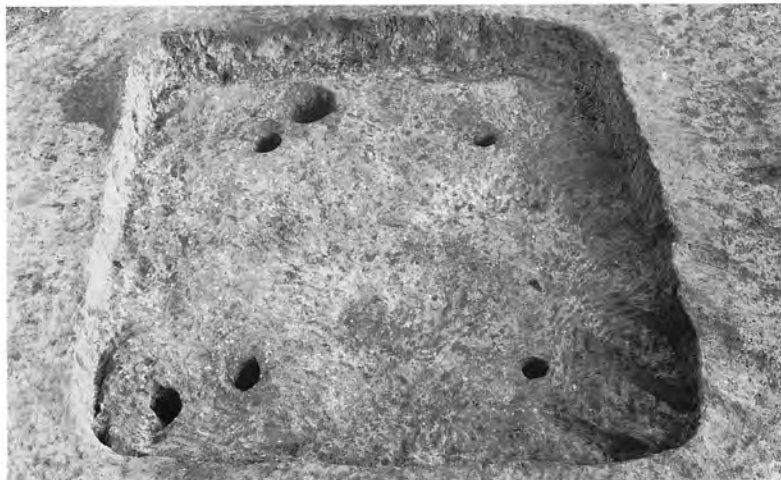
第103号住居跡



第104号住居跡



第105号住居跡  
遺物出土状況



第105号住居跡



第106号住居跡



第107号住居跡



第108号住居跡  
遺物出土状況



第108号住居跡

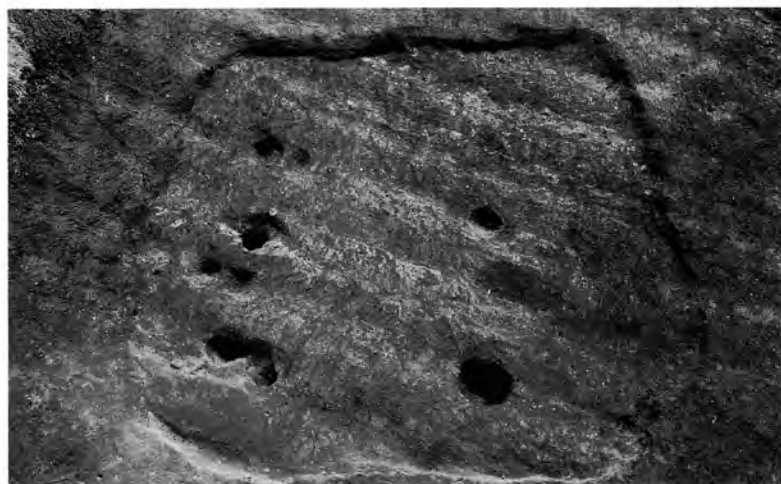


第109号住居跡





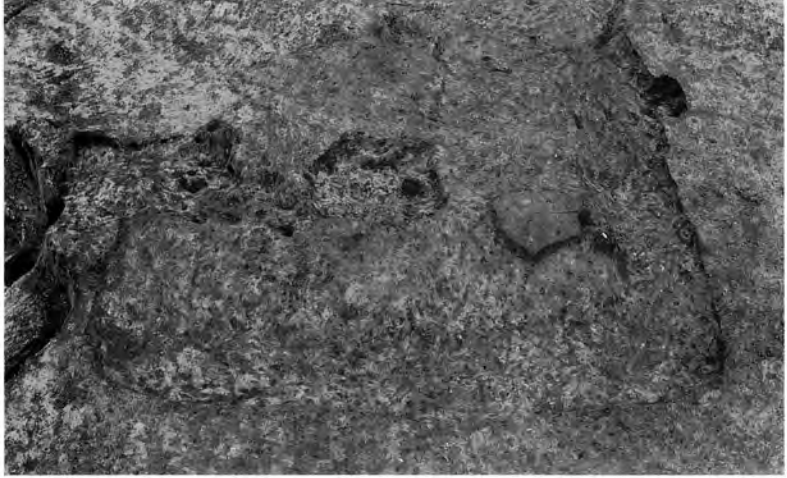
第111号住居跡



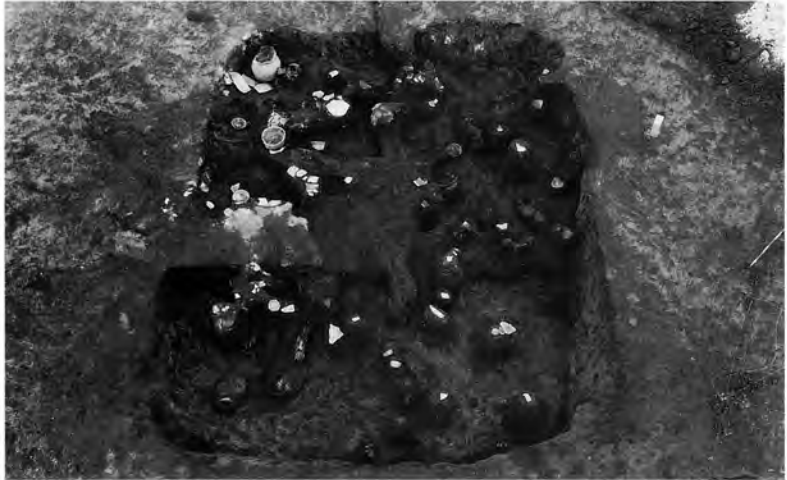
第112号住居跡



第113・114・115号  
住居跡



第116号住居跡



第117号住居跡  
遺物出土状況



第117号住居跡  
遺物出土状況





第117号住居跡  
カマド内  
遺物出土状況



第117号住居跡



第118号住居跡



第119号住居跡



第120号住居跡  
遺物出土状況



第120号住居跡



第121号住居跡  
遺物出土状況

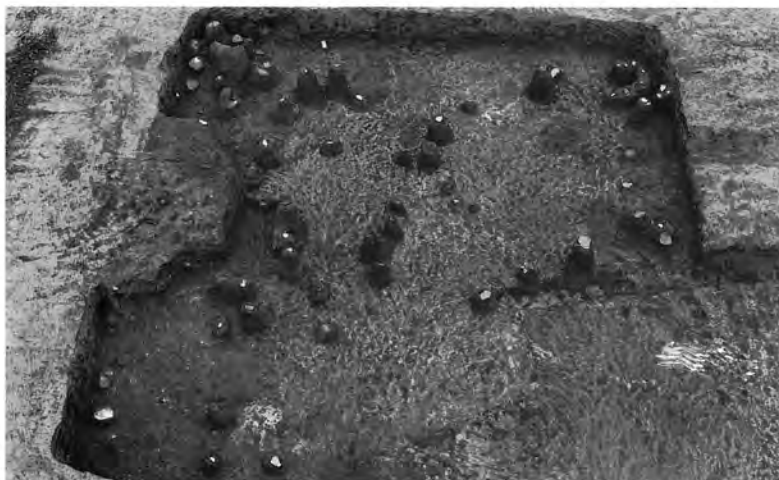


第121号住居跡  
カマド内  
遺物出土状況



第121号住居跡

第122号住居跡  
遺物出土状況



第122号住居跡



第123号住居跡





第124号住居跡  
遺物出土状況

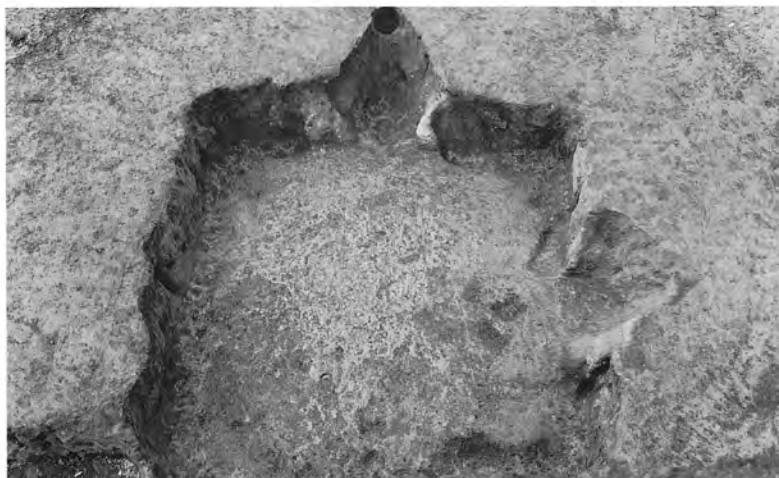


第124号住居跡



第125号住居跡  
遺物出土状況





第125号住居跡



第126号住居跡  
遺物出土状況



第126号住居跡  
カマド内  
遺物出土状況



第126号住居跡



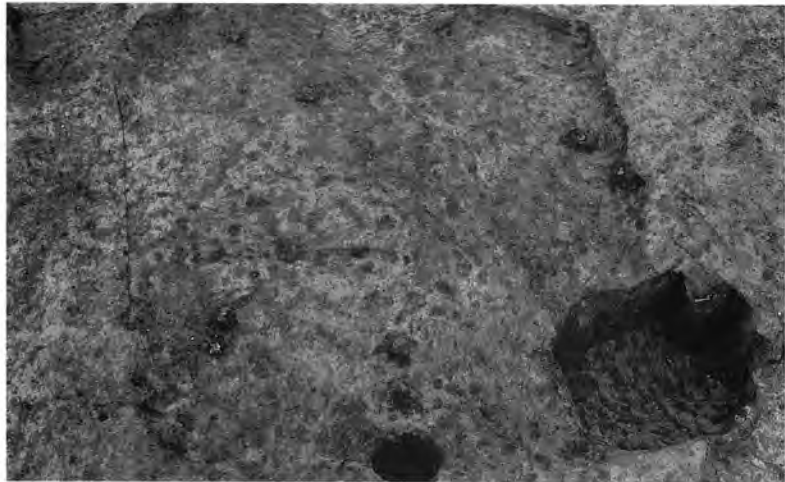
第127号住居跡



第128号住居跡



第129号住居跡

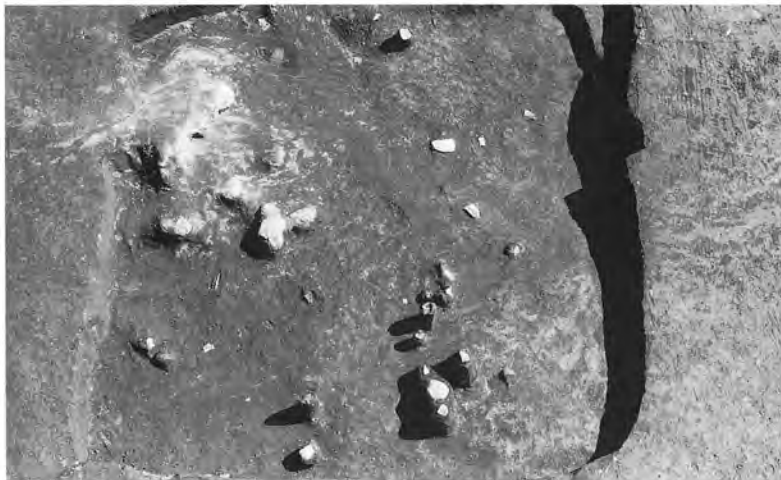


第130号住居跡



第131号住居跡

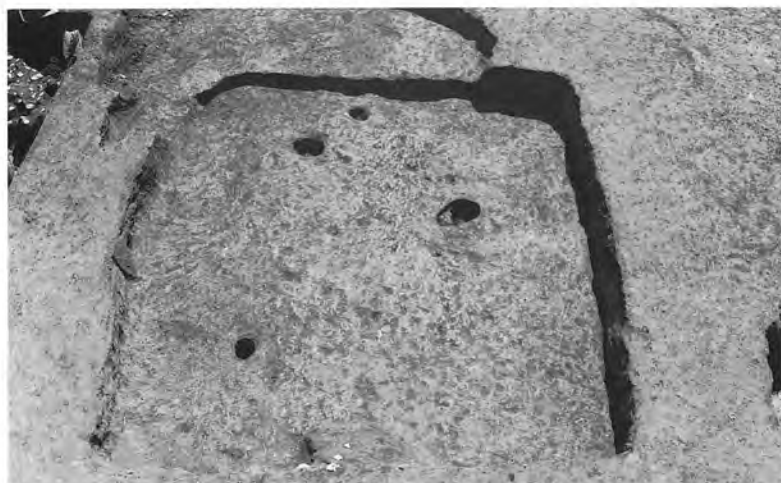




第132号住居跡  
遺物出土状況



第133号住居跡  
遺物出土状況



第133号住居跡



第134号住居跡



第135号住居跡  
遺物出土状況



第135号住居跡



第136号住居跡  
遺物出土状況



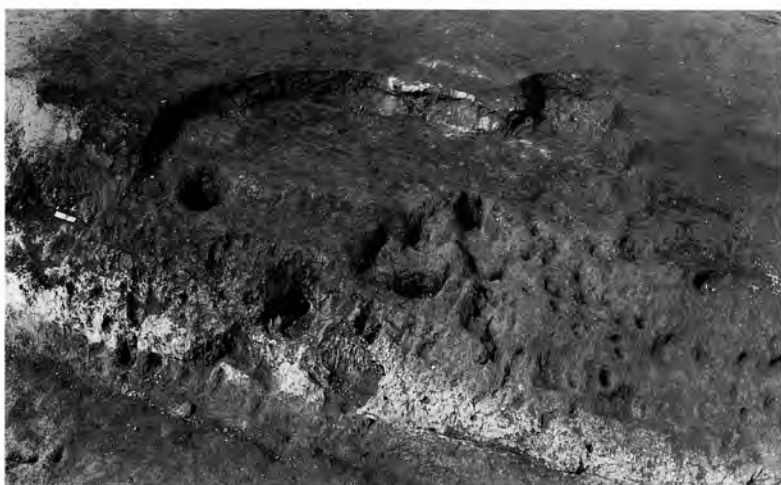
第136号住居跡



第137号住居跡  
遺物出土状況



第137号住居跡



第138号住居跡



第139号住居跡



第140号住居跡

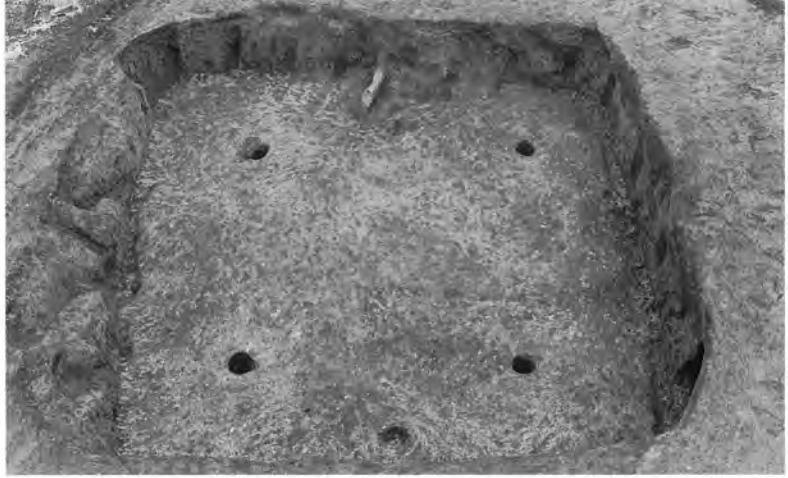


第141号住居跡



第142号住居跡  
遺物出土状況





第142号住居跡



第143号住居跡



第144号住居跡



第145号住居跡  
遺物出土状況



第145号住居跡



第146号住居跡



第1号掘立柱  
建物跡



第1号掘立柱  
建物跡掘り方



第1・2号掘立柱  
建物跡





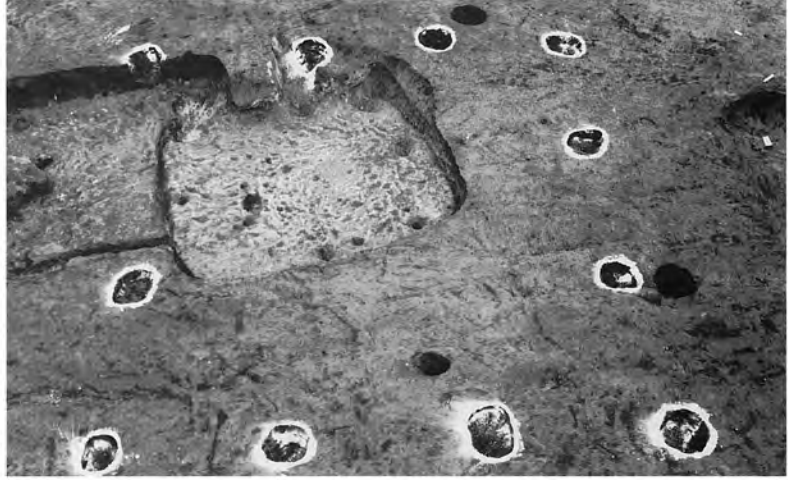
第 3 号掘立柱  
建物跡



第 4 号掘立柱  
建物跡



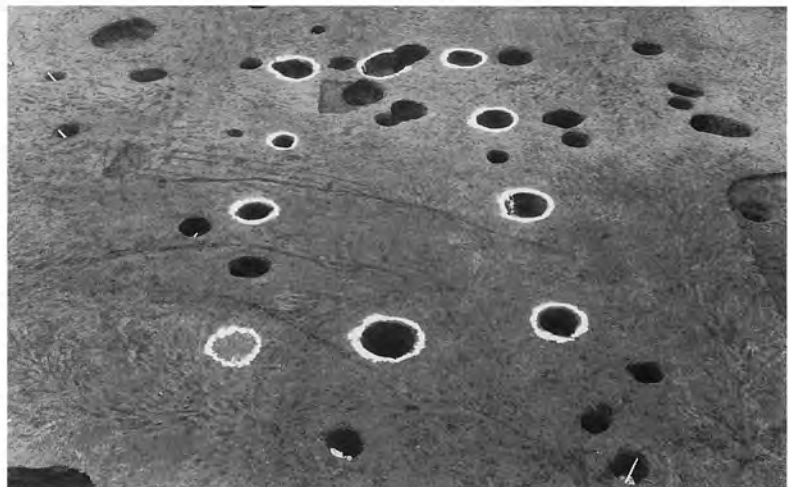
第 5 号掘立柱  
建物跡



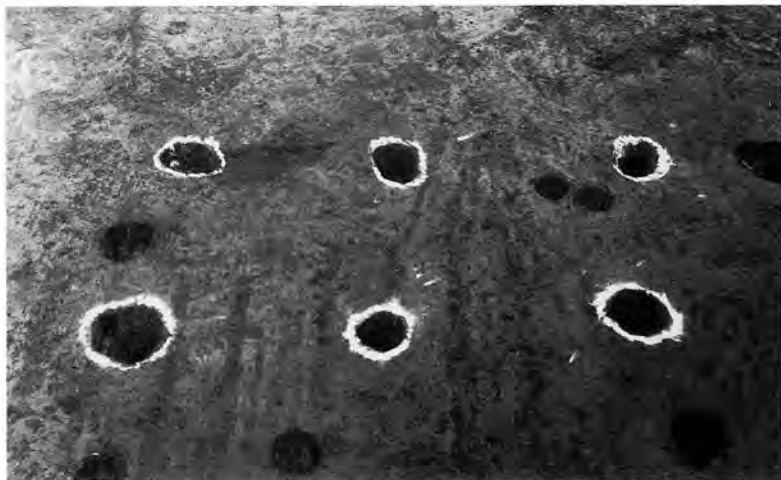
第 6 号掘立柱  
建物跡



第 8 号掘立柱  
建物跡



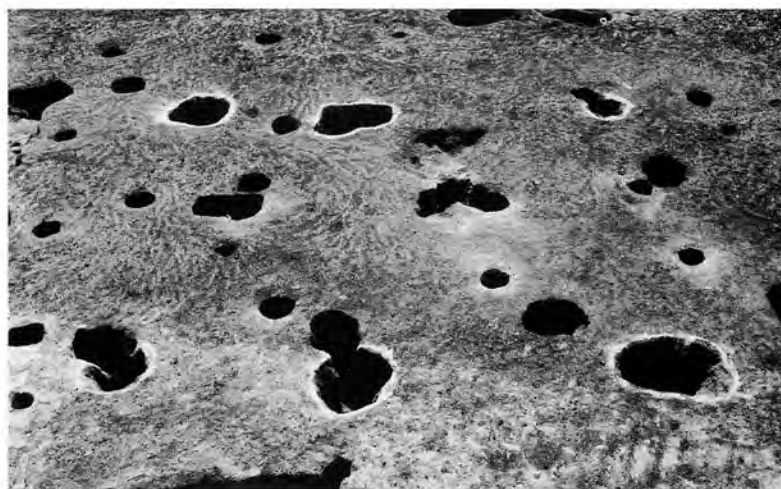
第 9 号掘立柱  
建物跡



第10号掘立柱  
建物跡



第11号掘立柱  
建物跡



第12号掘立柱  
建物跡



第16号掘立柱  
建物跡



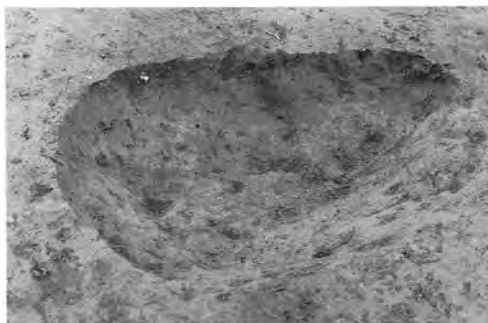
第16号掘立柱  
建物跡掘り方



第18号掘立柱  
建物跡



第1号集石



第1号集石掘り方



第2号集石遺構土層断面



第2号集石



第3号集石



第4号集石



第5号集石遺構土層断面



第5号集石





第31号土坑



第33号土坑



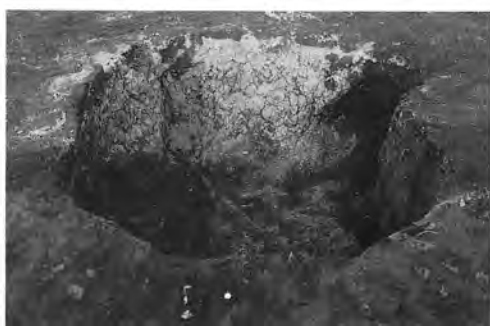
第36号土坑



第37号土坑



第38号土坑



第41号土坑



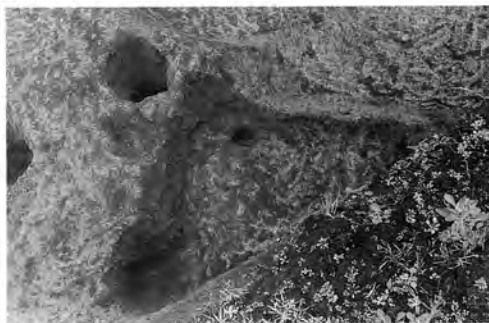
第42号土坑



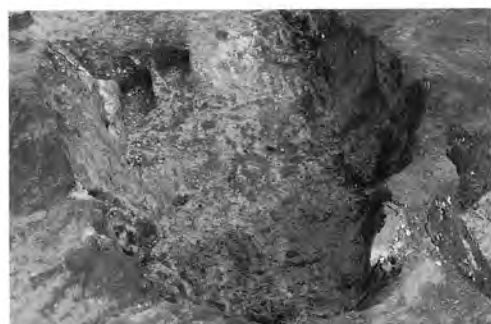
第43号土坑



第44·51号土坑



第45号土坑



第46号土坑



第48·52号土坑



第49号土坑



第50号土坑



第58·59·60号土坑



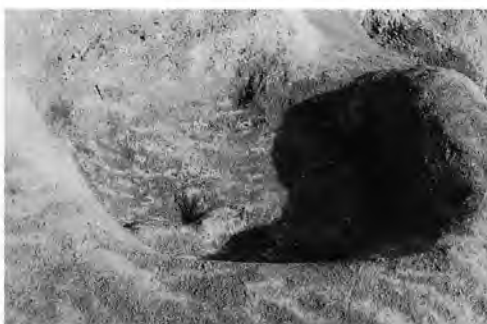
第62号土坑



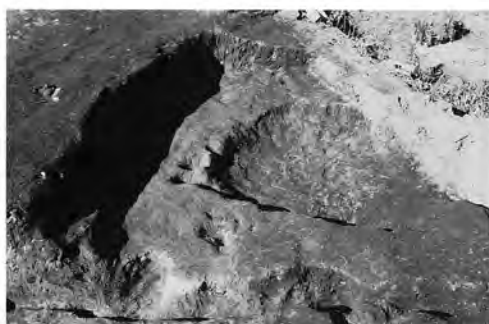
第64号土坑



第65号土坑



第69号土坑



第72号土坑



第75号土坑



第86号土坑



第87号土坑



第88号土坑





第89号土坑



第90号土坑



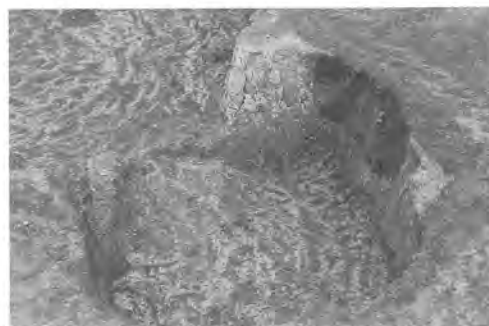
第95·96号土坑



第95号土坑



第104号土坑



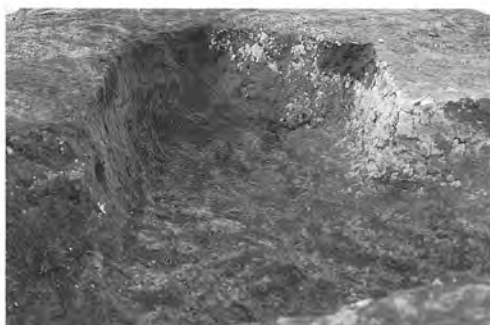
第105号土坑



第106·209号土坑



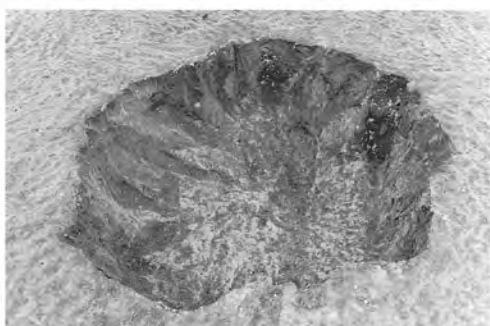
第107号土坑



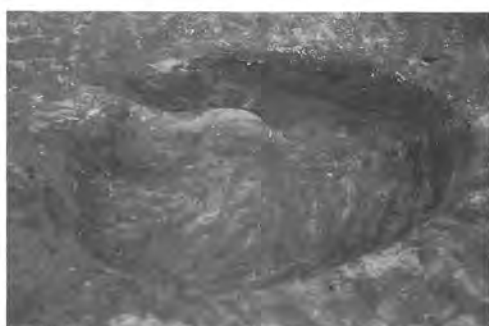
第109号土坑



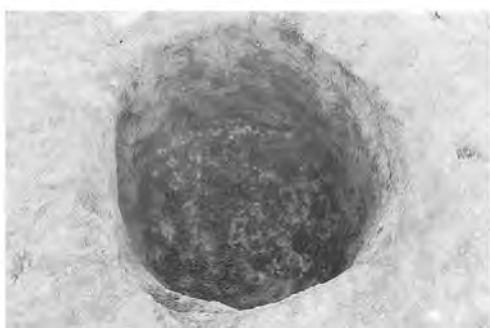
第110号土坑



第114号土坑



第116号土坑



第122号土坑



第123号土坑



第125号土坑



第124号土坑



第126号土坑



第131号土坑



第132号土坑



第133号土坑



第134号土坑



第135号土坑



第138号土坑



第139号土坑



第140号土坑



第141号土坑



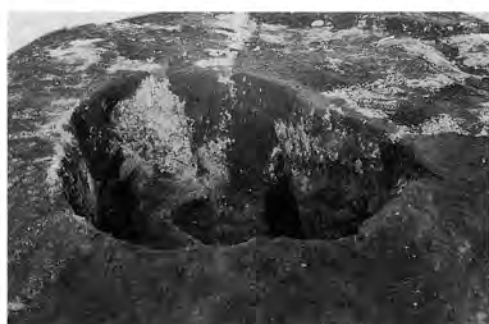
第142号土坑



第143号土坑



第145号土坑



第146号土坑



第147号土坑



第151号土坑



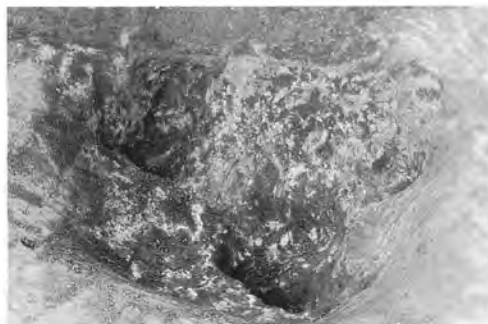
第154号土坑



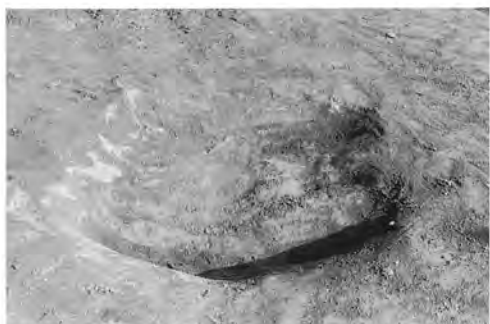
第155号土坑



第179号土坑



第192号土坑



第212号土坑

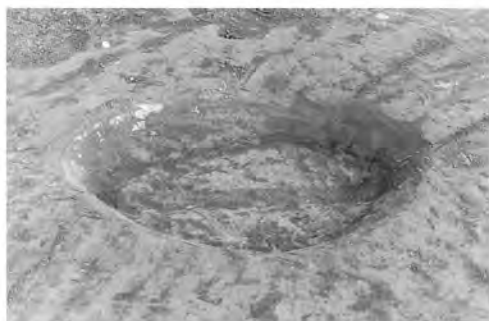


第215号土坑





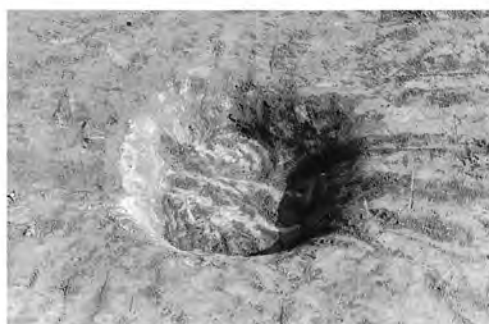
第218号土坑



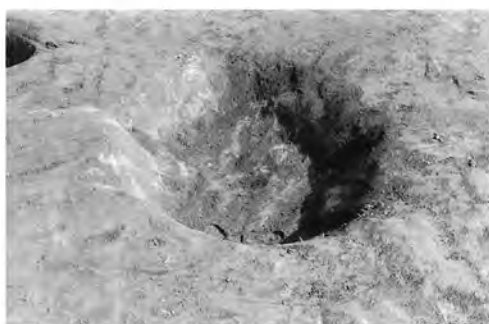
第226号土坑



第230号土坑



第233号土坑



第234号土坑



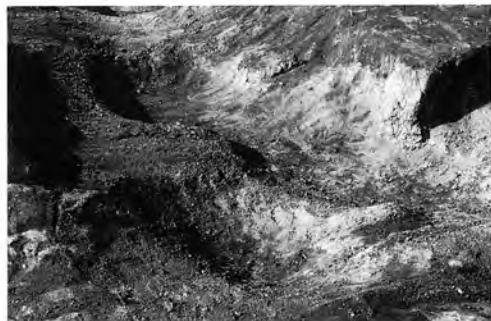
第235·236号土坑



第237号土坑



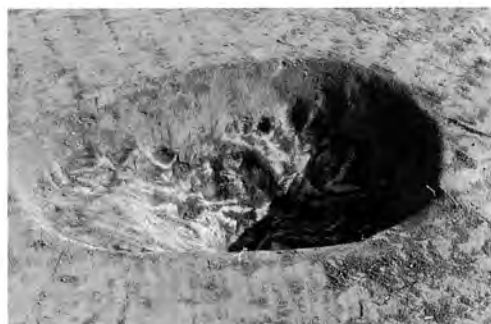
第240号土坑



第254·268·269号土坑



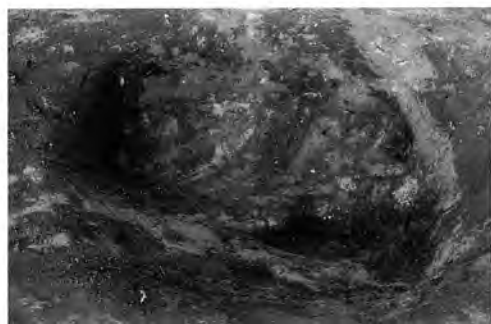
第255号土坑



第256号土坑



第273号土坑



第274号土坑



第282号土坑



第283号土坑



第284号土坑



第285・301・306号土坑



第286号土坑



第294号土坑



第295号土坑



第297号土坑遺物出土狀況



第304・305号土坑

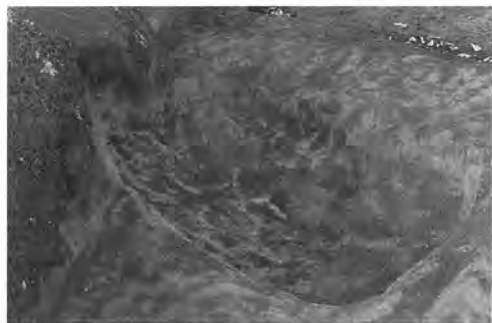


第306号土坑



第308号土坑





第309号土坑



第311号土坑



第315 · 317 · 318 · 319 · 321号土坑



第326号土坑



第334号土坑



第335号土坑



第356号土坑



第357号土坑



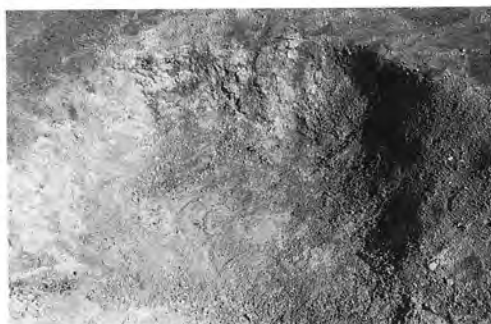
第358号土坑



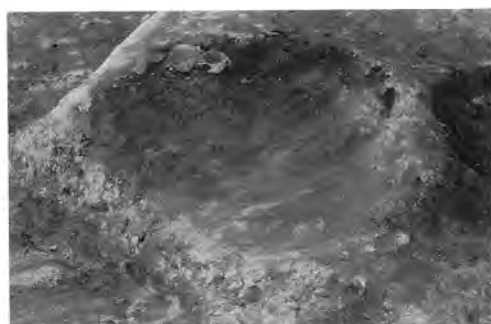
第359・363号土坑



第361号土坑



第363号土坑



第365号土坑



第374号土坑



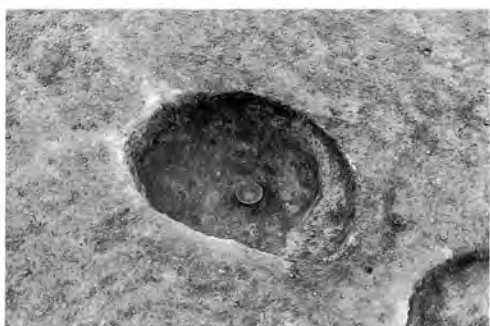
第368号土坑



第375号土坑



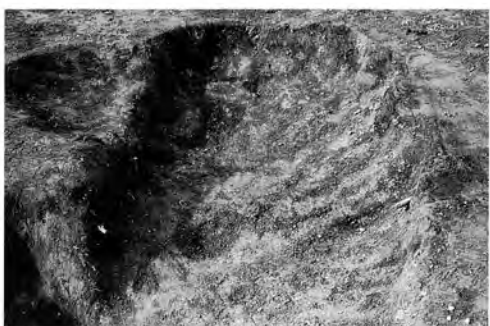
第376号土坑



第378号土坑遺物出土狀況



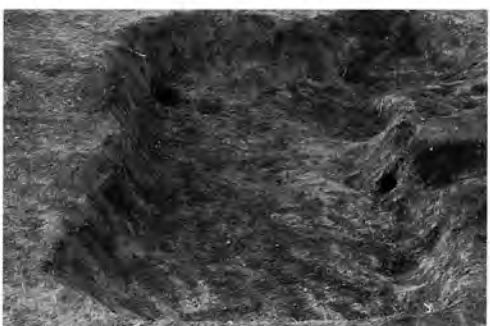
第379号土坑



第385号土坑



第386号土坑



第389号土坑



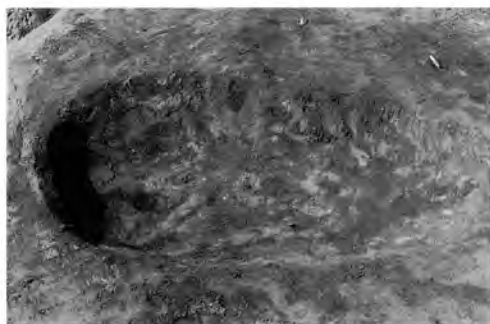
第390号土坑



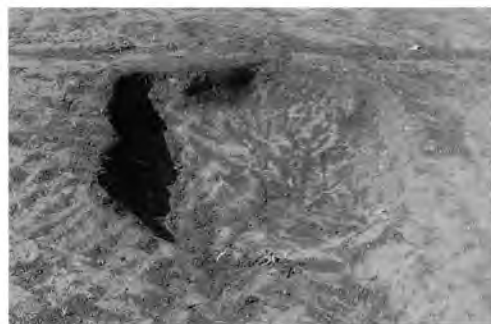
第394号土坑



第395号土坑



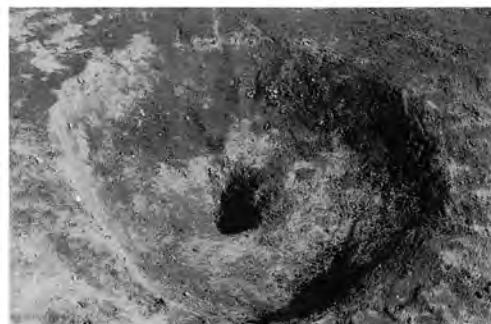
第398号土坑



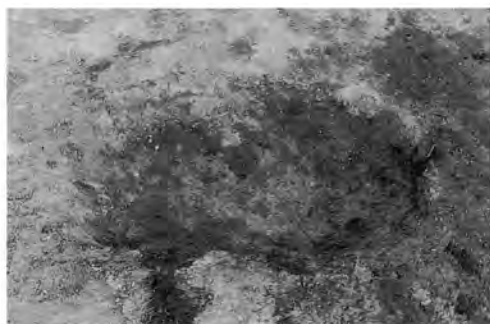
第399号土坑



第401号土坑



第402号土坑



第403号土坑



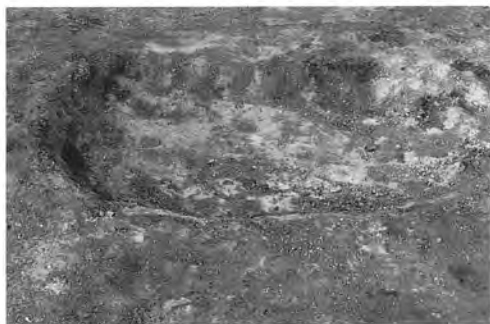
第408号土坑



第409号土坑



第420号土坑



第421号土坑



第423·424号土坑



第424号土坑



第425号土坑

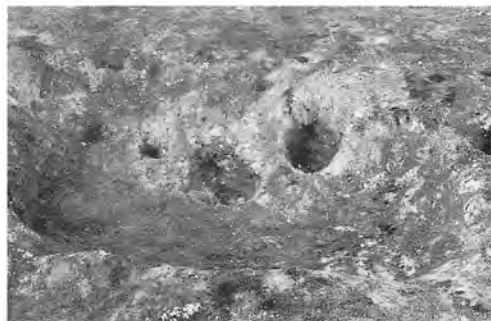


第438号土坑



第441号土坑

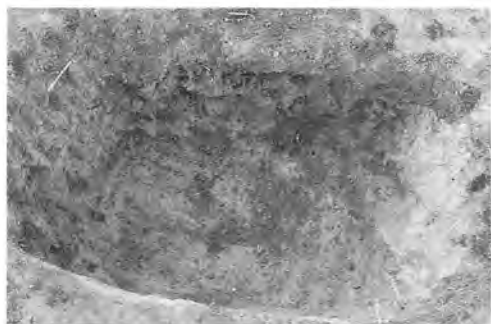




第442号土坑



第444号土坑



第479号土坑



第535号土坑



第545号土坑



第552·553·554·555·556号土坑



第567号土坑



第568号土坑



第573号土坑



第582号土坑



第583号土坑



第584号土坑



第585号土坑



第645号土坑



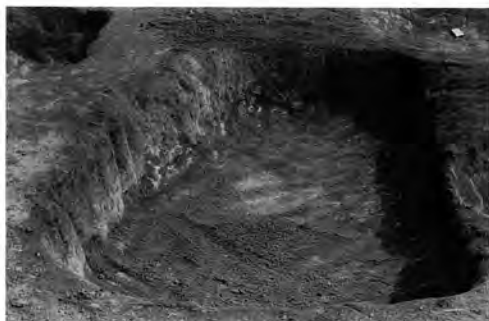
第646号土坑



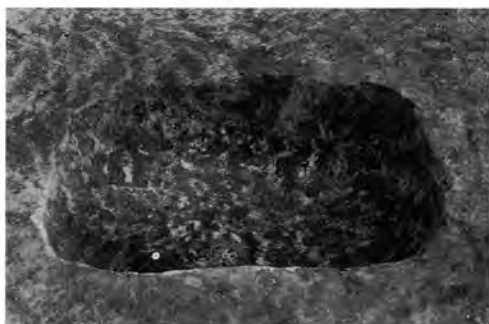
第647号土坑



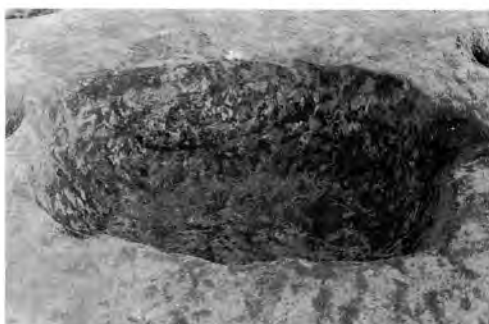
第649号土坑



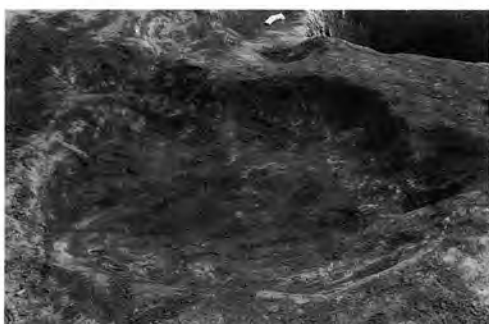
第653号土坑



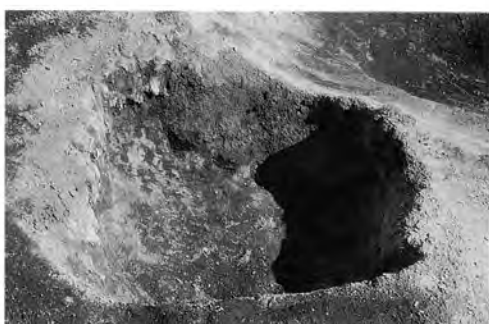
第661号土坑



第662号土坑



第669·670号土坑



第671号土坑



第672号土坑

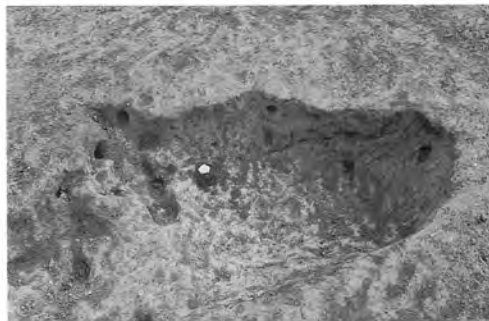


第681号土坑

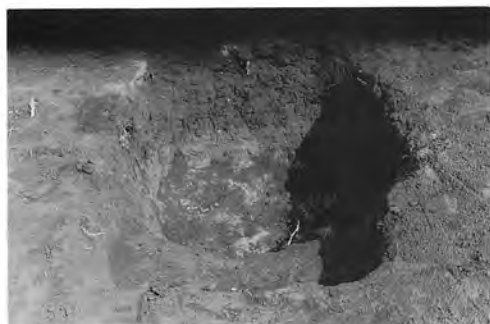




第744号土坑



第746号土坑



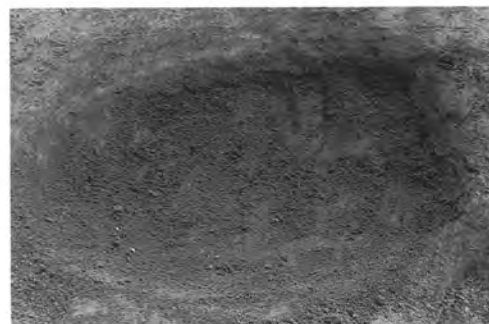
第753·754号土坑



第756号土坑



第757号土坑



第765号土坑



第770号土坑



第788·789号土坑



第790号土坑



第791号土坑



第808号土坑



第809号土坑



第812号土坑



ピット群



ピット群



ピット群



第 1 号地下式坑



第 3 号地下式坑



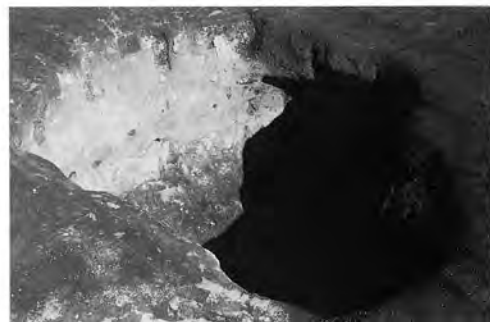
第 4・5 号地下式坑



第 5 号地下式坑



第 5 号地下式坑



第 7 号地下式坑



第 8 号地下式坑



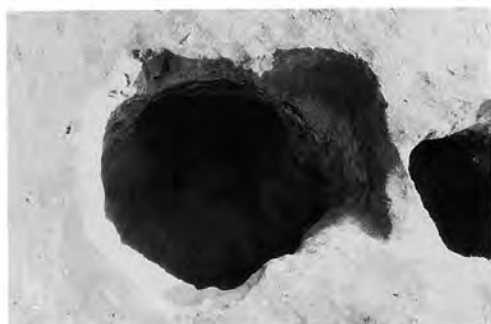
第 9 号地下式坑土层断面



第10号地下式坑



第12号地下式坑



第13号地下式坑



第14号地下式坑土层断面



第15号地下式坑



第17号地下式坑



第19号地下式坑



第20号地下式坑



第21号地下式坑



第22号地下式坑土层断面



第24号地下式坑



第25号地下式坑土层断面



第28号地下式坑土层断面



第29号地下式坑



第30号地下式坑



第32号地下式坑





第33号地下式坑土层断面



第34号地下式坑土层断面



第35・36号地下式坑土层断面



第37号地下式坑土层断面



第38号地下式坑土层断面



第38号地下式坑



第39号地下式坑



第42号地下式坑



第 1 号沟



第 2 号沟



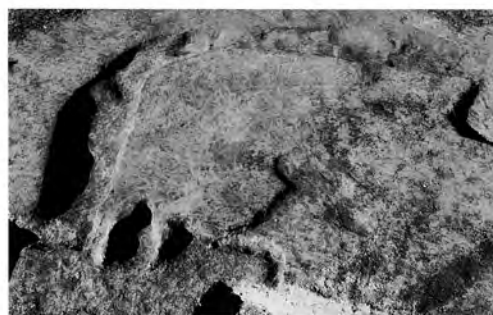
第 4 号沟土层断面



第 4 号沟



第 6 号沟



第 9 号沟



第10号溝・第2号柵列跡



第12号溝



第17号溝



第12号溝土層断面



第14号溝



第16号溝土層断面



第15号溝





第5号溝張り出し部B付近  
遺物出土状況



第5号溝土層断面 (J-J')



第5号溝張り出し部B



第5号溝土層断面 (I-I')



第5号溝遺物出土状況 (C3e<sub>6</sub>区)



第5号溝土層断面 (D-D')



第5号溝張り出し部A



第5号溝全景



第1号堀 (G3h6区~G2g9区)



第1号堀土層断面 (A-A')



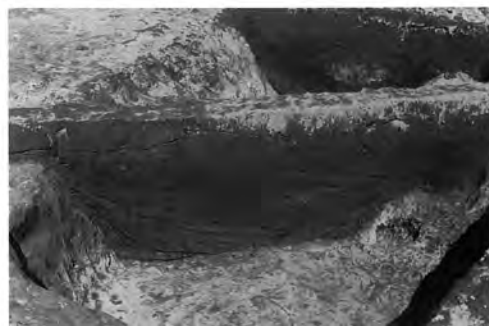
第1号堀 (G2g9区~G3h6区)



第1号堀土層断面 (C-C')



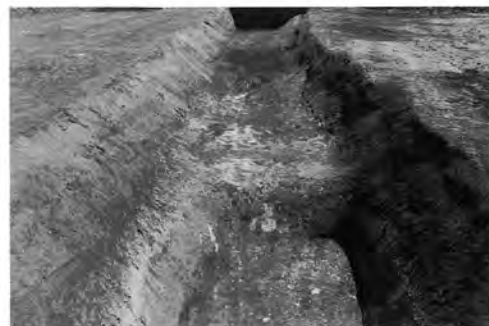
第1号堀 (G2g9区~J2d6区)



第1号堀土層断面 (G-G')



第1号堀 (G2g9区~J2d6区)



第1号堀段差 (H2c8区)



第 2 号井戸



第 2 号井戸土層断面



第 3 号井戸



第 4 号井戸



第 5 号井戸



第 6 号井戸



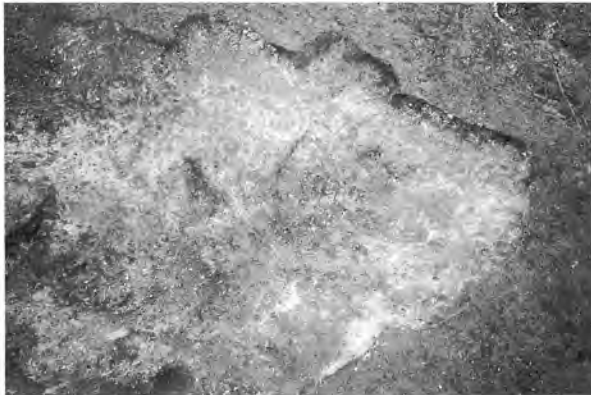
第 7 号井戸



第 7 号井戸土層断面



第 3 号性格不明遺構遺物出土狀況



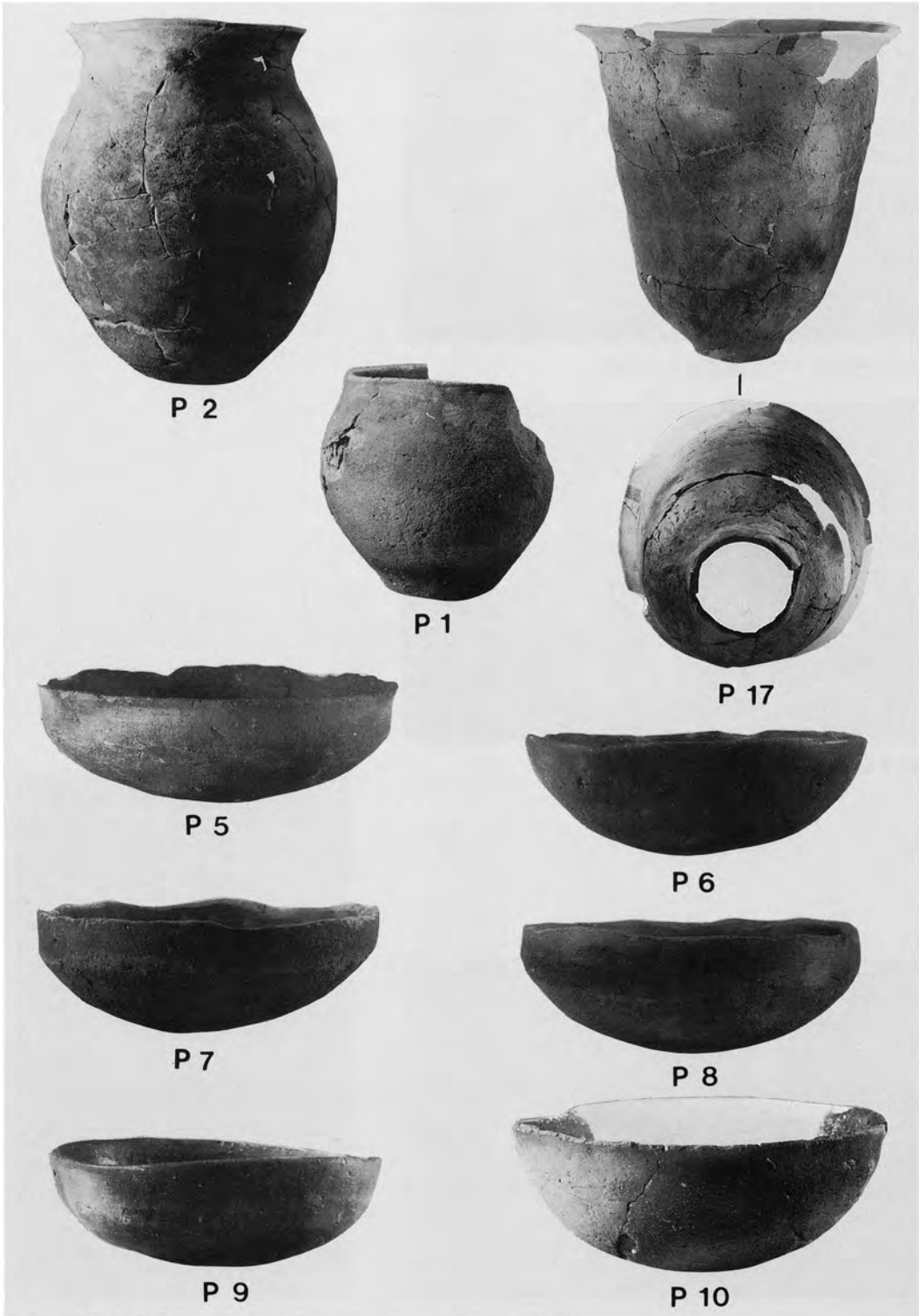
第 3 号性格不明遺構



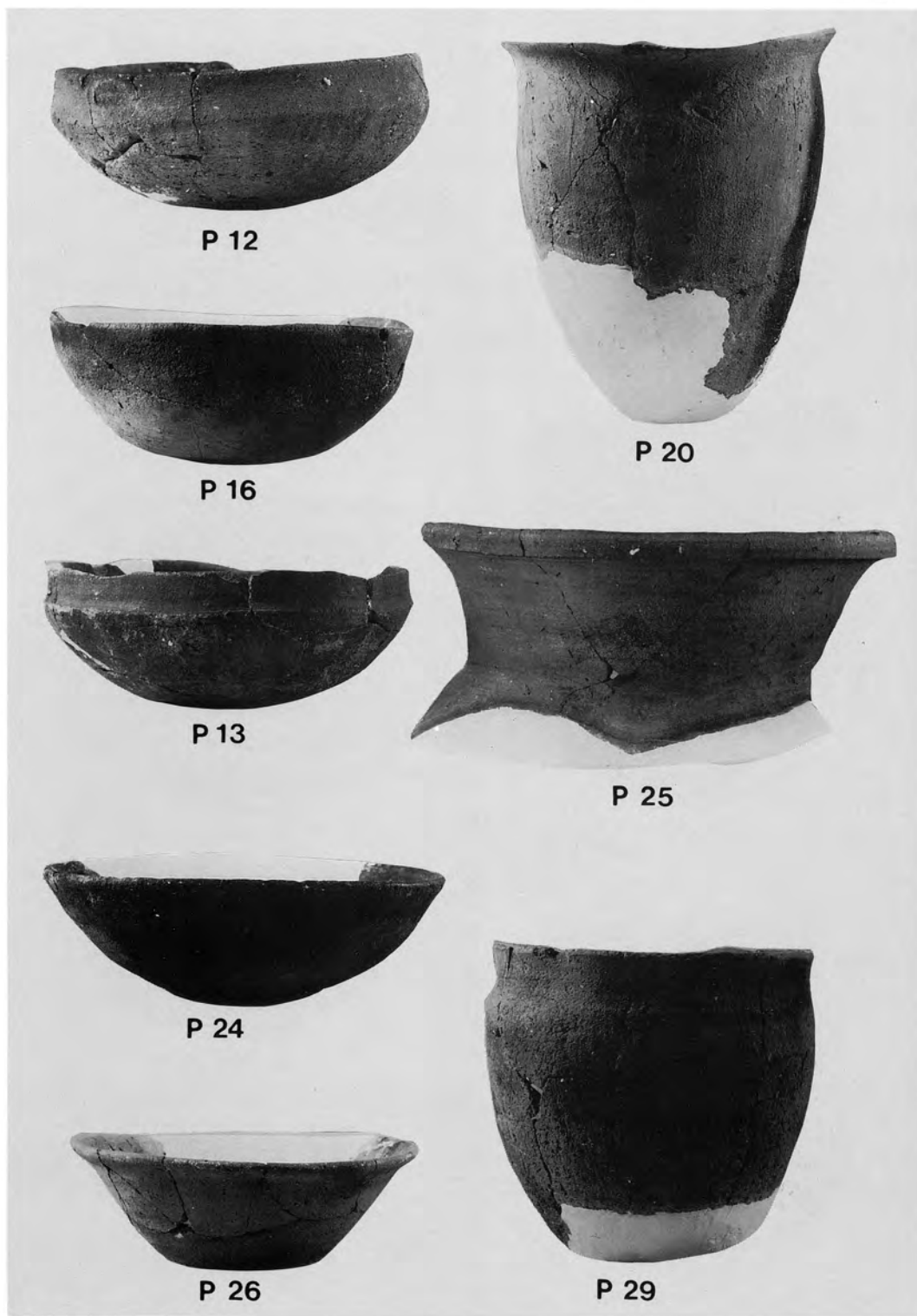
第 1 号道路跡土層断面



第 1 号道路跡

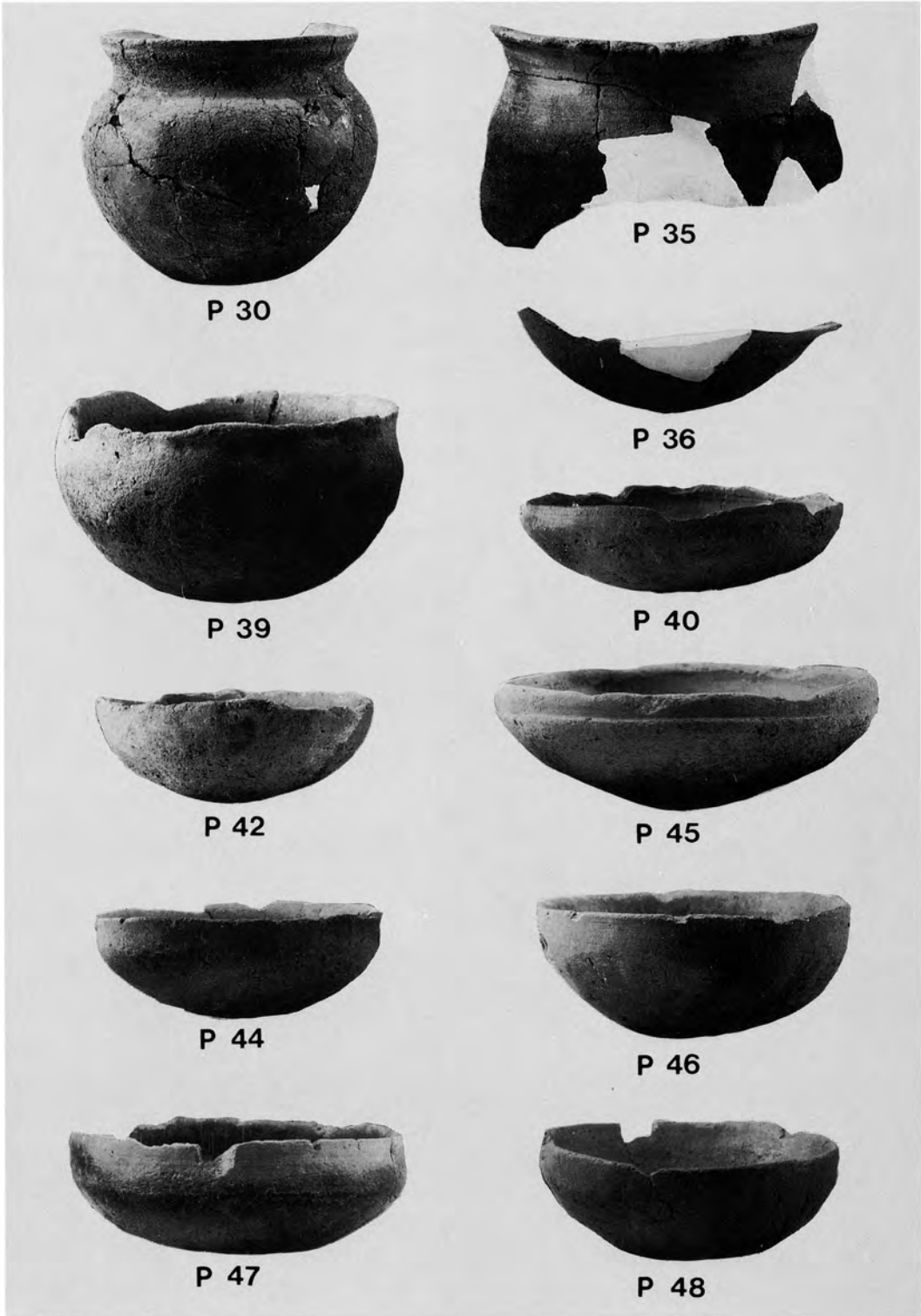


住居跡出土土器(1)

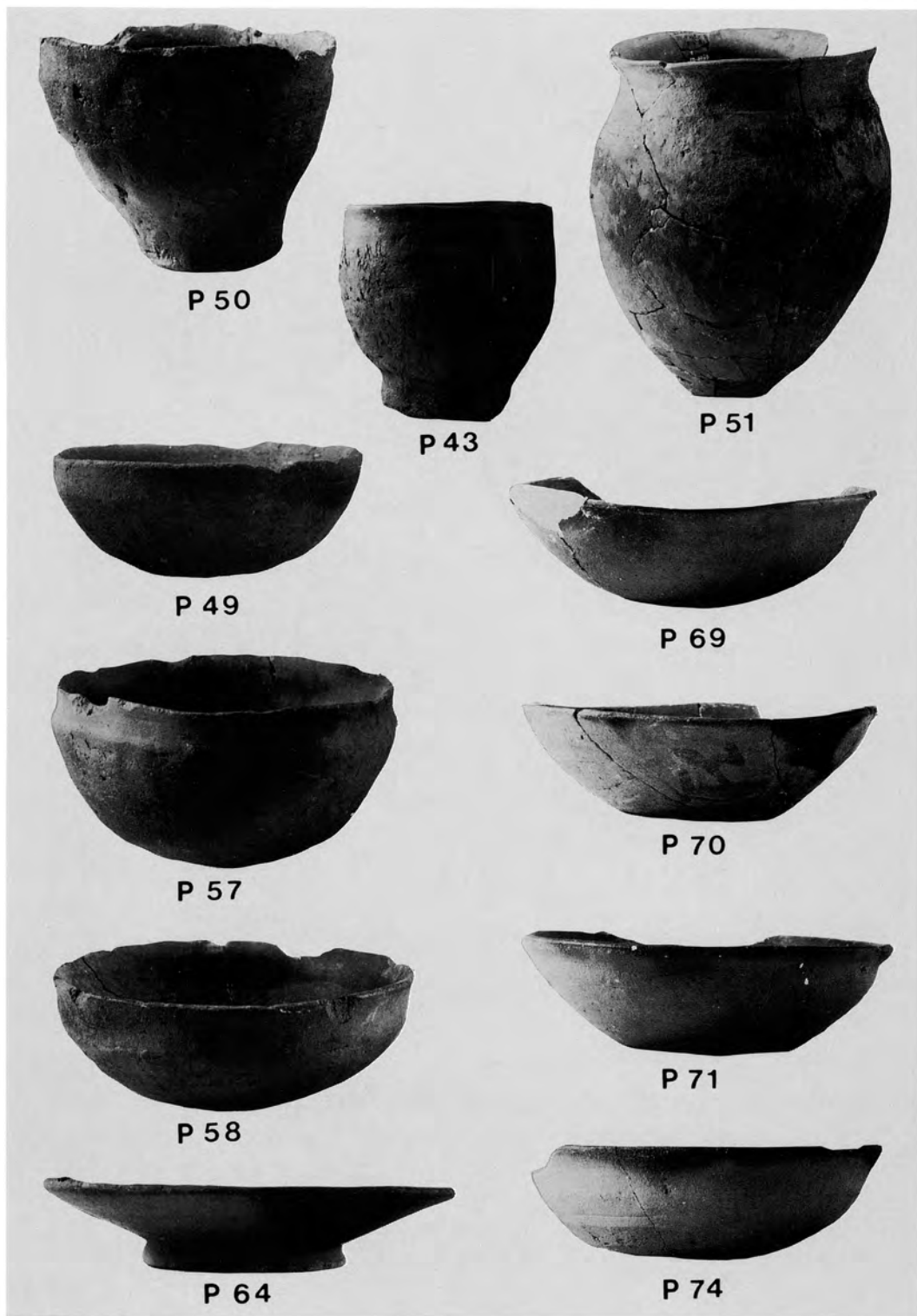


住居跡出土土器(2)



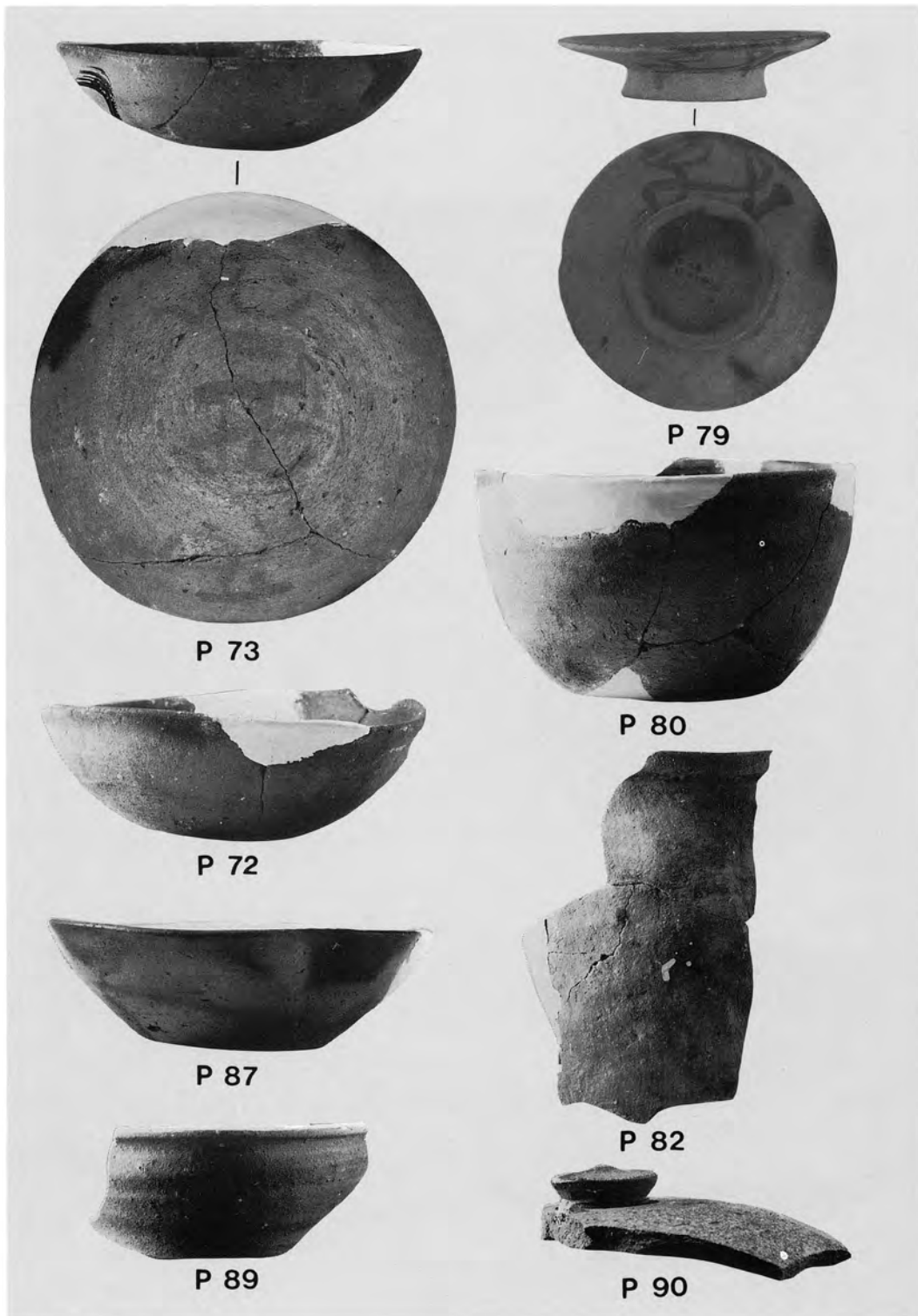


住居跡出土土器(3)

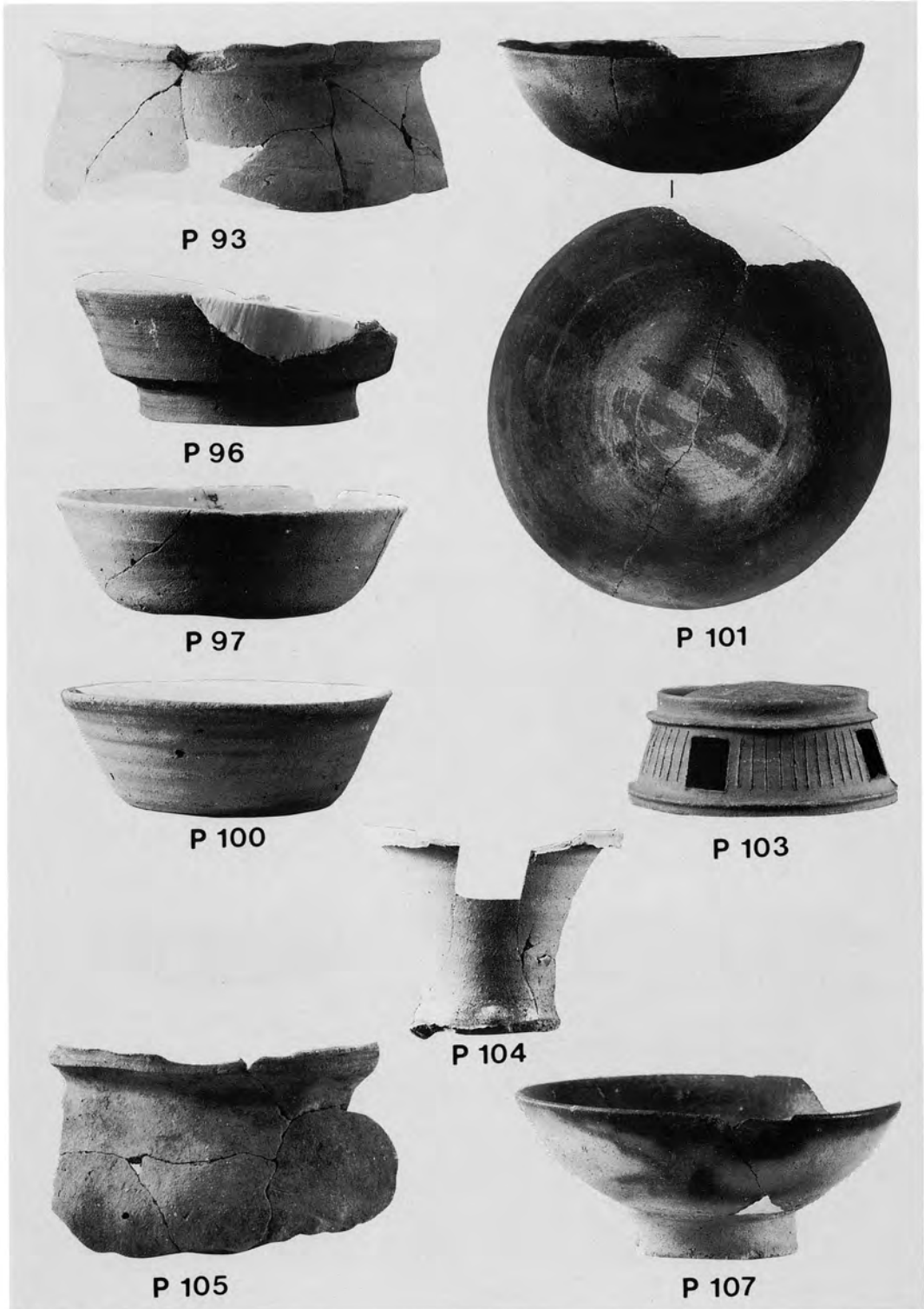


住居跡出土土器(4)

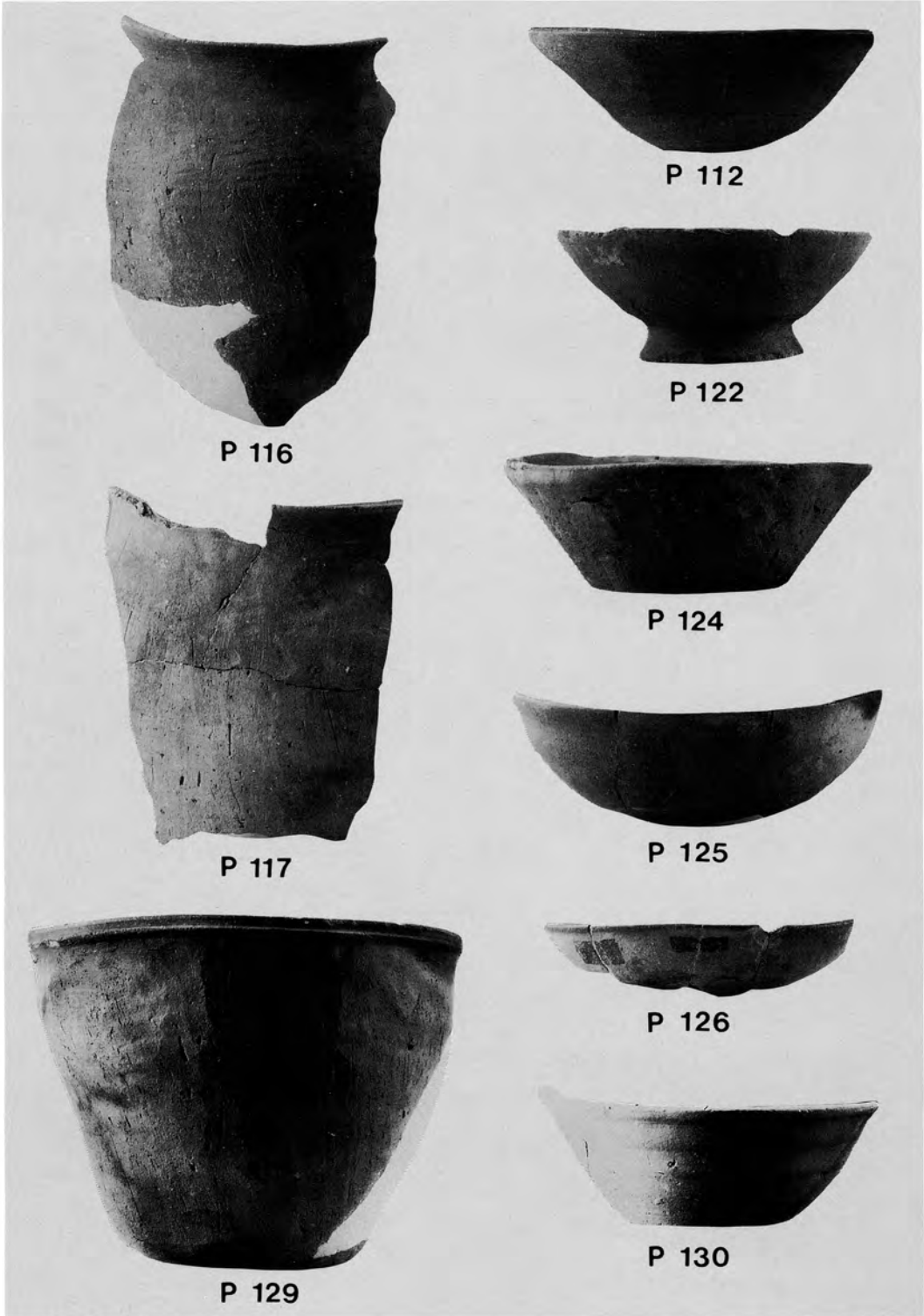




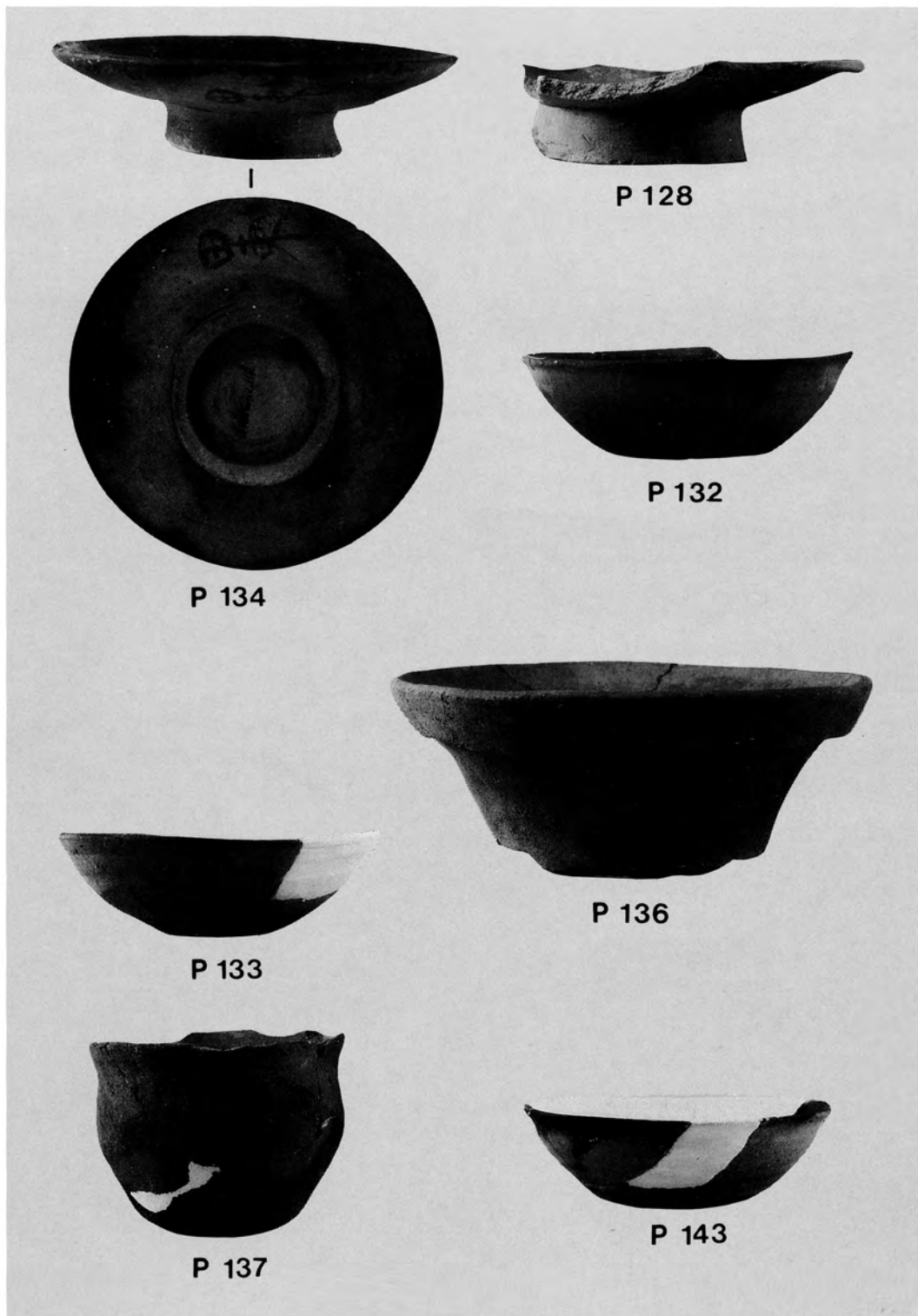
住居跡出土土器(5)



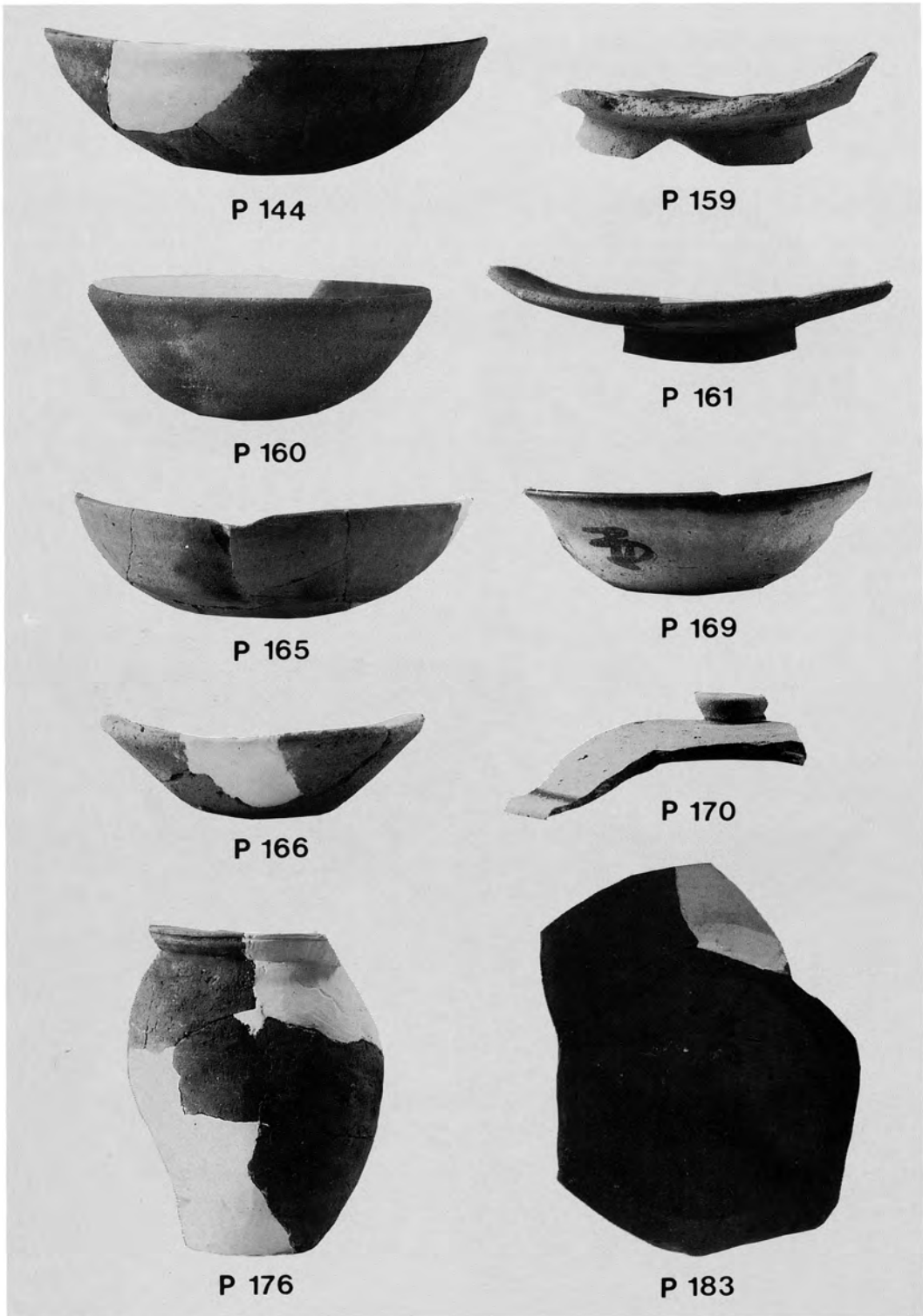
住居跡出土土器(6)



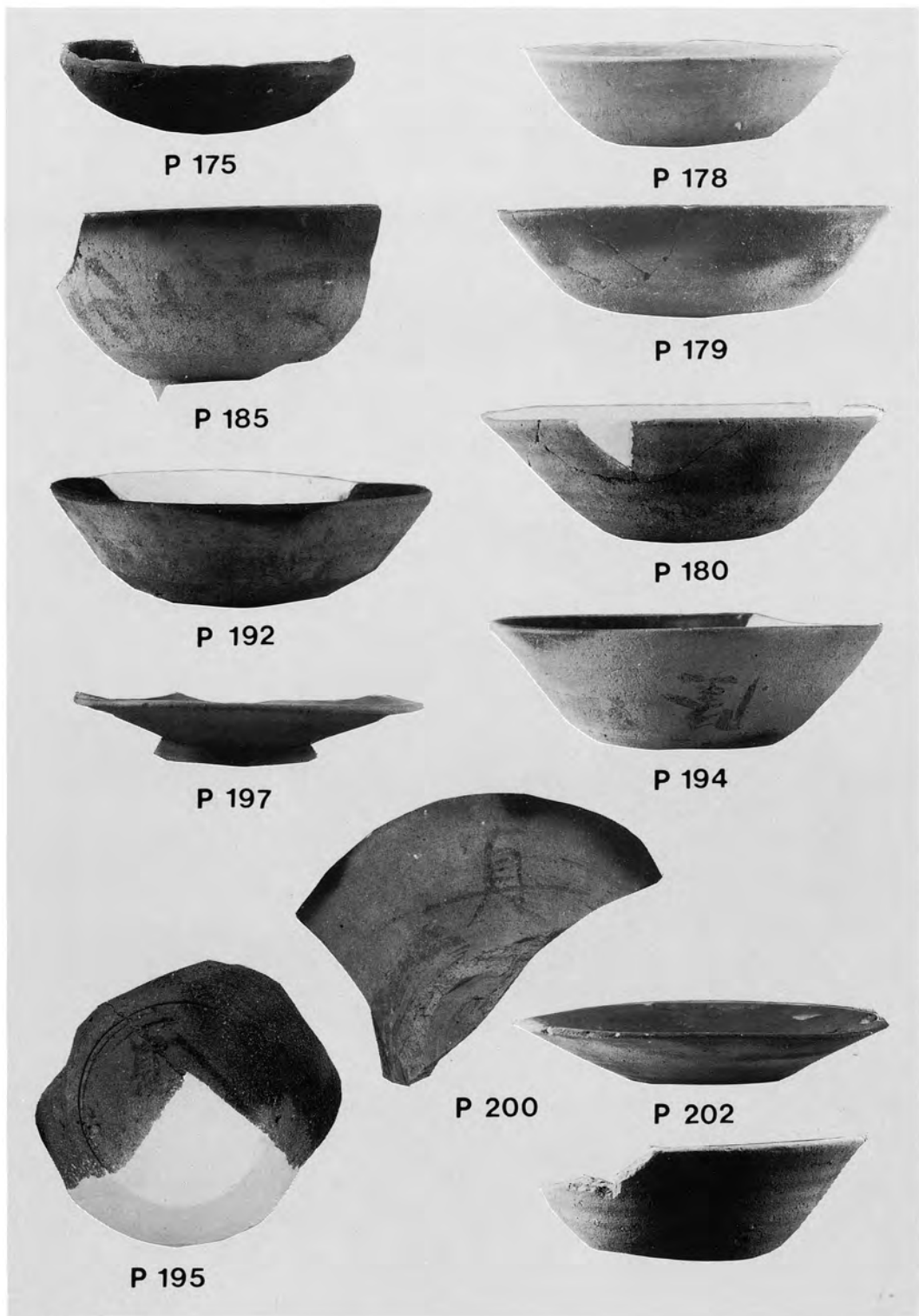
住居跡出土土器(7)



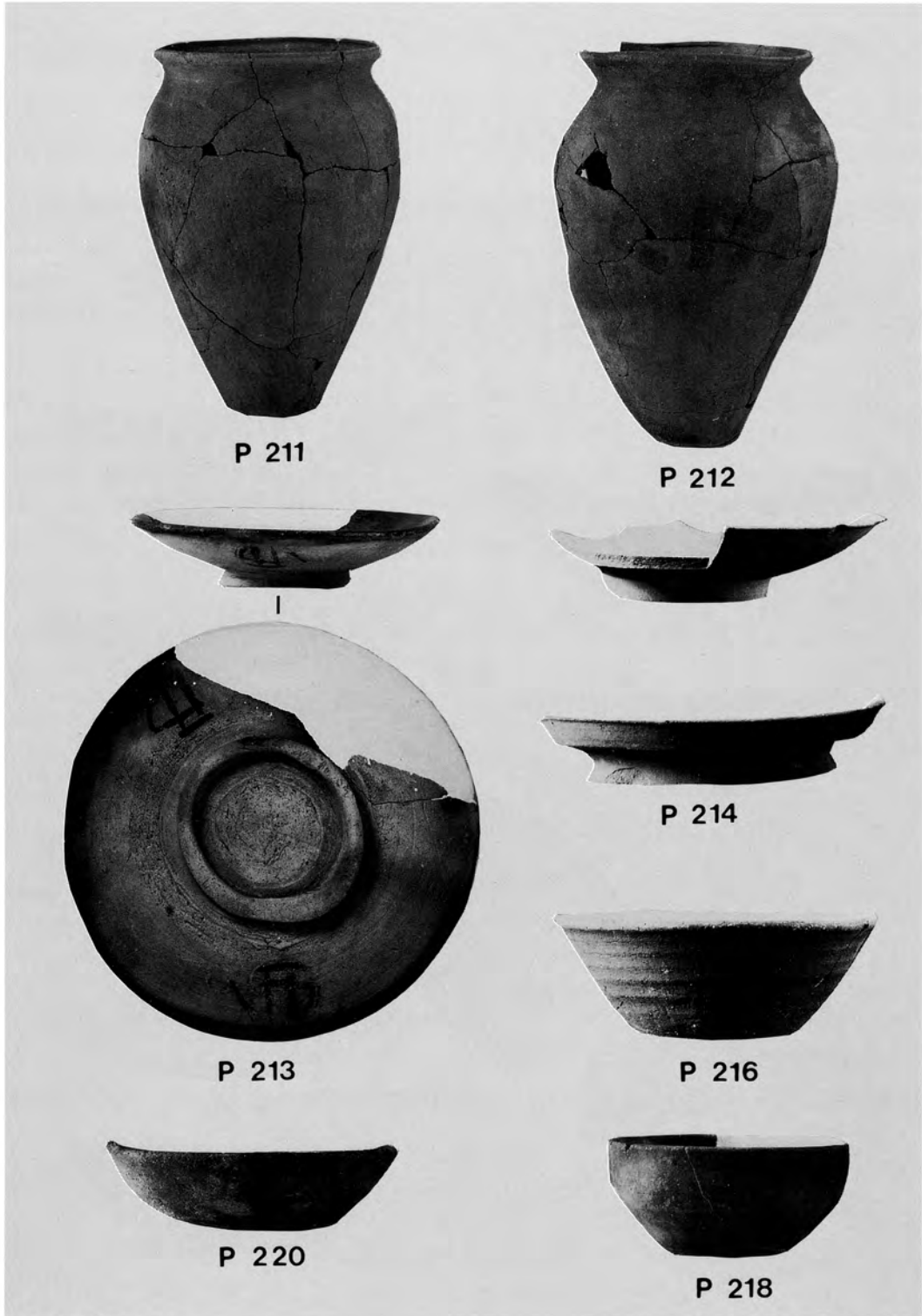
住居跡出土土器(8)



住居跡出土土器(9)

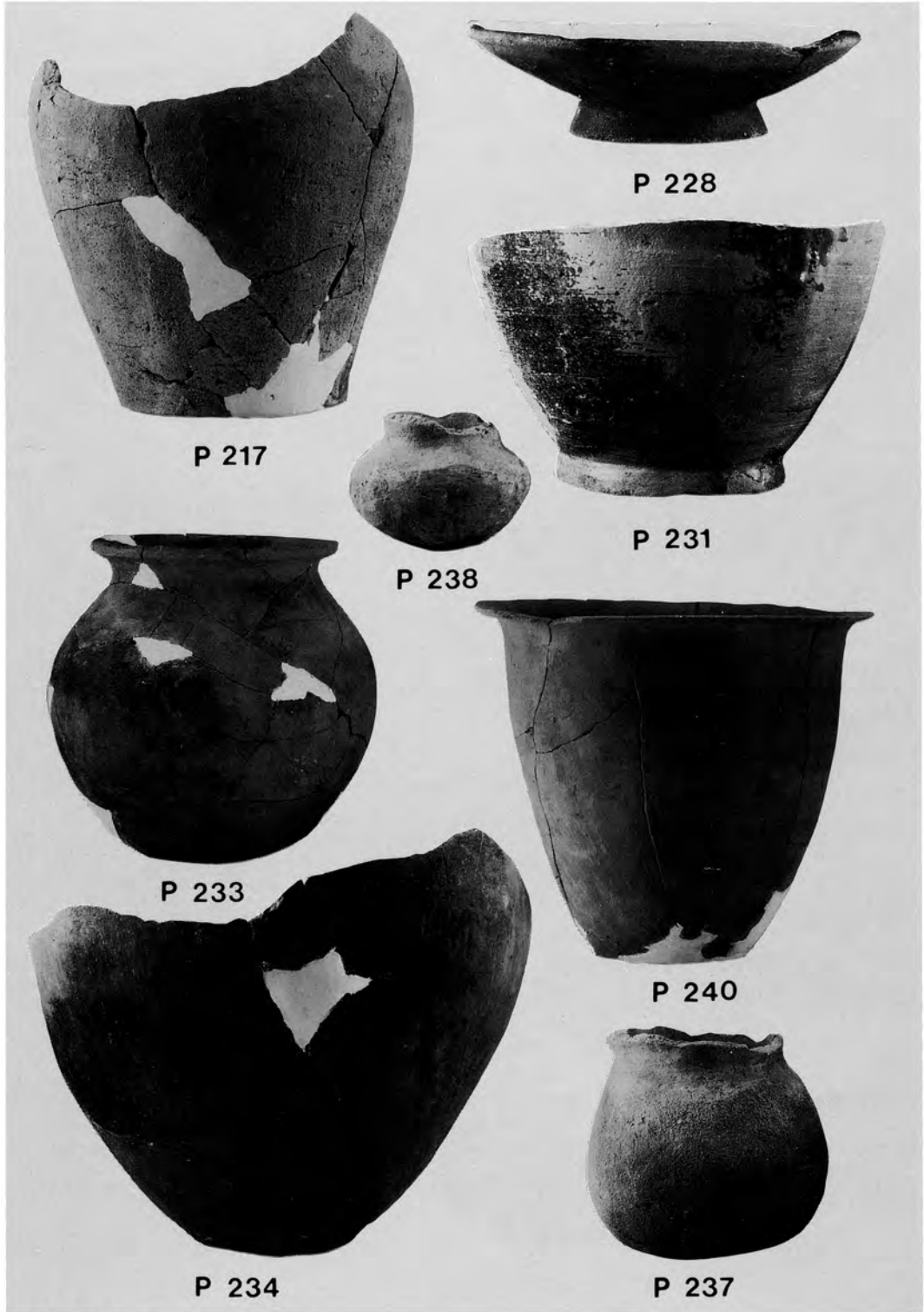


住居跡出土土器(10)



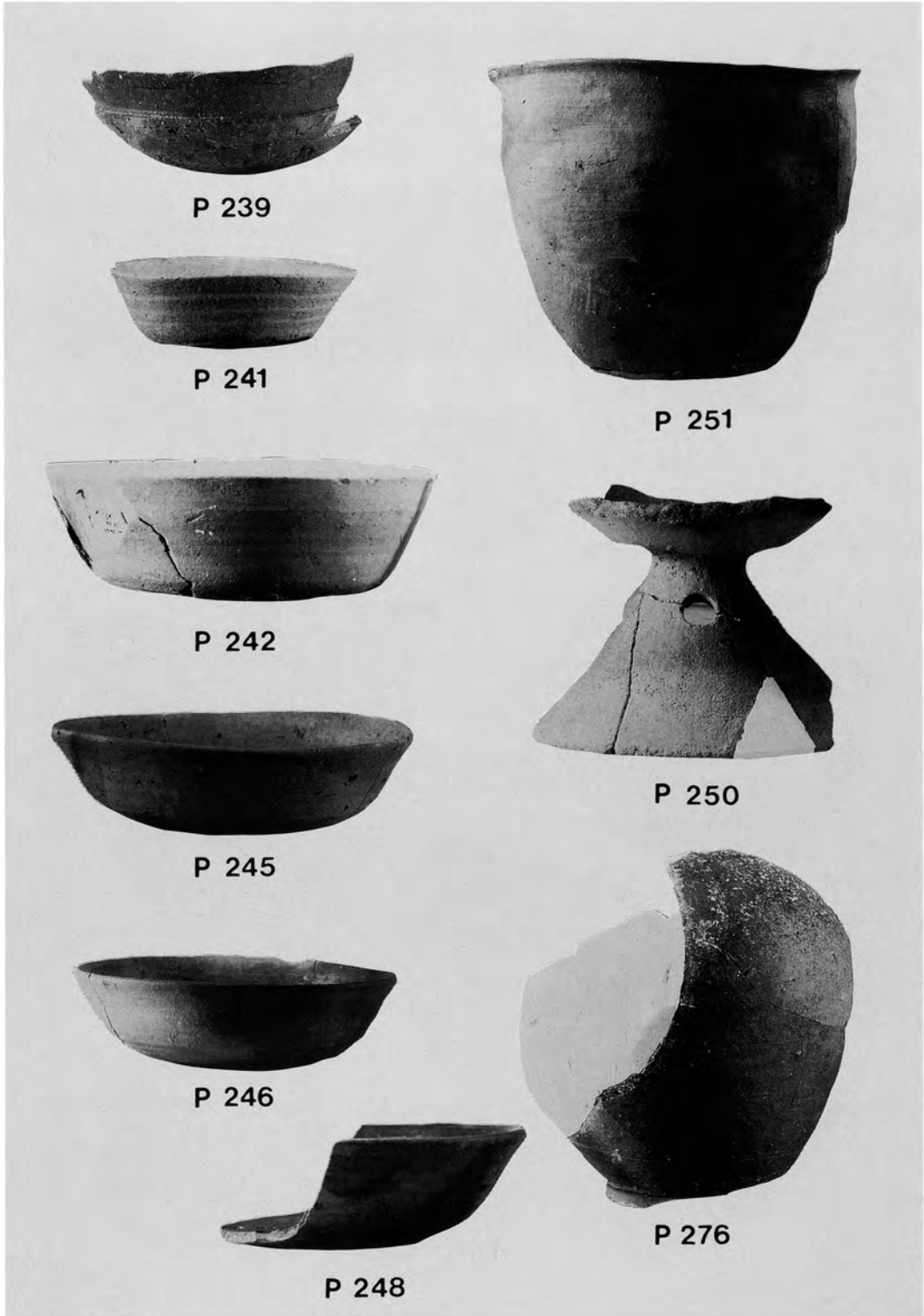
住居跡出土土器(11)



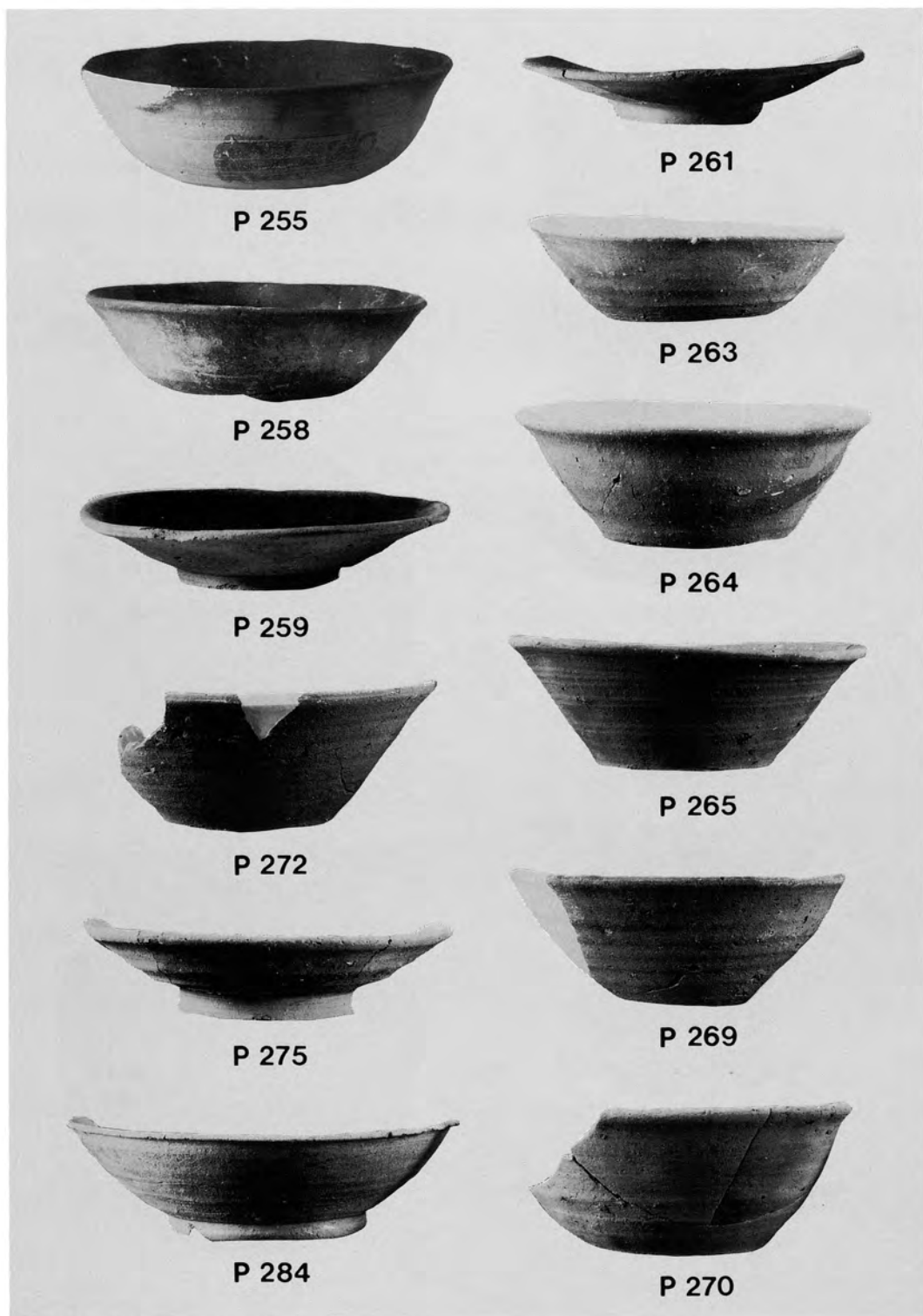


住居跡出土土器(12)

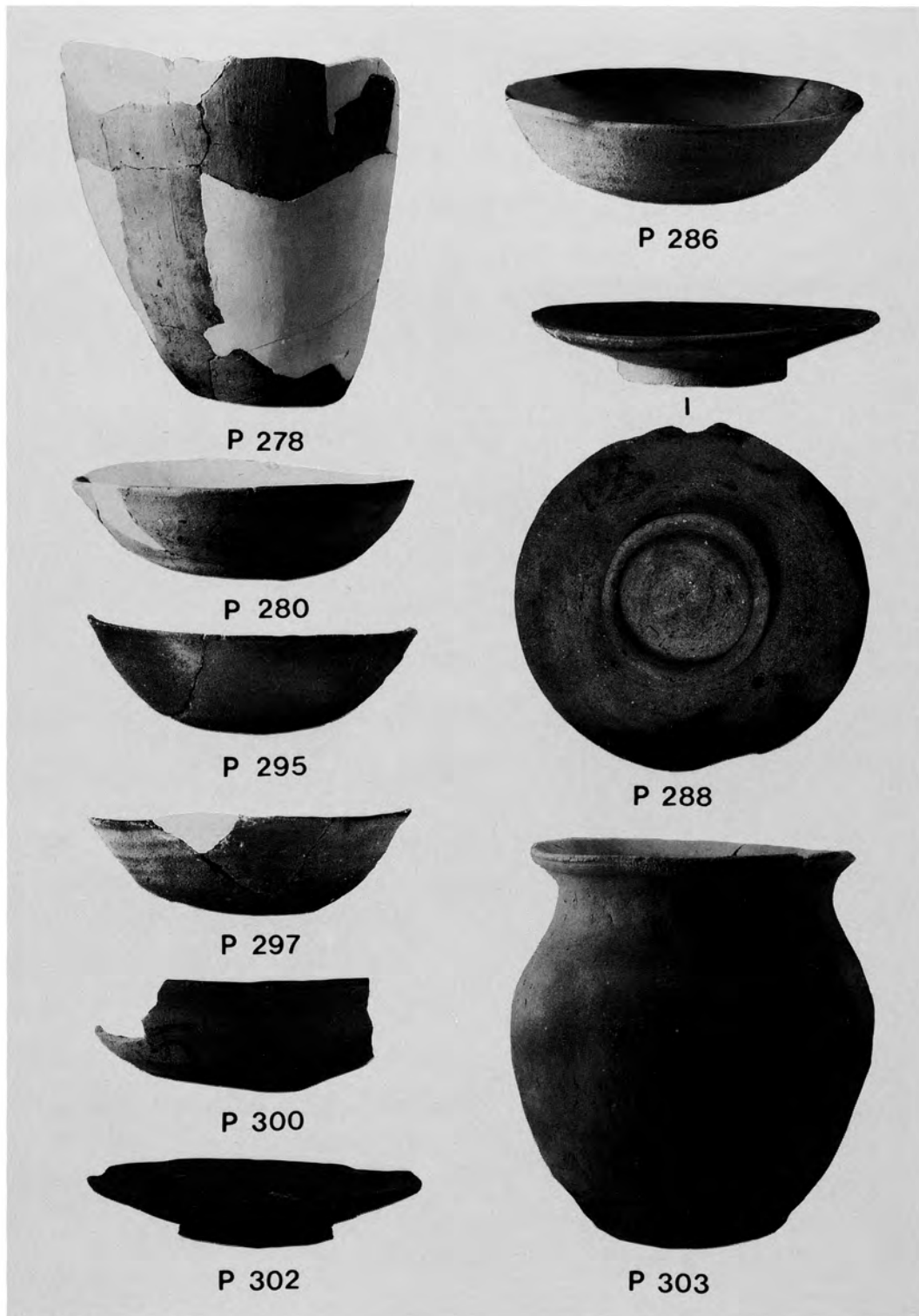




住居跡出土土器(13)



住居跡出土土器(14)



住居跡出土土器(15)



P 298



P 299



P 306



P 307



P 308



P 315



P 304



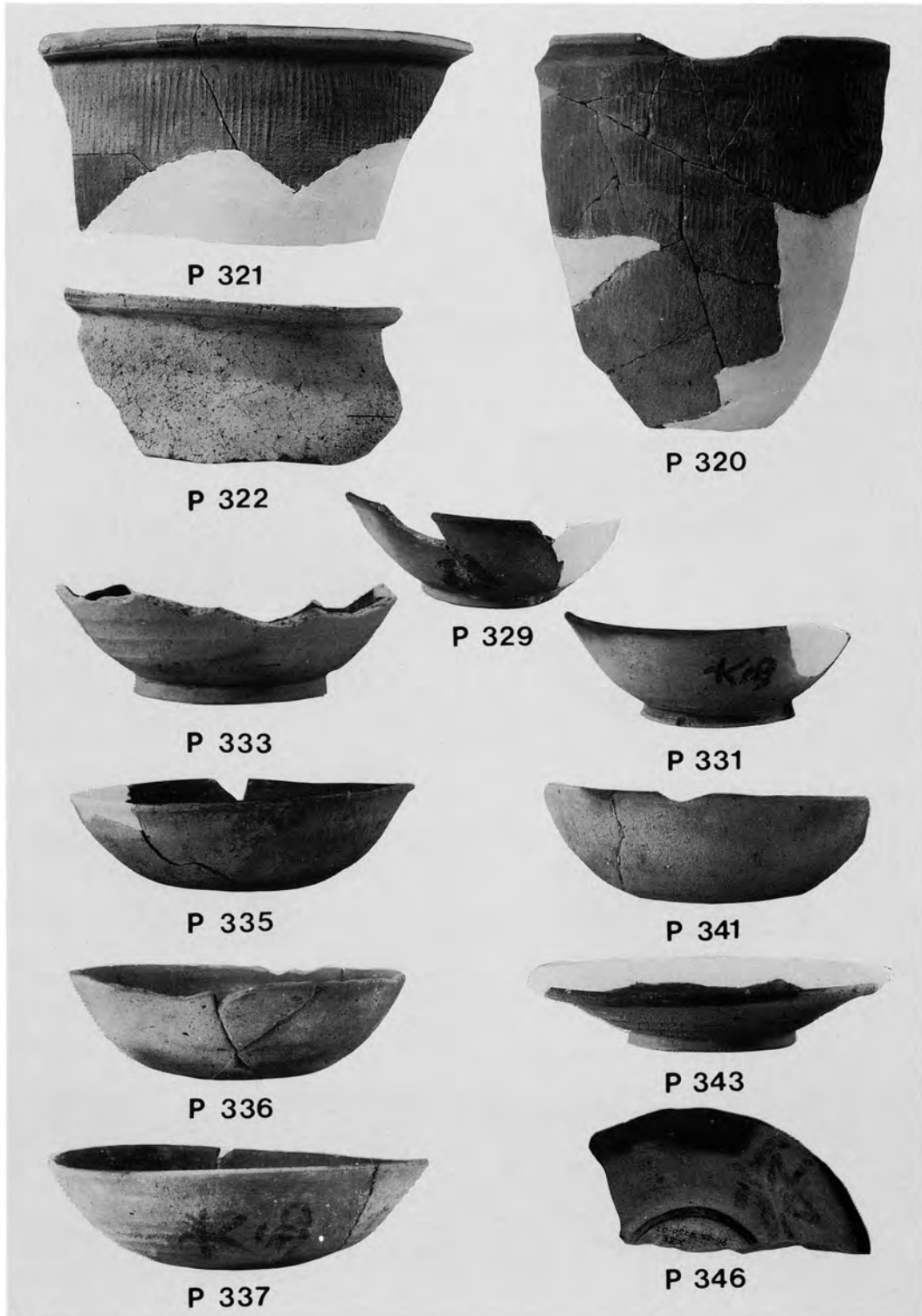
P 310



P 314



P 316



住居跡出土土器(17)



住居跡出土土器(18)



P 397



P 398



P 369



P 386



P 375



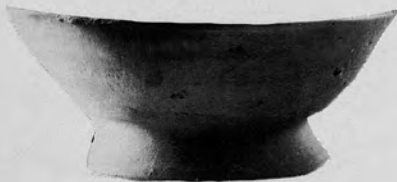
P 393



P 377



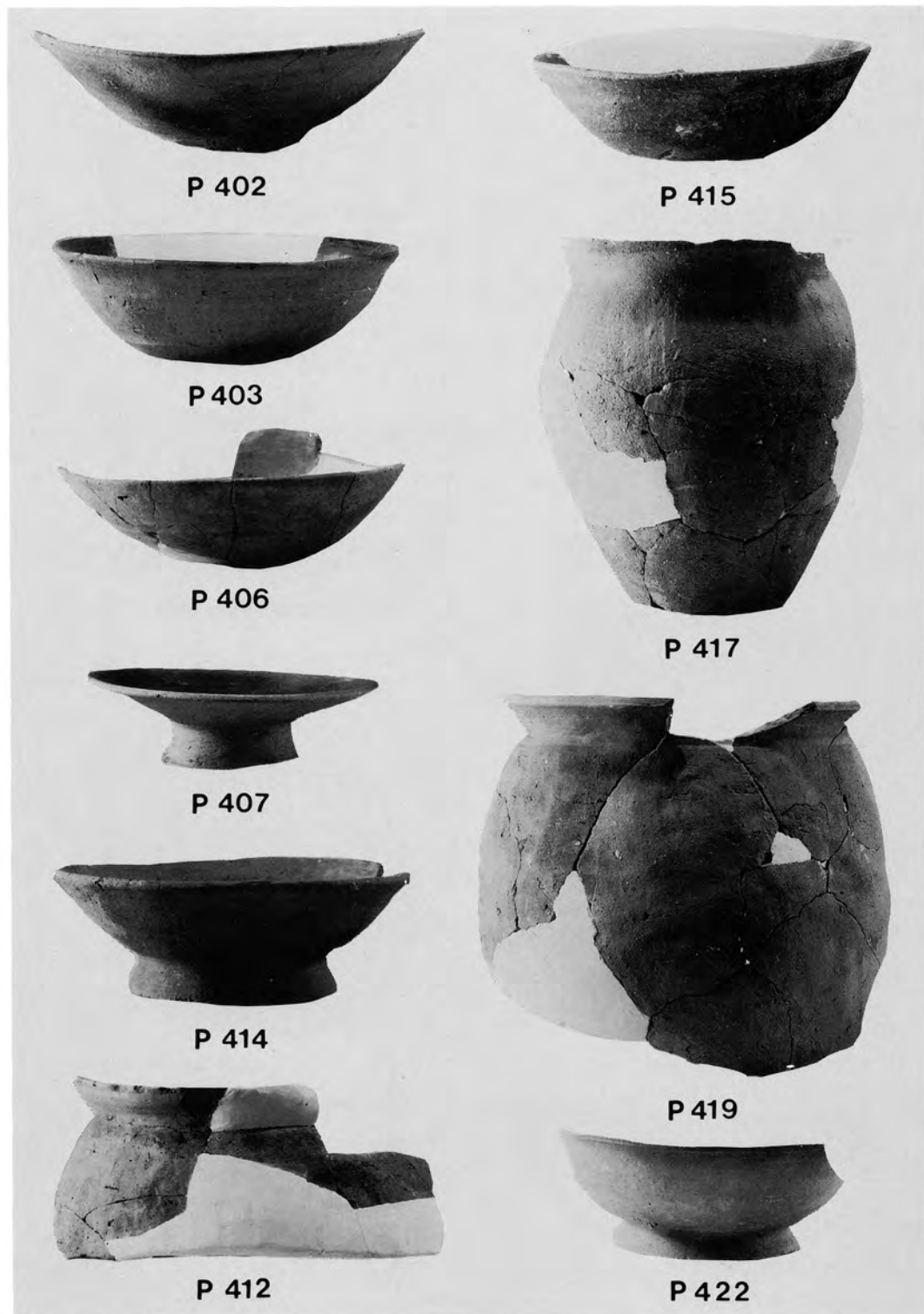
|



P 385

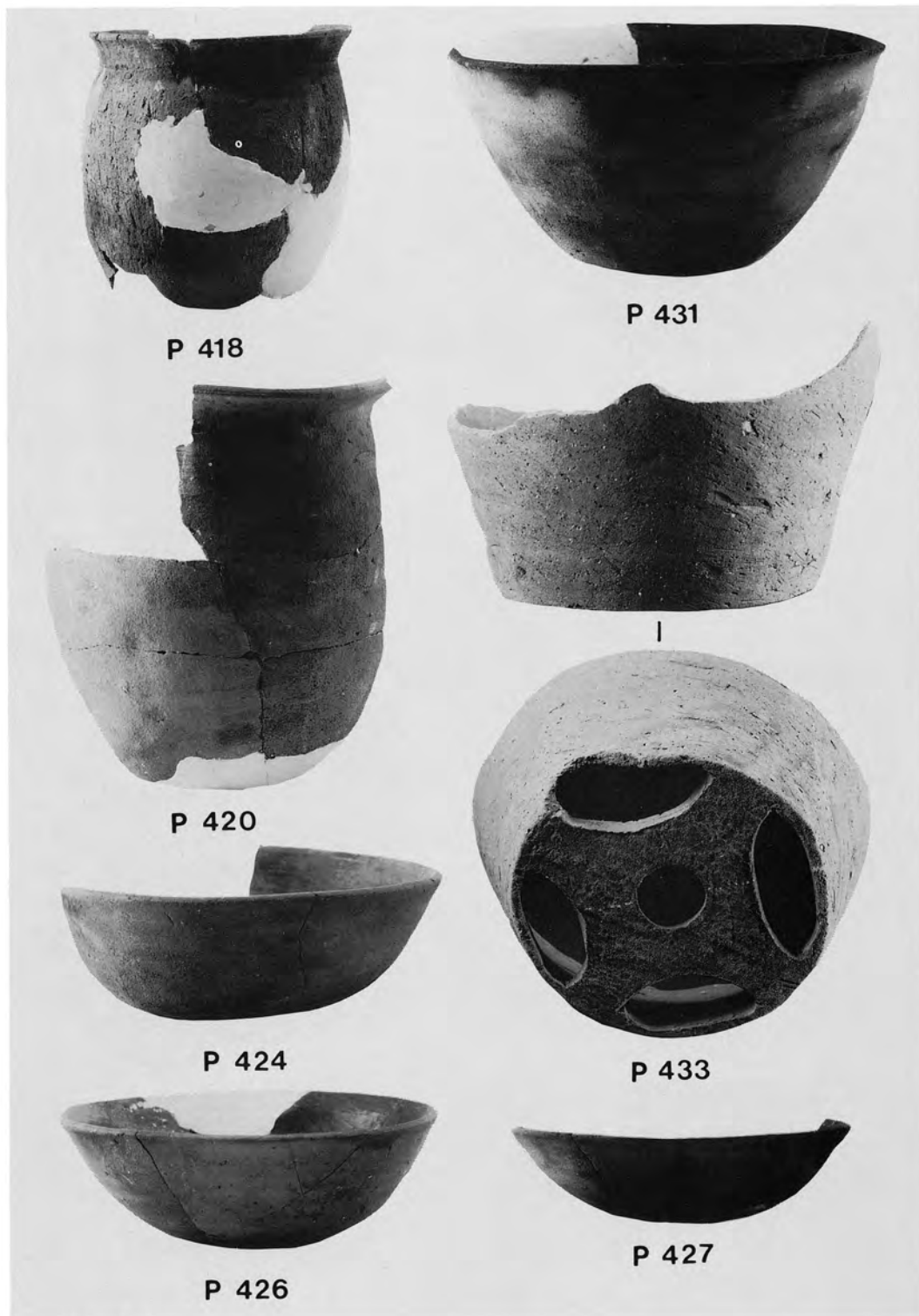


P 408

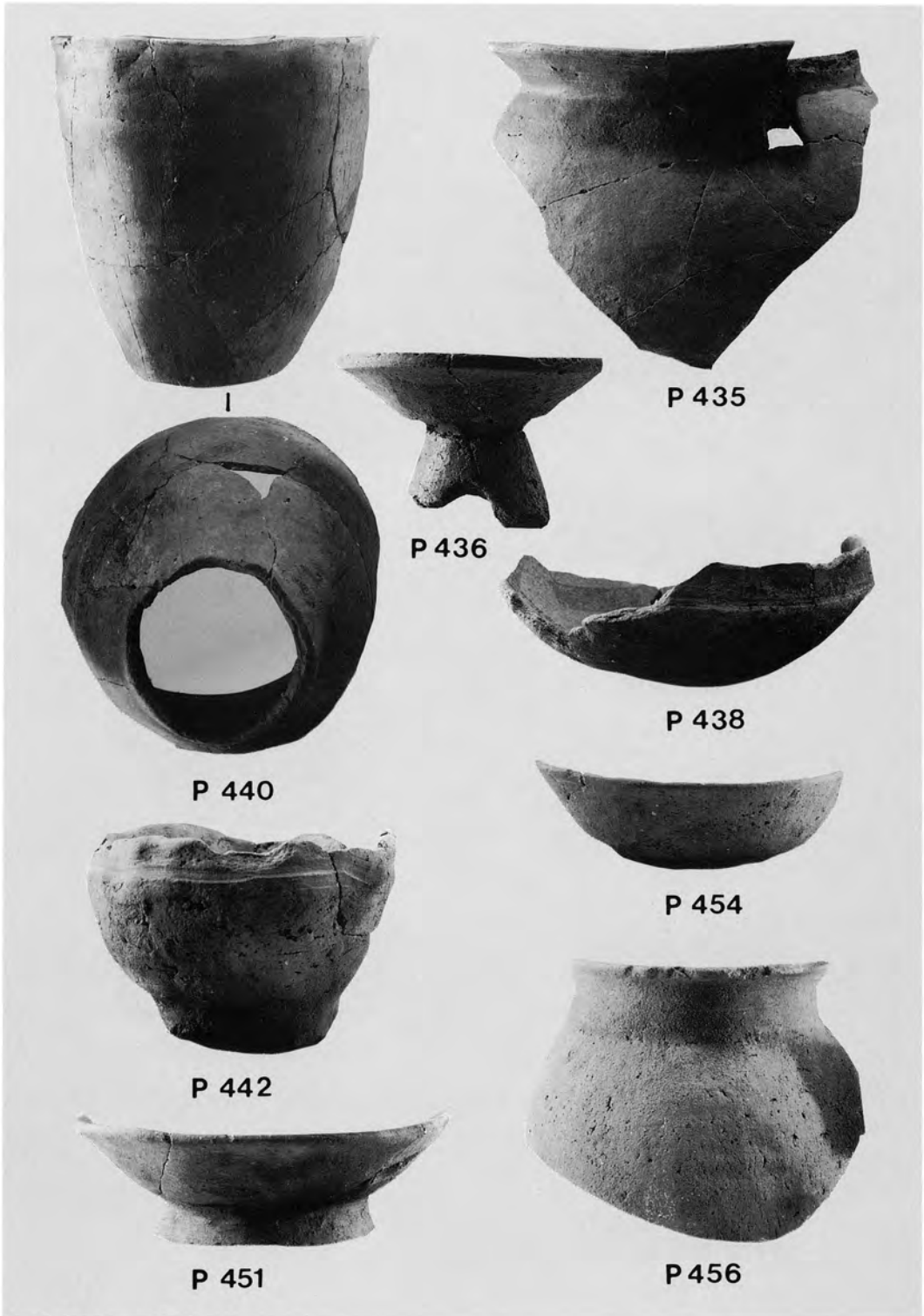


住居跡出土土器(20)

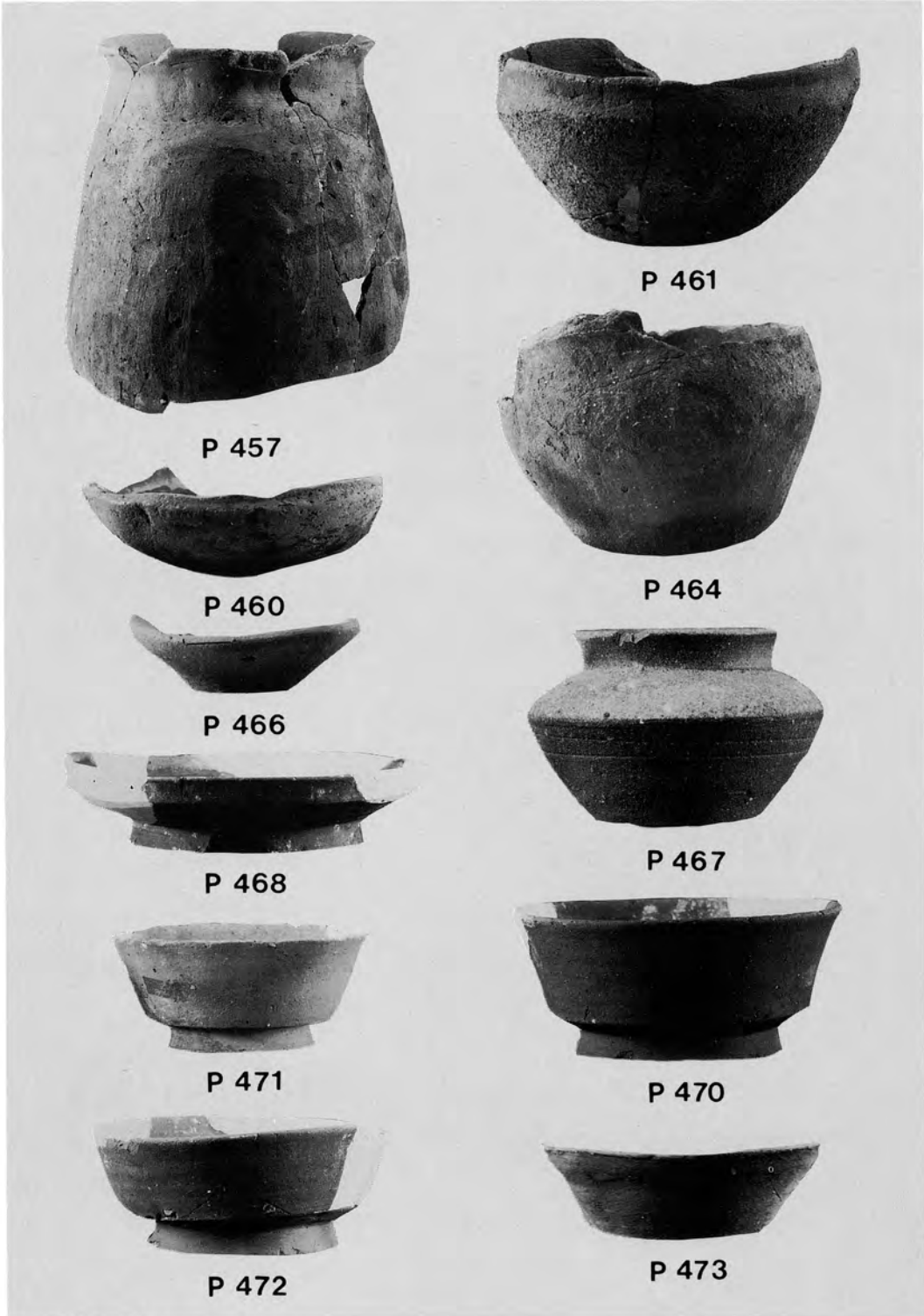




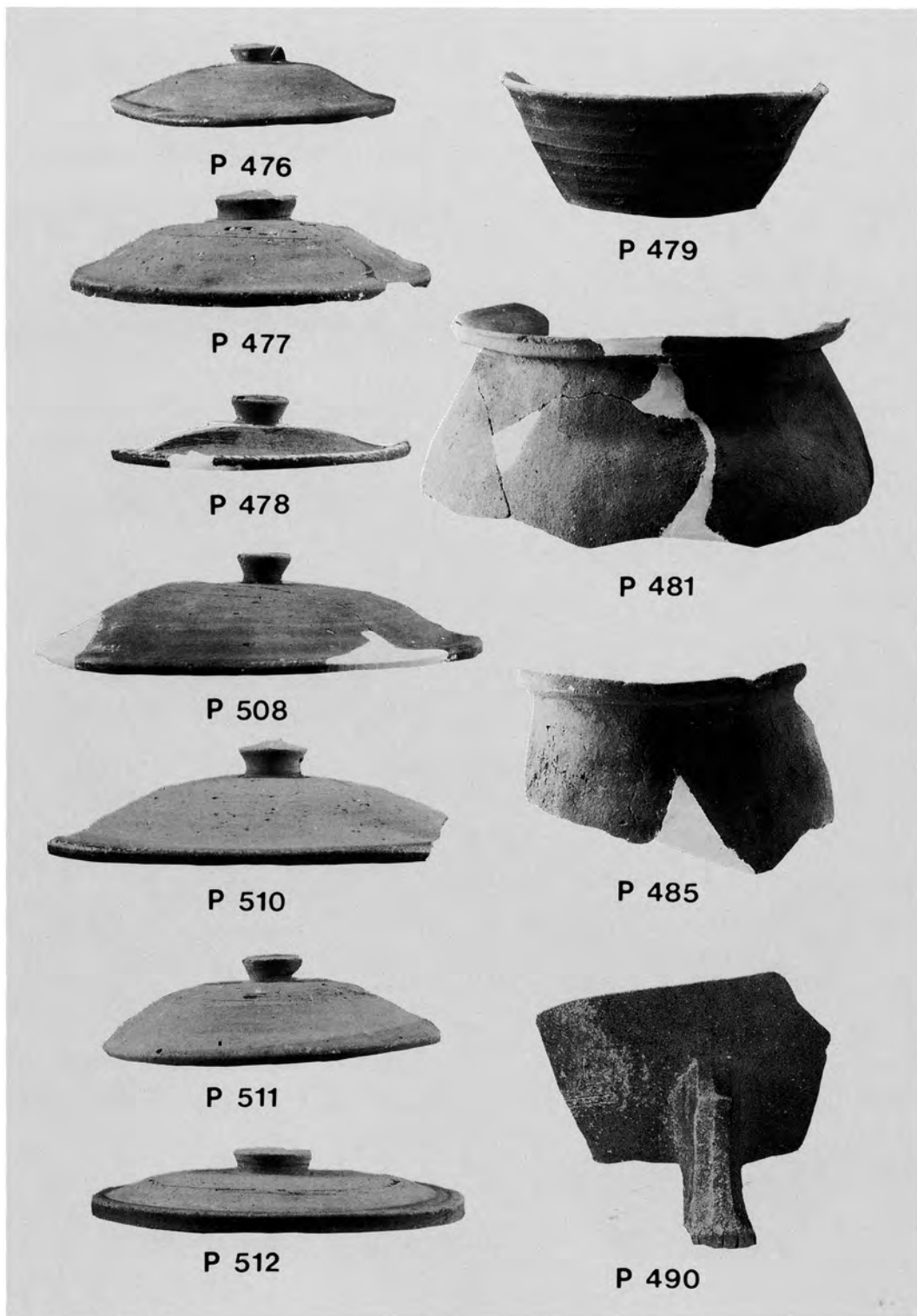
住居跡出土土器(21)



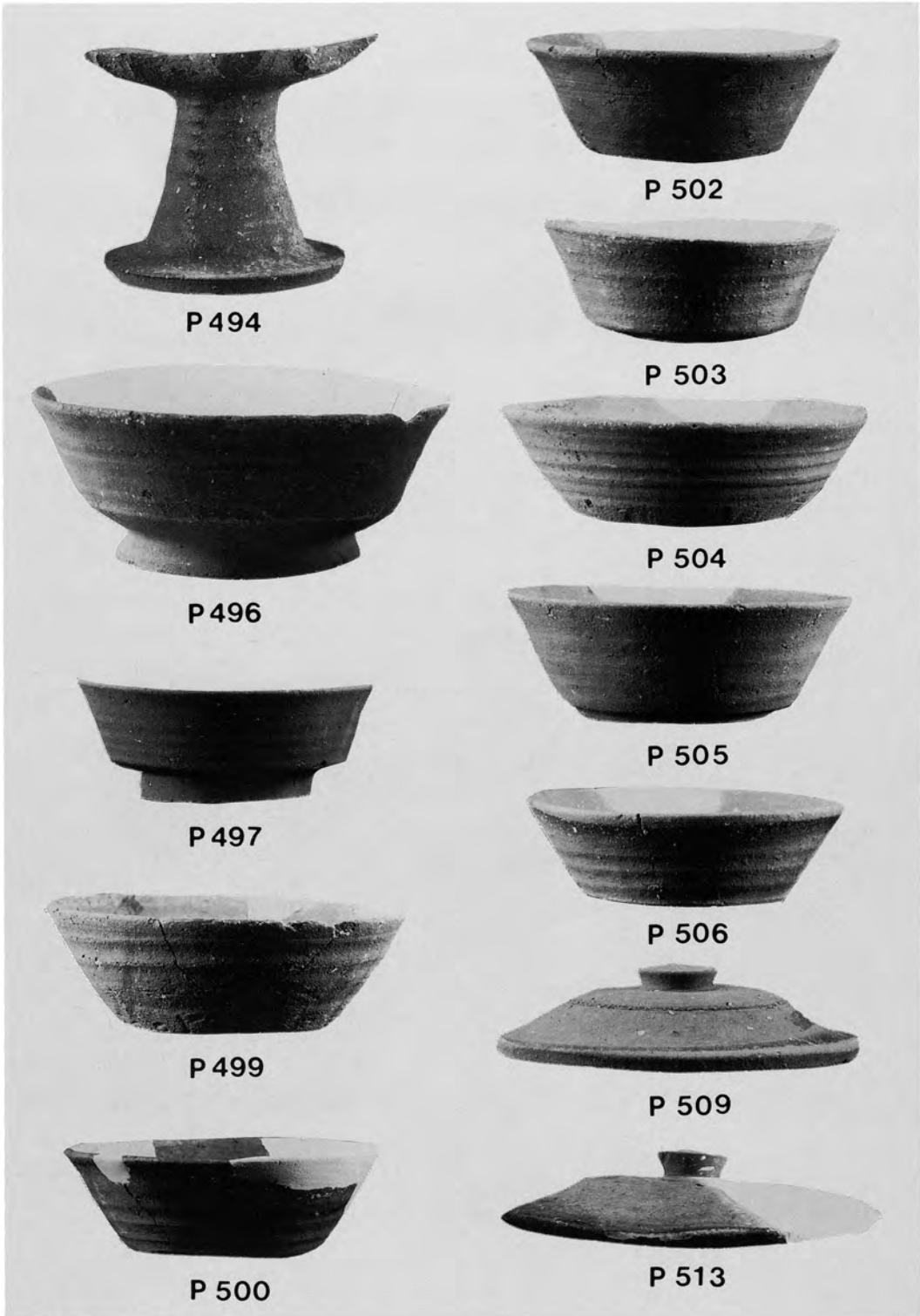
住居跡出土土器(2)



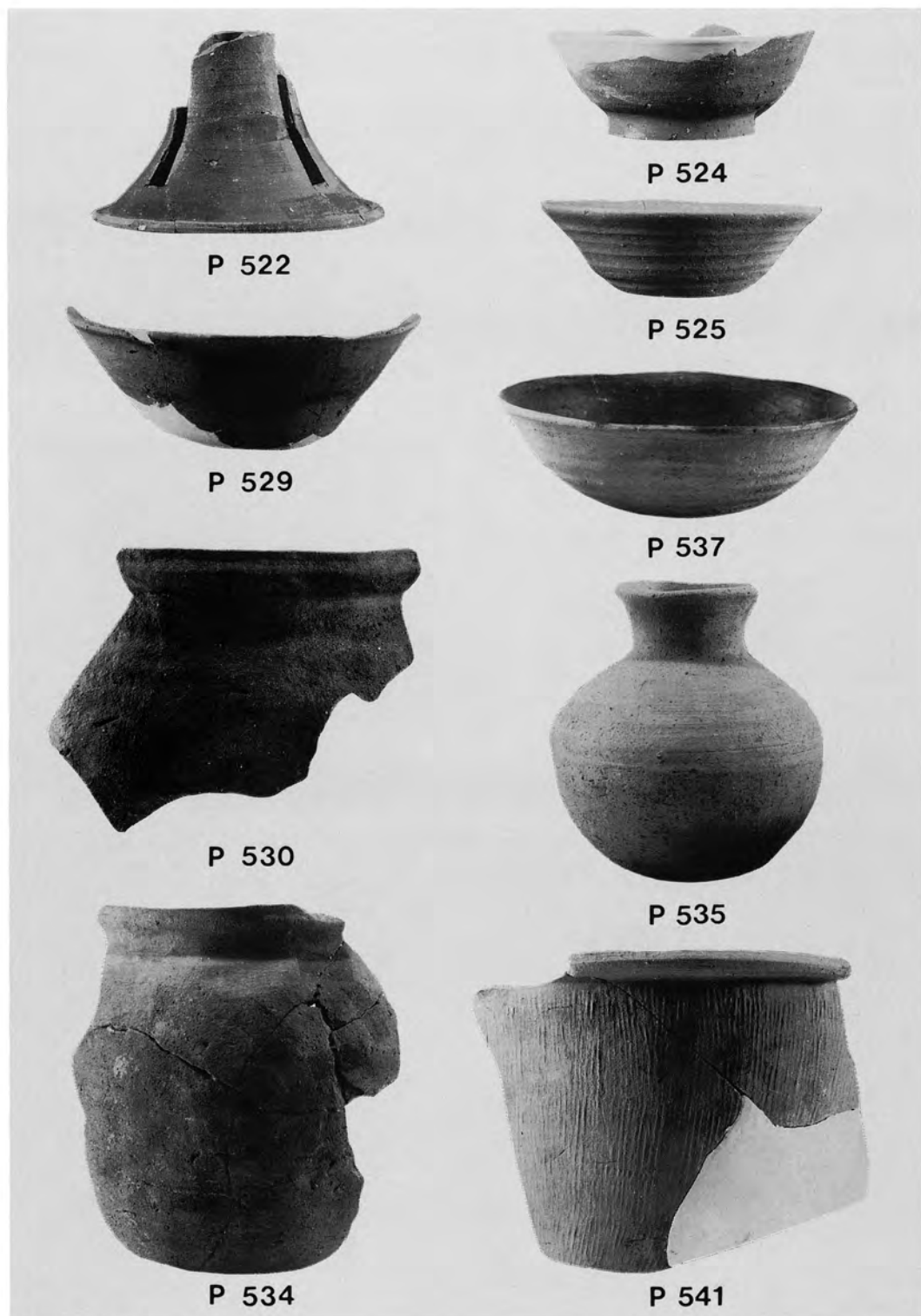
住居跡出土土器(23)



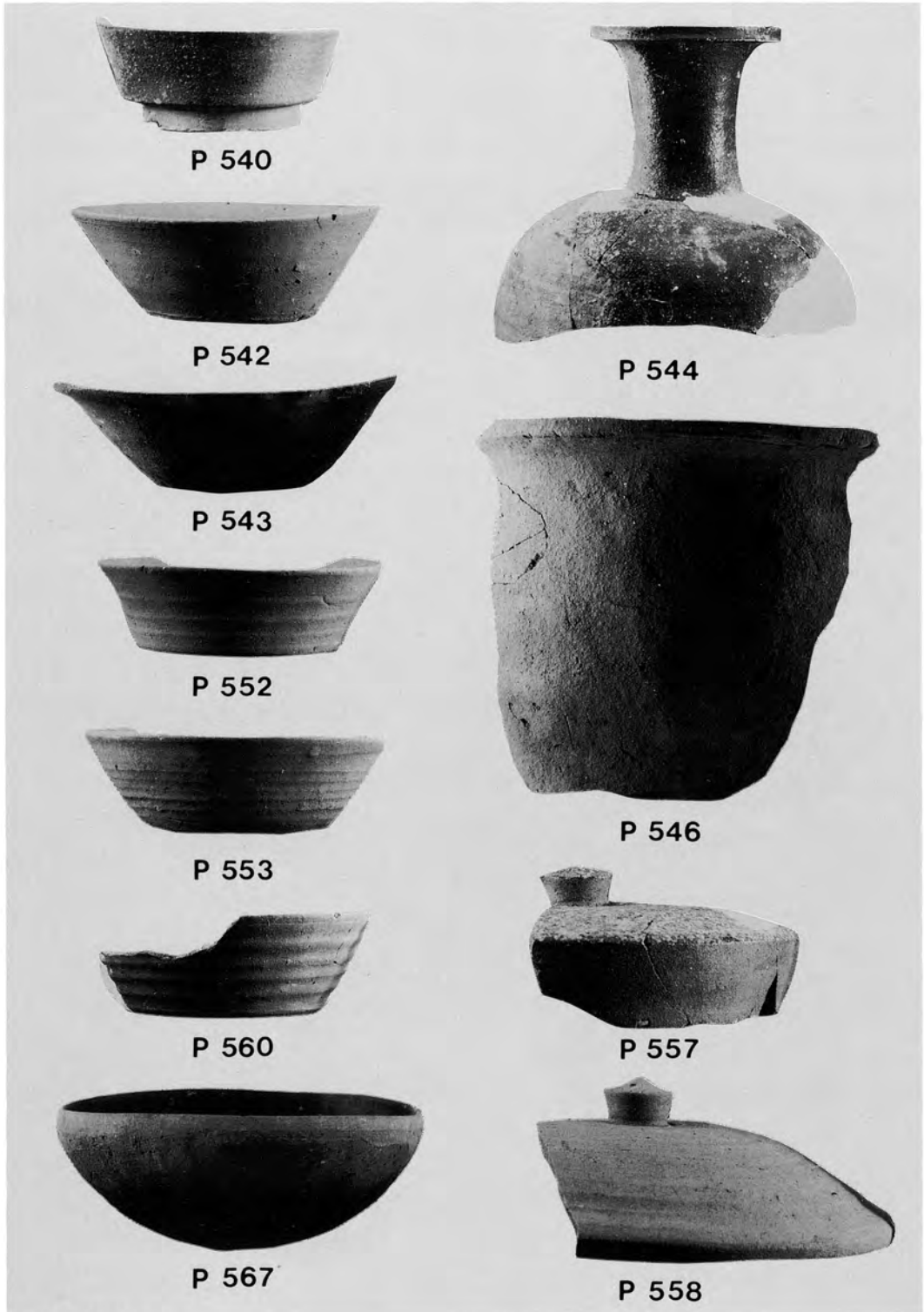
住居跡出土土器(24)



住居跡出土土器(25)

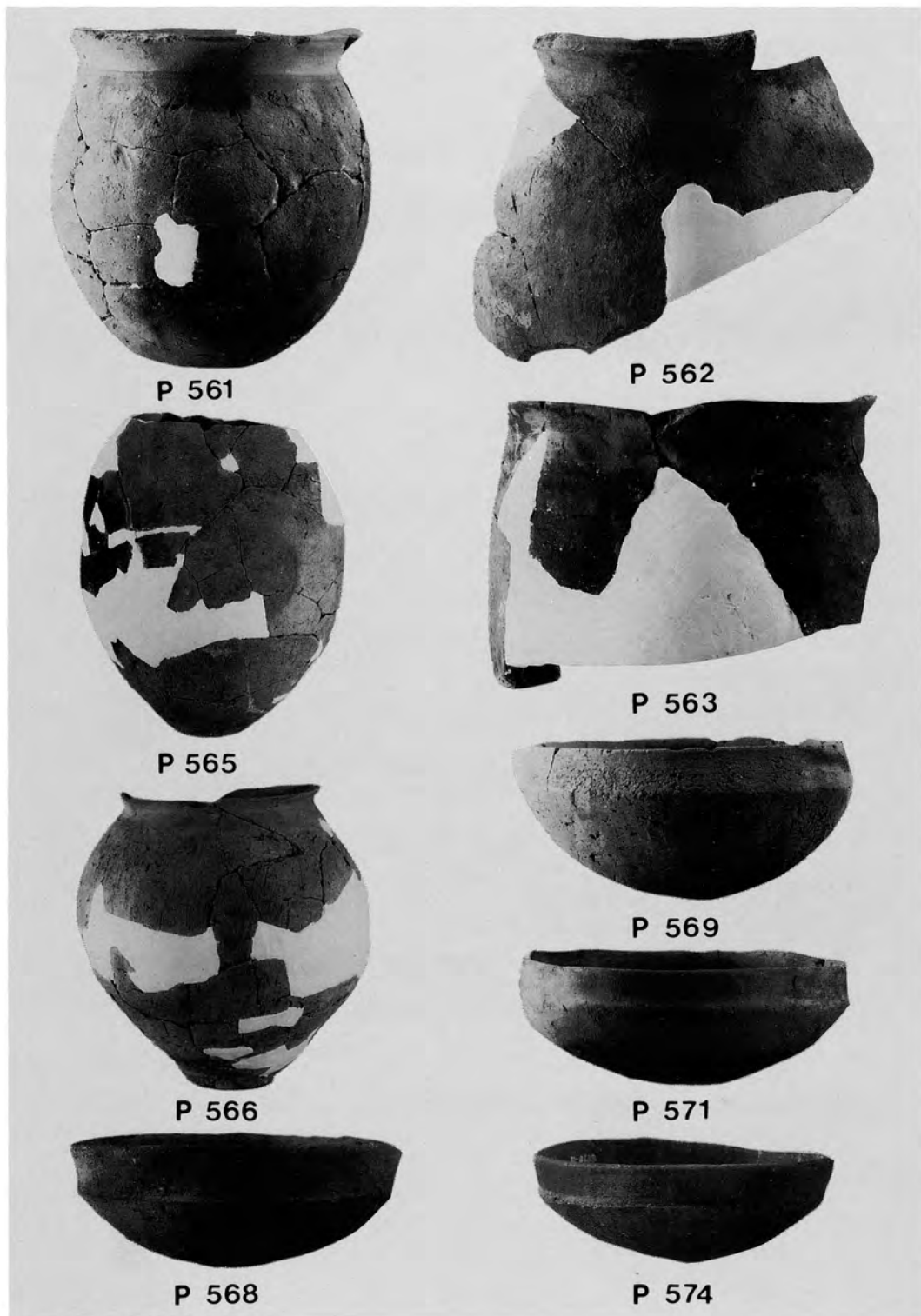


住居跡出土土器(26)



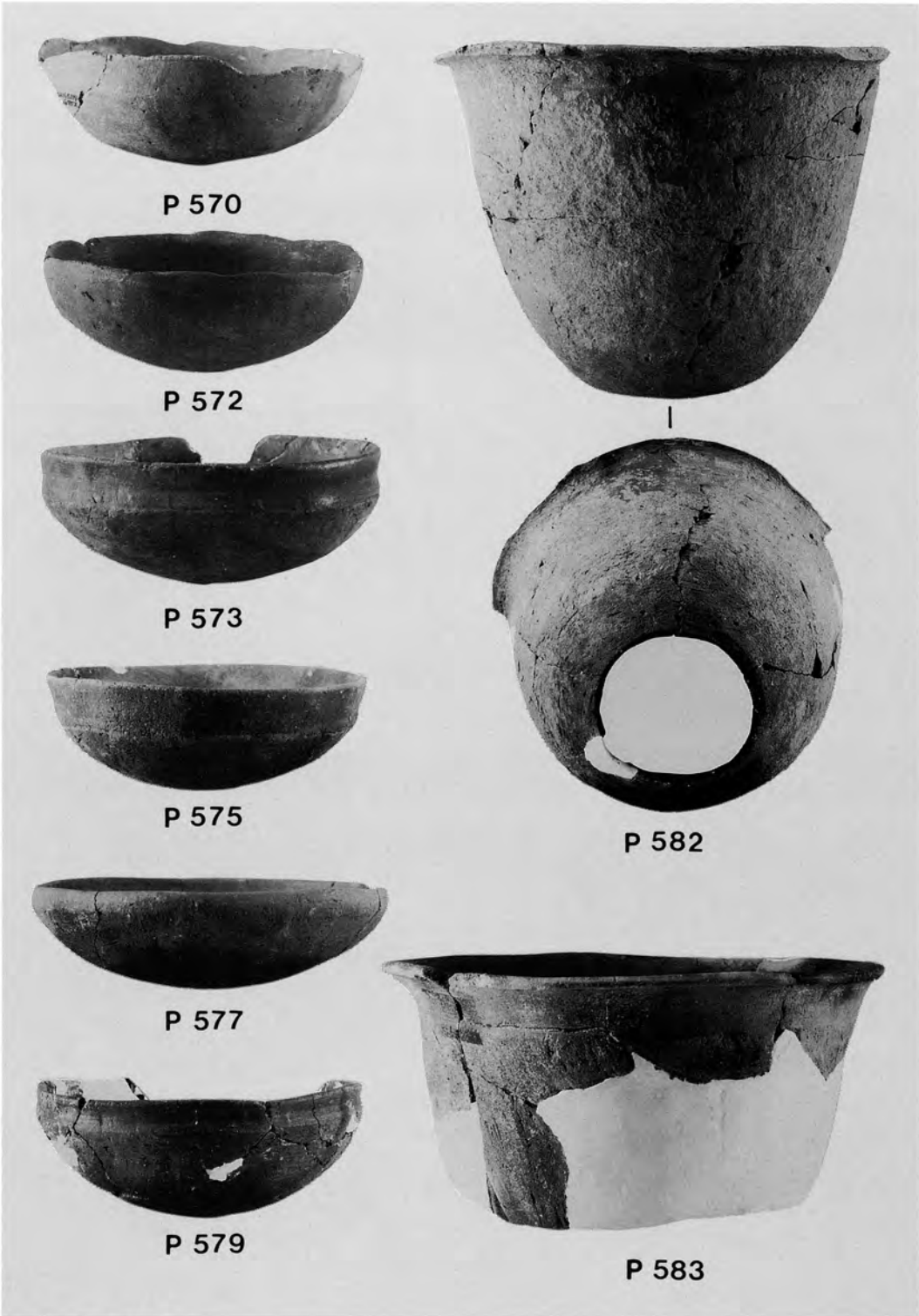
住居跡出土土器(27)



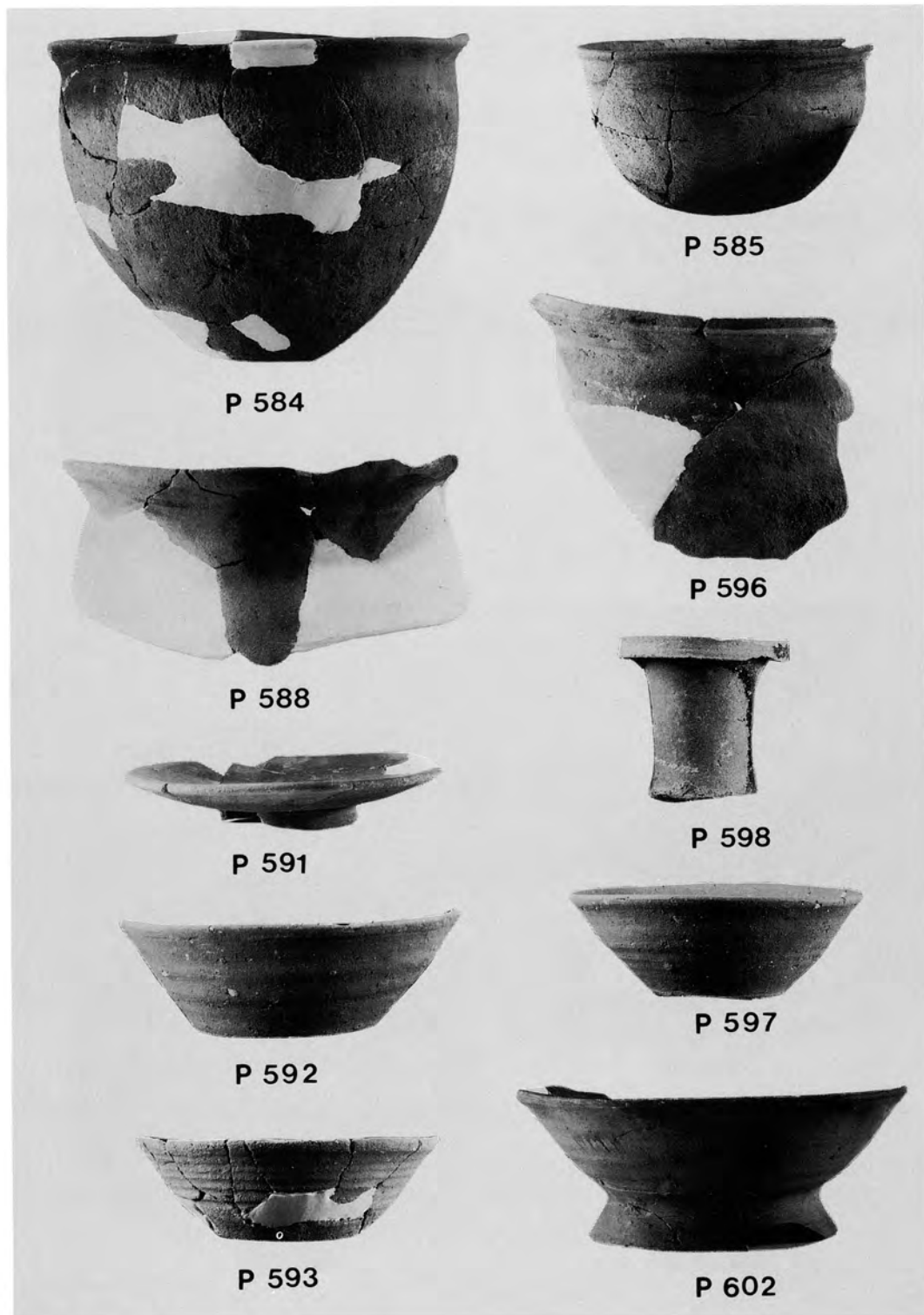


住居跡出土土器(28)

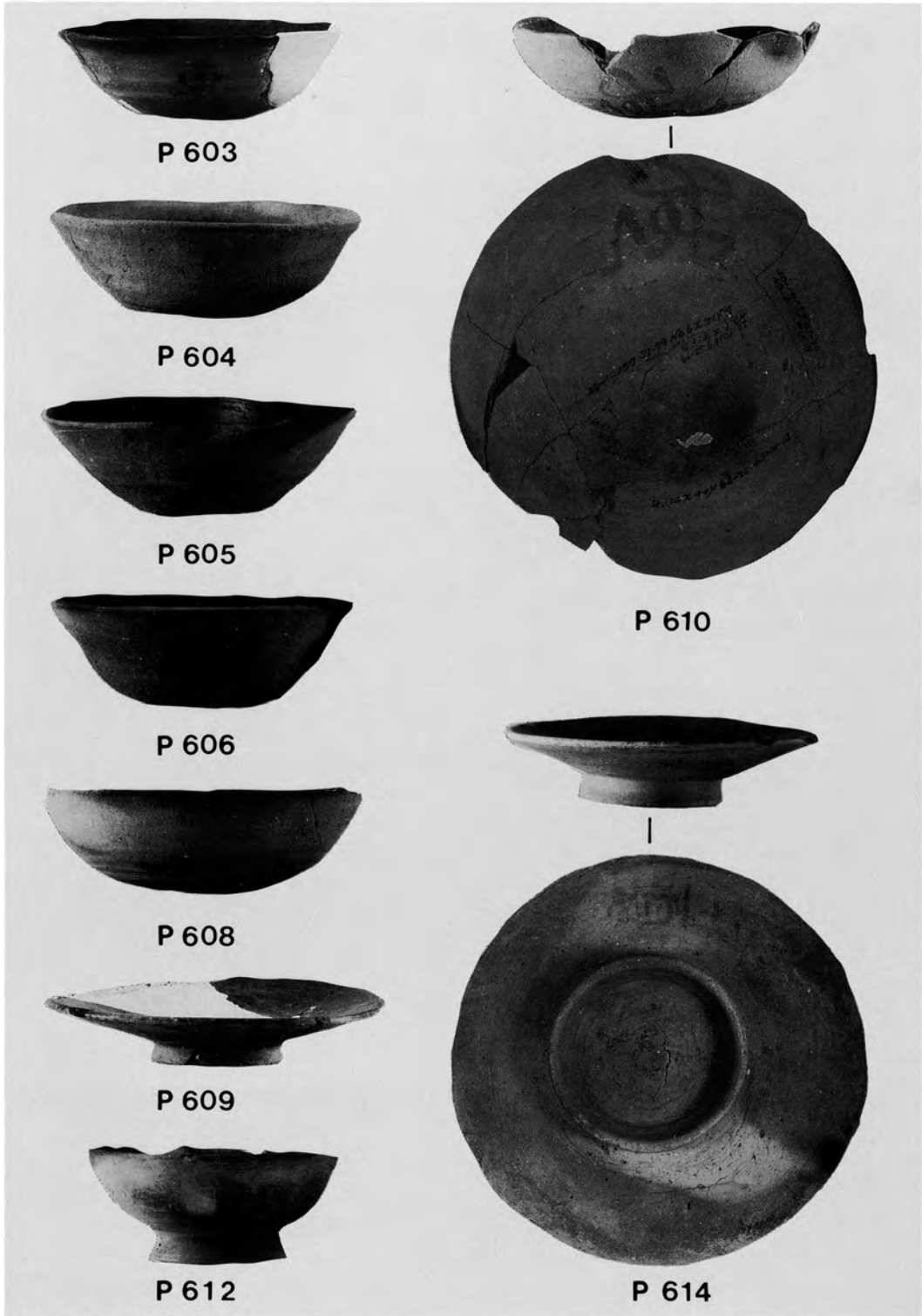




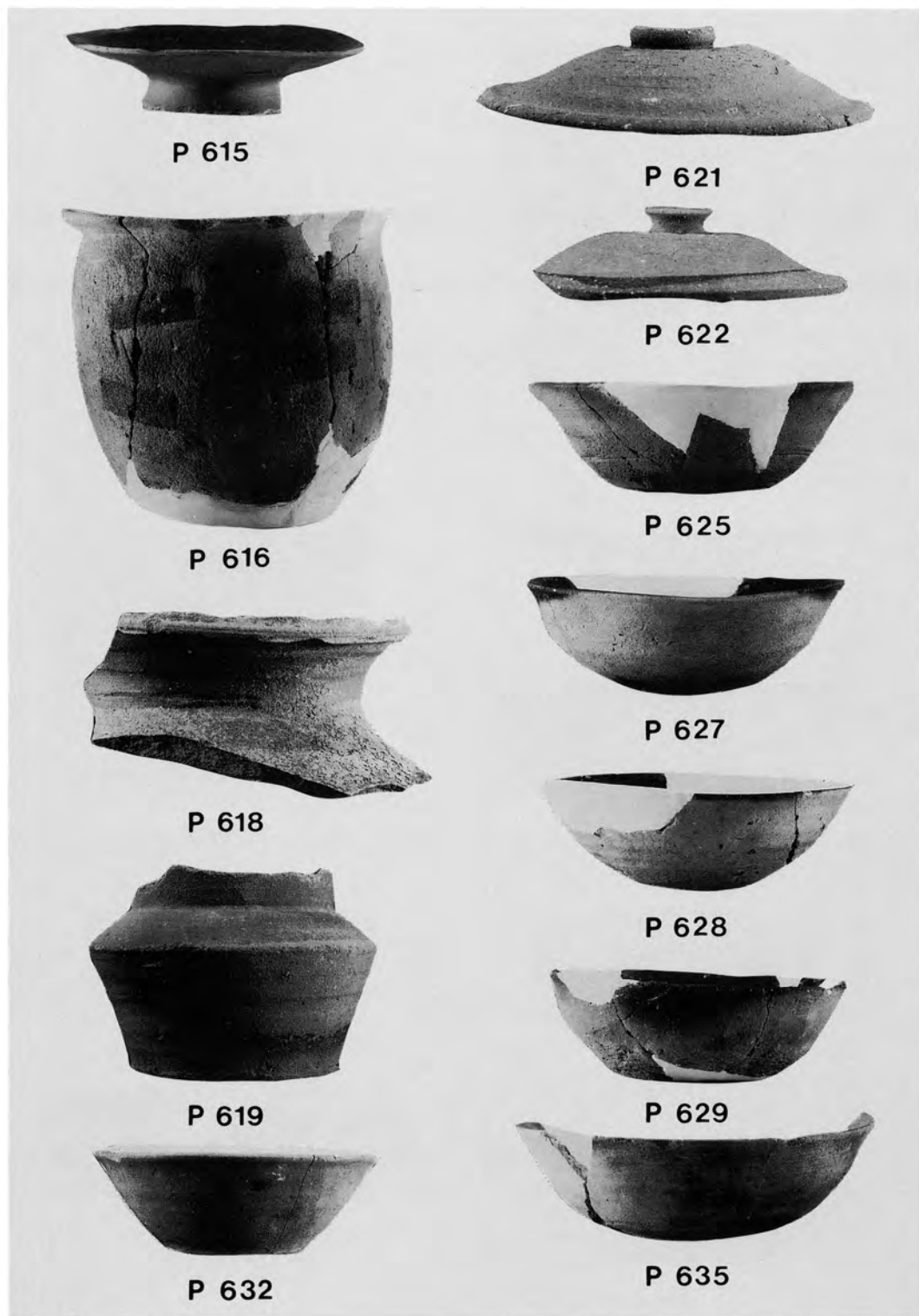
住居跡出土土器(29)



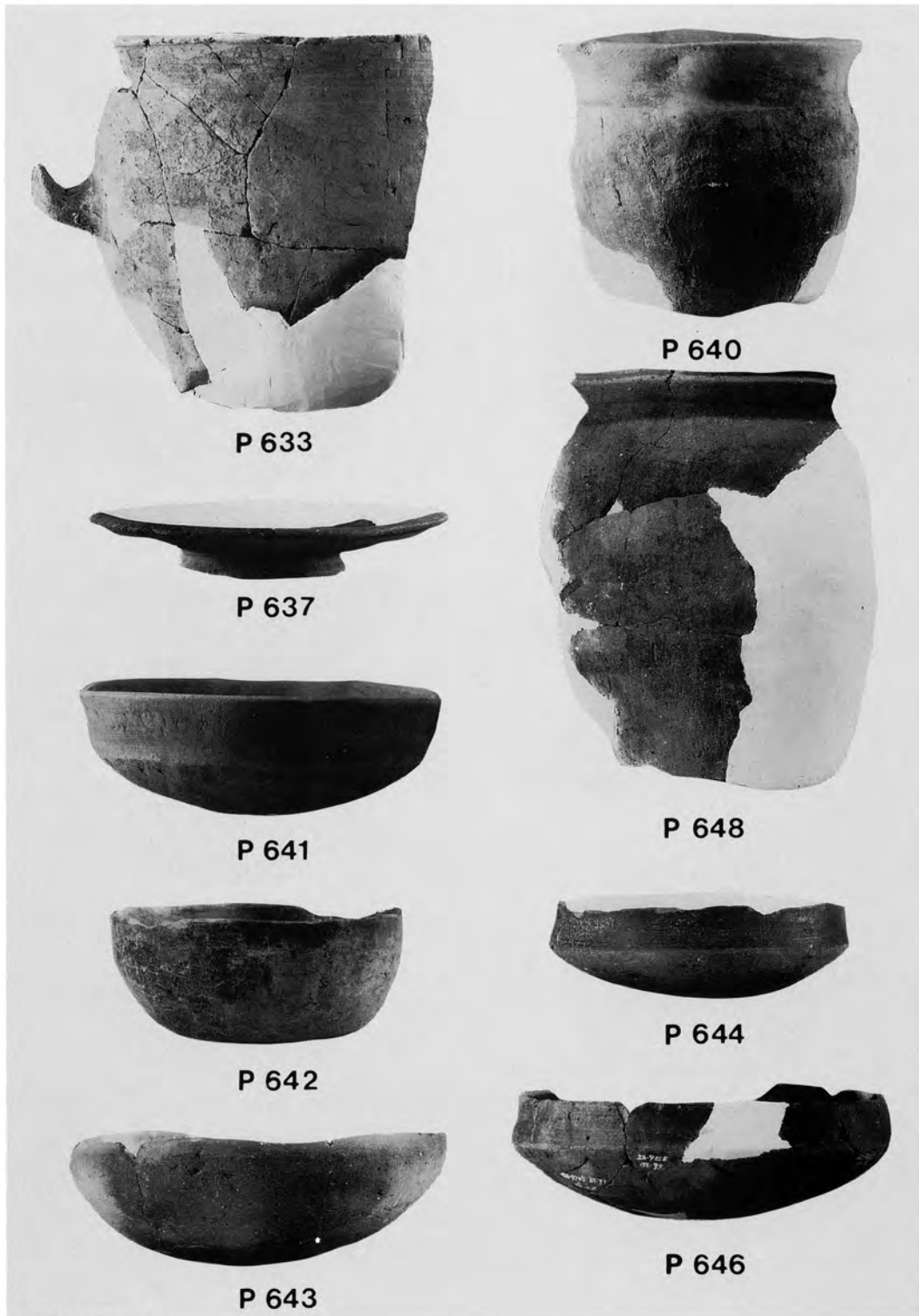
住居跡出土土器(30)



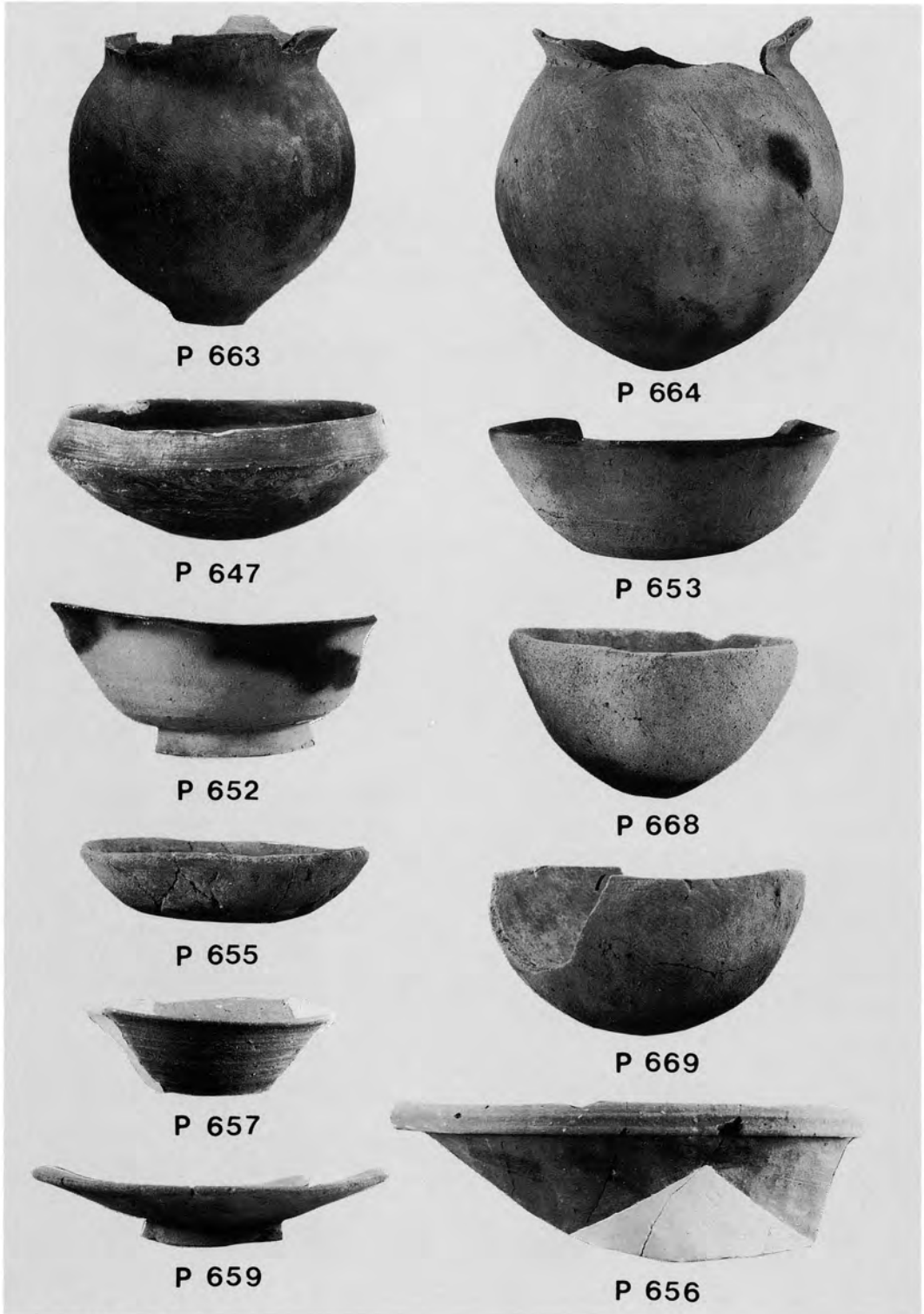
住居跡出土土器(31)



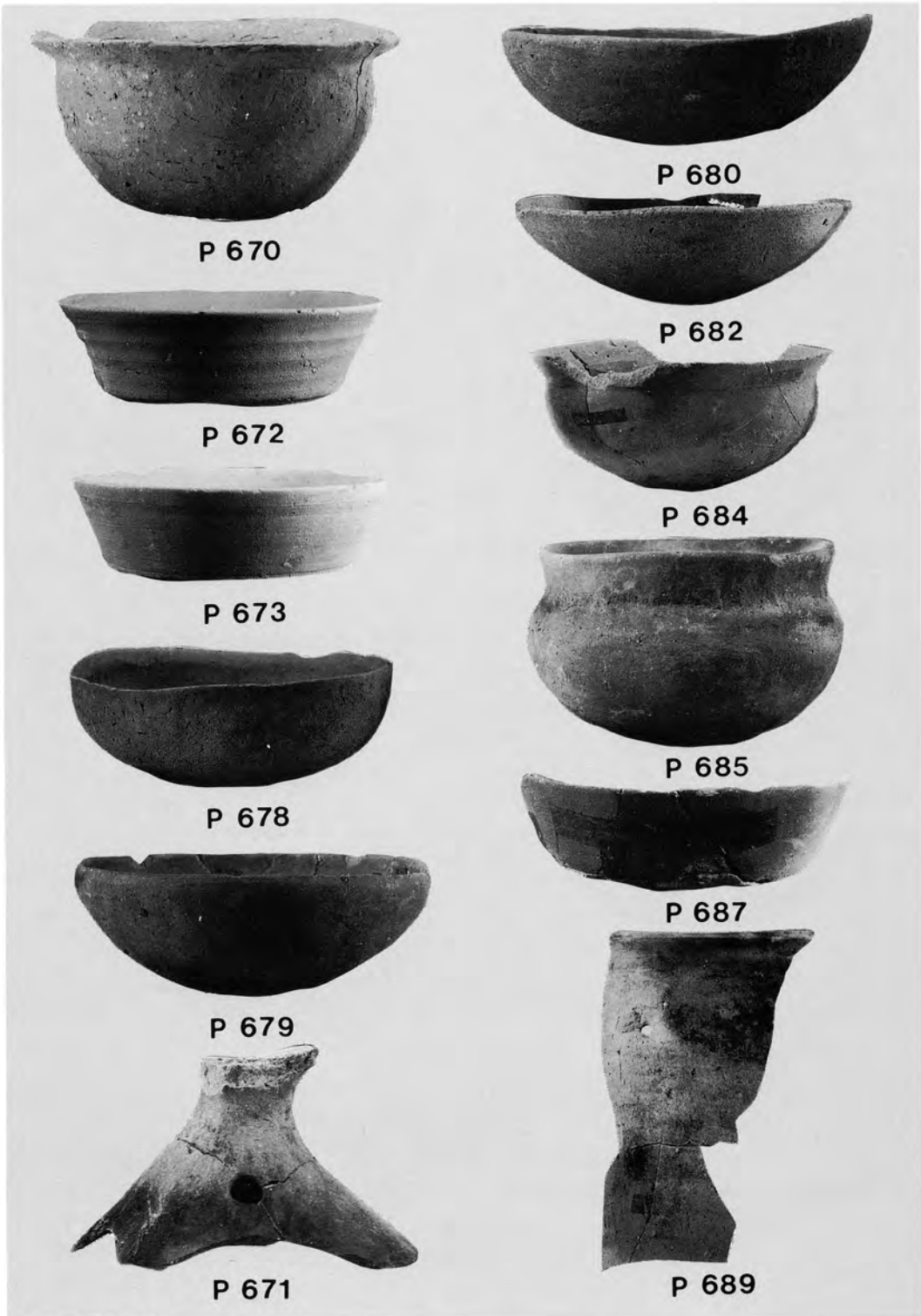
住居跡出土土器(32)



住居跡出土土器(33)

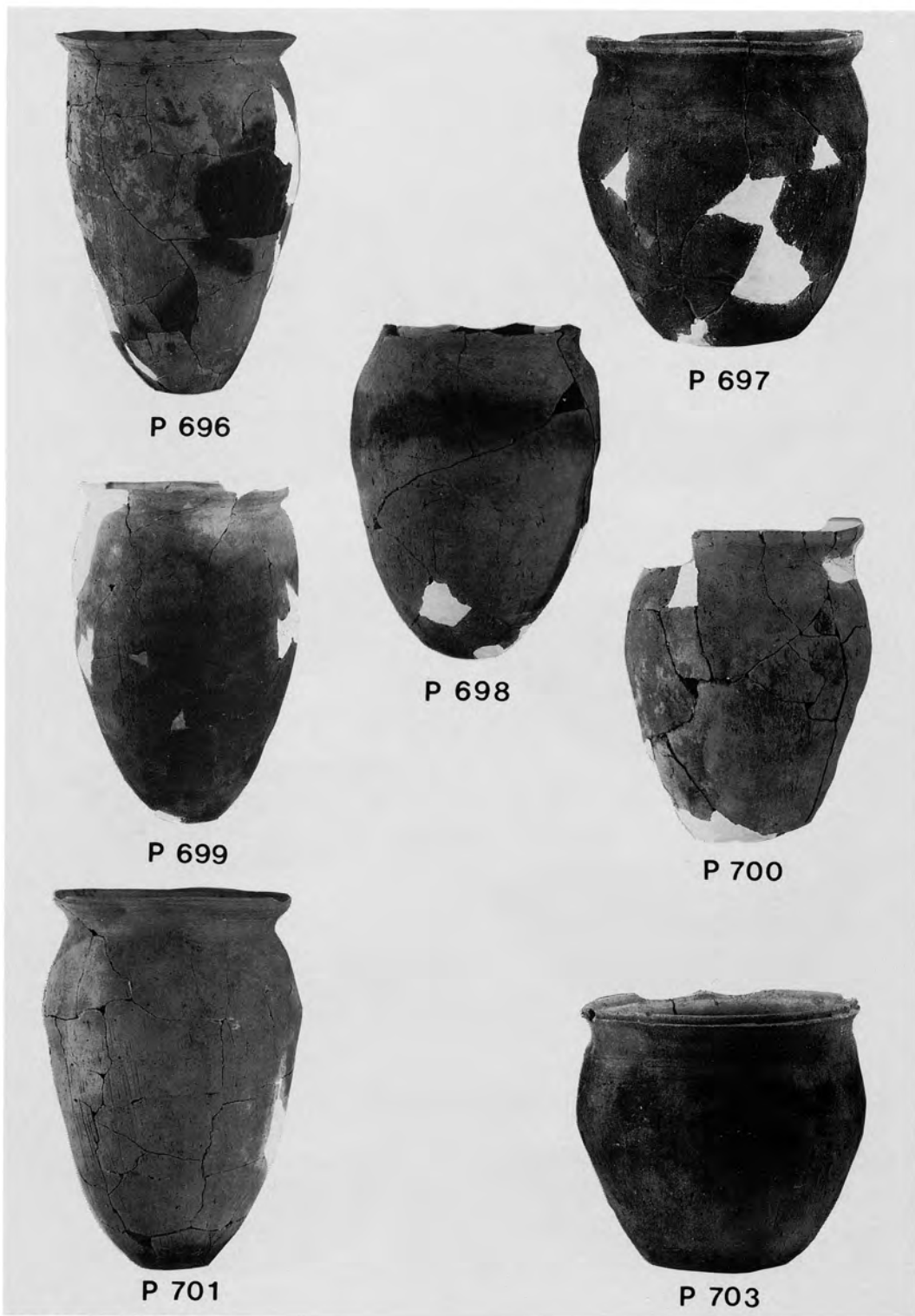


住居跡出土土器(34)



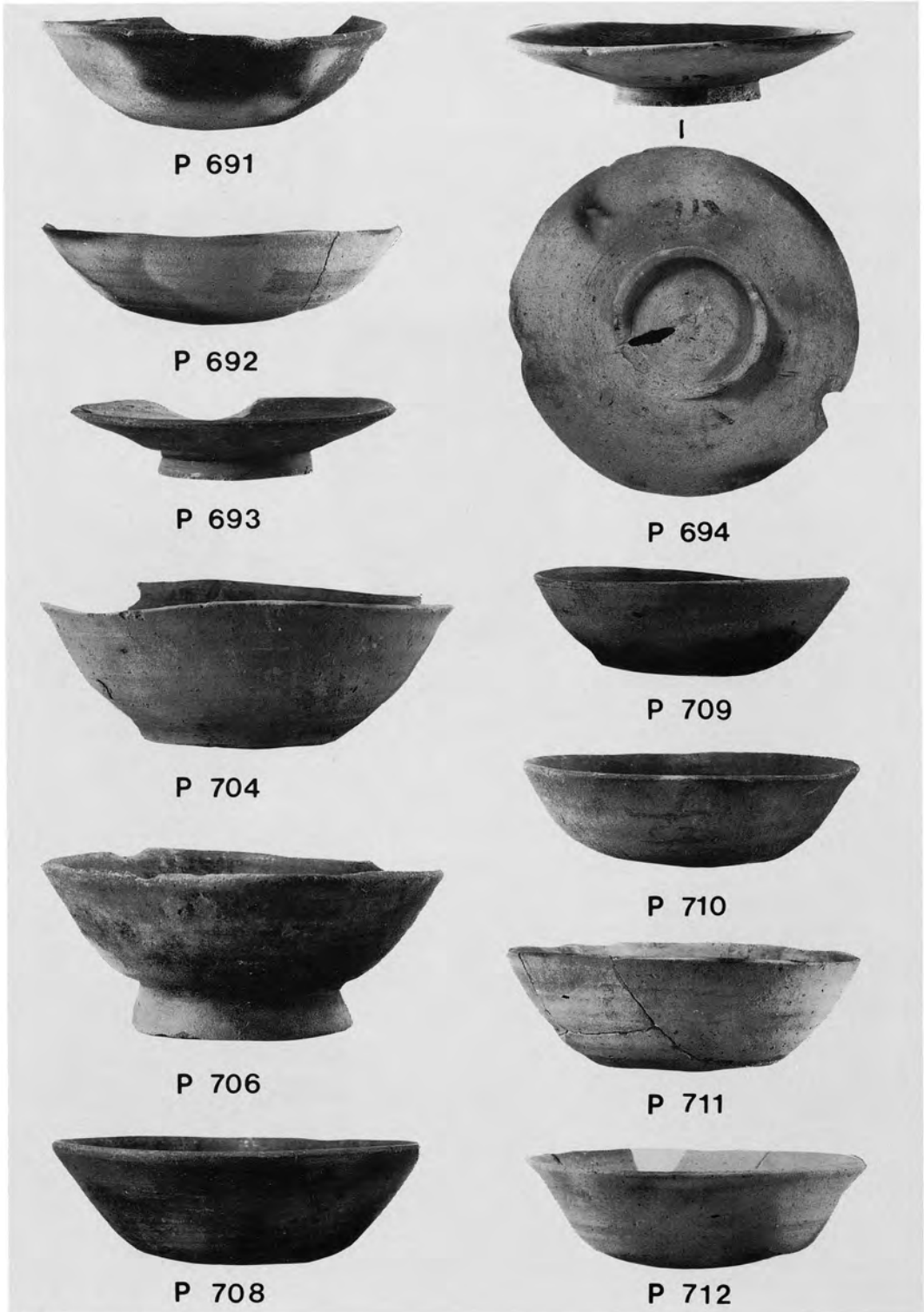
住居跡出土土器(35)



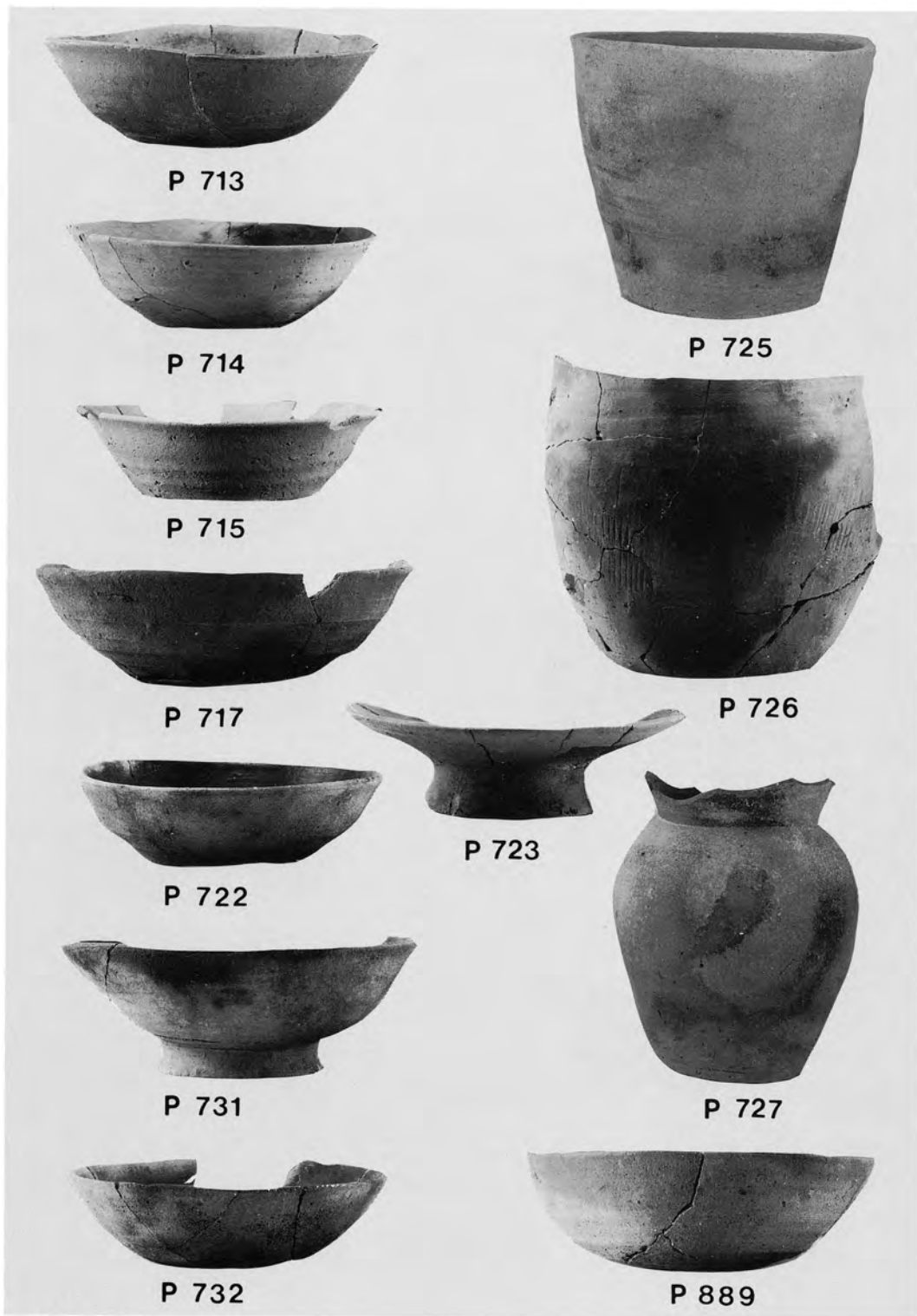


住居跡出土土器(36)

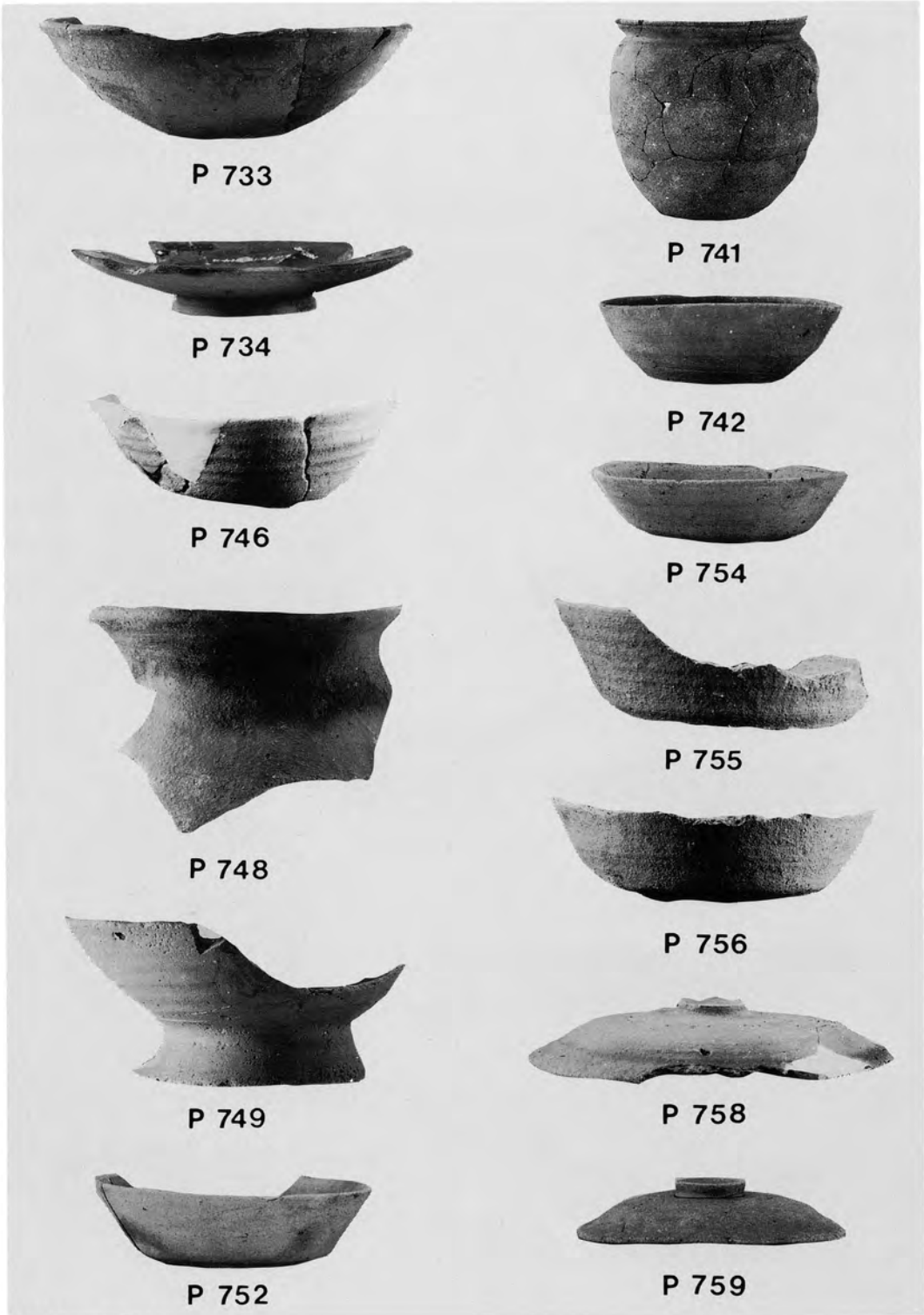




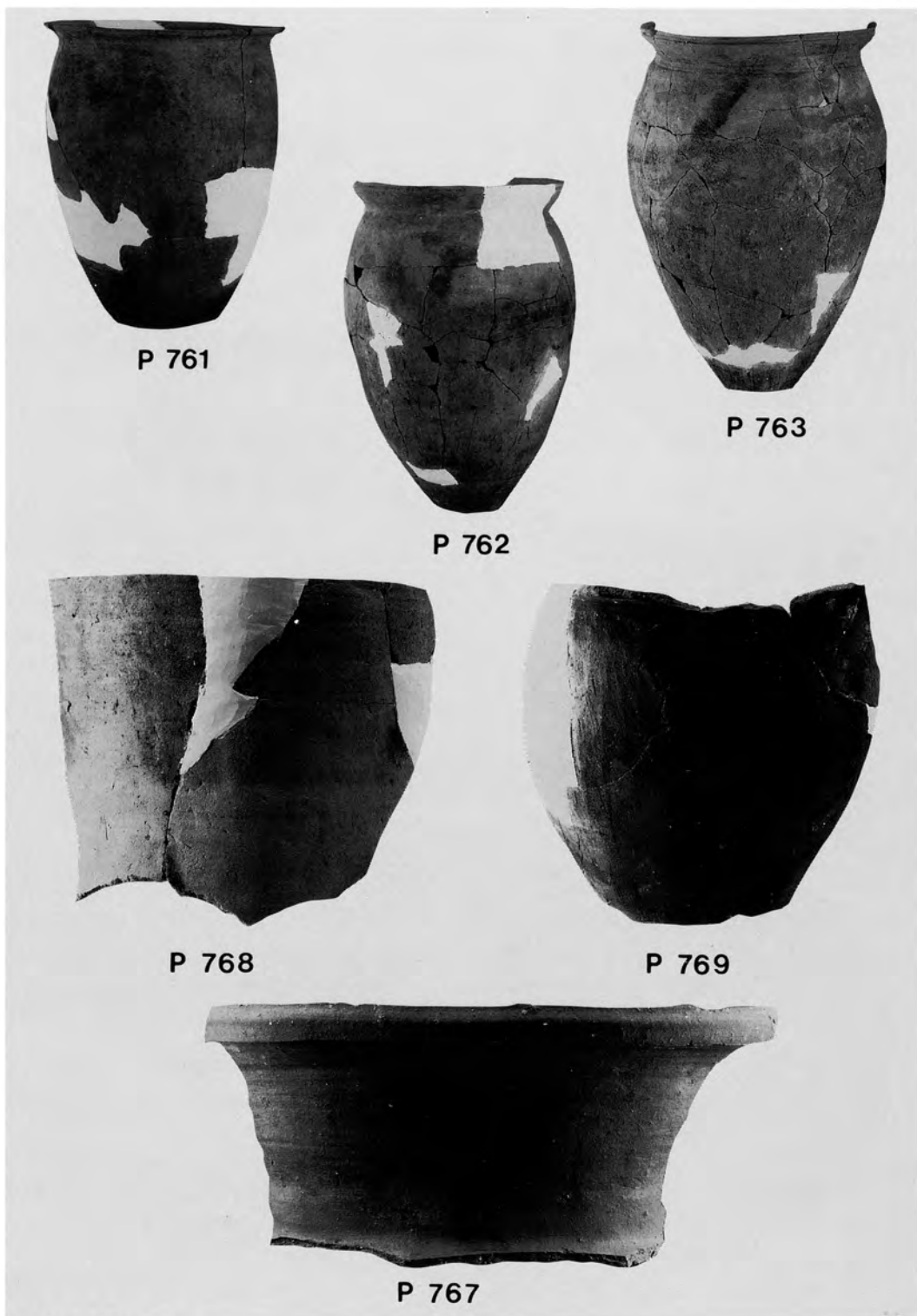
住居跡出土土器(37)



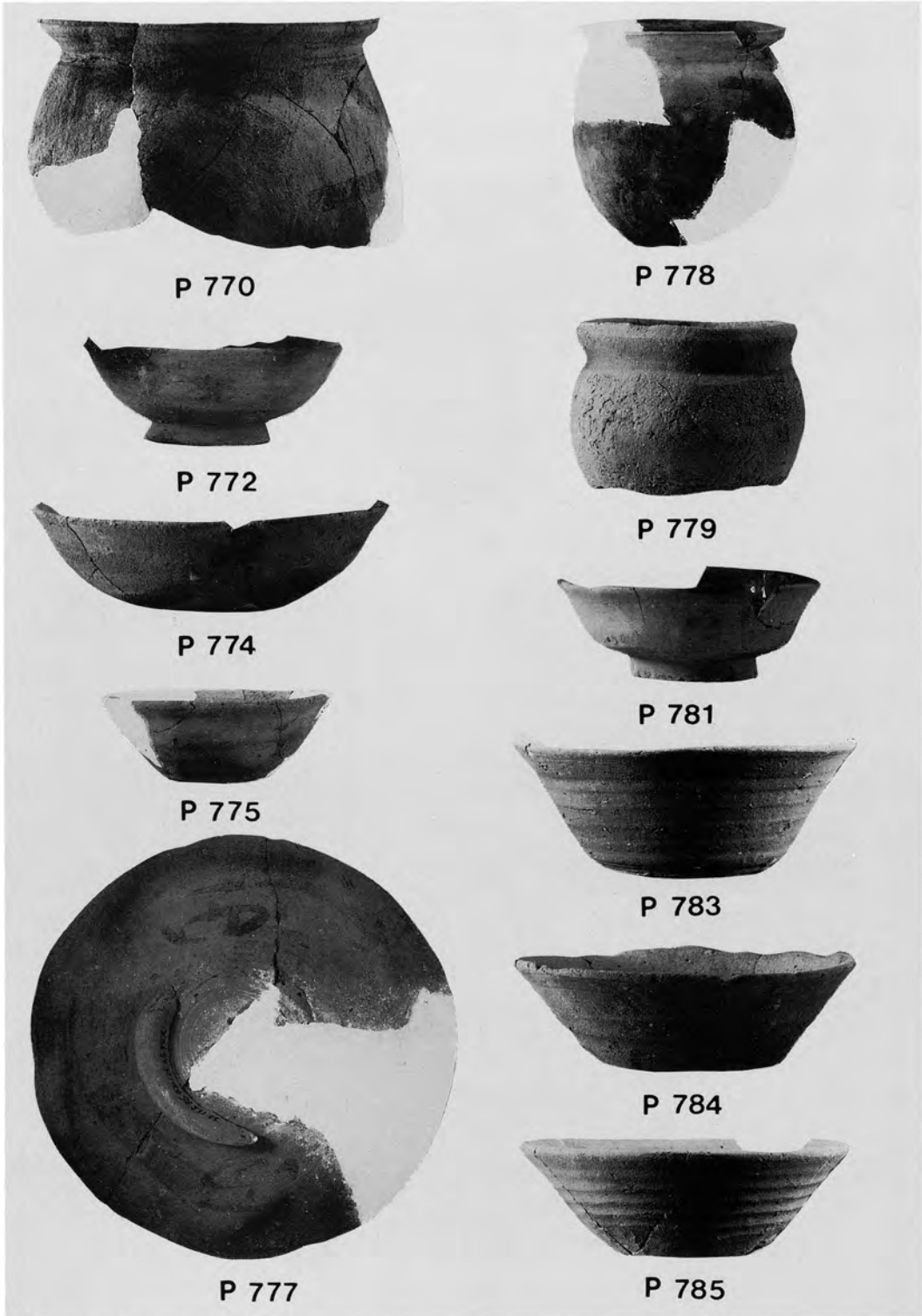
住居跡出土土器(38)



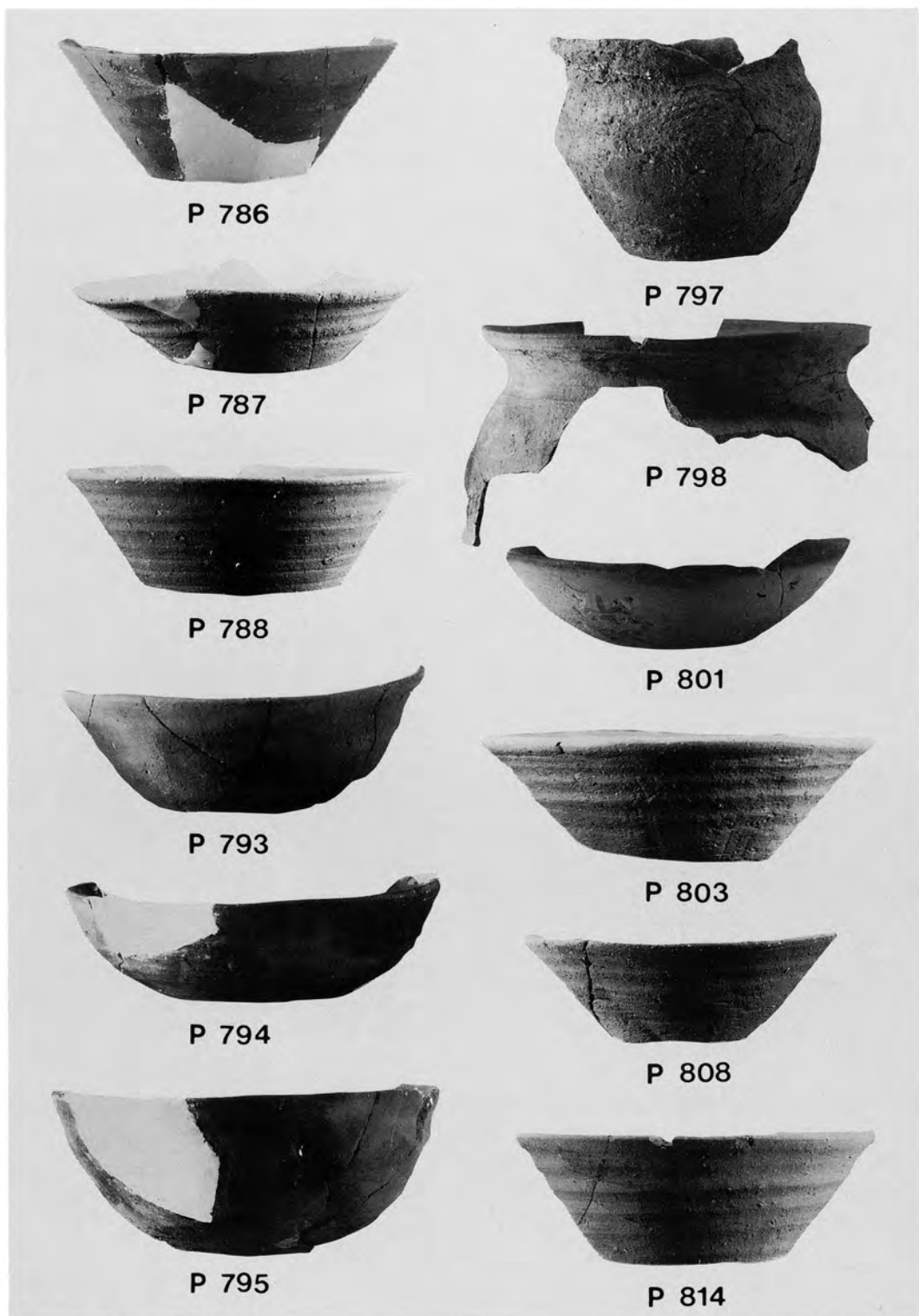
住居跡出土土器(39)



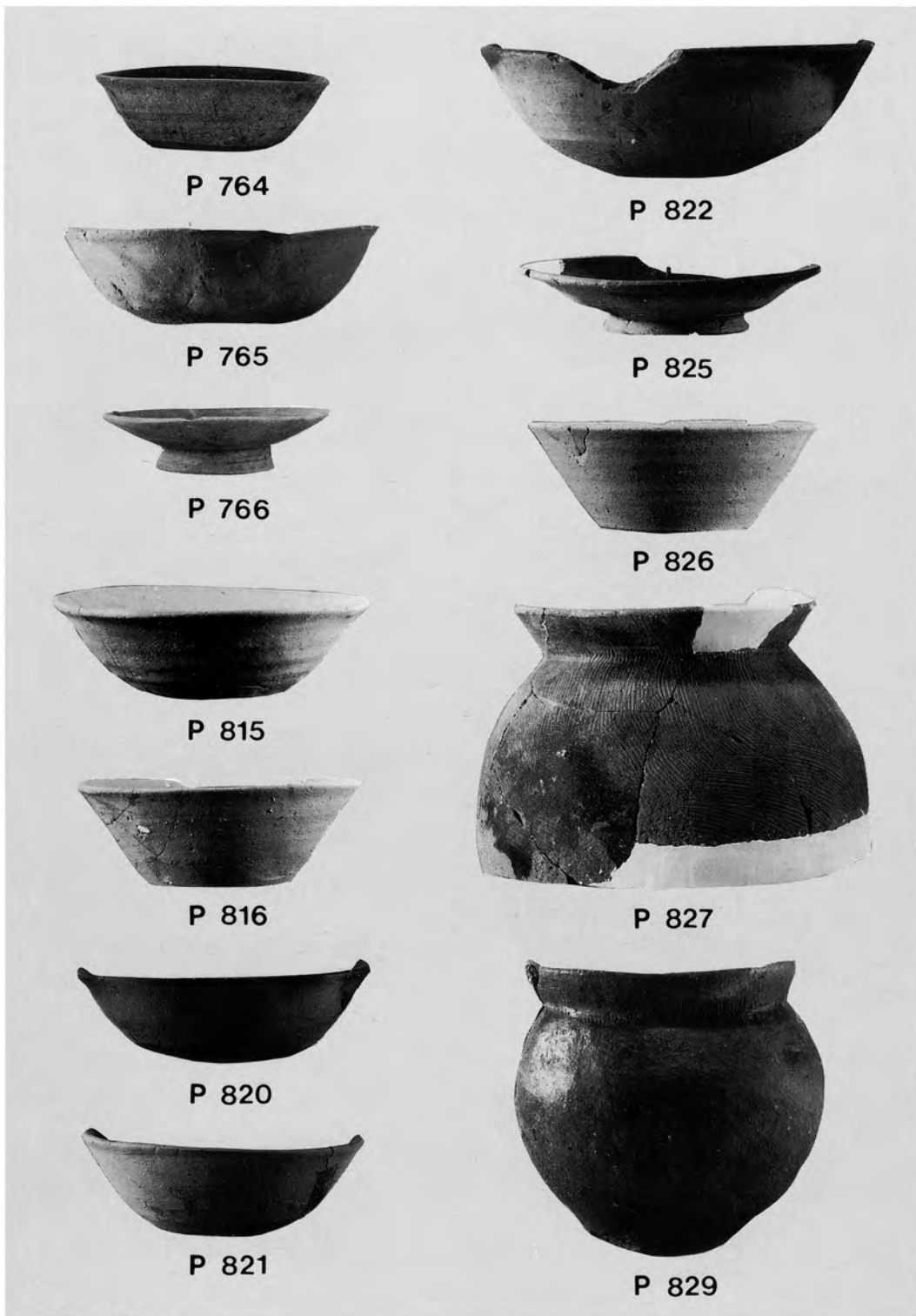
住居跡出土土器(40)



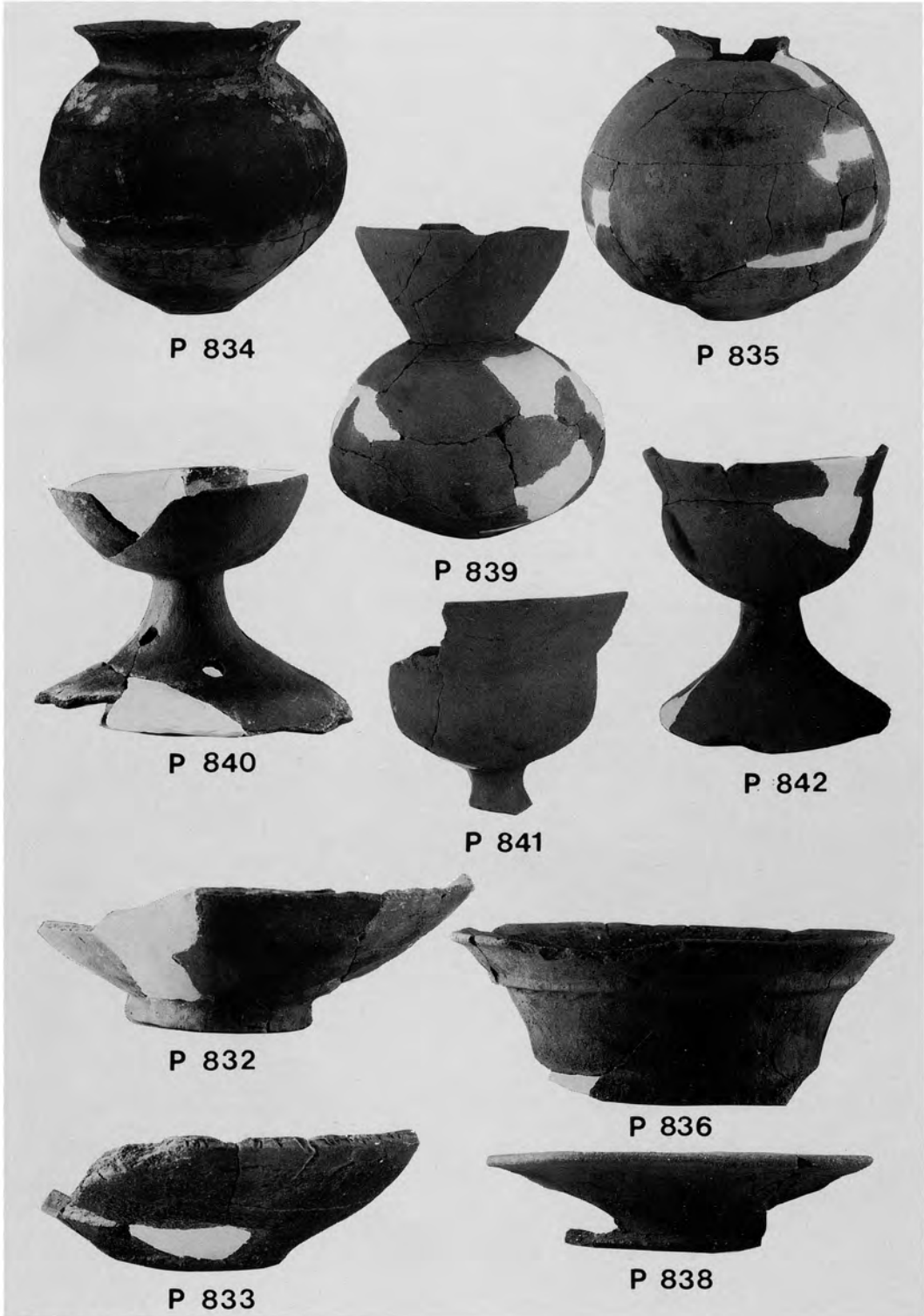
住居跡出土土器(41)



住居跡出土土器(42)

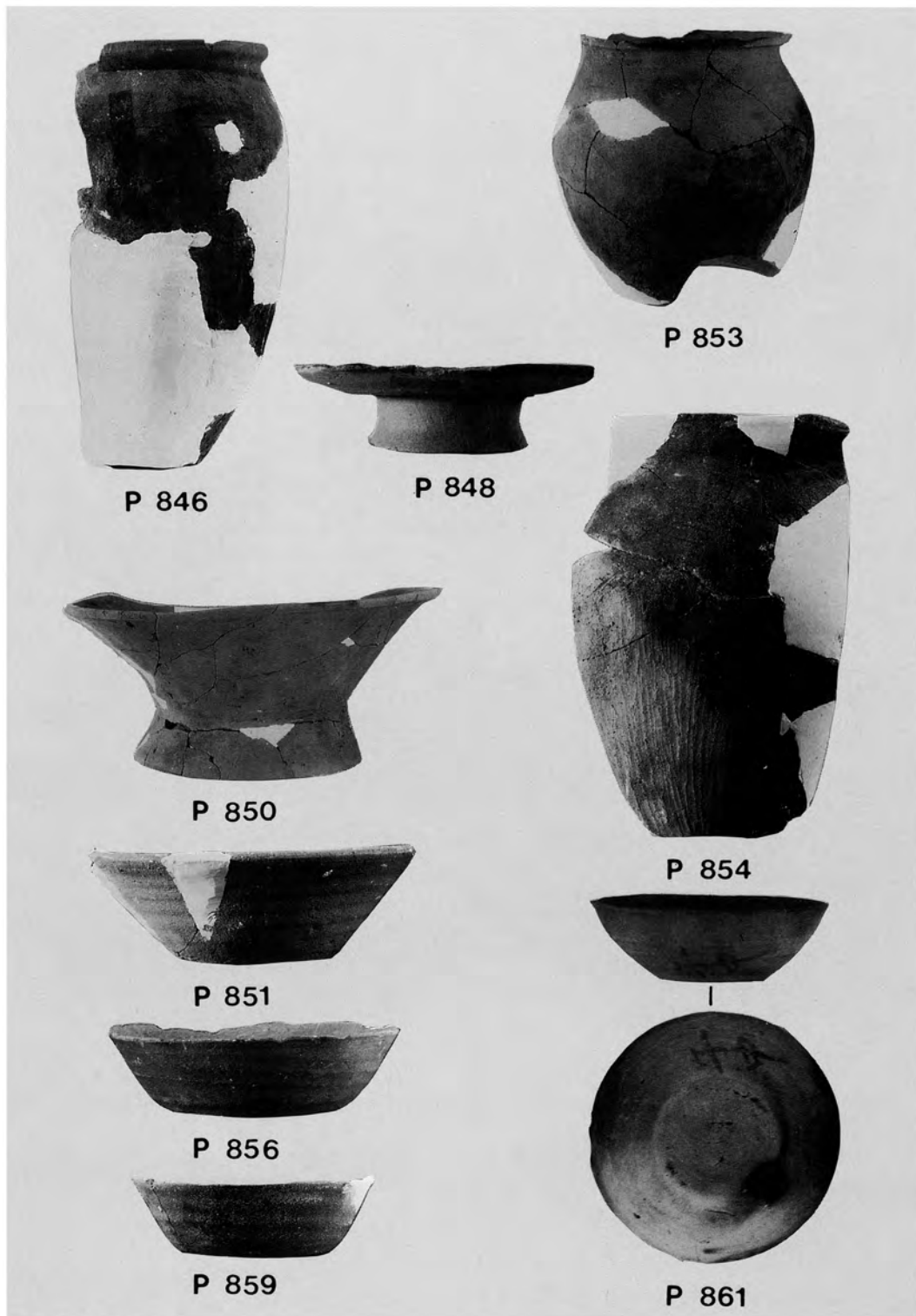


住居跡出土土器(43)



住居跡出土土器(44)





住居跡出土土器(45)



P 862



P 870



P 863



P 864



P 871



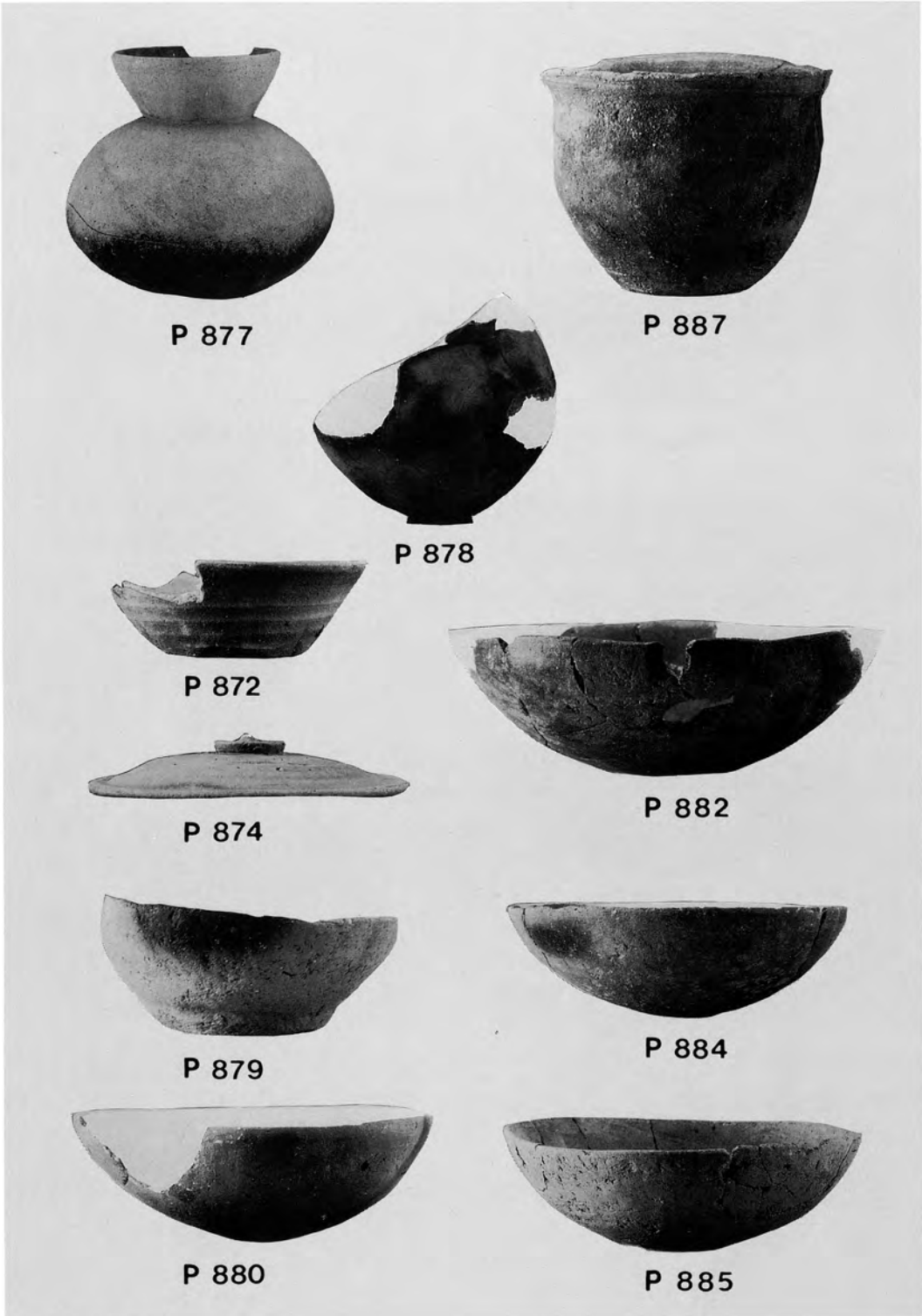
P 869



P 868



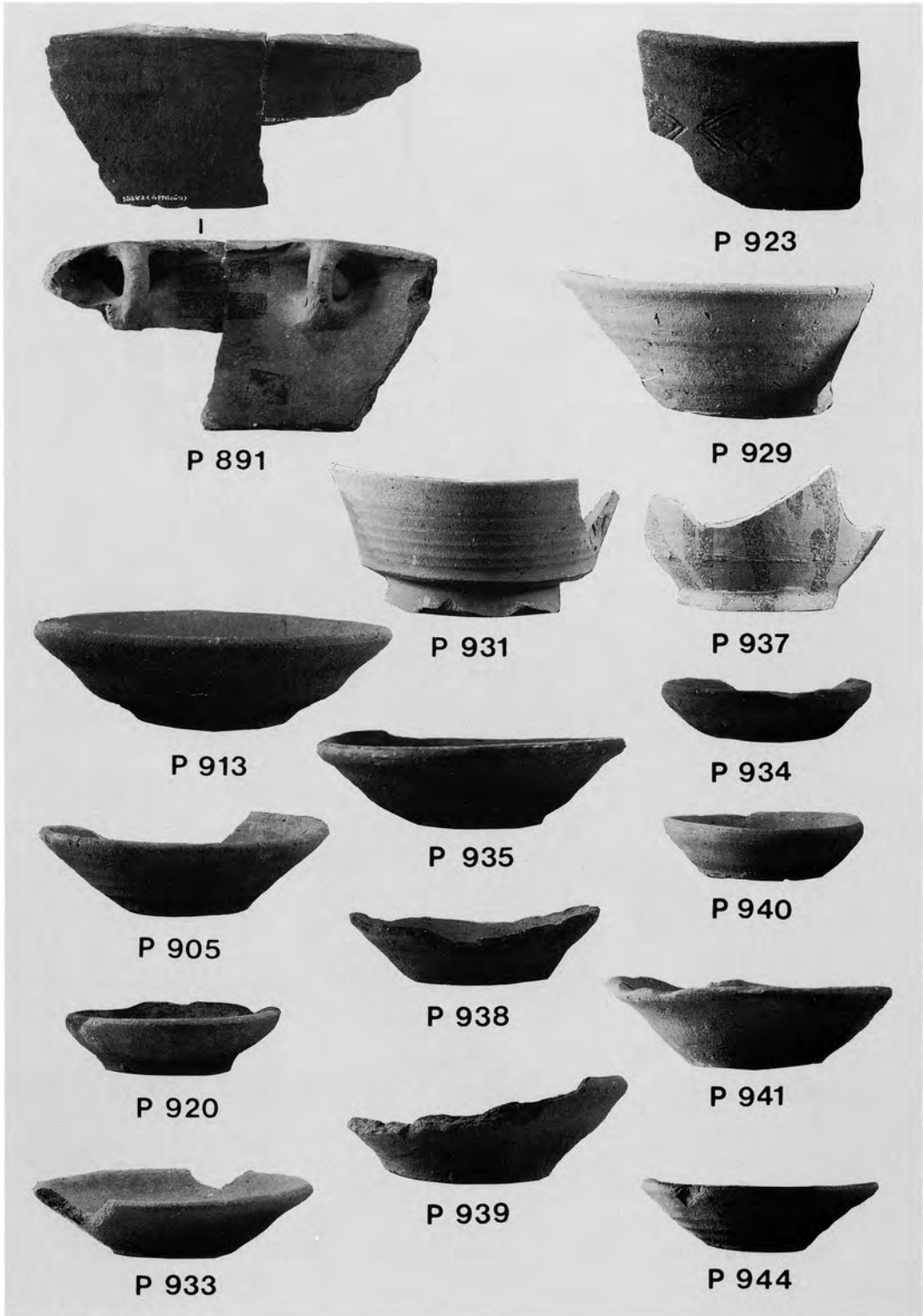
P 875



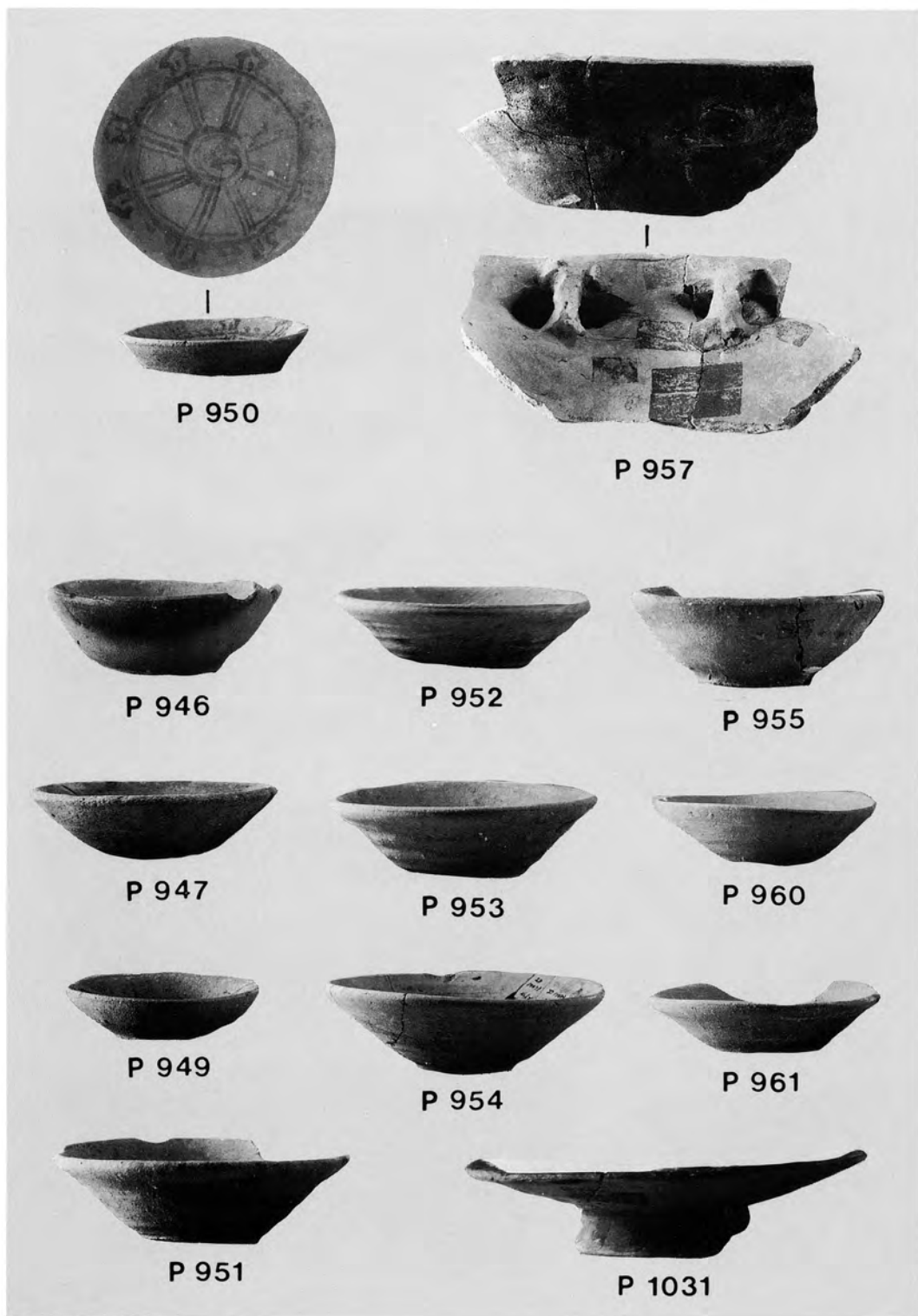
住居跡出土土器(47)



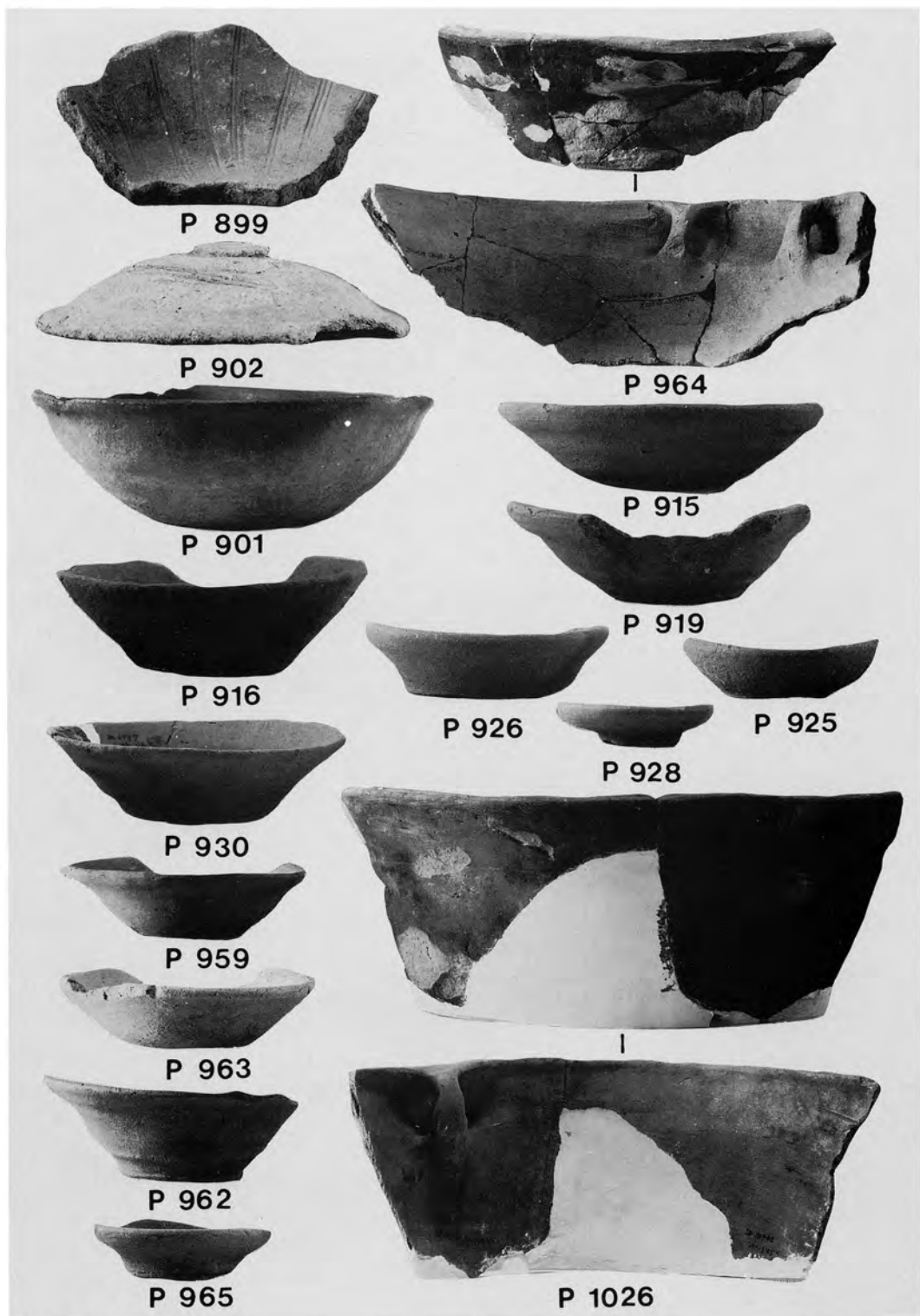
住居跡出土土器(48)



土坑出土土器(1)

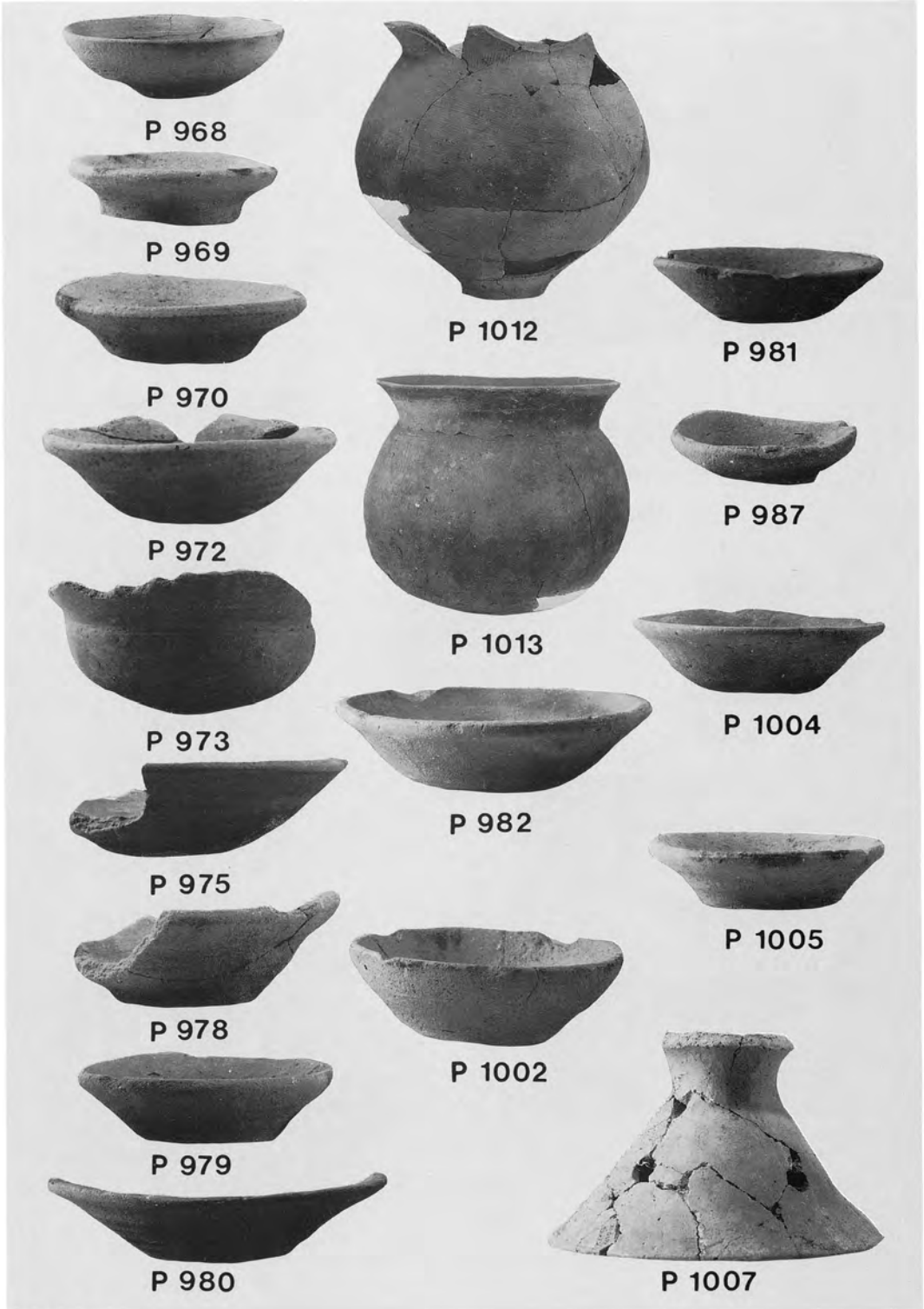


土坑出土土器(2)



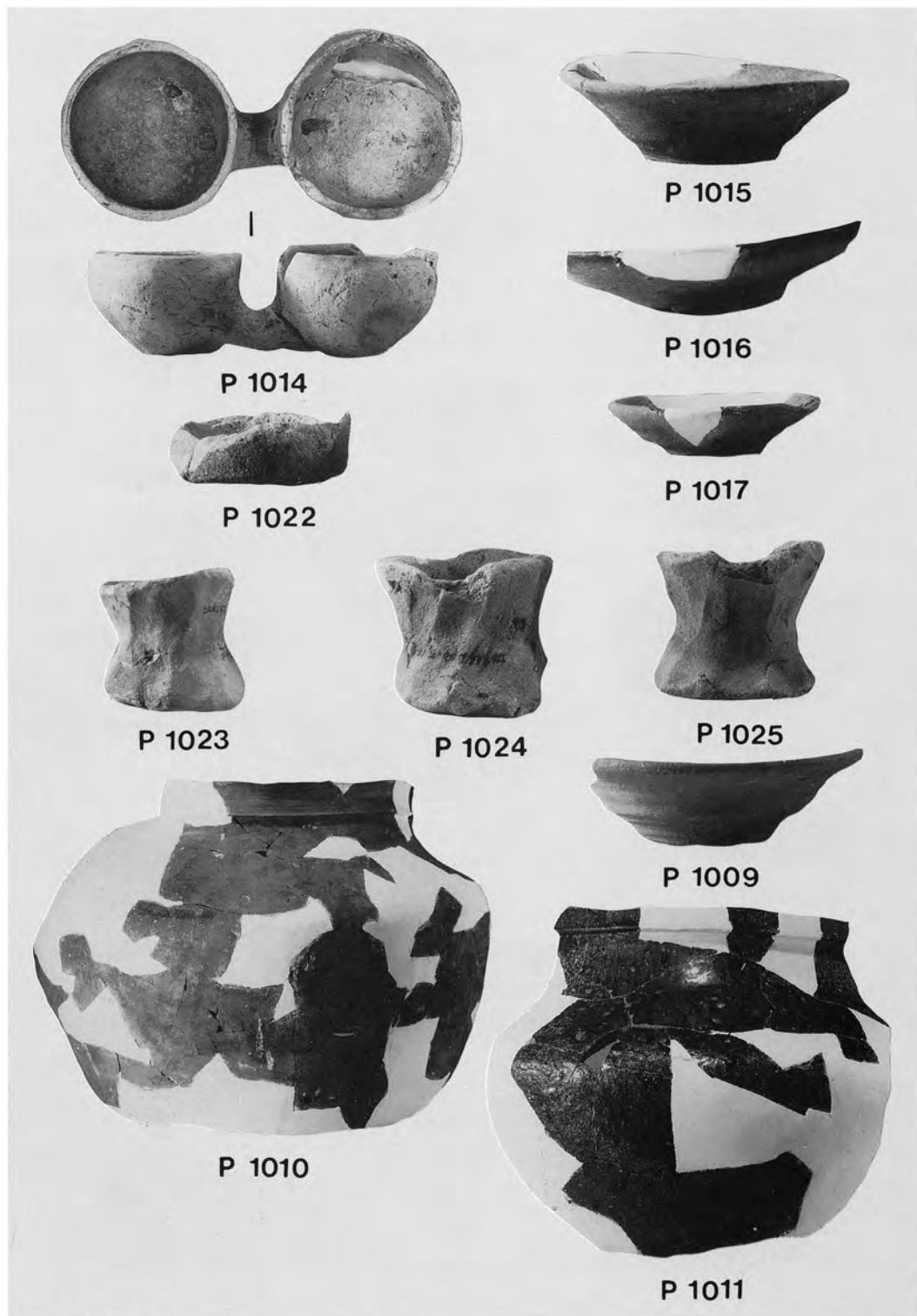
地下式坑出土土器

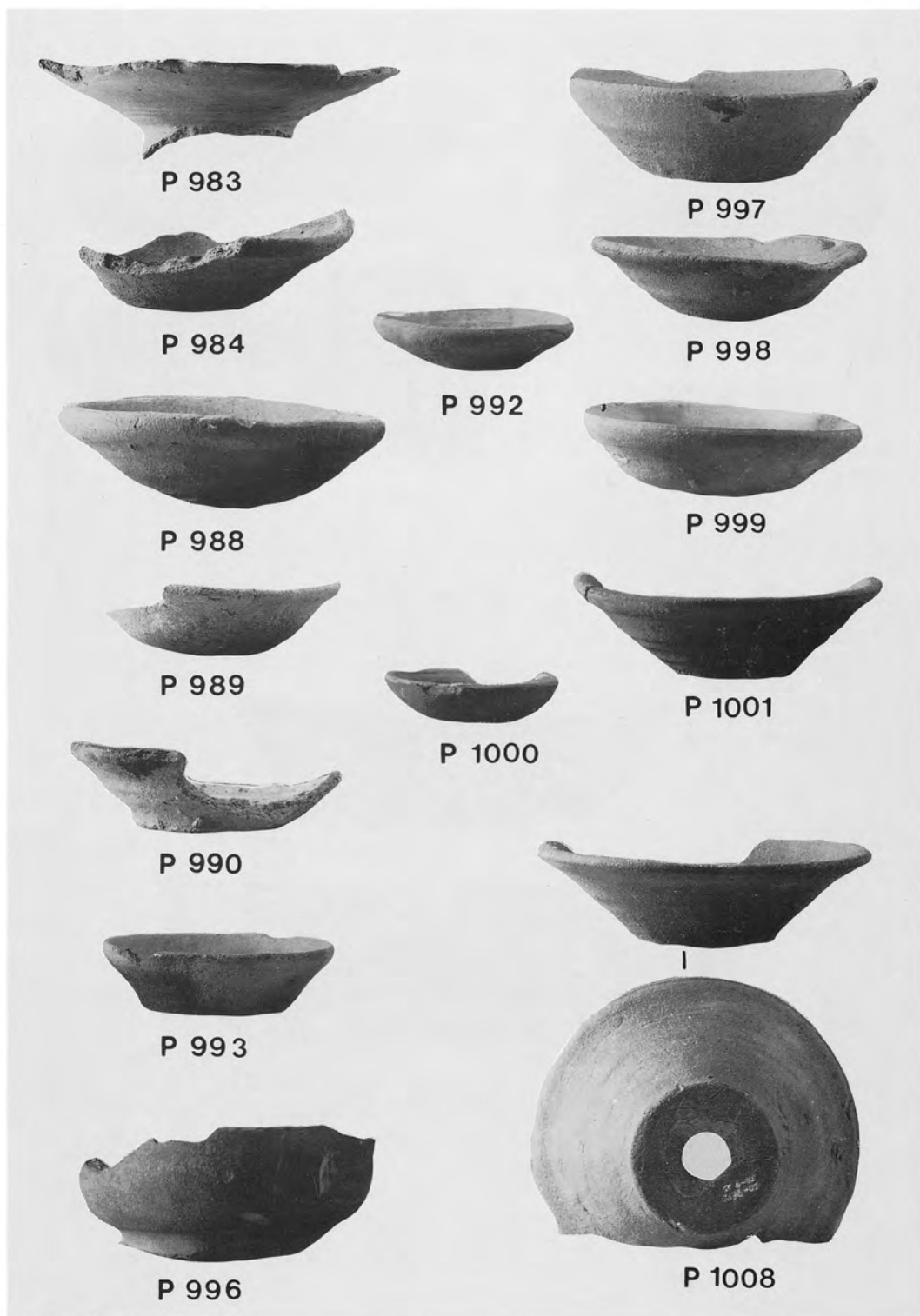




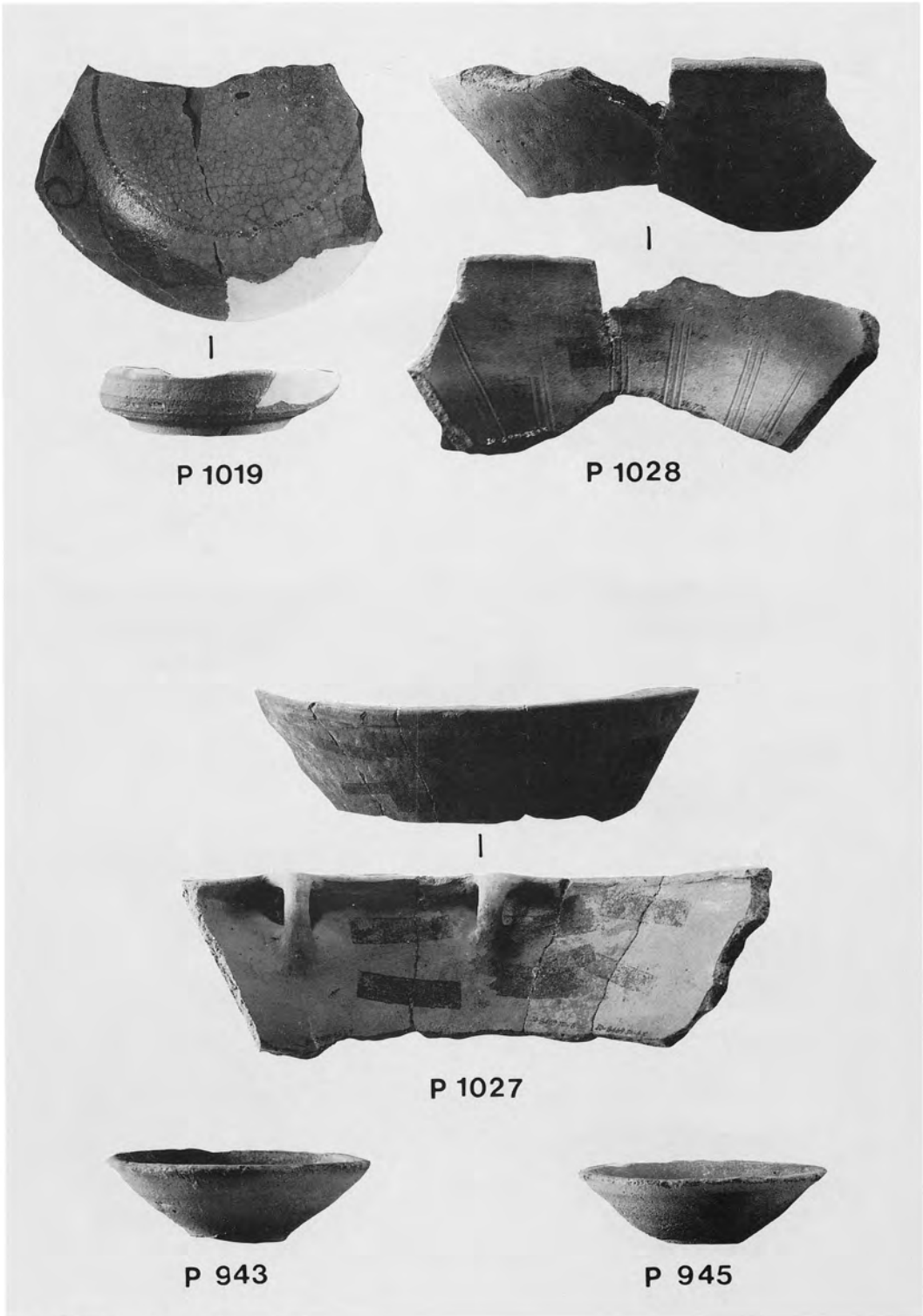
溝出土土器



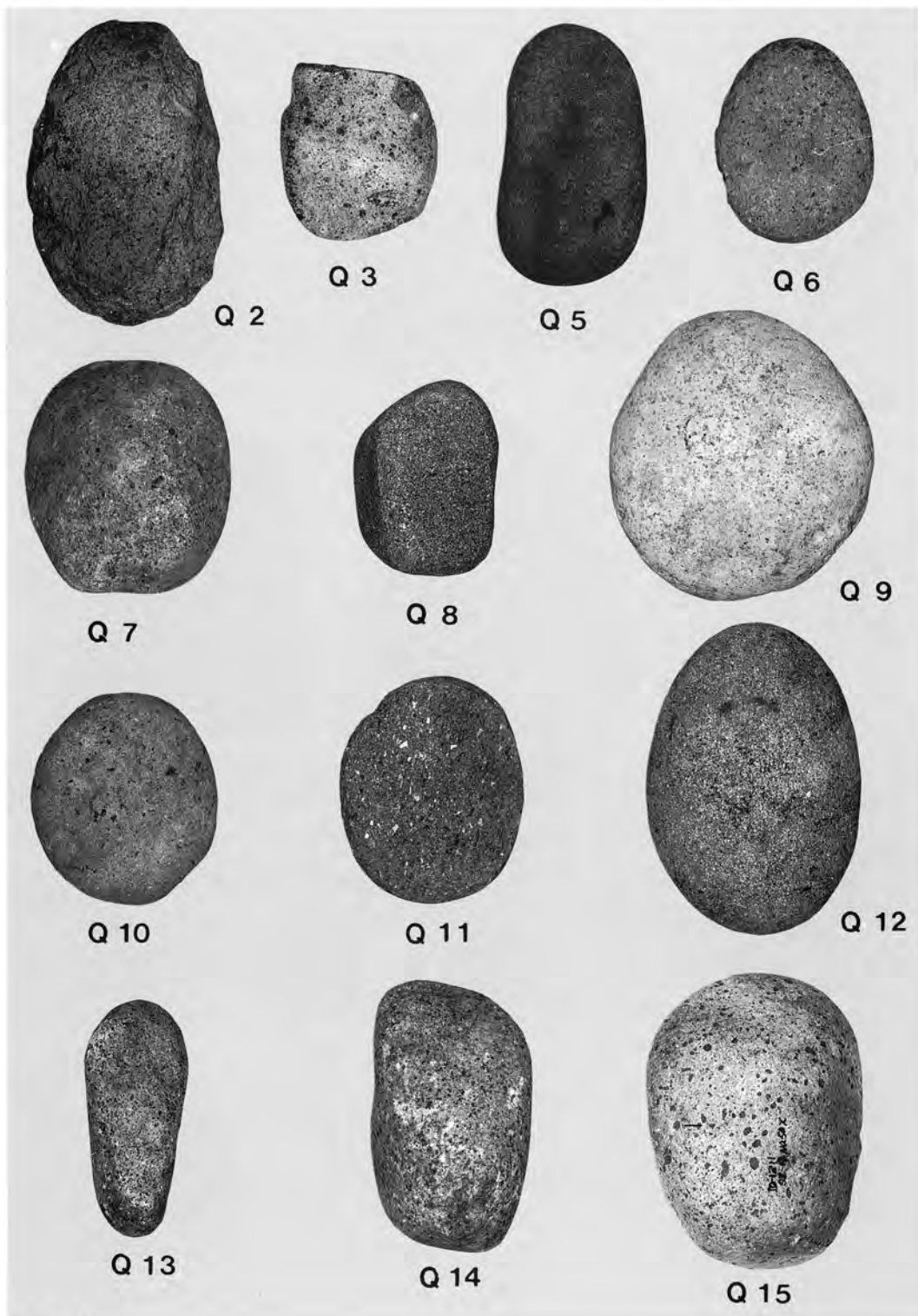




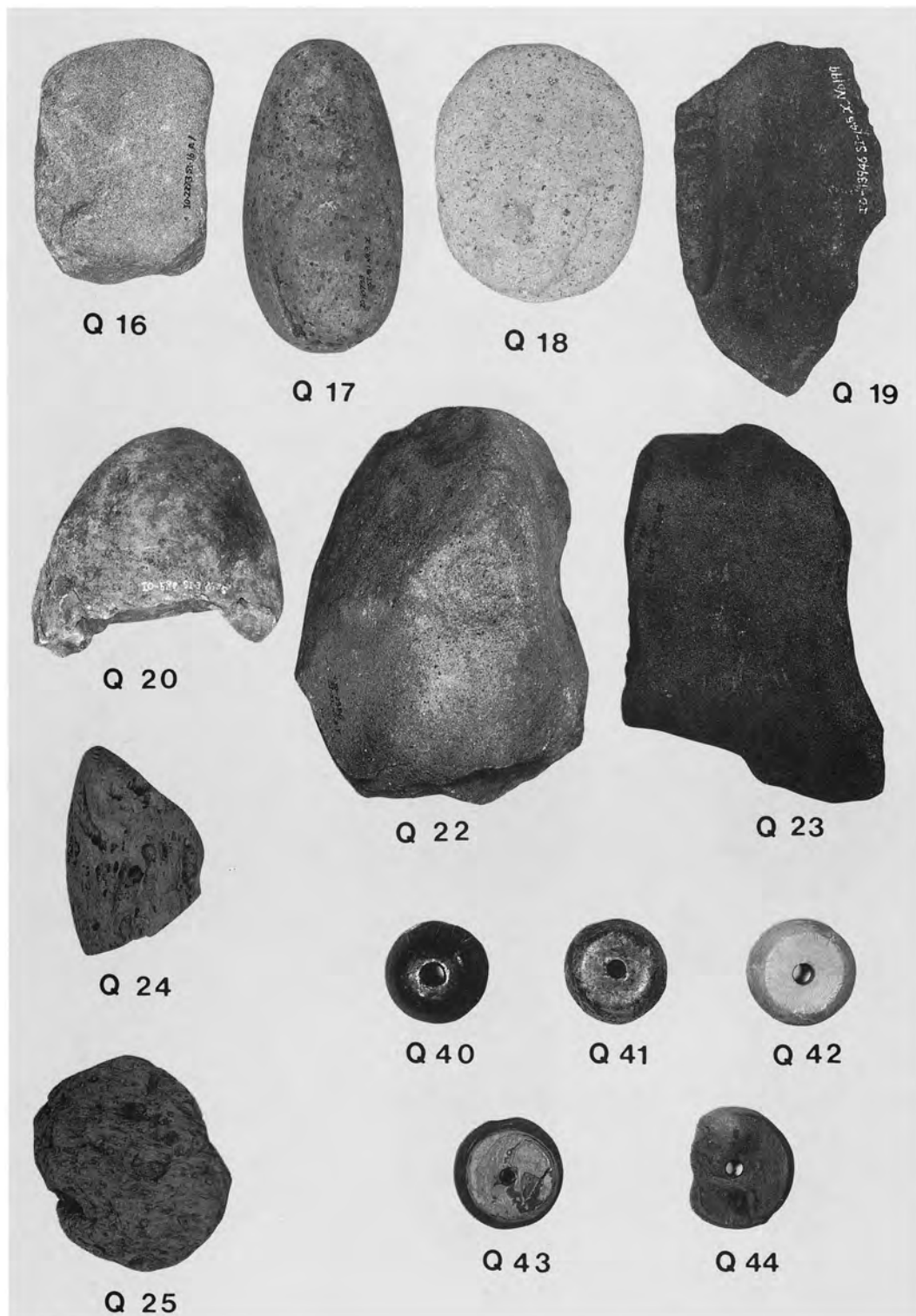
井戸出土土器



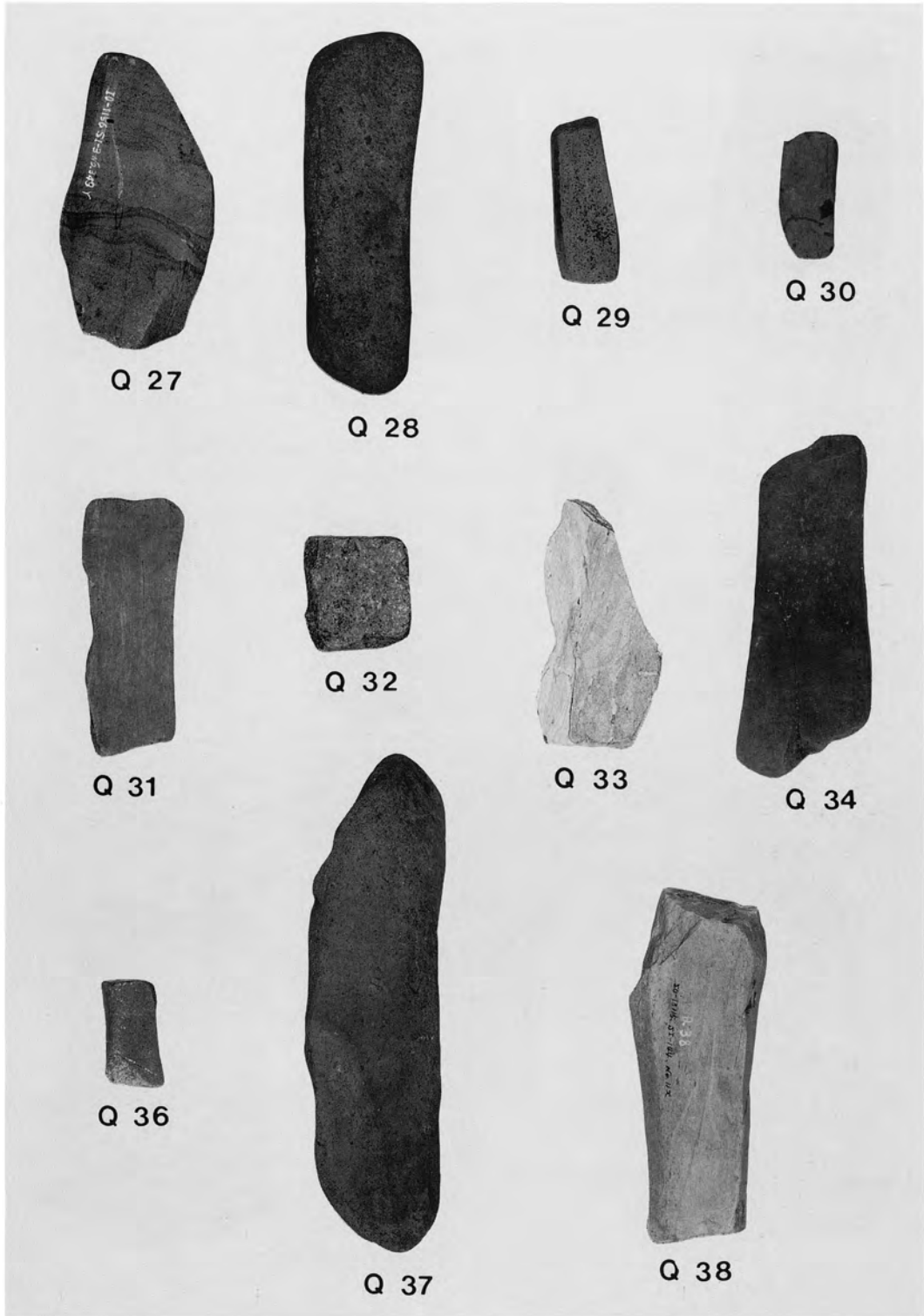
井戸・性格不明遺構出土土器



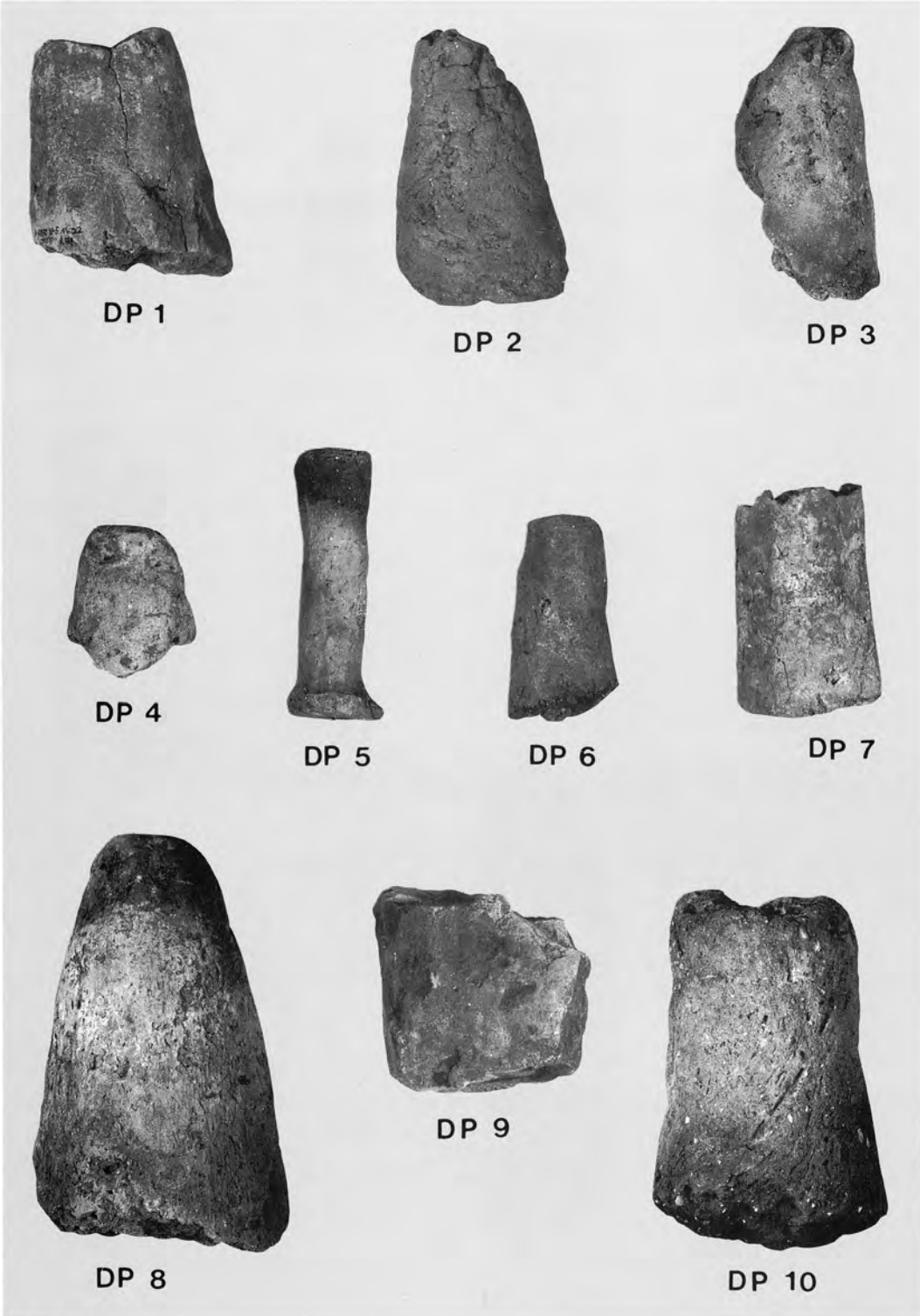
石製品(1)



石製品(2)



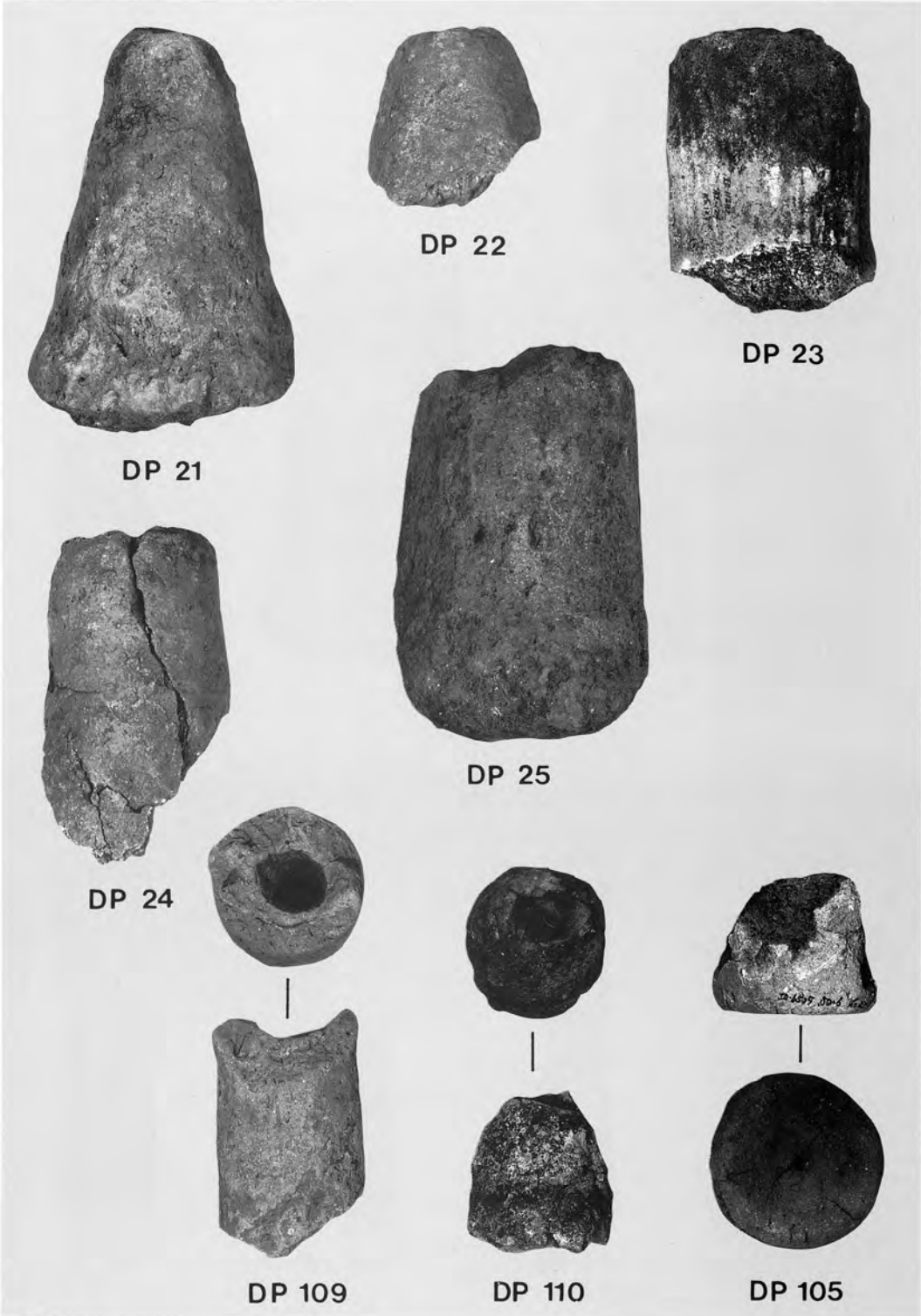
石製品(3)



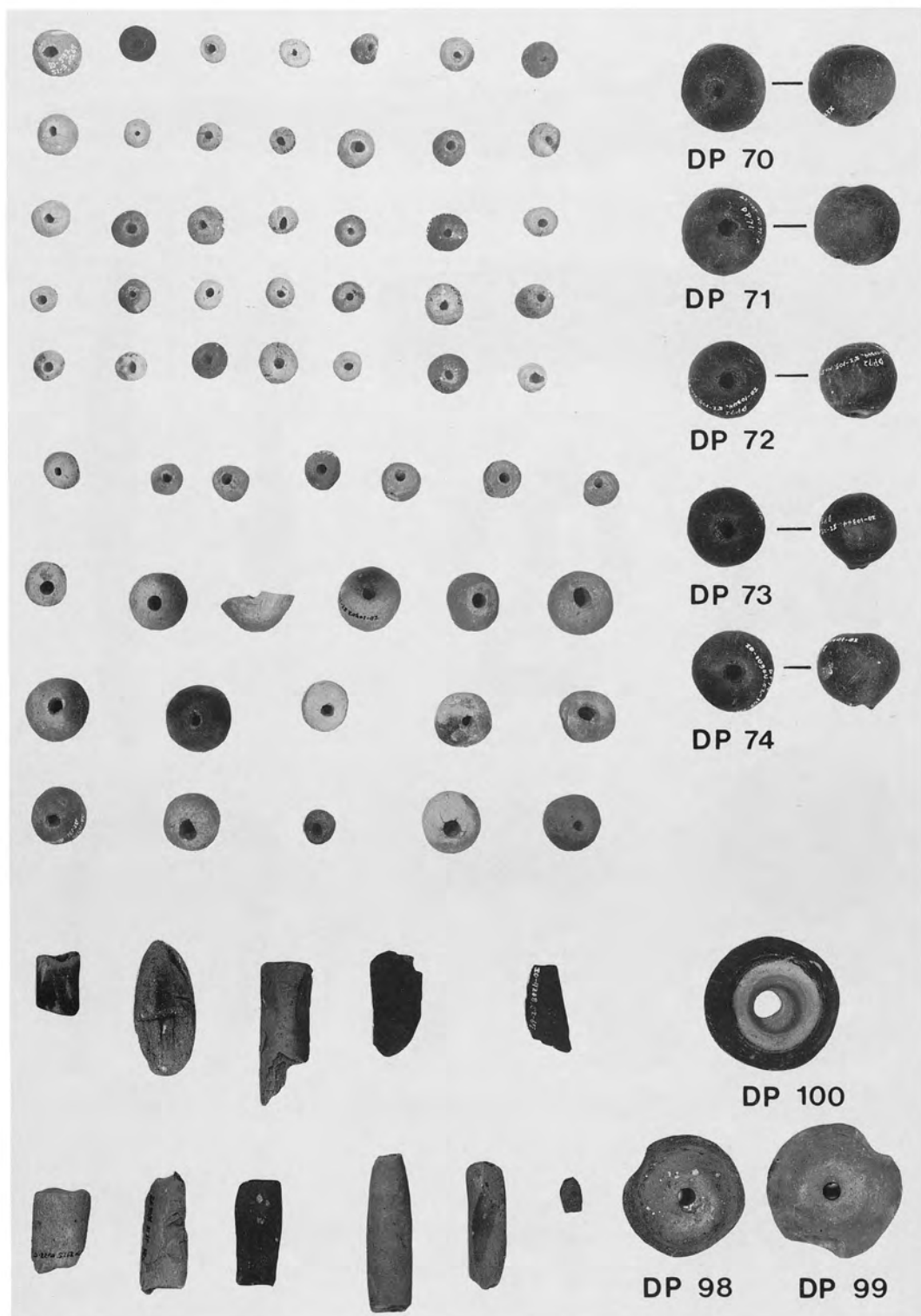


土製品(2)

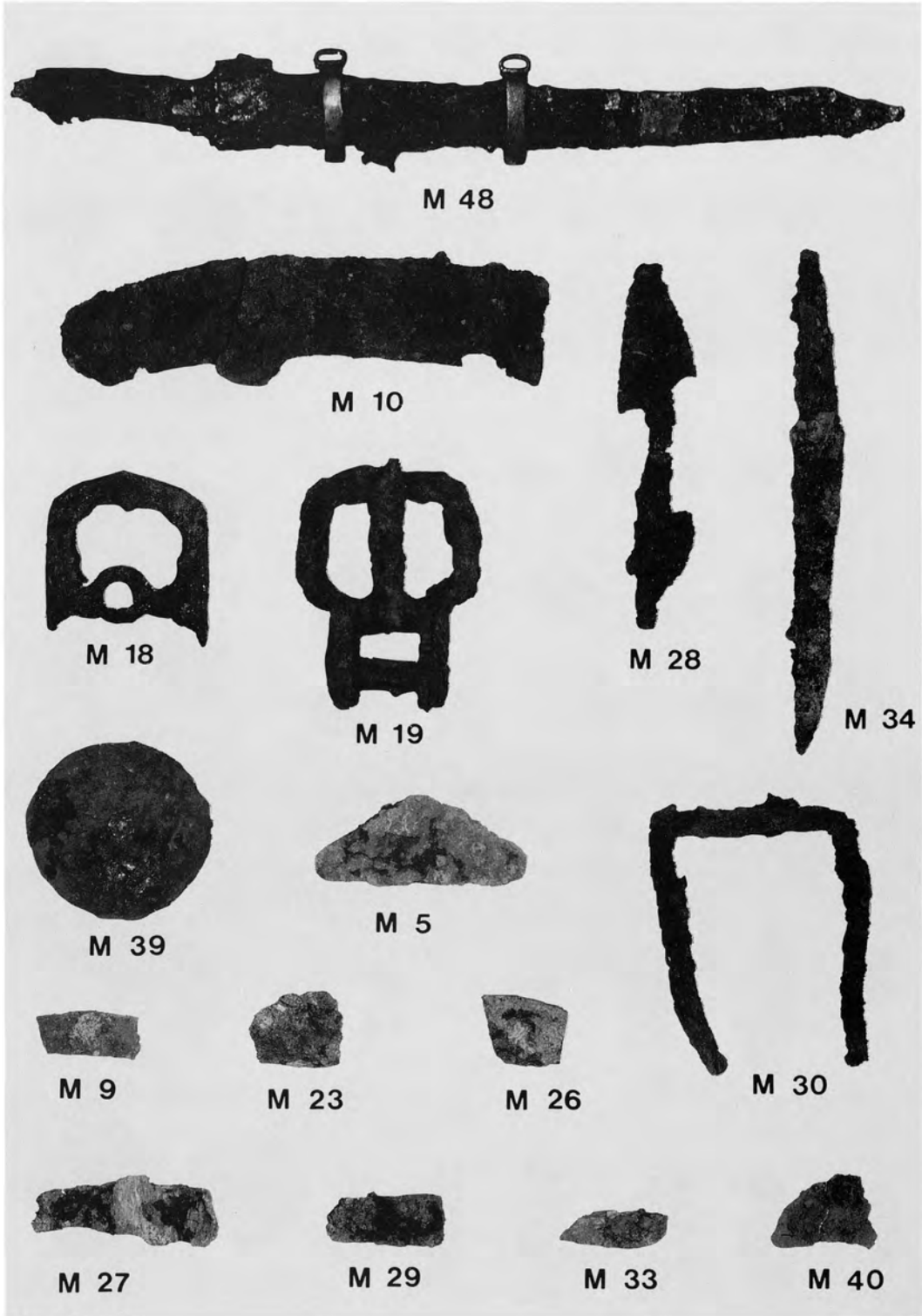




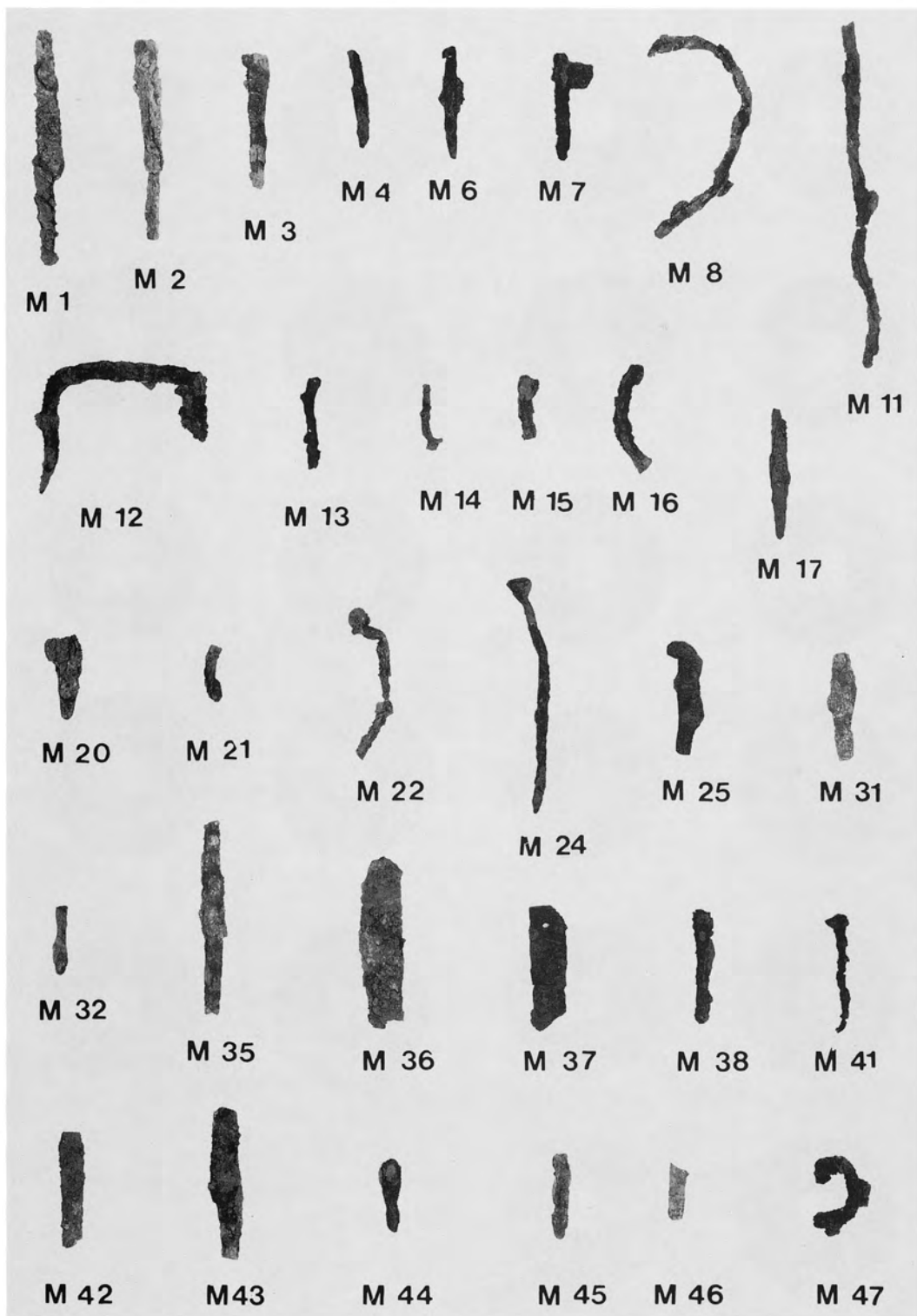
土製品(3)



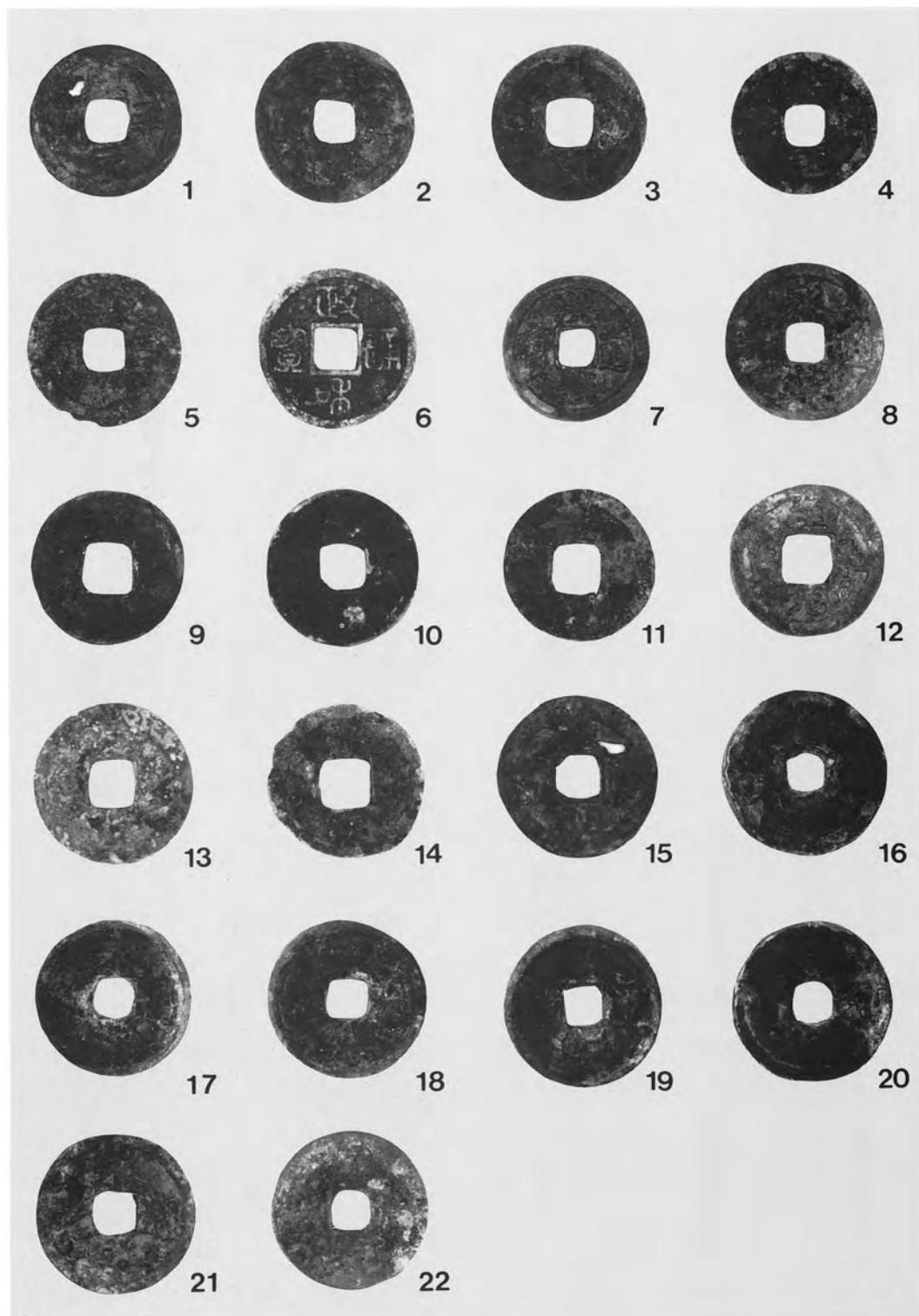
土製品(4)



鉄・青銅製品



鉄製品



古銭



発掘前風景



小鶴遺跡全景



第1号住居跡  
土層断面



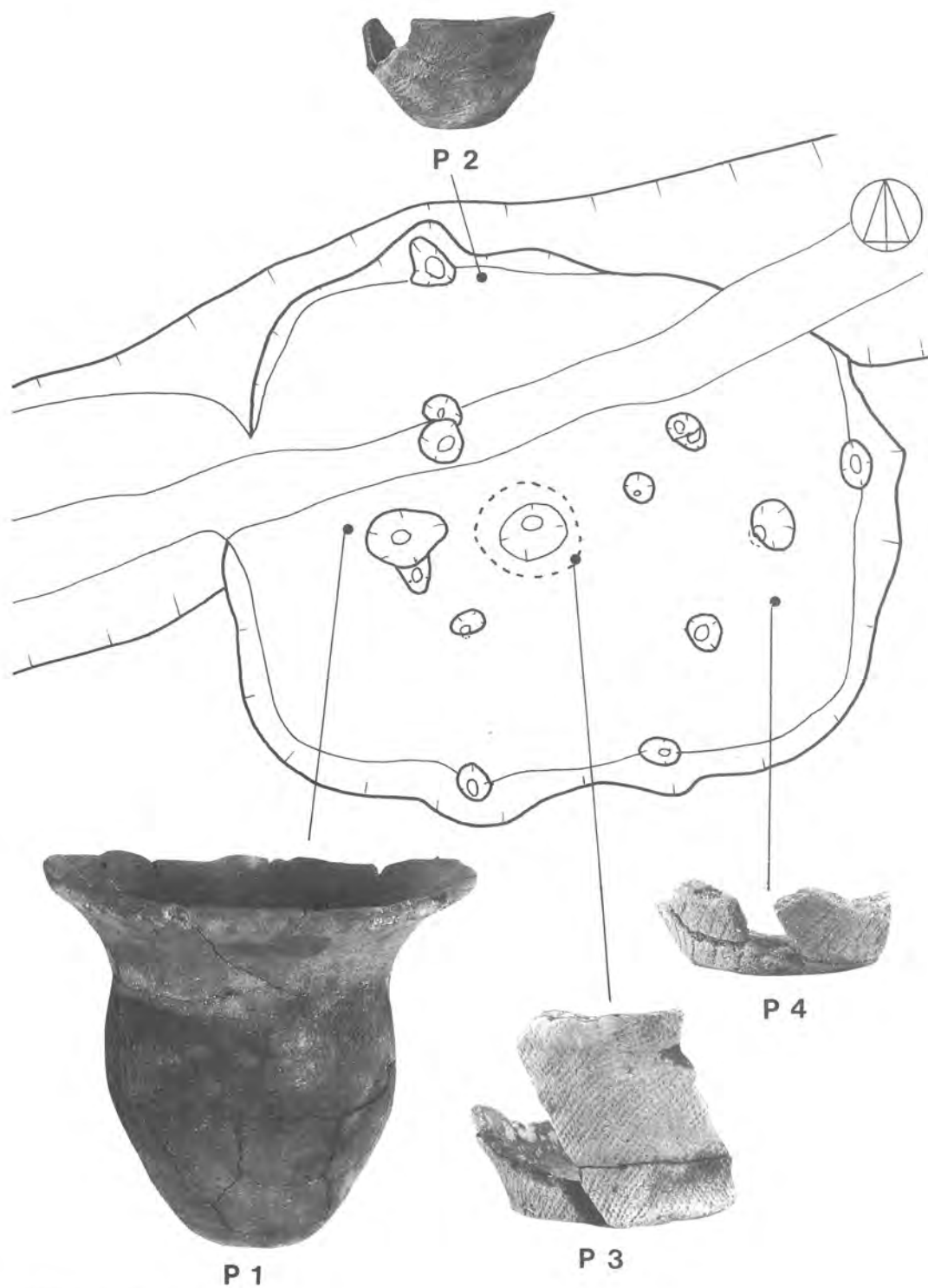
第1号住居跡  
第1号溝  
土層断面



第1号住居跡  
遺物出土状況



第1号住居跡  
第1号溝



住居跡出土土器



茨城県教育財団文化財調査報告第50集

一般国道6号改築工事地内  
埋蔵文化財発掘調査報告書(下)

奥谷遺跡  
小鶴遺跡

平成元年3月25日印刷

平成元年3月31日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団  
水戸市南町3丁目4番57号

印刷 三栄印刷  
水戸市谷津町1-50





第369図 奥谷遺跡遺構分布図(2)





